京都府遺跡調査概報

第105冊

1．名勝龍安寺庭園
2．名神大山崎ジャンクション関係遺跡
3．国道1号京都南道路関係遺跡
4．芝山遺跡
5．第二京阪道路関係遺跡
6．椋ノ木遺跡第5次
7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

2002

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　椋ノ木遺跡第５次

(1)中世面全景（南から）

(2)翡翠製大珠

(3)中世遺物

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために３種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成13年度に実施した発掘調査のうち、宗教法人龍安寺、日本道路公団関西支社、国土交通省近畿地方整備局、京都府土木建築部、都市基盤整備公団の依頼を受けて行った名勝龍安寺庭園、名神大山崎ジャンクション関係遺跡、国道１号京都南道路関係遺跡、芝山遺跡、第二京阪道路関係遺跡、椋ノ木遺跡第５次、関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都市教育委員会、大山崎町教育委員会、久御山町教育委員会、城陽市教育委員会、八幡市教育委員会、京田辺市教育委員会、精華町教育委員会、木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成14年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　樋　口　隆　康

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．名勝龍安寺庭園　　2．名神大山崎ジャンクション関係遺跡

3．国道１号京都南道路関係遺跡　　4．芝山遺跡

5．第二京阪道路関係遺跡　　6．椋ノ木遺跡第５次

7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	名勝龍安寺庭園	京都市右京区龍安寺御陵下町13	平14．2．4～2．26	宗教法人龍安寺	奥村清一郎 増田孝彦
2．	名神大山崎ジャンクション関係遺跡			日本道路公団関西支社	
	下植野南遺跡	乙訓郡大山崎町大字下植野小字土辺・五条本、大字円明寺小字門田	平13．4．9～12.20		石井清司 増田孝彦 中村周平 河野一隆 藤井　整
3．	国道１号京都南道路関係遺跡			国土交通省近畿地方整備局	
	市田斉当坊遺跡	久世郡久御山町市田小字新珠城	平13．4．17～6．29		野島　永
	佐山遺跡	久世郡久御山町佐古小字外屋敷・佐山小字新開地	平13．4．17～8．30		竹原一彦 伊賀高弘 森島康雄 高野陽子
4．	芝山遺跡	城陽市富野	平13.12.17～平14．2．27	京都府土木建築部	柴　暁彦
5．	第二京阪道路関係遺跡			日本道路公団関西支社	
	女谷横穴群	八幡市美濃山小字荒坂・御毛通	平13．4．11～6．28 平13.11．5～11.15		岩松　保
	荒坂横穴群	八幡市美濃山小字荒坂・御毛通	平13．4．11～10．3		
	荒坂遺跡	八幡市美濃山小字荒坂	平13.11．5～11.15		
6．	椋ノ木遺跡第５次	相楽郡精華町下狛小字椋ノ木	平13．6．13～平14．2．1	京都府土木建築部	河野一隆
7．	関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡			都市基盤整備公団	
	木津城山遺跡第５次	相楽郡木津町木津小字片山	平13．6．1～9．25		筒井崇史
	赤ヶ平遺跡第２次	相楽郡木津町木津小字赤ヶ平	平13.10.15～平14．2．27		筒井崇史 藤井　整

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

1．名勝龍安寺庭園発掘調査概要---------- 1
2．名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成13年度発掘調査概要---------- 9
(1)下植野南遺跡(門田(ＩＫ－31次調査)地点)----------11
(2)下植野南遺跡(土辺(ＳＴＢ－１～５)地点)----------19
(3)下植野南遺跡(五条本地点)----------24
3．国道１号京都南道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要----------27
(1)市田斉当坊遺跡----------27
(2)佐山遺跡----------43
4．芝山遺跡発掘調査概要----------59
5．第二京阪道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要----------69
(1)女谷横穴群----------71
(2)荒坂横穴群----------78
(3)荒坂遺跡----------86
6．椋ノ木遺跡第５次発掘調査概要----------89
7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成13年度発掘調査概要----------153
(1)木津城山遺跡(第５次)----------154
(2)赤ヶ平遺跡(第２次)----------155

挿 図 目 次

１．名勝龍安寺庭園

第１図　調査地位置図(1)---------- 1
第２図　調査地位置図(2)---------- 2
第３図　調査地位置図(3)---------- 3
第４図　土層断面図---------- 4
第５図　調査地平面図---------- 5
第６図　平瓦実測図---------- 6
第７図　陶磁器・土師器実測図---------- 7

２．名神大山崎ジャンクション関係遺跡

第８図　調査地位置図----------9
第９図　平成13年度調査地----------10

(1)下植野南遺跡(門田(ＩＫ－31次調査)地点)

第10図　Ｊトレンチ　方形周溝墓ＳＴＪ199・200----------12
第11図　Ｉ－１トレンチ下層遺構図----------13
第12図　Ｉ－２トレンチ下層遺構図----------14
第13図　Ｉ－２トレンチ上層遺構図----------15
第14図　門田地点出土遺物----------17

(2)下植野南遺跡(土辺(ＳＴＢ－１～５)地点)

第15図　土辺地点トレンチ配置図----------19
第16図　土辺ＳＴＢ３－１トレンチ----------20
第17図　土辺ＳＴＢ３－２トレンチ----------21
第18図　土辺ＳＴＢ３－４トレンチ----------21
第19図　土辺・五条本地点出土遺物----------23

(3)下植野南遺跡(五条本地点)

第20図　五条本地点遺構図----------25

３．国道１号京都南道路関係遺跡

(1)市田斉当坊遺跡

第21図　市田斉当坊遺跡(Ａ地区)と佐山遺跡(Ｂ地区)----------28
第22図　調査区配置図----------29
第23図　Ａ地区弥生時代遺構平面図----------30
第24図　竪穴式住居跡ＳＨ74----------31
第25図　土坑ＳＫ69遺物出土状況----------32
第26図　方形周溝墓ＳＴ68----------33
第27図　方形周溝墓ＳＴ73・97----------34
第28図　Ａ地区中世遺構平面図----------36
第29図　土器実測図(1)----------37
第30図　土器実測図(2)----------38
第31図　石器実測図(1)----------39
第32図　石器実測図(2)----------40
第33図　石器実測図(3)----------41
第34図　竪穴式住居跡ＳＨ74出土管玉未製品・石針未製品----------42

(2)佐山遺跡

第35図　調査地位置図----------44

第36図　遺構配置図----45
第37図　Ｂ－１調査区下層遺構配置図----46
第38図　Ｂ－１調査区ＳＨ251実測図----47
第39図　Ｂ－２調査区ＳＨ1147・1180・1167実測図----48
第40図　Ｂ－１調査区上層遺構配置図----40
第41図　Ｂ－２調査区ＳＸ1100実測図----50
第42図　遺物実測図(1)----52
第43図　遺物実測図(2)----53
第44図　遺物実測図(3)----54
第45図　遺物実測図(4)----55
第46図　遺物実測図(5)----56

４．芝山遺跡

第47図　調査地位置図----59
第48図　調査トレンチ配置図----61
第49図　調査トレンチ平面図----62
第50図　溝ＳＤ01北壁土層断面図----63
第51図　溝ＳＤ01遺物出土状況図----63
第52図　出土遺物実測図(1)----64
第53図　出土遺物実測図(2)----66
第54図　出土遺物実測図(3)----67

５．第二京阪道路関係遺跡

第55図　周辺横穴群位置図----69
第56図　調査トレンチ配置図----70

(1)女谷横穴群

第57図　女谷・荒坂横穴群支群分布図----71
第58図　女谷・荒坂横穴群横穴分布図----72
第59図　女谷横穴Ｃ支群５号横穴実測図----73
第60図　女谷横穴Ｃ支群５号横穴　遺物・人骨出土状況図----74
第61図　女谷横穴Ｃ支群出土遺物実測図----75
第62図　女谷横穴群試掘調査(１・２トレンチ)----76
第63図　女谷横穴群試掘調査(３～６トレンチ)----77

(2)荒坂横穴群

第64図　荒坂横穴Ｂ支群１号横穴実測図----80
第65図　荒坂横穴Ｂ支群18号横穴実測図----82
第66図　荒坂横穴Ｂ支群18号横穴　人骨出土状況図----83

第67図　荒坂横穴群出土遺物実測図----84
(3)荒坂遺跡
第68図　荒坂遺跡試掘調査(7～8トレンチ)----87
6．椋ノ木遺跡第5次
第69図　調査地および周辺遺跡分布図----90
第70図　トレンチ配置図----91
第71図　調査区基本土層図----92
第72図　第5トレンチ遺構平面図----93
第73図　第5トレンチ壁面土層図----94
第74図　トレンチ北端ピット集中区----96
第75図　SD222・225、SK230付近の遺構・遺物出土状況図----97
第76図　SX472全体図および遺物出土状況図----98
第77図　トレンチ中央部遺構検出状況----100
第78図　SK90・93全体図および遺物出土状況図----101
第79図　SK90・93石材種別ならびに長幅比グラフ----102
第80図　SB267および柱穴断面図----102
第81図　中世土器・陶磁器実測図(1)----104
第82図　中世土器・陶磁器実測図(2)----105
第83図　中世土器・陶磁器実測図(3)----106
第84図　中世土器・陶磁器実測図(4)----107
第85図　中世土器・陶磁器実測図(5)----108
第86図　遺物多量出土遺構の時期別瓦器椀出土傾向----109
第87図　遺物多量出土遺構の器種別傾向----109
第88図　瓦類実測図----110
第89図　石製品実測図----111
第90図　木製品実測図----111
第91図　鉄製品・鉄滓実測図----112
第92図　銭貨実測図----113
第93図　SB175実測図および柱穴断面図----113
第94図　SH173実測図および柱穴断面図----114
第95図　SH174実測図および柱穴断面図----115
第96図　SH262実測図----115
第97図　古墳時代土器実測図----116
第98図　臼玉実測図----117
第99図　縄文時代遺構面遺構配置図----118

第100図　縄文時代炉跡ＳＸ494実測図----119
第101図　縄文時代炉跡ＳＸ500実測図----120
第102図　縄文時代貯蔵穴ＳＸ504実測図----120
第103図　縄文土器溜まり実測図(上段：ＳＸ501　下段：ＳＸ502)----121
第104図　土器溜まり実測図(ＳＸ503)----122
第105図　翡翠製大珠実測図----123
第106図　縄文時代石鏃・剥片実測図----123
第107図　縄文土器実測図(1)----124
第108図　縄文土器実測図(2)----125
第109図　石庖丁実測図----126
第110図　調査地点の位置図----128
第111図　調査地点の層序対比および分析試料採集位置----129
第112図　植物珪酸体群集と組織片の産状----133
第113図　炉跡焼土のＸ線回折図----134
第114図　椋ノ木遺跡調査成果のまとめ図----136
第115図　精華町内の字切図と相楽郡・綴喜郡条里の復原----140
第116図　精華町内の耕地割りと相楽郡・綴喜郡条里の復原----142
7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡
第117図　調査地周辺主要遺跡分布図----154
(2)赤ヶ平遺跡(第２次)
第118図　調査トレンチ配置図----156
第119図　第１・２トレンチ遺構配置図----157
第120図　竪穴式住居跡ＳＢ02実測図----157
第121図　竪穴式住居跡ＳＢ15実測図----158
第122図　剥片石器廃棄土坑ＳＸ16実測図----158
第123図　溝ＳＤ19実測図----159
第124図　鏡埋納坑ＳＸ41----159
第125図　出土遺物実測図(1)----160
第126図　出土遺物実測図(2)----162
第127図　出土遺物実測図(3)----164
第128図　出土遺物実測図(4)----167

付　表　目　次

6．椋ノ木遺跡第５次

付表１　ＳＤ222・225、ＳＸ472他の破片計測による分析結果----------99

付表２　花粉分析結果----------132

付表３　植物珪酸体分析結果----------132

付表４　放射性炭素年代測定および樹種同定結果----------132

付表５　中世土器観察表----------145

付表６　古墳時代土器観察表----------151

付表７　縄文土器観察表----------151

7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

(2)赤ヶ平遺跡(第２次)

付表８　土器観察表----------161

付表９　石器実測図----------165

図　版　目　次

1．名勝龍安寺庭園

図版第１　(1)調査前近景(南西から)　(2)第１トレンチ作業風景(南東から)

図版第２　(1)第１トレンチ検出遺構(北から)　(2)第２トレンチ検出遺構(東から)

図版第３　(1)溝２遺物出土状況(東から)　(2)溝２全景(北から)

図版第４　出土遺物

2．名神大山崎ジャンクション関係遺跡

下植野南遺跡(門田(ＩＫ－31次調査)地点・土辺(ＳＴＢ－１～５)地点)

図版第５　(1)Ｊトレンチ南拡張区完掘状況(東から)

(2)土辺地点ＳＴＢ３－１トレンチ(上が南東)

(1)下植野南遺跡(門田(ＩＫ－31次調査)地点)

図版第６　(1)Ｊトレンチ ＳＴＴ199・200(南東から)

(2)ＳＴＪ199北側主体部(東から)

(3)ＳＴＪ199南側主体部(東から)

図版第７　(1)Ｉ－１トレンチＳＴＩ48(南西から)
(2)全景(南から)
(3)全景(東から)
図版第８　(1)Ｉ－２トレンチＳＴＩ123(東から)
(2)ＳＴＩ123主体部(南から)
(3)ＳＴＩ123遺物出土状況(南から)
図版第９　(1)Ｉ－２トレンチＳＢＩ140(北西から)
(2)全景(南から)
(3)Ｉ－２トレンチ久我畷最上層路面跡(北東から)
(2)下植野南遺跡(土辺(ＳＴＢ－１～５)地点)
図版第10　(1)土辺２トレンチ全景(西から)　(2)土辺４トレンチ全景(西から)
(3)土辺４トレンチＳＤ01埴輪出土状況(北から)
図版第11　(1)ＳＴＢ３－１トレンチ全景(北西から)
(2)ＳＴ07全景(北東から)
(3)ＳＴ07溝内土器出土状況(東から)
図版第12　(1)ＳＴ07第１・３主体部完掘状況(東から)
(2)ＳＴ07第４主体部完掘状況(東から)
(3)土坑ＳＫ06土器出土状況(西から)
(3)下植野南遺跡(五条本地点)
図版第13　(1)全景(東から)　(2)全景(南から)
(3)上層遺構全景(南から)
図版第14　(1)竪穴式住居跡ＳＨ05検出状況(北から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ06検出状況(西から)
(3)竪穴式住居跡ＳＨ06土器出土状況(西から)
図版第15　(1)竪穴式住居跡ＳＨ09検出状況(南西から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ10検出状況(南から)
(3)井戸ＳＥ11断面(部分)(北から)
下植野南遺跡
図版第16　出土遺物
３．国道１号京都南道路関係遺跡
(1)市田斉当坊遺跡
図版第17　(1)調査区空中撮影(弥生時代遺構掘削状況)
(2)調査風景(北西から)
図版第18　(1)弥生時代竪穴式住居跡ＳＨ74(南東から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ74炭化木出土状況(南東から)

図版第19　(1)竪穴式住居跡ＳＨ74床面検出状況(北東から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ98掘削状況(北から)
図版第20　(1)土坑ＳＫ50掘削状況(北東から)　(2)土坑ＳＫ69土器出土状況(北から)
図版第21　(1)舟底状土坑ＳＫ75掘削状況(西から)
(2)舟底状土坑ＳＫ75完掘状況(南西から)
図版第22　(1)土坑ＳＫ77・78掘削状況(南から)　(2)土坑ＳＫ79土器出土状況(東から)
図版第23　(1)土坑ＳＫ105・106掘削状況(東から)　(2)土坑ＳＫ106土器出土状況(南から)
図版第24　(1)土坑ＳＫ113掘削状況(西から)　(2)土坑ＳＫ114掘削状況(南から)
図版第25　(1)土坑ＳＫ117土器出土状況(南から)
(2)方形周溝墓ＳＴ49、土坑ＳＫ60・100～102(北東から)
図版第26　(1)方形周溝墓ＳＴ68掘削状況(北東から)
(2)方形周溝墓ＳＴ68南西側周溝遺物出土状況(北東から)
図版第27　(1)方形周溝墓ＳＴ68北東側周溝断面(北西から)
(2)方形周溝墓ＳＴ58西側周溝断面(南東から)
図版第28　(1)方形周溝墓ＳＴ73掘削状況(北西から)
(2)方形周溝墓ＳＴ97掘削状況(南西から)
図版第29　(1)現地説明会風景(南西から)　(2)出土石器１
図版第30　(1)出土石器２　(2)玉関連遺物(第34図)
(2)佐山遺跡
図版第31　(1)調査地遠景(東から)
(2)Ｂ－１地区全景＜弥生・古墳時代遺構面＞(上が東)
図版第32　(1)Ｂ－１地区南部遺構検出状況(南西から)
(2)Ｂ－１地区北部遺構検出状況(北東から)
図版第33　(1)Ｂ－１地区東部遺構検出状況(南東から)
(2)Ｂ－１地区北西部遺構検出状況(南西から)
図版第34　(1)Ｂ－地区竪穴式住居跡ＳＨ251全景(南から)
(2)Ｂ－１地区竪穴式住居跡ＳＨ251中央土坑(北から)
図版第35　(1)Ｂ－１地区竪穴式住居跡ＳＨ227検出状況(南から)
(2)Ｂ－１地区竪穴式住居跡ＳＨ227・273全景(西から)
図版第36　(1)Ｂ－１地区竪穴式住居跡ＳＨ415・270・273検出状況(西から)
(2)Ｂ－１地区井戸ＳＥ361完掘状況(南東から)
図版第37　(1)Ｂ－１地区掘立柱建物跡ＳＢ356全景(北から)
(2)Ｂ－１地区土坑ＳＫ228検出状況(西から)
図版第38　(1)Ｂ－２地区全景＜弥生・古墳時代遺構面＞(東から)
(2)Ｂ－２地区溝ＳＤ27検出状況(西から)

図版第39　(1) B－2地区溝SD27土器出土状況(南東から)
(2) B－2地区溝SD27土器出土状況(西から)
図版第40　(1) B－2地区竪穴式住居跡SH1167検出状況(北西から)
(2) B－2地区井戸SE1166検出状況(東から)
図版第41　(1) B－2地区土壙SK1179検出状況(南から)
(2) B－2地区土壙SK1190検出状況(南から)
図版第42　(1) B－2地区北西部遺構検出状況(南から)
(2) B－2地区溝SD1053検出状況(北から)
図版第43　(1) B－2地区濠SD5(SX1100周辺)検出状況(西から)
(2) B－2地区濠SD5土層断面(東から)
図版第44　(1) B－2地区護岸施設SX1100検出状況(南から)
(2) B－2地区護岸施設SX1100牛骨検出状況(南から)
図版第45　出土遺物(1)
図版第46　出土遺物(2)

4．芝山遺跡

図版第47　(1) 1トレンチ調査前の状況(西から)　(2) 7トレンチ調査前の状況(東から)
(3) 1トレンチ竪穴式住居跡SH36(西から)
図版第48　(1) 1トレンチ竪穴式住居跡SH73検出状況(北東から)
(2) 1トレンチ土坑SK22遺物出土状況(南から)
(3) 2トレンチ木棺墓SX23検出状況(西から)
図版第49　(1) 2トレンチ木棺墓SX23完掘状況(南から)
(2) 3トレンチ南半遺構検状況(北西から)
(3) 5トレンチ遺構検出状況(南東から)
図版第50　(1) 1トレンチ遺構検出状況(西から)　(2) 4トレンチ遺構検出状況(北西から)
(3) 8・9トレンチ試掘状況(西から)
図版第51　(1) 5トレンチ布掘建物跡SB01検出状況(北から)
(2) 5トレンチ竪穴式住居跡SH40検出状況(北から)
図版第52　(1) 6トレンチ遺構検出状況(東から)　(2) 7トレンチ遺構検出状況(東から)
(3) 7トレンチ周濠SD01土層断面(南東から)
図版第53　(1) 7トレンチ周濠SD01遺物出土状況(北から)
(2) 10トレンチ遺構検出状況(東から)
(3) 10トレンチ土坑SK01遺物出土状況(西から)
図版第54　出土遺物

5．第二京阪道路関係遺跡

女谷・荒坂横穴群

図版第55　女谷・荒坂横穴群全景(上が北北東)

(1)女谷横穴群

図版第56　(1)C支群5～8号横穴(北北西から)　(2)C支群1～4号横穴(北東から)

図版第57　(1)C支群5号横穴完掘状況(北北西から)

(2)C支群5号横穴玄室完掘状況(北北西から)

図版第58　(1)C支群5号横穴玄室内遺物出土状況(北北西から)

(2)C支群5号横穴玄室内人骨検出状況(北北西から)

図版第59　C支群出土遺物

図版第60　(1)試掘1トレンチ全景(南東から)　(2)試掘2トレンチ全景(北北東から)

(3)試掘3トレンチ全景(東南東から)

図版第61　(1)試掘4トレンチ全景(東南東から)　(2)試掘5トレンチ全景(東北東から)

(3)試掘6トレンチ全景(北から)

(2)荒坂横穴群

図版第62　(1)B支群1～9号横穴(北西から)　(2)B支群8～20号横穴(北西から)

(3)C支群1・2号横穴(東から)

図版第63　(1)B支群18号横穴完掘状況(北から)　(2)B支群18号横穴完掘状況(北から)

図版第64　(1)B支群18号横穴玄室内人骨検出状況(南西から)

(2)B支群18号横穴玄室内人骨検出状況(西から)

図版第65　出土遺物

(3)荒坂遺跡

図版第66　(1)試掘7トレンチ全景(西から)

(2)試掘トレンチ8掘削前状況(北北東から)

(3)試掘8トレンチ全景(南から)

6．椋ノ木遺跡第5次

図版第67　(1)第5トレンチ(中世・古墳時代遺構面)全景(上が東)

(2)第5トレンチ(中世・古墳時代遺構面)全景(北から)

図版第68　(1)第5トレンチ(中世・古墳時代遺構面)全景(西から)

(2)第5トレンチ東部建物跡集中区俯瞰(上が西)

図版第69　昭和23年撮影空中写真(国土地理院)

図版第70　(1)トレンチ北端ピット群(北から)

(2)トレンチ中央部素掘り溝全景(西から)

(3)トレンチ東部建物跡集中区全景(東から)

図版第71　(1)トレンチ北端部俯瞰写真(上が南)　(2)SB267全景(北から)

(3)トレンチ中央・南部俯瞰写真(上が南)

図版第72　(1)トレンチ北東端部遺構配置状況(北から)

(2) S K90・93検出状況(西から)
(3) S K90・93完掘状況(西から)
図版第73 (1) P227遺物出土状況(南から) (2) P391礎板石材検出状況(西から)
(3) S K126土器出土状況(西から)
図版第74 (1) S D222検出時土器出土状況(東から)
(2) S D222内土器出土状況(北から)
(3) S D222東端部土器出土状況(北から)
図版第75 (1) S X472検出状況(北から) (2) S X472土器出土状況(北から)
(3) S X472土器出土状況(畦除去後)(北から)
図版第76 (1) P389内杭検出状況(北から) (2) P425内瓦器椀検出状況(西から)
(3)奈良火鉢(左)・銭貨(右)検出状況
図版第77 (1)鉄滓出土状況(北から) (2) S D226遺物検出状況(南から)
(3)トレンチ西壁洪水砂層検出状況
図版第78 (1)古墳時代遺構集中区(西から) (2) S H173全景(北西から)
(3) S H173内土器出土状況(南東から)
図版第79 (1) S H174完掘状況(北東から) (2) S H174内土坑検出状況(南西から)
(3) S B175完掘状況(北東から)
図版第80 (1) S H262検出状況(南西から) (2) S H262内高杯出土状況(北西から)
(3)韓式系軟質平底鉢出土状況(西から)
図版第81 (1)第5トレンチ(縄文時代遺構面)全景(上が東)
(2)トレンチ北端部縄文時代遺構集中区(上が東)
図版第82 (1)貯蔵穴S K504全景(南東から) (2)貯蔵穴S K504全景(南から)
(3)貯蔵穴S K504埋土堆積状況(南から)
図版第83 (1)炉跡S X500検出炭化材(東から) (2)炉跡S X500検出骨片(上が西)
(3)炉跡S X500埋土堆積状況(東から)
図版第84 (1)炉跡S X494完掘状況(北から) (2)炉跡S X494内埋土堆積状況(西から)
(3)炉跡S X494付属土坑埋土(南東から)
図版第85 (1) S X503縄文土器溜まり(南から) (2) S X501縄文土器溜まり(北から)
(3) S X503縄文土器集中区(南から)
図版第86 中世土器(1)(瓦器椀)
図版第87 中世土器(2)(瓦器椀・瓦器皿)
図版第88 中世土器(3)(土師器皿・鍋)
図版第89 (1)中世土器(4)(羽釜・鍋)
(2)中世土器(5)(白磁椀・青磁椀・褐釉四耳壺)
図版第90 古墳時代土器および石製品

図版第91　縄文土器
図版第92　(1)石鏃・剥片・石庖丁　(2)翡翠製大珠
図版第93　植物珪酸体分析写真
図版第94　花粉分析プレパラート内の状況・炭化材
図版第95　軟質Ｘ線写真(1)
図版第96　軟質Ｘ線写真(2)
図版第97　軟質Ｘ線写真(3)
図版第98　軟質Ｘ線写真(4)

７．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

(2)赤ヶ平遺跡(第２次)

図版第99　(1)調査地全景(東から)　(2)１・２トレンチ全景(上が南西)
図版第100　(1)１・２トレンチ調査前全景(北西から)
(2)１・２トレンチ重機掘削作業風景(南から)
(3)６・７トレンチ調査前全景(北東から)
図版第101　(1)竪穴式住居跡ＳＢ02全景(北東から)　(2)竪穴式住居跡ＳＢ15全景(西から)
図版第102　(1)竪穴式住居跡ＳＢ15剥片石器検出作業(東から)
(2)剥片石器廃棄土坑ＳＸ16遺物出土状況(東から)
(3)剥片石器廃棄土坑ＳＸ16完掘状況(東から)
図版第103　(1)溝ＳＤ19全景(北東から)
(2)鏡埋納坑ＳＸ41菊花文鏡出土状況(南西から)
(3)鏡埋納坑ＳＸ41鉄刀出土状況(北西から)
図版第104　(1)第３トレンチ全景(北から)　(2)第４トレンチ全景(北から)
(3)第５トレンチ全景(北東から)　(4)第６トレンチ全景(北から)
(5)第７トレンチ全景(南から)　(6)第８トレンチ全景(北西から)
(7)第８トレンチ拡張区全景(東から)　(8)第９トレンチ全景(北東から)
図版第105　出土遺物(1)
図版第106　(1)出土石器　(2)ＳＸ16出土剥片類

1．名勝龍安寺庭園発掘調査概要

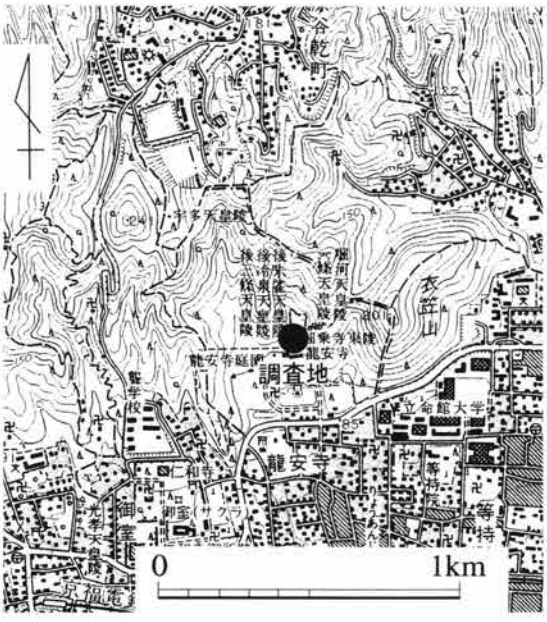
1．はじめに

龍安寺は、京都市北西部の右京区龍安寺御陵下町にある臨済宗妙心寺派の名刹で、大雲山と号し、本尊は釈迦如来である。

龍安寺創建以前は、平安時代中期の双ヶ丘東部一帯には、円の字を冠した天皇の御願寺である四円寺が建立されるが、その一つである永観元(983)年、円融天皇建立の円融寺の跡地が龍安寺にあたるとされている。円融寺が衰退した後は、平安時代末期に左大臣藤原実能が衣笠山の西南麓に別荘を営み、その内に徳大寺を建立したとされており、その位置については、龍安寺とその近辺の地が考えられている。宝徳２(1450)年に管領細川勝元がその地を譲り受け、長禄２(1458)年、妙心寺第八世の義天玄詔を開山とし、その塔頭として龍安寺が創建された。以後、細川氏の保護を受け、方丈の北側には細川勝元の墓、開山塔などが存在している。その後、応仁の乱の兵火により焼失したが、勝元の子細川政元により再興され、勝元の書院を移し方丈とした。また、文明５(1473)年には東福寺塔頭の昭堂を移して仏殿とし、塔頭西源院(現存)も造営された。

細川氏以後は豊臣秀吉、徳川家康などに寺領寄進を受け、全盛時には23の塔頭を有していた。その後、寛政９(1797)年、火災により方丈を残し焼失し、塔頭も退転した。現在は、大珠院、西源院、霊光院の三院が鏡容池の北側に残る。この三院の北に庫裏、奥に蔵六庵、東に方丈がある。現在の方丈は、慶長11(1606)年建立の西源院方丈を移したものであり、重要文化財に指定されている。

方丈前庭の石庭は室町時代末期の作とされるが、江戸時代とする説もあり、作者、作庭年代は不明ながら、枯山水の代表的な石庭として有名である。低い築地塀で囲まれた前庭には白砂を敷き、一木一草もなく、五群大小15個の石を配して、『虎の子渡しの庭』、『十六羅漢遊行の庭』などの別称がある。大正13年12月９日、龍安寺方丈庭園が史跡および名勝に指定された。昭和29年３月20日には、特別名勝に指定された。鏡容池を中心とした広大な境内は、名勝龍安寺庭園として国の名勝に指定され、国内外の多くの観光客が日々訪れている。



第１図　調査地位置図(1)
(国土地理院１/25,000京都西北部)

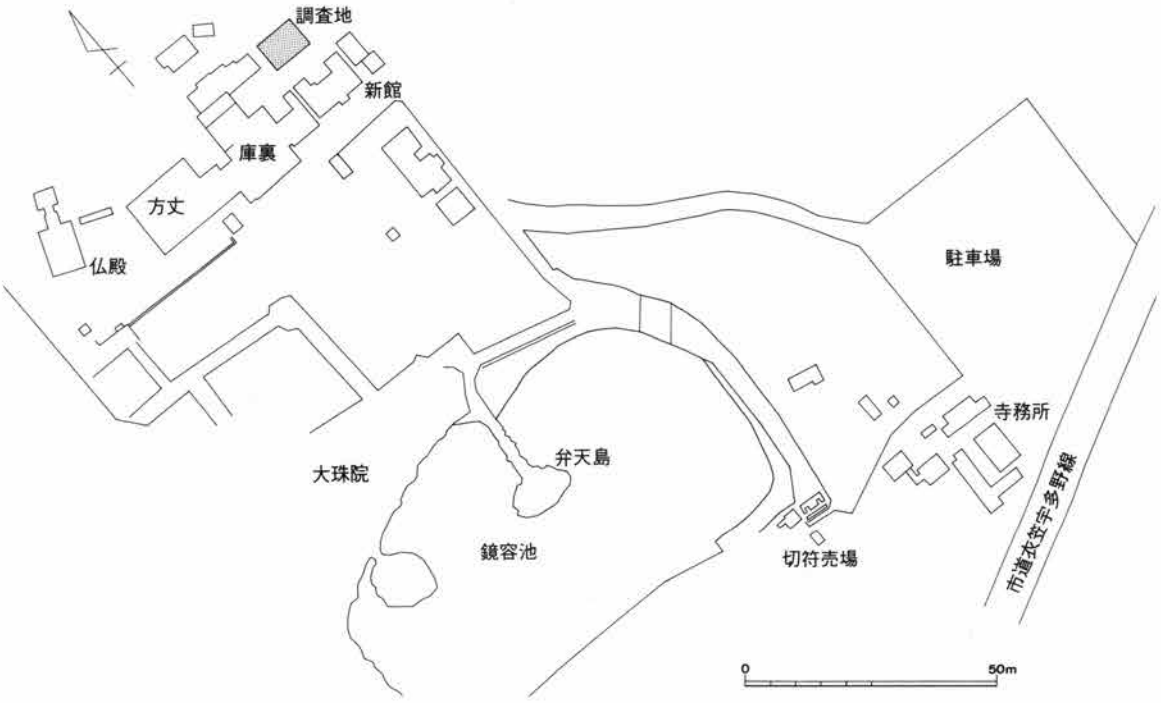
後方の衣笠山の支峰である朱山には天皇・皇后

陵が散在している。調査地のすぐ北側の山麓には後三条天皇円宗寺陵、後冷泉天皇円教寺陵、後朱雀天皇円乗寺陵が並び、その東に後朱雀天皇皇后禎子内親王陵、山頂近くには一条天皇円融寺北陵、堀河天皇後円教寺陵があり、円融天皇火葬所を合わせて龍安寺七陵ともいわれる円墳が所在する。

龍安寺境内における発掘調査は、昭和50年に昭堂復原工事に伴い方丈西方の空き地で調査が行われている(注1)。昭和52年度には、方丈庭園の南側の築地塀の修理に伴い下層の調査が実施されている。それによると、築地塀下の盛土層に庭石が据えられている可能性が強いとされているが、庭園が造られた年代は明らかにされなかった。この修理に伴い築地の屋根は、瓦葺きから柿葺きに復原変更されている(注2)。

今回の調査は、方丈の東北東側約70mのところに収蔵庫建築が計画されたことに伴うもので(第2図)、龍安寺およびその前身となる円融寺、徳大寺に関係する遺構・遺物の遺存状況を調査したあと正確な記録を作成し、保存することを主たる目的として調査を実施した。調査に係る経費は、全額宗教法人龍安寺の負担によるものである。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎と同主任調査員増田孝彦が担当し、遺構写真撮影は増田が、遺物写真撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が担当した。調査期間は平成14年2月4日から同2月26日まで実施した。調査面積は約120㎡である。また、本概要作成の整理作業および原稿の執筆は奥村・増田が担当した。調査期間中は、京都府教育委員会・京都市文化市民局・(財)京都市埋蔵文化財研究所・宗教法人龍安寺・宮内庁など関係諸機関のお世話になった。また、現地作業および整理作業については、調査補助員・整理員の協力を得(注3)た。記して感謝する。



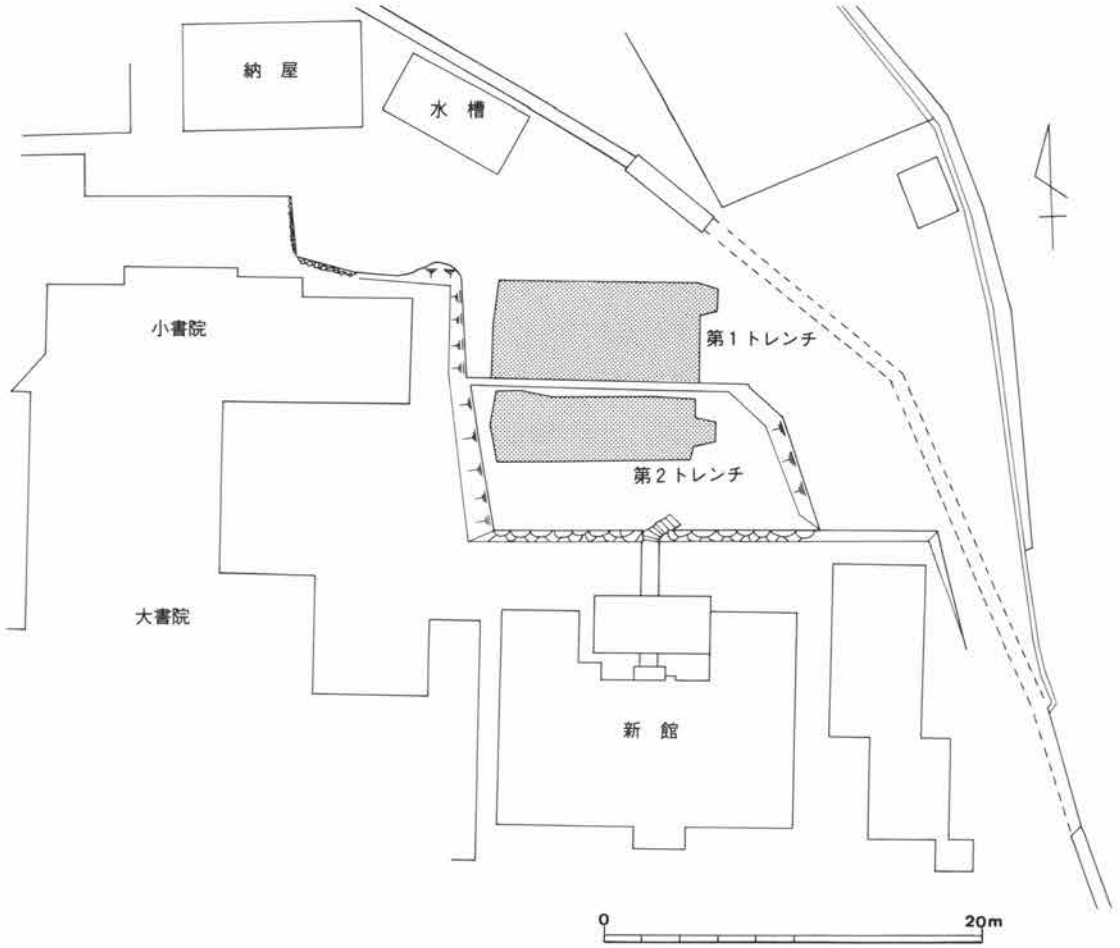
第2図　調査地位置図(2)

2．調 査 概 要

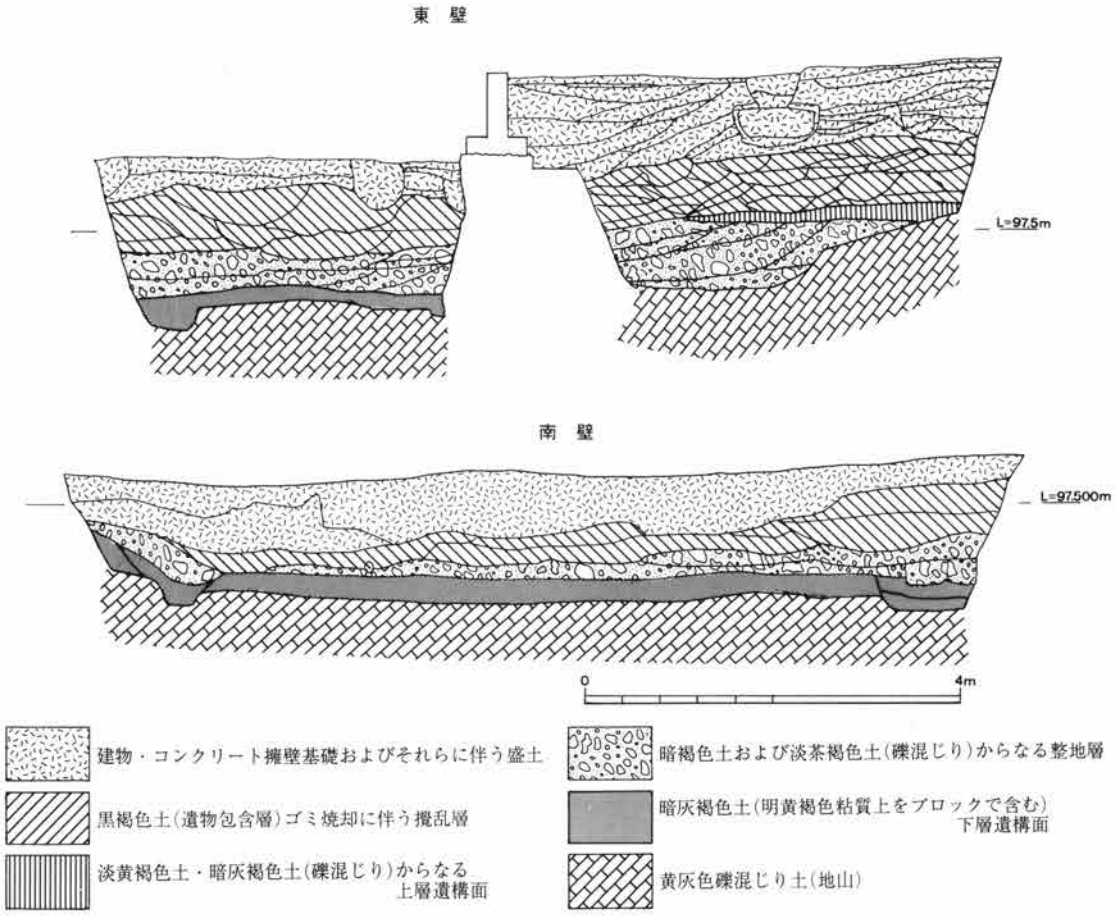
調査地は、中央部にコンクリート擁壁が東西に設けられており、これを境に上下(南北)約１ｍの段差が認められた。龍安寺側の資料によると、調査地上段には昭和30年頃に作業小屋を建て、平成６年に撤去したとされ、作業小屋を建てる以前は竹藪であったとのことである。下段については、昭和20年頃に学僧部屋を建て平成６年に撤去、それ以前は薪小屋が存在していたとの記録が残っている。また、「都名所図会」(江戸時代)、「葛野郡寺院明細帳」(明治16年)によると、調査地周辺には建物の描写は認められない。調査地東側の山裾部分には、昭和45年に開削された花崗岩切石積みの宮内庁の御陵参拝道路が通じており、旧地形がかなり改変されている。

調査は、旧地形および現在の建物との比高から約１～1.3ｍの盛土が存在すると予想し、重機による掘削を行うこととした。しかし、中央部にはコンクリート擁壁が存在するため除去できず、その部分を残し上下二段にわけ調査を実施することになった(第３図)。

第１・２トレンチの層序(第４図)は、現地表下約0.5ｍまではコンクリート基礎とそれに伴う盛土があり、中央のコンクリート擁壁造成に伴い掘削された掘り込みが認められた。これより下層は、ゴミ焼却に伴うと考えられる掘り穴やそれらを埋め戻し整地した痕跡が確認された。この層は、黒褐色を呈し炭・焼土を多く含みこれらとともに多くの陶磁器・土師器・鉄製品・銅製品・ガラス製品・仏具等が出土した。この黒褐色土層は、第１・２トレンチで厚さ約0.5ｍにわ



第３図　調査地位置図(3)



第４図　土層断面図

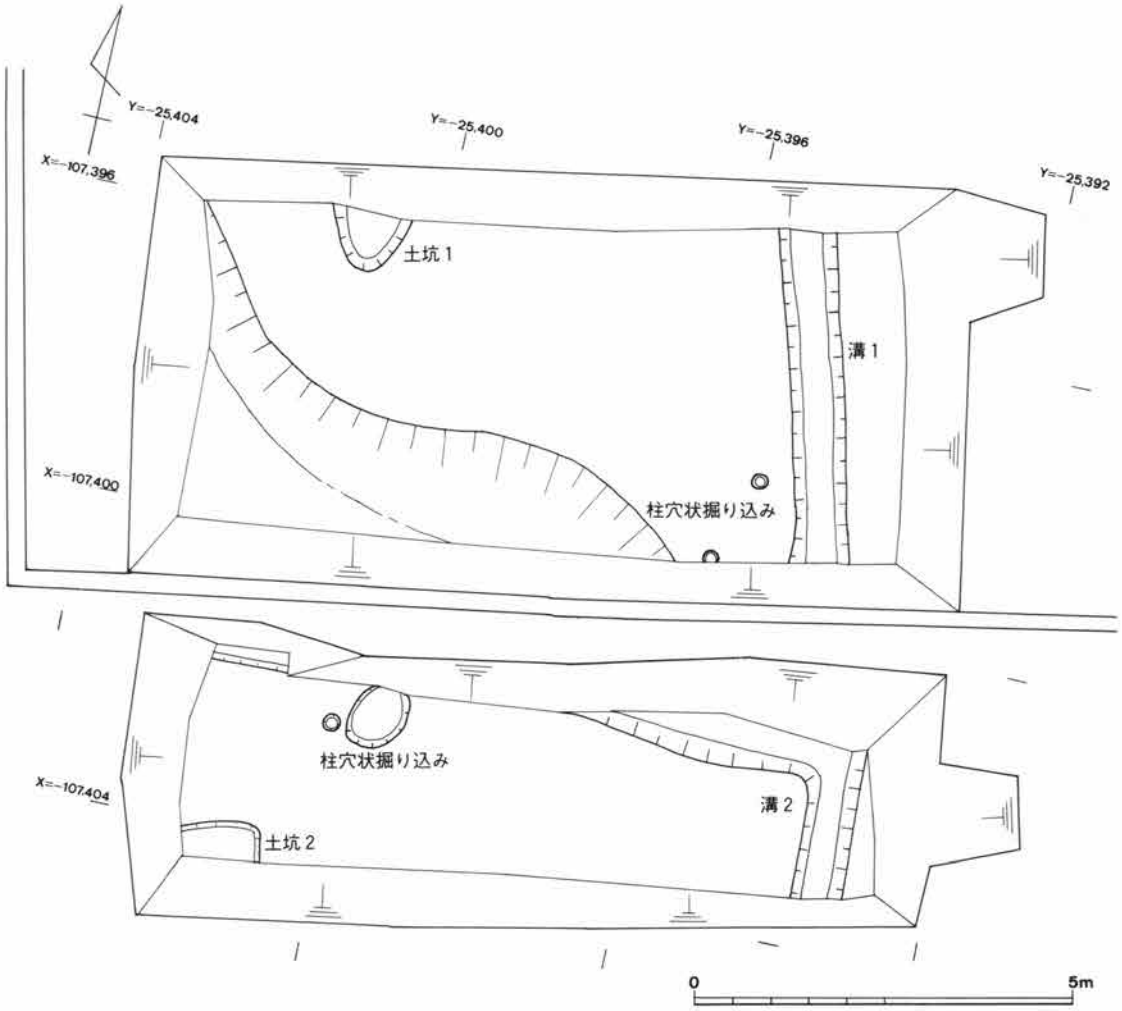
たって確認している。その下層は、暗褐色土および淡茶褐色を中心とした礫を多く含む整地層が、厚さ約0.5mにわたって認められる。この整地層は、第１トレンチの南側の地山の傾斜部分を埋め立てたものであり、平坦地の拡張が行われたものと考えられる。その上面には淡黄褐色土、暗灰褐色礫混じりの比較的安定した基盤層が認められた。第１トレンチでは、東端で南北に延びる溝１と北端で土坑１を検出し、南壁付近で柱穴状掘り込み２か所、西側および南側で地山の傾斜を確認した。第２トレンチでは、第１トレンチで認められた地山の傾斜部分を整地した土層を除去すると、最も古い安定した暗灰褐色土(明黄褐色粘質土をブロックで含む)の整地層を厚さ約0.2m確認したが、上方からのゴミ焼却穴が部分的に整地層まで到達しており、平面的に遺構を確認できない状態であったために、地山面まで掘り下げて遺構の検出に努めた。その結果、北壁付近で柱穴状掘り込み２か所を確認し、西端では土坑２、東端で溝２を検出した。

３．検出遺構

検出された遺構について、トレンチごとにその概略を述べる。

(1)第１トレンチ(第５図)

溝１　トレンチ東端で検出したもので南北に延びる幅0.7m、深さ0.2m、長さ4.4mを確認し



第5図　調査地平面図

た。暗褐色および淡茶褐色礫混じり土の整地層上より掘り込まれ、東側は地山を削り出した面に沿っている。北側延長部分は地形的なことや、既存の建物配置などから考えても３ｍ前後延びるものと思われる。南側については、削平された可能性もあるが、第２トレンチ側に延びていた痕跡が確認できないため、中央部のコンクリート擁壁付近で西側に直角に曲がり延びていた可能性もある。土層の堆積状況から見ると、西側・南側の地山の傾斜を埋め立て整地したおり、第２トレンチの溝２がそれに伴い埋没していることから、溝２よりも新しく山側の斜面の利用が拡張していったことを物語っている。また方向も溝２が南北方向であるのに対して、やや西に振っている。内部から遺物の出土は見られなかった。

南壁付近で検出した柱穴状掘り込み２か所は、埋土に炭・焼土が混じるため上層からの掘り込みと考えられる。

土坑１　北壁付近で検出したもので調査地外に延びるため全体の規模は不明であるが、円形で深さ14cmを測り、整地層上より掘り込まれる。内部からは遺物などは出土せず、性格等については不明である。

(2)**第２トレンチ**(第５図)

溝２　東端で幅0.7m、深さ0.25mの南北方向の溝がトレンチ北壁付近で90°西に転じ、第１トレンチの地山傾斜面にほぼ平行して延びる溝である。この溝については、トレンチ西端でその延長部分を一部確認している。溝内からは、17世紀後半に比定される肥前系白磁椀などが出土している。

土坑２　西端では、調査地外に広がるため規模は不明であるが、深さ約0.25mを測る方形の土坑１を検出したが、遺物の出土は認められなかった。

南壁付近で検出した柱穴状掘り込み２か所は、埋土に炭・焼土が混じるため上層からの掘り込みと考えられる。

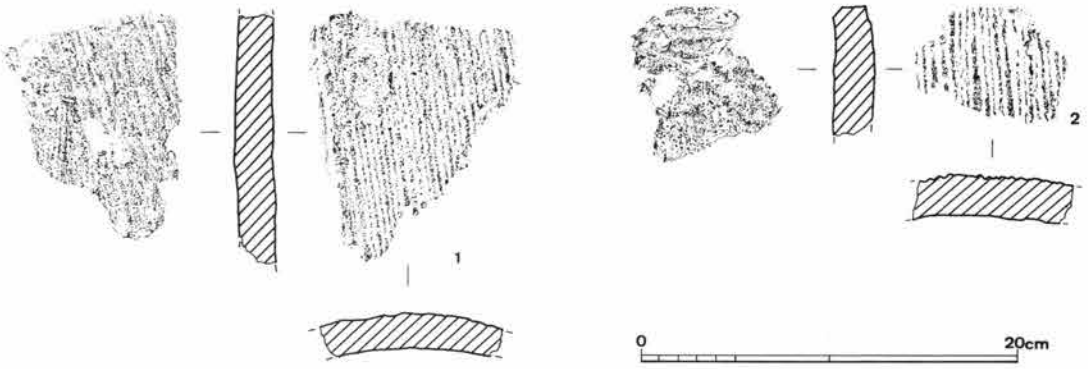
(増田孝彦)

４．出 土 遺 物

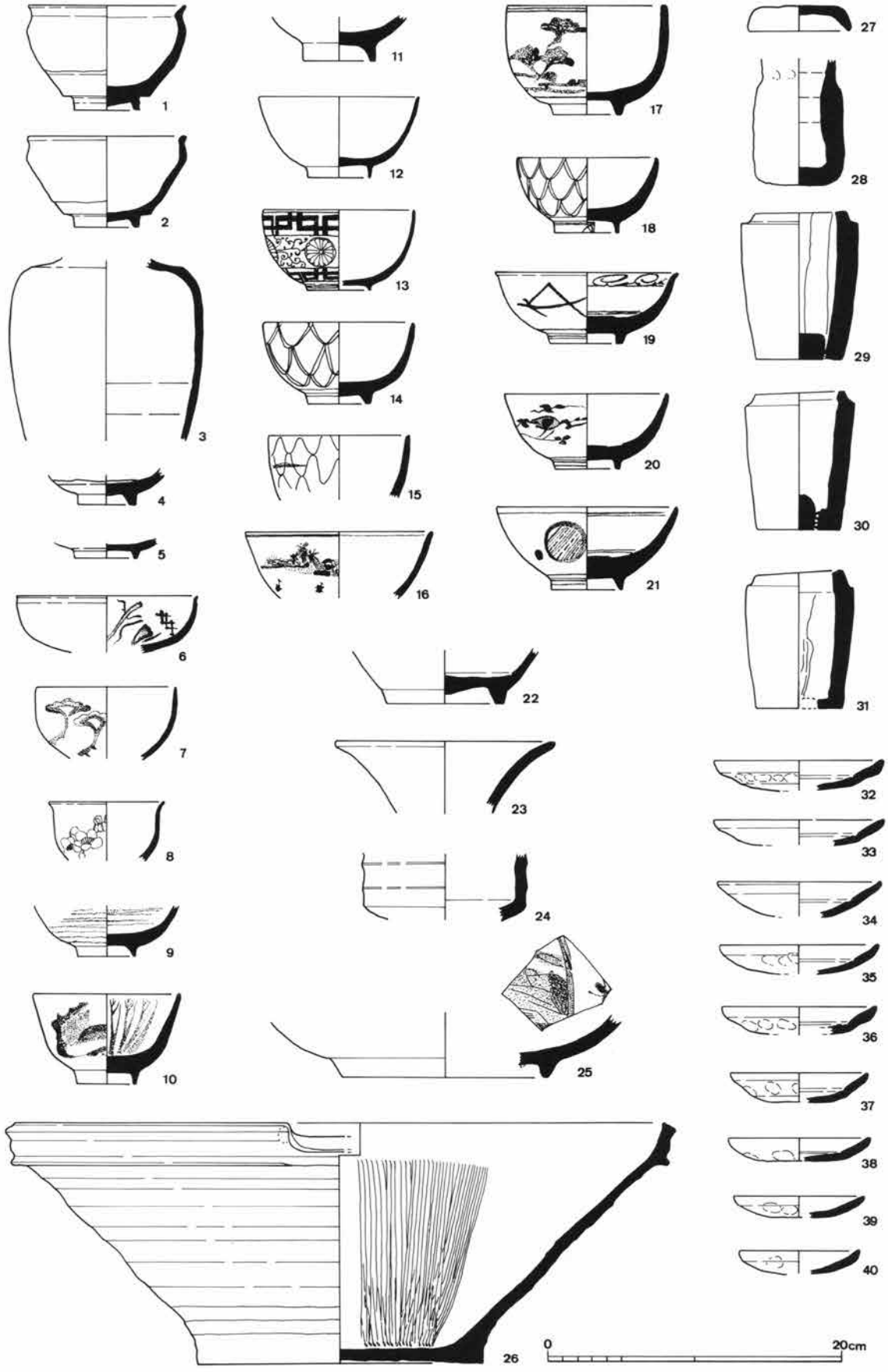
今回の調査で出土した遺物には、瓦・陶磁器・土師器・金属製品・ガラス製品等がある。所属年代は、瓦の一部が平安時代、その他の遺物の多くは江戸時代に属し、一部は近・現代のものも含まれている。特に記したもの以外は、整地層・攪乱層などの包含層から出土した。

瓦(第６図)　１は平瓦の破片である。外面には縄叩き目、内面には布目が施されている。２は、端面を伴う平瓦の破片である。１と同様、外面には縄叩き目、内面には布目が残る。

陶磁器・土師器(第７図)　１・２は美濃焼の天目茶椀で、年代は17世紀頃に属するものと思われる。３は瀬戸焼の瓶の体部である。４は肥前陶器の鉄釉椀の底部で、18世紀頃のものである。５～８は京焼の椀または鉢の破片である。５の外底面には、「清水」と書かれた刻印がある。いずれも18世紀頃に京都近郊で生産されたものとみられる。９・10は肥前陶器の刷毛目椀で、17世紀後半代に属するものである。11は灰白色多孔質の胎土に透明釉をかけた、肥前陶器の底部片で、17世紀後半代のものである。12は半磁胎の肥前白磁の椀である。17世紀後半頃のものである。第２トレンチ溝２から出土した。13～18は肥前染付磁器椀である。外面には、呉須で網目文、山水文等を絵付けしている。所属年代は、13が18世紀前半代、14・18が18世紀代、15～17が17世紀後半代にそれぞれ属するものと思われる。19～21はくらわんか茶椀と呼ばれている、肥前染付磁器椀である。全体に厚手で、内底面の釉を輪状に欠き取る。18世紀代に属する。22は朝鮮王朝陶器



第６図　平瓦実測図



第７図　陶磁器・土師器実測図

である。内外面に乳白色の釉薬を施し、内底面の外周部の８か所に砂目が認められる。23・24は竜泉窯系青磁の破片である。23は花瓶の口縁部、24は香炉の体部である。25は明の染付皿である。高台畳付には砂が付着している。26は信楽焼の摺鉢である。年代は17世紀に属する。27は塩壺の蓋である。28～31は塩壺である。このうち、28は手づくねによって成形されている。29～31は円錐台形の内型を用いて成形された型作りのもので、体部内面には布目が残る。底部は、円筒形の体部内側に粘土塊を充填して成形している。このうち、29と31の外面には「御壺塩師堺湊伊織」の刻印がある。32～40は土師器の皿である。32～38の内面の底部と体部の境には、一条の沈線がめぐる。いずれも18世紀代のものである。

（奥村清一郎）

５．ま と め

今回の調査では、龍安寺の前身と考えられる円融寺、徳大寺に関する遺構は確認されなかったが、調査地の土地利用が明らかになった。土地利用は第２トレンチ付近から始まったようで、既存の建物と同方向にほぼ同じ高さになるように方形に山裾を削り出し、それに沿う形で溝２を設け、平坦部の拡張を行っている。その後、第１トレンチ側の丘陵の西・北側の傾斜部分を削り、第２トレンチ側の地山の傾斜部分の約１ｍほどの段差をこれで埋め戻し、さらに平坦部の拡張を行い、第１トレンチ同様、その際に削り出した部分に沿う形で溝１を設けたものと考えられるが、北側の削り出し部分については調査地外となり、確認することはできなかった。この２回の造成で調査地に何らかの建物が建てられたかどうかは不明である。その後はゴミ焼却に伴い焼却穴の掘削や、山側からの土入れが行われ、ゴミ焼却に対して何度も同じ事が繰り返されたようで、攪乱を受けた土層の堆積が認められた。それ以降は、先にも述べたように龍安寺側の記録のとおりである。

第２トレンチの溝２に伴う造成は出土遺物から17世紀後半には行われたと考えられ、これ以降の龍安寺に関する遺構・遺物が認められた。ただし、２～３点であるが平安時代に比定される布目瓦片が出土しており、調査地周辺に龍安寺の前身である寺が存在していたことを想定できる重要な資料を得ることができた。出土した多くの陶磁器類は多種多様のものであり、当時の寺院での日常生活を知る上で重要な資料となるものである。

（増田孝彦）

注１　杉山信三ほか『竜安寺昭堂復元工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－史跡竜安寺境内－』竜安寺・鳥羽離宮跡調査研究所　1975

注２　飛田範夫『龍安寺方丈庭園の土塀改修工事について』京都府文化財保護課　1978

注３　**調査参加者**　穂積優子・桝山拓之・川村真由美・稲垣あや子・寺尾貴美子

（参考文献）

村井康彦編『京都事典』東京堂出版　1979

京都府教育委員会編『文化財図録　解説編』　1969

2．名神大山崎ジャンクション関係遺跡
平成13年度発掘調査概要

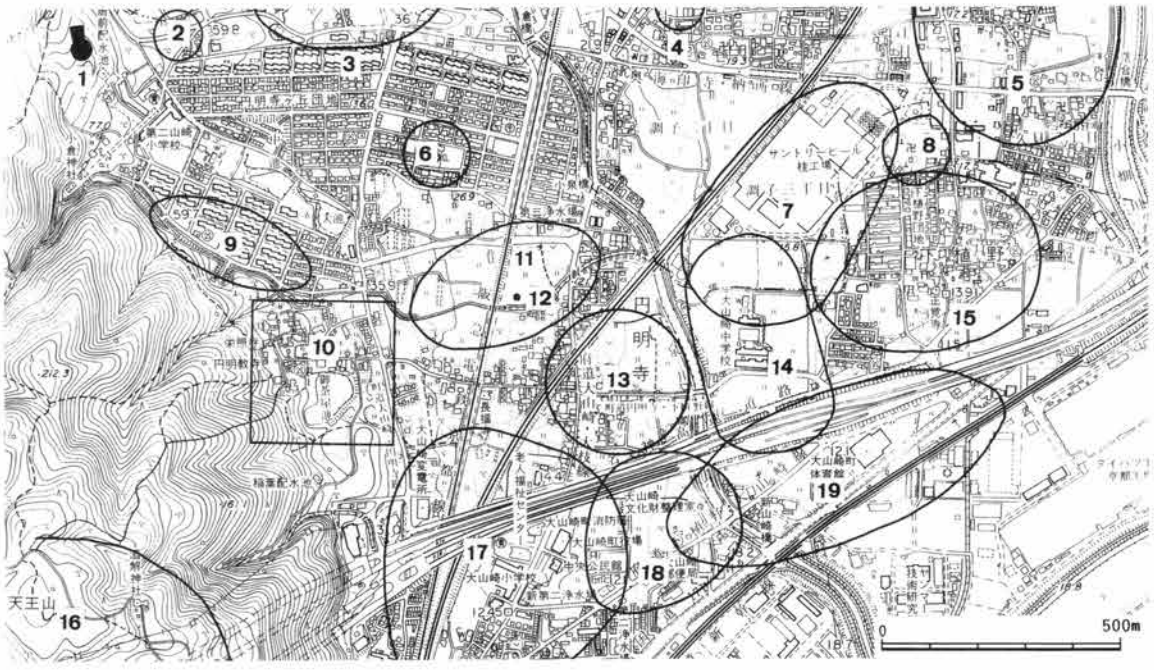
はじめに

この調査は、中央自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したもので、本年度で５年目となる。

平成13年度は、京都府乙訓郡大山崎町大字円明寺・下植野に所在する下植野南遺跡のうち、大字円明寺小字門田(門田地点)・同小字土辺(土辺地点)・大字下植野小字五条本(五条本地点)の３地点の調査を行った。

門田地点では、平成12年度の旧多目的広場(Ｊトレンチ)の南側の調査で、掘立柱建物跡や竪穴式住居跡を検出していたが、今年度はその下層で方形周溝墓の広がりを明らかにするために発掘調査を実施したところ、新たに２基の方形周溝墓(ＳＴＪ199・200)を検出した。ＳＴＪ199は、東西約10.5m、南北約10.0mの方形を呈し、その中心部では２基の埋葬施設を検出した。

旧府道敷跡(Ｉトレンチ)では、昨年度に久我畷関連遺構の調査を終了した北東側の調査地(Ｉ－１トレンチ、調査面積約400㎡)で方形周溝墓３基(ＳＴＩ48・49・62)を検出した。今年度



第８図　調査地位置図(大山崎町全図1/10,000使用)

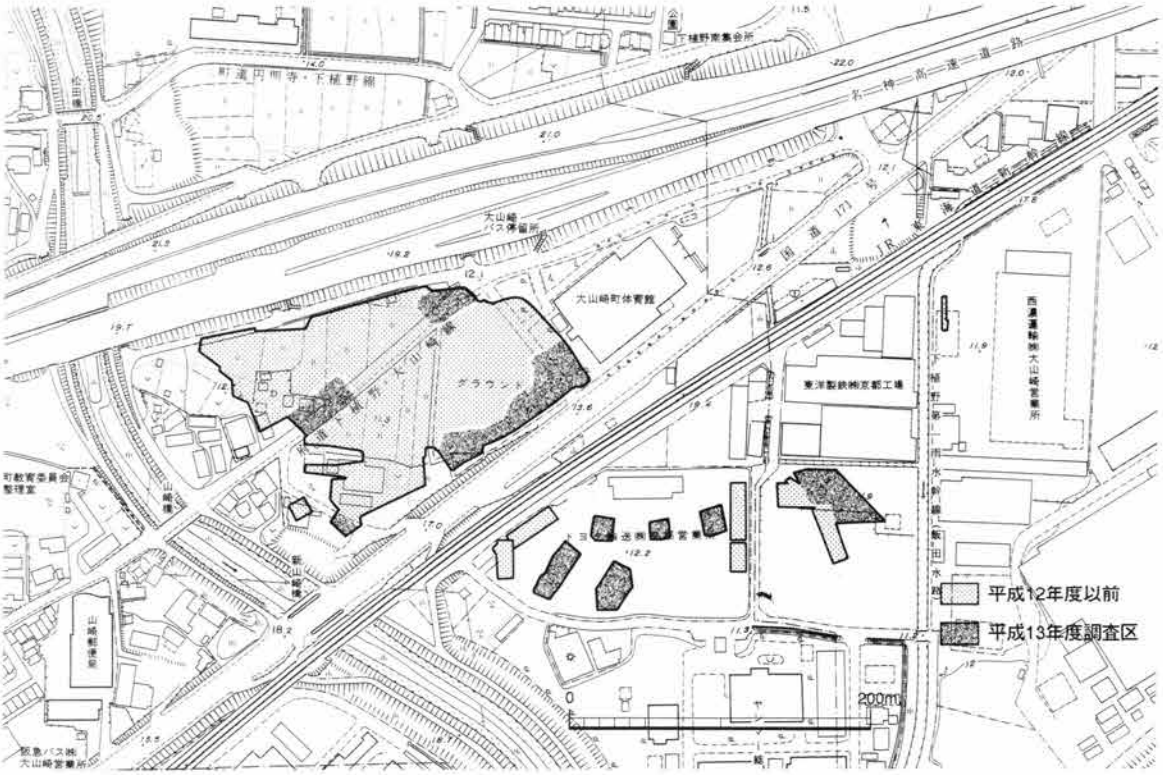
１．鳥居前古墳	２．石倉遺跡	３．脇山遺跡	４．大縄遺跡	５．南栗ヶ塚遺跡
６．葛原親王屋敷跡	７．硲遺跡	８．境野古墳群	９．西法寺遺跡	10．円明寺跡
11．久保川遺跡	12．黒後古墳	13．金蔵遺跡	14．松田遺跡	15．宮脇遺跡
16．山崎城跡	17．百々遺跡	18．算用田遺跡	19．下植野南遺跡	

新たにトレンチを設定した南西側の調査地（Ⅰ－2トレンチ、調査面積約850㎡）では、最上層で中世および近世の道路面（久我畷）と井戸跡、その下面では古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物跡6棟と竪穴式住居跡1基（ＳＨＩ109）を検出した。古墳時代中・後期の遺構面の検出、図化作業の終了後に下層遺構の追求に努めたところ、新たに、古墳時代前期の竪穴式住居跡1基（ＳＨＩ154）と弥生時代中期の方形周溝墓1基（ＳＴＩ123）を検出した。

土辺地点では、5か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。第1トレンチ（調査面積約600㎡）では、中心部に3か所の埋葬施設をもつ方形周溝墓を1基検出した。また、方形周溝墓の南西部では、明確な遺構にはならなかったが石剣が出土した。第2（調査面積約200㎡）・第4トレンチ（調査面積約300㎡）では、須恵器有蓋高杯の蓋（第2トレンチ）、埴輪（第4トレンチ）を含んだ古墳時代中期の周溝と思われる溝状遺構を確認した。第3（調査面積約200㎡）・第5トレンチ（調査面積約400㎡）では、顕著な遺構は見つからなかった。

五条本地点では、平成10年度の調査で古墳時代前期の井戸や竪穴式住居跡の一部を確認していたが、平成13年度はその調査地の東側（調査面積約1,100㎡）で、中世以降の耕作に伴う畝跡や人・馬の足跡などを、その下層で古墳時代の竪穴式住居跡2基、井戸1基、土坑4基、溝3条、柱穴などを検出した。

調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、主任調査員石井清司、増田孝彦、引原茂治、調査員中村周平、河野一隆が担当し、遺物整理の一部と報告は藤井整が担当した。調査期間中、作業員・調査補助員・整理員には猛暑、極寒のなか、調査に従事いただいた。また、調査にあたっては、日本道路公団・京都府教育委員会・大山崎町教育委員会を



第9図　平成13年度調査地

はじめ、各関係機関のご協力を得た。記して謝意を申し上げる。なお、発掘調査に係わる経費は、全額、日本道路公団が負担した。

（石井清司）

(1)下植野南遺跡(門田(ＩＫ−31次調査)地点)

１．検 出 遺 構

(1)Ｊトレンチ(南拡張区)(第10図)

門田地点では、昨年度後半にＪトレンチの南端で掘立柱建物跡群、竪穴式住居跡を確認していたが、調査の都合によりその下層遺構については未着手であったため、今年度は門田地点の下層で検出した方形周溝墓群の広がりを明らかにするために発掘調査を実施した。発掘調査の結果、本年度調査部の東半部では、昨年度検出していた方形周溝墓(ＳＴＪ83)の南東コーナーを検出したのみである。一方、西半部では昨年度検出したＳＴＪ20の南周溝を検出するとともに新たに２基の方形周溝墓(ＳＴＪ199・200)を検出した。

方形周溝墓ＳＴＪ199　ほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は約110m²である。周溝は北溝がＳＴＪ20南溝と、西溝がＳＴＪ200東溝と共有する。墳丘盛土は約20cmが残存していたが、北側のコーナー部分の崩落が著しい。主体部は墳丘上で２基、並列して検出された。北側に位置する第１主体部は、長辺246cm、短辺100cmの墓壙に、長辺180cm、短辺46cmの木棺の痕跡が確認できた。第２主体部は、墓壙長辺222cm、短辺90cmで、木棺痕跡は長辺160cm、短辺47cmである。第２主体部には浅い小口穴が存在した。供献土器は周溝底からやや浮いた形で出土した。

方形周溝墓ＳＴＪ200　調査区外にのびる長方形の方形周溝墓である。周溝は西溝が調査区外になる。規模は東西5.7m以上、南北5.0mである。北溝は深さ約50cmで断面「Ｕ」字形を呈しており、南溝はやや浅い。盛土は約20cmが残存しているが、ブロック状の盛土単位を認識することはできなかった。主体部は検出していない。供献土器は、いずれも周溝底からやや浮いた状態で出土した。

（石井清司・藤井　整）

(2)Ｉトレンチ

旧府道敷跡(Ｉトレンチ)では、昨年度、上層遺構までの発掘調査を終了した北東側の調査地(Ｉ−１トレンチ)で下層遺構の発掘調査を行ったところ、新たに３基の方形周溝墓(ＳＴＩ48・49・62)を検出した。ただ、各方形周溝墓とも上層遺構と同様、現在の攪乱部分が大半であり、遺構の遺存状況は良くなかった。

本年度新たにトレンチを設定したＩ−２トレンチ(旧府道敷跡南西端)では、Ｉ−１トレンチと同様、水道や電気の埋設管による攪乱が及んでいたが、Ｉ−１トレンチほどには攪乱が顕著ではなかった。Ｉ−２トレンチでは、現道路面のアスファルトを重機で除去したのち、人力により順

次遺構検出作業を進めたところ、中世以降近代まで路面幅を狭めながらも同一地点で順次造り変えられた路面遺構を検出した。路面跡のうち、中世の時期と思われる路面遺構（ＳＦＩ162）とその南北両側溝（ＳＤＩ122・106）は、昨年度に調査したＩ－１トレンチでは検出できなかったが、今回の調査で良好な路面を検出した。また、路面のベースである青灰色粘質土を除去した段階で、古墳時代中・後期の竪穴式住居跡（ＳＨＩ109）と掘立柱建物跡群を、さらにその下層で竪穴式住居跡（ＳＨＩ154）と方形周溝墓（ＳＴＩ123）を検出した。

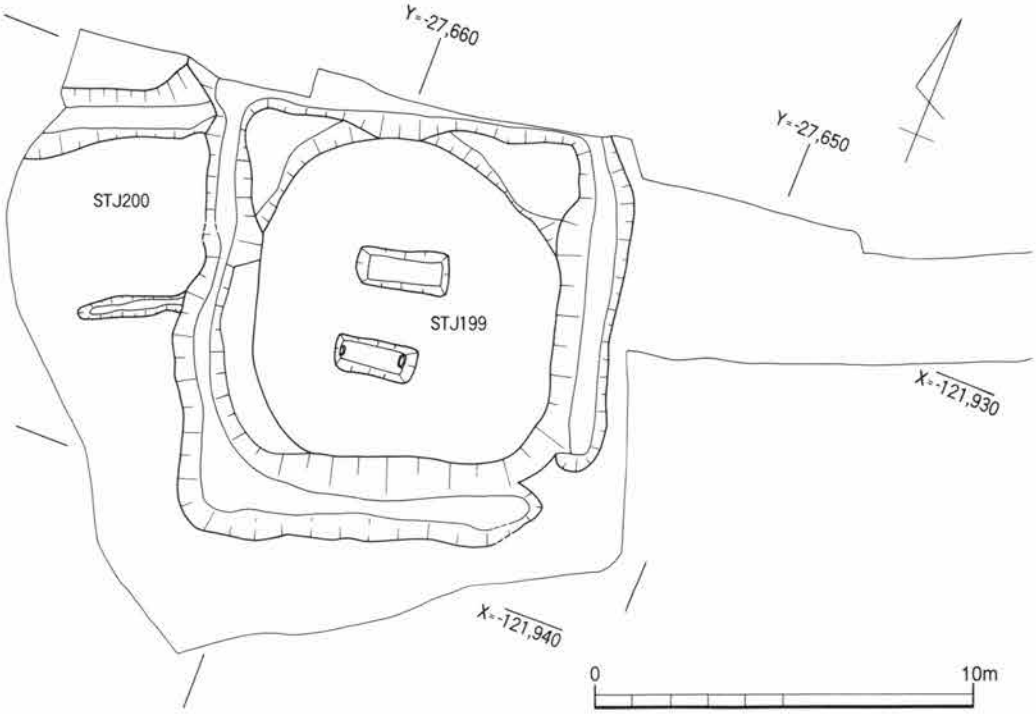
①Ｉ－１トレンチ（第11図）

方形周溝墓ＳＴＩ48　東西6.9m以上、南北6.5mの長方形の方形周溝墓である。東部は調査区外のため、検出できたのは東溝を除く全ての溝である。調査地は弥生時代の遺構面まで配管などの攪乱が及んでおり、一部はすでに破壊されていた。

方形周溝墓ＳＴＩ49　東西9.4m以上、南北7.6m以上の方形周溝墓である。北半部は調査区外であるため、検出できた周溝は南溝と西溝のみである。隣接するＳＴＩ62の周溝を切る形で掘削されているが、周溝埋土の認識は極めて困難で、周溝の切り合いも含めて、その他の事例と比較しつつ検討する必要を残している。供献土器は、南溝から広口壺が１点出土した。

方形周溝墓ＳＴＩ62　東西6.9m以上、南北6.5mのややいびつな長方形を呈する方形周溝墓である。面積は約59m²である。周溝の一部を攪乱によって破壊され、上面を古墳時代後期の流路によって破壊される。西側の周溝については、ＳＴＩ49との交点以外に検出が出来なかった。

このトレンチでは３基の方形周溝墓が検出されたが、上層からの攪乱が著しく、その状況については不明な部分がある。



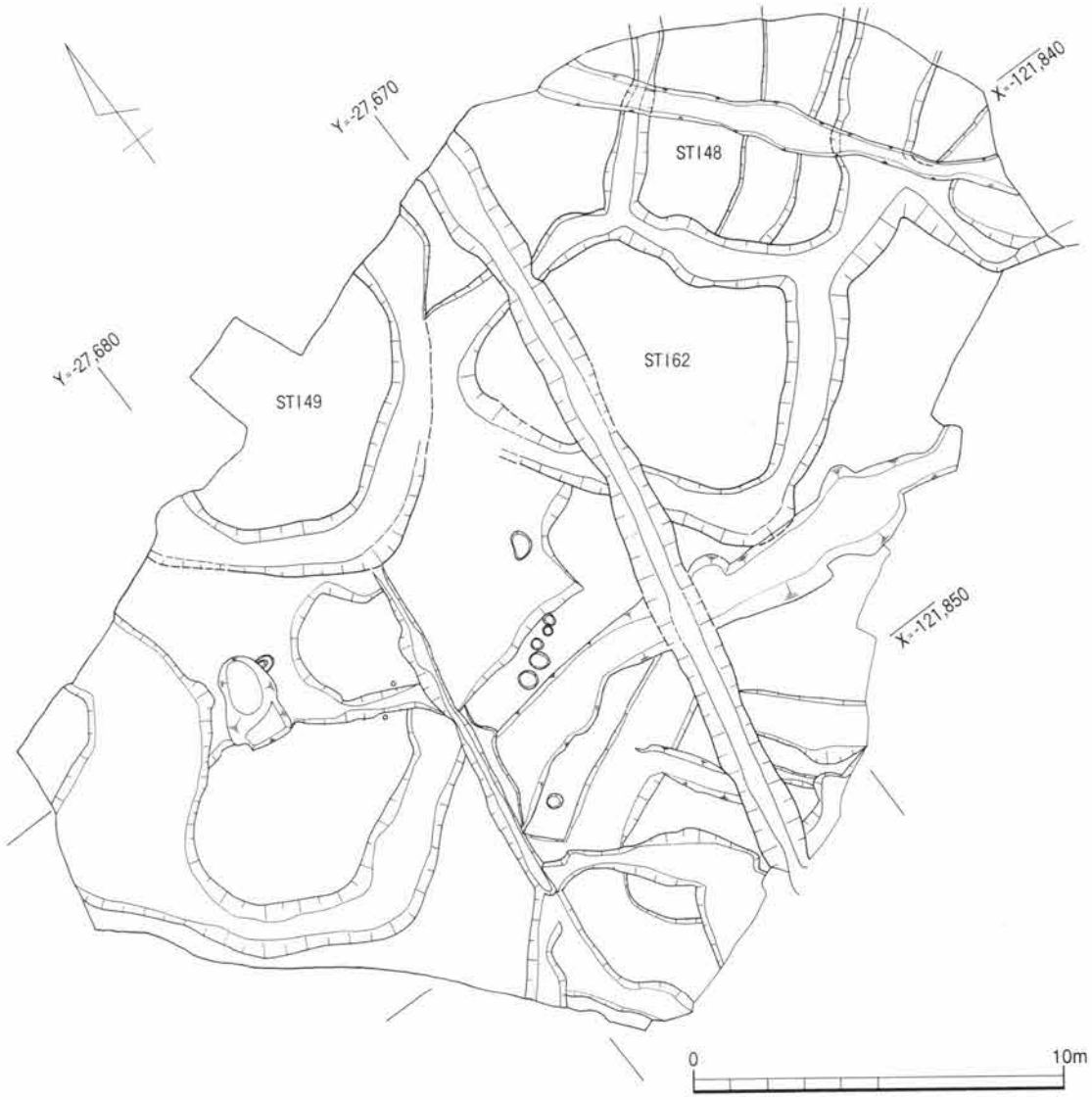
第10図　Ｊトレンチ　方形周溝墓ＳＴＪ199・200

②Ⅰ－2トレンチ（第12・13図）

下層遺構

方形周溝墓ＳＴⅠ123　長方形の方形周溝墓で、面積は75㎡である。溝は四周をめぐるが、西溝の上層をＳＤＦ22によって削平される。周溝は深さ約60～80cmで断面「U」字形を呈している。北溝と東溝のコーナー部分はやや高くなるが、陸橋部を形成するという状況ではない。

盛土は、約30cmが残存しているが、ブロック状の盛土単位を認識することはできなかった。主体部は墳丘中央部で１基検出した。主体部は、盛土を切って掘削されており、墳丘上で検出したものとしては最も深く約70cmが遺存する。墓壙の長軸は254cm、短軸137cmである。木棺痕跡も断面では比較的明瞭に確認することができた。長軸180cm、短軸53cmの規模である。平面プランでは箱型と認識したが、小口板が墓壙底に差し込まれる型式の棺が採用されていることから、長側板が小口板を挟み込む型式の棺であると考えられる。供献土器はいずれも周溝底からやや浮いた状態で出土した。平成11年度の概要報告の段階でＳＴＧ94北溝に属すると判断して報告した把手



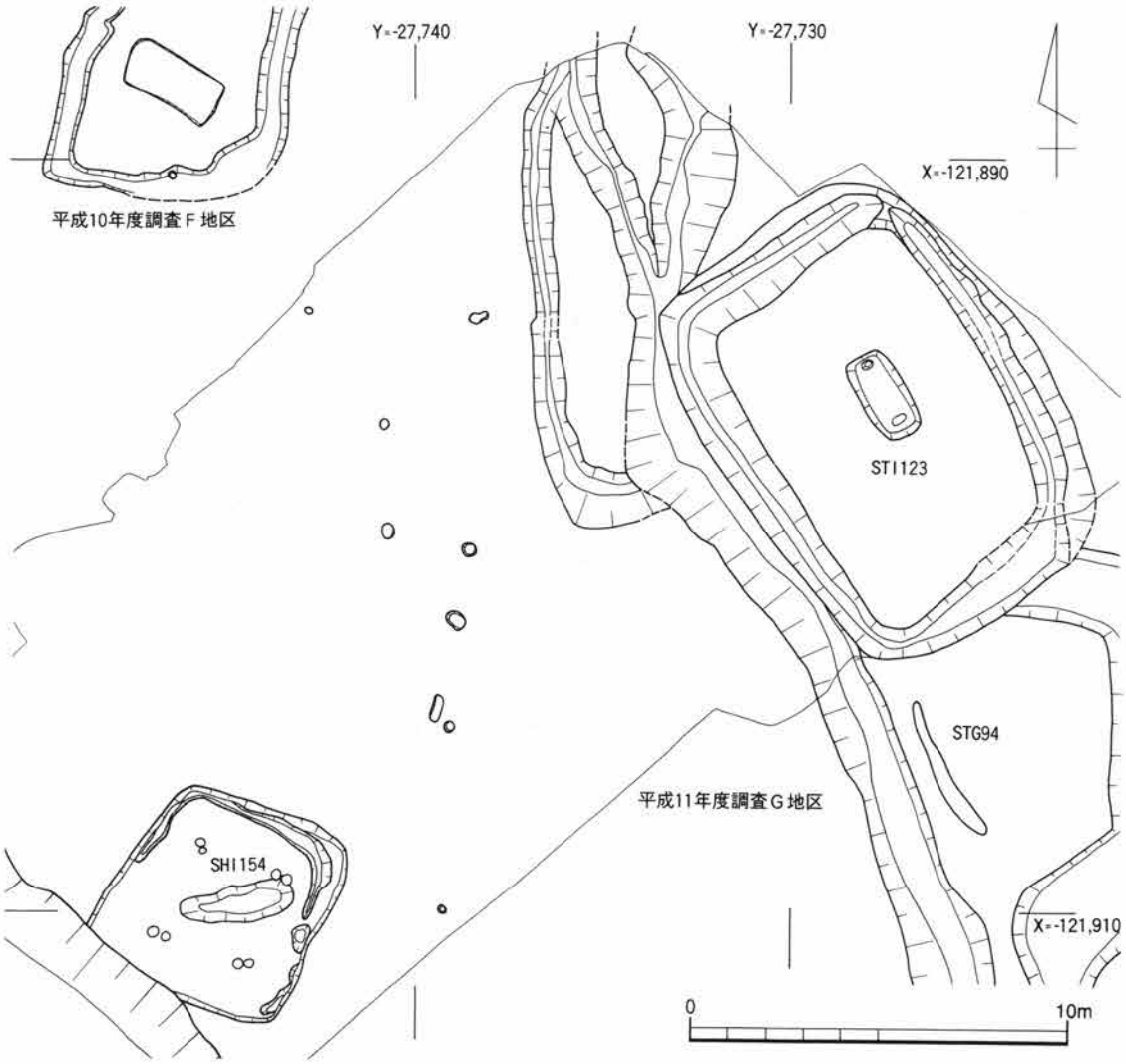
第11図　Ⅰ－1トレンチ下層遺構図

付きの台付鉢は、出土層位などからこの周溝墓の南溝の遺物と判断した。また、この調査区では、これ以外にＳＨＩ154の下層で検出した溝が方形周溝墓になる可能性がある。

竪穴式住居跡ＳＨＩ154　Ｉトレンチ調査地西端で検出した方形の竪穴式住居跡である。ＳＨＩ154は、黒褐色粘質土を除去した段階で検出した下層遺構であり、一辺約5.2m、遺構検出面から床面までの深さ10～30cmを測り、西端部は中世流路であるＳＲＩ107によって削り取られている。ＳＨＩ154は２時期にわたって建て替えがあり、当初は一辺約4.8mであったものを新たに約5.0mに拡張している。床面では古い時期の竪穴式住居跡の周壁溝は北辺部のみ遺存し、新しい時期の竪穴式住居跡の周壁溝は完周しない。柱穴は古・新の時期の柱穴が近接して４か所ある。ＳＨＩ154の埋土内から炭とともに多量の土器が出土した。

上層遺構

竪穴式住居跡ＳＨＩ109　ＳＤＦ22によって中央部が削られた方形の竪穴式住居跡である。ＳＨＩ109は東西約3.5m、南北約3.7m、遺構検出面から床面までの深さ10cmを測る。なお、西半部は西壁および床面のベース面が砂礫層からなり土層の識別は困難であった。ＳＨＩ109の床面

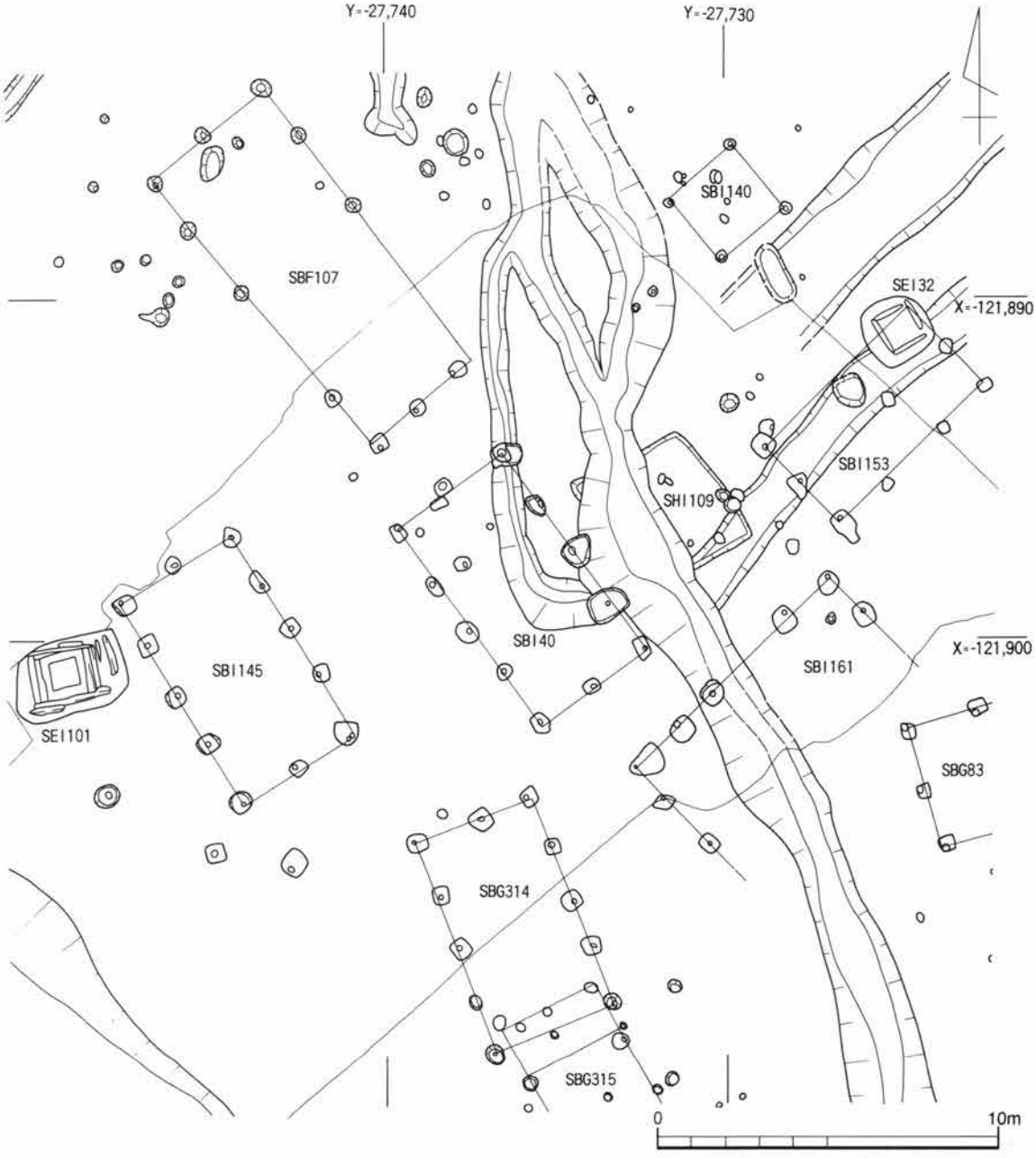


第12図　Ｉ－２トレンチ下層遺構図

では明瞭な周壁溝や柱穴は検出できなかったが、西北部で焼土痕を検出した。ＳＨＩ109は大半がＳＤＦ22によって削り取られており、わずかに土師器甕２点が出土したのみである。

掘立柱建物跡ＳＢＦ107　ＳＢＦ107は、調査地中央南域にある桁行２間以上(4.2m以上)、梁間２間(4.2m)の南北棟の建物跡である。南辺がＦトレンチ調査地南壁に一部かかり、Ｉトレンチへ続く。ＳＢＦ107の桁行西列の延長線上にＳＢＩ139の西列がある。ＳＢＦ107とＳＢＩ139が一連(同一)の掘立柱建物となる可能性もあるが、ＳＢＩ139の南列(梁間)は1.5mの等間隔となることからここではＳＢＦ107とＳＢＩ139は別の掘立柱建物と考えておく。ＳＢＦ107の柱掘形直径約0.45～0.60m、柱穴直径約0.2m、検出面から底部までの深さ0.3～0.5mを測る。

掘立柱建物跡ＳＢＧ314　ＳＢＧ314は南北棟の掘立柱建物跡で、桁行４間(6.6m)、梁間２間



第13図　Ｉ－２トレンチ上層遺構図

(3.6m)で、桁行の柱間間隔は1.65m、梁行の柱間間隔は1.80mの等間隔である。各柱掘形は、一辺約0.5～0.6mで、柱穴直径0.12～0.20m、掘形検出面からの深さ約0.1～0.4mを測る。各掘形からは、須恵器・土師器の細片が出土したが、時期決定を示す明瞭なものはなかった。

掘立柱建物跡ＳＢＩ140　Ｉ－２トレンチ中央で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。ＳＢＩ140は、桁行４間(7.2m)、梁間２間(3.9m)で、桁行の柱間間隔は北から2.1m・1.65m・1.65m・1.8m、梁間の柱間間隔は1.95mの等間隔である。各柱掘形は一辺0.4～1.2m、柱穴直径0.12～0.2m、掘形検出面から底部までの深さ0.25～0.50mを測る。ＳＢＩ140の一部掘形は、ＳＤＩ108により切られている。

掘立柱建物跡ＳＢＩ145　ＳＢＩ140の西約4.0mで、ＳＢＩ140とは7°の振れがある南北棟の掘立柱建物跡である。桁行４間(6.9m)、梁間２間(3.75m)で、桁行の柱間間隔は北から1.5m・1.8m・1.5m・2.1m、梁間の柱間間隔は西から1.8m・1.95mを測る。

掘立柱建物跡ＳＢＩ153　南北２間、東西１間以上の東西棟の掘立柱建物跡である。昨年度の調査概要では、Ｉトレンチの西端で土坑を２か所検出したと報告したが、ＳＢＩ153の検出により２間×３間の建物となる可能性が高い。

掘立柱建物跡ＳＢＩ161　ＩトレンチとＧ地区にまたがる形で検出した東西棟の掘立柱建物跡と思われる。ＳＢＩ110の桁行南列は、ＳＤＦ22と重複しており、十分に検討することなくＳＤＦ22を掘削したため、その重複関係は明らかでない。ＳＢＩ161は桁行５間(8.1m)、梁間２間以上(3.0m)で、柱掘形は一辺0.5～1.0m、柱穴直径0.65～0.90m、掘形検出面から底部までの深さ0.15～0.60mを測る。桁行の柱間間隔は西から1.8m・1.5m・1.5m・1.5m・1.8m、梁間の柱間間隔は北から1.2m・1.8mを測る。

土坑ＳＫＩ126　Ｉ－２トレンチ中央で検出した長軸約1.5m、短軸約1.0m、検出面からの深さ0.14mを測る楕円形土坑で、坑内から須恵器杯身・横瓶、土師器甕・甑・皿などが出土した。

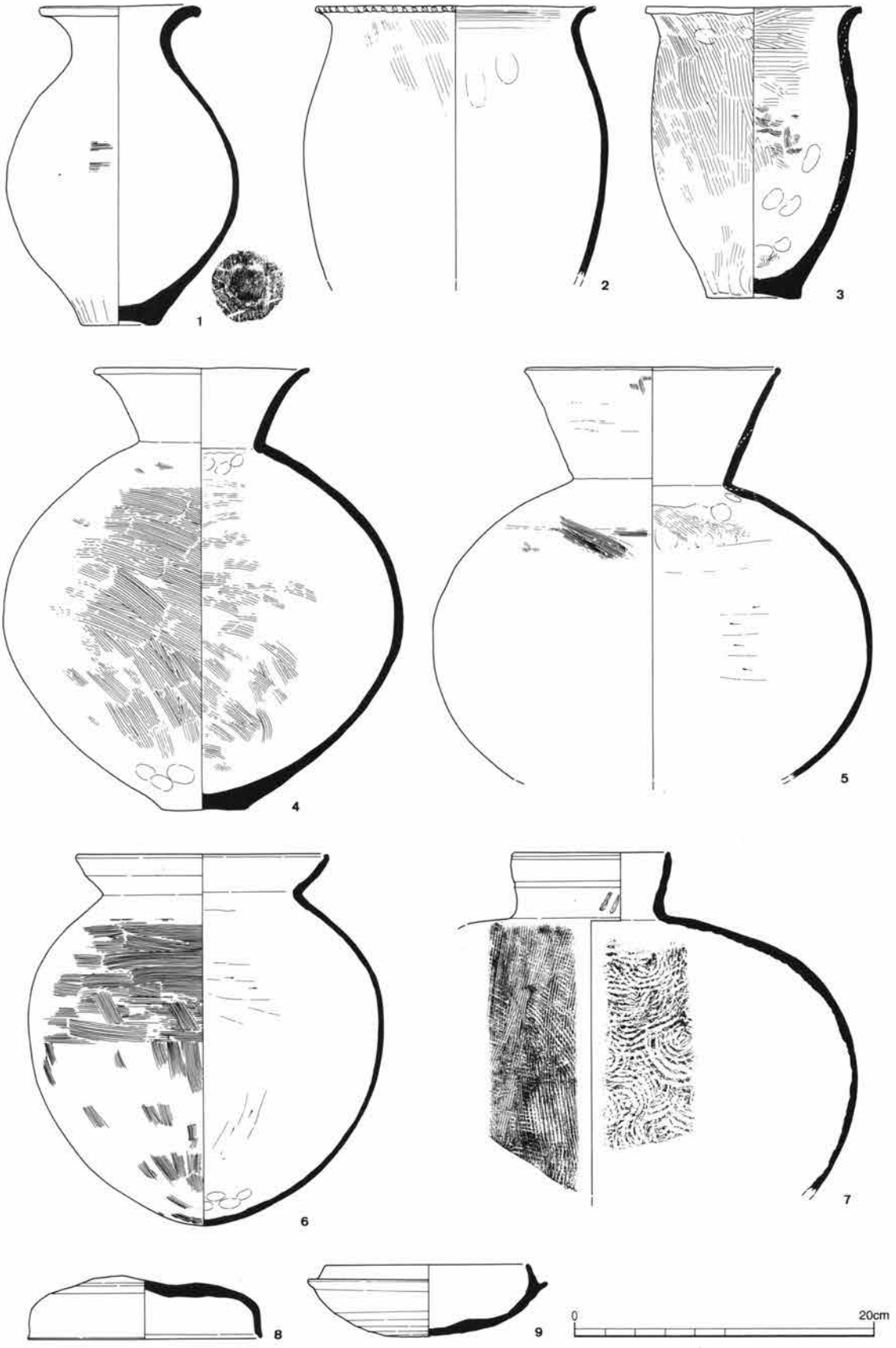
土坑ＳＫＩ127　ＳＫＩ126の北西約4.5mで検出した長軸約2.2m、短軸約1.1m、検出面からの深さ0.1mを測る不整形土坑で土坑内埋土には炭を含む。ＳＫＩ127は後述するＳＢＩ145の東列北から３列目の掘形によって切られている。土坑内から須恵器杯蓋、土師器甕・高杯などが出土した。

溝ＳＤＩ108　ＳＤＩ108は、Ｆトレンチで検出しているＳＤＦ22から続くもので、調査地中央で２条の溝が合流し１条になる南北方向の溝である。溝内からは、土師器椀、須恵器などが出土した。

久我畷関連遺構

昨年度発掘調査を実施したＩトレンチでは、現代の埋設管などにより攪乱が著しかったが、今年度発掘調査を実施したＩ－２トレンチでは、東西方向に走る２条の埋設管があるものの、昨年度に比べて良好な状態で路面状遺構を検出した。

現在のアスファルトを除去した面では、２条の杭列を検出した。この杭列は埋設管によりその多くが削り取られているが、両杭列間の幅は、約3.5mを測る。杭列は、立木の状況から近代以



第14図　門田地点出土遺物

降のものと思われる。

杭列Ａ・Ｂを除去した段階で検出した路面（ＳＦＩ62）は、標高10.3mで検出したもので、検出全長約15m、幅約3.5mを測り、上面には拳大の栗石を含む礫が敷かれている。

ＳＦＩ62の北側には、幅約3.0mの、南側では幅2.3～3.5mのＳＦＩ62に並行する溝があり、ＳＦＩ62路面に伴う両側溝と思われる。ＳＦＩ62の礫敷上面および礫を除去した段階で北宋銭を含む古銭が出土した。また両側溝では少量の土師器、瓦器が出土した。なお、ＳＦＩ62はトレンチ西端の流路ＳＲＩ107によって切られている。ＳＦＩ62を除去した面では前述の竪穴式住居跡などを確認したが、路面と思われる遺構は検出できなかった。

（石井清司・河野一隆・藤井　整）

2．出土遺物（第14図）

１・２は、Ｊトレンチ ＳＴＪ199から出土。１は口縁が短く外反する広口壺で外面は磨滅が著しいがかろうじて櫛描直線紋を２帯確認できる。２は口縁端部に刻目を持ついわゆる大和型甕である。３はＩ－２トレンチＳＴＩ123の出土である。短く如意状に外反する口縁を持ち、器壁は厚く鈍重である。４～６は同ＳＨＩ154出土。４は中型壺で、口縁がゆるやかに外反し、底部の丸底化も顕著ではない。６は甕で、胴部上半をヨコハケで調整し、底部も丸底化していない。７～９は同ＳＫＩ126出土の須恵器である。７は横瓶、８・９は杯身杯蓋である。８と９の天蓋部にはほぼ同形の「×」字の窯記号があり、胎土も酷似している。口縁端部の処理や口径などから、ＴＫ10型式に属する資料と考えられる。

3．小結

門田地点では、当初の調査範囲での発掘調査は本年度で終了した。これまでの調査では、下層遺構として弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代前期の竪穴式住居跡、古墳時代中・後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などを検出しているが、本年度の調査によって遺構の集中範囲が想定できるようになった。

弥生時代の方形周溝墓は、新たにＩトレンチで４基、Ｊトレンチで２基を確認し、これまでの調査成果とあわせて82基の方形周溝墓を確認したこととなる。ただ、今年度のＪトレンチの調査では南西部分の調査地では方形周溝墓を確認せず、方形周溝墓群の南西部への広がりがないことが明らかとなった。南東部分ではＳＴＪ199・200にみられるように新たに方形周溝墓を確認しており、さらに国道171号線の方向へ広がることが明らかとなった。また土辺地点で１基の方形周溝墓を確認したが、国道・ＪＲ新幹線を挟み、約100m離れた地点にあり、門田地点で検出した方形周溝墓群との関連は明らかではないが、方形周溝墓群の中心は、門田地点に集中する傾向にあるものと思われる。

古墳時代前期の竪穴式住居跡をＩトレンチで新たに１基検出したが、この竪穴式住居跡の位置もこれまでのこの時期の竪穴式住居跡の分布状況と同じように、方形周溝墓群を避けるような位

置に配置されていることが明らかとなった。

一方、古墳時代中・後期以降の掘立柱建物跡は昨年度のＪトレンチの南東隅で集中する傾向にあったが、今回方形周溝墓のみつかった南西部では検出できず、掘立柱建物跡の集中する範囲に傾向があることが明らかとなった。また、ＦトレンチとＧトレンチの間にあるＩ－２トレンチでは、新たに掘立柱建物跡を３棟検出し、この地点にも掘立柱建物跡が集中する傾向にあることが明らかとなった。

久我畷関連遺構では、Ｉ－１トレンチと同様、中世以降近代まで連綿と同一地点で路面幅を狭めながらも機能していることが明らかとなったが、今回の調査では中世路面が良好な状態で検出されたとともに、路面の直上や路面敷設した小石を除去した面でも古銭が出土しており、側溝から出土した土器とともに路面の機能していた時期を示す資料が出土した。

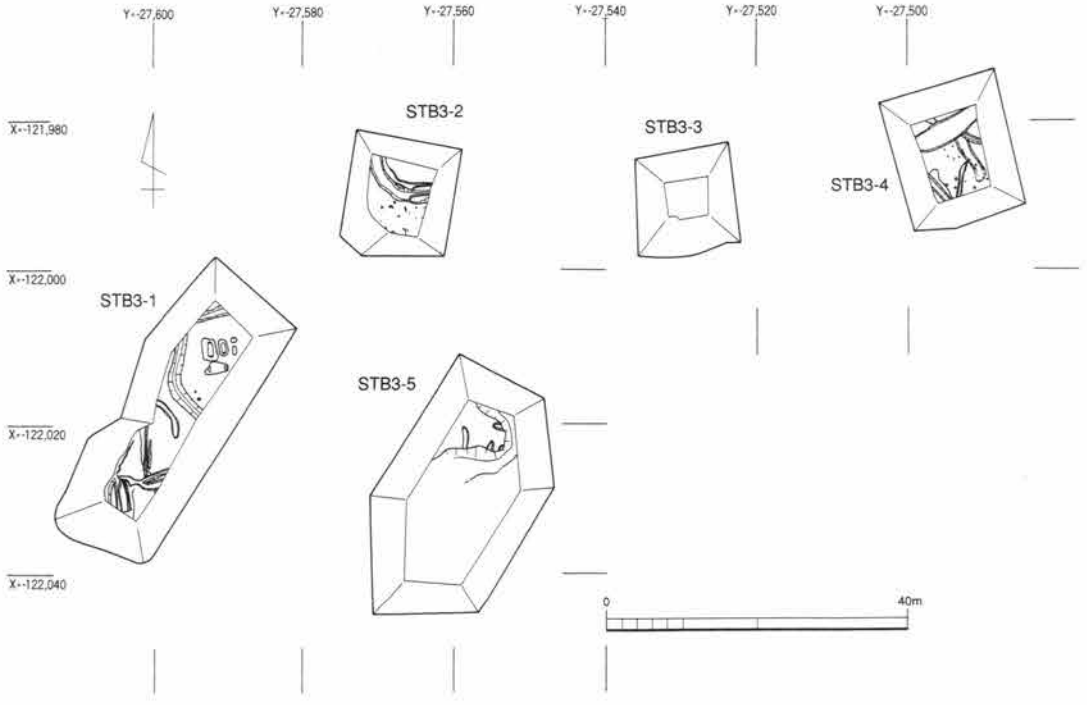
以上のように調査面積は昨年度と比べて小規模なものであったが、門田地点の全体を知る上での良好な調査成果を得られた。

（石井清司・藤井　整）

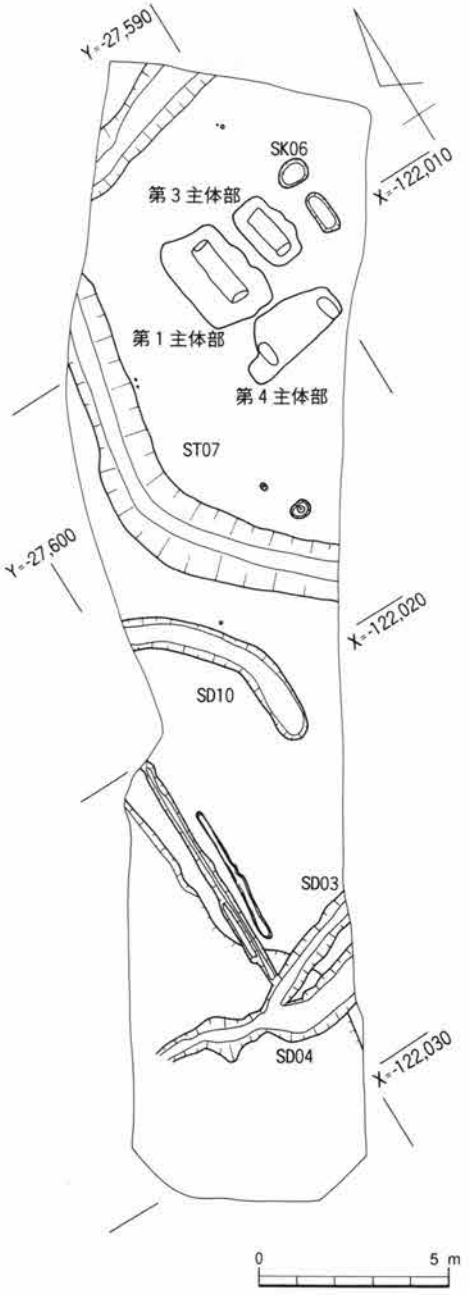
(2)下植野南遺跡(土辺(つつべ)(ＳＴＢ－１～５)地点)

１．検出遺構（第15図）

調査地は、大山崎町字円明寺小字土辺地内にある。多数の方形周溝墓が検出された門田地点の南東方100ｍの位置にあたる。この地点では５か所のトレンチを設定し、計1,700㎡の調査を実施



第15図　土辺地点トレンチ配置図



第16図　土辺ＳＴＢ３－１トレンチ

した。調査地の標高は、約12.4mであり、標高8.7m前後(表土下約3.7m)に弥生～古墳時代の遺構面(淡茶褐色粘質土層)が遺存していることが確認された。近接した調査地点では平成10年度に実施したＩＫ28次調査があり、平安時代に流れていた小泉川の旧河道跡を検出している。また、平成11年度に実施したＩＫ40次調査では２か所のトレンチを設定し、大小の流路に浸食されていたが、ＩＫ28次調査地に隣接する第２トレンチでは三面の遺構面が確認されている。今年度調査地での主要な遺構としては弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の古墳、後期の古墳を各々１基ずつであり、古墳時代前期の土地利用に伴う整地層も検出した。

(1)ＳＴＢ３－１トレンチ(第16図)

時期不明の流路跡と溝ＳＤ03・04・10、弥生時代中期の方形周溝墓ＳＴ07、土坑ＳＫ06がある。

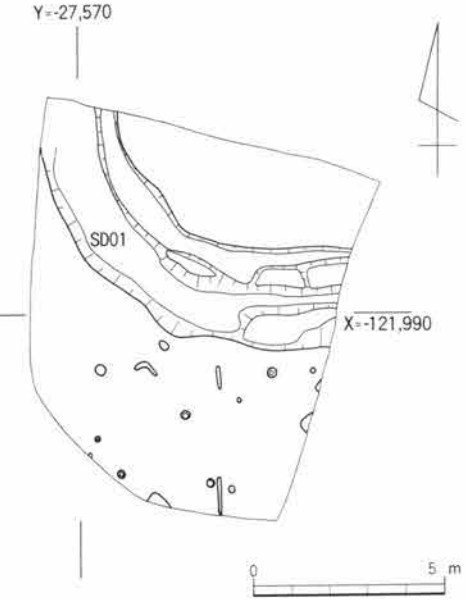
流路跡　トレンチ南端で検出したもので、標高10.8m前後までは盛土層、耕作土が有り、標高9.9m以下は砂礫と粘質土の互層による河川性の堆積である。標高8.8m付近では流路肩部に杭を用いた護岸が認められる。標高8.6m以下は黄褐色粘土・淡灰褐色粘質土となり、上面には河川堆積の底面を示すマンガンの沈着が厚く認められた。遺物の出土は認められなかったが、ＩＫ28次・ＩＫ40次調査で検出された小泉川の旧河道跡の延長部分と考えられる。

溝ＳＤ03・04　北東方向から南西方向に延びてきたものが、流路肩付近で合流し、更に南西に延びる溝であるが、流路により削られている。規模は、溝ＳＤ03は幅約0.7～0.8m、深さ約0.36m、溝ＳＤ04は幅約1.0～1.1m、深さ約0.5mを測る。溝底面付近から出土した土器片から古墳時代前期の溝と推定される。

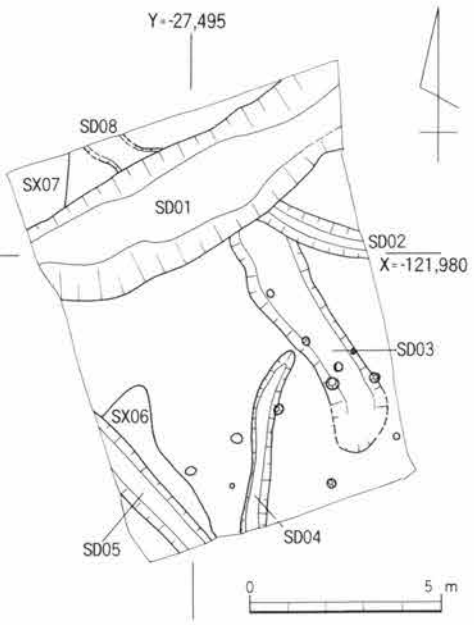
溝ＳＤ10　トレンチ西端で検出した北側に円弧を描く様に延びるが、南側と東側にはその延長部分が認められない溝である。規模は幅約0.8～0.9m、深さ約0.15mを測る。遺物は出土していない。

方形周溝墓ＳＴ07　トレンチ北端で検出した。周溝は調査地外に延びるため南・北・西溝の一部を検出した。基本的には四周を掘削していたと思われるが、北溝が最も浅く、南溝は深い。北溝で幅約1.2～1.5m、深さ約0.5m、南溝で幅約1.8～1.9m、深さ約0.6～0.7mを測る。北溝内

からは、完形に近い供献土器が出土した(第19図10)。墳丘上に置かれていたものが転落したか、捨てられた状態が考えられる。規模は、一辺約10m前後を測るものと思われる。墳丘の盛土と考えられる地山上の土色の変化を約0.35m確認した。墳頂部中央付近では、南北方向に平行して並ぶ主体部2基とこれに直交する主体部1基の計3基および土器埋納土坑を検出した。墓壙規模は、第1主体部で長辺約2.8m、短辺約1.8m、深さ約0.2m、第3主体部で長辺約1.9m、短辺約1.1m、深さ約0.2m、第4主体部で長辺約2.5m、短辺約1.0m、深さ約0.3mを測る。埋土の断面観察から木棺直葬と推定され、第1・4主体部は、墓壙底面両側に木口穴が検出されたが、第3主体部については北側のみ木口穴が存在していた。木口板や長側板までは確認できなかったが、推定される木棺の規模は、第1主体部で長さ約1.6m、幅約0.5m、第3主体部で長さ約1.2m、幅約0.4m前後、第4主体部で長さ約1.7m、幅約0.7mを測る。第1・4主体部の棺上の埋土中から、石鏃が1点ずつ出土しているが、その形態から弥生時代以前のものである可能性が高い(第19図16・17)。



第17図　土辺ＳＴＢ３－２トレンチ



第18図　土辺ＳＴＢ３－４トレンチ

土坑ＳＫ06　第3主体部北側で検出したもので、弥生土器壺をやや斜め立位で納めている。土坑は長楕円形を成し、長軸約0.8m、幅約0.6mを測る。埋葬に伴う土器供献土坑と推定される。

その他、ＳＤ10検出面南側で欠損した磨製石剣片が1点出土している(第19図15)。

(増田孝彦)

(2) 3－2トレンチ(第17図)

3－1トレンチの北東側に設定した約14×16mの方形トレンチである。地表下約1.5mまでは現代の造成盛土が、それ以下2mまでは、砂質土が互層をなしほぼ水平に堆積する。地表下3.5m、標高約9.0m付近に分布する暗青緑色粘質土層上から溝ＳＤ01などの遺構を検出した。

溝ＳＤ01　トレンチ北半で検出したものでトレンチ北西隅から東辺にかけて弧状にめぐる。両端はトレンチ外に延びており、検出長は約10mである。かなり削平を受けており残存状況は不良である。検出幅約2.5m、深さ約10～20cmを測る。断面は、浅い「U」字状を呈し、埋土は暗黒

灰色粘質土である。この溝ほぼ中央部およびその西側の最深部から須恵器有蓋高杯の蓋・土師器高杯片が出土した。時期的には５世紀後半のものと考えられる。この溝は、その平面形から、古墳の周溝の一部である可能性が考えられ、周溝とすれば、直径約13mの円墳が想定される。

(3) ３－４トレンチ(第18図)

溝ＳＤ01　トレンチ北端で検出した。北東～南西に斜行し、両端はトレンチ外に延びる。検出幅約2.0～3.0m、深さ約20～30cmを測る。断面は浅い「U」字状で、埋土は暗黒灰色粘質土である。出土遺物は、円筒埴輪・土師器高杯・甕である。これらの遺物の多くは、溝北肩～底部の傾斜変換点付近から数か所でまとまって出土した。溝については、円筒埴輪が出土することなどから古墳の周溝の一部と考えられるが、古墳の規模や形状については不明である。

掘立柱建物跡ＳＢ09　トレンチ南端で検出した３間×１間の東西棟の掘立柱建物跡である。主軸はN55°Wである。柱掘形は円形で、直径約30cm、深さ約10～20cmを測る。南西側では、削平などのため、柱穴は検出できなかった。柱間は北西辺で1.5m・1.5m・2.0m、北東辺で2.5mを測る。柱穴内からは遺物が出土しておらず、時期などは不明である。

この他の検出遺構には、溝ＳＤ02・04・05・08などがあるが、これらの遺構からは土器の細片が出土しているのみであり、所属時期などは不明である。

(中村周平)

(4) ３－５トレンチ

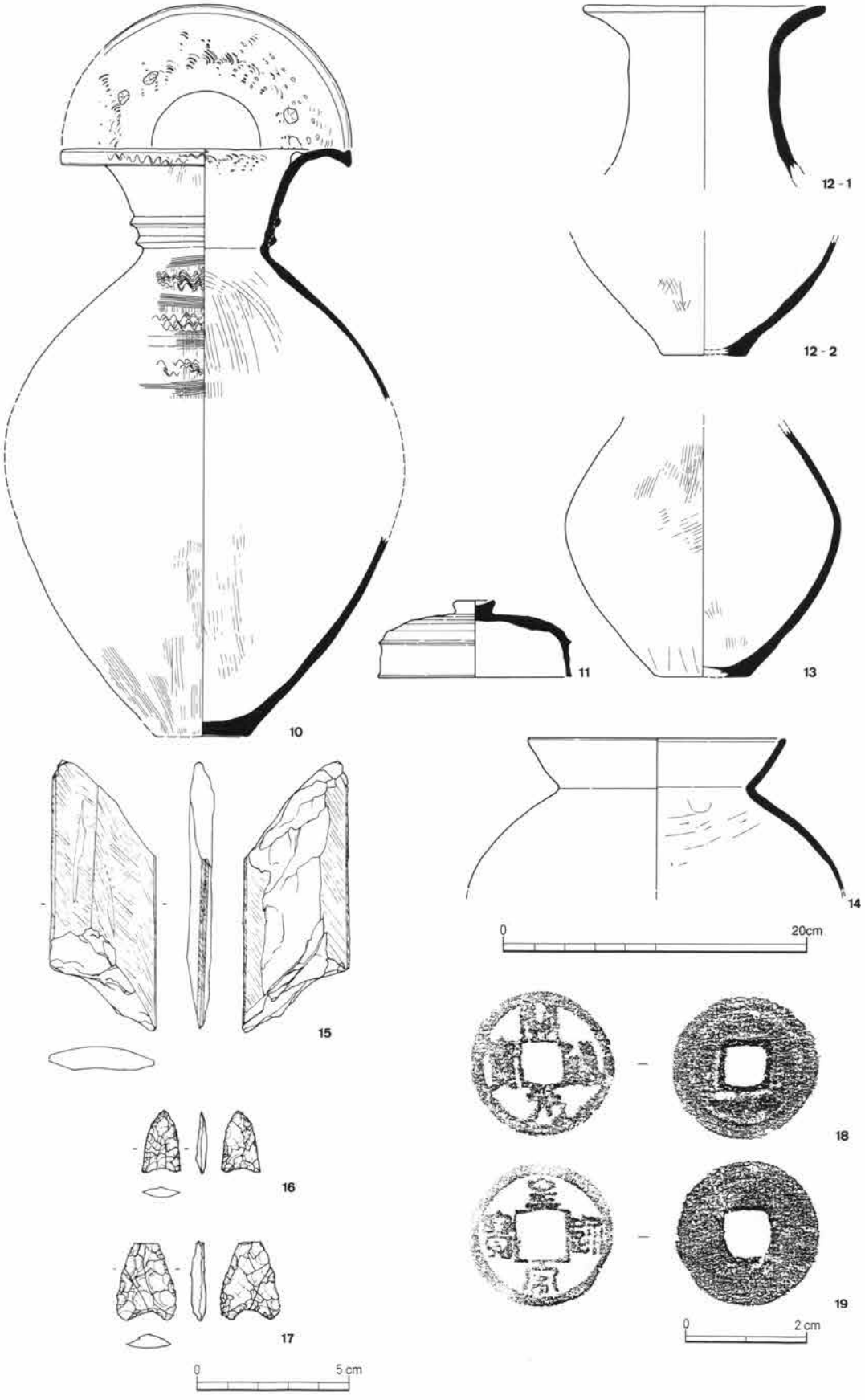
ＳＴＢ３－３・４トレンチの南側に位置する。近接地ではＩＫ40次調査第１トレンチがあり、河川堆積が確認されている。標高８m前後の中世以降の淡灰色粘質土層の下層には、礫を多く含む土地利用に伴う整地層(黒褐色礫混じり粘質土)が確認された。トレンチ北端では遺構が残っている可能性がある黄褐色粘土層(地山)が一部検出されたが、遺構は存在しなかった。礫を多く含む整地層下層は、洪水性の砂礫層が厚く堆積していた。この整地層中からは完形に近い弥生時代中期に比定される長頸壺・甕、古墳時代前期の甕などが出土している(第19図)。整地に伴い周辺の遺構から混入したものと考えられる。土層の堆積状況、標高などから五条本地点と同様、古墳時代前期の土地利用に伴う整地層と考えられる。

土辺地点の調査では、どの部分でも洪水性の砂礫の堆積が認められるが、ベース面である黄褐色粘土は五条本地点の調査結果と合わすと、この付近が南限となり、弥生時代の遺構についてはこれよりも北側に、古墳時代遺構は整地層上に集落が形成されていることから、さらに南側に集落が広がっていく可能性がある。

(増田孝彦)

２．出 土 遺 物(第19図)

10はＳＴＢ３－１トレンチＳＤ07から出土した頸部に突帯を２条めぐらせた広口壺である。口縁端面、口縁内面、頸部以下外面を櫛描紋で加飾する。櫛原体は９条／12.5㎜のやや幅広なものが用いられるが、口縁内面には扇形紋の施紋後にコブ状突起が２個一対で付けられている。コブ



第19図　土辺・五条本地点出土遺物

状突起は２か所が残存しているが、元は３か所に配されていたものと考えられる。調整は外面胴部下半がケズリの後ハケ、胴部上半と内面はナデずにハケのまま調整を終えている。底部には長さ３cm程度の植物の茎痕が残るが、木葉圧痕ではない。弥生時代中期中葉に比定される。

11はＳＴＢ３－２トレンチＳＤ01で出土した須恵器有蓋高杯の蓋である。蓋の天井部は平らで、口縁端部の凹面の段は明瞭である。天井部に加飾はない。ＴＫ208型式に属する。

12－１・12－２はＳＴＢ３－５トレンチで遺構に伴わずに出土した、口縁が短く外反する弥生土器の壺である。口縁端部は磨滅しており、器壁は残存していないが、形態などからほぼ口縁端部まで残存しているものと判断した。胴部下半は頸部以上と接点がないが、出土状況や胎土などから同一個体と判断した。遺物は頸部以上、胴部下半ともに約半分の破片しか出土していない。器壁は磨滅が著しく、調整や施紋の有無は不明である。底部には穿孔状の欠損が認められるが、確証はない。形態から弥生時代中期中葉あるいはそれ以降の遺物であると考えられる。13は同じく遺構に伴わずに出土した、弥生土器の壺底部である。15はＳＴＢ３－５トレンチＳＤ10で出土した磨製石剣の破片である。16・17は石鏃である。ともにＳＴ07の区画内から出土したもので、17は弥生時代のものとしてはやや大型であること、16もその形態や、表面が著しく磨滅していることなどから弥生時代以前の石鏃が混入したものと考えられる。

（藤井　整）

３．小結

土辺地点で弥生時代中期の方形周溝墓が検出されたことにより、門田地点から続く弥生時代の墓域が更に広がる可能性がある。また古墳時代前期・後期の周溝を伴う古墳が２基検出され、古墳時代においてもこの地が奥津城として利用されたことが明らかとなった。このうち４トレンチで検出された古墳は、大山崎町でも数少ない埴輪を有する古墳であることが判明した。

（増田孝彦）

(3)下植野南遺跡（五条本地点）

１．検出遺構（第20図）

調査地は、大山崎町字下植野小字五条本地内にあり、調査面積は1,100㎡である。平成10年度に調査が実施されたＩＫ25－２・３次調査地の東側隣接地にあたる。調査地の標高は約12mである。標高8.5m前後の中世以降の淡灰色粘質土からは耕作に伴う畝跡や人・牛等の足跡を検出している。いずれも洪水性の砂礫により埋まっており、これより上層は洪水を受ける度に耕作に伴う整地が繰り返された痕跡が認められる。検出した遺構は標高7.8～8.5mであり、整地層である黒褐色礫混じり粘質土およびその下層である褐色粘質土・黄褐色粘質土に認められたものである。

竪穴式住居跡ＳＨ05　トレンチ北端のＳＤ01上の整地層上より検出した。規模は約５×4.8m、

検出面から床面までの深さ約0.15mを測る。主柱穴は4か所。住居壁体に沿って幅約0.12m、深さ約0.1mの周壁溝がめぐる。床面から出土した土器片から古墳時代前期の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡ＳＨ06　トレンチ南側で検出した住居跡であるが、遺存状態が悪く、周壁溝のみ残存していた。周壁溝は幅約0.15m、深さ約0.12mを測る。周壁溝の規模は3.3×3.9mで、床面の標高は約7.8mを測る。柱穴は検出されなかった。東側周壁溝上より布留式甕(第19図14)が出土しており、古墳時代前期の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡ＳＨ09　トレンチ西端で検出した住居跡である。大半が調査地外となるが、調査終了直前に住居東側部分の調査を実施することができた。ＳＨ06と同様、周壁溝が部分的に残存するもので、規模は一辺約4.7mを測る。主柱穴は4か所と考えられる。東側の周壁溝際で土坑を検出した。周壁溝内より出土した土器片から古墳時代前期の住居跡と推定される。

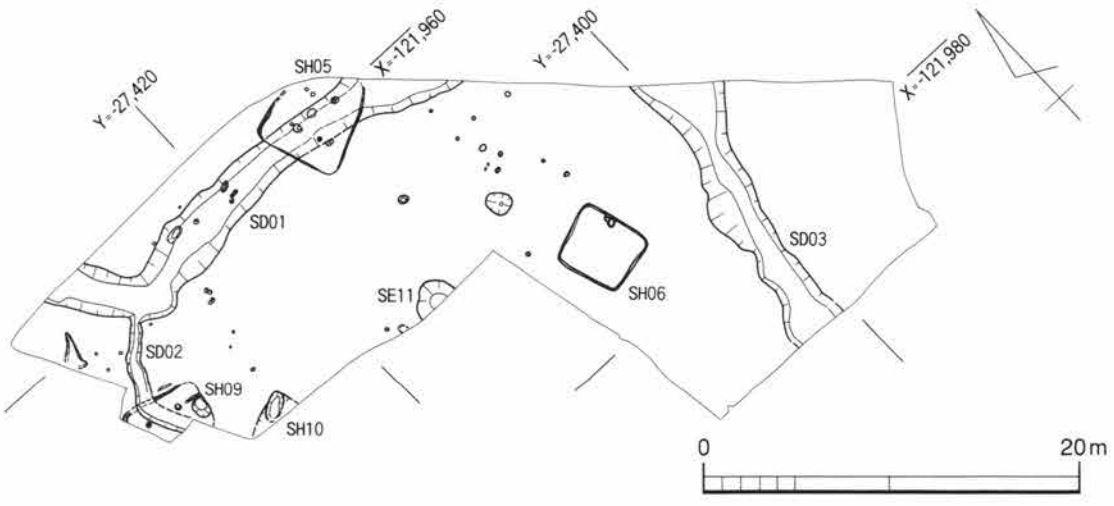
竪穴式住居跡ＳＨ10　トレンチ南西側で住居の北側角付近のみ検出した住居跡である。この北側角付近には土坑があり、土器が一括して出土した。古墳時代前期の住居跡と推定される。調査地外となるため規模は不明であるが、周壁溝は設けられていないものと思われる。

溝ＳＤ01　トレンチ北端で検出した北西方向から東に方向を転じる人工的に掘削された溝である。規模は幅約2.3～3.1m、深さ約0.3～0.5mを測る。埋土は、土石流により一気に埋まったような堆積状況を示す。このときに大量に堆積した土砂は、周辺に広く整地されており、この整地層上より遺構が検出された。遺物の出土は認められなかった。

溝ＳＤ02　トレンチ西端で検出した北東から南西方向に延びるＳＤ01に切られた溝である。規模は幅約0.52～0.75m、深さ約0.14～0.22mを測る。遺物は出土していない。

溝ＳＤ03　トレンチ東端を南北に蛇行する溝である。規模は幅約1.7～3.5m、幅約0.3～0.4mを測る。溝底面付近から出土した土器片から古墳時代前期の溝と推定される。遺構の検出状況からこの溝を境に集落域と生産域ないし湿地とを区画する溝であった可能性がある。東側には整地に伴う礫の堆積がほとんどないことから、居住域を中心に整地が行われたと考えられる。

井戸ＳＥ11　トレンチ南端で検出したもので、大半が調査地外に延びている。検出面より深さ



第20図　五条本地点遺構図

約0.85mのところで井戸枠として使用されていたと考えられる板材が出土した。調査終了時に断面観察を試みたが、湧水によりトレンチ壁面が崩壊した。規模などは不明である。整地層上より掘削されていることから、隣接するＩＫ25－３次調査の井戸同様、古墳時代前期と推定される。

（増田孝彦）

２．出 土 遺 物（第19図）

14はＳＨ06で出土した布留甕である。外面内面共に磨滅が著しく調整は不明。器壁は極めて薄い。布留式でも前半に属する甕である。

五条本地点では、２点の銭貨が出土した。ともに包含層資料である。18は開元通宝（初鋳年960）である。直径2.3cm、重さ2.2g。19は皇宋通宝（初鋳年1038）である。直径2.3cm、重さ2.5gである。

（藤井　整）

３．小 結

五条本地点では、過去に行われたＩＫ25－２次調査で確認された竪穴式住居跡の柱穴、ＩＫ25－３次調査の井戸など古墳時代前期の集落が存在する可能性が指摘されていたが、今回の調査によりこれを裏づけることができた。また、竪穴式住居跡ＳＨ06は標高８ｍ以下の低湿地に存在しており、山城盆地では最も標高の低い集落遺跡の一つであることが明らかとなった。溝ＳＤ03は更に南に延びており、これまで考えられていた下植野南遺跡の集落の範囲を考える上で重要な成果を得ることができた。

（増田孝彦）

3．国道１号京都南道路関係遺跡
平成13年度発掘調査概要

はじめに

国土交通省と日本道路公団は、久御山町地内で京都南道路・第二京阪自動車道の建設計画を進めた。道路計画地に佐山遺跡が含まれるため、同遺跡の範囲確認および周辺遺跡の存在を明らかにする目的で、当調査研究センターでは、平成９年度に２次にわたり試掘調査を実施した。この試掘調査の結果、佐山遺跡が当初考えられていたよりも広い範囲におよぶこと、また、佐山遺跡のほかに市田斉当坊遺跡と佐山尼垣外遺跡の２遺跡が存在することが新たに判明[注1]し、以後、今年度に至るまで上記３遺跡の本調査を計画的に実施してきている。

今回の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受け当調査研究センターが実施した。調査の対象となったのは、市田斉当坊遺跡と佐山遺跡の２遺跡である。現地調査は、市田斉当坊遺跡は調査第２課調査第３係長辻本和美、同調査員野島永・高野陽子が、佐山遺跡は調査第３係長辻本和美、同主任調査員竹原一彦、調査第２係主査調査員岡崎研一、調査第３係主査調査員伊賀高弘、同調査員高野陽子、調査第２係調査員松尾史子がそれぞれ担当して実施した。なお、調査に係る経費は、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

市田斉当坊遺跡は、京都府久世郡久御山町大字市田小字斉当坊・新珠城地内に、佐山遺跡は、同町大字佐古小字外屋敷・大字佐山小字新開地に所在する遺跡である。

調査期間は、市田斉当坊遺跡が平成13年４月17日から６月29日まで、佐山遺跡が同年４月17日から８月30日までを要した。調査面積は、市田斉当坊遺跡が約1,100㎡、佐山遺跡が約4,600㎡である。調査にあたっては、京都府教育委員会・久御山町教育委員会の指導・助言を得たほか、久御山町国道対策室、地元自治会の協力を得た。また、現地調査および出土遺物の整理作業には多くの方々の参加とご協力を得た。ここに記して感謝の意に替えたい[注2]。

本調査概要は、竹原一彦、伊賀高弘、森島康雄、野島永、高野陽子、京都大学大学院生松野元宏が分担して執筆し、竹原、高野が取りまとめた。

（竹原一彦）

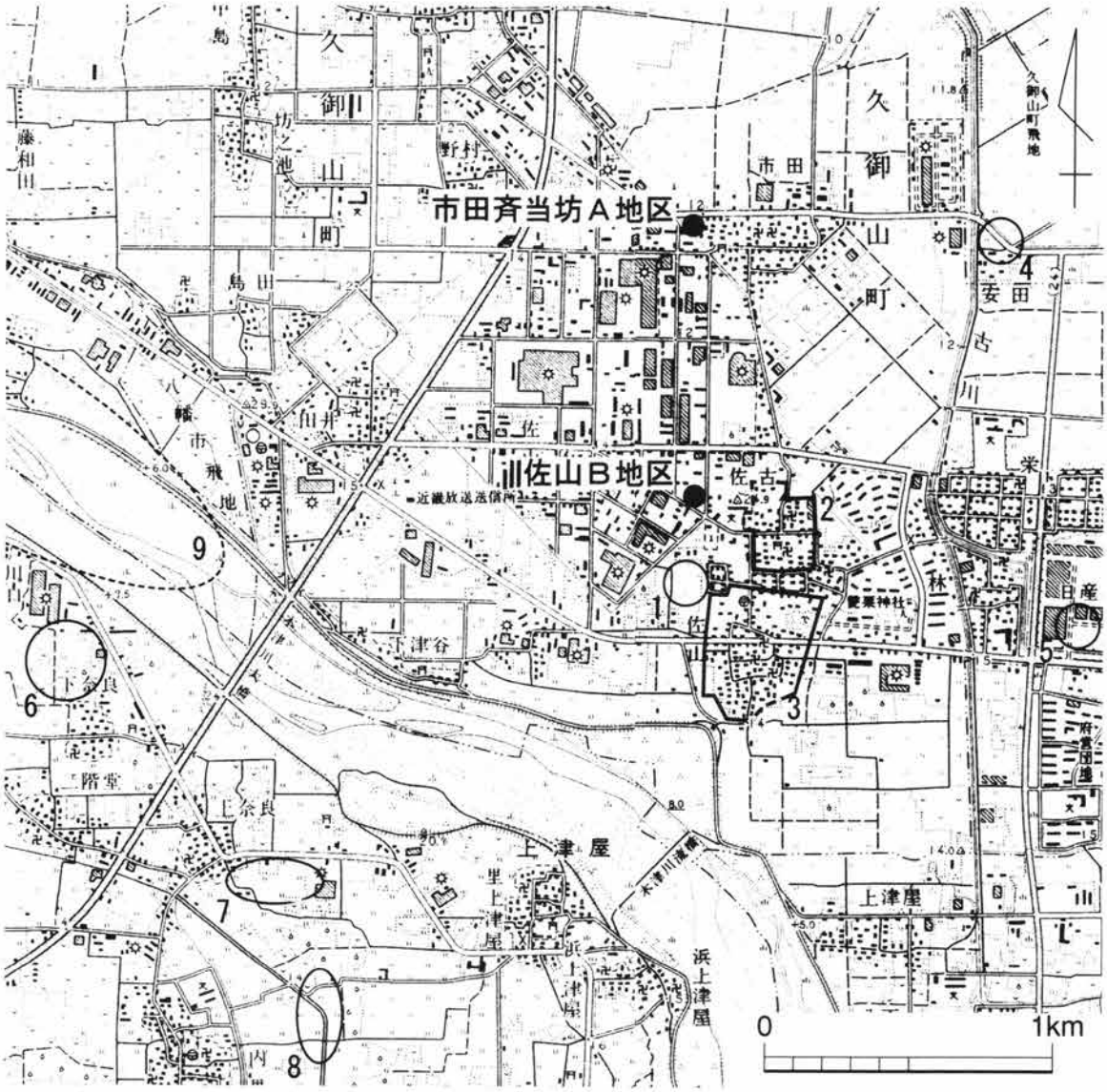
(1)市田斉当坊遺跡

１．調査経過

平成12年度は、平成10年度の調査で未掘部分であったＡ地区（面積1,100㎡）の中世遺構の検出

を行った。平成12年度の調査については、調査期間の関係でおもに鎌倉時代から室町時代の素掘り溝の検出と実測調査を行った。平成13年度の調査は、平成12年度のＡ地区の継続調査を行い、素掘り溝および弥生時代の竪穴式住居跡、方形周溝墓の周溝の検出・掘削に努めた。

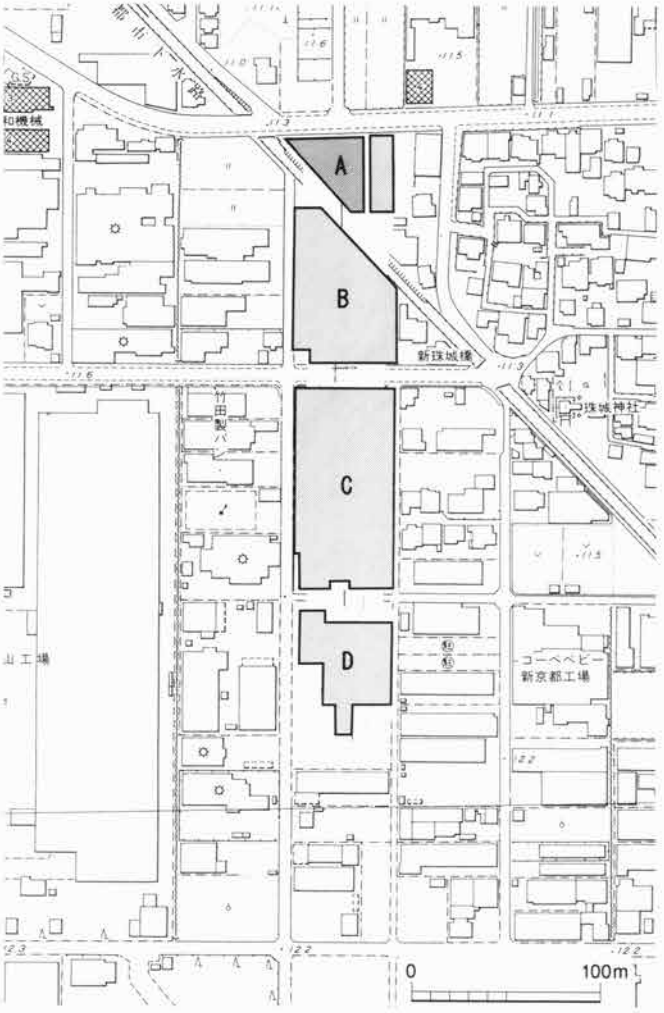
Ａ地区の中央北側、東西方向の大型素掘り溝は、久世郡条里型地割の坪界に位置しており、当該調査区北西の、坪の東南隅を区画するように掘削されていたことが判明した。また、弥生時代中期の竪穴式住居跡を検出したＢ地区の北側にあるため、竪穴式住居跡の検出を予想したが、調査区全域に連接する方形周溝墓９基を検出した。このほか方形周溝墓築造以前の竪穴式住居跡も検出されたが、いずれも周溝の掘削に伴い一部を破壊されており、遺存状況は悪かった。出土遺物としては、多量の弥生土器のほか、玉作り素材として利用された碧玉原石や管玉未成品、管玉を加工・穿孔する際に使用した石鋸や砥石・石針など玉作りに関連した遺物が出土した。このほか銅剣形石剣や磨製石剣の刃部破片を再利用した扁平片刃石斧などの出土も注目される。弥生時



第21図　市田斉当坊遺跡（Ａ地区）と佐山遺跡（Ｂ地区）（国土地理院１/25,000宇治・淀）

１．佐山尼垣外遺跡　２．佐古環濠集落　３．佐山環濠集落　４．安田環濠集落　５．林寺跡
６．下奈良遺跡　７．上奈良遺跡　８．内里八丁遺跡　９．木津川河床遺跡

代中期前半には、碧玉を素材とした玉作りを行う集落が存在しただけでなく、中期でも比較的早い段階にすでに方形周溝墓が造営され始め、中期後葉に至り、一部の周溝が再掘削されていたことが判明した。市田斉当坊遺跡はＡ地区およびＣ地区の南半以南は、集落形成後まもなく居住域から墓域とされた場所であったことが判明した。



第22図　調査区配置図（1/4,000）

2．検　出　遺　構

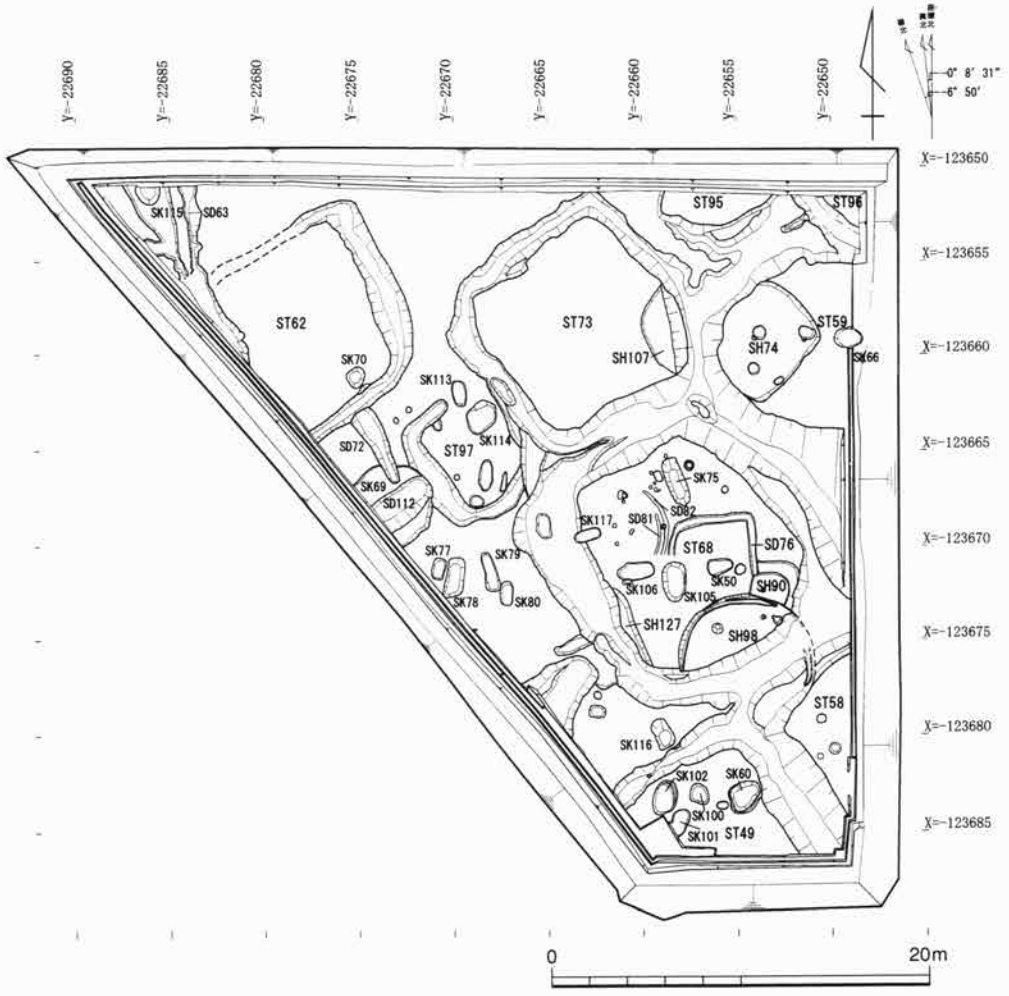
1）弥生時代（第23図・図版第17－(1)）

竪穴式住居跡ＳＨ74（第24図・図版第18－(1)・(2)・19－(1)）　調査区北東、方形周溝墓ＳＴ59の墳丘部分で検出した。南北5.6m、東西4.5mを測る隅丸方形の竪穴式住居跡である。遺構検出面下20cmほどで多量の炭化物や焼土を検出した。床面に周壁溝は検出できず、屋材を支える柱掘形も明瞭ではなかった。しかし、北東側では４本の炭化木材が竪穴住居壁面に直交するように並んで出土した。上屋を支える柱材であれば、外壁を持つ竪穴式住居であった可能性がある。埋土から土器や石器のほかに、碧玉製管玉の未成品（第34図１～７）や碧玉製石針の未成品(8)・安山岩製石針未成品(9)や成品(10)なども出土しており、玉作りを行ったと考えられる。住居南西側を中心に床面から数cmほど浮いた状態で土器（第30図46・47）が出土した。中期前葉から中葉への過渡的様相を示す。

竪穴式住居跡ＳＨ90　調査区中央東側、後述する竪穴式住居跡ＳＨ98の北側で検出した小型隅丸方形の竪穴遺構である。南北１m、東西1.5mほどが遺存していたが、南側は竪穴式住居跡ＳＨ98によって破壊されていた。土器細片のほかに床面から炭化木材が出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ98（第24図・図版第19－(2)）　調査区中央東側、方形周溝墓ＳＴ68の墳丘南側部分で検出した。ＳＴ68の周溝によって破壊されているが、遺存部分から、直径９m以上の大型円形竪穴式住居跡になる。埋土から小型の扁平片刃石斧（第32図10）、碧玉破片や管玉を穿孔する際に使用する安山岩製石針が出土した。管玉製作のための場所と考えられる。おそらく竪穴式住居跡ＳＨ74と同時期と考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ107　調査区北東、方形周溝墓ＳＴ73墳丘東端で一部が検出された隅丸方形



第23図　A地区弥生時代遺構平面図(1/400)

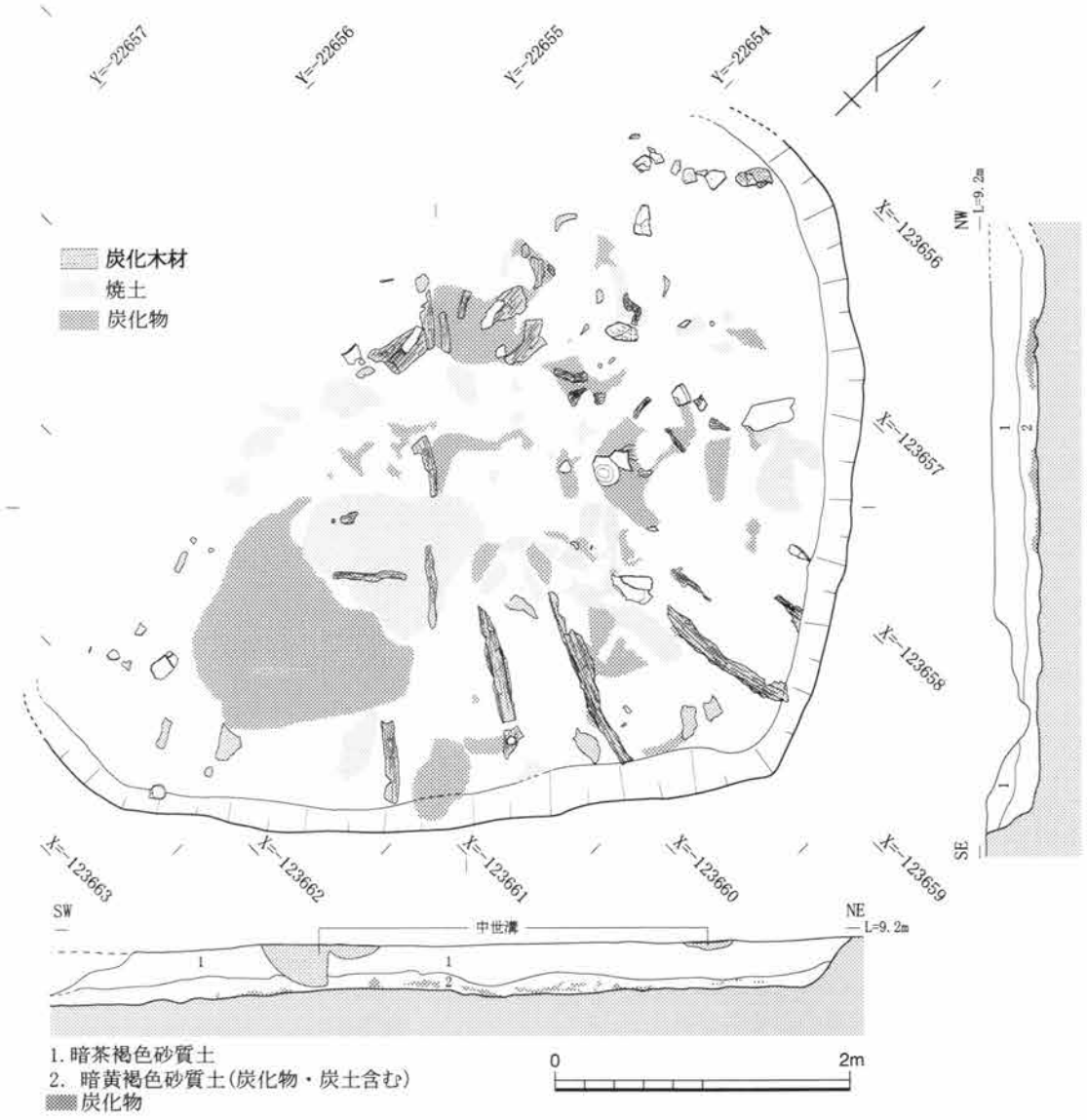
かあるいは円形の竪穴式住居跡である。床面から土器片や太型蛤刃石斧・石鋸が出土した。床面のレベルは竪穴式住居跡ＳＨ74のそれより10cm程低くなるが、炭化木材や焼土が遺存しており、ＳＨ74と同一の遺構である可能性もある。

土坑ＳＫ50(図版第20－(1))　方形周溝墓ＳＴ68墳丘部で検出した水滴形に近い不整形の土坑である。長軸1.4m、最大幅0.92m、検出面からの深さ25cm前後。下層には炭化物層・焼土層・灰層が堆積し、床面近くに土器片が出土した。

土坑ＳＫ60　方形周溝墓ＳＴ49墳丘部で検出した水滴形の平面形をもつ土坑である。長径3.4m、短径最大2.7m、検出面からの深さ40cm前後。土器(第29図1～3)が埋土上層から出土した。

土坑ＳＫ66　調査区の北東側で検出した。掘形東端部分は攪乱のため確認し得なかったが、南北1.04m、東西約1.4mの長方形の土坑である。北側部分が掘形下半部分が外側に抉り込まれており、フラスコ形貯蔵穴に類した掘形を持っている。検出面からの深さ44cmを測る。埋土は概ね砂質土壌の堆積で、人為的に埋められたと思われる。炭化物粒を多く含む埋土中層から弥生土器片・碧玉破片などが出土した。竪穴式住居跡ＳＨ74に付随する貯蔵穴と考えられる。

土坑ＳＫ69(第25図・図版第20－(2))　直径4.4mの円形に近い土坑である。検出面からの深さ



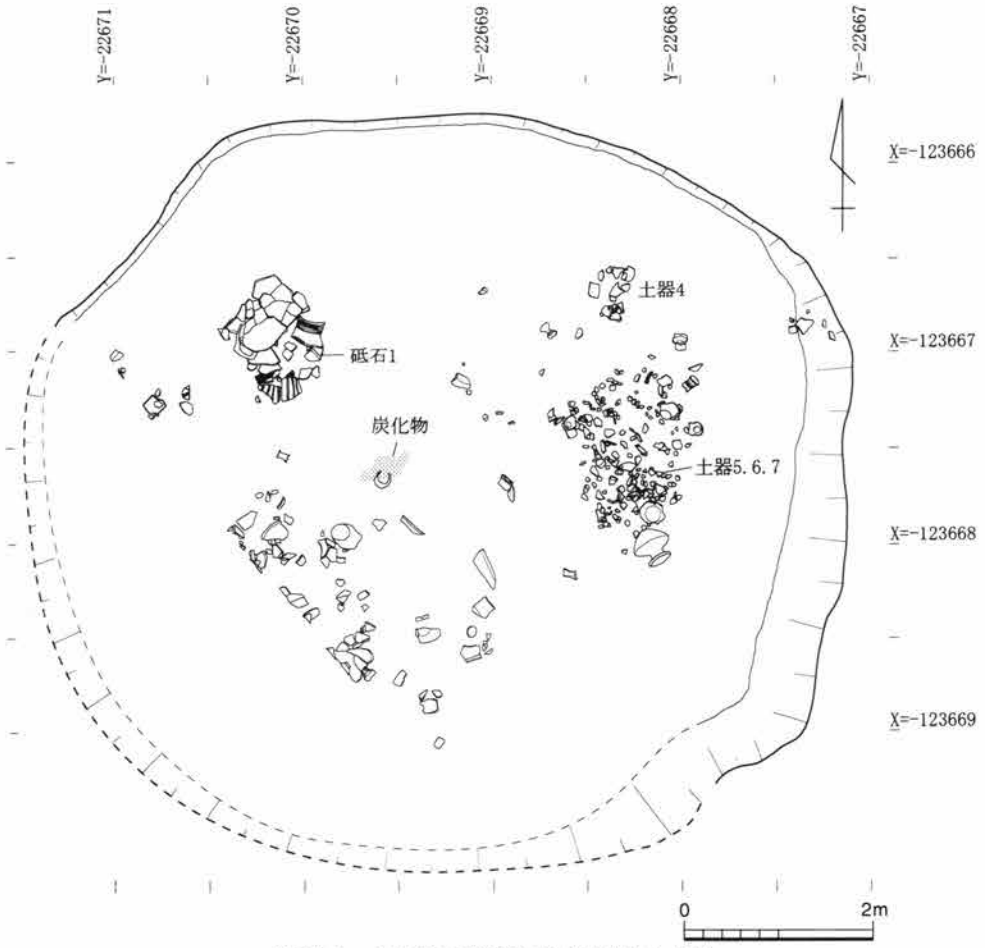
第24図　竪穴式住居跡ＳＨ74(１/50)

32cmを測る。埋土から土器(第29図４～12)や石器(第32図５～７)・玉砥石(第33図１)が出土した。弥生時代中期後葉に下る廃棄と考える。埋土土壌を洗浄したところ、安山岩製錐１点、微細な碧玉破片・紅簾片岩破片・安山岩破片・骨片などを検出した。

土坑ＳＫ75(図版第21－(1)・(2))　全長南北2.5m、幅東西9.5m、深さ53cm前後を測る。土坑の底が丸く舟底状の大型土坑である。木棺の痕跡はみつからず、横断面「U」字形の有機質を多く含むシルト質の土壌の層状堆積がみられ、人為的に埋められたというよりもいく度かの浸水の後に埋没した状況が想定できる。埋土から土器細片や玉砥石(第33図３)などがみつかり、底面付近では骨細片が出土した。木蓋で覆った簡単な墓壙の可能性がある。

土坑ＳＫ77(図版第22－(1))　調査区中央西端の一群で、隅丸長方形の土坑である。長辺1.13m、短辺0.7m、検出面からの深さ84cm前後を測る。上層から比較的大きな破片の土器が出土した。

土坑ＳＫ78(図版第22－(1))　調査区中央西端の一群で、大型隅丸長方形の土坑である。長辺2.17m、短辺0.95m、検出面からの深さ75cm前後を測る。土坑の最下層南西側から土器(第30図



第25図　土坑ＳＫ69遺物出土状況(１/80)

13・14)が出土した。この土器片が廃棄された後に炭化物粒を多量に含む有機質土層が堆積する。

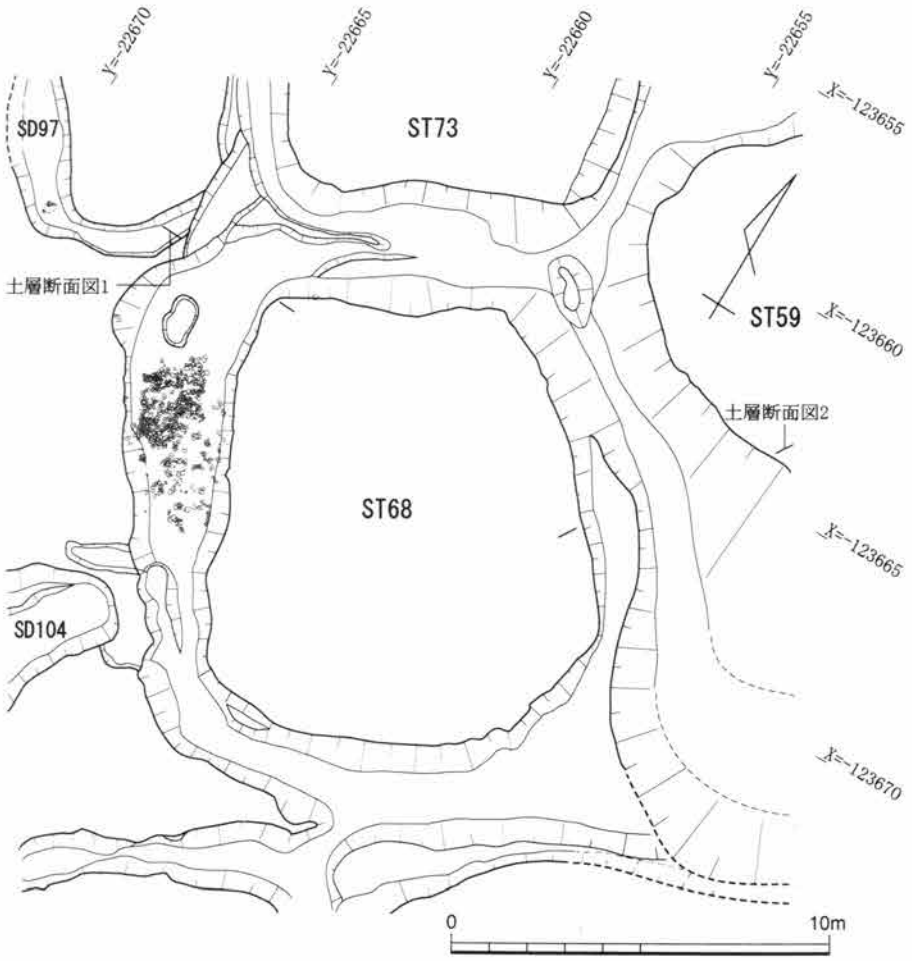
土坑ＳＫ79(図版第22－(2))　調査区中央西端の一群で、土器(第29図15・16)が出土した。調査区中央西端の一群で、隅丸長方形の深い土坑である。長辺2.18m、短辺最大7.4m、検出面からの深さ66cmを測る。埋土上層から土器細片が出土した。埋土土壌を洗浄したところ、安山岩製石針のほか、微細な碧玉破片・安山岩破片・骨片などを検出した。

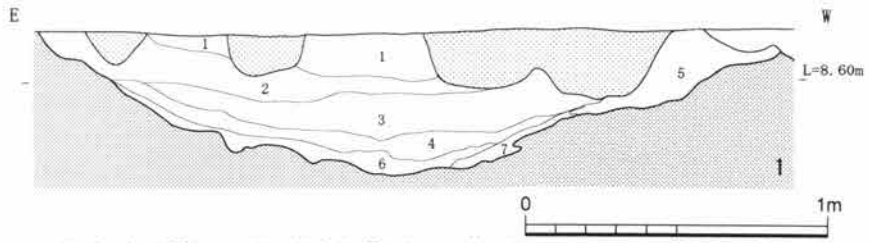
土坑ＳＫ80　調査区中央西端の一群で、小判形の小土坑である。長径1.3m、短径0.68m、検出面からの深さ約50cm。掘削時には土器など比較的大きな遺物は出土しないが、埋土土壌を洗浄したところ、安山岩製錐１点のほか、微細な碧玉破片・安山岩破片・骨片などを検出した。

土坑ＳＫ100　方形周溝墓ＳＴ49墳丘部で検出した楕円形土坑である。長径1.15m、短径0.9m、検出面からの深さは20cmあまりの浅いものである。土器が数点出土した。

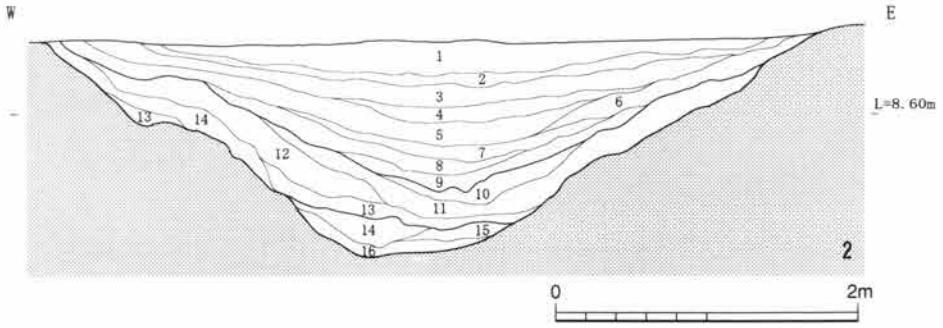
土坑ＳＫ101　方形周溝墓ＳＴ49墳丘部で検出した楕円形土坑である。南側の一端を排水溝掘削のために破壊した。長径推定1.55m、短径0.9m、検出面からの深さは20cm内外の浅いものである。埋土から遺物はほとんど出土しなかった。

土坑ＳＫ102　方形周溝墓ＳＴ49墳丘部で検出した楕円形土坑である。長径推定1.9m、短径1.24m、検出面からの深さ30cm前後となる。土器(第30図17・18)が出土した。埋土土壌を洗浄し、





1. 黒灰褐色砂質土　2. 黒灰褐色粘質土(3㎜の炭化物混入)　3. 濁灰黄褐色粘質土
4. 暗灰橙褐色粘質土　5. 濁灰色粘質土　6. 暗灰橙褐色粘質土　7. 黒橙褐色シルト
=中世素掘り溝

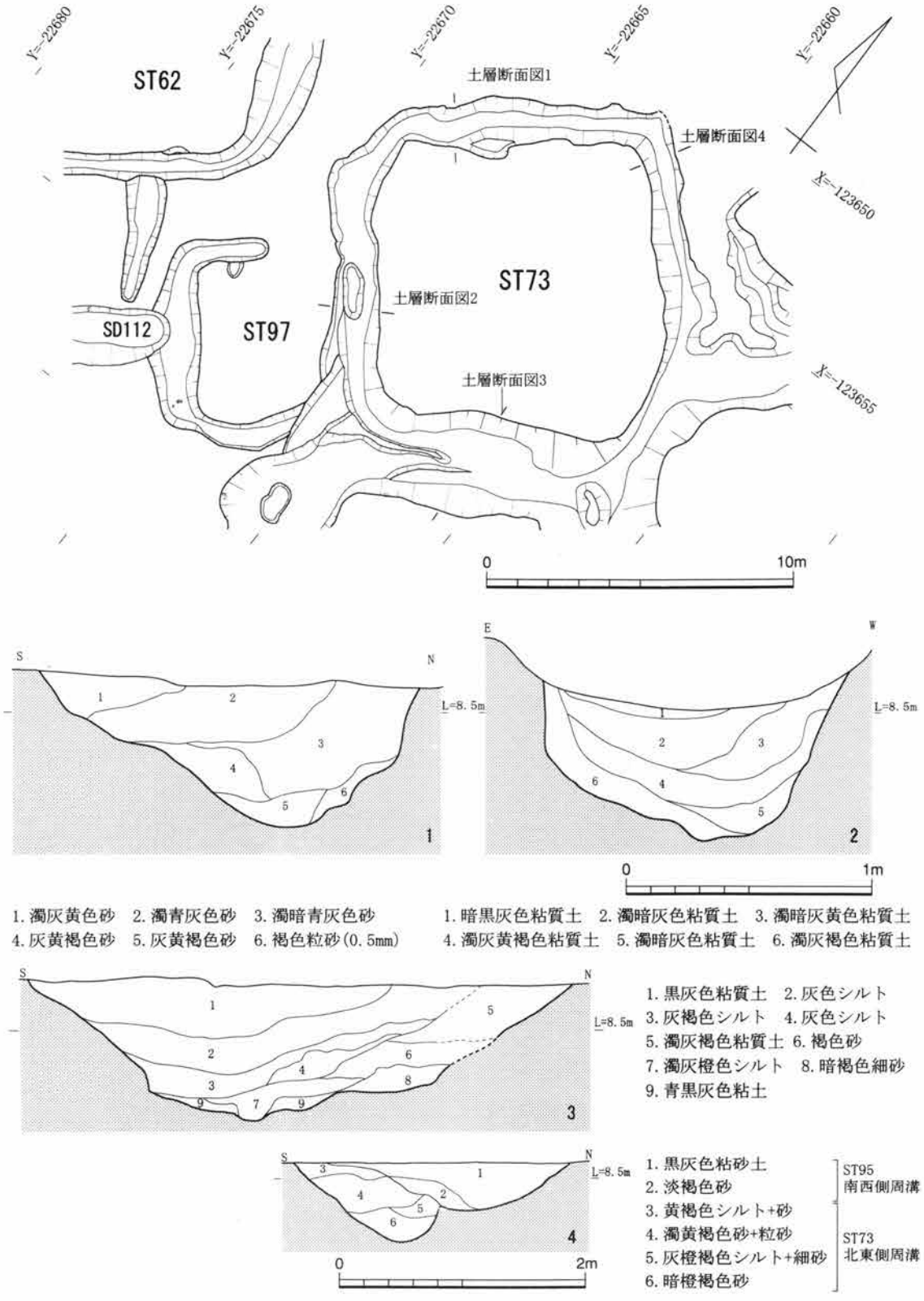


1. 灰褐色粘質土　2. 緑灰褐色シルト混粘質土　3. 暗灰褐色粘質土　4. 暗緑灰色シルト混粘質土
5. 緑灰色シルト混粘質土　6. 灰褐色粘質土　7. 黒褐色粘質土　8. 濁緑灰色シルト混粘質土　9. 暗灰色褐色粘質土
10. 灰褐色粘質土　11. 淡灰色褐色中粒砂　12. 淡灰褐色中粒砂(酸化鉄分含む)　13. 淡灰褐色中粒砂(酸化鉄粒含む)
14. 暗灰褐色粘質土　15. 暗灰褐色砂礫混粘質土　16. 淡灰褐色中粒砂+淡黄灰褐色粗砂

第26図　方形周溝墓ＳＴ68

安山岩製石鏃２点や安山岩製石針７点、微細な碧玉破片や安山岩破片を多量に検出した。

土坑ＳＫ105(図版第23－(1))　方形周溝墓ＳＴ105墳丘部で検出した楕円形土坑である。長径2.1m、短径1.25m、検出面からの深さは50cmを超える。埋土中層に炭層を持ち、多くの土器片



第27図　方形周溝墓ＳＴ73・97

が出土した。凹線文を持つ破片も多く、検出された土坑の中では最も新しいものといえる。方形周溝墓ＳＴ68に伴う墓壙の可能性もある。

土坑ＳＫ106(図版第23－(1)・(2))　方形周溝墓ＳＴ68墳丘部で検出した楕円形土坑である。一部東西方向の中世素掘り溝に破壊されるが、長径2.14m、短径1.1m、検出面からの深さ30cm前後。土器細片や石器剥片などが出土した。

土坑ＳＫ113((図版第24－(1))　Ａ地区中央西側で検出した南北方向に主軸をとる小判形の小土坑である。長軸1.34m、短軸0.76m、検出面からの深さ55cm前後。

土坑ＳＫ114(図版第24－(2))　方形周溝墓ＳＴ97墳丘部で検出した不整円形の土坑である。長径1.8m、短径1.4m、検出面からの深さ50cm。炭化物ブロックを含む下層から土器(第29図19)が出土した。

土坑ＳＫ115　調査区北西隅、溝ＳＤ63掘削後に検出した楕円形の深い土坑である。長径推定1.6m以上、短径1.32m、検出面からの深さ42cm。上層から多量の遺物が出土した。下層は他の土坑と同様に、炭化物粒を含む有機質粘質土が厚く堆積していた。

土坑ＳＫ116　調査区南端、隅丸方形の浅い土坑である。長辺1.55m、短辺0.95m、検出面からの深さ最大40cm前後。土器(第29図20)が出土した。下層には0.5～1.0cmの炭化物粒を含む有機質土層が堆積していた。

土坑ＳＫ117(図版第25－(1))　方形周溝墓ＳＴ68西側周溝を掘削した後に検出した長方形の土坑である。長辺1.1m、短辺0.62mを測る。周溝によってかなり削平されており、検出面からの深さ15cmに満たない。床面近くから土器(第29図21)が出土した。

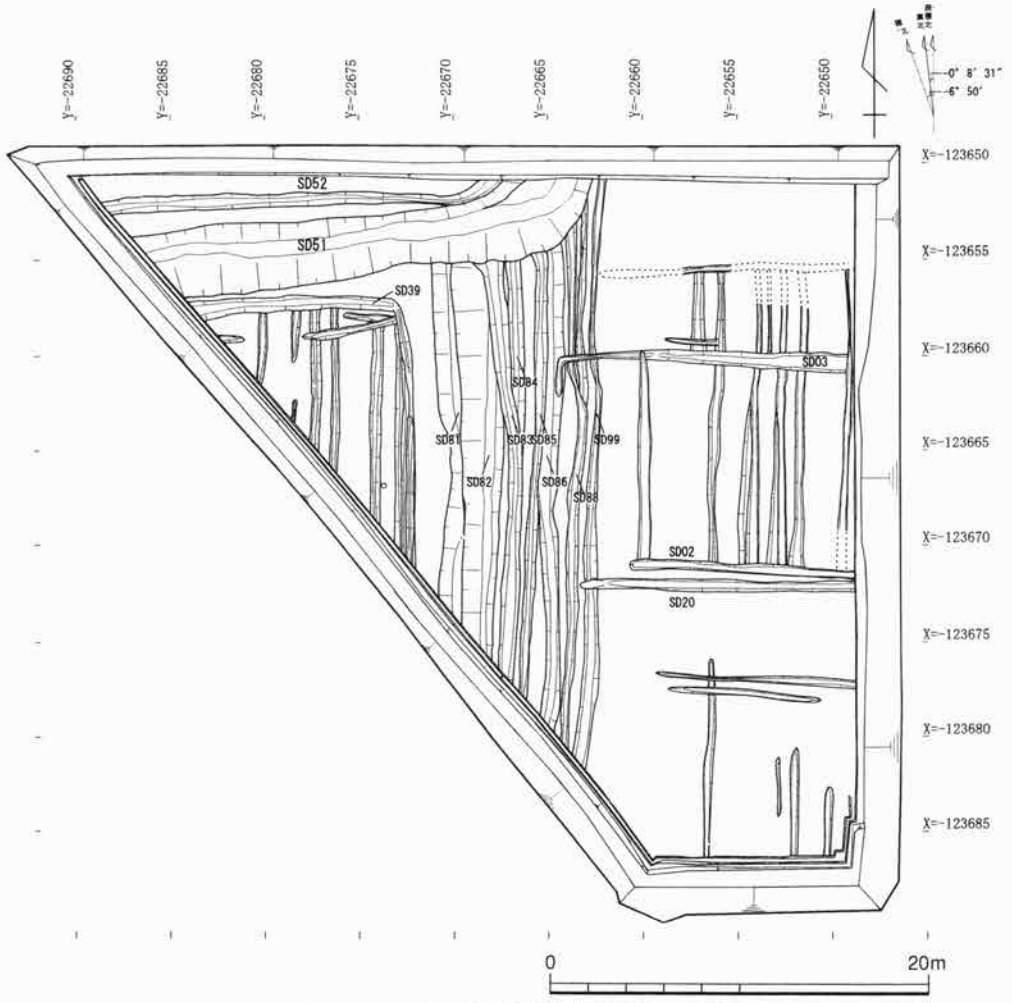
方形周溝墓ＳＴ68(第26図・図版第26－(1)・(2)・28－(1)・(2))　調査区中央東側、南北の周溝間15mを測る最も規模の大きいものである。墳丘部分は、周溝から高さ1.4mほど遺存していた。周溝南西辺には、多量の土器・石器が出土しており、その中には銅剣形石剣もみられた。周溝最下層の出土土器は中期後葉のものである。とくに周溝西側の周溝底面から、遺棄された夥しい数の土器や石器(第31図３)がみつかった。

方形周溝墓ＳＴ73(第27図・図版第28－(1))　方形周溝墓ＳＴ73は、調査区中央北側で検出した。方形周溝墓ＳＴ68に北接し、南北・東西とも周溝間ほぼ10mの正方形に近い平面形をもつ。中央を中世南北素掘り溝群によって破壊されているため、主体部を検出できなかったが、南西辺周溝から中期前葉の広口壺や石斧(第32図１)などが出土している。方形周溝墓ＳＴ73西側周溝が掘削された後に、方形周溝墓ＳＴ97(第27図・図版第28－(2))が西側に敷設されるように掘削される。

このほか、方形周溝墓ＳＴ49や方形周溝墓ＳＴ58・62など調査区の周囲に広がる周溝を確認した。北東から南西方向にかけて帯状に連接しながら広がるものと推測される。方形周溝墓ＳＴ62の北西、溝ＳＤ63からも多くの遺物(第30図22～45・第32図８・９)が出土した。

２)条里型地割による素掘り溝(第28図)

東西方向大型素掘り溝群



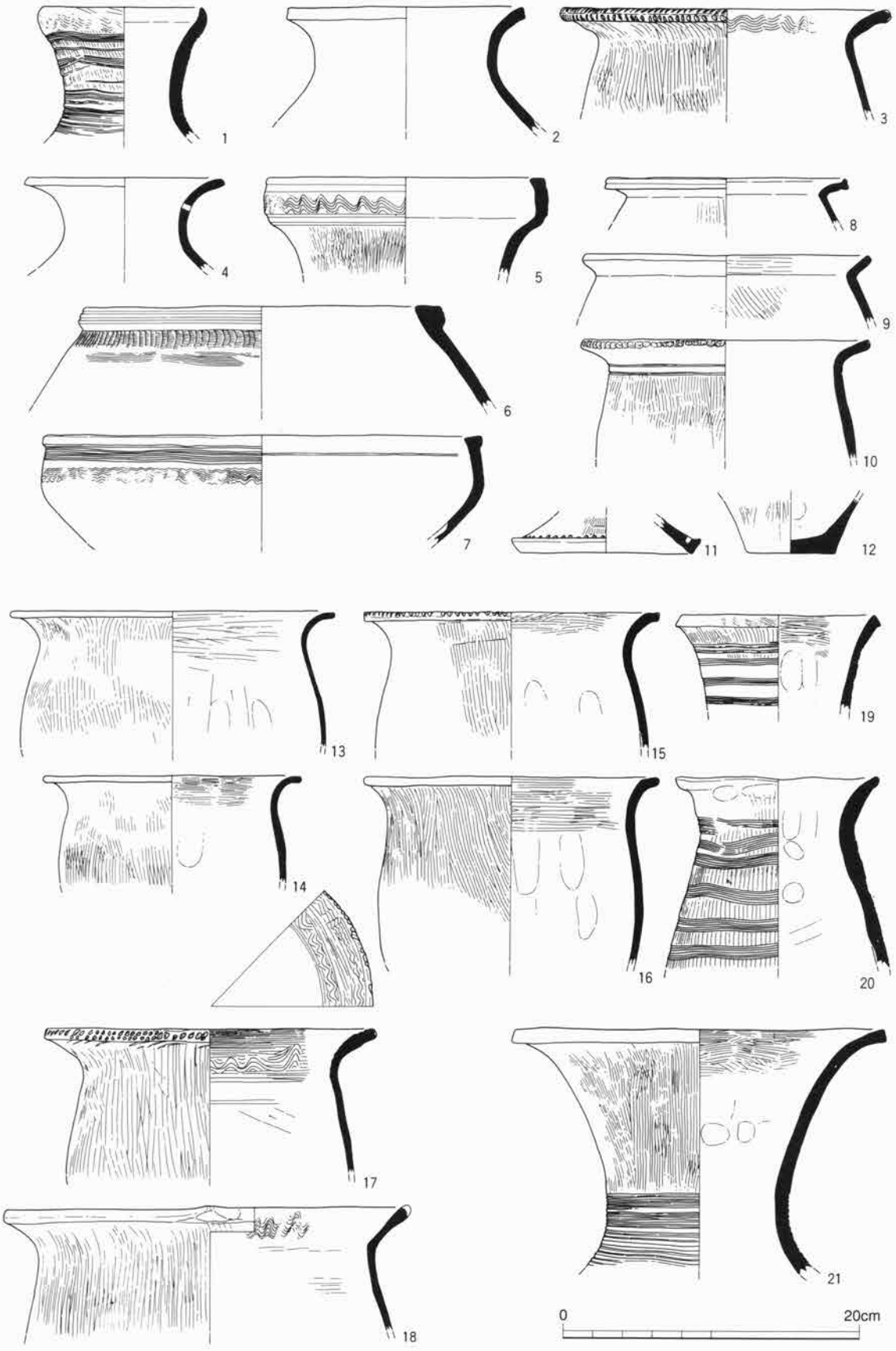
第28図　A地区中世遺構平面図(1/400)

SD51・52は、A地区北端で検出した九坪と十六坪を画する東西方向の大型の素掘りの坪境溝である。素掘り溝SD51は、検出面で、幅3.0～3.6m、同様に底面で幅70cmほどをさらに掘り込む二段の掘形をもつ。溝底心はやや蛇行しながら九坪と十坪の坪境付近で北側に屈折して掘削される。瓦器椀・青磁などの細片とともに室町時代の空輪が出土した。素掘り溝SD52は、検出面における幅が約1.5m、椀状に掘り込まれており、底面近くでさらにもう一度幅60cmほど掘り込む二段の掘形をもつ。東で北側に2°ほど振れており、SD51同様、九坪と十坪の坪境付近で北側に屈折して掘削される。

南北方向素掘り溝群

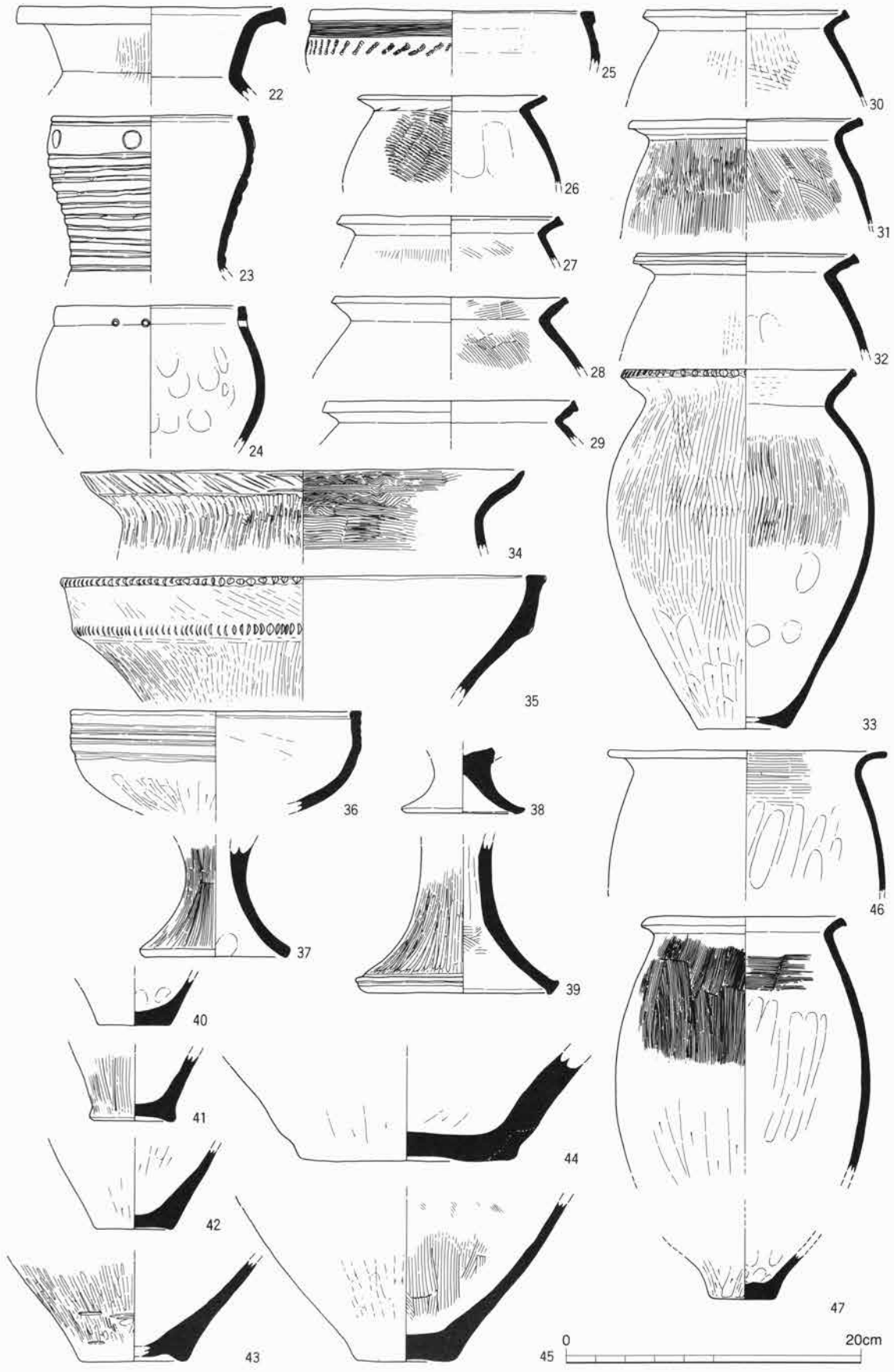
SD81～86・88・89は、A地区中央で検出した九坪と十坪を画する南北方向の坪境溝群である。東西の掘削範囲は、幅約8.3mの範囲にわたって繰り返し掘削されたもので、北端は素掘り溝SD51に連接し、蛇行しつつ南に続くと考えられる。幅35～100cm、深さ25～35cmほどであった。X=-123,660.0で、素掘り溝SD81溝底心はY=-22,670.4、素掘り溝SD89は溝底心Y=-22,662.6となる。

(野島　永)



第29図　土器実測図(1)

1～3．土坑ＳＫ60　4～12．土坑ＳＫ69　13・14．土坑ＳＫ78　15・16．土坑ＳＫ79
17・18．土坑ＳＫ102　19．土坑ＳＫ114　20．土坑ＳＫ116　21．土坑ＳＫ117



第30図　土器実測図(2)
22～45．溝ＳＤ63　　46・47．竪穴式住居跡ＳＨ74

３．出　土　遺　物

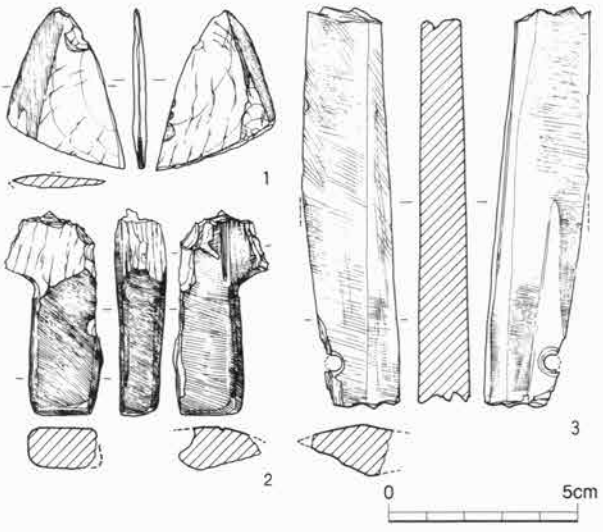
１）弥生土器（第29・30図）

今回の調査では土坑を中心として多量の土器を含む多数の遺構を検出した。ここでその一部を概略する。土坑ＳＫ60・78・79・102・114・116・117では、畿内第Ⅱ様式末～第Ⅲ様式初頭に位置づけられる多くの土器が出土している。主体的となる甕は、いわゆる大和型甕である。15は口縁上端に刻みを施すが、稀少である。多くは口縁端面に横方向のナデ調整をを行う（第29図13・14・16）。また口縁部の一部をつまみあげるものや（18）、口縁内面に刷毛状工具で波状文を施すもの（３・17）など近江系の甕の特徴を持つものも多くみられる。

第29図３・17・18はそれぞれ器表面が灰白色で器壁内面が黒色を呈する近江系の甕に特徴的な胎土を有している。壺では１・19に複合櫛描文がみとめられる。２は磨滅のため文様などは不明であるが、胎土が粗く灰白色～赤白色を呈しており、近江系の特徴を有している。土坑ＳＫ69から出土した土器には口縁部に凹線文を施すもの（５・６・８）など、第Ⅳ様式前半の特徴を有するものが多い。甕では瀬戸内系甕（8）・「く」の字状口縁甕（9）・大和型甕（10）といった数系統の甕がみられる。このうち９は口縁端面に刻みを施さず、横方向のナデ調整をしている。10は口縁外面と内面を横方向に強いナデ調整をする。12と同一個体であると考える。

土坑以外の遺構においても溝や住居跡から多数の土器が出土している。第30図22～45は、溝ＳＤ63出土。甕は瀬戸内系甕が主要な割合を占めるが、口縁端面に凹線文を施すものは少ない。33は「く」の字状口縁甕。底部にヘラ削りを行う。34の近江型甕は口縁端部を外方へ開く形態で、第Ⅲ様式後半の特徴を有するが、色調は橙褐色を呈し在地の胎土に近い。36の高杯は杯部に４条の凹線文がやや浅めに入る。37と同一個体か。40～45は底部。42・44は内面を削る。第Ⅲ様式後半～第Ⅳ様式に位置づけられる。46・47は竪穴式住居跡ＳＨ74出土。46は大和型甕。47は口縁端面にナデ調整を行う。外面は広葉樹の刷毛工具で縦方向の刷毛調整を施した後、下半を削る。

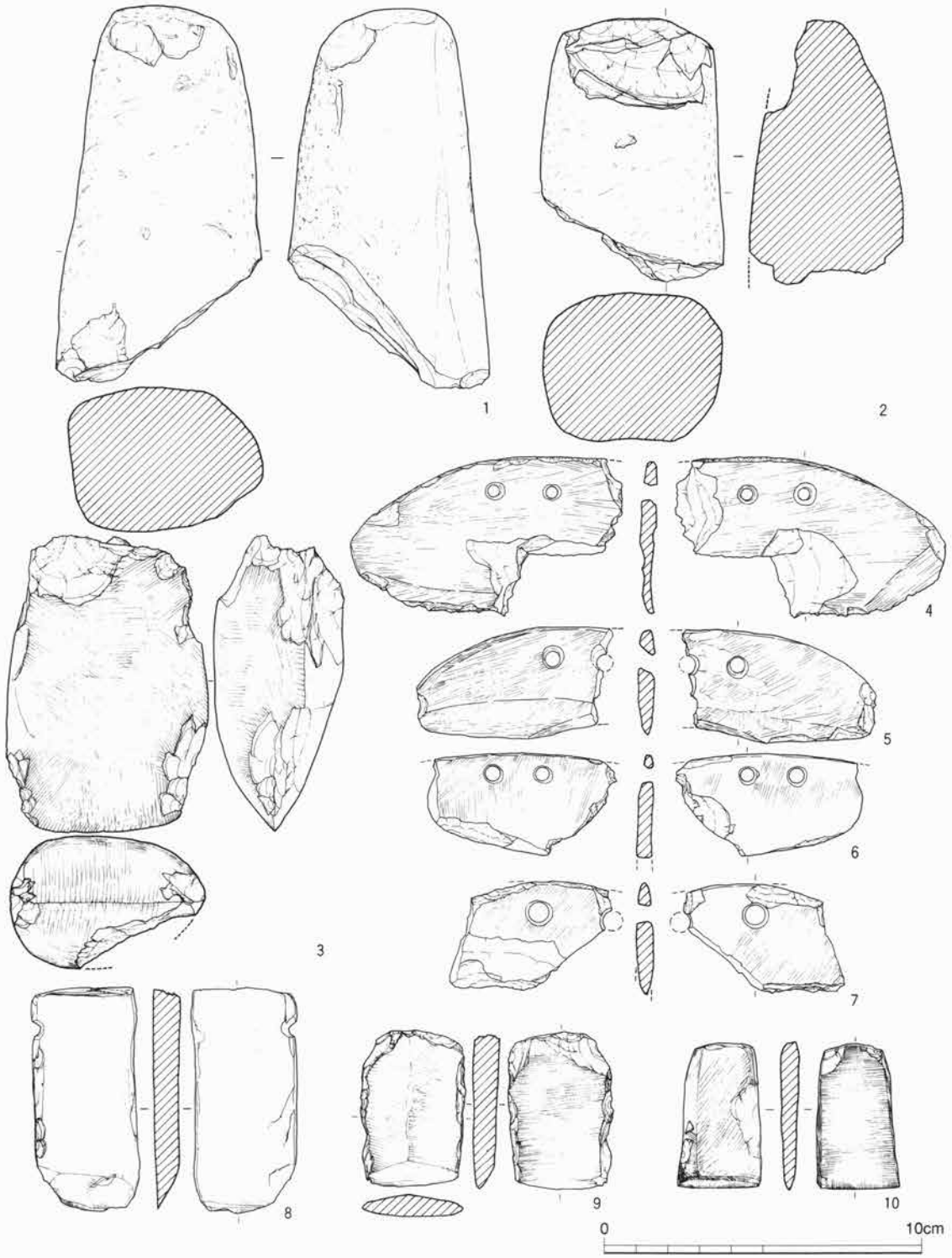
ここで特筆すべきは多数の土坑から多くの土器を検出したことであろう。これらの土坑から出土した土器は一括投棄されたと考えられる出土状況を示しており、同時期性が高いと思われる。まだ整理途中で図を提示できなかったが、実見する限り土坑の大半は第Ⅱ様式末～第Ⅲ様式初頭に位置づけることができる。図に示したとおり近江系の土器を多数含んでおり、この時期の近江地域との併行関係を考えるうえで興味深い資料を提供するであろう。



第31図　石器実測図（1）（1/2）
１・２．方形周溝墓ＳＴ49周溝
３．方形周溝墓ＳＴ68周溝

これに対し方形周溝墓ＳＴ58周溝や溝ＳＤ63などの土器は、凹線文を採用する器形

のものが主体となる。また方形周溝墓ＳＴ68では突帯の退化した有段口縁壺や口縁の内傾化した近江型甕など、明らかに第Ⅳ様式後半のものを含んでいる。これらの方形周溝墓はおもに第Ⅲ様式後半～第Ⅳ様式に造られたと考えるのが妥当であろう。この時期の遺構はほかに、土坑ＳＫ69



第32図　石器実測図(2)(1/2)

1．方形周溝墓ＳＴ73周溝　　2・3．包含層　　4．土坑ＳＫ115　　5～7．土坑ＳＫ69
8・9．溝状遺構ＳＤ63　　10．竪穴式住居跡ＳＨ98

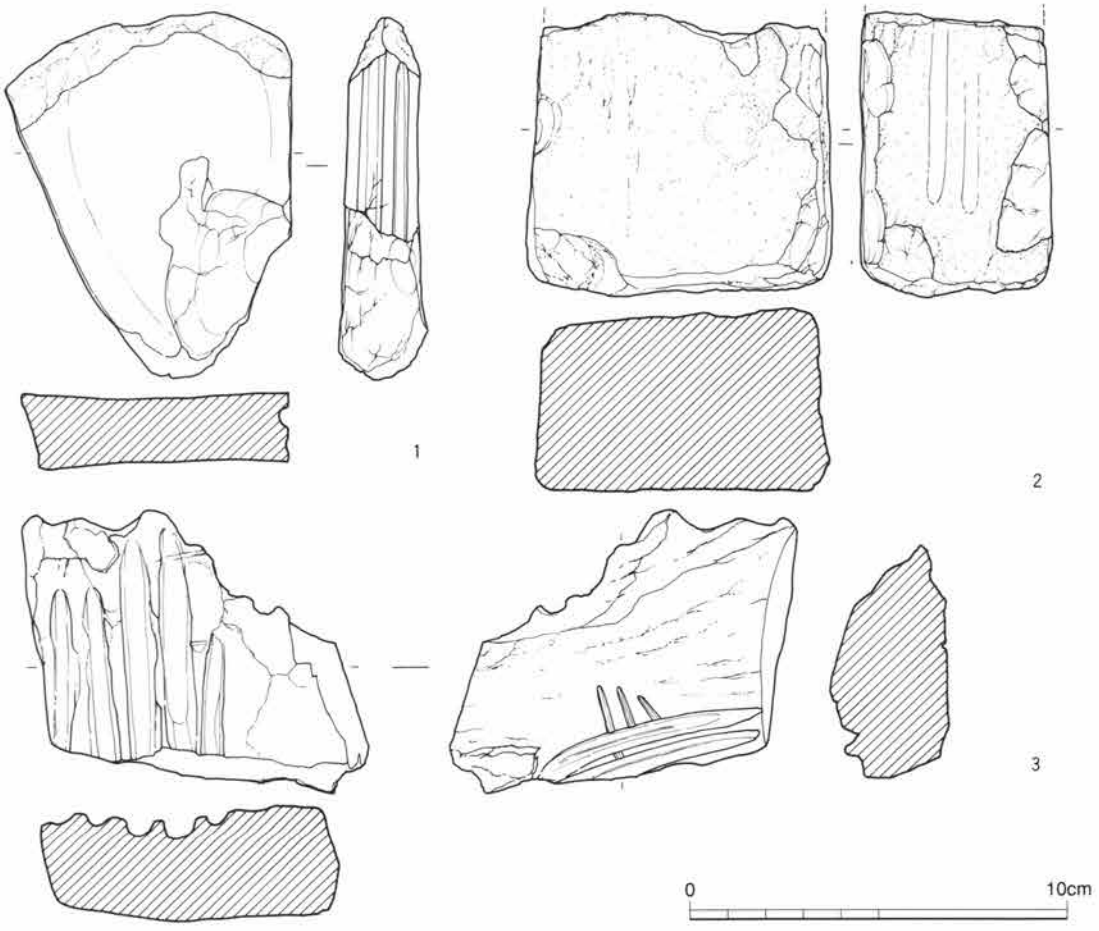
と土坑ＳＫ105がある。特に土坑ＳＫ105は方形周溝墓ＳＴ68に伴う遺構である可能性も捨て切れない。これらの資料がどれほどの一括性を保証しうるかは検討課題であるが、山城地域における凹線文採用の問題、あるいは第Ⅳ様式における型式変遷の問題を考える一つの材料となるであろう。

（松野元宏）

２）石器（第31・32図）

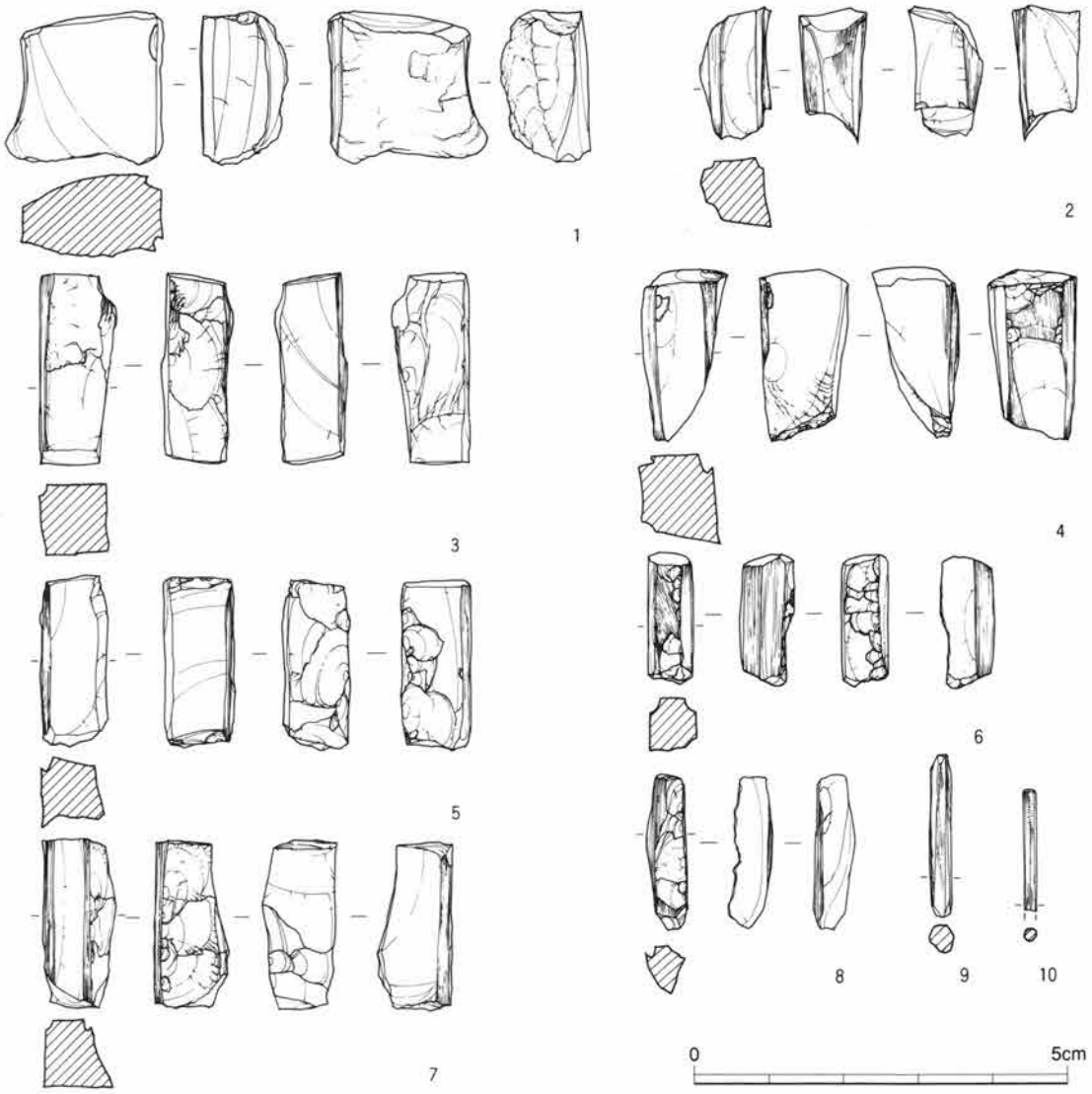
第31図１・２は方形周溝墓北東側周溝から出土した粘板岩製石剣である。１は鋒破片、２は茎部で、関から身に幅２㎜の施溝がみられる。３も関の双孔から鋒に向けて浅い施溝がみられ、銅剣形石剣の形制をみることができる。第32図には、太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁を載せた。太型蛤刃石斧はすべて、基部や刃部が折損している。石庖丁も多くは破損しており、大型品の一部には再利用されたものもみられる。８の扁平片刃石斧は基部に穿孔部があり、石庖丁を再利用したものと考える。９はその横断面が菱形になることから、磨製石剣の再利用とみられる。

３）玉関連遺物（第33・34図）　今回の調査でも、管玉製作のための筋砥石が多く出土している。第33図１は主面・背面ともにわずかに凹面をもち、側面に２条の平行する直線的な筋溝が残る。２は右側面にのみ浅い筋溝が認められる荒目の砂岩製砥石である。３は主面に５条の筋溝が施され、背面に石針研磨の３条の細い筋溝に交差するように２条の管玉研磨の筋溝が施される。第34



第33図　石器実測図(3)(1/2)

１．土坑ＳＫ69　　２．方形周溝墓ＳＴ49周溝　　３．土坑ＳＫ75



第34図　竪穴式住居跡ＳＨ74出土管玉未製品・石針未製品(1/1)

図の玉作り関連遺物は、すべて竪穴式住居跡ＳＨ74出土のものである。１～６は、擦切施溝痕を残す碧玉角柱体である。調整剥離が施されるものもある。８は碧玉石針未成品。擦切痕跡を残し、調整剥離が施される。９は安山岩製石針未成品、10は安山岩製石針で、先端が折損している。

４．ま　と　め

弥生時代中期前半には、碧玉を素材とした玉作りを行う集落が存在しただけでなく、中期でも比較的早い段階にすでに方形周溝墓が築造され始め、中期後葉に至るまで、その周溝が再掘削されていたことが判明した。多くの土坑は、埋土の下層に厚さ数cmの炭化物粒を多く含む黒色の有機質土層がみられる。竪穴式住居跡ＳＨ74が火災によって焼失したと考えられること、泥質の黒色有機土層に炭化木材の細片と考えられる炭化物粒が多量に含まれることから、土坑群掘削前後、かつ埋没以前に火災と浸水に見舞われたものとも考えられる。長楕円形あるいは隅丸長方形の土坑は、東西方向に並んで検出されており、中期前半の集落造営当初の遺構とみることができる。

弥生時代中期中葉に碧玉を素材とした玉作りを行う竪穴式住居が営まれたが、おそらく琵琶湖から宇治川を経て巨椋池にいたる水運を利用して北陸からもたらされた碧玉原石を加工したものと想定することができる。

高橋美久二氏の近年の久世郡条里の復原案によると、市田斉当坊遺跡Ａ地区は数詞呼称で七条十里九・十坪となる(注3)。九坪と十坪の坪境が調査地を東西に分けており、北側で十六・十五坪に接する。中世の大型溝群は、この坪境に位置しており、条里制の遺存地割に規制された遺構と考えることができる。とくに東西素掘り溝群ＳＤ51・52は、大型の溝であり、八条十里十六坪の南東隅を区画するように掘削されており、十六坪は、まわりの耕地とは別に環溝をめぐらす屋敷あるいは、孤立村落が存在していた可能性が指摘できる。今後予定される報告書で出土遺物の詳細を呈示したい。

（野島　永）

(2) 佐山（さやま）遺跡

１．調査経過

佐山遺跡は、山城盆地中央部、木津川右岸沖積地の微高地（埋没自然堤防）上にあり、京都府久世郡久御山町大字佐古小字古屋敷～大字佐山小字新開地にかけて所在する。遺跡周辺は、第二次大戦以前は肥沃な条里型地割の残る田園地帯であったが、戦前の京都飛行場、戦後の工業団地造成の盛土により、現在の地形は大きく改変されている。

佐山遺跡の調査は平成９年度の試掘調査の後、平成11年度から本格的な発掘調査を道路建設用地内で実施してきた。調査対象地は府道によって南北に分断されたことから、北部域をＡ地区、南部域をＢ地区と呼称した。

平成11～12年度にかけてはＡ地区の調査を実施し、弥生時代中期～古墳時代の竪穴式住居跡59基や溝、平安～鎌倉時代の条里型地割・島畠等を検出している。

Ｂ地区は平成12年度後半から調査を開始し、これまでに北側のＢ－１地区で平安時代から鎌倉時代遺構面の調査を実施し、鎌倉時代を中心とする大規模な環濠に囲まれた独立居館跡の一部を検出している。居館に伴う遺構として、屋敷地の東部域から２棟の建物跡が検出された。居館跡は１町四方と推定される。検出した居館東側の濠は、幅約12m、深さ約２ｍの規模を測り、当時期としては特に大規模な濠である。

今年度は、Ｂ－１地区下層の継続調査と、Ｂ－２地区で調査を実施した。Ｂ－２地区は、前年度に遺跡範囲確認のために実施した試掘調査の成果を受け、今年度調査対象地となったものである。現地調査は、Ｂ－１地区が平成13年４月17日～６月29日、Ｂ－２地区が平成13年４月17日～８月30日までの調査期間を要した。調査面積は、Ｂ－１地区が2,700㎡、Ｂ－２地区が1,900㎡である。

（竹原一彦）

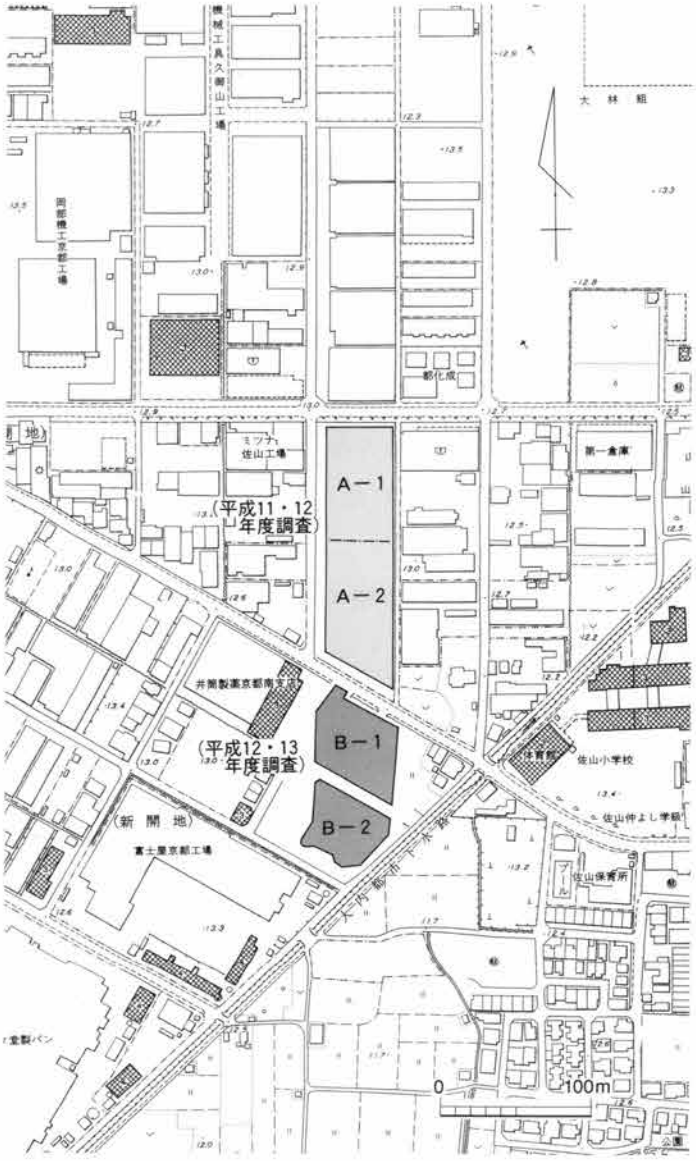
2．検　出　遺　構

1）B－1地区（第36・37図）

B－1地区では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居跡44基、奈良時代と推定される掘立柱建物跡1棟、奈良時代の土坑1基等を検出した。

竪穴式住居跡の多くは、弥生時代後期末葉～古墳時代中期にかけての住居跡であり、平面形は方形プランが大半を占める。方形住居の平面規模は、一辺4.0～5.0mに集中する傾向があり、これを標準に、最小2.5mから最大7.8mまでのバリエーションがある。主柱穴の配置は、4本の柱穴を同一円周上に等間隔で配す方式を基本とする。しかし、中には柱穴の配置が不規則で、4本柱の一部が欠落する住居も少なからずみられる。こうした住居の多くは、柱穴や周壁溝の掘形が浅く、周壁そのものの遺存度が低い場合が多い。また、造り付け竈を付設する住居跡は、3基を検出した。いずれも古墳時代中期後葉～末葉の住居跡と推定される。

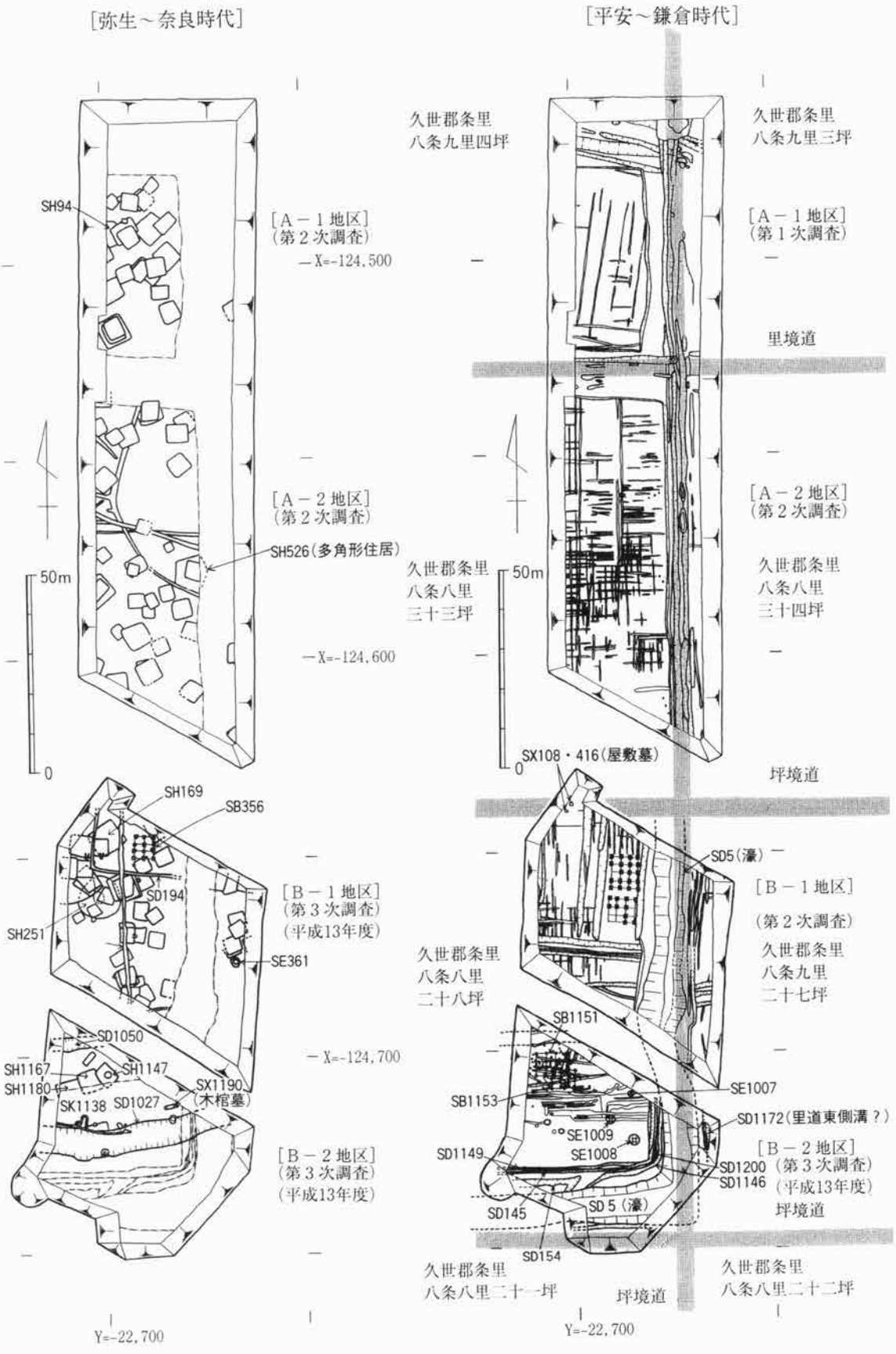
竪穴式住居跡の造営時期は、弥生時代後期中葉にはじまり、後期末葉から古墳時代初頭にピークをむかえる。古墳時代前期後半には、調査区内では井戸などが構築される程度に留まるが、中期後半には、再び竈を伴う方形の竪穴式住居跡が営まれ集落の再形成がみられる。



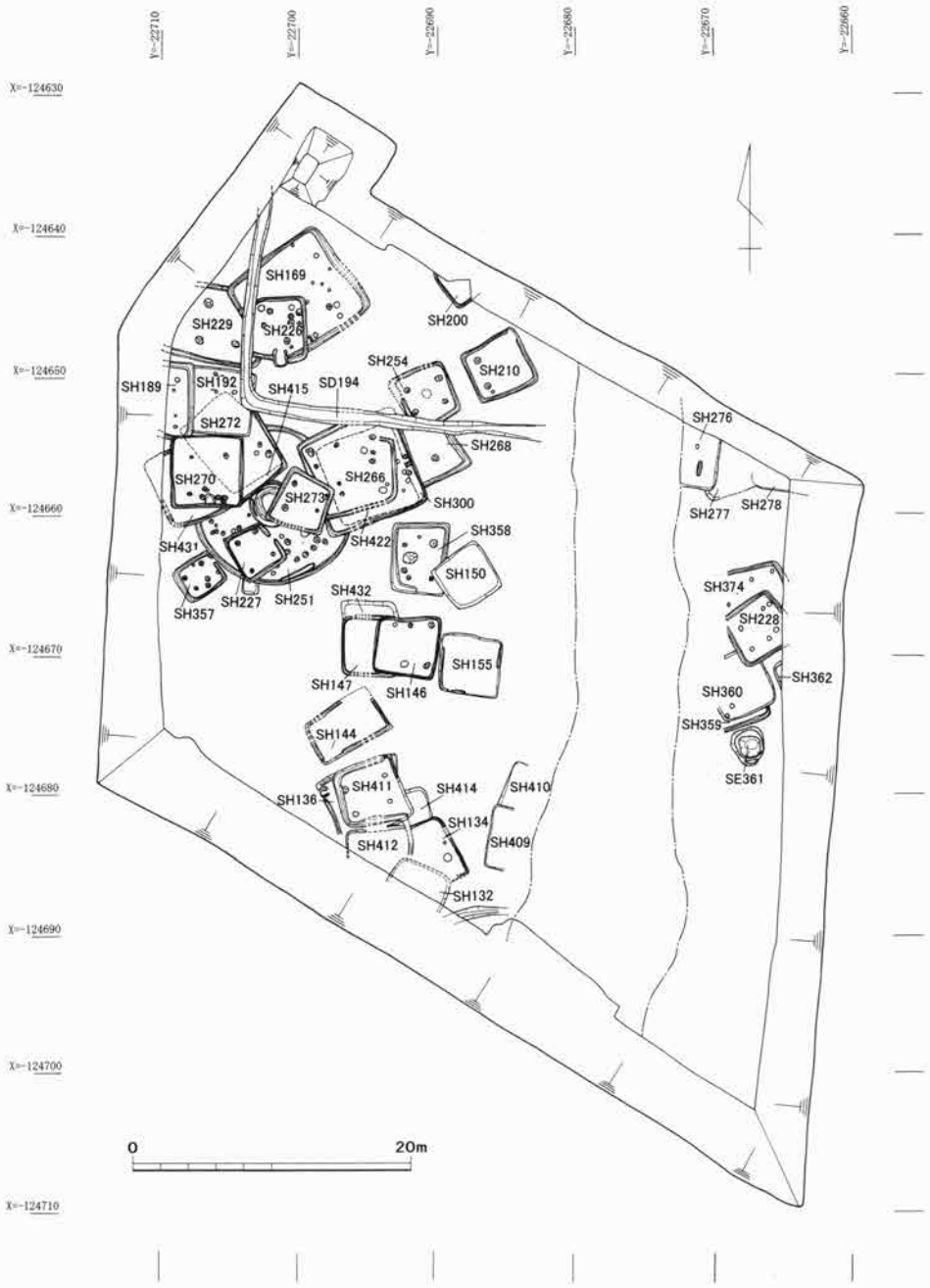
第35図　調査地位置図

竪穴式住居跡ＳＨ251　調査区西部で検出した円形住居跡である。調査区で最大規模の住居であり、直径約11.4mを測る。床面中央で土坑を検出したが、この土坑は周囲に地山を削り残して造り出した土堤を円形（直径3.4m）にめぐらせ、その内側に径1.0m、深さ0.25mの土坑を穿つ特殊な遺構である。周堤の内側には炭が薄く全面に堆積しており、炉跡と考えられる。時期は、出土土器から弥生時代後期中葉と推定される。

竪穴式住居跡ＳＨ226　調査区北東で検出した方形住居跡である。規模は一辺約4.8mを測る。造り付け竈は、住居の南辺周壁の中央で検出した。住居床面から土師器甕や製塩土器が滑石製勾玉形石製模造品などとも


[弥生～奈良時代]
[平安～鎌倉時代]
SH94
[A－1地区]
(第2次調査)
X=-124,500
[A－2地区]
(第2次調査)
SH526(多角形住居)
50m
0
X=-124,600
SH169
SB356
SD194
SH251
[B－1地区]
(第3次調査)
(平成13年度)
SE361
SD1050
SH1167
SH1147
SH1180
SX1190
(木棺墓)
SK1138
SD1027
X=-124,700
[B－2地区]
(第3次調査)
(平成13年度)
Y=-22,700
久世郡条里
八条九里四坪
久世郡条里
八条九里三坪
[A－1地区]
(第1次調査)
里境道
[A－2地区]
(第2次調査)
久世郡条里
八条八里
三十三坪
久世郡条里
八条八里
三十四坪
50m
0
SX108・416(屋敷墓)
坪境道
SD5(濠)
[B－1地区]
(第2次調査)
久世郡条里
八条八里
二十八坪
久世郡条里
八条九里
二十七坪
SB1151
SE1007
SB1153
SD1172(里道東側溝？)
SE1009
SE1008
SD1149
SD1200
SD1146
[B－2地区]
(第3次調査)
(平成13年度)
SD145
SD5(濠)
坪境道
SD154
久世郡条里
八条八里二十一坪
坪境道
久世郡条里
八条八里二十二坪
Y=-22,700

第36図　遺構配置図

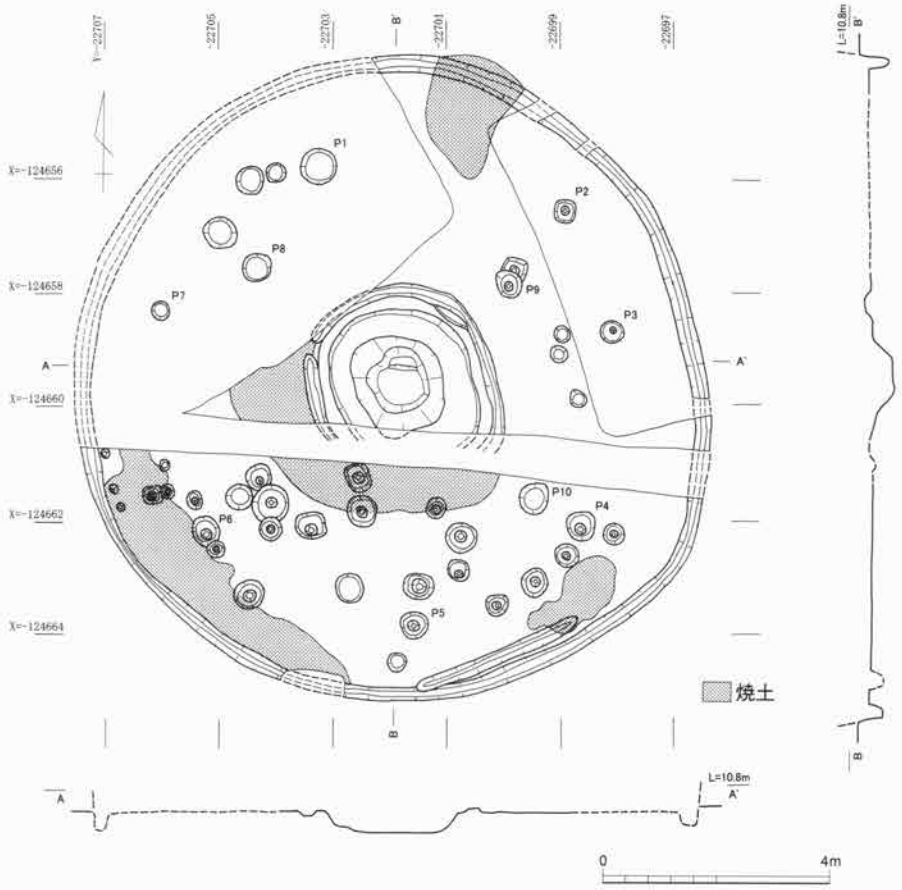


第37図　Ｂ－１調査区下層遺構配置図

に出土しており、古墳時代中期後葉に住居の造営時期が求められる。

掘立柱建物跡ＳＢ356　調査区北部で検出した南北(桁行)３間(柱間総長約5.2m)、東西(梁間)２間(柱間総長約4.9m)の総柱構造をなす。掘形は、一辺0.65～1.10mの方形プランで、その四辺は正しく正方位に揃える。掘形内の遺物量は少なく、その大半は集落遺構に帰する二次的な混入だが、下限を示す資料中に須恵器杯Ｂ高台部分の小片が認められることから、奈良時代の建物跡と推定される。

(伊賀高弘)



第38図　Ｂ－１調査区ＳＨ251実測図

２）Ｂ－２地区（第36・40図）

①弥生～古墳時代

調査区北東部に集落が立地する微高地が存在し、ここから竪穴式住居跡３基（第39図）を検出した。また微高地縁辺部において溝状遺構を検出し、縁辺部の斜面から多くの土坑・井戸等を検出した。

竪穴式住居跡ＳＨ1147　調査地北部で検出した方形プランの住居跡である。ＳＨ1180・1167と重複する。柱穴は、９か所で検出した。規模は約4.8～5.4m、壁高約20cmを測る。床面から出土した土器から、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の住居跡と推定される。

井戸ＳＥ1166　調査地北東部で検出した断面逆台形状の井戸である。検出面での規模径約1.9×2.0m、深さ約1.1mを測る。埋土中層から庄内式甕が出土している。

土坑ＳＫ1189　調査区北東部で検出した土坑である。規模約3.2×0.8m、深さ約40cmを測る。木棺の小口板に伴うとみられる掘り込みを検出していることから、埋葬施設と推定される。土坑内から弥生時代後期末葉の甕・高杯等の弥生土器が出土した。

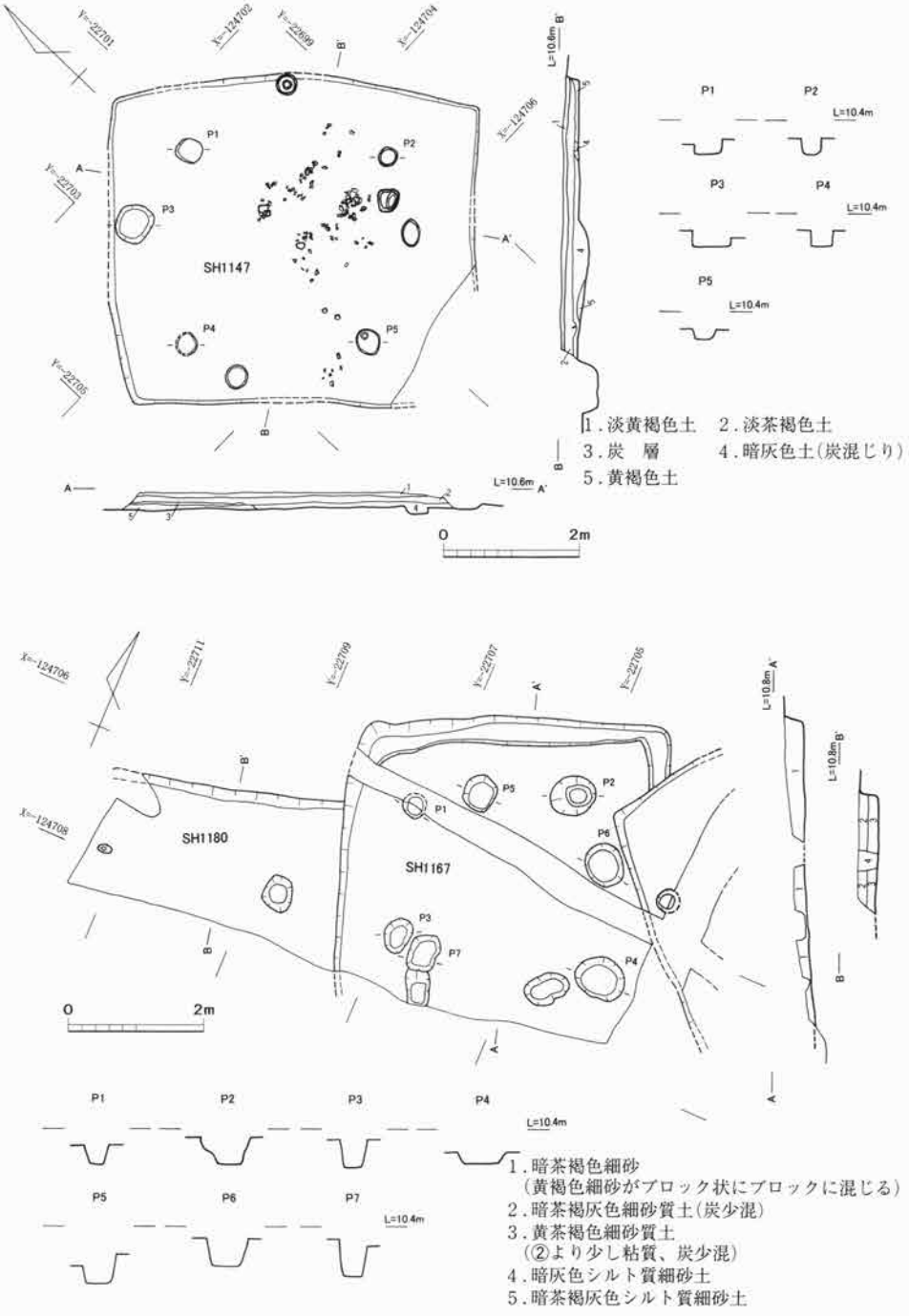
溝ＳＤ1027　調査区中央部の微高地縁辺部をめぐる溝である。幅約４～７m、長さ約22mにわたって検出した。上層は大きく中世遺構によって削平されており、特に溝の南側の立ち上がりが不明瞭である。微高地縁辺部の落ち込みを利用して、一部掘削された溝である可能性が高く、北・側の溝肩部では弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の一括廃棄されたとみられる土器群が出土し

た。しかしながら、南側の溝底部では、砂礫層に混じり、古墳時代前期中葉の土器群が細片となって出土していることから、自然流路として長期にわたって存続していたものと考えられる。

②平安～鎌倉時代

北隣のＢ－１地区で検出した屋敷地と大規模な濠ＳＤ５の南側延長を確認した。屋敷地内では、調査区北東部を中心に多数の柱穴を検出し、掘立柱建物跡２棟を検出した。

掘立柱建物跡ＳＢ1151　東西３間×南北３間の規模を測る総柱の東西棟建物跡である。建物の桁行は、柱穴心々間で8.1m(27尺)、個々の柱穴間隔は西から2.7m(９尺)・2.4m(８尺)・3.0m

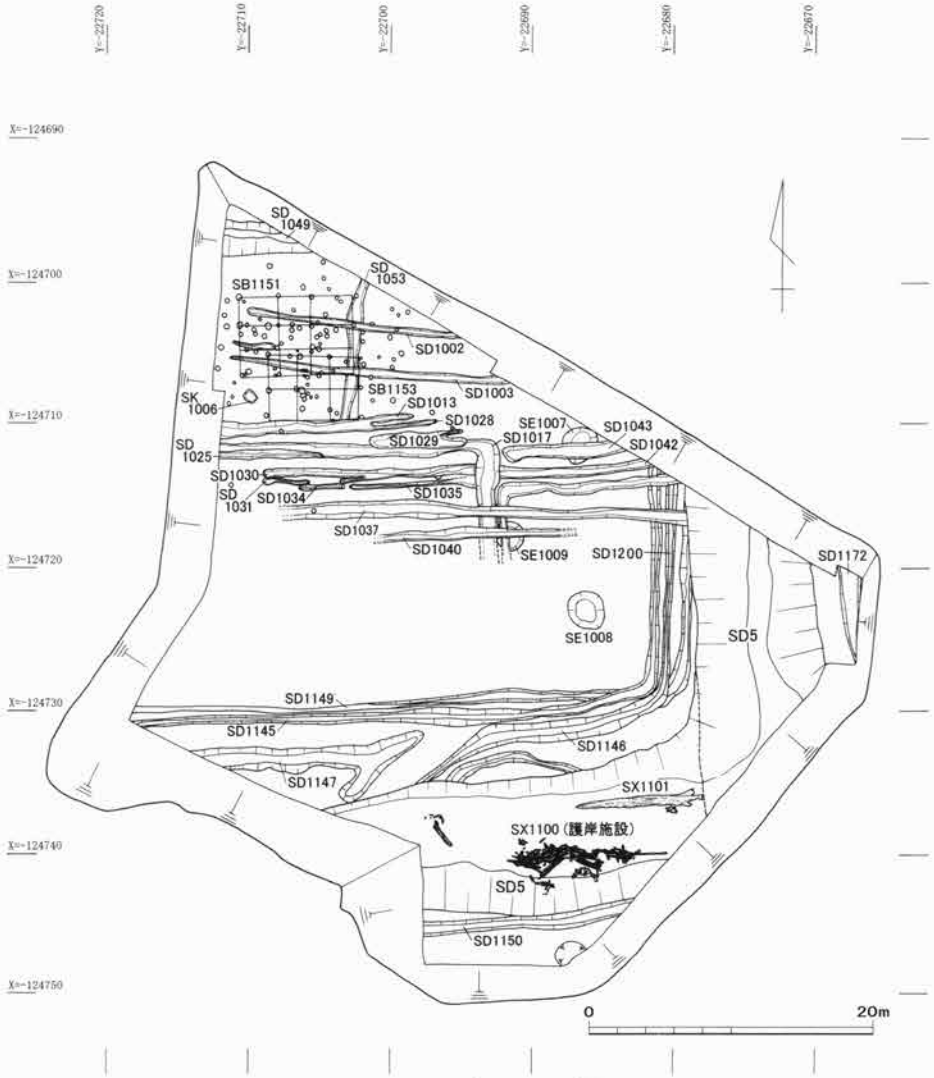


第39図　Ｂ－２調査区ＳＨ1147・1180・1167実測図

(10尺)を測る。梁間は、柱穴心々間が5.7m(19尺)、個々の柱穴間隔は北から2.1m(７尺)・1.5m(５尺)・2.1m(７尺)を測る。建物の方位は、ほぼ国土座標軸に合致している。柱穴掘形の平面形は円形と隅丸方形が混在するが、円形掘形の柱穴が主体を占める。また、柱穴は直径約30cm、深さ10～20cm規模のものが多数を占める。柱穴埋土は淡黄灰色系茶褐色土である。

掘立柱建物跡ＳＢ1153　東西４間×南北２間の規模を測る総柱の東西棟建物跡である。建物の桁行は、柱穴心々間で7.8m(26尺)、個々の柱穴間隔は西から2.1m(７尺)・2.1m(７尺)・1.8m(６尺)・1.8m(６尺)を測る。梁間は、柱穴心々間が4.5m(15尺)、個々の柱穴間隔は北から2.3m(約８尺)・2.2m(約７尺)を測る。建物の方位は、ほぼ国土座標軸に合致している。柱穴掘形の平面形は、ＳＢ1151では円形プランが多数を占めていたが、ＳＢ1153は隅丸方形の柱穴が多い傾向にある。柱穴掘形は、一辺もしくは直径が40cm前後を測る。深さは、深い柱穴で、検出面から約40cmである。各柱穴の底面レベルは、桁行方向はほぼ水平、梁間方向は地形の傾斜と同様に南方向にやや下がる。柱穴埋土は淡黄灰色系茶褐色土である。

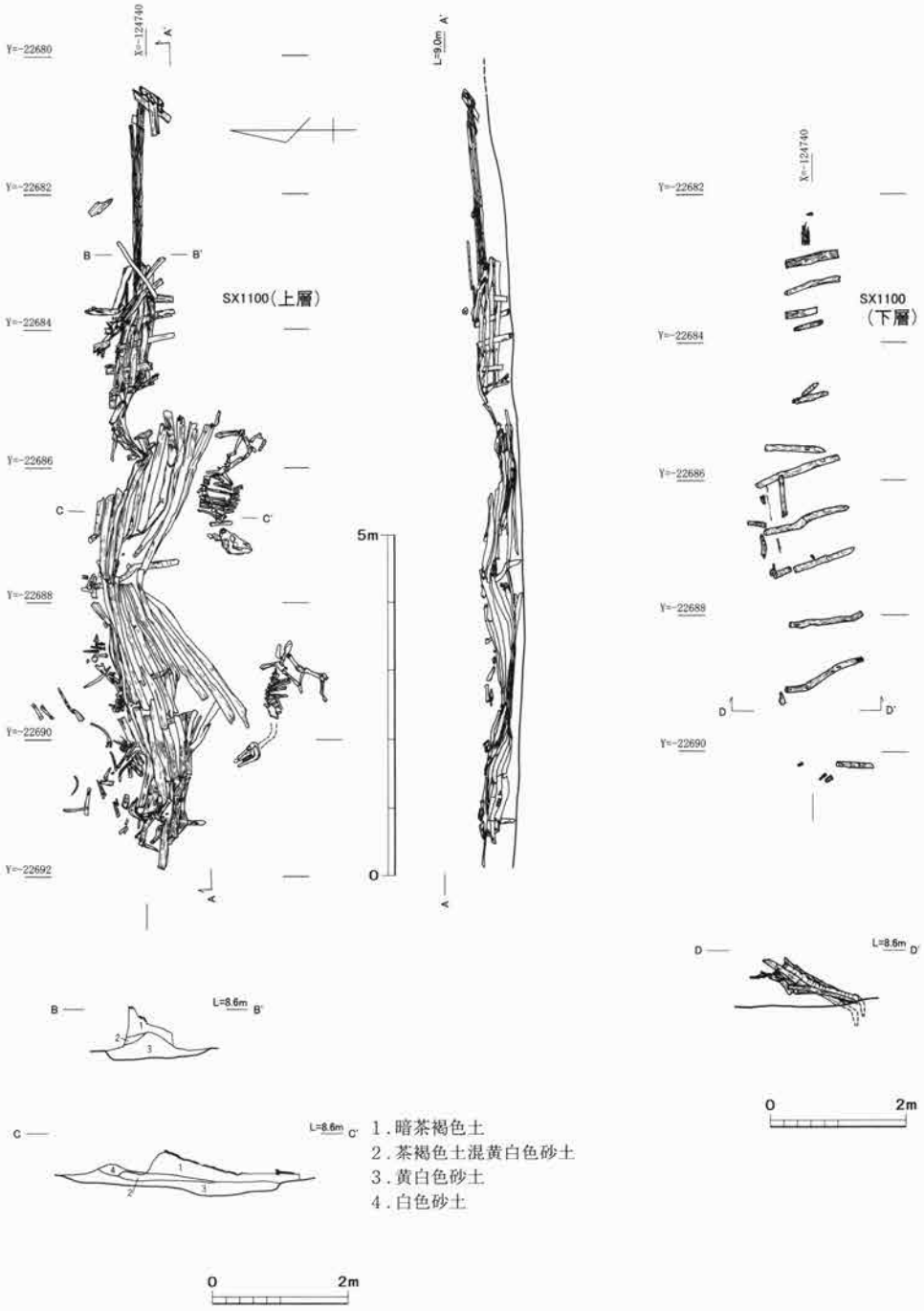
このＳＢ1153は、建物の西北部分がＳＢ1151の東南部分と重なり、重複関係にある。両建物の



第40図　Ｂ－２調査区上層遺構配置図

柱穴に切り合いが認められないことから、建物間の先後関係については不明である。

濠ＳＤ５　調査区の東部と南部を直角に折れて流れる大溝である。溝幅は８～10m、深さは地山検出面から1.3～1.5mを測る。東溝は北側Ｂ－１地区から続くものであり延長約80m分を確認した。調査区東南部で西に折れる南溝は、コーナーから西に27m分を検出した。溝は出土遺物から平安時代後期(12世紀)頃に開削されたと判断する。濠内および調査区東壁面の土層観察から、ＳＤ5は頻繁に再掘削されたことが明らかである。屋敷地をめぐる濠も早くから土砂の堆積が進み、13世紀前半には南側の東西溝は埋没している。一方、東側の南北溝は13世紀前半と想定され



第41図　Ｂ－２調査区ＳＸ1100実測図

る再掘削時点で西に折れることはなく、調査区外(南もしくは東)に延びる状況にあるが、13世紀中葉には一旦その機能を終えている。鎌倉時代と想定される再掘削では、特にコーナー付近の地盤(旧溝堆積土)が軟弱であったため、東溝では東岸、南溝では南岸部分(ＳＸ1100)に護岸施設を設けていた。護岸は杉板・竹を杭で止める構造である。護岸のＳＸ1100はその後、背後からの土圧によって溝内に倒れ込み、埋没している。

溝内の堆積土のうち、中層では13世紀中頃の瓦器椀や皿、瓦質鍋・土師器・輸入陶磁器に混じって、少量ながらも木製品が出土している。木製品の中でも特殊な遺物として、薄い板の両面に経文が墨書された柿経や人形等が出土した。下層では腰刀と判断する短刀３点が出土した。このうちの１点は黒漆塗りの鞘と柄の刀装具(拵え)が伴っていた。また、先に述べた護岸施設ＳＸ1100の護岸内側から、牛と馬のほぼ完全骨格が各１体分検出された。いずれも頭を西、足は南に向け、両前脚を欠く共通性が認められる。護岸祭祀に伴う犠牲獣と考えられる。

(竹原一彦)

３．出　土　遺　物

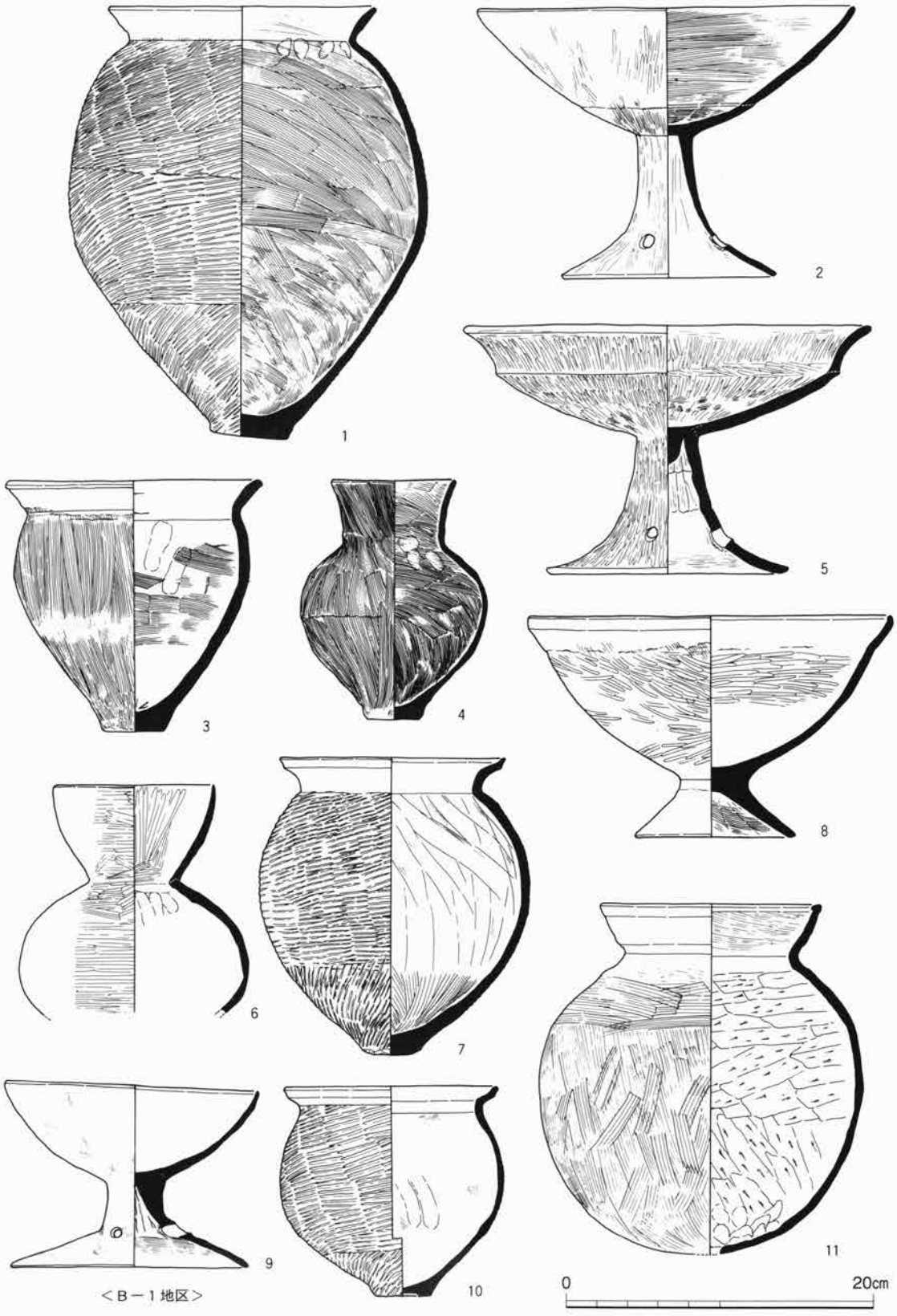
１）土器

①弥生～古墳時代(第42・43図)

Ｂ－１地区・Ｂ－２地区ともに、竪穴式住居跡・溝状遺構を中心に、主に弥生時代後期中葉から古墳時代中期の多量の土器が出土した。また包含層中の出土遺物のなかには、縄文時代晩期の土器片や弥生時代中期前半の若干の土器片が含まれている。

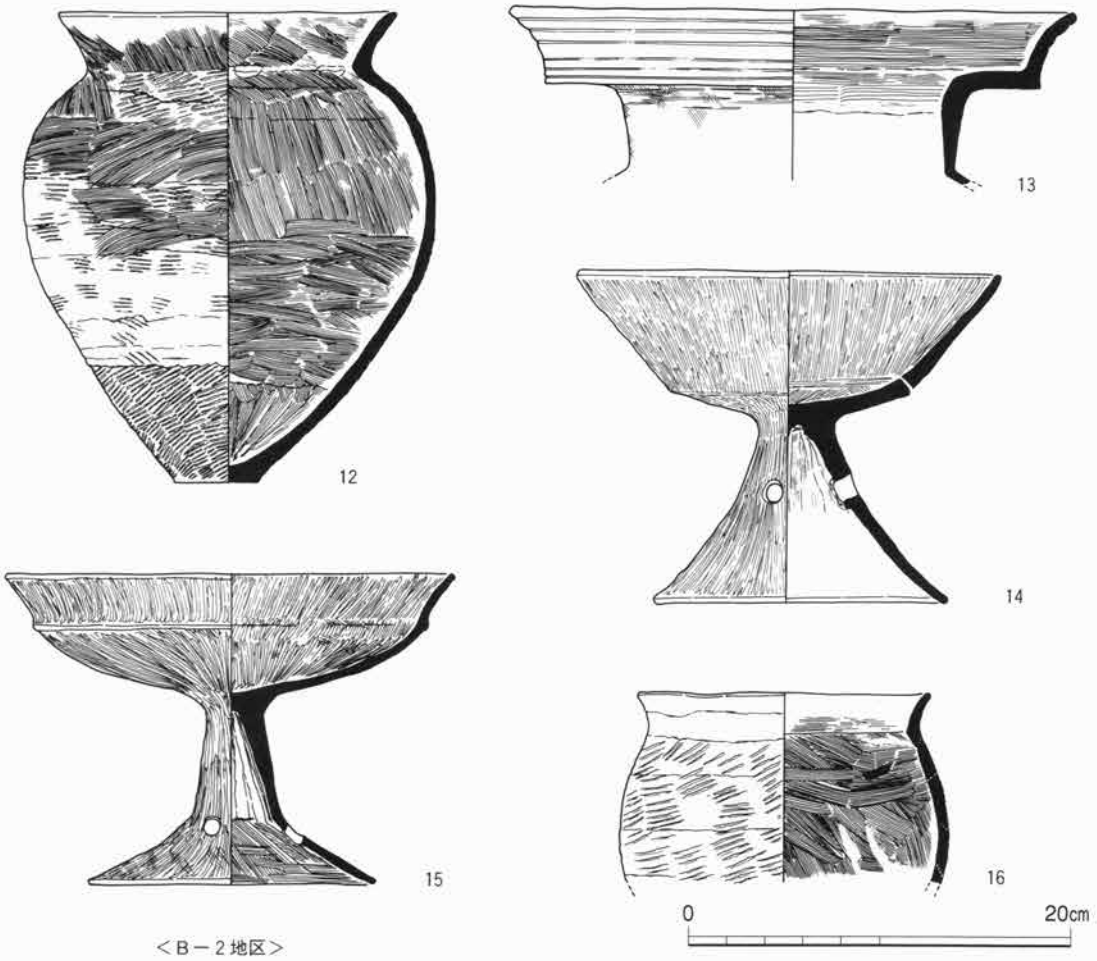
当遺跡の出土土器は現在整理作業を進めているところであるが、特に弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけての資料は、様式変遷を追える資料群であり、後期後葉から古墳時代前期にかけての山城地域の土器編年の基準資料になるものとみられる。以下、今年度の調査で出土した土器の一部を報告する。

１・２はＢ－１地区のＳＨ189から出土した。１は畿内第Ⅴ様式系甕である。体部は３分割で成形され、外面に荒いタタキ、内面にハケを施す。２はＳＨ189から出土した裾部がゆるやかに開く高杯である。外面にミガキ、内面にハケを施し、三方に透かしを穿つ。３はＳＨ251から出土した「く」の字に外反する口縁部をなす甕である。体部外面に縦方向のハケを施すことを特徴とする。４・５はＳＨ268から出土した。４は体部内外面をハケ調整する長頸壺である。体部中位に分割成形痕を残す。５は皿状の杯部に外反する口縁をなす高杯である。杯部内外面にていねいなミガキを施す。脚部はゆるやかに外反し、三方に透かしを穿つ。６・７はＳＨ415から出土した。６は内湾する口縁部に、下膨れの体部をなす壺である。東海地域の瓢壺の影響を受けた形式とみられる。７は畿内第Ⅴ様式系の甕である。口縁端部外面に面をなし、端部をつまみ上げる。体部は２分割のいわゆる分割成形技法により成形され、右上がりのタタキを施す。内面は、底部周辺にはハケ、体部上半から下半部にかけて板状工具による斜め縦方向のナデが施される。８～10は、ＳＨ431から出土した。８は短く立ち上がる有段口縁をもつ台付鉢である。鉢部は、内外



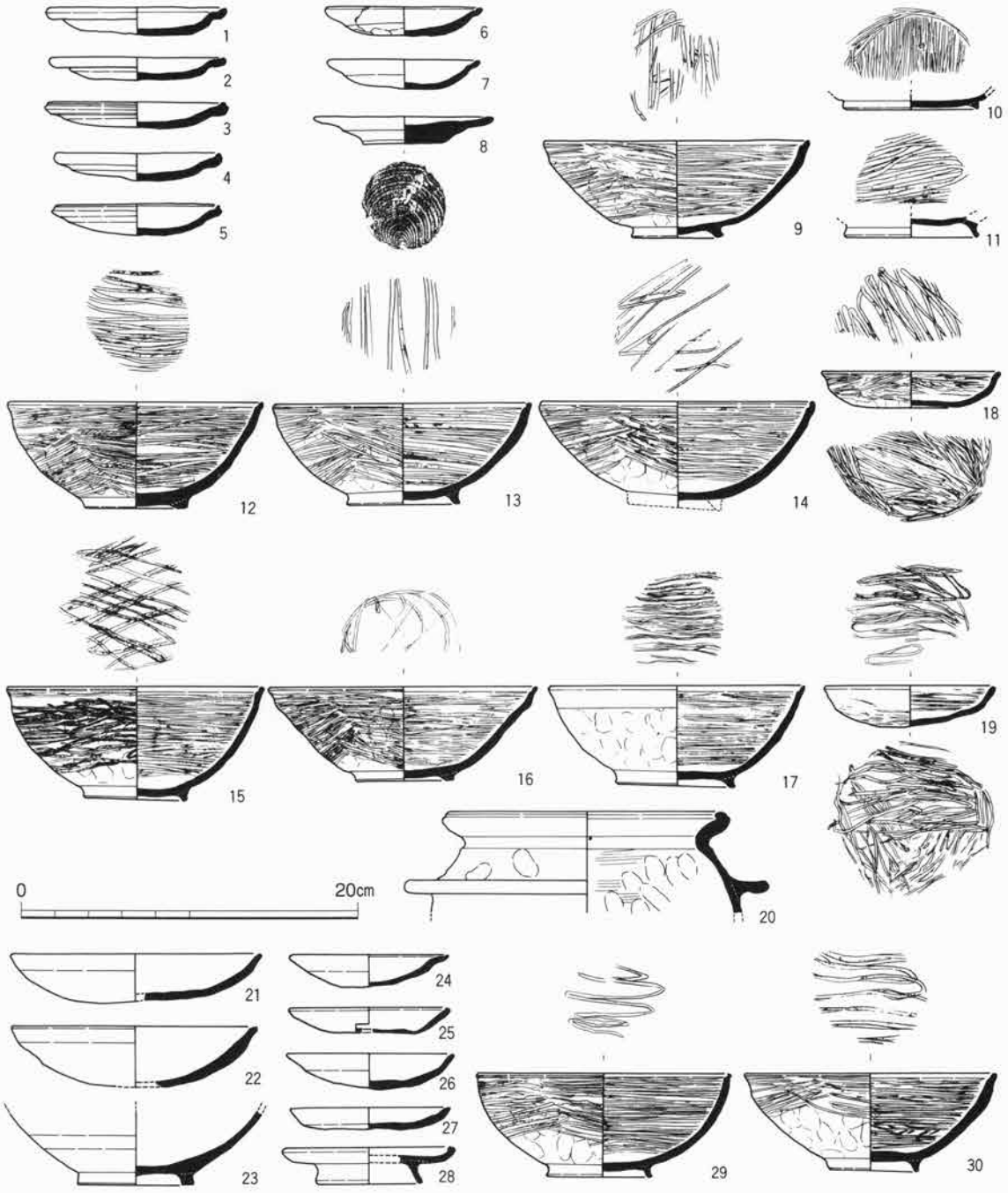
第42図　遺物実測図(1)

1・2．SH189　3．SH251　4・5．SH268　6・7．SH415
8～10．SH431　11．SH361



第43図　遺物実測図(2)
12．ＳＫ190　　13～16．ＳＤ27

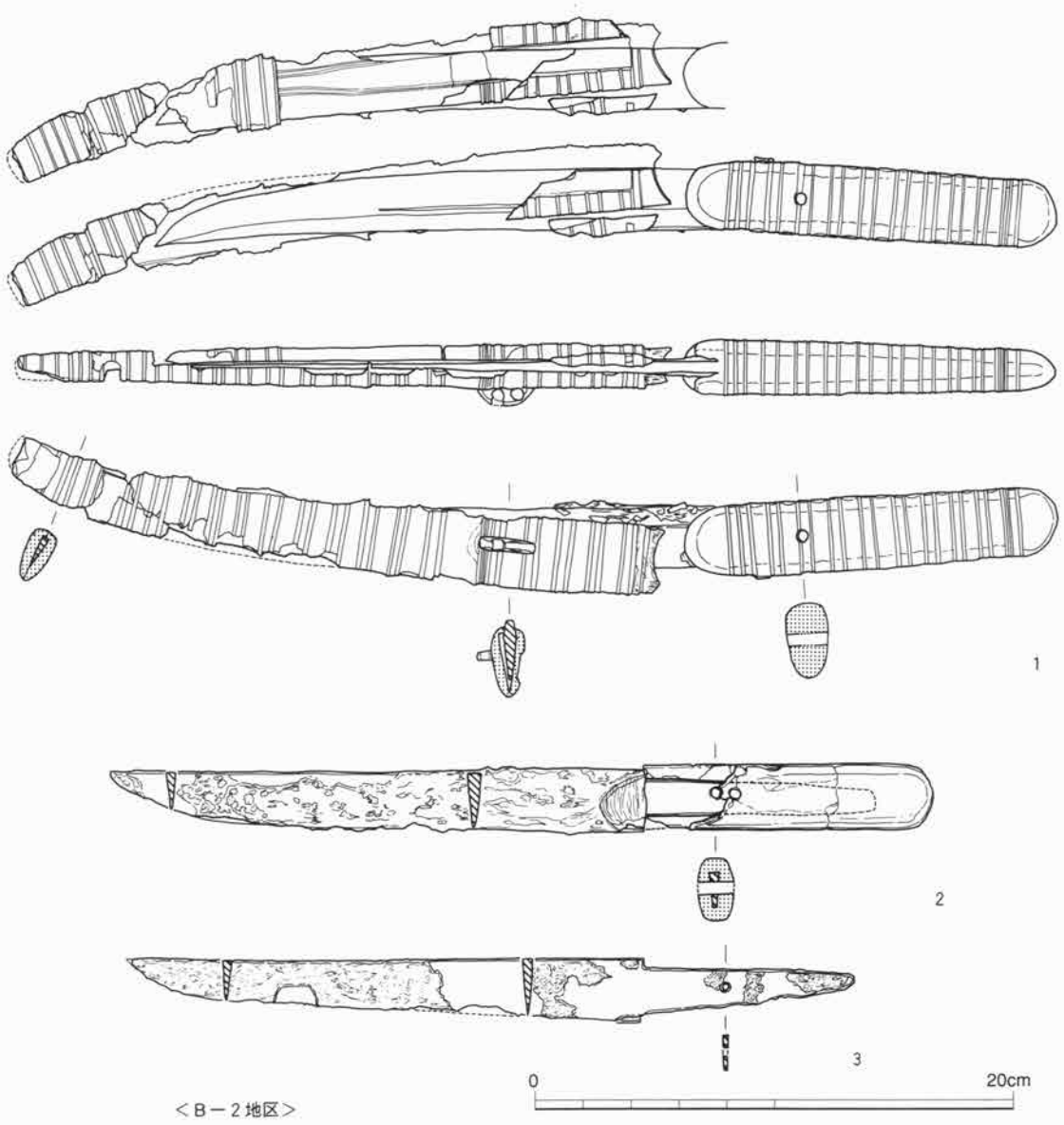
面をハケ調整したのち、ていねいなミガキを施す。９は椀状の杯部をもつ低脚の高杯である。器面の磨耗が激しいが、一部にハケ調整がみられる。10は受け口状口縁をなし、体部にタタキ調整を施す甕である。体部成形は２分割の分割成形技法による。内面はハケのち斜め縦方向のナデを施す。口縁部形態には近江系の受け口状口縁甕の影響がみられ、畿内第Ⅴ様式系タタキ甕との折衷的な要素をもつ甕である。11はＳＥ361から出土した布留式甕である。外面は斜めタテ方向のハケを基調とし、肩部に横方向の粗いハケを施す。内面には下部から上部にかけて、順に３方向のケズリを施し、底部には著しい指頭圧痕が認められる。布留式中段階の甕である。12はＢ－２地区ＳＫ190から出土した「く」の字口縁をなす畿内第Ⅴ様式系甕である。体部は３分割で成形され、外面にタタキ、内面にハケを施す。13・14はＢ－２地区ＳＤ27の２区下層から出土した。13は大形の二重口縁壺であり、口縁部外面に擬凹線文を施す。中部瀬戸内系の二重口縁壺であり、搬入品と推定される。14は東海系土器の影響が色濃くみられる近江東部から北部にかけて主に分布する高杯の形式である。15・16はＳＤ27の１区から出土した。15は皿状の杯部に外反する口縁をなし、ゆるやかに開く脚部をなす高杯である。16はゆるやかに外反する口縁部をなす第Ⅴ様式系甕であり、口縁部外面に粘土輪積み痕を残すことを特徴とする。　　（高野陽子）



第44図　遺物実測図(3)

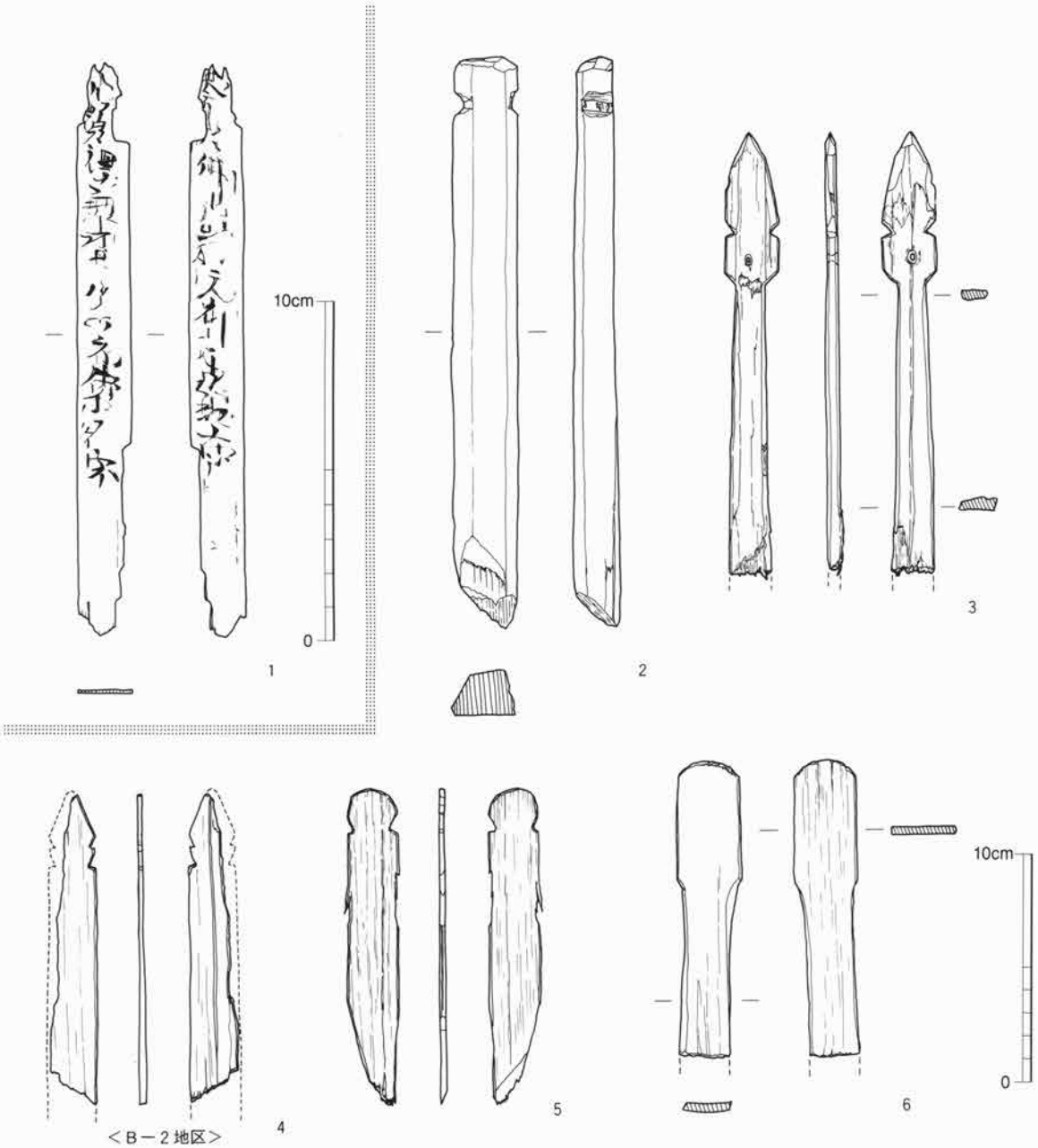
②平安～鎌倉時代(第44図)

1～20はB－2地区SD53から出土した。1～8は土師器皿である。1～6は手づくねで、口縁部を外側に引き出して端部を上に摘まみ上げるもの(1～3)、外側をあまり引き出さずに端部を摘まみ上げるもの(4・5)、外側への引き出しも端部の摘まみ上げもわずかなもの(7・8)がみられる。8は回転台成形で底部に糸切り痕跡をもつ。内面の中央部がわずかにくぼむが偏平なつくりである。9～11は黒色土器椀である。9は内外面を黒色処理するB類である。体部外面は3分割の密なヘラミガキが高台付近まで施されるが、ヘラミガキのわずかな隙間にヘラケズリの痕跡が認められる。胎土が橙色を呈するので黒色土器としたが、焼成は良好であり、瓦器椀とみ



第45図　遺物実測図(4)

てよいかもしれない。10・11は黒色土器Ａ類である。見込みにほとんど隙間の無いヘラミガキが施される。12～17は楠葉型瓦器椀である。口縁部内面には、ほとんど隙間の無い密な圏線ミガキが施される。口縁部外面には３分割の密なヘラミガキが高台付近まで施されるが、15はヘラミガキの隙間が少し開いており、17は外面のヘラミガキがみられない。見込みには１方向もしくは２方向のジグザグ状の暗文が施される。16は、見込みは連結輪状暗文が施されているのか口縁部内面の圏線ミガキが見込みに及んでいるものか判然としない。16の見込みには焼成後に付けられた刻線がみられる。器形は、深い椀形を呈するもの(12～15・17)と口縁部が直線的なもの(16)がある。18・19は瓦器皿である。18は口縁部内外面と底部の全面にヘラミガキが施されるが、19では、口縁部外面にヘラミガキは施されない。20は「く」字に外反する口縁部の端部を内側に折り返す大和産の土師器羽釜である。内面には粗いハケメが残る。21～30はＳＤ145から出土した。21・22・24～28は土師器皿である。21・22は大皿で口縁部に１段のヨコナデを施す。22の底部には焼



第46図　遺物実測図(5)

成後の穿孔がみられる。21の底部にも穴が開いているが、意図的に開けられたかどうか、判然としない。24・25は、手づくねで「て」字状口縁をもつもの、26・27は口縁部に1段のヨコナデを施すものである。28はコースター形の皿に高台が付いたものである。底部に穴が開いているが、意図的に開けられたかどうか、判然としない。23は白磁椀である。高台畳付以下は露胎である。29・30は瓦器椀である。口縁部外面には3分割のヘラミガキが、見込みにはジグザグ状の暗文が施される。

（森島康雄）

2）鉄 製 品（第45図）

濠ＳＤ５の南東コーナー付近から、腰刀とみる鉄製品が3点出土した。1は、護岸施設ＳＸ

1100の西約５ｍ、２はＳＤ５の内側溝底コーナーから北約7.5ｍ、３は同コーナーから西約８ｍのいずれも溝底付近から出土した。１は、黒漆塗りの鞘と柄を装着した呑口式腰刀であり、鞘・柄を含む全長は43.9cm、刃長23.6cm、刃幅2.4cm、刃棟厚さ0.4cm。刃部には鎬が付き、両側面に樋を持つ。鞘・柄は朴材(注4)を使用し、白木に規則的に糸を巻き、漆で塗り固める。鞘には栗形と笄の櫃が認められる。柄は、関から3.3cmに直径0.5cmの木製目釘が残る。２は、白木の柄が装着状態で出土した。刃長22.0cm、刃幅2.6cm、刃棟厚さ0.5cm、茎長10.1cmで、平作りである。柄は呑口式であり、鞘口に呑まれる部分は波状の凹凸が認められる。３は、刃長21.6cm、刃幅2.5cm、刃棟厚さ0.4cm、茎長18.8cmで、平作りである。刃部は頻繁に研がれたためか、若干痩せている。

３)木 製 品（第46図）

濠ＳＤ５の南北溝中層の有機物包含層から、柿経や形代、下駄・漆器椀や部材などの木製品が出土した。１は柿経であり、腰刀２付近の上層から出土した。薄く削った板の両端を欠くが、長さ16.8cm、幅1.6cm、厚さ0.1cmで板の両面に経文が墨書されている。解読の結果、妙法蓮華経巻第一比喩品第三の一節と判明(注5)した。右面は、「・養於佛所散天衣住虚空中」。左面は、「・□賢聖衆□□□□□□□□」と解釈される。２は一方を有頭状に削り出す棒状の木製品である。表面は３面に面取りするが、裏面は平坦に仕上げる。全長は25.3cm。３は、鏃形と判断する木製品である。鏃身長は7.1cm、鏃身幅2.5cm。４は柿経の頭部と判断する。薄い板材の先端を圭頭状に削り、切り込みを入れた頭部をつくる。長さ13.6cm、幅2.1cm。５は人形である。全長15.9cm、幅2.1cm。６はヘラ状の木製品である。全長は12.6cmである。

４．ま と め

今年度の調査成果としては以下の通りである。

弥生～古墳時代では、Ｂ－１地区から検出した大型円形住居跡ＳＨ251は、多数を占める方形プランの竪穴式住居跡群にあって、規模・形状において特異な住居跡といえよう。また、Ｂ－２地区では佐山遺跡集落の南限となる微高地斜面と環濠の可能性のある溝ＳＤ1027を検出した。集落北限については、過去の試掘調査の結果から、Ａ地区北端からさほど北に延びないと考えられ、集落域は、ほぼ南北250ｍの範囲と推測される成果を得た。遺跡の東西については未知な点が多いが、検出した住居跡は全体で100基を数え、出土遺物も豊富であることから、地域内の拠点的集落の一つと判断される。集落は弥生時代後期～平安時代までの長期にわたって存続するが、特に庄内式～布留式並行期に隆盛を極める。

今回のＢ－１地区では、初めて奈良時代の遺構を検出した。なかでも総柱の掘立柱建物跡ＳＢ356は、軸線を方位に揃え、柱穴掘形も１ｍの規模を測ることから、一般的な建物を越える内容を含むものである。

平安～鎌倉時代では、Ｂ－２地区で居館をめぐるものと思われる濠ＳＤ５の東南コーナーを検出した。特にコーナー付近では、形代や柿経、牛馬骨、腰刀などの遺物が多数出土し、当該地が屋敷内で執り行われた祭祀の重要な場であったと判断される。濠ＳＤ５は、同時期の居館に伴う

環濠が通例幅２ｍ程度で有るのに比べ、特に傑出した規模を測るものである。

今回の調査をもって佐山遺跡の現地調査は終了した。現在、出土遺物や調査記録類の整理を鋭意進めているところであり、遺跡の詳細については、今後、刊行予定の報告書に譲ることにしたい。

（竹原一彦）

注１　これまでの市田斉当坊遺跡および佐山遺跡の調査については、下記の概要報告がある。

竹原一彦・岩松保・森島康雄他「国道１号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第90冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999

竹原一彦・岩松保・高野陽子他「国道１号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第95冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

竹原一彦・森島康雄・高野陽子他「国道１号京都南道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第101冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

注２　現地調査および出土遺物整理参加者

調査補助員　伊豆元みずえ・市川創・今林信祐・内田真一郎・奥田美佳・金成綱太郎・片岡暁美・黄瀬桂子・久保山啓成・越奈央子・小牧健太郎・近藤奈央・財前幸一郎・澤井亮祐・汐碇誠・庄司友明・杉浦直子・田中由美・田村和成・土屋みづほ・中村里美・八田尚彦・松野元宏・望月誠子・渡辺今日子

整理員　奥平廣子・尾上忍・小西ひとみ・近藤奈央・澤井亮祐・汐碇誠・繁田真理・鈴木浩子・田中美恵子・田中由美・辻井和子・土屋みづほ・栃木道代・中島恵美子・西島真由美・西村香代子・西村美智子・福田玲子・松野元宏・山中道代・与十田節子

また、調査期間中に現地に来られ、調査の指導・助言をしていただいた(財)東大阪市文化財協会松田順一郎氏、同志社大学辰巳和弘・中川要之助先生に感謝したい。

注３　高橋美久二「城陽の条里遺構」（『城陽市史』第１巻　城陽市役所）　2002

注４　(財)元興寺文化財研究所　山田哲也氏のご教示による。

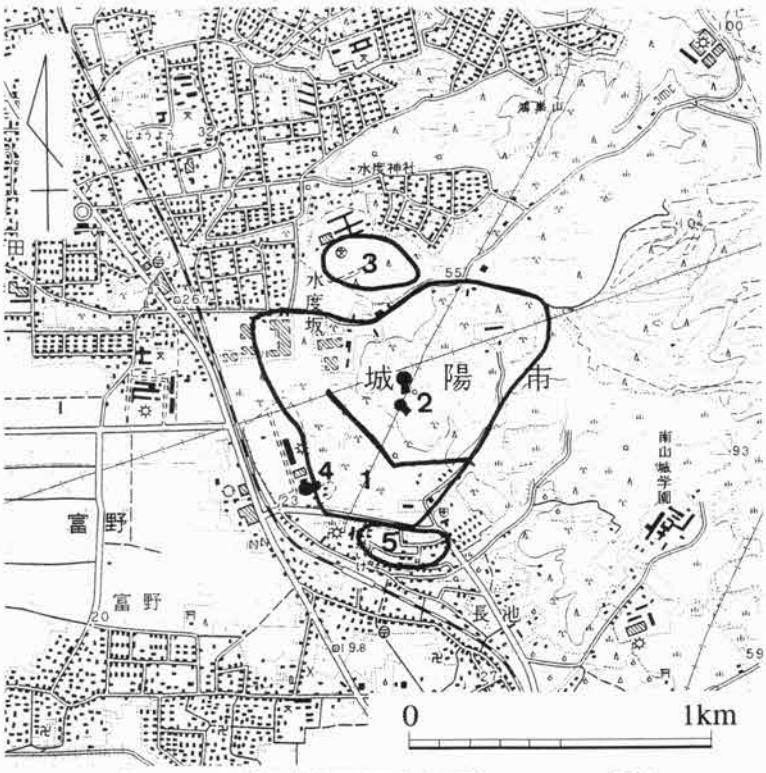
注５　柿経については、出土時点での解読は、向日市教育委員会の清水みき氏、その後の詳細な解読・検討は木簡学会の渡辺章氏にお願いした。

4．芝山（しばやま）遺跡発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、京都府が計画する木津川右岸運動公園建設に関連する工事用道路の建設に伴う発掘調査である。芝山遺跡は、木津川右岸の標高約40m前後の大阪層群からなる丘陵上に立地する縄文時代から古代・中世におよぶ複合遺跡である。

芝山遺跡の調査は、過去20数次にわたって、城陽市教育委員会および当調査研究センターにより実施されてきた[注1]。そのなかで山城総合運動公園城陽線の建設に伴う調査では、削平され周濠だけが残った小方墳が14基確認され、また、飛鳥時代の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・井籠組の井戸などが検出されている[注2]。平成８年度の調査では、顕著な遺構は確認されなかったが、少量の遺物が確認され、遺跡の北端部の範囲が明確になった[注3]。平成10年度の調査は、今回の試掘地点の東端のやや北寄りに位置する(財)青少年野外活動センター友愛の丘の所在する丘陵稜部に７地点合計14か所のトレンチを設定し調査を実施した。調査成果として全体ではキャンプ場造成のため丘陵稜部が削平を受け、遺物は出土するものの遺構密度は希薄であったが、丘陵稜部南寄りの２－１トレンチでは、奈良時代後半から平安時代前期とされる古墓１基が確認されている[注4]。



第47図　調査地位置図(国土地理院１/25,000宇治)
１．芝山遺跡　　２．梅の子塚古墳群　　３．宮ノ平古墳群
４．長池古墳　　５．森山遺跡

また、当遺跡の周辺には、谷を挟んで南側に縄文時代後期の集落が確認された森山遺跡[注5]や古墳時代では当遺跡のほぼ中心部に位置する梅の子塚古墳群などの古墳群も見られ[注6]、遺跡が比較的密に分布する場所にあたる(第47図)。

調査地は遺跡の中央部を「く」の字状に横切る南北総延長約500m、路線幅約50mを測る道路建設予定地である。今回はその路線帯の中で遺構・遺物の分布密度を把握する目的で試掘調査を行った。調査面積は約1,600㎡である。

現地調査は、平成13年12月

17日から平成14年２月27日まで実施した。発掘調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第４係長奥村清一郎、調査員柴暁彦および調査第３係主査調査員伊賀高弘が行った。

本概要報告は、柴が執筆した。調査期間中および概報作成にあたっては、調査補助員・整理員の協力を得た[注7]。ここに記して感謝の意を表する。また、調査にあたっては京都府教育委員会・城陽市教育委員会の指導・助言を得たほか、関係諸機関から多大なる協力をいただいたことに深謝いたします。

なお、今回の調査に係る費用は京都府土木建築部が負担した。

２．調 査 の 概 要

工事用道路建設予定地内で、買収の完了した部分を対象に地形を考慮しながら、幅４ｍ、長さ50ｍ程度のトレンチを合計11か所に設定した(第48図)。以下に各トレンチの概要を述べる。

１トレンチ　竪穴式住居跡２基(ＳＨ36・73)および土坑２基(ＳＫ38・54)などを確認した。トレンチ東寄りで検出した竪穴式住居跡ＳＨ36は一辺が約3.5ｍを測る平面形が方形をなす住居跡である。トレンチ西端で確認した竪穴式住居跡ＳＨ73はトレンチ外におよぶため規模は不明であるが、平面形は方形をなす。時期は出土した土器からいずれも古墳時代後期後半と思われる。また、直径約0.2ｍを測るピットＳＫ22からは、須恵器の短頸壺が正位置を保った状態で出土した。

２トレンチ　若干のピットおよび所属時期不明の木棺墓ＳＸ23を検出した。木棺墓ＳＸ23は、長軸が南北方向を向き、長辺約1.7ｍ、短辺約1.2ｍの長方形をなす。深さは検出面から約0.8ｍを測る。出土遺物には土師器の細片があるが、時期は明確ではない。

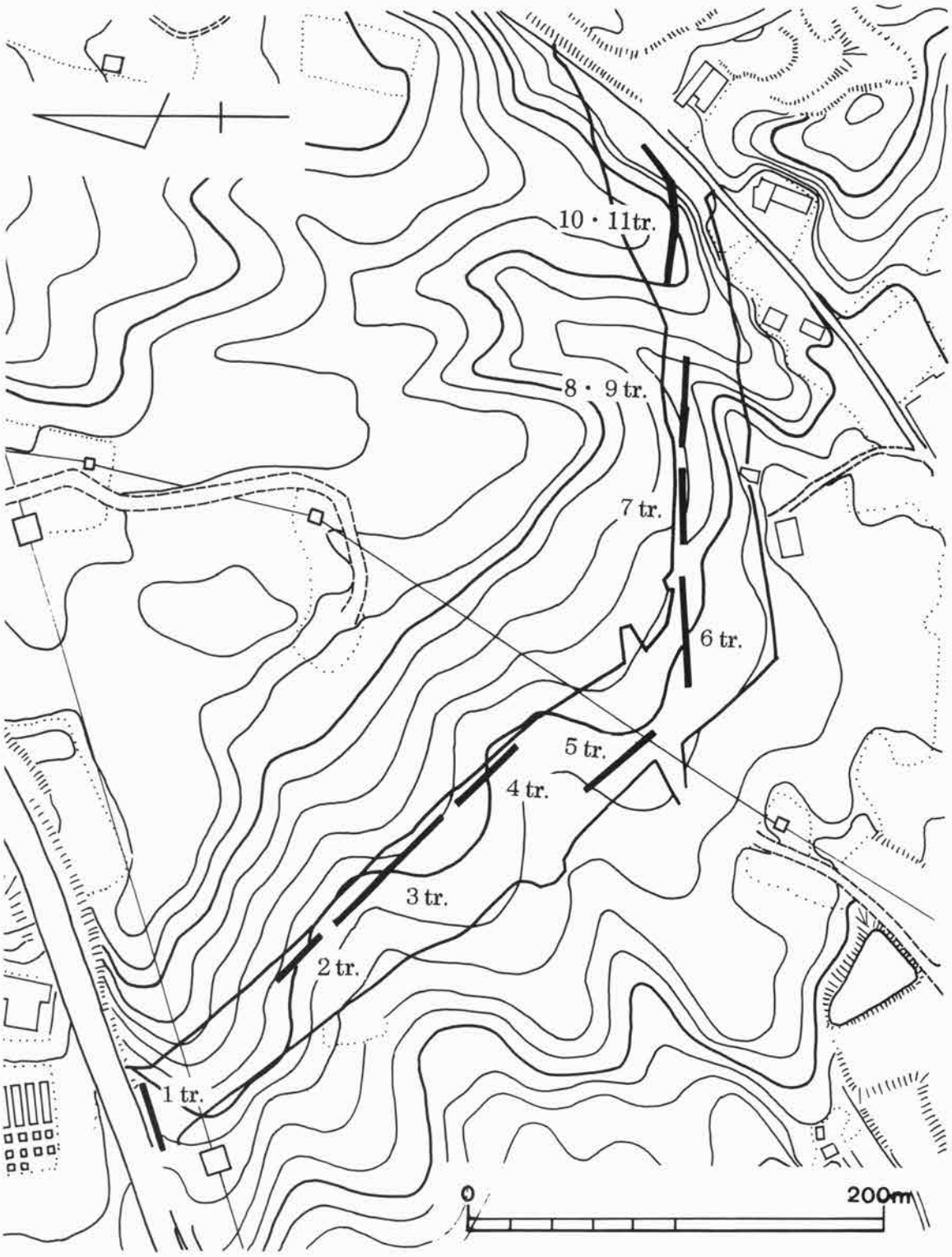
３トレンチ　長さ約70ｍのトレンチである。トレンチ中央部に自然の谷地形(ＳＤ36)がみられる。遺構は主にこの谷地形の南側で、南北方向の溝４条(ＳＤ28・29・37・38)などを検出した。ＳＤ28およびＳＤ29は座標北に対してやや西側に振れる溝である。幅は約0.3～0.4ｍ、深さ約0.2ｍを測る素掘り溝である。溝底部付近で古墳時代後期後半の須恵器・土師器などが比較的まとまって出土した。また溝ＳＤ36は幅約８ｍ、検出面からの深さ約1.2ｍを測る。埋土は大きく３層に分けられ、溝の最終埋没段階に奈良時代の土器が混入し、下層には陶邑編年ＴＫ217型式段階(古墳時代後期後半)の須恵器・土師器を含む。

４トレンチ　トレンチ南東寄りで自然の谷地形ＳＤ31を検出した。ＳＤ31からの出土遺物はない。このＳＤ31北東側と南西側でピットを検出したが、幅４ｍのトレンチのなかでは建物として復原できるものはない。ピットの時期は、おおよそ奈良時代である。ＳＫ12からは、土師器の杯Ｂが出土した。

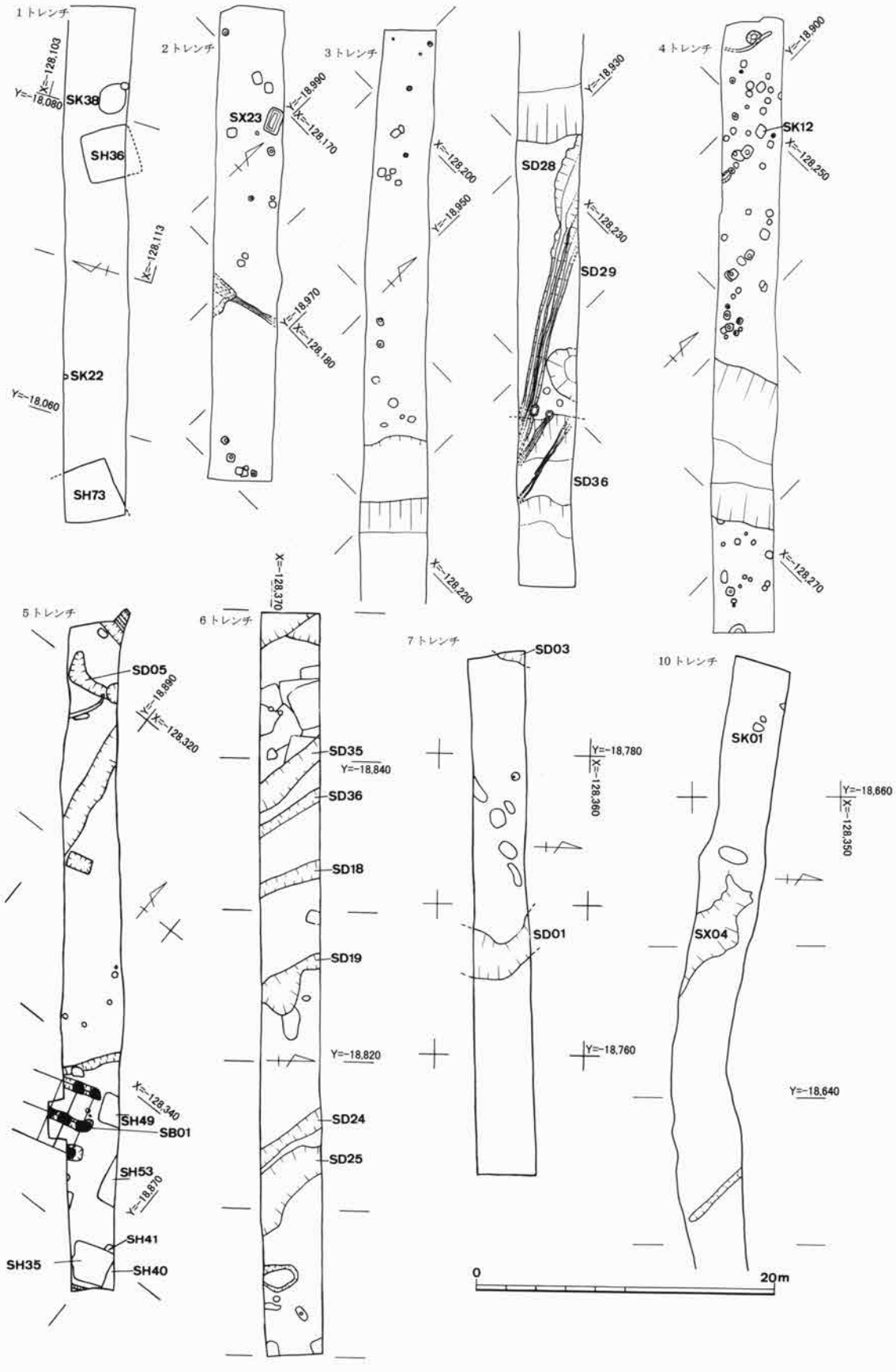
５トレンチ　トレンチ南東寄りに顕著な遺構が集中する。掘立柱建物跡ＳＢ01は、梁間２間、桁行２間以上の東西棟建物跡である。幅約0.6ｍの浅い溝(布掘り)のなかに柱穴を掘削している。梁間の柱間寸法は2.1ｍ、桁行の柱間寸法は2.8ｍを測る。柱穴は直径0.6ｍを測り、深さは0.7ｍを測る。またこの建物跡周辺で竪穴式住居跡を５基前後検出している。住居跡は一辺が３ｍ前後の小規模なもので、後世の削平により、住居床面近くまで住居壁が削り取られている。そのなか

で竪穴式住居跡ＳＨ35からは南西辺中央付近で造り付け竈と思われる焼土を検出した。

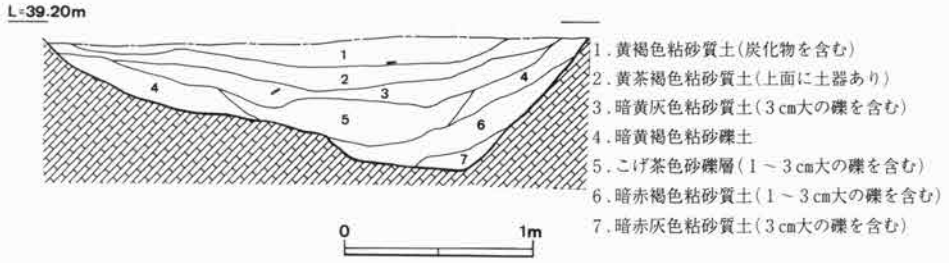
６トレンチ　長さ約50ｍのトレンチである。東側は約30㎝の表土をはずすと黄褐色砂礫混じりの地山となる。北西－南東方向の溝６条や土坑を検出した。溝の年代はおおよそ平安時代と思われる。溝ＳＤ35より西側は灰白色の砂質土となる。この灰白色砂質土を基盤層として竪穴式住居



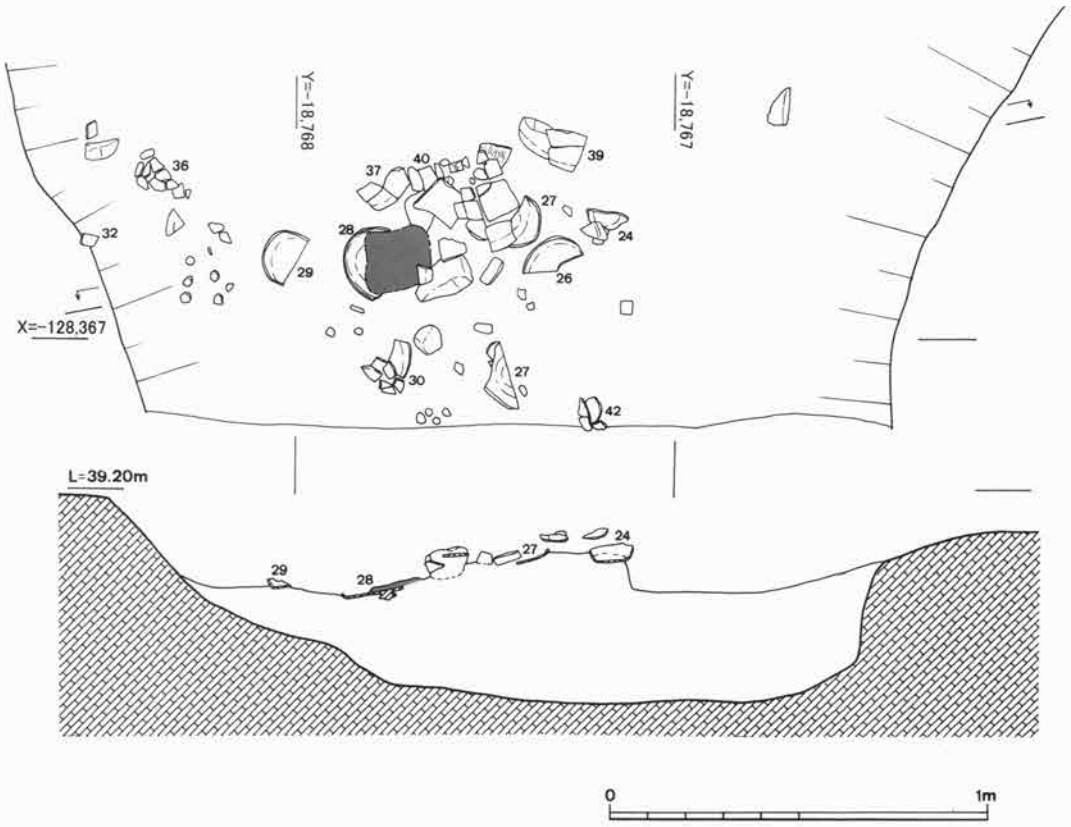
第48図　調査トレンチ配置図



第49図　調査トレンチ平面図



第50図　溝ＳＤ01北壁土層断面図



第51図　溝ＳＤ01遺物出土状況図

跡群を確認した。

７トレンチ　幅約３ｍ、検出面からの深さ約0.7ｍを測る周濠跡ＳＤ01、トレンチ北西隅で周濠跡ＳＤ03を検出した。ＳＤ01とＳＤ03が一連のものとすると、一辺が約20ｍの方墳に復原できる。墳丘は後世の削平により消滅したものと考えられる。埋土層から円筒埴輪片のほか、奈良時代の須恵器杯Ｂ・蓋、杯Ａおよび土師器杯がまとまって出土した。そのほか、ＳＤ01およびＳＤ03に囲まれた地山面から土坑、ピットを検出した。

７トレンチで検出した溝ＳＤ01は幅2.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。溝内の土層堆積は第50図に示したとおり７層に分層できる。検出面の土は、他の遺構の検出面と大差はないが、やや周囲の土と比較して炭化物の小片がみられた。１層と２層の境付近にわずかに土器を包含する。遺物の大半は５層とした腐植土を含むこげ茶色の砂礫層上面にまとまって出土した。６・７層は遺物を含まず、地山である赤褐色の砂質土が流れ込んだ状況をなしている。今回の試掘トレンチ部分では、

第51図に示すように奈良時代の遺物が重なり合うようにして出土した。出土した遺物は須恵器杯身・杯蓋、土師器杯などがある。須恵器の杯蓋は大半がつまみ部分を下にして出土している。中央やや左寄りの須恵器(28)の上面には焼土塊がみられた。

8・9トレンチ　丘陵斜面から谷部にかけて、トレンチを設定した。西寄りの丘陵斜面で奈良時代の須恵器を含む包含層を確認したが、顕著な遺構はみられなかった。

10トレンチ　丘陵の稜上の平坦面から、土器片を伴う土坑ＳＫ01を検出した。また、丘陵斜面では、近代の土師器および陶器などを含む溝状の落ち込みＳＸ04を検出した。

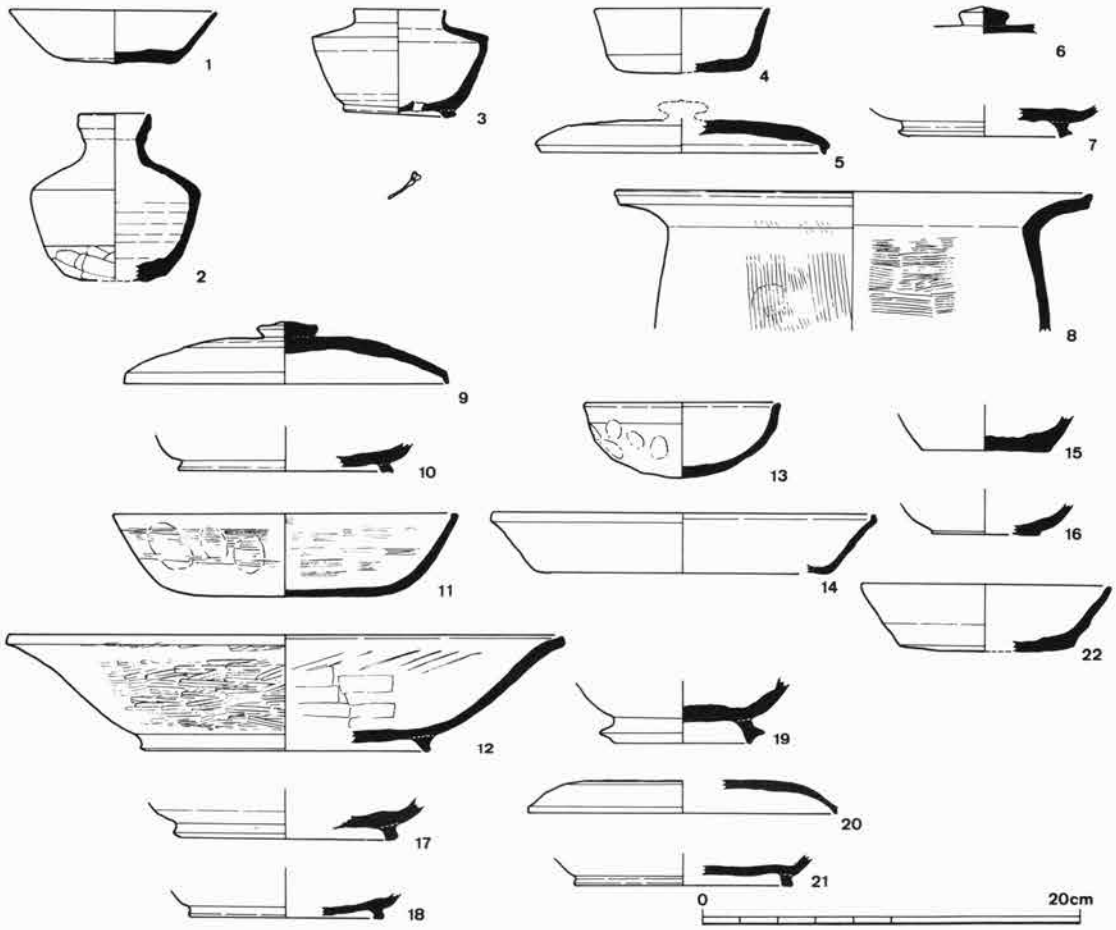
11トレンチ　10トレンチを設定した丘陵斜面につづく谷部に設定した。２か所で重機による地山確認の深掘りを行ったところ、地表面から約3.5mで谷底を確認した。この谷部は砂が堆積し、安定面は存在せず遺構もみられなかった。

3．出 土 遺 物

出土遺物には、須恵器、土師器、灰釉陶器、白磁、近世陶磁器、埴輪などがある。以下、各トレンチ毎に記述する。

(1) 1～6 トレンチ出土遺物(第52図)

1～3は1トレンチ、4～8は3トレンチ、9～12は4トレンチ、13・14は5トレンチ、15～



第52図　出土遺物実測図(1)

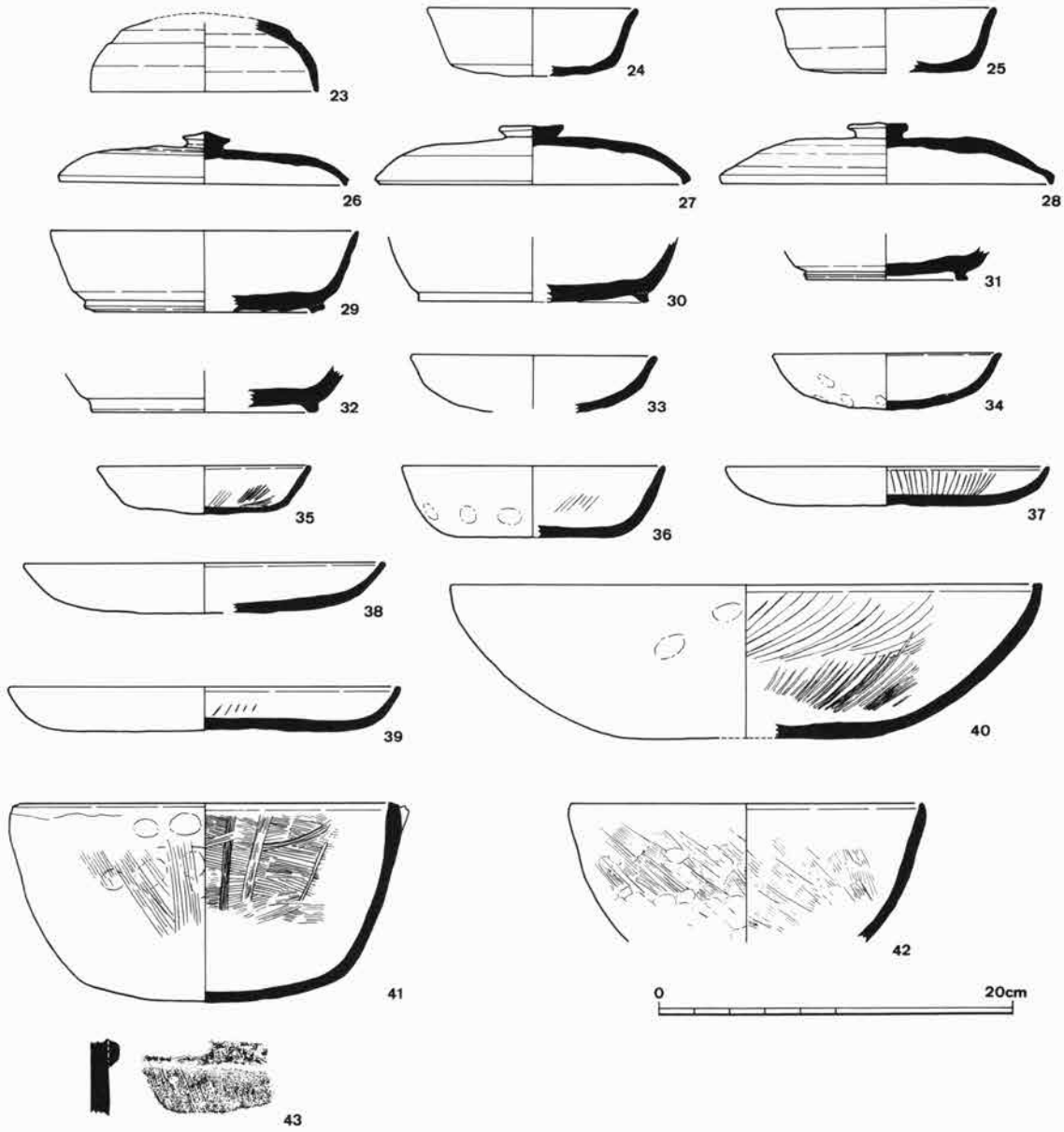
22は６トレンチから出土した。１は須恵器杯である。口径10.9cm、高さ2.9cmを測る。窯体内で焼け歪んだものを図上復原した。２は土坑ＳＫ38から出土した須恵器壺である。口径3.8cm、高さ8.8cmを測る。３は土坑ＳＫ22から出土した須恵器短頸壺である。口径4.9cm、高さ5.7cmを測る。底部には焼成前に穿孔がされている。色調は内面暗灰色、外面淡灰色をなす。４はＳＫ35から出土した須恵器杯Ａである。口径9.4cm、器高3.4cmを測る。５～８は溝ＳＤ36から出土した。５～７は須恵器、８は土師器である。８は口径25.4cm、残存高7.2cmを測る。色調は淡褐色をなす。９・10は須恵器である。ＳＫ01から出土した。９は杯Ｂ蓋である。口径17cm、器高3.2cmを測る。10は杯Ｂである。11・12はＳＫ12から出土した土師器である。11は口径18.2cm、器高4.3cmを測る。色調は淡褐色をなす。12は杯である。口径29.4cm、器高15.4cmを測る。13はＳＤ11から出土した土師器である。口径10.3cm、器高4.05cmを測る。色調は内面明褐色、外面は暗橙灰色をなす。14はＳＫ10から出土した須恵器皿である。器高は3.2cmを測る。15はＳＤ19出土の灰釉陶器である。底径は4.7cmを測る。16～18はＳＤ24から出土した須恵器である。19はＳＤ25から出土した須恵器長頸壺である。高台径は7.1cmを測る。20は溝ＳＤ35から出土した須恵器蓋である。

(2) 7トレンチ出土遺物(第53図)

23～43はＳＤ01から出土した。23～32は須恵器、33～42は土師器である。23は蓋である。口径13.4cm、残存高4.1cmを測る。色調は内面灰色、外面は黒灰色をなす。24・25は杯Ａである。24は口径11.8cm、器高3.9cmを測る。色調は灰色をなす。25は口径12.4cm、器高3.7cmを測る。色調は淡黄灰色をなす。26～28は杯Ｂ蓋である。26は口径16.3cm、器高3.1cmを測る。色調は内面青灰白色、外面は青灰色をなす。27は口径17.4cm、器高3.4cmを測る。色調は黄灰色をなす。28は口径18.8cm、器高3.6cmを測る。色調は内面茶褐色、外面は黄灰色をなす。29～32は杯Ｂである。29は口径17.4cm、器高4.6cmを測る。色調は淡灰色をなす。33～40は杯である。34は口径13cm、器高3.2cmを測る。色調は橙茶褐色をなす。35は口径12cm、器高2.7cmを測る。内面屈曲部から見込み部分にかけて放射状暗文が施される。色調は内面橙褐色、外面は黄褐色をなす。36は口径15cm、器高４cmを測る。内外面とも器表面が磨耗しているが、一部に放射状暗文が確認できる。37は口径18.4cm、器高2.2cmを測る。内面の立ち上がり部分には比較的明瞭な放射状暗文がみられる。色調は内外面とも橙茶褐色をなす。39は口径22.4cm、器高2.6cmを測る。内面立ち上がり部分に放射状暗文が確認できる。色調は橙褐色をなす。40は口径33.4cm、器高8.9cmを測る。口縁部内面および立ち上がり部分に暗文がみられる。色調は内面橙褐色、外面は淡橙褐色をなす。41はボウル状の器形をなす鉢である。口径20.8cm、器高10.7cmを測る。口縁部は１か所片口となっている。色調は内面淡橙灰色、外面淡橙褐色をなす。42は口径20cm、残存高7.7cmを測る。外面の調整は上半部がユビオサエのちハケ、下半部は指頭によるナデである。色調は内面淡黄褐色、外面は黄褐色をなす。43は円筒埴輪片である。

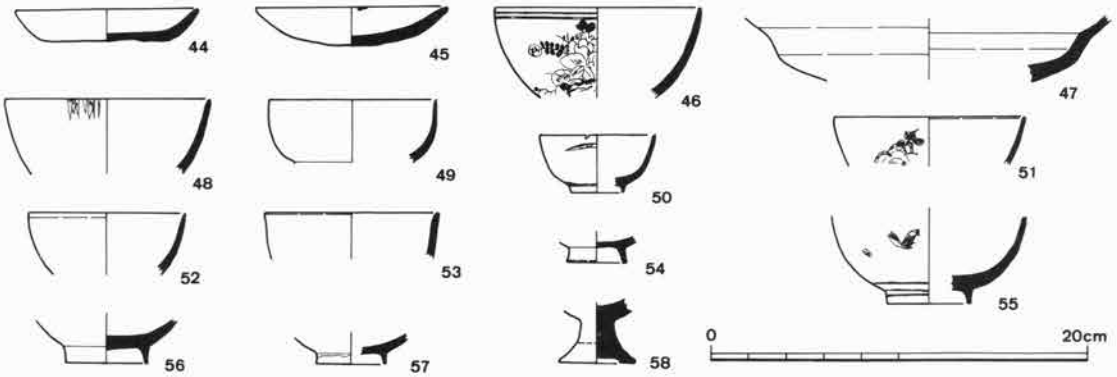
(3)10トレンチ出土遺物(第54図)

溝状の落ち込みＳＸ04から出土した近世の遺物をまとめた。44・45は土師器皿である。44は口



第53図　出土遺物実測図(2)

径11cm、器高２cmを測る。色調は淡茶褐色をなす。底部付近には円盤状の粘土の一部を切り欠き、接合したと思われる痕跡がある。また、口縁端部に灯明皿としての利用の痕跡と思われる煤の付着がみられる。45は口径9.8cm、器高1.7cmを測る。色調は淡灰褐色をなす。内面および外面に成形時におけるナデの痕跡をとどめている。47は黄瀬戸鉢である。淡黄色の施釉がなされている。48は染付け椀である。口径11cmを測る。49は口径９cmを測る。色調は灰色をなす。50は染付け椀である。口径6.2cm、器高3.1cm、底径2.8cmを測る。口縁端部に焼成前の欠けがある。口径は10.2cmを測る。51は染付け椀である。口径は11cmを測る。外面に草花文様を描いている。「くらわんか茶椀」と思われる。52は白磁椀である。口径は8.4cmを測る。55は染付け椀である。底径4.5cmを測る。見込み部分は無釉である。なお、51と55は接点がみられないため別個体として図示しているが、文様の構成および焼成などから同一個体の可能性がある。54・56・57は底部であ



第54図　出土遺物実測図(3)

る。54は底径3.1cmを測る。色調は内面が淡灰褐色、外面は橙茶褐色をなす。56は白磁椀である。底径4.4cmを測る。57は染付け椀である。58は灰釉陶器の灯明台である。台部には無釉部分がある。

4．ま と め

今回の試掘調査では、1トレンチ、5・6トレンチで遺構の広がりが確認できた。1トレンチでは、竪穴式住居跡が2基確認された。比較的遺構の残存状況も良好であり、古墳時代後期の集落の広がりがあるものと思われる。2トレンチおよび3トレンチの北半部は遺構密度が低い。4トレンチはトレンチ全域でピットが確認されており、トレンチ調査のため建物跡の認定はできなかったが、出土遺物から類推すると、奈良時代の掘立柱建物跡が展開している可能性が考えられる。5トレンチではトレンチ東側で布掘りを施した掘立柱建物跡や竪穴式住居跡を検出しており、この周辺に遺構が展開している可能性が確認された。6トレンチでは、6条の溝が確認されており、集落を画する溝か道路遺構になる可能性もある。また、7トレンチで検出した溝跡からは、奈良時代の土器のほか埴輪片が出土している。これらの資料は方墳の存在を示すものと思われ、北側に位置する梅の子塚古墳群との関連が考えられる。

（柴　暁彦）

注1　小泉裕司「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集　城陽市教育委員会）1995
近藤義行ほか「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集　城陽市教育委員会）1975
小泉裕司「芝山遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集　城陽市教育委員会）1999

注2　小池寛「芝山遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第25冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987

注3　古瀬誠三「5．芝山遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第77冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1997

注4　増田孝彦「5．芝山遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第89冊　(財)京都府埋蔵文化財調

査研究センター）　1999

注５　近藤義行「１．森山遺跡発掘調査概報」（『城陽市文化財調査報告書』第６集　城陽市教育委員会）　1977

注６　長谷川達「14．宮ノ平遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第８冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1983

注７　**調査参加者**　杉江貴宏・朴貴広・三浦大祐・鷲原裕太郎・岩本佳之・稲垣あや子・川村真由美・寺尾貴美子(順不同・敬称略)

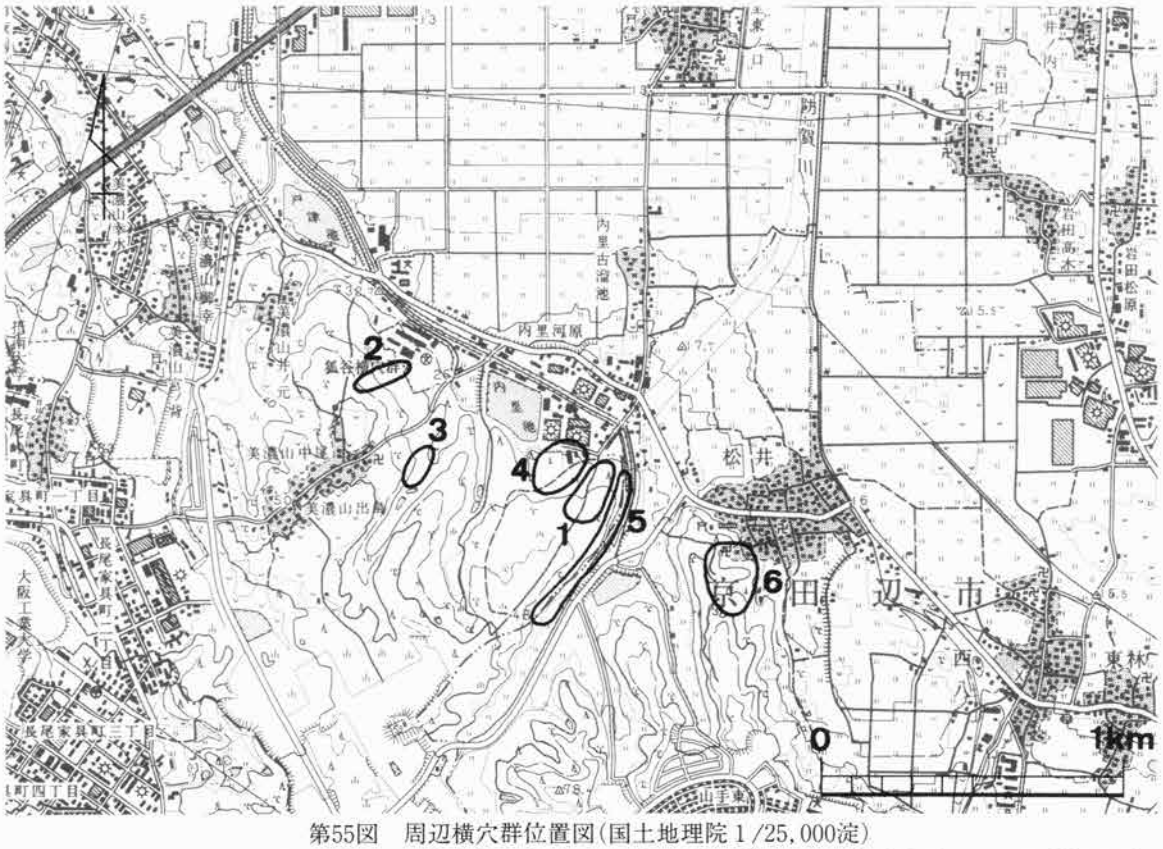
5．第二京阪道路関係遺跡
平成13年度発掘調査概要

はじめに

八幡市南部から京田辺市にかけての生駒山系の北端部にあたる丘陵地には、横穴が稠密に分布することが知られている。この丘陵を横切って、第二京阪道路および京都南道路の建設が予定され、『八幡市遺跡地図』には同道路建設予定地の北側に隣接して女谷横穴群が、南側に隣接して荒坂横穴群が分布しており(第55図)、丘陵上では荒坂遺跡が周知の遺跡として知られていた。

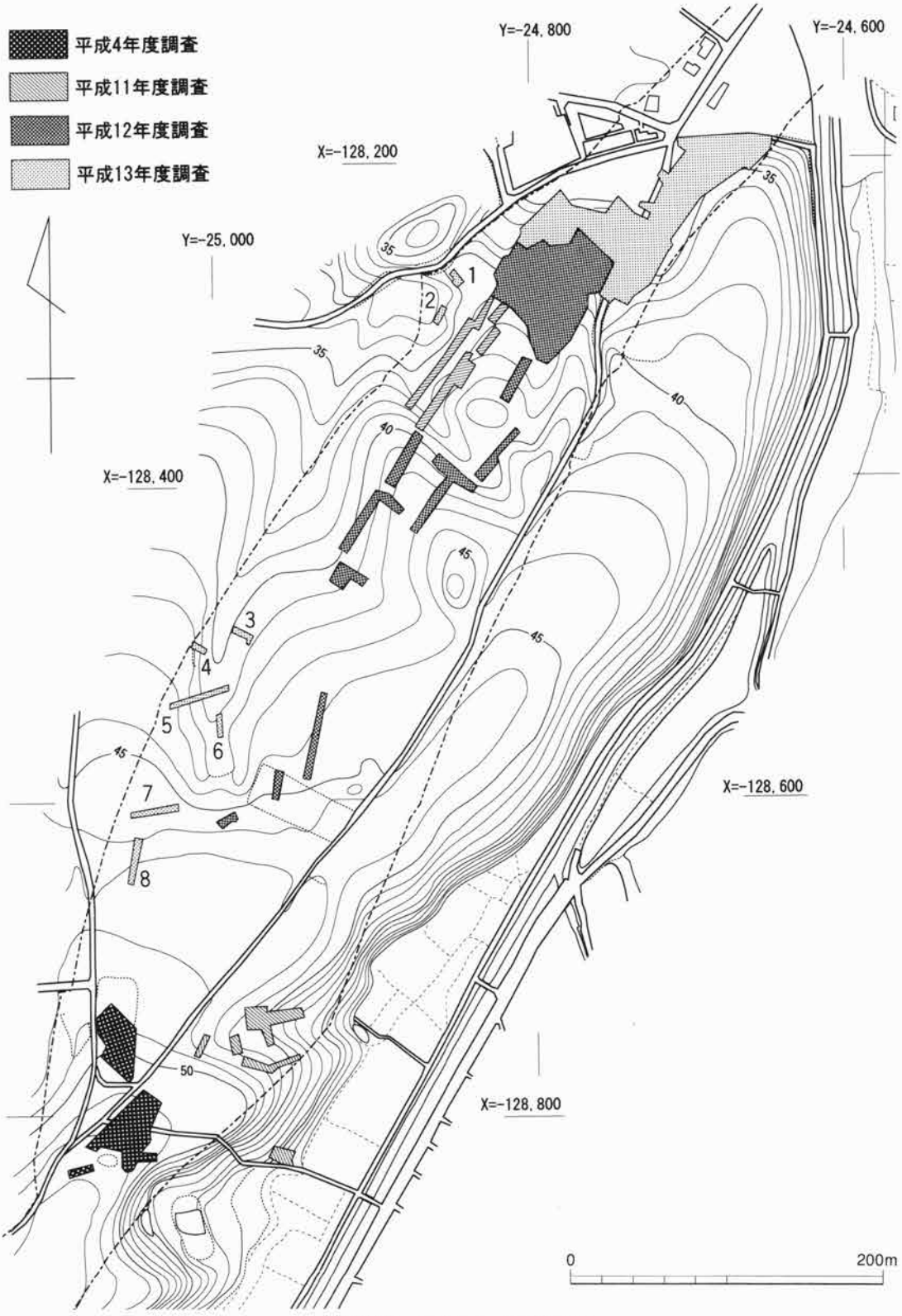
そのため、平成11年度と12年度の２か年にわたって、女谷横穴群と荒坂横穴群の拡がりの確認と、荒坂遺跡の性格を確認することを目的として試掘調査を実施した。試掘調査の結果、女谷横穴群・荒坂横穴群に挟まれた丘陵先端付近の道路予定地内に、49か所の横穴状の土色の違いを検出し、両横穴群が道路予定地内にまで拡がっていることを確認した。このうち、平成12年度には、女谷横穴Ｂ支群の15基の横穴を調査(注1)した。

平成13年度には、女谷横穴Ｃ支群で横穴８基を含む630㎡、荒坂横穴Ｂ・Ｃ支群では横穴22基を含む3,900㎡を調査(注2)し、女谷横穴群・荒坂遺跡では範囲確認のための試掘調査を実施した(第56図)。



第55図　周辺横穴群位置図(国土地理院１/25,000淀)

１．調査地　２．狐谷横穴群　３．美濃山横穴群　４．女谷横穴群　５．荒坂横穴群　６．松井横穴群



第56図　調査トレンチ配置図

試掘調査は、女谷横穴群から荒坂遺跡に至る丘陵上に８本の試掘トレンチを設定した。１～６トレンチが女谷横穴群、７・８トレンチが荒坂遺跡に関わる範囲確認調査である。試掘調査面積は、女谷横穴群が440㎡、荒坂遺跡が270㎡である。

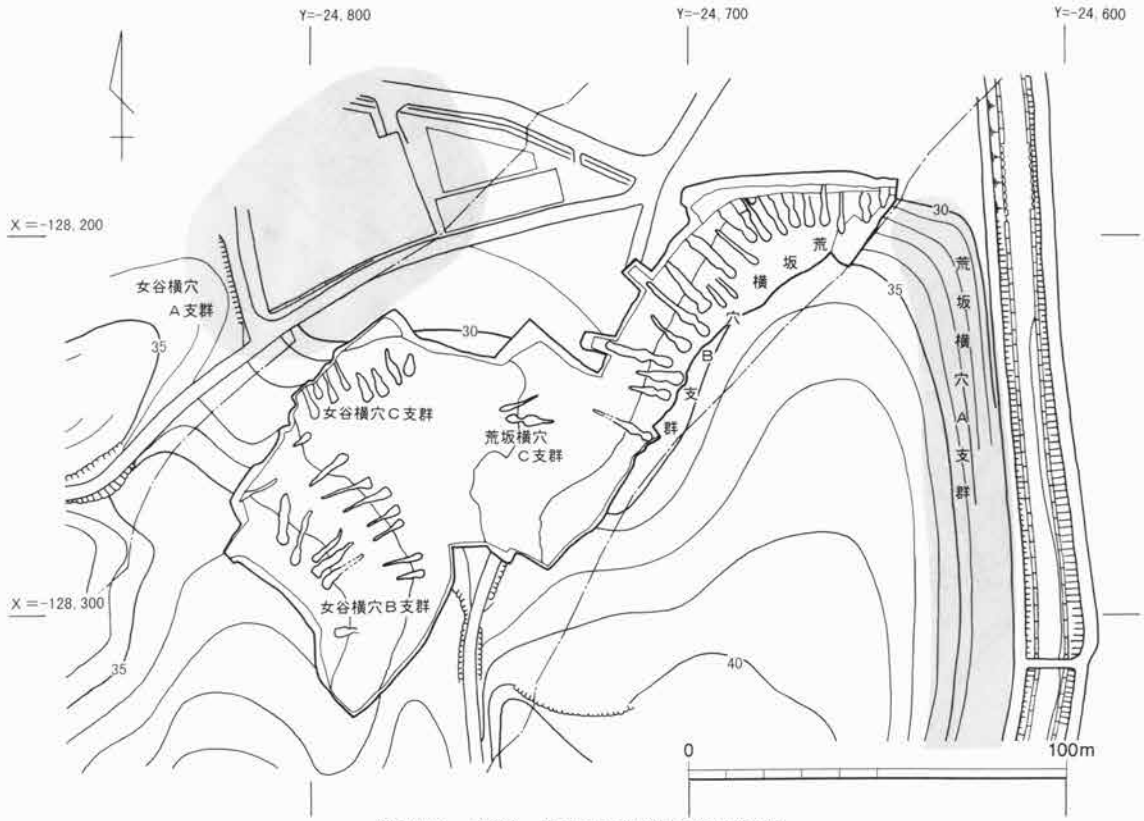
現地調査は、女谷横穴Ｃ支群の調査が平成13年４月11日～６月28日までを要し、荒坂横穴Ｂ・Ｃ支群の調査が４月11日～10月３日、荒坂遺跡・女谷横穴群の試掘調査は11月５日～11月15日までを要した。調査は、調査第２課第３係長辻本和美、同主任調査員岩松保、同主査調査員伊賀高広、同調査員村田和弘、第１係主査調査員黒坪一樹が担当した。この報告は、現地担当者との議論を踏まえた上で、岩松が執筆した。

今回の調査は、第二京阪道路および京都南道路の建設に伴い日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施したものである。調査に係る経費は日本道路公団関西支社が負担した。調査にあたっては、京都府教育委員会・八幡市教育委員会をはじめ、日本道路公団関西支社京都工事事務所・国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所には、ご指導・ご協力を頂いた。また、多くの方々に、現地作業と整理作業に参加していただいた。各専門家の方々からは、現地作業または整理作業中に有益なご教示を得た。ここに記して御礼を申し上げたい。(注3)

(1)女谷(おんなだに)横穴群

１．調査経過

従来、横穴の空閑地と考えられていた女谷横穴群と荒坂横穴群の間を発掘調査した結果、女谷横穴群は３つの支群からなっていることが判明した。そのため、『八幡市遺跡地図』所載の女谷



第57図　女谷・荒坂横穴群支群分布図

横穴群をＡ支群、谷を隔てた南側斜面の一群をＣ支群、この谷が南東方向に延びていった両斜面に造られた一群をＢ支群と呼称することとした(第57図)。

平成13年度の女谷横穴群は、Ｃ支群の８基の横穴を調査し、あわせて、女谷横穴群の南側丘陵上で試掘調査を実施した。試掘調査は、荒坂遺跡の隣接地にまでおよび、試掘トレンチ８か所のうち、１～６トレンチが女谷横穴群に関わる範囲確認調査である。

２．Ｃ支群の調査

(1)調査概要

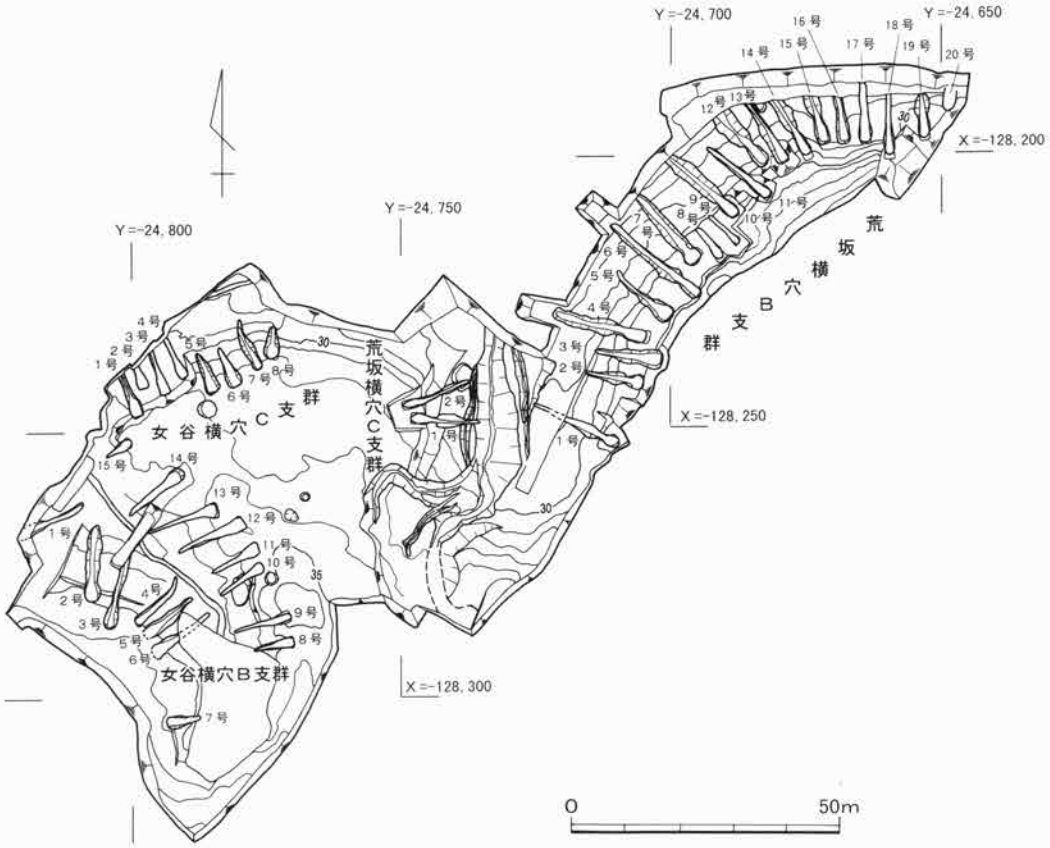
現在、報告書作成のための整理作業を進めており、ここでは、個別の横穴についての説明を極力省き、標題を挙げて概述したい。

①支群の構成

Ｃ支群は、北東方向に開口する谷の南斜面に分布し、８基の横穴から構成されている。この横穴群の北側には、谷を挟んでＡ支群が分布する。

Ｃ支群の８基の横穴は、Ｂ支群の調査でも認められたように、横穴の主軸方向とその近接具合により、隣接する２～３基の横穴で、小群に分けることが可能である。Ｃ支群の場合には、１・２号、３・４号、５・６号、７・８号と隣り合う２基づつで、４小群に分けられる(第58図)。

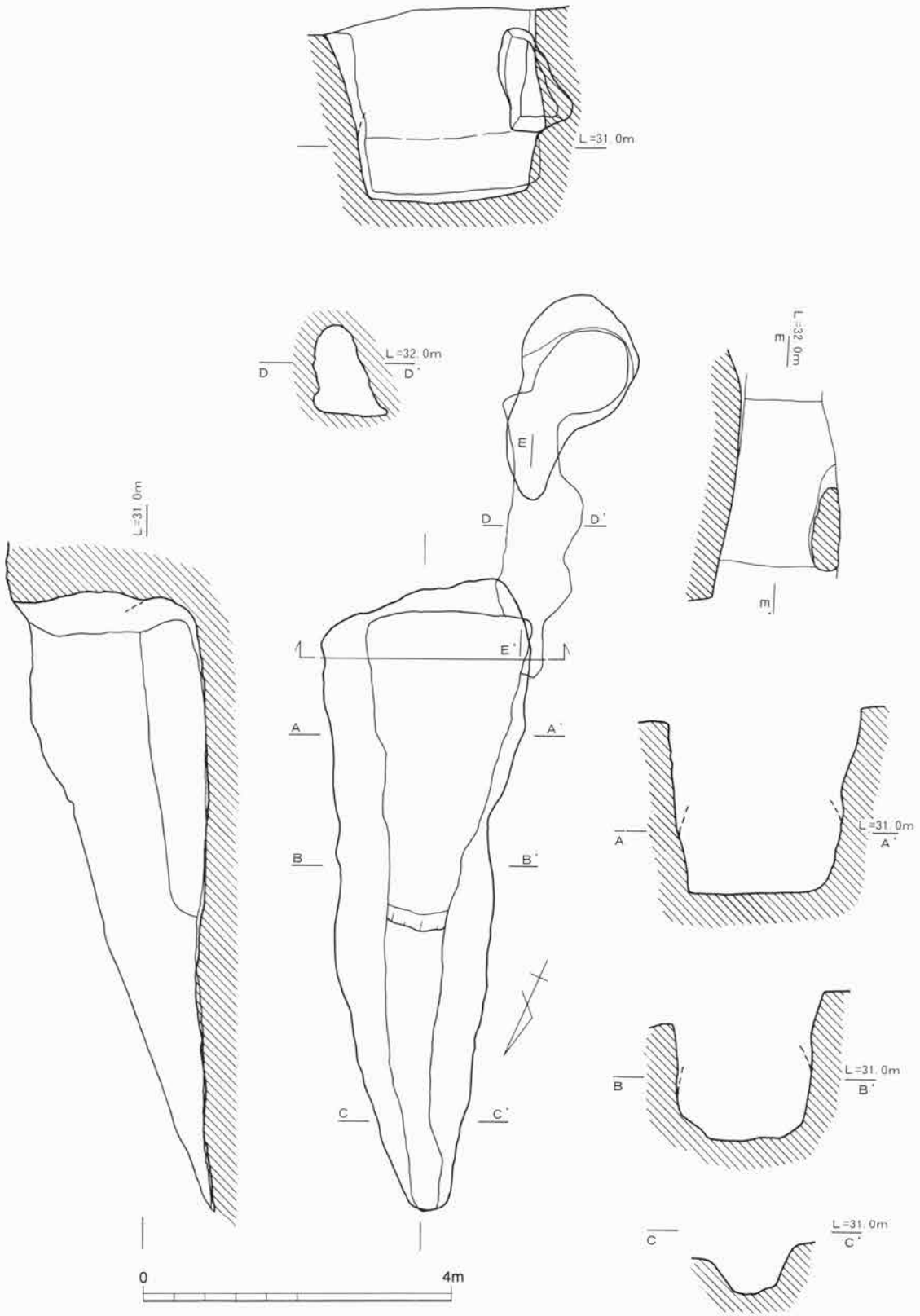
さらに、これらの４小群は、大きく２群に分けることが可能である。西側の４基の横穴(１～



第58図　女谷・荒坂横穴群横穴分布図

4号)は、丘陵斜面の低い位置に横穴が造られており、東側の横穴(5～8号)は、斜面の中腹に造られている

②5号横穴と人骨の出土状況



第59図　女谷横穴C支群5号横穴実測図

第60図　女谷横穴C支群５号横穴
遺物・人骨出土状況図

女谷横穴C支群５号横穴は、墓道端は消失しており、元々の形状等は不明である。奥壁の西角には副室状の穴が穿たれていた。この穴の埋土を掘削中にビニール片が出土した。また、副室状の穴の末端は、径1.7mの井戸状の竪穴となっている。以上のことから、おそらく、現代に極めて近い時期に、副室状の穴の先端部に農作業用の井戸が穿たれ、副室状の穴が空洞となっているのを認めたために、そこから玄室側に向けて若干の掘削が行われたものと想定される。この副室状の穴の中からはビニール以外のものは出土しなかったので、どの時期に空けられたかは不明である。

遺物や人骨は、この副室状の穴の底面よりも50～60cm下位に位置している。

この横穴では、遺物や土器が出土する一面の埋葬面を確認した。また、遺物等の出土は見なかったが、土層の観察では、50～60cm上位でもう一面の埋葬面が形成されていた可能性がある。これは、ほぼ副室状の穴の底面に対応する高さである。

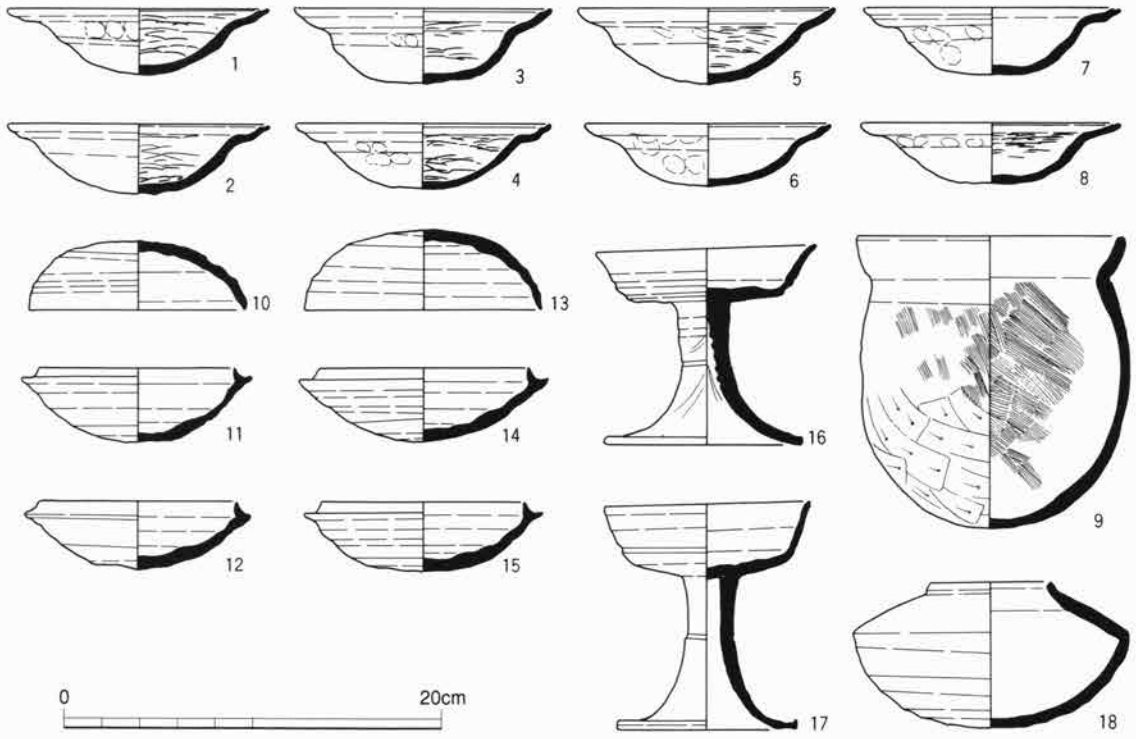
副葬遺物は、奥壁に沿って、東側に杯身・杯蓋などの須恵器が集められており、玄門側では須恵器杯身・杯蓋や高杯が置かれていた。奥壁に接して西側と土器群の前面の２か所で人骨を検出した(第60図)。これらの人骨は、ともに、人為的に動かされた状況である[注4]。

東側の骨は、四肢骨を集めてひとまとめにし、それらとは別に頭蓋骨を置いている。頭蓋骨は、右上顎が頭頂部側にあり、天地が逆転している。骨の遺存状況が悪いが、右上顎には、第２小臼歯、第１～３大臼歯が残っており、第３大臼歯(親不知)は未萌出と見られる。15～16歳以上と考えられる。性別等は不明である。西側の骨は、成人と小児の骨が１か所に片づけられたもので、小児の骨が成人の腰椎の上にのっていたので、おそらく成人の骨を片づけた後に小児の骨が片づけられたようである。成人骨は男性で壮年(25～40歳)で、身長は150～155cm程度でやや低いものである。小児は、３歳程度で、性別は第二次徴期以前であるため、不明である。

(2)出土遺物(第61図)

それぞれの横穴からは、須恵器・土師器を中心とした副葬遺物が出土している。鉄器には、刀や鏃、刀子が出土している。装身具には、耳環が出土している。

１～８は土師器杯で、９は土師器甕、10～18は須恵器である。土師器杯は、２号横穴(１～５)、４号横穴(６～８)からのみ出土している。半球状の体部から横方向に引き出された口縁部を有し、ヘルメット状の形をしている。体部や口縁部の整形は、手づくねによって行われており、口縁端部内面には、強く横方向にナデた結果の沈線もしくはわずかな段を有している。内面には暗文が前面に施されている。すべて、明褐色を呈している。現時点では類例がなく、狐谷横穴群の調査



第61図　女谷横穴Ｃ支群出土遺物実測図

で類似した土師器杯が出土しているが[注5]、底部外面がケズリで調整されていることと、胎土や色調に違いが認められる。９は４号横穴から出土した土師器甕で、外面下半はケズリ、上半と内面はハケメ調整が施されている。

10～12は２号横穴より出土した杯身・杯蓋である。外面の底部・頂部を残してわずかの範囲を回転ヘラケズリしており、回転ヘラケズリを施していない範囲にはヘラ切り痕が残っている。口径10.2～11.3cmである。13～15は５号横穴より出土した杯身・杯蓋で、ともに底部・頂部はきれいに回転ヘラケズリで調整されている。16は６号横穴より出土した高杯で、柱部にしぼり痕がわずかに見て取れる。17は２号横穴より出土したものである。高杯の杯部の底部は、すべて回転ヘラケズリで調整している。18の短頸壺は、３号横穴の墓道より出土した。

(3)小 結

５号横穴では、遺存状況が良い人骨を検出し、その出土状況を詳しく観察することができた。また、ヘルメット形をした特徴的な土師器が出土し、その系譜を明らかにする中で、横穴の系譜を明らかにすることができるかも知れない。

一部の横穴では、墓道端までの調査を実施できなかったが、これについては、来年度以降に調査を実施する予定である。

３．試 掘 調 査

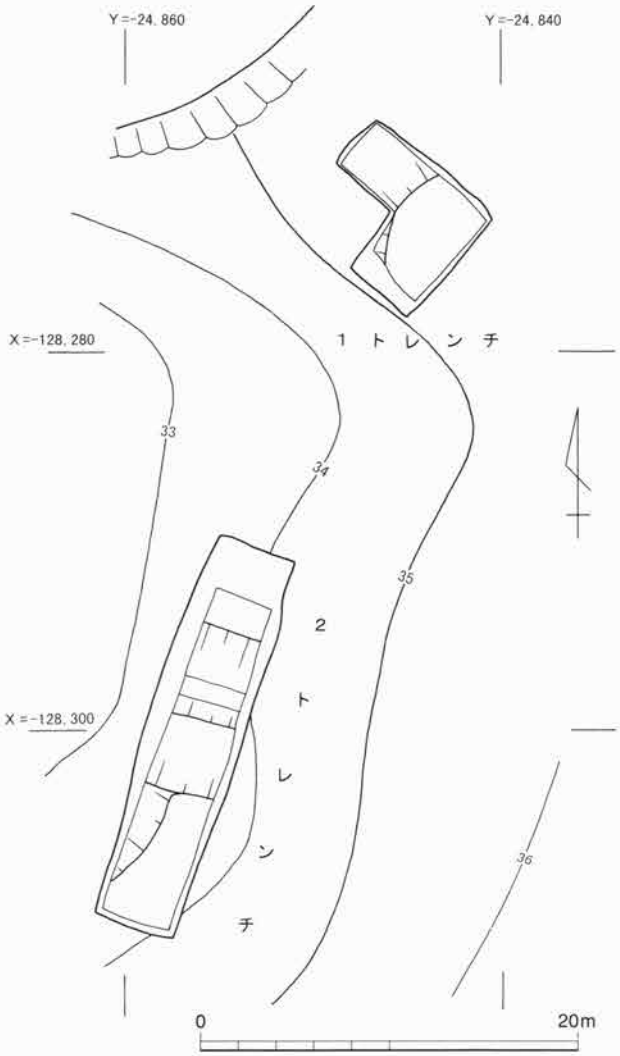
(1)調査概要

女谷横穴群に関わる試掘トレンチは、１～６トレンチである(第56図)。以下、試掘トレンチの

概要を記したい。

1トレンチ(第56・62図)　地表の観察では、女谷横穴群の南西には東西方向に谷部が入り込んでおり、この谷の北側に設定したトレンチである。4×7mの長方形に3×4mの張り出しが伴った「L」字形をなしている。重機により掘削を行ったところ、地表下約80cmで地山となり、トレンチは丘陵の頂部付近に位置していた。トレンチの西側では、西に向かってわずかに下る傾斜面を確認しただけで、谷地形の一部を認めたに過ぎない。遺物は、近世以降の土器の破片が数点出土しただけである。

2トレンチ(第62図)　1トレンチの南西約15mの位置に設けたトレンチで、谷部中央付近に5×21mのトレンチを設定した。浅いところでは、地表下約70cmで地山となる。トレンチ全体としては谷部に当たっており、中央部で東西方向に延びる谷筋を検出した。トレンチ中央部分の深いところでは地表下2.5mで地山となる。トレンチ内における地山面での比高差は、南斜面と北斜面でそれぞれ1.4m、0.8mを測る。調査により、この南側の平坦面では、西に向かって下る傾斜面を確認し、東西方向の谷地形が西に向けてやや広がっていく様相を示す。遺物の出土はなく、横穴などの土色の違いも認められなかった。



第62図　女谷横穴群試掘調査(1・2トレンチ)

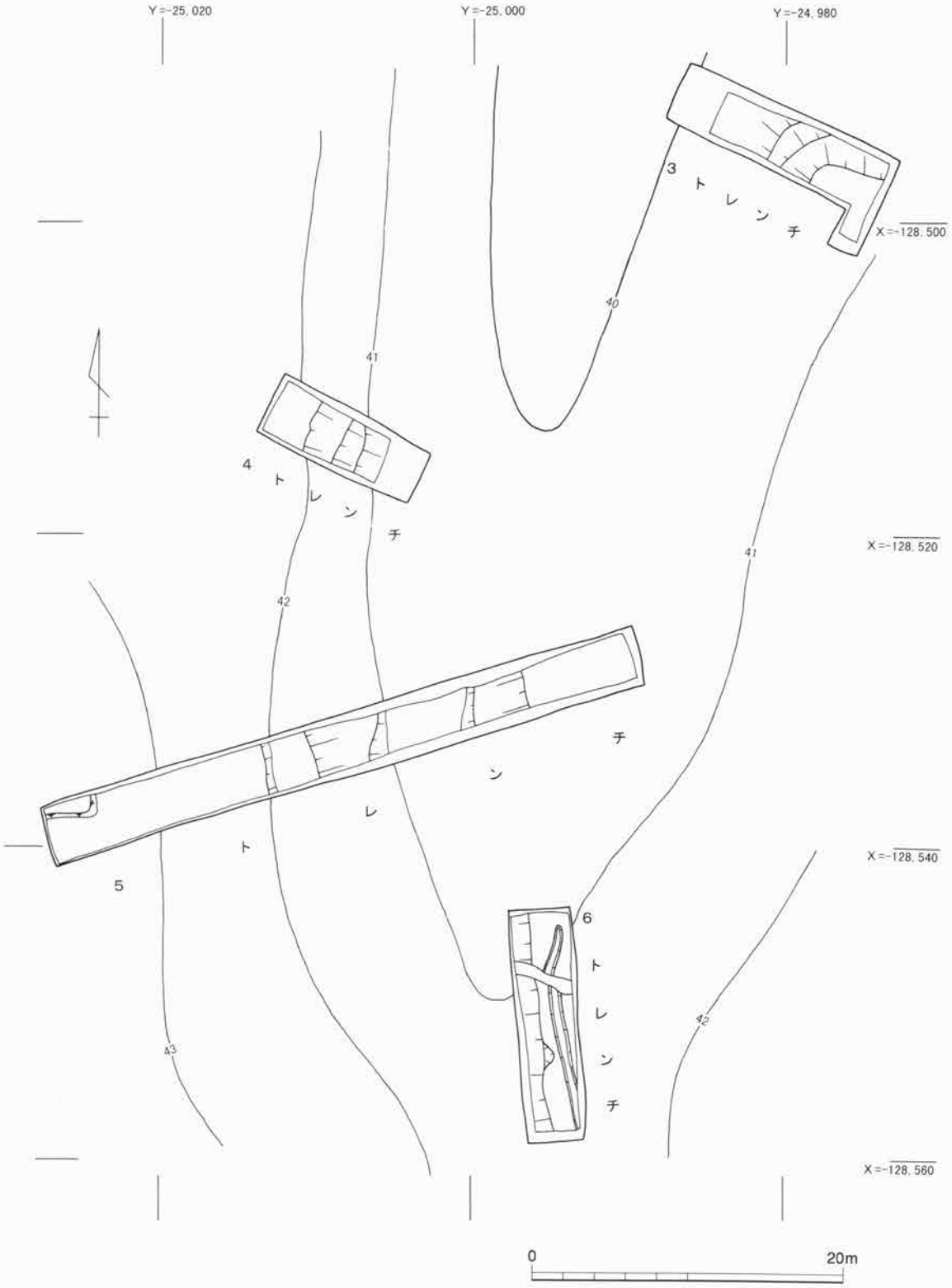
3トレンチ(第63図)　南北に伸びる谷地形の東斜面に設定した4×15mのトレンチである。トレンチ東南部で、地表下1.6m付近で地山面となり、北西に向けて下る傾斜面を検出した。比高差1.8mを測り、調査地外に向けてさらに下る傾向を示す。遺構・遺物は全く認められなかった。

4トレンチ(第63図)　3トレンチの南西約25mの位置に設定したトレンチで、谷の西斜面に当たる。4×10mにわたって掘削したが、地山面が比高差2.4mにわたって東に向けて下る傾斜面を確認した。遺構の色の違いは全く認められず、遺物も出土しなかった。

5トレンチ(第63図)　4トレンチの南約15mに設定したトレンチである。南北方向に伸びる谷筋を検出した。西半は東に向けて下る比高差約4mの斜面となっており、東斜面は比高差約3mにわたって検出した。谷の両側の斜面には横穴などの遺構は確認できなかった。遺物は、西端部の竹林

の盛土直下から、近世以降の土師質土器や磁器・瓦が数点出土しただけである。

6トレンチ(第63図)　谷の最奥部に設定したトレンチで、4×15mのトレンチである。地表下0.6～1.0mで地山面を検出した。地山面の標高は40.2～40.6mで、南へ向けてやや高くなる。地山面で幅約0.6mの南北方向の溝を13mにわたって検出した。埋土から近世以降の磁器・瓦が



第63図　女谷横穴群試掘調査(3～6トレンチ)

数点出土した。地境溝的なものと判断される。また、トレンチの西辺に平行して、約0.3mの比高差を測る傾斜面を確認した。西側に広がる谷の一部と判断される。

(2)小 結

以上、概述したように１～６の試掘トレンチでは顕著な遺構・遺物を確認することができなかった。基本的には、地表面で観察されるような谷地形を調査により追認することとなったが、それらの谷内では、横穴はおろか、それ以外の遺構も確認できなかった。特に１・２トレンチの谷のように、横穴群に近接した谷であっても横穴は見つからなかった。横穴を造るに際して、何らかの規制があったためとも言え、予め墓地として選地されていたためと考えられよう。さらに、他の時代の遺構も確認されないのは、横穴の墓地が営まれたという記憶が長期間にわたって保持されたために、その一帯に対して後年の土地利用が規制された結果と考えられる。

４．ま と め

平成13年度の女谷横穴群の調査は、上述のように、Ｃ支群の８基の横穴の調査と、試掘調査を実施した。試掘調査では新たな横穴や遺跡の確認には至らなかった。横穴の調査に関しては、荒坂横穴群の横穴調査と内容が重複する部分が多いので、その節においてまとめたい。

(2)荒坂（あらさか）横穴群

１．調 査 経 過

荒坂横穴群は、女谷横穴群の東側の谷に分布している(第57図)。

第二京阪道路建設予定地内の試掘調査によって、埋没谷が新たに見つかり、その両斜面に横穴が分布していることが判明した。『八幡市遺跡地図』所載の荒坂横穴群は、この埋没谷の東側に位置する丘陵の東斜面に分布しているので、新たに見つかった横穴群は、荒坂横穴群を構成する支群と判断された。そのため、『八幡市遺跡地図』所載の荒坂横穴群をＡ支群、この西側の埋没谷の東側に位置する横穴をＢ支群、西側に位置する横穴をＣ支群とした。

『八幡市遺跡地図』所載の横穴分布では、女谷横穴群と荒坂横穴群の間は、横穴の分布しない空閑地と考えられていた。しかし実際には、ほとんど切れ目無く横穴が造られていることが判明した。そのため、両横穴群は基本的には同一の横穴群と捉えて良い分布状況を示していると考える。今回の調査では、Ｂ支群で20基、Ｃ支群で２基の横穴を調査した。

２．調 査 概 要

ここでの報告は、個別の横穴の説明は極力省略し、項目を掲げて概述したい。

①羨道を付した横穴

横穴は通常、玄室・羨道・前庭部・墓道等から構成されている。遺骸を納めるための空間が玄

室であり、羨道・墓道は玄室に至るための通路、前庭部は通路の前面に造られた空間と捉えることができる。墓道は丘陵斜面を切り通して造ったもので天井を有さないのに対して、羨道は天井が掘り残されてトンネル状を呈している部分と区別した場合、女谷横穴B・C支群の横穴では、玄室とそこに至るための墓道からなっており、前庭部や羨道は認められなかった。荒坂横穴B支群で調査を実施した結果、羨道を有する横穴を確認した。

15～17号横穴では、羨道部の天井が残っており、その壁面の掘削状況を観察すると、玄室空間を構成する湾曲とは別に、その前面に別の湾曲が作り出されていた。この湾曲が羨道部の隧道を構成していることが確認できた。そのため、この点を観察することで、天井が崩落している横穴であっても、羨道が付設されているかどうかを推定できることが判明した。

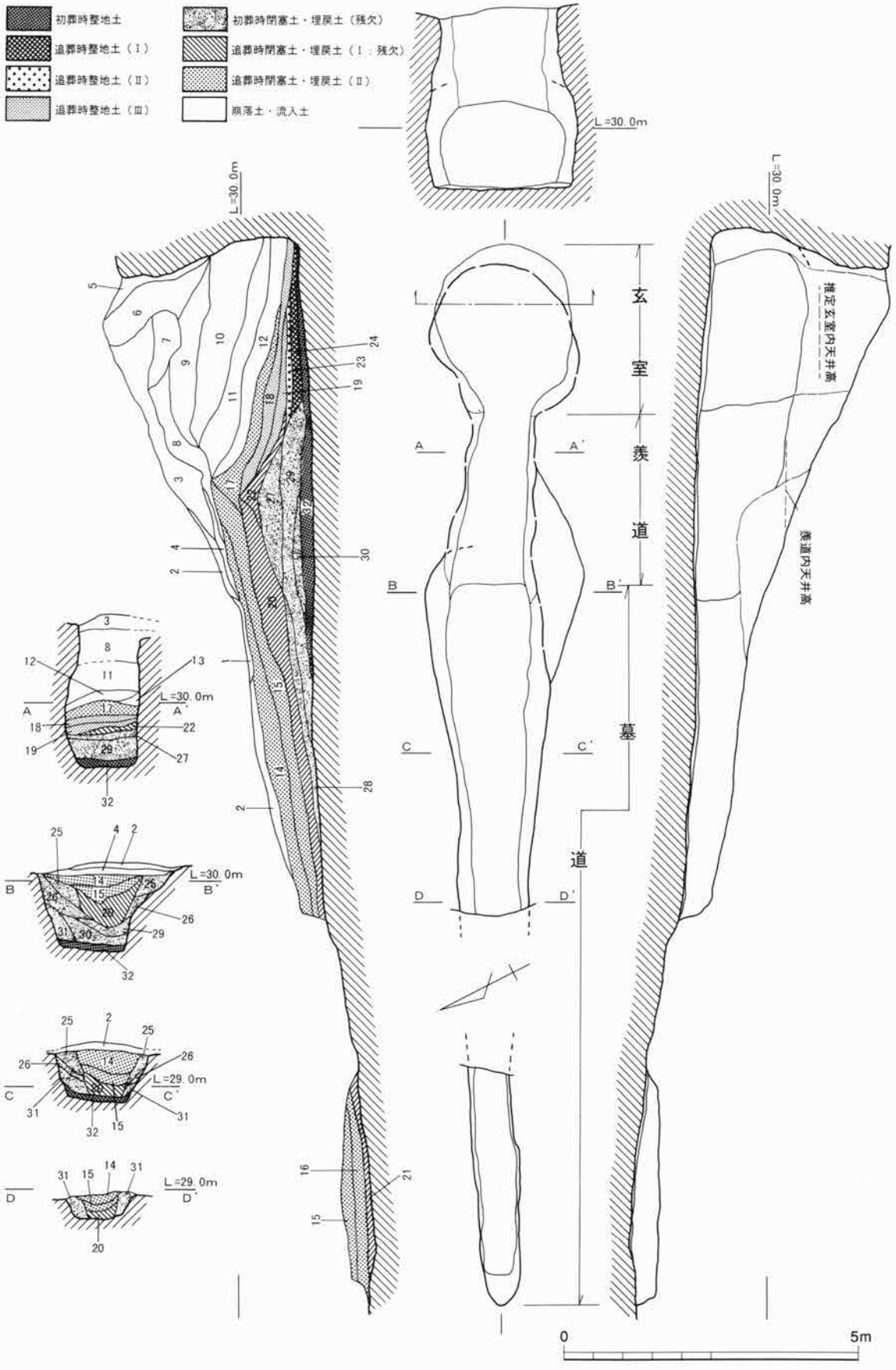
第64図は荒坂横穴B支群1号横穴の実測図で、羨道が玄室の前面に付設されているものである。1号横穴の場合、長さ2.85m、幅2.35mの隅丸方形状を呈した玄室に、2.9m程度の羨道が取り付く。その前面に12.25mにわたって墓道が構築され、全長は18mを測る。壁面の湾曲具合から、玄室内、羨道部の天井までの高さは、掘形の底面からそれぞれ1.8m、1.5m程度に復原でき、羨道は玄室よりもやや低い位置に天井がある。墓道底の幅は最大1.45mで、墓道端近くでは0.6mと狭くなる。墓道の最深部は羨門部にあり、1.2m程度が現存している。墓道の掘削は、横断で見ると、上方がやや開く逆台形を呈している。この横穴は、その使用時の早い段階に羨道の天井が崩落したようで、奥壁に向かって左側には天井の一部が廂状に残っていたのに対して、右側には天井の崩落面が認められた。

荒坂横穴B支群の20基のうち、完掘したものが19基で、そのうち12基に羨道が付設されていたと判断され、羨道を有する横穴の比率が高い。羨道については、女谷横穴B・C支群の調査では全く認められなかったものである。その理由の一つには、南山城地域の横穴は、砂礫層を主体とした大阪層群を掘り抜いているため、天井は言うに及ばず、壁面も長期間の間に崩落してしまい、そのわずかな湾曲が消失してしまったためと考えられる。また、両支群は荒坂横穴B支群と較べて、横穴自体の遺存状況が悪かったこともその一因と考えられる。ところが、女谷横穴群の全ての横穴で、程度の差こそあれ、玄室を構成する壁面の湾曲は認めていたので、羨道部の湾曲のみが全ての横穴で失われてしまったと考えるのは不自然である。そのため、女谷横穴群は羨道を有さないタイプの横穴ばかりで構成されており、荒坂横穴B支群の横穴のみが羨道を有していると考えられる。こういった横穴の形式に、それぞれの支群を経営した集団の差が反映している可能性が指摘できるかも知れない。そうすると、横穴の形式を選択する主体は、支群を構成していた集団であると指摘でき、そういった集団の性格を明らかにする手掛かりとなろう。

②横穴の閉塞と追葬のプロセス

一般的に横穴は、玄室に遺体を安置する時以外は玄門部・羨門部で閉塞されていたと考えられる。北西約0.7kmにある狐谷横穴群の調査では、玄門部の床面に、主軸に直交する方向で、幅約40cmの溝が掘られているのが確認され、板戸をはめ込んで閉塞した痕跡と推定されている[注6]。

前年度に調査を実施した女谷横穴B支群では、閉塞石や板戸をはめた溝状の遺構を全く検出で



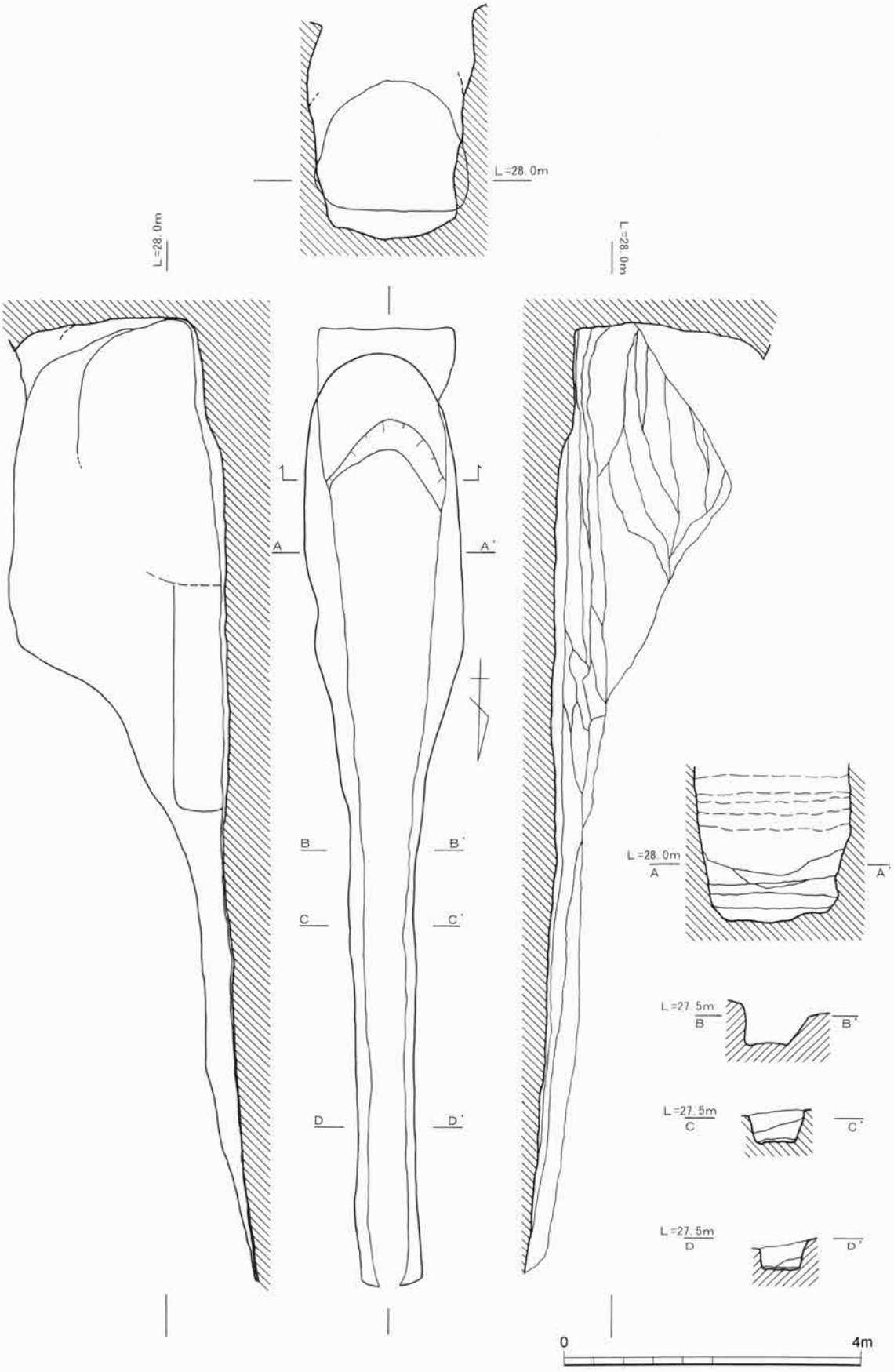
第64図　荒坂横穴Ｂ支群１号横穴実測図

きなかった。その代わりに、玄門部～墓道の全面に数10cmの盛土・整地土がなされているのを確認した。これを最終埋葬の終了後に板戸を玄門部に固定するための押さえの土とし、あわせて墓道全体にわたって数10cmの厚さで土を盛り上げたためと考えた。この整地土の直上には、閉塞部から墓道端に向けて、その中央に溝状の遺構も検出した。その内部には多数の石礫が埋まっていたので、この溝を暗渠排水溝と解釈し、墓道内の整地土とともに、横穴使用終了後に、玄室を保全するための施設と判断した(注7)。

荒坂横穴Ｂ支群では、大形の横穴が造られていることに加え、その残り具合が良好であったので、墓道の掘削高が２ｍ程度残存しているものも含め、1.5m程度の残存高を有する横穴の土層を数多く観察することができた。このような墓道・玄門部分の高さが十分に残存している横穴において、閉塞部分から墓道にかけての土層を観察すると、女谷横穴Ｂ支群において暗渠排水溝と判断したような溝が、墓道内に複数回掘削されていることが認められ、横穴の最終段階のみならず、追葬を行っている際にも同様の造作を行っていることが判明した。また、その溝内は必ずしも石礫で埋められているものばかりではなく、暗渠排水溝と判断できないものもあった。さらに、墓道上の溝の切り合いに対応するかのように、閉塞部に盛り上げられた土にも、何回かの盛り直しが認められた。これらのことから、墓道の埋土上で認められた溝状の掘り込みは、追葬などを行うために玄室に進入する際に、掘り返して簡易に作られた通路と解釈し、玄門・羨門において観察された閉塞土の盛り直しは、玄室に進入するために閉塞土を除去し、その後に、土で埋め戻した行為と考え、このプロセスが何度か繰り返されたと判断した。

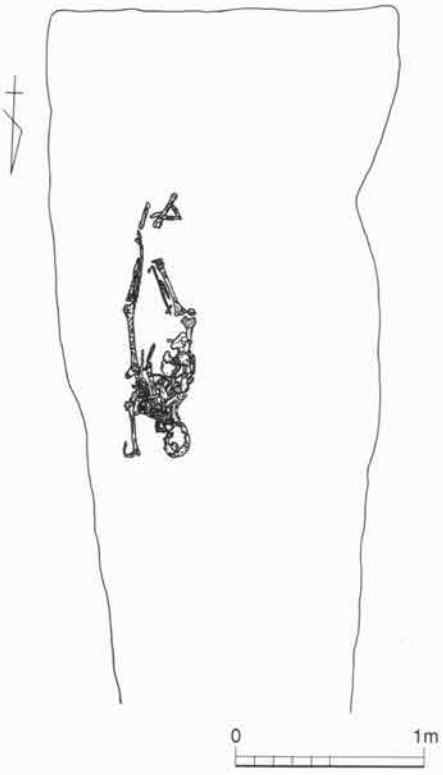
第64図を例に上述のプロセスを見ると、横穴掘削後に、まず羨道・玄室床面全体に５～10cm程度の整地を行う(初葬整地土)。この整地土は黄色系統の砂がほとんどで、水抜きを兼ねたものであろう。玄室内に遺体の安置と副葬品の配置を行う。その後、土を玄門部の天井近くまで盛り上げて、横穴の閉塞を行うと同時に、通路である墓道部分も、ほぼ墓道全体が見えなくなるぐらいにまで埋め戻す。図中の初葬時閉塞土・埋戻土であるが、後述のように、何度かの追葬の度に上位を掘削した後に埋め戻しているため、その残欠である。

追葬の段階には、墓道上に溝―横穴に至るための通路を掘り返し、閉塞部の盛土部分も身体が入る程度に土を除去する(追葬時閉塞土・埋戻土Ⅰ；残欠)。横断面Ｂ－Ｂ'で見ると、通路は上幅約１ｍ、下幅約0.5m、深さ0.8m程度の逆台形を呈している。閉塞部分が最も高い位置にあるので、玄室内には、玄門部から下方へ潜り込むように入っているようだ。玄室内に整地を行い(追葬時整地土Ⅰ)、追葬行為等を終えた後に、掘削した通路と進入口に土を盛り直している。この時、通路内に石礫が多く混じっている場合が多く認められるのに対して、閉塞土にはほとんど石が混じっていないので、石礫を除去した土を閉塞土に用い、取り除いた石礫を通路の埋め土に用いているものと思われる。この後、横穴に入り込む際には、再び、墓道上に通路を掘削し、羨門・玄門部の閉塞土を除去し、玄室内での作業の終了後、再々度、埋め戻すこととなる。この墓道上の通路内の埋め戻し土中に土器を埋納している例も散見されるが、閉塞土内に土器はほとんど混じらない。



第65図　荒坂横穴Ｂ支群18号横穴実測図

基本的には、昨年度と今年度に調査を行った女谷横穴Ｂ・Ｃ支群および荒坂横穴Ｂ・Ｃ支群では、上述のように、羨門もしくは玄門部に土を盛り上げて横穴の閉塞を行っていると判断されるが、この方法以外の閉塞方法も二例だけであるが確認できた。荒坂横穴Ｂ支群４号横穴においては羨門部の地山面で、主軸に直交する方向に穿たれた溝を検出したので、板戸がはめ込まれていたと判断される。また、同５号横穴では、人頭大の石を羨門部に積み上げて閉塞を行っていた。ところが、板や石による閉塞方法を採ったのは、それぞれの横穴での初葬時に近い段階のもので、これらの施設の上には、上述のような、盛土による閉塞が認められた。このように、女谷・荒坂横穴群の横穴においては、板戸による閉塞や石による閉塞は全く行われなかったとは言えないが、その頻度はかなり低いものと言える。



第66図　荒坂横穴Ｂ支群18号横穴
人骨出土状況図

③18号横穴の人骨出土状況

女谷・荒坂横穴群の調査では10体程度の人骨が出土しているが、そのうち、人骨の配置状況が分かるものが８体ある。これらの人骨はすべて、人為的にその配置が動かされた状況で、自然な状態で遺体が骨化したものは認められなかった。

荒坂横穴Ｂ支群18号横穴では、玄室の入り口近くで、東側壁に近接させ、玄室主軸にほぼ平行し、頭位を玄門方向に向けて置かれていた[注8]（第65・66図）。骨の特徴より、身長150cm程度、25～40歳くらいの男性の骨であることがわかった。

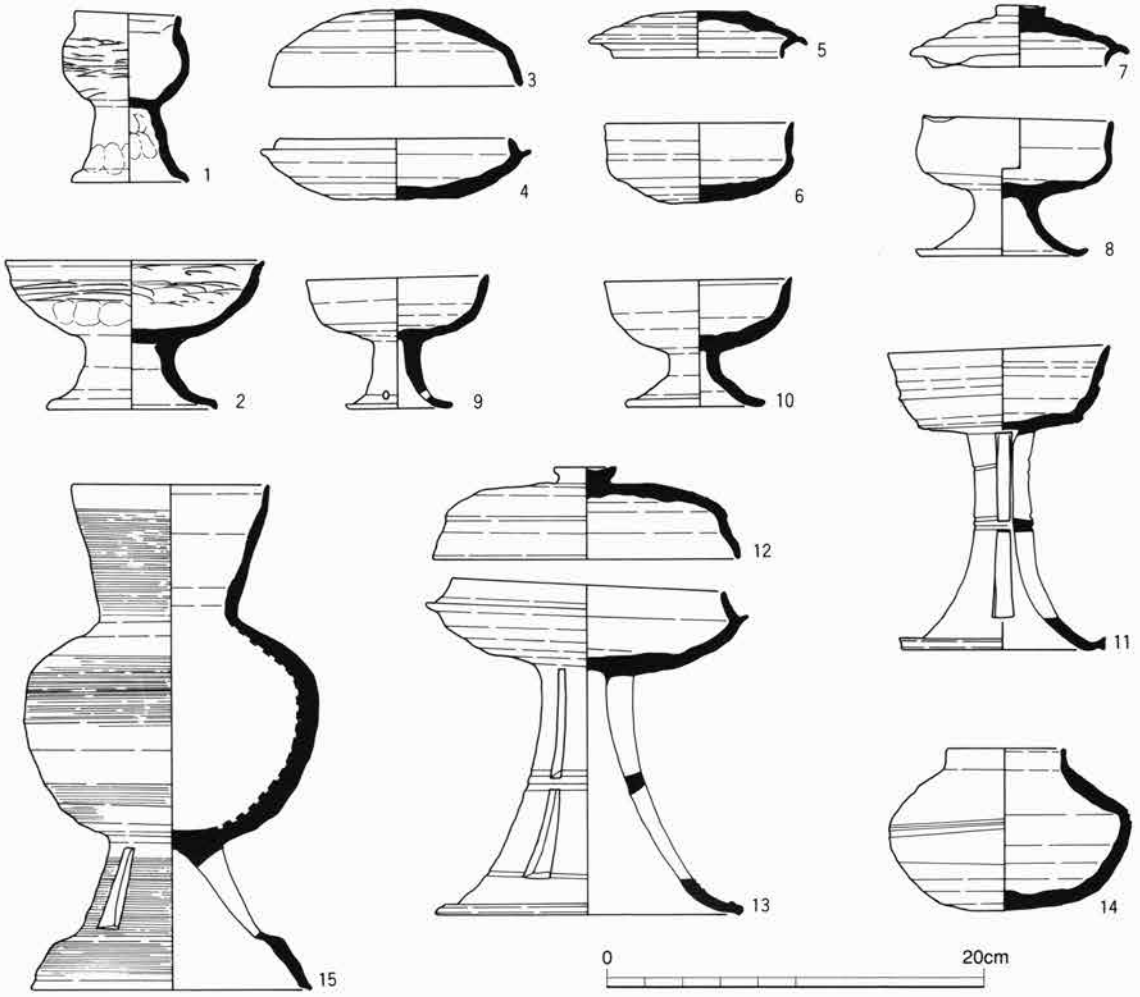
詳しくその出土状況を見ていくと、まず、頭蓋骨と下顎骨が約20cm離れて位置している。これは頭部の骨化により自然に動いた状況ではなく、人為的に配置したと判断される。この頭蓋骨を基準にすると、胸部付近に、上腕骨・尺骨・肋骨・胸骨・肩甲骨等が集積しているが、すべてが一つ一つの骨に遊離しており、人為的にまとめられた状況である。この骨の集積の最上位には両脚が位置しており、足元から両脚の骨を見た場合、右側に左脚があり、左側に右脚がある。左脚については、大腿骨から甲の骨までが伏臥の位置で交連（関節が本来の関係を留めた位置にあること）していた。右脚は、大腿骨が仰臥の位置にあるのに対して、脛骨・距骨は交連しており、伏臥の位置にある。すなわち、左脚が元の位置にあるとして、これを規準に見ると、右脚全体が左脚と入れ替わった状態にあり、右大腿骨が180度回転した裏表の状態にある。骨盤は左右の寛骨と仙骨の三つに分かれて、右大腿骨の上に置かれている。左右の寛骨の位置は一方が天地逆になっていたので、人為的に分割した後に置かれたことが窺われる。

通常、横穴や横穴式石室での人骨は、遺骸を玄室内に安置し、それが骨化した後に、次の遺骸

を納めるためのスペースを空けるために行われた、いわゆる後かたづけの結果、動かされたと考えられている。もし、追葬を行うためのスペースを空けたために骨が動かされたのであれば、追葬がない場合、すなわち、スペースを空ける必要がない場合には、骨を動かす必要がないので、自然に骨化した状態で骨が見つかることが推察できる。ところが、今までの調査では、自然な状態のままで骨化した例は見つかっていないし、骨を動かしているのに空閑地が空けられていないものも見られる。そのため、意図的に人骨を動かす行為を追葬のための空閑地を空けるための後かたづけと一概に考えることはできない。すべての骨が動かされた状態であり、自然に骨化した状態のものがないという点を重視すると、遺骸を、おそらく横穴外で骨化させて、その骨を横穴内に動かし置くという行為が執り行われたと考えられ、これらの行為全体が、当時の葬送儀礼であったと考えられる。

④通路状遺構

荒坂横穴C支群では、墓地内に設けられた通路状遺構を検出した。女谷横穴B支群で検出した通路状遺構と同様に、底面が硬化した溝状の遺構で、長期にわたって踏み固められた結果、硬くなったものと推測される。この通路状遺構は墓地内を行き来するために、人為的に造られたもの



第67図　荒坂横穴群出土遺物実測図

と判断されるが、この通路は同１号横穴の墓道の上を横切って造られており、横穴を築造した後に通路が整備された状況が窺われる。これが、荒坂横穴Ｃ支群だけの特殊事情なのか、女谷・荒坂横穴群全体に関わるものなのか、今後の検討課題である。

荒坂横穴Ｂ支群にあっては、１号横穴の前面で、通路状の平坦面を確認し、４号横穴や７号横穴の前面を一部拡張して、通路の検出に努めたが、自然地形の斜面を検出したに止まった。１号横穴の前面で検出した通路は、谷の抉れに接した平坦面にあるので、おそらく、調査トレンチがそこにまで到達していなかったためであろう。

３．出 土 遺 物（第67図）

荒坂横穴Ｂ・Ｃ支群の副葬品には、杯や高杯・長頸壺などの須恵器と杯・壺・甕などの土師器がある。鉄製品には、馬具(轡)・刀・鏃・刀子があり、装身具には、耳環、碧玉製の管玉、ガラス小玉、石製小玉がある。珍しいものとしては、円筒埴輪がＢ支群５号横穴の羨道部分および閉塞部分より３個体分が出土した。また、墓道内よりは、先述の追葬段階に掘り返した通路の埋戻土中より、須恵器甕や土師器甕が、破砕した状況で出土している。

１・２は土師器で、１は14号横穴から出土した脚付小壺で、外面には横方向の暗文が見て取れる。２は15号横穴から出土した高杯で、内・外面ともに暗文が施されている。

３～15は須恵器である。３・４は13号横穴より出土した杯身・杯蓋のセットである。それぞれの口径は、13.3cm、12.0cmとやや大きいものである。５・６は、９号横穴より出土した杯およびその蓋である。７～13は、高杯およびその蓋である。高杯の杯部底部は、すべて回転ヘラケズリで調整している。７・８は９号横穴より出土したもので、５・６のセットによく似るものである。９・10、12・13は10号横穴より出土した。９は三方向に円形の透しが穿たれている。11は11号横穴より出土した。14の短頸壺は16号横穴より出土した。15は10号横穴より出土した脚付長頸壺で、外面全体にカキ目痕が残る。透しは三方向に空けられている。

４．ま と め

これまでの女谷・荒坂横穴群の調査によって、45基にもおよぶ横穴が新たに確認でき、この地域は大規模な横穴群が造られた墓域であったことが判明した。

①荒坂横穴Ｂ・Ｃ支群の横穴が造られた時期は、女谷横穴群と同じく、おおむね古墳時代後期後半(６世紀末～７世紀中葉)と考えられる。横穴は、隣接した２～３基を単位とする小群に分けることができ、この小群はある家族の世代が替わるごとに作られた横穴の集積と判断される。そのため、調査を実施した女谷・荒坂横穴群の範囲だけでも、20以上の家族がこの墓地を利用していたと判断される。

②荒坂横穴Ｂ支群の横穴からは、須恵器・土師器・鉄器の他に、馬具・ガラス小玉などが出土し、女谷横穴Ｂ・Ｃ支群と較べると、種類・量ともに豊富である。荒坂横穴Ｂ支群には、女谷横穴群と較べて有力な集団が葬られていた可能性がある。また、荒坂横穴Ｂ支群の横穴は、羨道を

有して、その規模が大きなものが多く、こういった点にも集団間の違いが反映されている。

③横穴の閉塞は、土を盛り上げて行っており、同時に、墓道もそのほとんどを埋めている。追葬の段階には、墓道を再掘削して通路を作り、閉塞部分に盛り上げた土の上半の一部を開けて、玄室内に入り込んでいる。

④良好な状態で人骨が出土し、当時の葬送儀礼を復原する資料を得た。おそらく横穴の外で骨化させ、横穴内では人骨を意図的に動かして配置している。人骨を動かすパターンには２～３パターンが認められ、それぞれのパターンに骨を動かし置く行為自体が葬送儀礼の手順の中に位置づけられていたものと判断される。

(3)荒坂（あらさか）遺跡

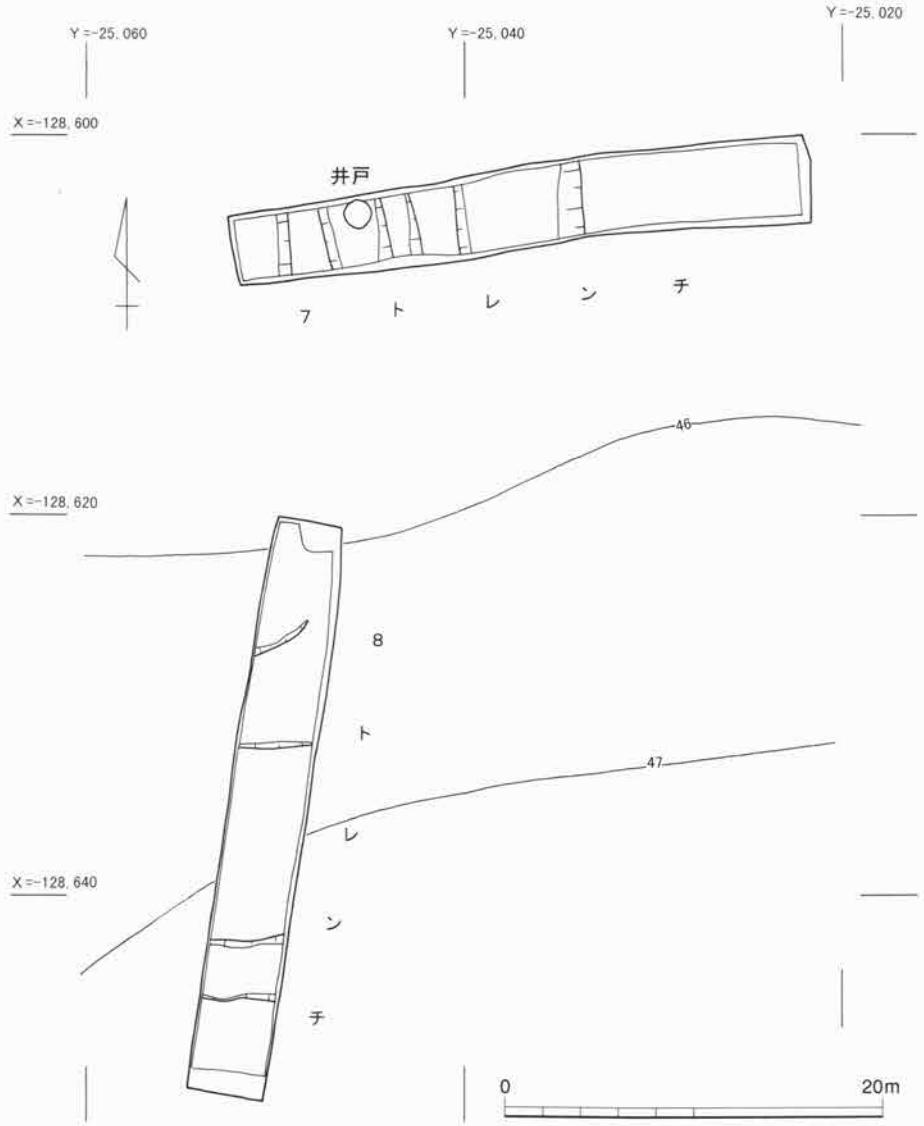
１．調査経過

荒坂遺跡の隣接地に２か所の試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した(第56図)。女谷横穴群の試掘調査１～６トレンチと一続きに実施したこともあり、それに続けて、７・８トレンチと呼称した。平成４年度の調査で、方墳・掘立柱建物跡を検出した地点から約150m北側に位置する(注9)。

２．調査概要（第68図）

７トレンチ　調査着手前には竹林となっており、筍の栽培に伴う盛土や土取りの土坑が随所に見られた。４×30mのトレンチを設定し、重機により掘削したところ、竹林に伴う造成土(最大1.5m)を除去すると、黄褐色～淡赤褐色の地山となり、いわゆる包含層は認められなかった。地山面では、中央部分より西側で南北方向の深さ20～30cmの浅い落ち込みや段を検出したが、その中には現地表で認められる地形に対応したものもあり、竹林の造成に伴う土取り跡と判断される。竹林の造成土に覆われて、円形の井戸を検出した。井戸は、漆喰で作られた水溜もしくは肥料用もので、筍栽培に利用されたものと判断される。これらの井戸や落ち込みに伴う遺物は全く出土しておらず、時期の決め手はないが、現代を大きく遡るものではなかろう。遺物は、地山上の竹の根痕の埋土中より、時期不明の土師皿片１点が出土したのみである。

８トレンチ　７トレンチと同じく、竹林の造成土を除去すると、黄褐色の地山を確認した。トレンチ南半部は、ほぼ平坦で、標高45.6～45.8mを測る。中央部分より北側は、約25cmの段を成した後に北に向けて徐々に下っている。この段を伴ったテラスには、竹の根が多く入っており、竹林造成時に成形された地形と判断される。トレンチ南側で東西方向の幅３m、深さ15～25cmの浅い溝を検出した。遺物の出土はなく、時期は不明であるが、その埋土は竹林造成土とは異なっているので、現代のものとは違って、古い時期に遡る可能性がある。もしそうならば、この溝は検出した深さが浅く、この溝を検出した地山面も平坦であることから、ある時期に平らかに削平



第68図　荒坂遺跡試掘調査(7～8トレンチ)

されたとものと考えられる。広範囲にわたって削平されていることは間違いないが、十分な深さで掘削された遺構についてはこの周辺に残っている可能性が指摘できる。

3．まとめ

7・8トレンチでは、筍の栽培に伴う土取り痕と井戸を検出したにとどまった。荒坂遺跡の過去の調査では、古墳や掘立柱建物跡などの遺構が見つかっており、この地にまでも遺構が広がっていたとしても、竹林の造成により、大きく削平されているようである。唯一、8トレンチでは東西方向の溝を検出したが、その性格や時期を特定できるような遺物の出土は全く認められなかった。

おわりに

第二京阪自動車道および京都南道路に関わる平成13年度の調査では、総数30基もの横穴の調査

と周辺地で試掘調査を実施した。試掘調査では、横穴や遺構の確認にはつながらなかった。横穴の調査では、その閉塞方法や追葬時の開口方法などについて、一定の理解を得るに至った。また、今回の調査では、人骨が比較的多くの横穴で遺存しており、それらがすべて人為的に動かされた状況であったのは、当時の葬送儀礼を考える上で、重要な手掛かりとなるものである。

このように、女谷横穴群と荒坂横穴群の調査は、横穴に関する従来のイメージを一変するものとなり、南山城地域の歴史を考える上で重要な調査となった。この横穴群の調査は、平成14年度にも引き続いて実施している。その成果をふまえて、女谷横穴群・荒坂横穴群の群構成、その築造順位、横穴の階層性の有無、支群間の関係等について細かな検討を加え、南山城地域における横穴群の位置づけに迫っていく必要がある。

（岩松　保）

参考文献

『八幡市遺跡地図』八幡市教育委員会　1990

注１　岩松保・柴暁彦「第二京阪道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第101冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

注２　平成13年度の調査結果については、その一部をすでに報告している。
村田和弘「平成13年度発掘調査略報　８．女谷横穴Ｃ支群」（『京都府埋蔵文化財情報』第82号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001
岩松保「荒坂横穴Ｂ・Ｃ支群の調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第83号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2002

注３　調査に参加していただいたのは下記の方々である（順不同、敬称略）
調査補助員　上田真一郎・村山和幸・川嶋聡子・青木政幸・李義之・奥浩和・岡田晃・喜来雄二・村上計太・浜中有紀・田村和成・澤井亮佑・谷村真慈・武永仁美・井谷朋子
整理員　荻野冨紗子・西村香代子・福田玲子・与十田節子・栃木道代・奥平廣子・小西ひとみ・辻井和子・西島真由美・東保子・尾崎嘉美・上田真一郎・李義之・木村理恵・井谷朋子・村本幸美・岡田晃・盛本照代・荒尾倫子・合田美佐子・船木登喜江・鎌田智恵子・藤田久子・内海操
調査協力および助言いただいた方々　鈴木重治・和田晴吾・高橋美久二・菱田哲朗・金子裕之・高橋克寿・吉村正親・小森俊寛・伊藤潔・上村憲章・八十島豊成・大同真白・鷹野一太郎・杉本宏・吹田直子・櫛木謙周・片山一道・有馬義人・高正龍

注４　以下の人骨に関する記述は、京都大学霊長類研究所片山一道教授の観察によるものである。

注５　久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第８冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1983

注６　注５に同じ

注７　注１に同じ

注８　注４に同じ

注９　伊賀高弘「京都南道路関係遺跡平成４年度発掘調査概要　(2)荒坂遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第56冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

6．椋ノ木（むくのき）遺跡第５次発掘調査概要

１．はじめに

(1)調査の経過

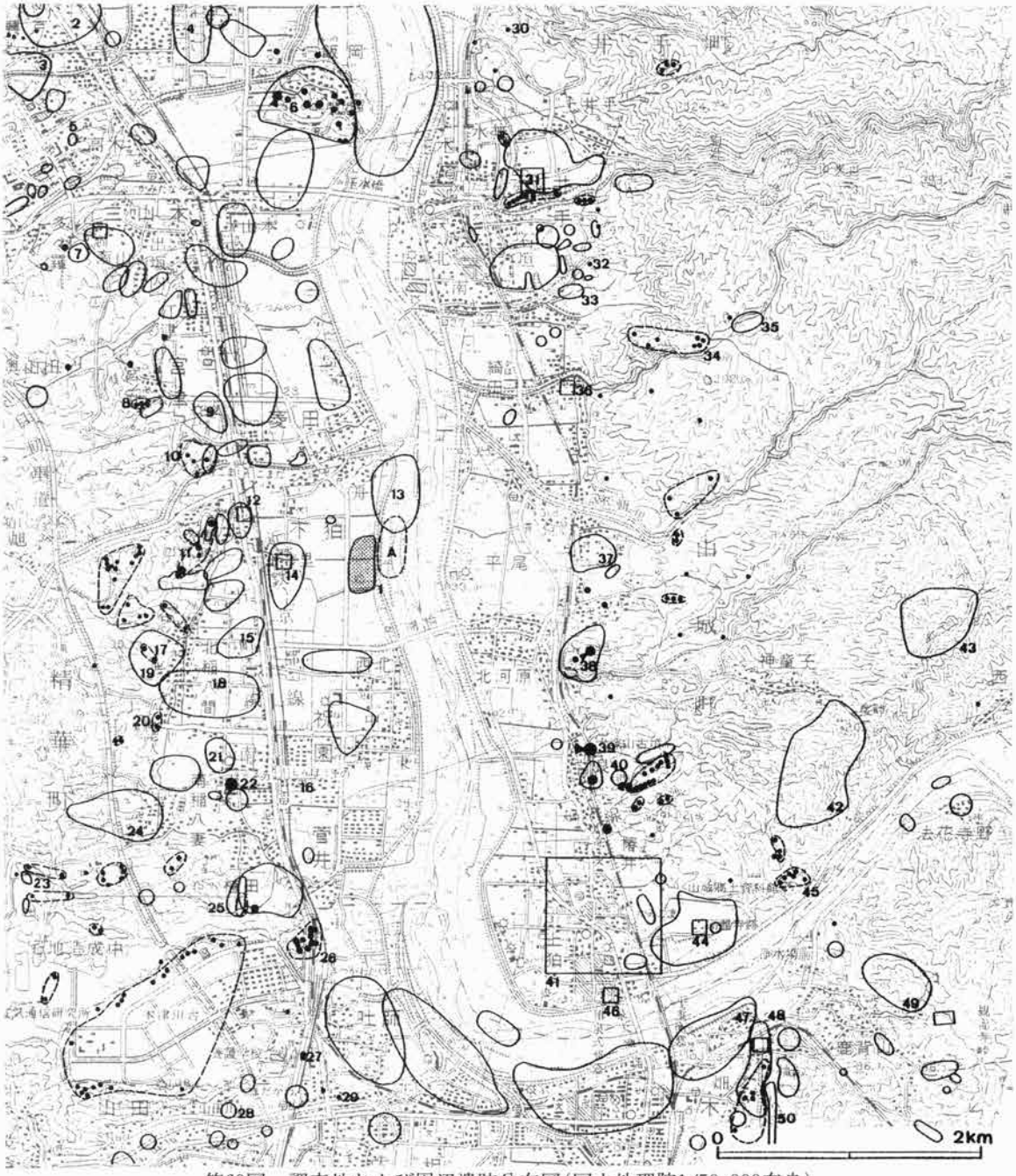
椋ノ木遺跡は、木津川左岸の自然堤防上を占める、縄文～近世にわたる集落遺跡である(第69図)。現在の行政区画の上では、相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木97ほかに所在する。付近は、水田の中に中世以来の集村が点在する景観を今にとどめる。近世の絵図によれば、南北に狭長な微高地が畑に利用されていたことがわかる。平成７年度から、下水処理施設の建設に伴い、当調査研究センターが発掘調査を実施し、多種多様な遺構・遺物を確認した(第70図)。なかでも11世紀から15世紀にわたる中世前期の拠点集落の実態が陸続と明らかにされた(注1)。とりわけ、当遺跡の資料群を基礎として南山城の中世土器編年や相楽郡条里の施工実態が明らかになった成果の意義は高い(注2)。続いて、平成12年度に実施した試掘確認調査では、当遺跡では初めての確認になる古墳時代の竪穴式住居跡、さらには縄文土器片や石庖丁が出土し、遺構面が累重していることが予測された。今年度調査は、これら先行調査を踏まえ、中世・古墳・縄文の３時期の遺構を面的に調査することを目的とし、あわせて木津川氾濫原に立地するという地勢的特性から自然科学的手法(花粉分析・植物珪酸体分析・軟質Ｘ線分析・炭素14年代測定)による地形環境分析を実施して遺跡形成過程を明らかにすることに努めた。調査担当は、調査第２課課長補佐兼調査第４係長奥村清一郎、同調査員中村周平・柴暁彦・河野一隆・藤井整が担当した。概要報告の文責は、遺構ならびに遺物(古墳時代～中世)を河野が、縄文時代遺物を近藤奈央(立命館大学大学院)が、分析については株式会社パリノ・サーヴェイが現地での担当者との討議を重ねた上で報告をまとめたものを掲載した。

調査期間には、平成13年６月13日から平成14年２月１日までをあてた。調査面積は、約3,400㎡である。なお、当調査にかかる経費は全額、京都府土木建築部が負担した。京都府下水道公社・京都府教育委員会ならびに精華町教育委員会には、多くの指導・助言をいただいた。また、調査に従事いただいた調査補助員・整理員にも記して謝意を表したい(注4)。

(2)位置と環境

椋ノ木遺跡の所在する精華町は、現在水田として土地利用されている木津川氾濫原と関西文化学術研究都市として開発著しい精華台・光台などの丘陵山地部、さらにそこから流出する小河川が形成した扇状地部によって形成される。したがって、地形は西方から東方に向かってゆるやかに傾斜し、その多様な微環境に対応して、さまざまな歴史が展開した。本調査と関連する二、三の遺跡・遺物について概述したい。

縄文時代は遺構の確認を見なかったが、丘陵部で若干の遺物の採集が知られていた。南山城で



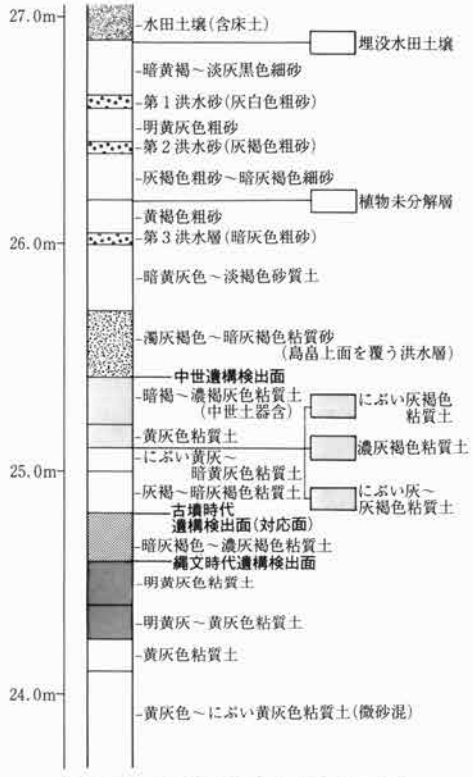
第69図　調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000奈良)

1.椋ノ木遺跡　2.興戸遺跡(興戸廃寺)　3.興戸宮の前遺跡　4.草路城跡　5.天神山遺跡
6.飯岡遺跡・飯岡古墳群　7.口駒ヶ谷遺跡　8.宮ノ口古墳群　9.宮ノ口遺跡
10.平谷古墳群　11.鞍岡山古墳群　12.下狛廃寺　13.百久保地先遺跡　14.里廃寺
15.柿添遺跡　16.山城国府推定地(奥田裕之案)　17.城山古墳群　18.北稲遺跡
19.城山遺跡(北大城遺跡)　20.国名平古墳群　21.北尻遺跡　22.丸山古墳
23.煤谷川遺跡　24.稲八妻城跡　25.畑ノ前遺跡(畑ノ前古墳群)
26.吐師七ツ塚古墳　27.白山古墳　28.樋ノ口遺跡
29.藤原百川墓伝承地　30.平山古墳　31.井手寺跡　32.南大塚古墳
33.島休遺跡　34.車谷古墳群　35.光明山寺跡　36.蟹満寺　37.湧出宮遺跡
38.平尾城山古墳　39.椿井大塚山古墳　40.松尾神社(松尾廃寺)　41.山城国府推定地(木下良案)
42.高之林城跡　43.鷲城跡　44.高麗寺跡　45.千両岩古墳群　46.泉橋寺
47.上津遺跡　48.燈籠寺廃寺　49.鹿背山城跡　50.鎌ヶ谷遺跡

第70図　トレンチ配置図(1/2,500)

の縄文時代遺跡は、後晩期を中心として盆地南部地域に集中する傾向があり、いずれも丘陵地域である。本遺跡で確認した縄文後期の遺構のように、低地部での検出は今まで例を見なかった。

弥生時代では、百久保地先遺跡で前期末の壺片が採集されているほか、中期に開村した畑ノ前遺跡でまとまった成果が挙がっている。古墳時代の開発の進展は前期後半以降であり、精華町教育委員会が調査を実施した北尻遺跡は低塚古墳であるが多量の供献土器が検出された。中でも、平成８～12年度にかけて、当調査研究センターが発掘調査を実施した森垣外遺跡は、大壁住居跡や方形居館などの有力在地首長の居処と考えられ、陶質土器や移動式竈、鍛冶滓や石製模造品やその未成品も検出され、古墳時代の渡来人の生業活動をうかがうことができる。相楽郡域には高麗寺・高麗館など古代に高麗氏の活動が史料で知られているが、その始祖的位置を占めた集団と考えられる。古代は、平成12年度の調査で版築の瓦積基壇が検出された里廃寺が造営される。当寺院は彩色の鴟尾を備えた白鳳寺院である。中世には、椋ノ木遺跡への居住が始まる。入植当初、井戸や建物が散在する程度であった11世紀中葉の集落景観は、12世紀中葉を一つの画期として大型建物や屋敷墓、条里地割りに規制された耕地が複合する集村的景観へと移行し、中世前期における荘園開発が陸続と実施される。当遺跡の北には石仏・一石五輪塔などが大量に出土した百久保地先遺跡があり、現在、隣接する舟集落内に覆屋を設けて保管・管理されている。中世後期には、椋ノ木遺跡では中枢地区が移動したことが想定され、石清水八幡領と興福寺領、東大寺領など諸権門の抗争が遺跡構造の変化に連動した可能性がある。近世には、現在にまで続く集落構成が確立したことが、史料・絵図からうかがえるが、木津川の河床が上昇して流入する小河川が天井川化し、当地は断続的に洪水の被害に見舞われることになった。その後、明治時代には山城町の不動川治水工事を嚆矢とするデ・レーケによる堤防工事が本格化し、河川営力に翻弄された社会は新たな展開を迎えることになった。

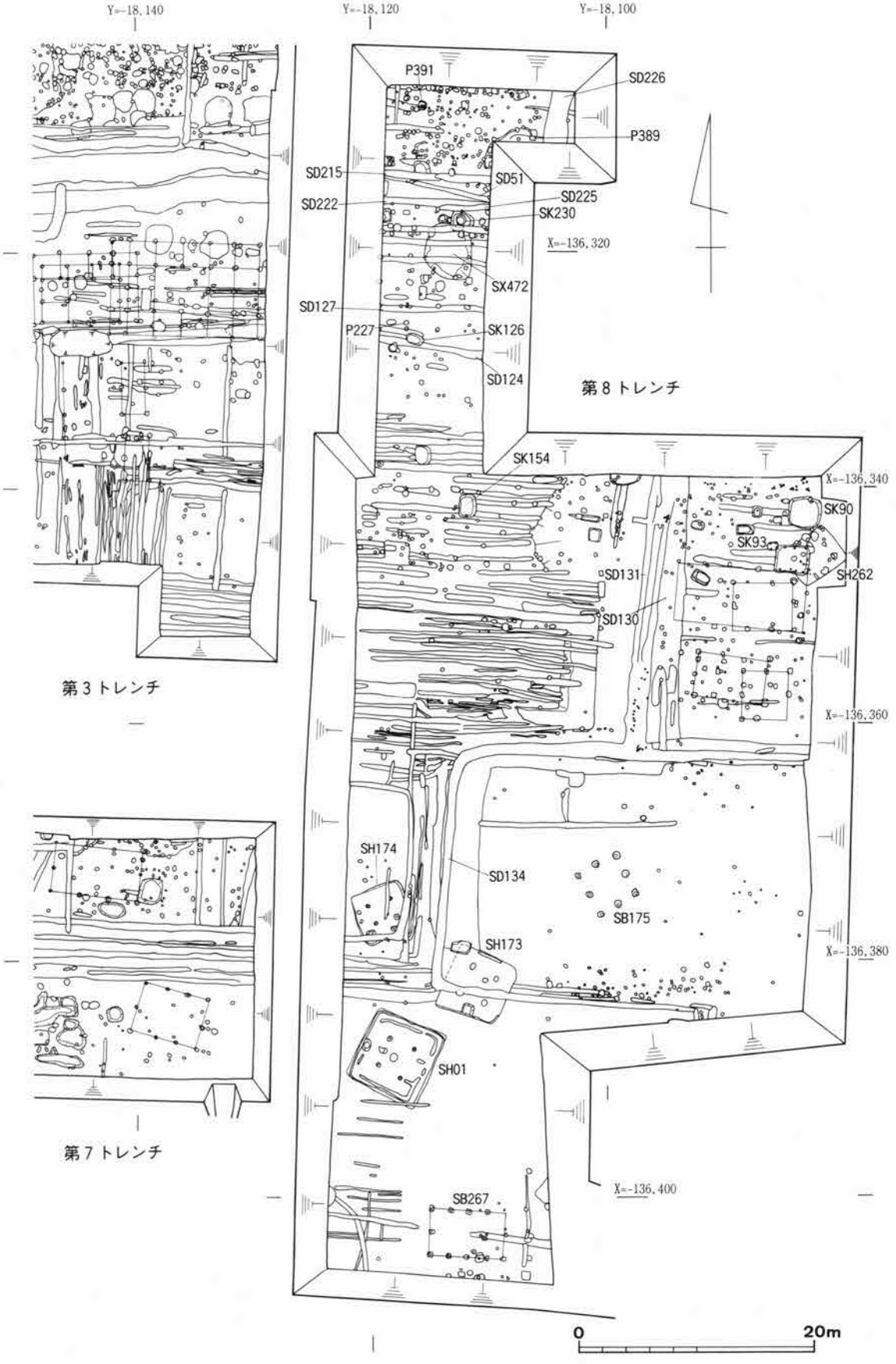


第71図　調査区基本土層図(1/20)

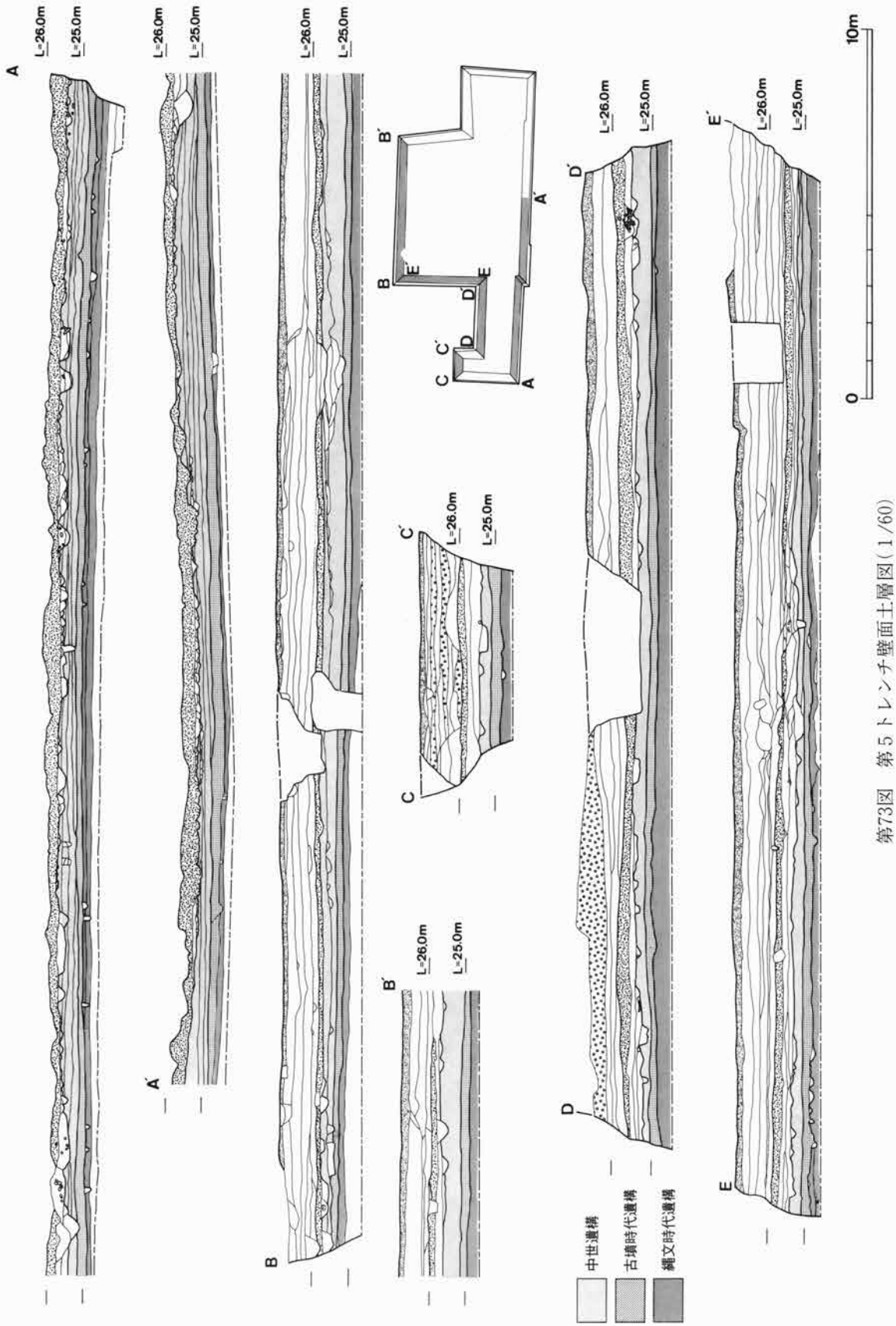
２．調 査 の 概 要

(1)基本層位

調査着手前の現況は、京都府下水道処理センター敷地内の休耕田であり、標高はＴ．Ｐ．27.2ｍを測る。したがって、掘削開始後、26.8ｍまで床土を含む水田に由来した還元土壌を検出した。その下位に25.7ｍまでの約１ｍ余りは、黄灰色～淡褐色の粗砂を主体とする洪水起源の堆積物が認められる。その中に、少なくとも３層の突発的な洪水層が間層となる。上位より、第１～第３洪水層と名付けた。特に、第２洪水砂とした層は標高26.5ｍ付近で検出され、灰褐色の粗砂を主体として構成されたもので、調査区全域を被覆している。また、第２洪水砂と



第72図　第５トレンチ遺構平面図(1/500)



第73図　第５トレンチ壁面土層図（1/60）

第３洪水砂の間には植物が未分解のまま滞積した層があり、上位の堆積速度にさほど時間を措かなかったことが推測された。その下層には暗灰褐色で粘性を持った砂質土が調査区全域に滞積し、特に第４次調査区で検出した島畠とみられる盛土遺構を被覆する。この調査では、15世紀に属する中国陶磁片が検出され、年代の鍵層となる。その下層の標高25.4ｍが中世遺構の最終の検出面である。この面では素掘り溝を主として検出したが、徐々に北側に向かって下降する。したがって、南側では１面に複数期の遺構が重複するが、北側は層位的に累重していた。中世遺構面は暗黄褐色の粘質土でその上位の砂と砂質土とは大きく土質を違える。その下位に24.8ｍ付近までは、色調が褐色系の粘質土が滞積するが、暗灰褐色粘質土の上面が古墳時代遺構面である。この土壌は北側に向かって厚く滞積するが、南側には中世遺構面と区別できない黄褐色粘質土に変化している。しかし、その境界は明示できないので、自然地形が徐々に傾斜したものと考えられる。この暗灰褐色の粘質土を除去した上面が縄文時代遺構面で、標高24.6ｍ付近が縄文時代後期の遺構面である。ベースの色調と土質は黄灰色で微砂を交える粘質土である。この粘質土中に面的には確定できないが、安定した面がある可能性がある。その下位には、粘質シルトと粗砂が互層で継続しているが、離水しておらず人為が加えられた痕跡は認められない。以上の詳細な分析は、後述の(6)自然科学的分析を参照されたい。

(2)検出遺構

今回の調査区(第８トレンチ)は、ほぼ真南北に軸を設定し、中央部が大きく東側に張り出す。北側は平成４年度の３トレンチ、南側は同７トレンチと隣接し、連続する遺構も見られる。　中世の遺構は素掘り溝、掘立柱建物跡、土坑であり、調査区全域に展開する。トレンチ最北端には３トレンチ同様ピット群が展開するが、明確な建物跡の復原はできなかった。これは南端を12世紀中葉に掘削された13世紀後半までの土器が多量に集積した溝ＳＤ222・225・255によって区画される。その南側に直近して楕円形の土坑ＳＸ472が造営された。一方、この地区には第３トレンチで見られた建物跡(ＳＢ01)は、その東端が第８トレンチ西端の柱穴列と関連する可能性があるものの、明確な建物跡はＳＫ472を覆う１間四方の四阿状のものしかない。さらに調査区を南下すると、素掘り溝の密度が高まり、方位をわずかに違えて重複する部分もある。トレンチ中央部には重複する溝によっていくつかの敷地が区画された。特に南北に通るＳＤ130～134は東西方向の屋敷地の境界となったと想定され、トレンチ西端から続く素掘り溝がそれら以東には及ばず、掘立柱建物が築かれる。また、トレンチ中央部はＳＤ134によって方形に区画され、遺構が希薄になる。この部分は中世遺構面のベースが上昇しているため、誤って重機掘削時に一部削平したが、あらかじめ建物が少なかった可能性もある。南半に近い部分には、相楽郡条里五条の35坪と26坪とを画する溝群が営まれている。これらからは、12世紀中葉の土器が出土し、相楽郡条里の施行の上限年代をうかがうことができよう。また、今回の調査区の最南端には２間×４間の掘立柱建物跡ＳＢ267を検出した。以上、中世に属する遺構を概述したが、これら以外に古墳時代の主要遺構も合わせて述べたい。古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡５基、掘立柱建物跡１棟がある。竪穴式住居跡はトレンチ南西部分に３基、東端部分に２基を検出し、掘立柱建物跡はほ

ぼ中央に営まれた。これら中世・古墳時代の主要遺構以外に、縄文時代の遺構群も見られるが、その詳細は(5)縄文時代で後述したい。

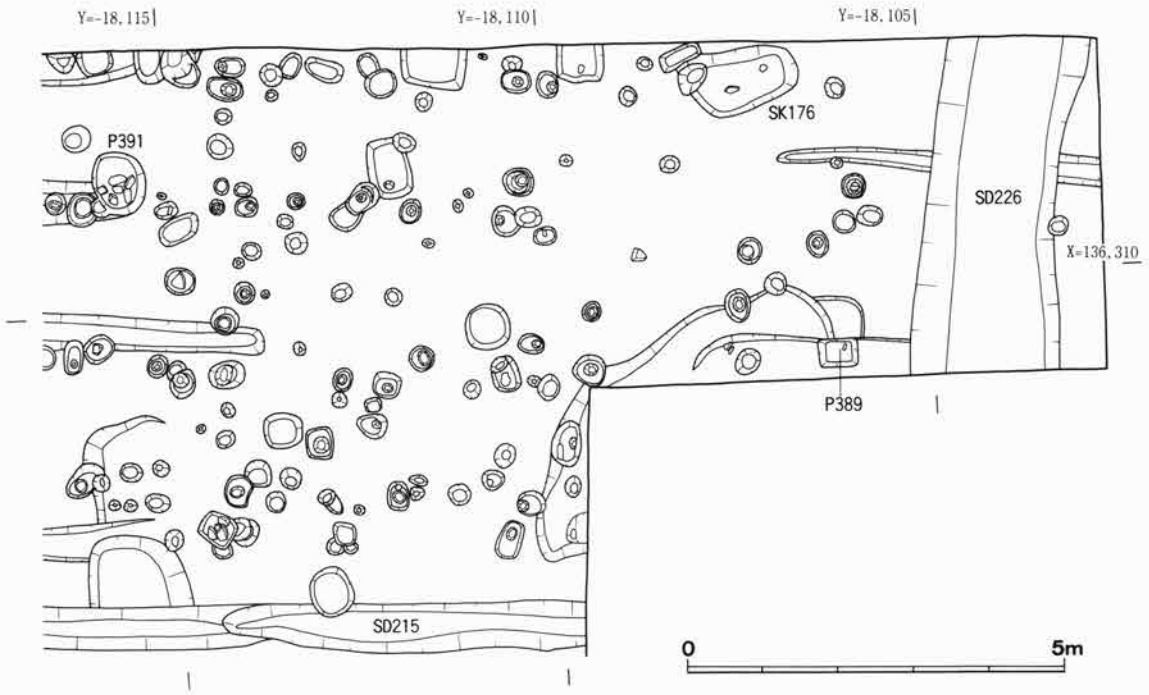
(3)中　世

1)検出遺構

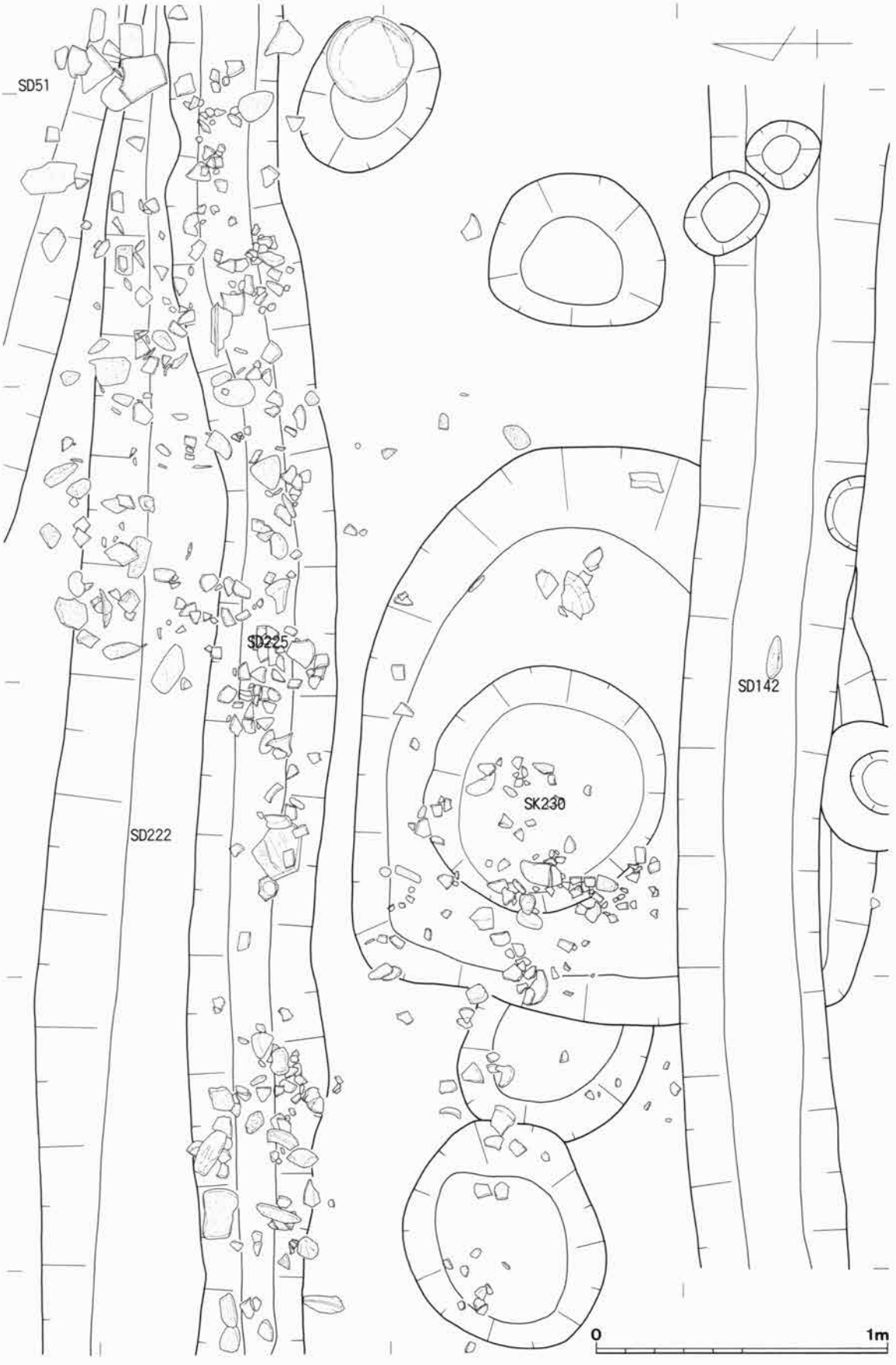
以下、主要な検出遺構について概述する。

北端地区　先述のように北端の地区にはピット群や溝が展開する。この地区のピット群は、12世紀中葉～14世紀前半に該当し、素掘りの柱穴と最下部に平板な礎板状の石材を据えたものとに分かれる。概ね後者が前者よりも先行し、13世紀中葉以降に該当する。ピットは柱痕部分が灰褐色～淡茶褐色の粘質土に置換され、裏込めはベースと同一の褐色粘質土で埋め戻される。礎板となる石材は円磨度の高い川原石で、P391はそれらを放射状に配列した特徴的なものであった(図版第73－2)。また、SD226は断面「U」字形の浅い溝で幅3.4mを測る。有機質土壌の形成が十分でなく、常に流水のあった水路である可能性がある(図版第77－2)。また、P389は底面中央に杭状材を樹立している。

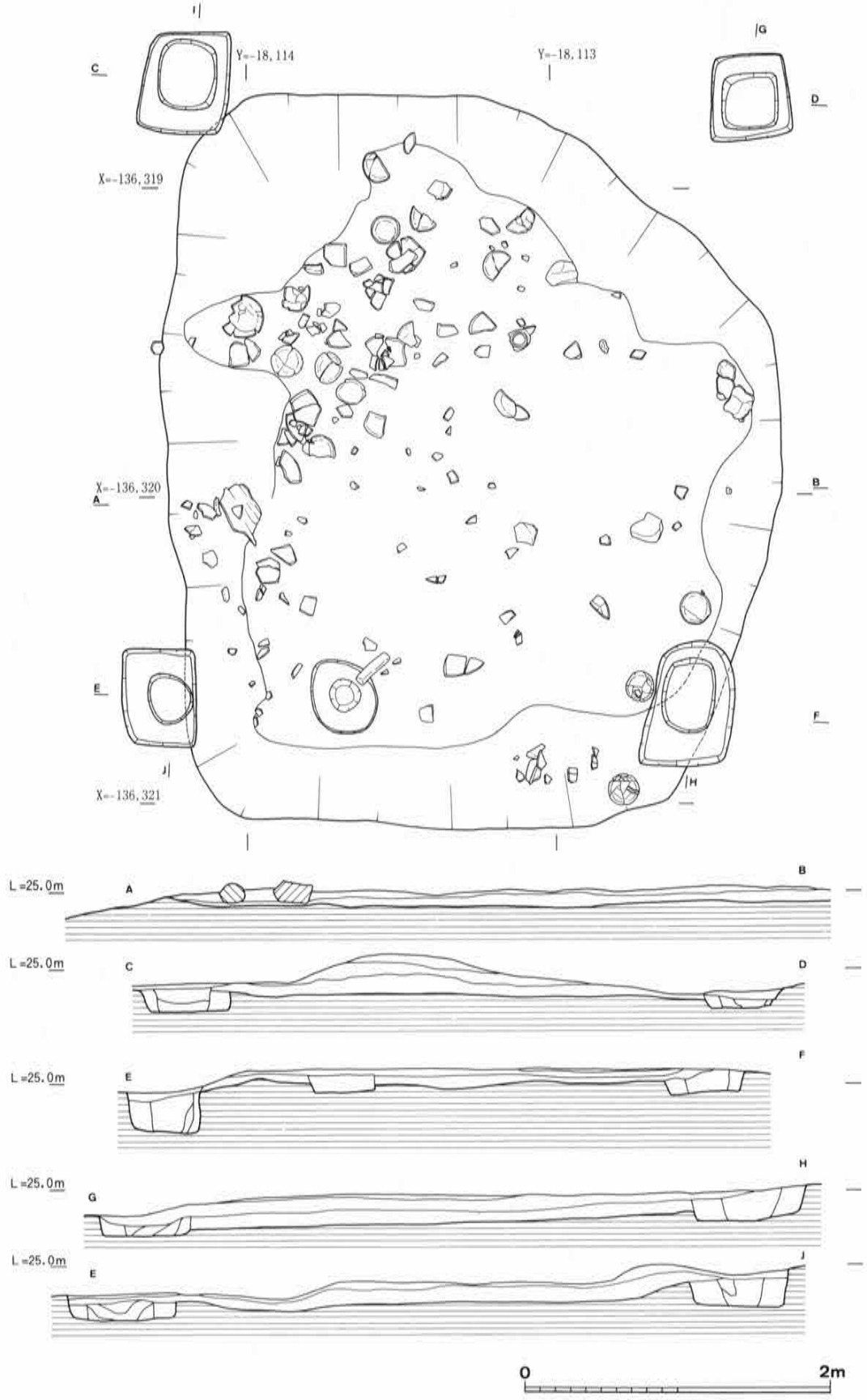
SD222・225・255、SK230　北端のピット集中区と南側の屋敷地とを分ける12世紀中葉に掘削された区画溝数条、およびその付近の土坑と土器溜まりである。平成4年度の第3トレンチSD512・513から連続し、存続時期も一部重複する。SD225は検出長さ4.5m、幅0.6mで断面「U」字形で深さ0.3mを測る。SD255はその南側に位置する溝であり、幅0.5m、深さ0.2mを測る。この2条の溝の南側に接して、浅い楕円形土坑SK230がある。これらの遺構の周囲に多量の土器が出土し、一種、土器溜まりの様相を呈していた。これらは、溝に投棄され、流れ来たものと考えられる。



第74図　トレンチ北端ピット集中区(1/100)



第75図　ＳＤ222・225、ＳＫ230付近の遺構・遺物出土状況図



第76図　ＳＸ472全体図および遺物出土状況図

これらの土器の内訳を単純にカウントして付表１に示した。ＳＤ222およびＳＤ225は瓦器片が半数強を占め、以下、土師器羽釜、土師皿と続く。瓦質土器は少ないが、ＳＤ222は中国陶磁が28点と目立つ。また、瓦器椀のみに着目して出土傾向を標示すると、概ね第３期後半をピークとして正規分布を示す。特に、４期前半から次段階への飛躍が大きく６期まで漸減する。したがって、複数条の溝や土坑の実質的な機能時期は12世紀中葉から13世紀後半までで、以後14世紀までは土器廃棄場所となったのであろう。

ＳＸ472　ＳＤ222周辺の土器溜まりの南側に近接する土坑である。下層遺構検出の時に上部を削平したために現況は不整形であるが、元の形態は隅円長方形であったと考えられる。現況は北東側が削られているが、長辺2.3m、短辺2.0m、深さ10cmを測る。この土坑は、底に幅３cmの間層をおいて、焼土ならびに炭化物層が薄く介在する。この炭化物層の下面には皿類を中心とする瓦器・土師器類が並置されていた。この土器類の内訳は、付表１に示したとおりである。まず、出土した123点の瓦器椀のうち、８割強が第３期後半のものであり、残る１割をそれに先行する第３期前半で占められ、遺構の存続期間が12世紀中葉の１点に限定されよう。また、出土土器の種別は、土師皿が約30％、瓦器皿が３％を占め、皿類の比重が約３割と高く、上で見た溝遺構から出土した出土比率や営造期間とはきわめて対照的である。また、この土坑の四コーナーには柱穴があって、その掘形埋土を炭化物層が覆っている。掘形は一辺約0.3mの方形を呈し、方形の柱を建てる。以上の検討から、当初、この遺構は四阿風の一間四面の建物跡があり、それが廃絶した後に、方形土坑ＳＸ472が掘られて土器が並べ置かれる。その後に、火が焚かれてこの土坑は埋没する。このＳＸ472は、存続時間のきわめて一過性的な儀礼の痕跡と思われる。

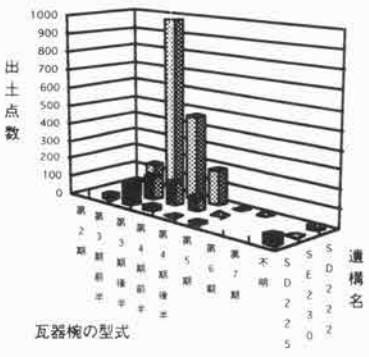
素掘り溝群と東側屋敷地　トレンチ中央部には何条もの素掘り溝群が検出された。これらは、第５期の瓦器椀片を出土するものが多く、13世紀中葉に盛行時期の１点が押さえられる。これら

付表１　ＳＤ222・225、ＳＸ472他の破片計測による分析結果

遺構番号	瓦器椀片数	瓦器皿片	瓦器片	土師皿片	土師器羽釜	土師器片	瓦質土器片	中国陶磁器片	須恵器片	その他	総計
SD222	1801	43	684	270	437	334	9	28	71	34	3711
比率	49%	1%	18%	7%	12%	9%	0%	1%	2%	1%	100%
SE230	383	23	187	158	139	146	16	2	17	16	1087
比率	35%	2%	17%	15%	13%	13%	1%	0%	2%	1%	100%
SD225	220	8	49	9	3	3			1	1	294
比率	75%	3%	17%	3%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	100%

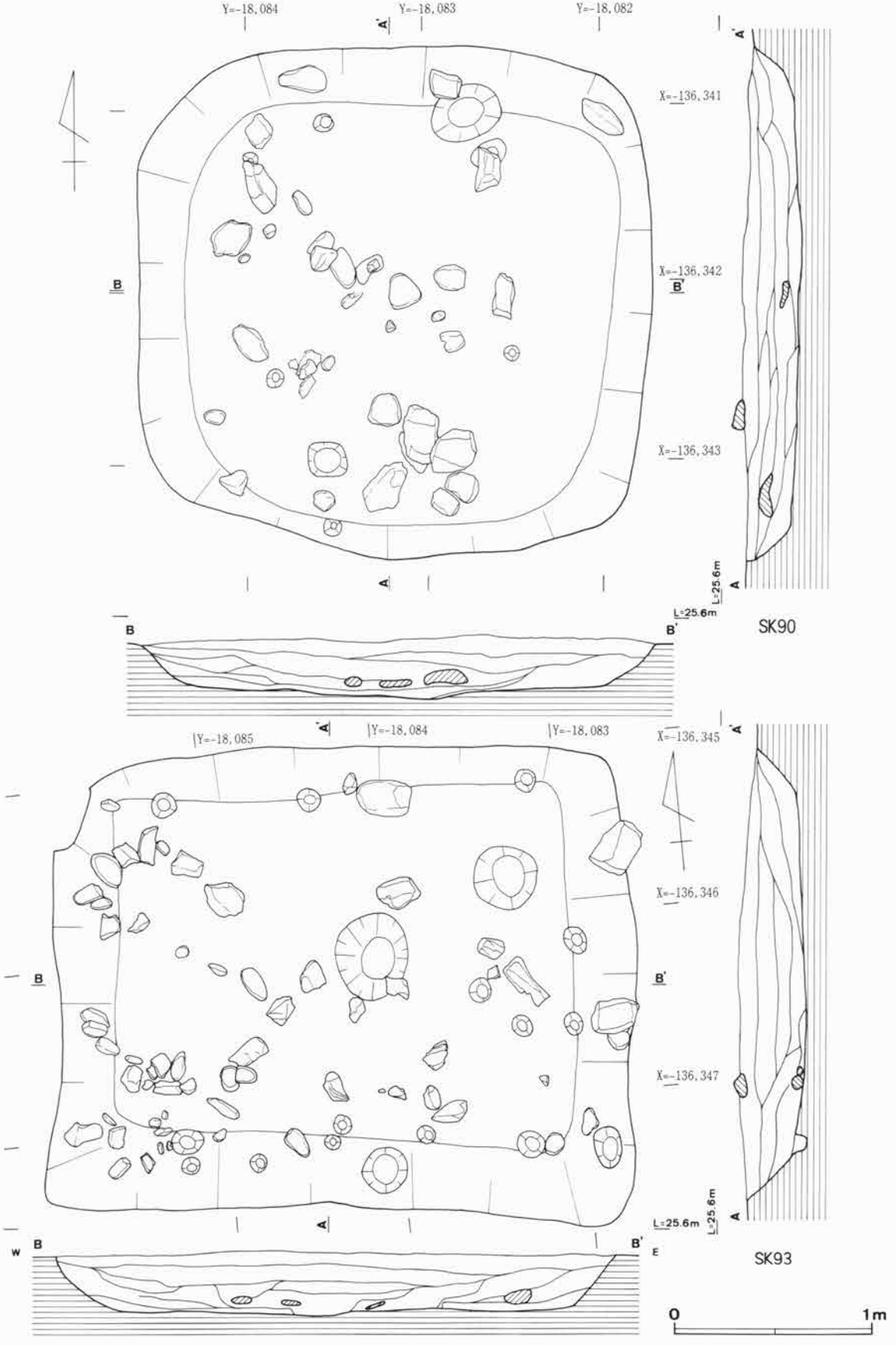
遺構番号	瓦器椀片数	瓦器皿片	瓦器片	土師皿片	土師器羽釜	土師器片	瓦質土器片	中国陶磁器片	須恵器片	その他	総計
SX472	123	16	15	159	180	38		1	1	8	541
比率	23%	3%	3%	29%	33%	7%	0%	0%	0%	1%	100%

遺構番号	第２期	第３期前半	第３期後半	第４期前半	第４期後半	第５期	第６期	第７期	不明	瓦器椀片数
SX472	0	12	102	0	2	0	0	0	7	123
比率	0%	10%	83%	0%	2%	0%	0%	0%	6%	100%

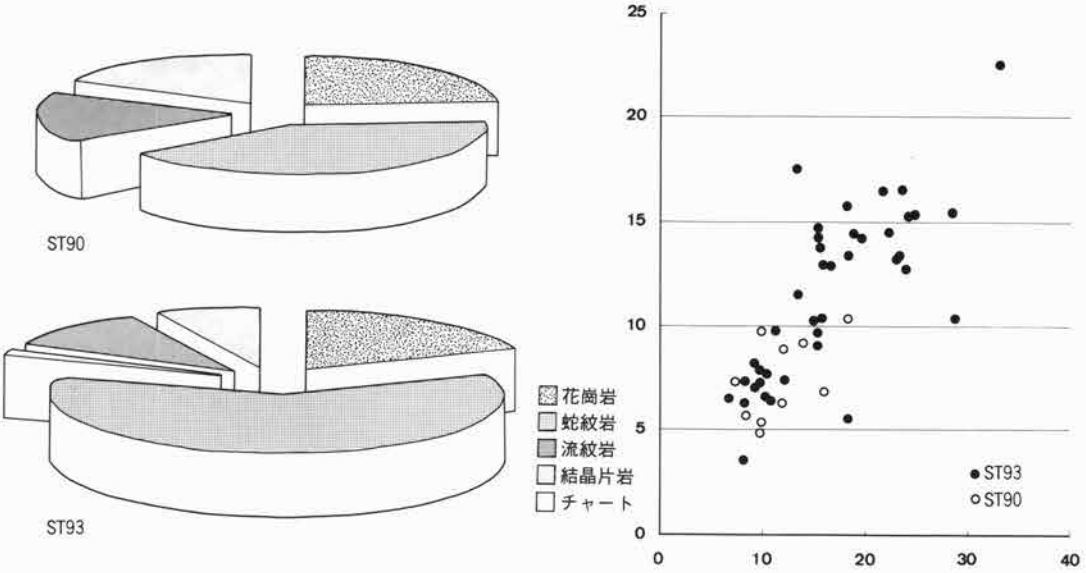


ＳＤ222・225、ＳＫ230の時期別出土比率グラフ

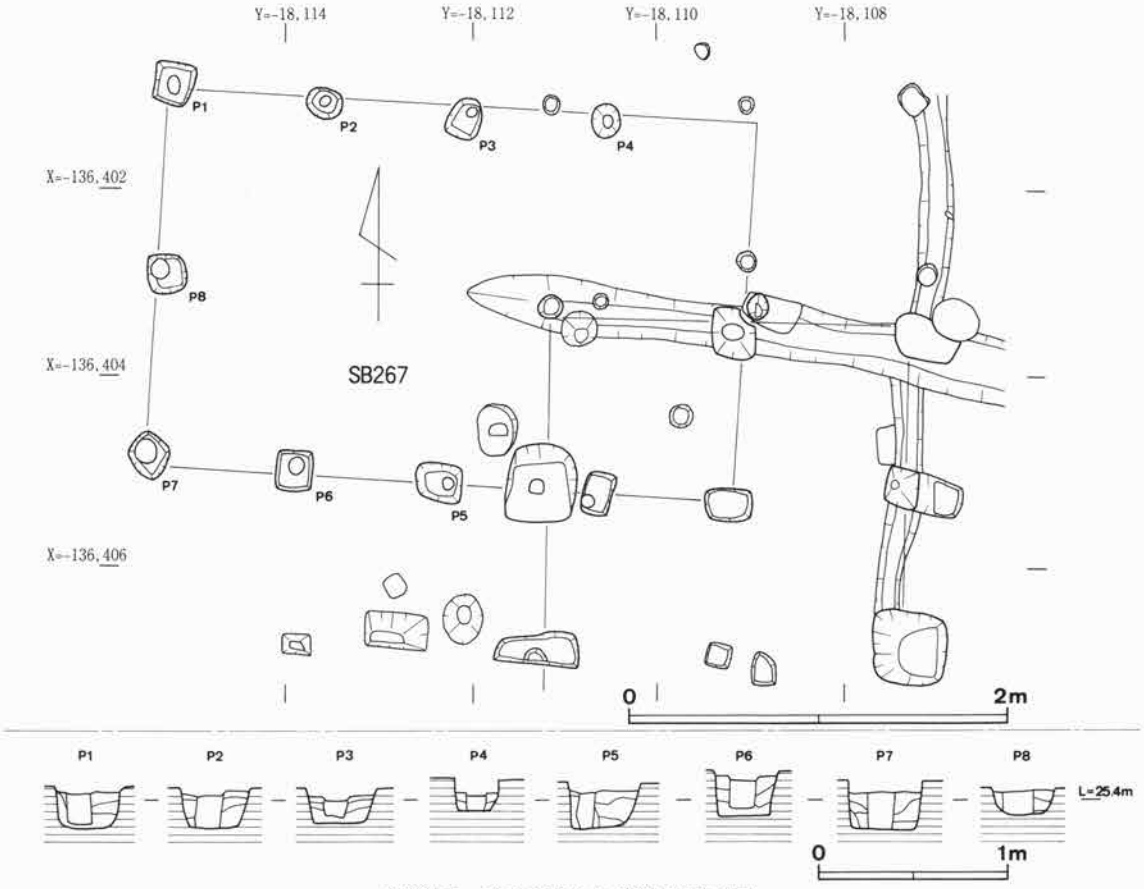
第77図　トレンチ中央部遺構検出状況(1/200)



第78図　ＳＫ90・93全体図および遺物出土状況図



第79図　ＳＫ90・93石材種別ならびに長幅比グラフ



第80図　ＳＢ267および柱穴断面図

は、層位的に上下に２種類に分けられる。下層は真東西方向を軸として掘られており、幅広の「コ」字形の浅い溝などが掘られる。上層の素掘り溝は、下層が砂質土などで埋没した後に、真東西方向よりも、南に振った方向に掘られている。これら素掘り溝は、ほぼ中央を南北に貫通する溝群によって東側屋敷地とは区画される。この溝群の中からは、奈良火鉢、第６期の大和型瓦

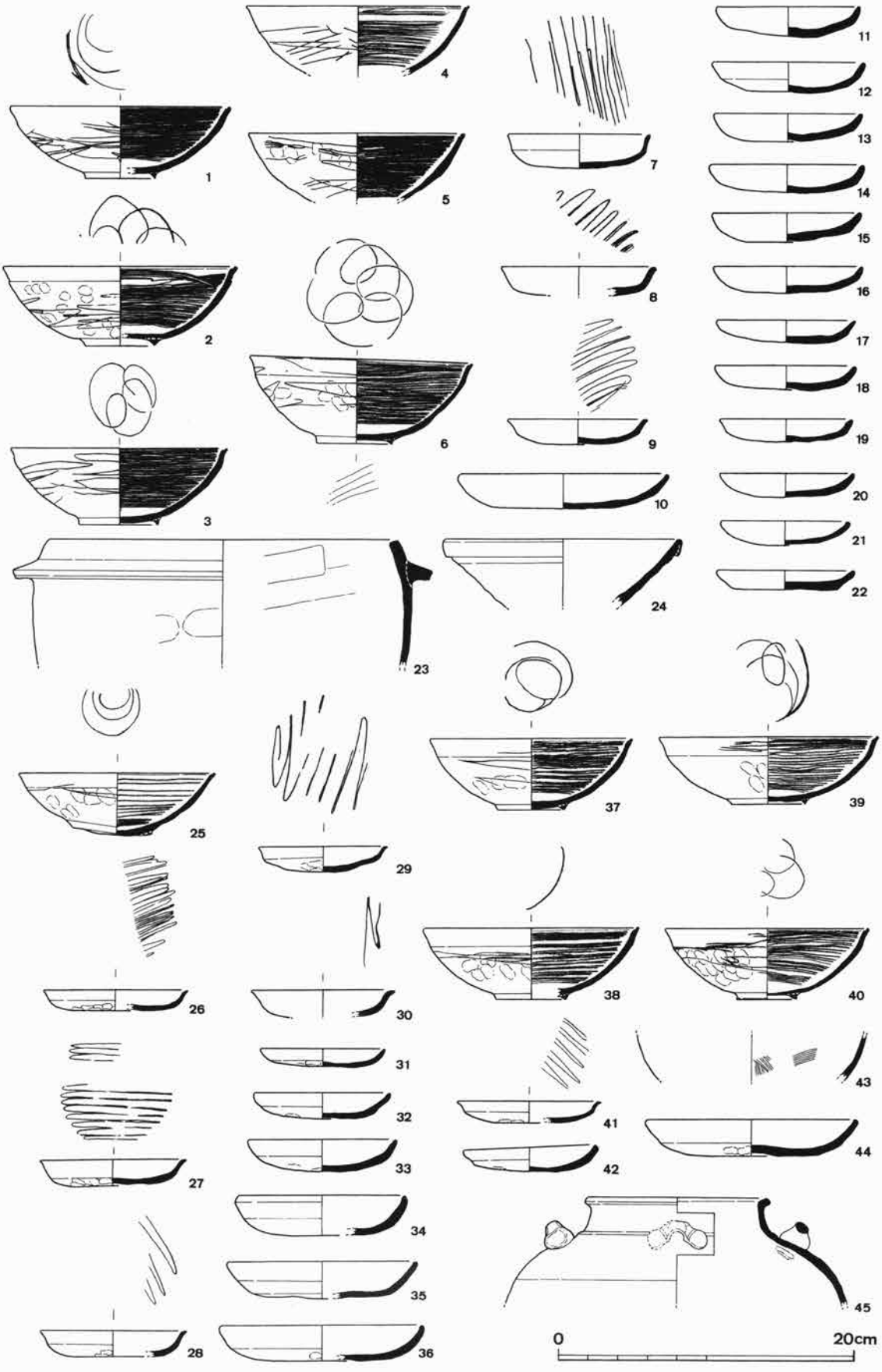
器椀などが出土しており、14世紀以後に下降するものもある。東側屋敷地は、後述するように、隣接したＳＫ90・93の２基の土坑と掘立柱建物跡などが営造される。建物跡は、双堂のように並列するもので、先行するものは真東西に軸をとり、後出するものは素掘り溝と同じ方位を示す。さらに、その建物跡は礎板として平板な石材を据えたものである。また、東側屋敷地の最北端には拳大の石材を溝に詰めた、いわゆる暗渠があり、その中から椀形滓を検出した。

ＳＫ90・93　隣接して営造された方形、ないしは隅円長方形の土坑で、中に人頭大の石材を投棄する特徴が共通する。ＳＫ90は一辺2.5mを測る方形土坑で、ＳＫ93の北側に位置し、北側は暗渠ＳＤ229に接する。ＳＫ93は長辺3.0m、短辺2.5mを測る長方形土坑で、灰褐色粘質土で埋没していた。いずれも埋土中から土器のほか、赤漆被膜が出土したが本来の形状は不明である。土器の内訳は、ＳＫ90は瓦器椀が24％、羽釜が26％、ＳＫ93は瓦器椀が25％で羽釜が24％に達しており、先に溝で見た土器組成と共通する。中国陶磁の比率は３～５％で、総じて高くはない。投棄された石材の長軸と短軸を計測し、かつ肉眼による材質識別の結果を第79図に示した。長幅比は概ね正規分布を呈している。これを石材別に個体数をグラフ化したものが、円グラフである。このような、石材を投棄した土坑の機能は、形態の類似性から平安京や都市遺跡の調査でしばしば検出される、窖倉などの地下式貯蔵土坑などの可能性も考えられる。

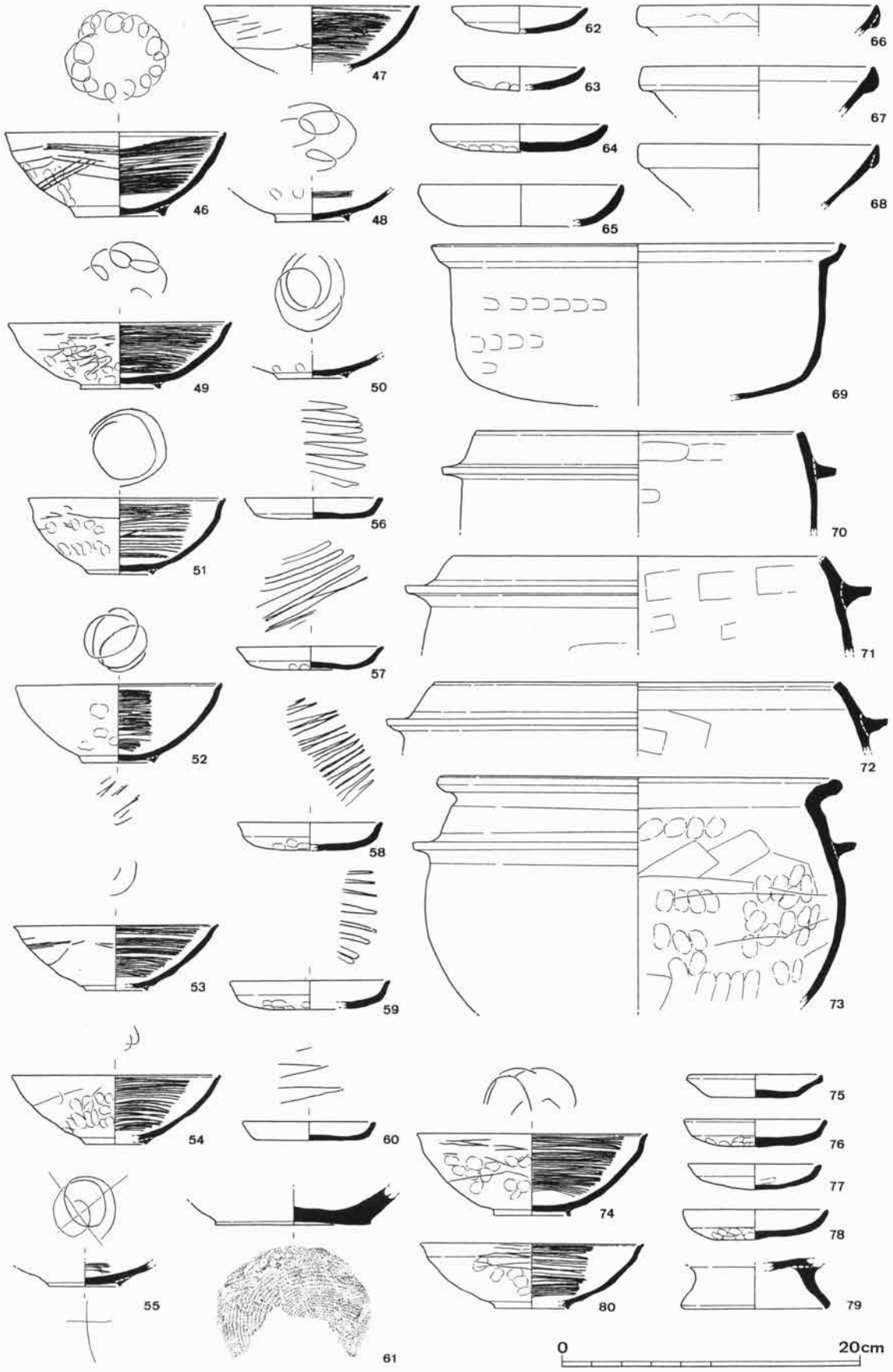
ＳＢ267　トレンチ最南端部で検出した２間×４間の東西棟で、主軸はＮ４°Ｅを測る。柱は直径約10cmで暗黄褐色の粘質土に置換されていた。柱穴はほとんどが掘形最下部に接するように据えられていたが、最下部は木質の分解が不完全で、灰褐色粘質土に変質していた。

２）出土遺物

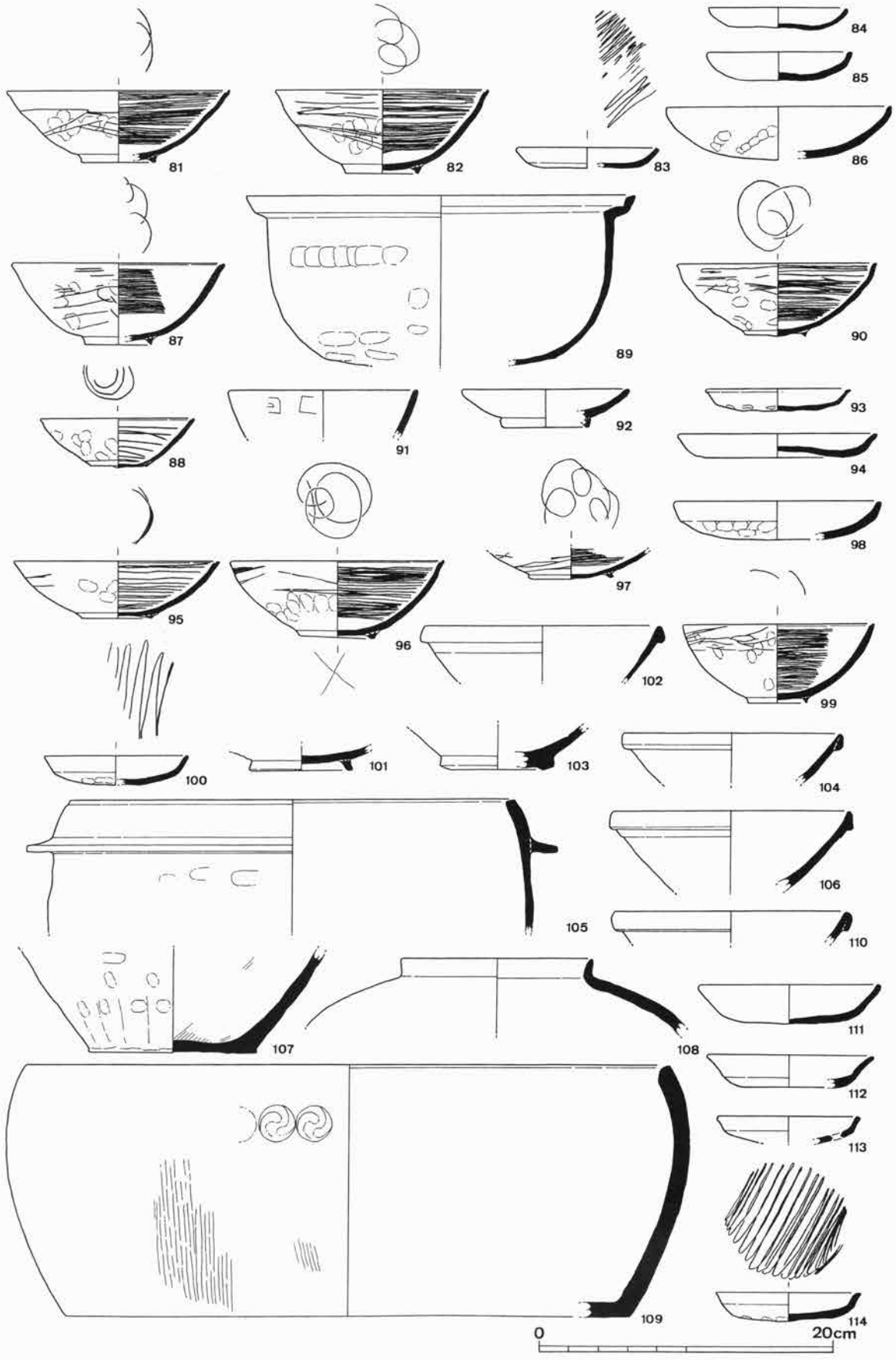
土器・陶磁器（第81～85図）　１～24はＳＸ472出土で一括性の高い資料である。瓦器椀は暗文を隙間のないほど密に施し、見込み部に連結輪花文を持つ。外面には指頭圧痕がみられ、胴部下半まで分割の明瞭な暗文を有する。施文範囲ならびに高台の形状から第３期に該当する。７～９は瓦器皿で見込みに暗文を持つ。直に立ち上がるものと外反するものなど、形態に多様性がある。10～23は土師器皿で、10を最大として口径や高さに格差がある。24は白磁椀Ⅳ類で口縁遺存度は30％。25～36はＳＫ230出土で、時期差の有る資料。25は見込み部に同心円文、内面には隙間の大きな暗文を施し、外面の暗文はわずかに分割単位が判別できる。第５期に該当する。土師器皿は、最大径の36が若干、年代が遡上すると考えられるが、他は瓦器椀・瓦器皿と同時期のものと考えられる。37～45はＳＫ230の北側に接するＳＤ225で、比較的時期幅の短い資料。断面三角形の高台形状と密に施された内面の暗文から、第４期に該当する。43は櫛目施文の白磁椀、45は褐釉四耳壺で体部下半を欠損する。淡灰色の生地に灰褐色～無色の釉を掛ける。12世紀に江南地域の窯で生産されたと判断される。46～73はＳＤ222およびそこからオーバーフローした土器溜まりから出土した。瓦器椀は、46が第２期の形状を残し、見込みには多重の連結輪花文、外面には大きく斜行して分割する暗文が施される。高台も強く外に踏ん張る。その他の瓦器は第３・４期に該当し、断面三角形の高台と単純な同心円文や輪花文を特徴とする。55は底部破片のみであるが、焼成後に「十」字形の記号文を施す。同様の例は、ＳＤ310から出土した96にも見られる。



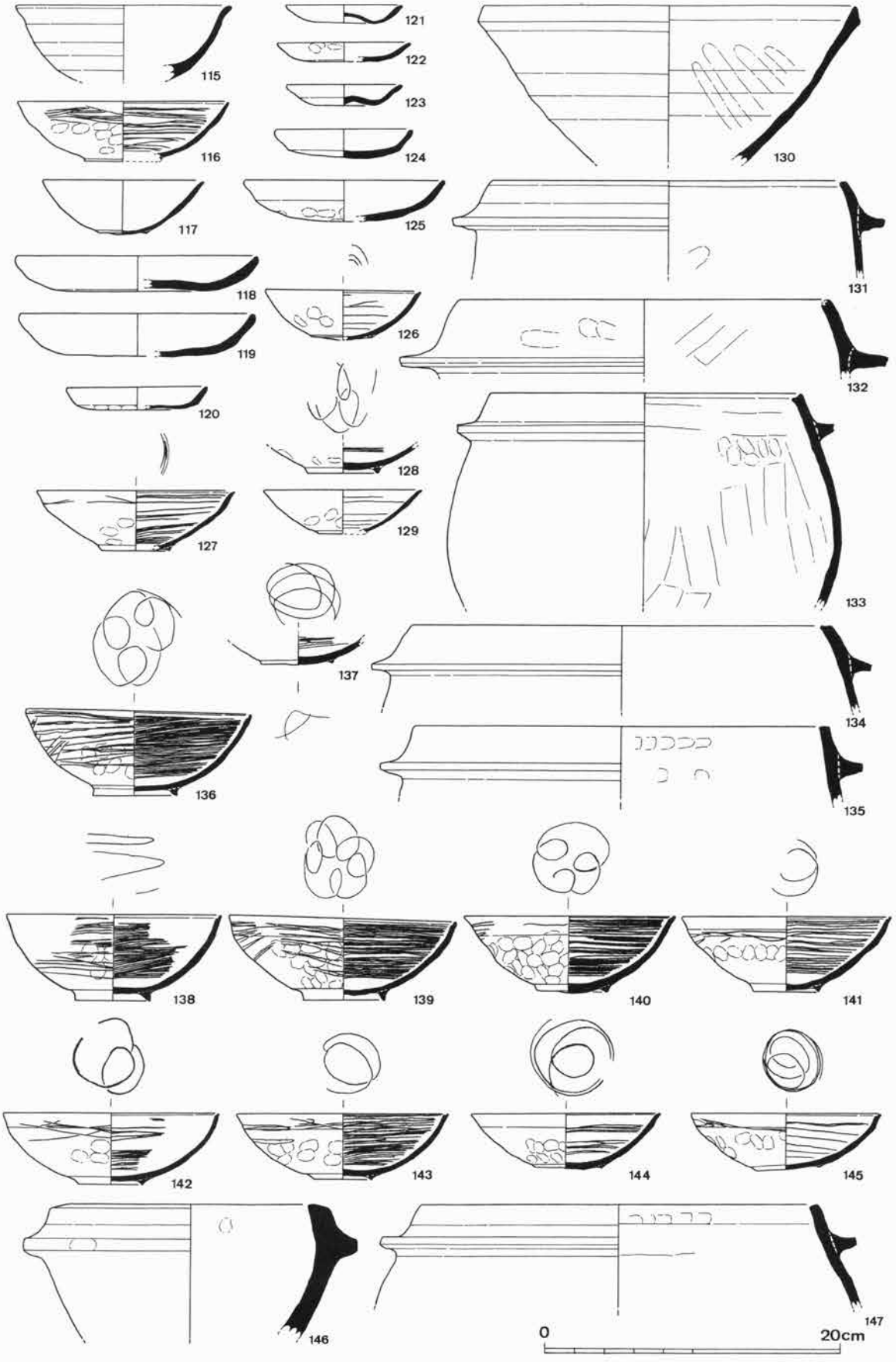
第81図　中世土器・陶磁器実測図(1)　(1/4)



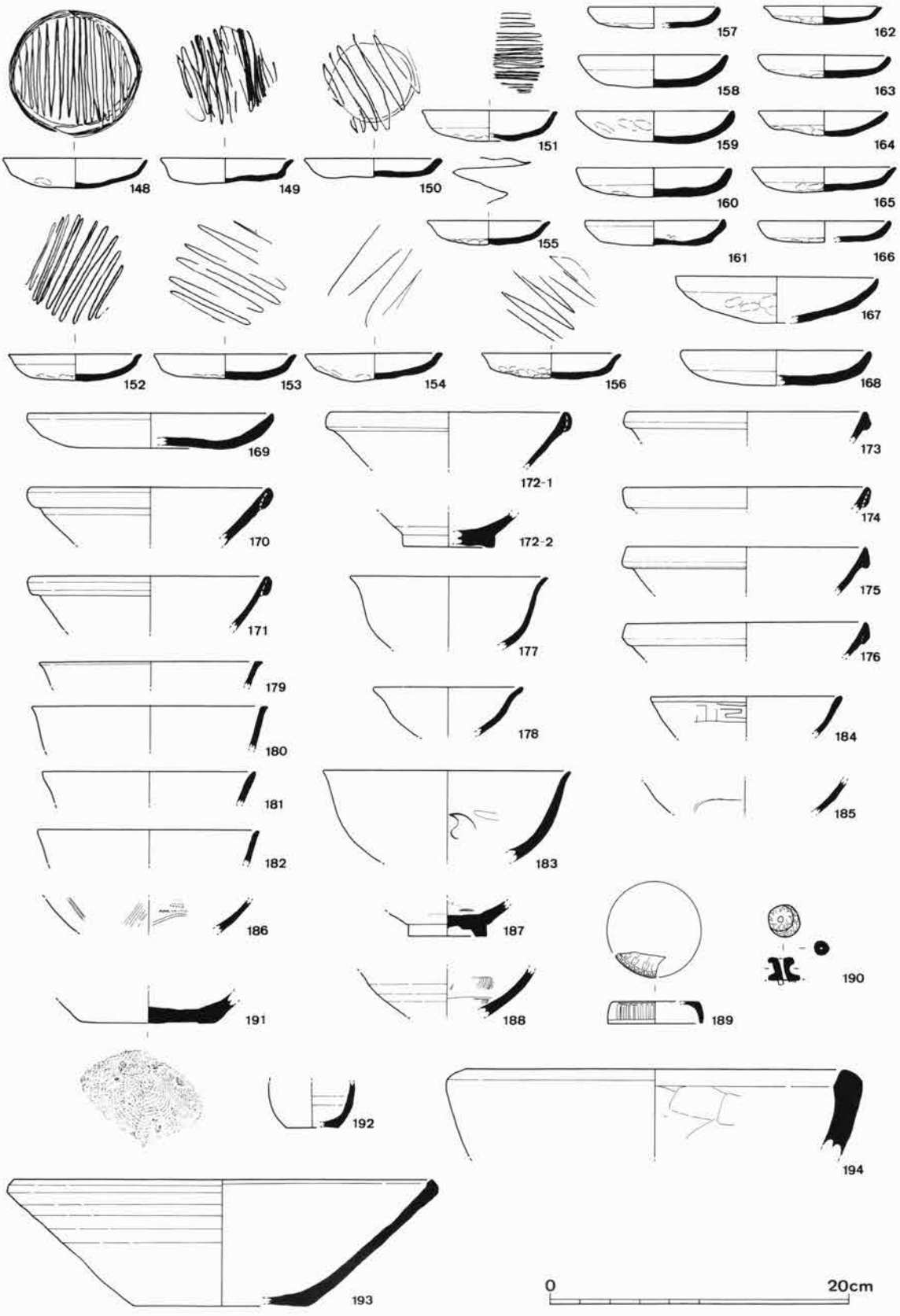
第82図　中世土器・陶磁器実測図(2)　(1/4)



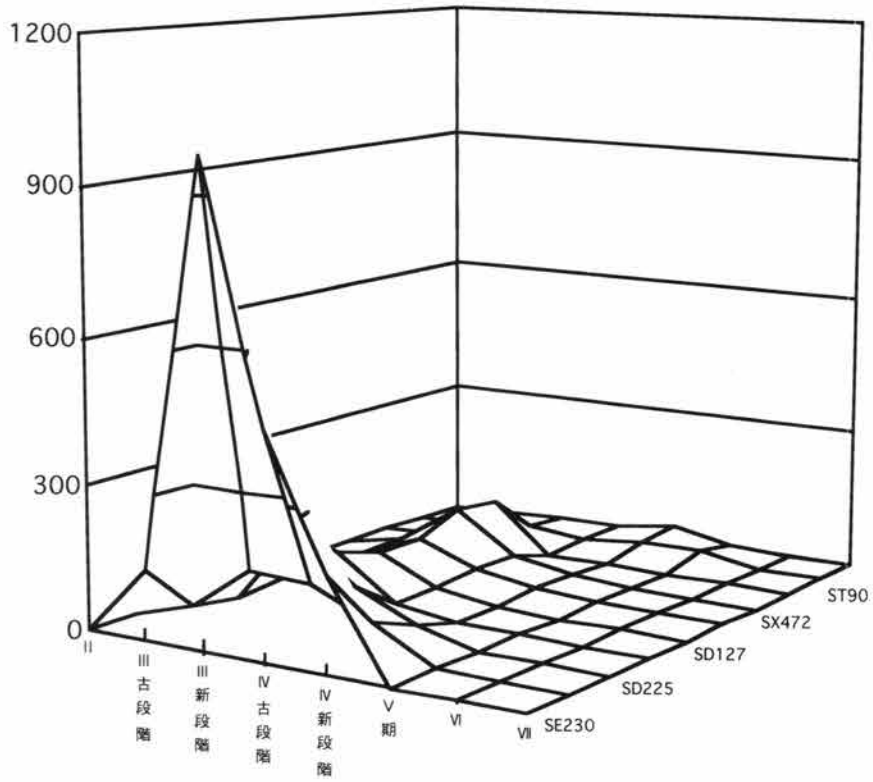
第83図　中世土器・陶磁器実測図(3)　(1/4)



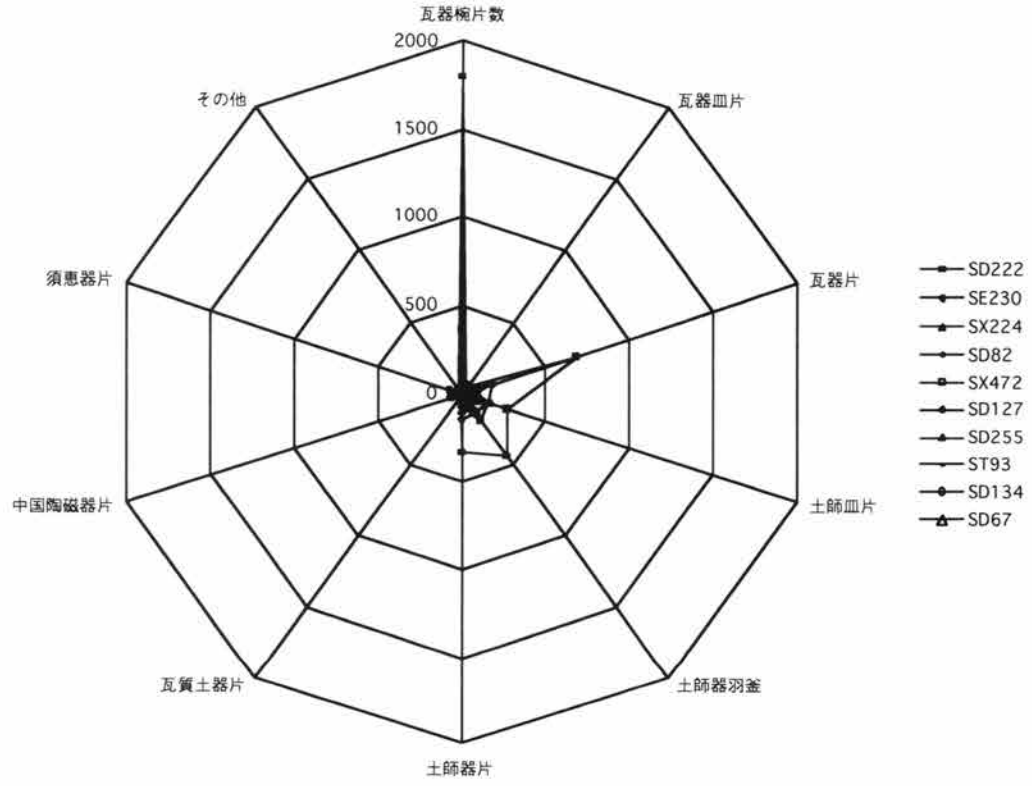
第84図　中世土器・陶磁器実測図(4)　(1/4)



第85図　中世土器・陶磁器実測図(5)　(1/4)

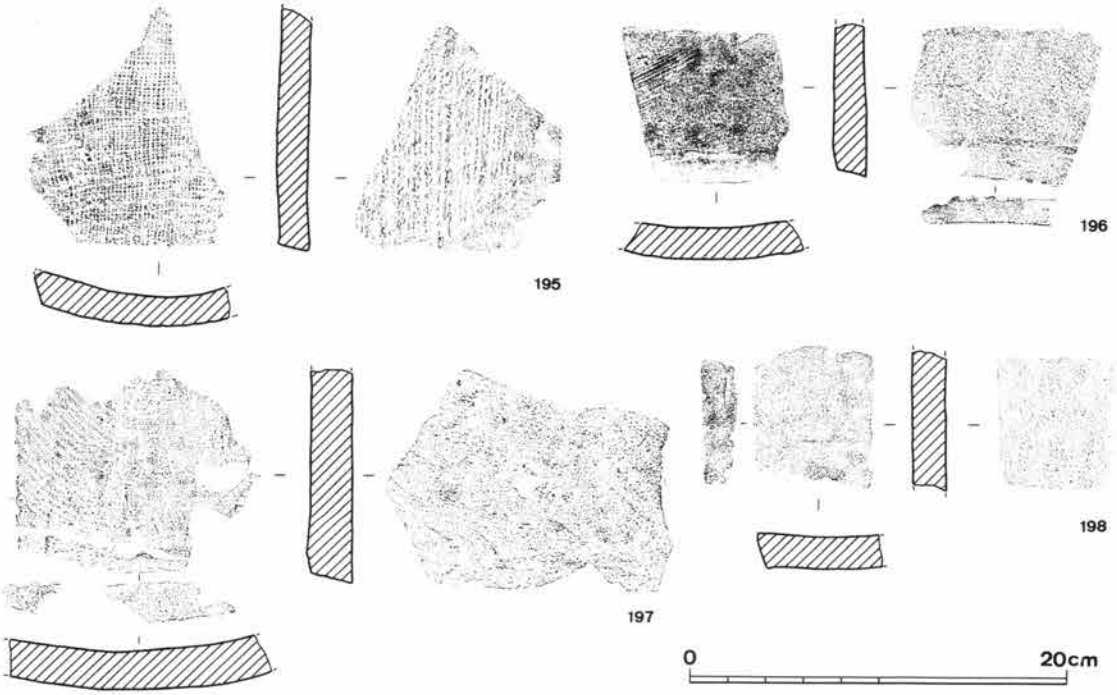


第86図　遺物多量出土遺構の時期別瓦器椀出土傾向

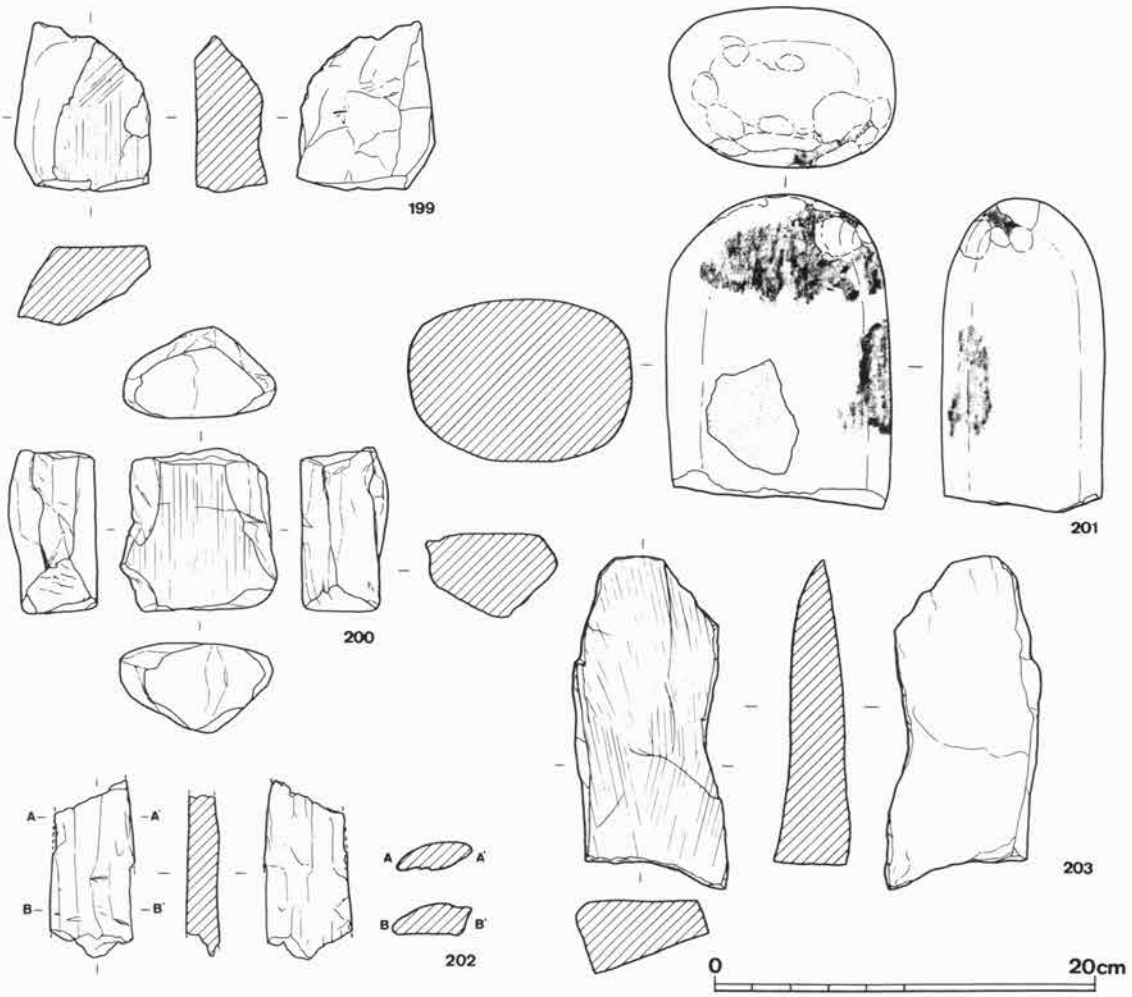


第87図　遺物多量出土遺構の器種別傾向

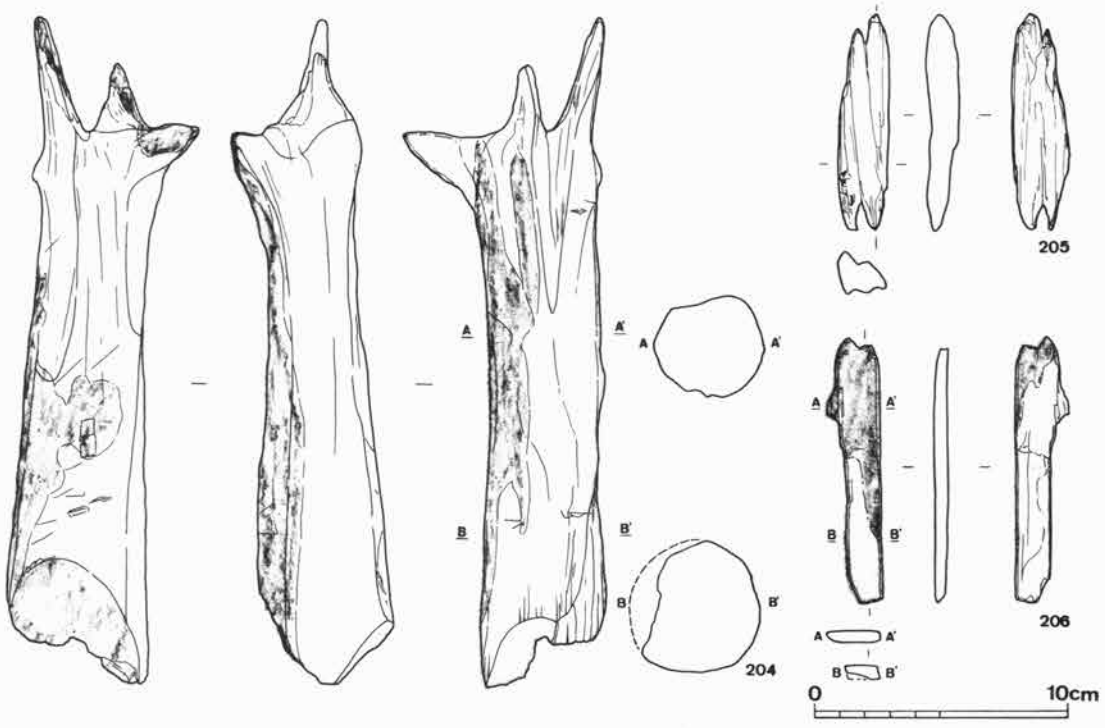
56～60は瓦器皿で反復する直線的な暗文を見込み部に持つ。線の間隔の疎い60は時期の降るものだろう。61は東播系捏鉢底部。62～65は土師皿。66～68は玉縁口縁を持つ白磁椀Ⅳ類。69は淀川水系に卓越する瓦質土器の煮沸具、70～73は大和系の土師質羽釜で、73は上半がほぼ完形。形態から12世紀後半に遡る可能性がある。74～79はＳＤ82出土。74は古式の形態を留める瓦器椀で密に暗文を施す。79は台付きの皿。80～86は、ＳＫ126より出土した。80・81は第４期に該当し、しっかりとした高台部に単純な連結輪花文を施す。82は古い形態を残す。83は瓦器皿、84～86は土師器皿で、法量に格差がある。87・88は、ＳＤ134出土であるが、87は第３期、88は同７期の瓦器椀で、溝の存続年代を示している。89～93はＳＫ90から出土した。89は瓦質土器で外面には板ナデ状の工具痕を留める。91は両面施釉の青磁椀で雷文の一部を口縁部に施す。94以下は遺構出土の遺物のうち、単独のものを配列している。105は鍔の長く突出した土師器羽釜、102・104・106は白磁椀Ⅳ類、107は瓦質のすり鉢でかすかに櫛目を認めることができる。108・109はＳＤ131から出土したもので、109は外面が磨滅した奈良火鉢片であり、体部上面に２つ巴文がスタンプされ、体部には上下方向のミガキまたは面取りが遺存している。115はＰ47出土の青磁、131～135は大和系の瓦質土器羽釜である。136以下は各地区包含層出土の土器・陶磁器類を配列した。138は高台が強く外方に踏ん張り、見込み部に往復直線文を施す第２期に該当するもので、今回の調査で出土した瓦器椀のうち、最も古式の形態を留める。139・140は第３期、141～143は第４期、144および145は第６期に該当する。146は石鍋を模造したような厚手の羽釜で、短小な鍔が突出する。148～156は瓦器皿であるが、148は口縁端部に沿って３条ほどの暗文がめぐっており、古式の形態とみなされる。157～169は土師器皿、170～180は白磁椀である。端部を玉縁状に作るものと尖って終わるものの２形態に分けられる。181～188・190は青磁である。185は片切



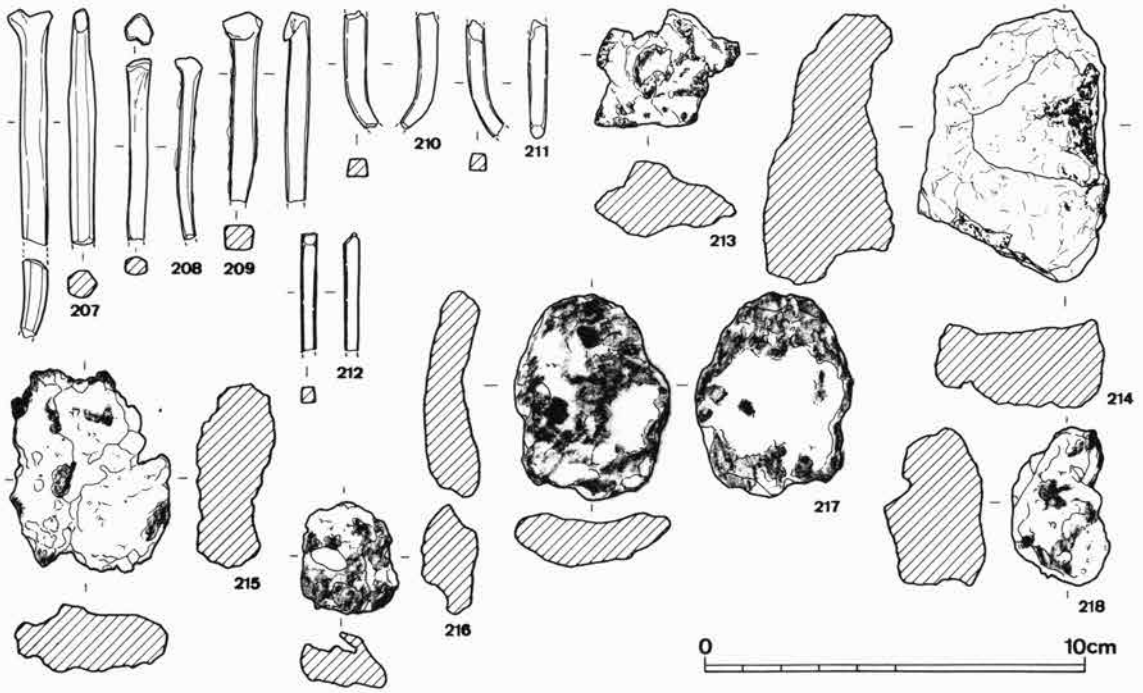
第88図　瓦類実測図(1/4)



第89図　石製品実測図(1/4)



第90図　木製品実測図(1/4)



第91図　鉄製品・鉄滓実測図(1/2)

掘りで大きな貫入が認められる龍泉窯産、188は櫛目文を持つ同安窯産の青磁と推定される。189は青白磁合子の蓋片と思われる。190は青磁で何らかの蓋状の遺物に接続するツマミであろうか。192は古瀬戸の灰釉陶器か。両面施釉の小形の甕と判断される。193は東播系の捏鉢、194は滑石製の石鍋で赤褐色を呈し、滑石粒が顕著である。

瓦類(第88図)　今回の調査でも若干の瓦が出土したが、すべて平瓦片である。大型の破片4点を図示した。195は凹面布目、凸面が縄目タタキの平瓦で、端部は鋭利に面取りを行う。197は、凸面に離れ砂が遺存し、凹面には紐によるコビキ痕を留め、198も離れ砂が遺存する。

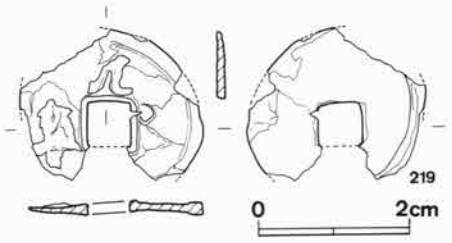
石製品(第89図)　砥石のほか、被熱した石材が若干がある。199は小片だが1面に方向を違える擦痕が見られる。材質は粘板岩質か。200もほぼ同形の砥石である。201は、棒状石製品であるが、被熱赤化した部分が認められ、サーマルフィクチャーが及ぶ。203は多方向の擦痕を留める。202は結晶片岩製の棒状石材で、板碑のような搬入された石製品の破片であろうか。

木製品(第90図)　204はP389に直立していた杭材で、断面円形で、片面には被熱炭化した面がある。下部は2方向から鋭利な金属製利器で断ち切っている。肉眼鑑定によると、放射状組織が発達しており硬質の広葉樹か。205は不整形の棒状材で、端面は被熱しているが、原形は不明である。208は木簡状の扁平な板状製品で、片面が大きく被熱炭化している。

鉄製品(第91図)　釘および鉄滓が出土している。207～212は鉄釘である。207は頭部が二股に割れ、208・209は頭部が叩き潰されて折れている。213～218は鉄滓で、217は椀形滓で凸面には砂が多く付着しているのが分かる。それ以外の鉄滓もすべて、鍛冶滓であると考えられる。金属学的ならびに化学的分析は実施していない。

銭貨その他(第92図)　SH171の検出面で、埋土上面から検出されたもので、第5次調査唯一

の銅製品である。腐食して表面が剥落し、文字の判読は不可能であったが、陽鋳された「元」字らしき形が識別できる。それ以外の遺物としては、ＳＫ90から出土した赤漆被膜が出土したが、図示するには至らなかった。



第92図　銭貨実測図(1/1)

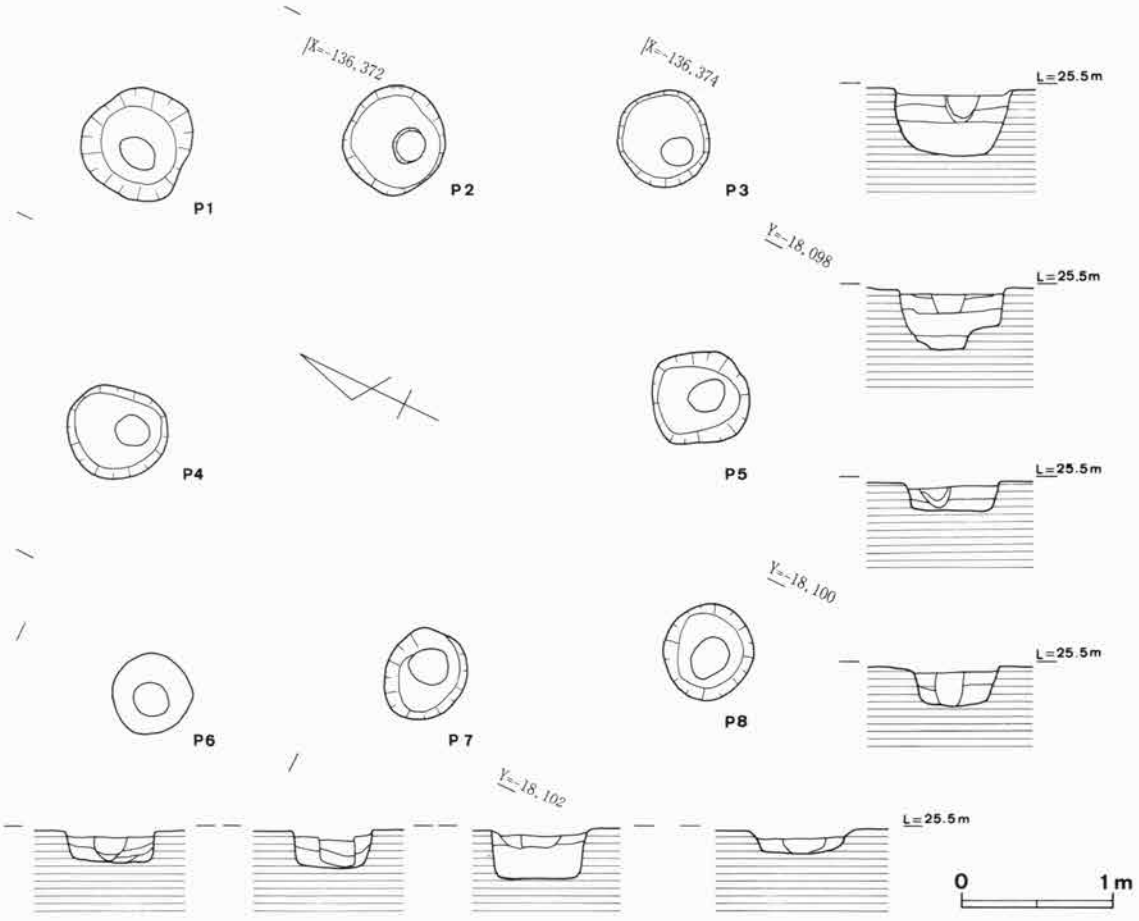
(4)古 墳 時 代

1)検出遺構

調査区内で検出した遺構のうち、古墳時代に該当するものは、掘立柱建物跡１棟、竪穴式住居跡５基である。このうち、最大規模を測る竪穴式住居跡(ＳＨ01)は、第４次調査概報中で詳述しているので、残る４基について報告する。

ＳＢ175　調査区中央で検出した二間四面の掘立柱建物跡である。柱掘形は円形で、柱痕跡は濁橙褐色の粘質土に置換していたが、上部が削平され、基底部に近い部分しか遺存していなかった。柱の芯々間は、約1.8mを測る。Ｐ２の掘形埋土からは、滑石製臼玉１点を検出した。これを受けて、すべての掘形埋土を採取して水洗したが、他に臼玉を検出することはできなかった。共伴遺物は、埋土から時期判定がほとんどできない土師器片を検出したものの、他の古墳時代遺構との主軸方向の共通性などから、古墳時代前期後半～中期前半に収まるとみられる。

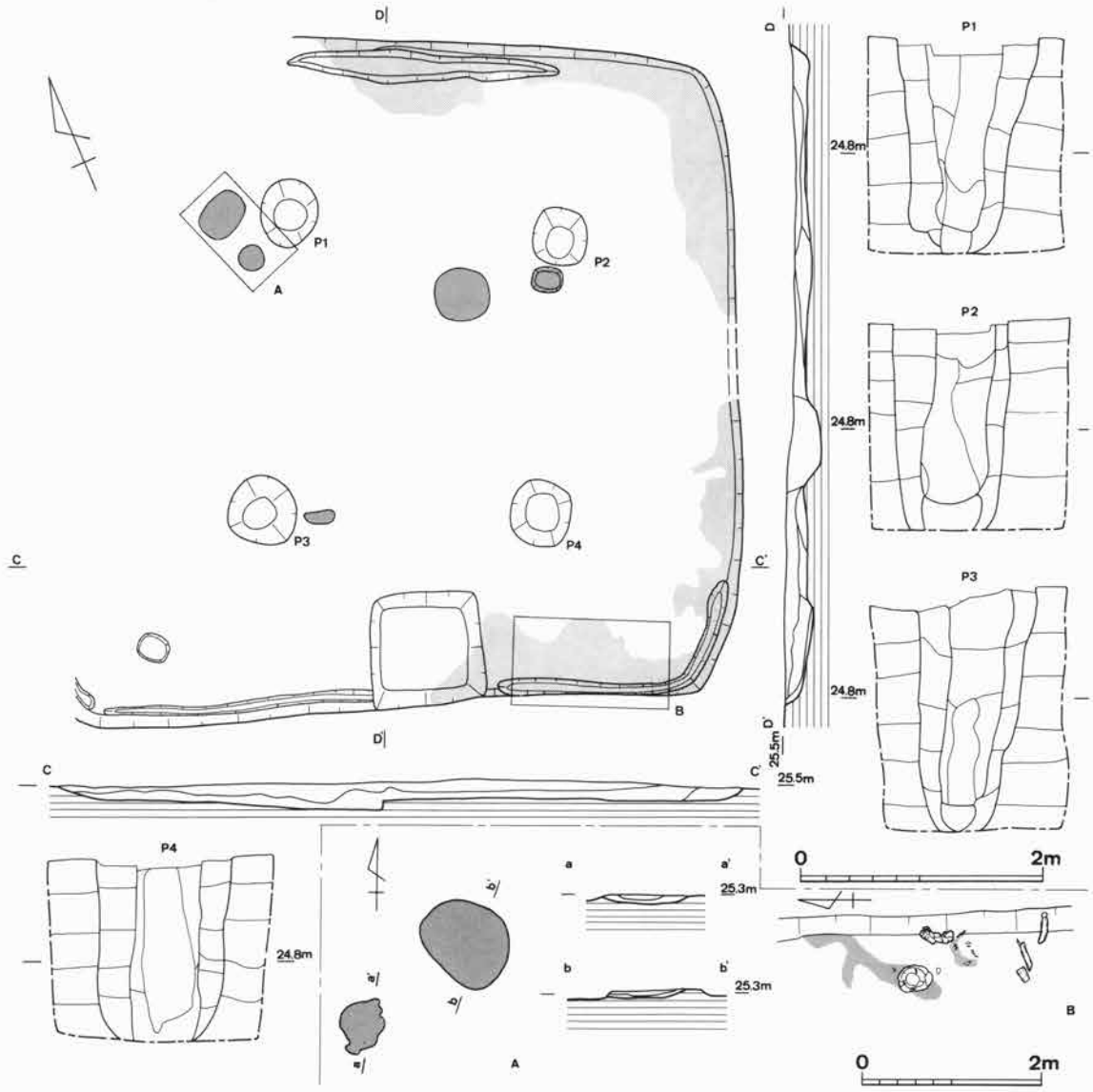
ＳＨ173　ＳＨ01の北東側に方位を揃えて隣接する竪穴式住居跡であり、東辺約5.2m、南辺約



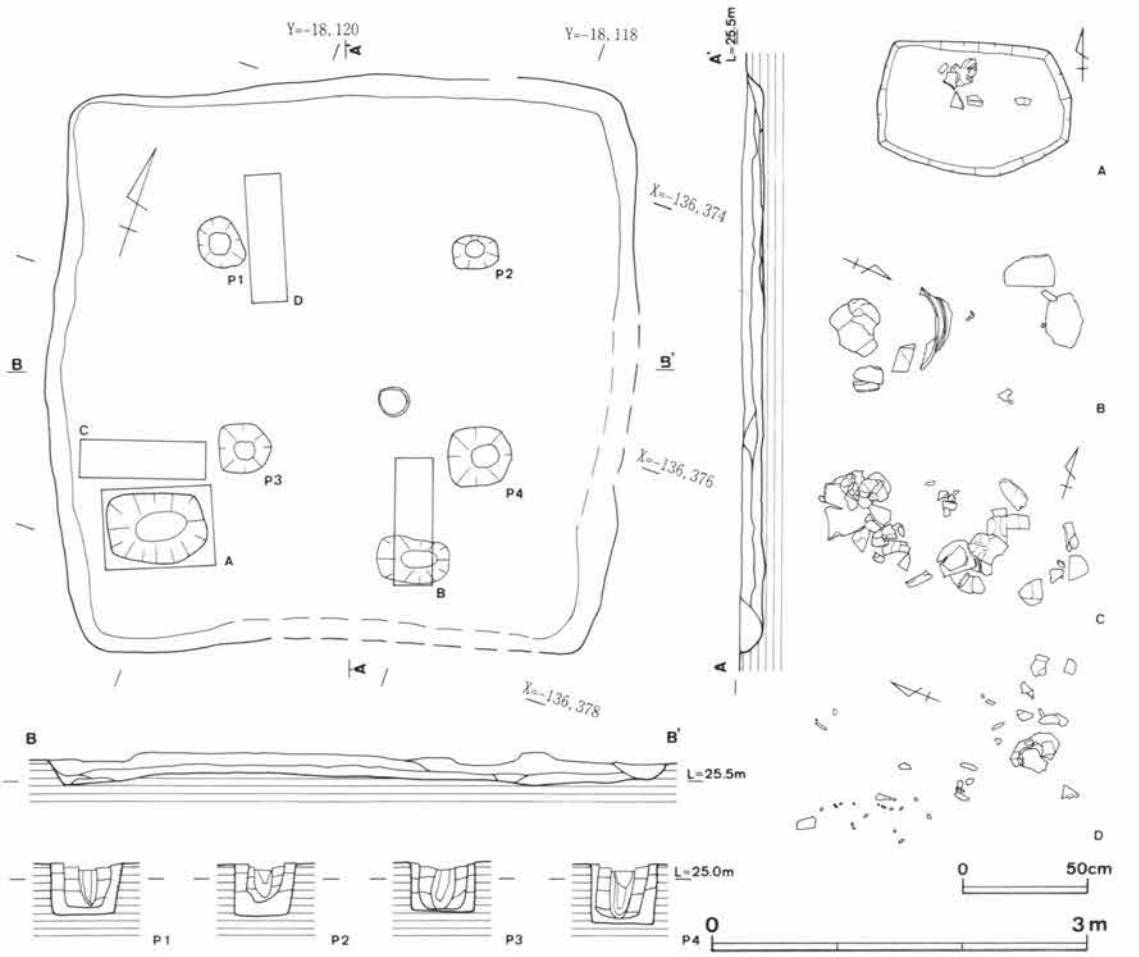
第93図　ＳＢ175実測図および柱穴断面図(1/50)

5.4mを測る。北側コーナー部から東辺中央にかけて、条里坪境溝によって大きく破壊されている。竪穴式住居跡は、掘形に沿って焼土および炭化材が集積しており、この竪穴式住居跡は天井部分が崩落した後、周囲から火をかけられて焼かれたものと考えられる。主柱穴は4本あるが、ＳＨ01と同様、いずれも1m以上深く掘り込まれており、柱穴部は濃緑褐色に変色した粘砂に置き換わっていた。また、その最下底部には、淡黄褐色に変質した粘土で柱を受ける構造となっており、礎板が置き換わったものと判断される。南辺中央には作業用土坑があり、炭化材や焼土を交えた粘質土で埋没していた。その東側には直口壺(第97図223)が原位置をとどめて遺存していた。床面には5か所の地床炉があり、大小2個セットで築かれている可能性もある。

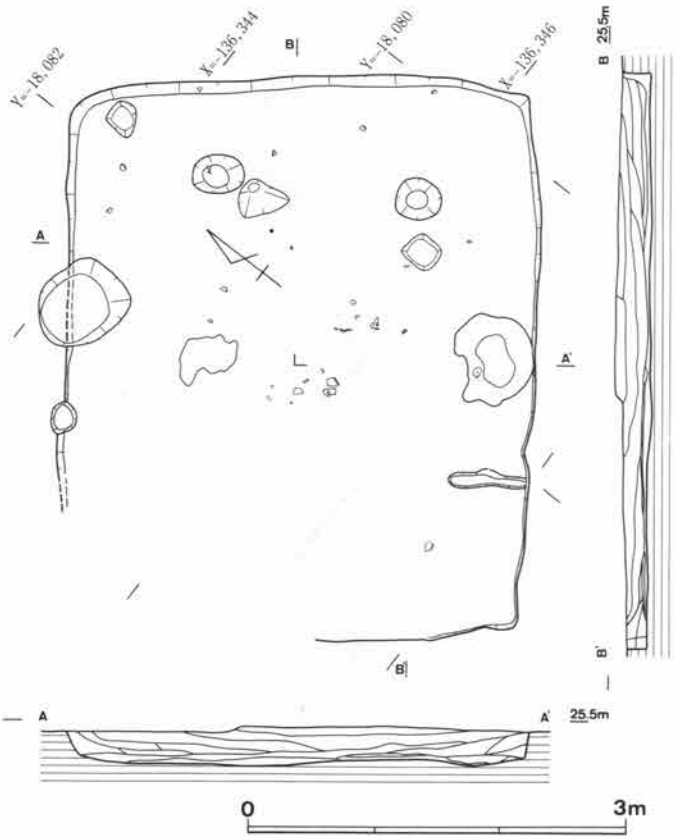
ＳＨ171　ＳＨ01の北側に隣接する竪穴式住居跡で、東側を耕作溝によって破壊されている。一辺約4.5mの方形である。主柱穴は4基で、他に、土器を出土した土坑が2基ある。主柱穴は、当調査区内で検出された他の竪穴式住居跡と比較しても浅い。床面から出土した土器のうち、注目されるのは、受け口状口縁を呈する大型壺(第97図231)であり、竪穴式住居跡からの出土は、



第94図　ＳＨ173実測図および柱穴断面図



第95図　ＳＨ174実測図および柱穴断面図(1/60)（上）
第96図　ＳＨ262実測図(1/60)（右）



珍しい。

ＳＨ262　調査区の北西端で検出した竪穴式住居跡で、上層で検出された中世遺構と比較すると大きく方位を違えるが、他の古墳時代遺構と共通している。主柱穴は２基のみ確定したが、その他の柱穴については、中世遺構と重複しているため、判定し得ない。南東辺中央には作業用土坑があって、間仕切りに用いられたと思われる浅い溝も検出されている。北側コーナーのピット中からは土師器高杯口縁部が正位置で検出された。

ＳＨ505　調査区南東部、トレンチ

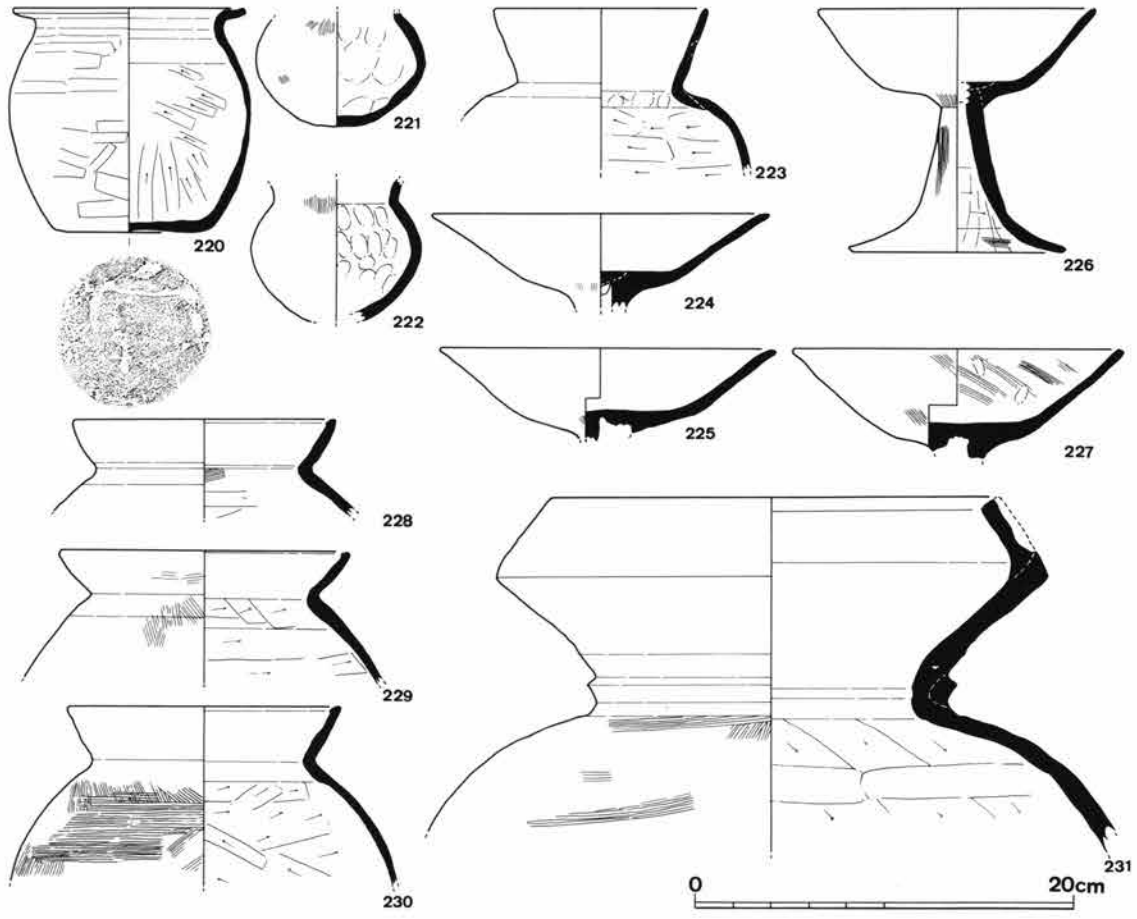
壁面に断面を検出したもので、重機掘削中に誤って削平した。トレンチ壁面を一部切り崩して調査を実施したが、さらに調査区外へと遺構は延びていた。したがって、住居床面の一部を調査したに過ぎないが、臼玉や平底鉢(第97図220)などの注目すべき遺物が出土した。

2)出土遺物

古墳時代遺物には、土師器・臼玉類を数えるが、須恵器・鉄製品などは見られない。土師器はすべて竪穴式住居跡から検出されたもので、型式学的には布留Ⅱ式に該当し、集落の盛行時期を示している。

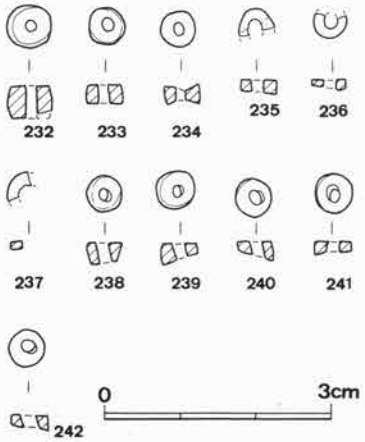
土師器(第97図)　220は韓式系の軟質平底鉢である。口縁は軽く摘み出し、端部に面を持つ。外面は板ナデ、内面は下方を掻き上げ、上方を左上がりに調整する。また、平底の底部には押圧痕を認めることができる。221・222は小型丸底壺で、わずかに押圧調整とハケ目を確認することができる。223は直口壺で、肩部内面に横方向のケズリ、224～227はほぼ同型式の土師器高杯、杯底部から口縁部にはゆるやかに立ち上がり、全体をハケで調整している。228～230は口縁端部の肥厚する布留甕で、230には肩部に横ハケをめぐらせる。231は口縁部が受口状に作り出し、器壁もきわめて厚い。口頸部には鋭く尖る突帯をめぐらせ、外面はハケによって調整する。肩部以下の破片は埋土からは検出できなかった。

220は古墳時代中期の土器組成では特に珍しいとは言えないが、山城盆地では、分布が偏ると



第97図　古墳時代土器実測図(1/4)

いった特徴がある。特に、乙訓地域と相楽北部域は、韓式系の軟質土器・陶質土器が集中することでも知られており、向日市中海道遺跡では、ハケによって調整された平底鉢２点が出土している。



第98図　臼玉実測図

臼玉(第98図)　灰褐色～暗褐色を呈する滑石製の臼玉であり、法量によって大きく２類に分かれる。232はＳＢ175のＰ２から検出されたもので、他のものと比べて厚く、側面中央にはあわい稜を持ったていねいな作りである。233～242は232よりも薄く粗い作りで、管玉状に成形した素材石核を「管切り」によって作出したものと考えられる。通有、臼玉の使用は古墳時代中期末以降、一般化していくが、当遺跡では須恵器導入以前であり、南山城地域でもいち早く臼玉使用の儀礼が行われたとみることができる。

(5)縄 文 時 代

１)検出遺構

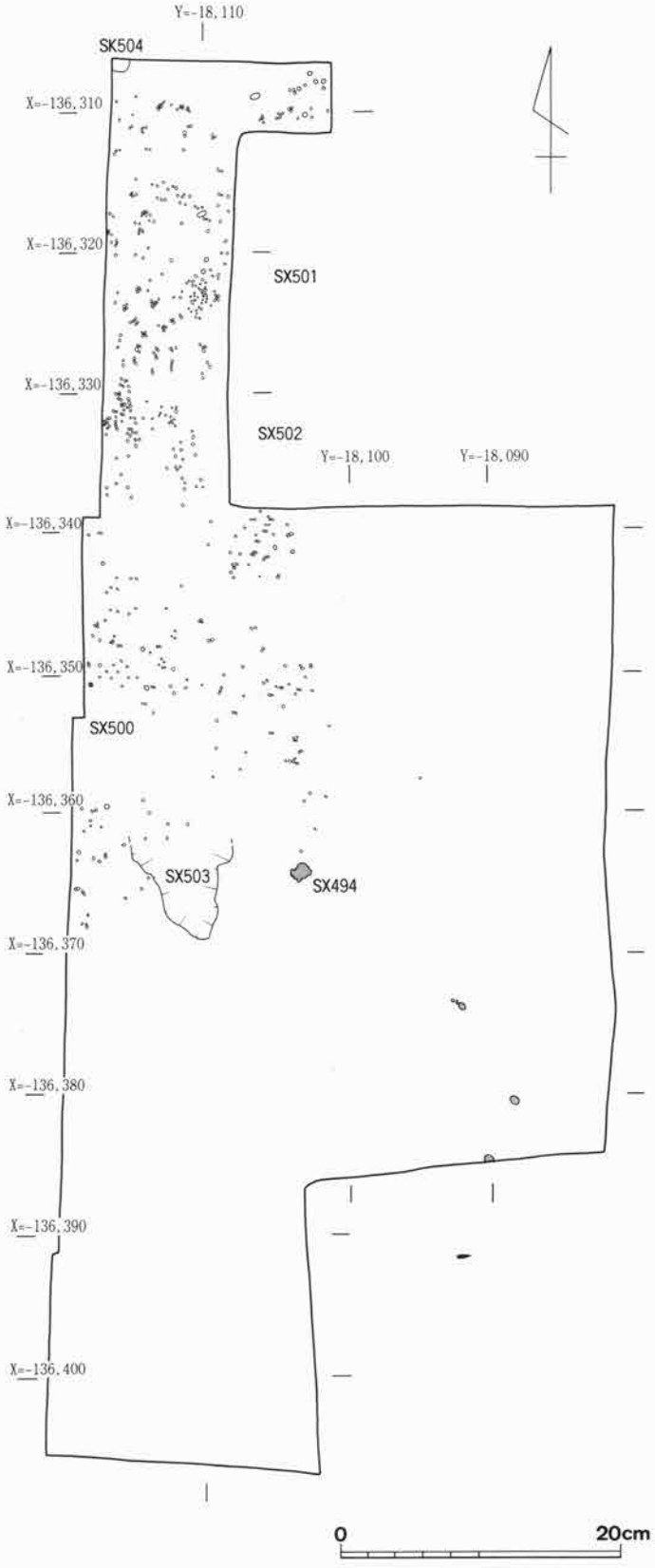
縄文時代の遺構は、中世・古墳時代の遺構面より約0.6m下層のＴ．Ｐ．24.7m付近で検出した。検出遺構はピットが主体であるが、窪地に堆積した土器溜まり２か所と貯蔵穴１基、炉跡(残骸も含む)４か所、さらには土器溜まり３か所を検出している。

縄文時代の遺構はトレンチの中央から北半にかけての部分のみであり、南半部分は早い時期に離水して後代の削平を被ったものと考えられる。縄文時代の遺構が検出された地点の上層には、古墳時代～古代にかけて静水域が形成されたことに由来する、淡黒褐色土の発達が顕著であることもそれを裏付けているが、これは、現自然堤防下の全面に縄文時代の遺構が検出される可能性が部分的に留まっていることを示唆するものであろう。

遺構群は、調査区の北西部分に集中しており、南部から東部にかけては検出できなかった。その理由は、当時の地形が北西方向へゆるやかに傾斜しており、離水していた部分は、後代の削平活動が著しいために、縄文時代の遺構群が遺存しなかったためと考える。検出したピットは、直径10～30cmを測るものを主体とし、埋土は灰褐色、暗灰褐色、黒褐色のものの３種に分かれる。深さは10cm内外を呈するものが多い。また、柱痕跡を持つものも見られたが、明確な建物跡を構成するにはいたらず、炉跡との関係も明らかにしがたかった。

土器溜まり部分に集中し、一部に炭や焼骨をかんでいる部分も見られたが、後述するように微細な地形に応じて散布した状況であった。土器は同一個体が方向を違えて散乱した状況を呈しており、原位置を留めていない。また、石鏃は遺構の希薄なトレンチ南端部分からも出土し、縄文時代の人間活動が、トレンチ全域に及んでいることが推定された。主要な遺構について記すことにしたい。

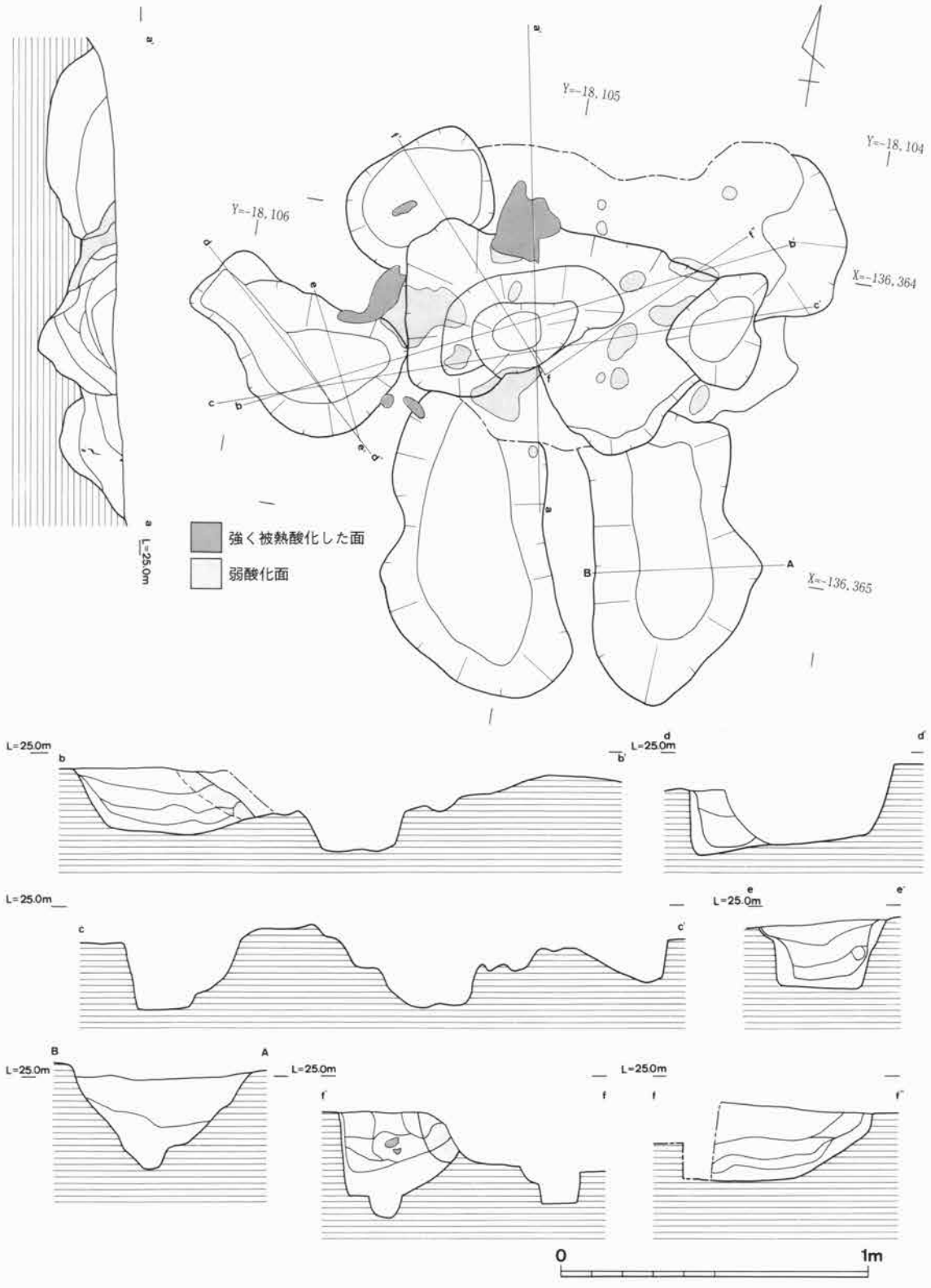
ＳＸ494　調査区のほぼ中央で検出した炉跡であり、屋外炉と判断される。同一地点に複数回の炉跡、土坑が重複している。この炉跡は、水際環境に営まれたものと判断されよう。炉跡は、



第99図　縄文時代遺構面遺構配置図(1/500)

素掘りで粘土などの壁体は構築されていないが、被熱赤化した部分が認められ、その内側は焼土と微小な骨片の散布が認められる。骨片はいずれも火をうけて破砕しており、形態による同定は不可能に近い状況であった。また、灰などは検出されなかったが、小炭片の分布が見られた。この遺構は、中央部に深いほぼ円形の炉穴を持ち、南側には被熱酸化した炉壁を検出している。また、南側には細かい焼土や炭を敷き込んだ作業面が広がり、この炉での作業が南側から行われたことを示唆している。共伴遺物は見られなかったが、ＳＸ500におけるＣ14年代測定結果、ならびにトレンチ出土土器の大勢から後期前葉～中葉に属するものと考えられよう。

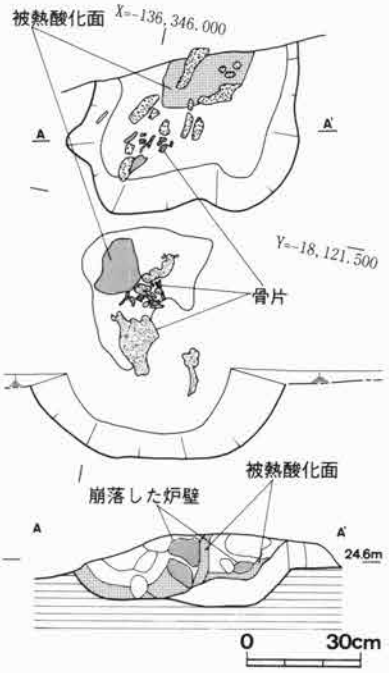
ＳＸ500　調査区南西部での排水溝掘削中に検出した炉跡である。ＳＸ494と同様に、屋外炉と判断される。ＳＸ472同様、同一地点に少なくとも２回の炉の構築が認められた。ＳＸ472よりも強い酸化被熱が認められ、炭化材や小焼骨片も確認された。炉は浅い皿状の土坑として掘り込まれており、炉壁には褐色の軟質の粘質土によって構築していたが、崩落して炉内に転落している状況が観察された。土器は出土しなかった。焼骨片は集積していたが、同定可能なほど原形を留めたものは見られなかった。この炉に遺存した炭化材は後述するように、親水性の高木落葉広葉樹であったムクノキであり、時代はＢ．Ｐ．3500を示し、縄文



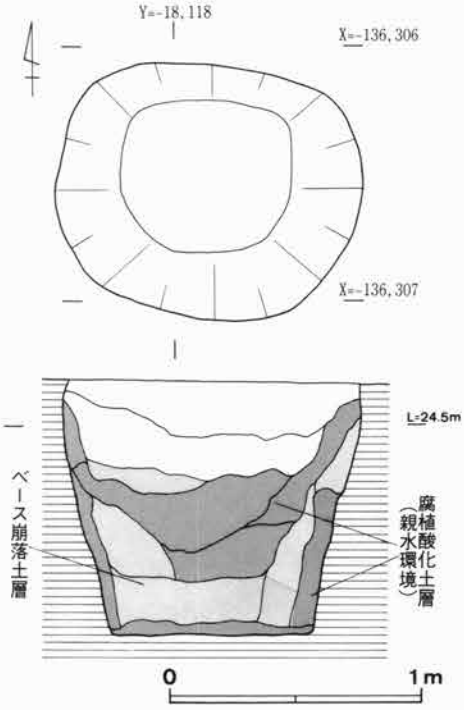
第100図　縄文時代炉跡ＳＸ494実測図(1/20)

後期中葉に比定することができる。

ＳＸ504　調査区北端で検出した長軸1.1m、短軸0.8m、深さ1.4mを測る隅丸長方形の土坑である。検出面では黄褐色系の粘質土で埋没していたが、土坑中位に至るほど埋土の色調が黒ずん



第101図　縄文時代炉跡ＳＸ500
実測図(1/20)



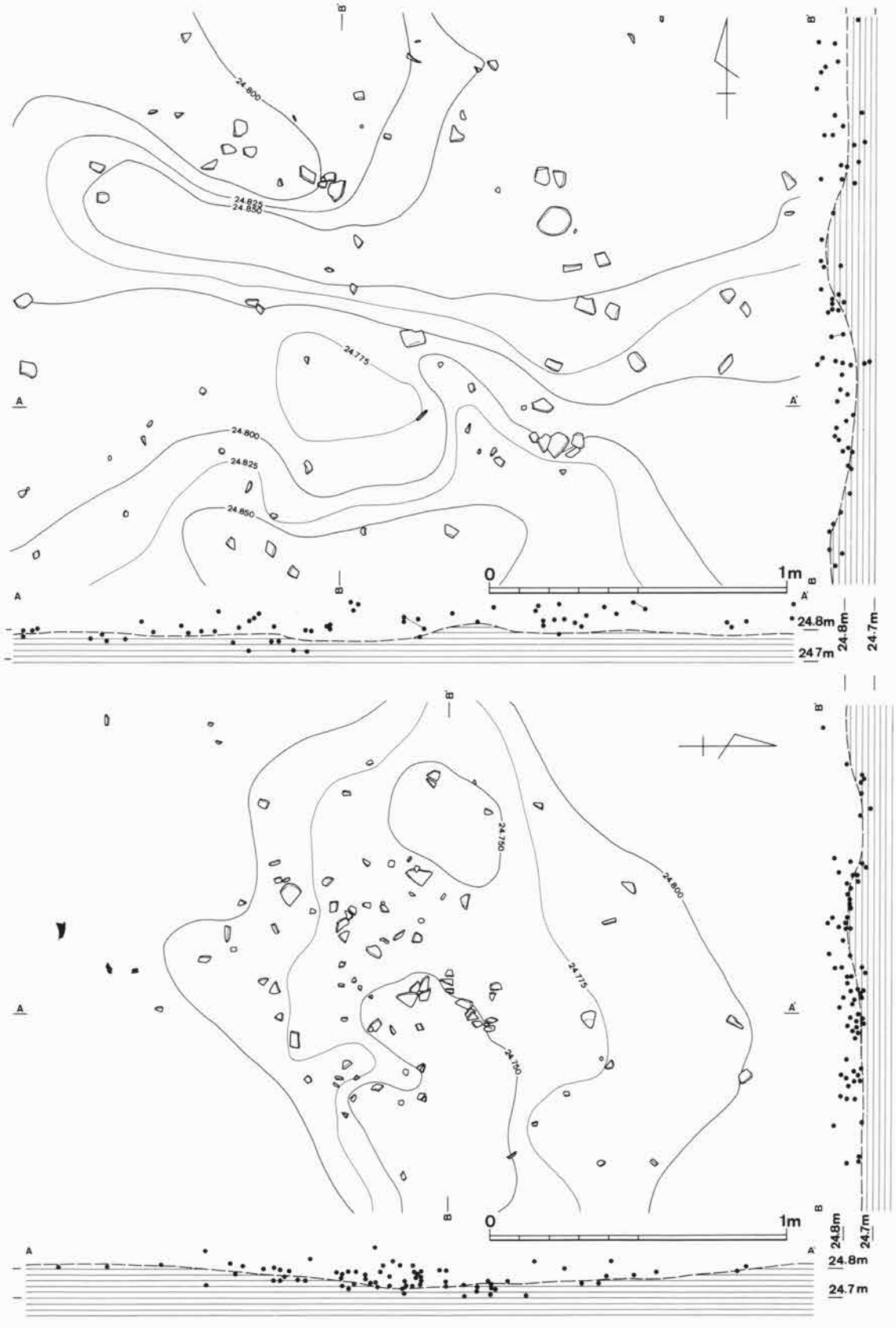
第102図　縄文時代貯蔵穴ＳＸ504
実測図(1/20)

でいき、最下部では再び黄褐色系の粘質土との漸移層となっていた。したがって、この貯蔵穴の埋没過程は、貯蔵穴の機能停止後、最初に壁面に近い部分が崩落して、しばらく崩壊が停止し、浸水する環境に変化した。その後に土坑上面まで埋まりきるように粘質土が流入したものと判断される。この埋土を採取して、水洗選別を行ったが、小炭片の他に、大形植物遺体や炭化材などは検出できなかったが、乾式の貯蔵穴と判断することが出来よう。ＳＸ501に検出している点から、後期前葉～中葉に営まれたものか。

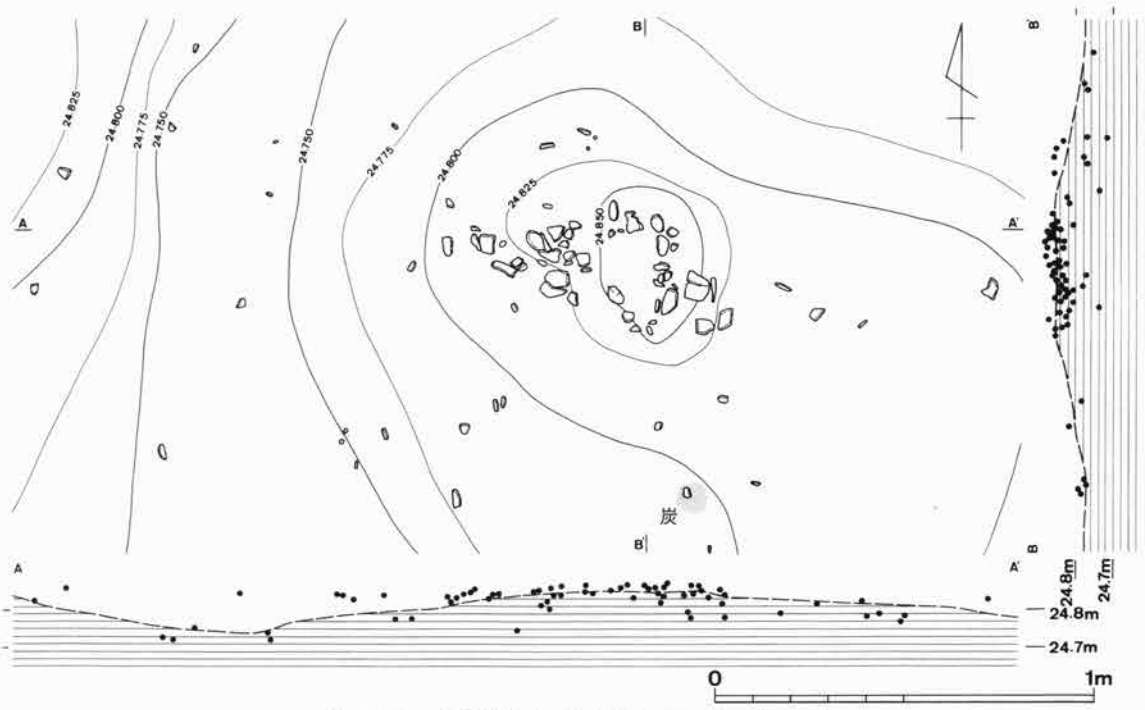
この土坑の堆積状況は、縄文後期以後の当地の古環境の変遷を反映している。後述の自然科学的分析結果を参照すると、一旦、後背湿地などの静水環境が形成された後に、離水傾向が促進し、徐々に土壌化が進行して人間活動が認められるようになったという。縄文時代のベース面に由来する黄褐色系の粘質土が土坑壁面から崩落した後、長期にわたって水没し、また、乾陸化してベースの崩落により埋没したことを示唆している。

ＳＸ501・502　調査区の北端で検出した土器溜まりである。ほぼ同一個体の破片と目されるものが集積していることと、出土位置にレベル差が認められることなどから、ゆるやかに凹凸をもった落ち込みへ二次的に土器が集積したものと考えられる。ＳＸ501は、大形破片が円環状に散布する土器溜まりである。これは当初、北東側に置かれていたものが、窪地に転落して、破裂するように小片に散布したものと判断されるが、器表の風化が著しく、明確な接合関係はうかがえなかった。ＳＸ502は、ＳＸ501と酷似した後期前葉の深鉢が求心的に分布する土器溜まりである。いずれの遺構も、上下の位置関係に留意して、取り上げた。

土器の検出レベルをもとに落ち込みの微地形を復原し、コンターラインを2.5cm間隔で復原すると、ＳＸ501は中央のやや高い部分を境界として、南北に土器片が滑落したような状況を呈し、ＳＸ502はゆるやかに窪む皿状の微地形に土器片が中央に集まるように堆積している状況を復原することできた。これらの土器溜まりの土器片は黒褐色で粗製のものを主体とし、北白川上層式に該当する無文の深鉢が主体となり、先述した炉跡の



第103図　縄文土器溜まり実測図(上段：ＳＸ501　下段：ＳＸ502)　(1/20)



第104図　土器溜まり実測図（ＳＸ503）（1/20）

絶対年代とも合致するので、土器溜まり（ＳＸ501・502）は縄文時代後期前葉～中葉に形成された遺構であると考えられる。

ＳＸ503　ＳＸ500のほぼ南東側に検出した土器溜まりで、明灰褐色の土器片が集積している。土器の分布はＳＸ501・502とは異なり、きわめて強い集中を示すことから、原位置に近いと判断されよう。出土位置からコンターラインを復原すると、ゆるやかな島状を呈する微細地形を見いだすことが出来た。また、この遺構内からは石鏃（第106図251）が出土している。これらは、ＳＸ501・502の北白川上層式の土器群と比較して、色調や仕上がりも異なり、かつ押し引き沈線で加飾するものも認められるなど、後述のようにＳＸ501・502よりも先行する中期末～後期初頭の遺構と判断される。本遺構群は、炉と貯蔵穴、ピットが主体であり、その性格についても類例が少ないため、位置づけが難しいが、縄文時代中期末葉～後期前葉に木津川低地部の開発が開始されたことを示す資料となる。従来、丘陵や段丘部の縄文時代遺跡は知られていたが、本例は低地部への進出時期を考察する上で注意を喚起する事例となった。

（河野一隆）

2）出土遺物

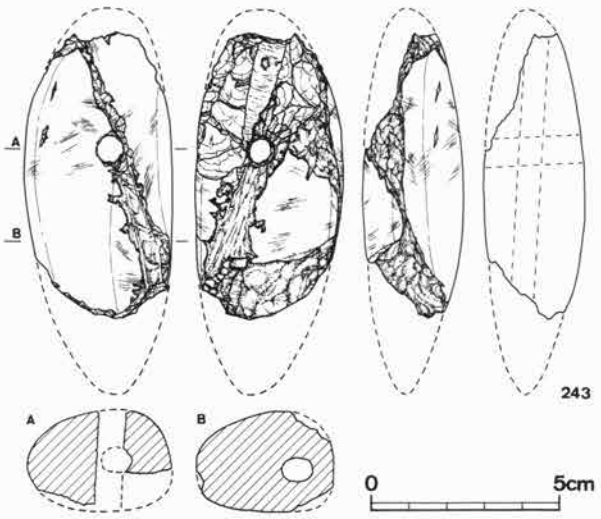
石製品は翡翠製大珠１点、石鏃９点、二次加工痕のある剥片２点、剥片１点である。土器は図化可能なもの34点を掲載した。

翡翠製大珠（巻頭図版、第105図）　243は２つの孔を持つ緒締形の翡翠製大珠である。残存長7.5cm、最大幅3.95cm、最大厚2.7cm、重量104.3gを測る。上下端の欠損に人為的な敲打痕は見られない。表面には沈線状の自然面が残る。孔は孔径0.65～0.70cmであり、中心附近でほぼ垂直に交差している。孔内の回転研磨痕幅は約0.17cm間隔であるが、回転方向は確認できなかった。表面は良く研磨され、所々に研磨痕が残る程度である。なお、本資料は平成９年度調査の際、表土

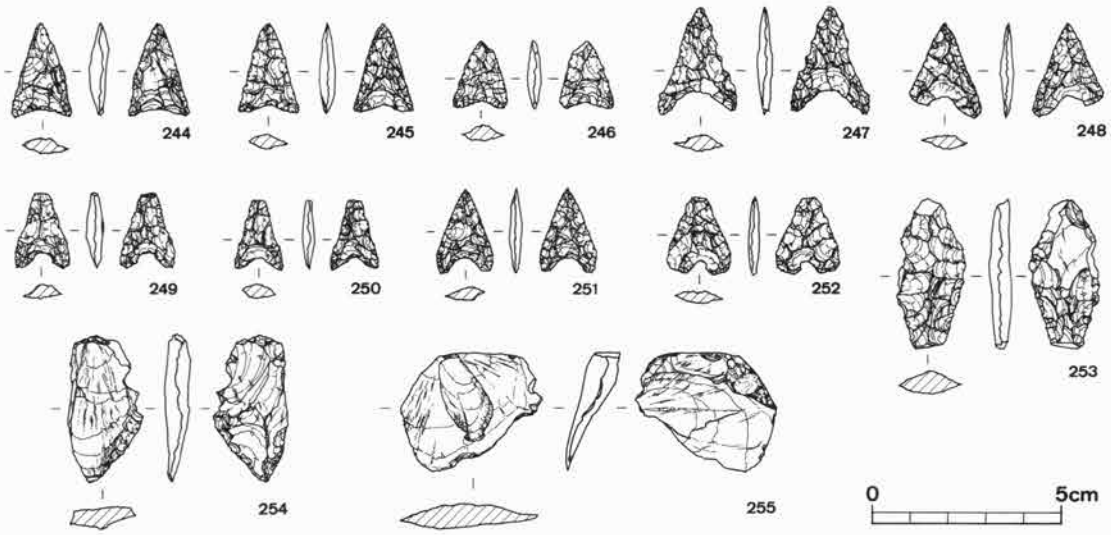
層から出土したもので、詳細な帰属時期等は不明である。

石鏃・剥片（第106図）　244～252は石鏃（凹基無茎鏃）であり、石材は総てサヌカイトである。ほとんどの石鏃は中央に稜線ができるような調整剥離が両側縁から加えられている。244には背面が残る。246の先端は新しい折損である。249・250・252は使用時に折損したようである。244以外の石鏃は最後の段階で基部に調整剥離を加えて凹基鏃を作る。253は石鏃同様、長めの調整剥離が加えられ中央に稜線ができている。石鏃の未製品の可能性がある。254は側縁に二次加工痕のある剥片で、打面に数回に渡る敲打痕を持つ。255は打面と背面に自然面が残る剥片である。

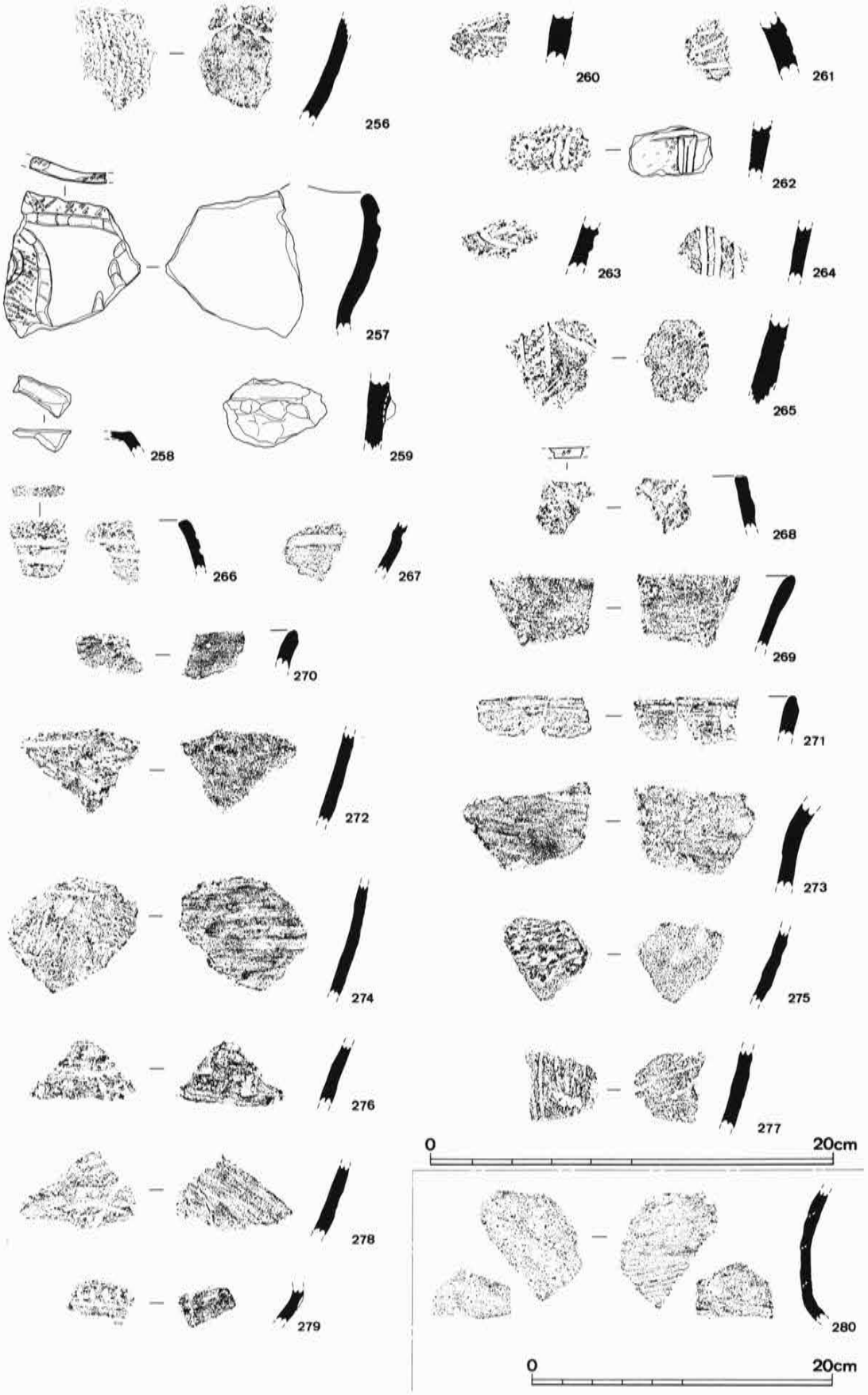
縄文土器（第107・108図）　256は胴部下半の土器片でＬＲ縄文が施されている。胎土と色調から中期前半に比定できよう。257～273・277・280～286は中期末～後期の土器であり、257・269・272・274・278・280～282・284は生駒西麓産である。257は押し引き沈線によって渦巻き状の区画を付けその外側にはみ出した縄文を磨り消したものであり、深浅縄文を用いたと考えられる。口唇部にも縄文を施すが、内面はていねいなナデである。北白川Ｃ式土器の深鉢Ａ類に同様の土器がみられることから同時期と考えられる。258は北白川Ｃ式の橋状把手と考えられるものである。259は貼付け突帯上に刻み目を持つ淡褐色の土器である。突帯上下部に指跡が残る強いナデが見られる。ＳＸ503出土である。261は３本の浅い沈線が施されている。260・262は浅い沈線に磨消縄文を施す淡褐色の土器片で、261と同一個体と考えられる。263は楕円状の区画内に斜行沈線、その外側に縄文が施文されている。264は３



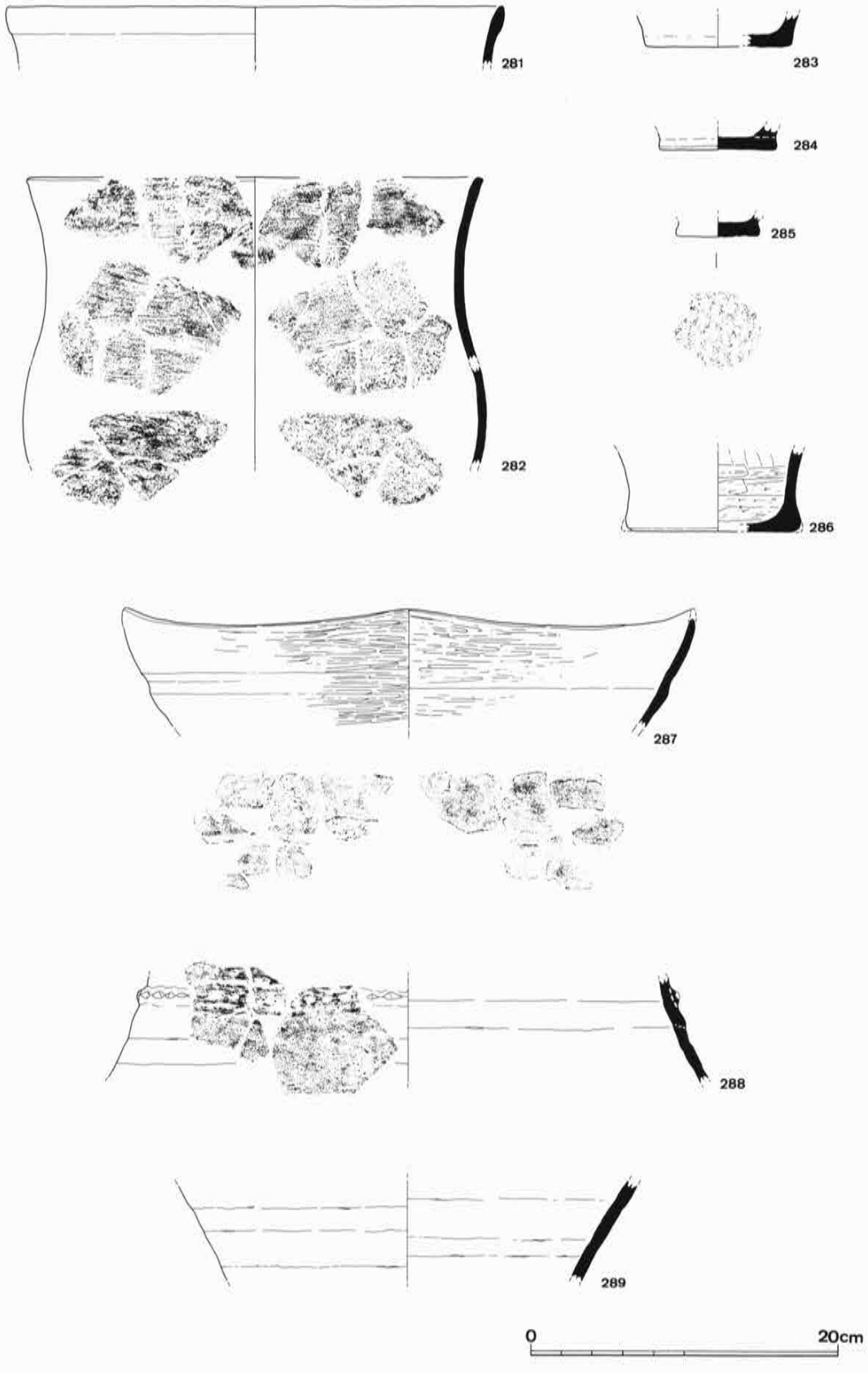
第105図　翡翠製大珠実測図（1/2）



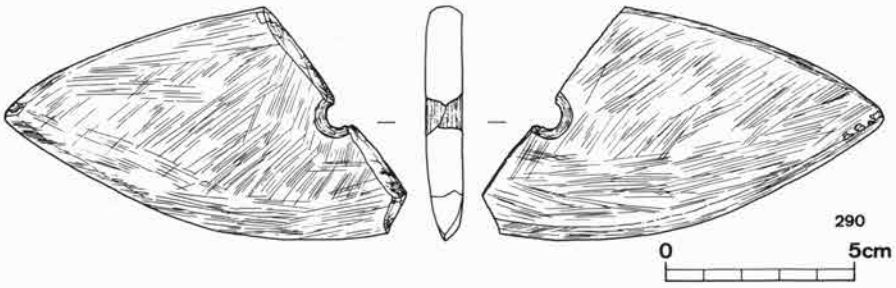
第106図　縄文時代石鏃・剥片実測図（1/2）



第107図　縄文土器実測図(1)　(1/4)



第108図　縄文土器実測図(2)　(1/4)



第109図　石庖丁実測図(1/2)

本の沈線が垂下する。265は２本の沈線間と弧状沈線内にＲＬの磨消縄文を施す。263～265はＳＸ503から出土しており、同一個体であろう。ＳＸ509出土の266・267は同一個体である。２本の沈線と縄文施文のある266は口縁であり、口唇部にも縄文を持つ。267は胴部に相当し、先端が角張った棒状工具による沈線とそれより上部に縄文を施す。内面は外面沈線の影響を受け、屈曲があるようにゆるやかに盛り上がる。268は磨滅が著しく調整が不明瞭であるが、口唇部と外面に縄文を見ることができる。269・281は口縁部が肥厚する無文土器である。ＳＸ501下層出土の281は肥厚が特に明瞭である。270・271は強いナデにより口縁外面に段ができ、口唇が尖り気味の土器である。後者はていねいなナデが内外面ともに施され、精製土器の口縁の可能性がある。ＳＸ503出土である。272は粗製深鉢の胴部片である。淡褐色のていねいなナデの273はＳＸ501下層から出土した。無文深鉢の頸部に相当するであろうか。277は巻貝条痕と考えられる。280は内面に横方向の巻貝条痕を持つ粗製深鉢である。外面は不明瞭である。282はＳＸ502下層から比較的纏まって出土した内外面に巻貝条痕を施す、粗製深鉢である。283～286は底部である。284は粘土を円盤状にし、その上に粘土紐を載せて作る。285は外面に網代痕が残る。286は前者２例より上部でゆるやかに外反し、内面下部に横方向の、上部に縦方向のナデを施している。底部はいずれも中期末～後期初頭と考えることができよう。274～276・278は外面にケズリ調整のある晩期の粗製深鉢である。279は屈曲部上に爪形状の刻み目を施し、下部に沈線を引いた浅鉢の胴部である。晩期前葉滋賀里Ⅲａ式の段階に当たるのではないだろうか。287は内外面をミガキ調整、頸部は強いナデによって沈線を作り出している。４単位の波状口縁になると考えられ、滋賀里Ⅲａ式の浅鉢に比定される。288は胴部に貼り付けられた刻目突帯を持ち、内外面に粘土紐痕を顕著に残すことから、晩期終末の長原式に相当する土器であろう。289と同一個体であり、口縁と胴下部が窄まる深鉢になると考えられる。以上のことから、主な検出遺構の時期は、ＳＸ503は中期末～後期初頭、ＳＸ501・502・509は後期前葉～中葉と考えることができよう。

流紋岩製石庖丁(第109図)　290は杏仁形外湾片刃の流紋岩製石庖丁である。表裏面は全面に研磨痕が認められ、直径約0.6cmの回転研磨によって二方向から穿孔された孔を持つ。折損は使用時と考えられる。弥生時代前期後半に位置付けられよう。

(近藤奈央)

(6)自然科学分析

１)はじめに

椋ノ木遺跡は、木津川右岸の氾濫原に位置している。遺跡の後背地には、白亜紀の領家複合岩類(花崗岩類・変成岩類)の基盤岩からなる山地斜面および更新世の大阪層群で形成される丘陵が分布している(市原編、1993)。また、木津川沿いには、河岸段丘の発達が認められる。本遺跡周辺では、５面の段丘面が分布しており、これらの構成層は、基盤となる大阪層群を不整合に覆って形成されている(池田・植村、1990)。

２)分析目的

調査区内における遺跡形成過程の検討

本調査区では、縄文時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。これらの遺構・遺物の形成および埋没過程の検討を行うため、花粉分析・植物珪酸体分析および軟質Ｘ線写真撮影観察を実施する。これらの分析結果と、現地調査時の層序観察や縄文時代の遺構内から採取された炭化材の放射性炭素年代測定の結果を含めて、本調査区における遺跡形成過程について検討する。また、調査区内で検出された竪穴式住居跡(ＳＨ01・173)の炉跡の焼土部分について、Ｘ線回折分析を実施し、粘土鉱物の組成等から焼成温度に差異が認められるのか、またその焼成温度はどの程度であったのかに関する検討を行う。

３)層序

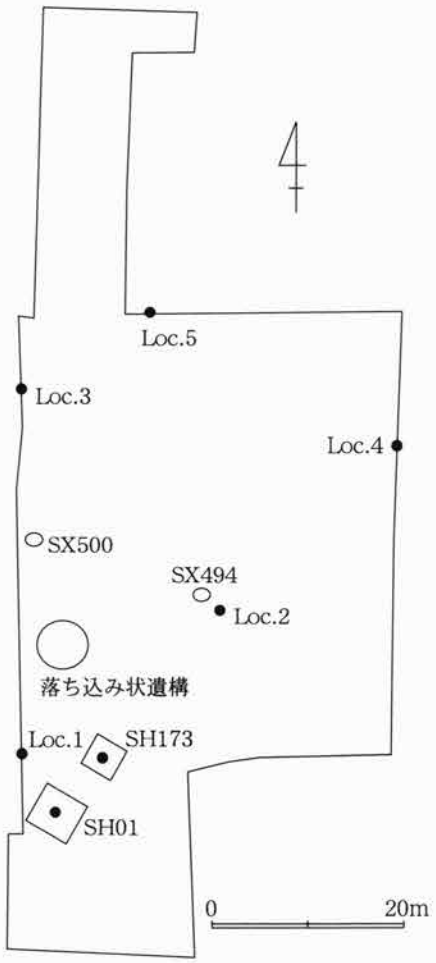
本調査区で確認された遺跡堆積層は、考古遺物の相対年代および岩質・層相により①～⑧層の層序区分を行った(第110・111図)。各層内において認められる層相の累重から推定される堆積環境については、Miall(1996)の河成堆積相コードや松田(1999・2000)、人為的な攪乱堆積物の層相については、松田(1996)の記載を参考とした。以下に各堆積層の特徴について述べていく。

①層：灰色を呈し、主に泥質砂からなりコンクリート片などを多量に含む現在の盛土。

②層：浅黄色を呈するシルト質砂～中粒砂。②層は、４～８層程度の単層によって構成されている。本層準の大半は、人為的に攪乱された塊状をなす堆積層で構成されている。②層内には、粒団構造の発達が認められるが、しまりが悪く孔隙が多い特徴が観察される。このような特徴から、本層は畑地耕作土として形成されたことが推定される(松田、1996)。これらの耕作土層に挟在して初生的な氾濫堆積物の堆積構造を残す水平葉理をなし淘汰が極めて良い中粒砂層の挟在も若干認められる。出土遺物の相対年代から、本層準は近世に形成されたことが推定される。

③層：灰黄褐色を呈し塊状をなす砂質シルト。本層は、粒団構造の発達が認められるが、しまりは比較的悪い状態である。層相から、③層は耕作土として形成されたことが推定される。発掘調査の結果、本層は15世紀代頃に形成されたことが推定されている。

④層：灰黄褐色を呈し塊状をなす砂質シルト。本層最下部には、⑤層を主な起源とする細礫～中礫クラスの偽礫を多く含む層準が存在している。この層準の上部には、粒団構造が良く発達する層準が形成されている。層相から、④層は耕作土の基盤層として形成されたことが推定される。本層は、２～４層の単層に区分することが可能である。④層からは、14世紀後半を下限年代とす



第110図　調査地点の位置図

る考古遺物が検出されている。

⑤層：灰色を呈する砂質粘土質シルト。調査区北西部に主に分布している。層相から、⑤層は主に静水域で形成された堆積層であることが推定される。⑤層は、下位の⑥層最上部に形成された古墳時代前期の遺構および④層内に含まれる考古遺物の相対年代から、古墳時代前期以降から古代後半までに形成されたことが推定される。

⑥層：灰色～灰オリーブ色を呈する塊状ないし水平葉理をなす粘土質シルトないし砂質粘土質シルト。⑥層中部より下位の堆積層については、調査区内に設定した3か所の深掘トレンチによって確認を行った。⑥層は、T.P.22.6～25m付近にかけて累重している。本層は、最下部のT.P.22.6～24m付近にかけて上方細粒化したのち、最上部の25m付近に向かって上方粗粒化していく。再び上方粗粒化をなす層準付近において、縄文時代後期を主体とする遺構・遺物が検出されている。本層準の最上部付近では、赤褐色を呈する微細な根痕や樹木起源と推定される灰色粘土で充填された根痕が多く観察される。これらの根痕の頻度は、上位に向かうにつれ、その分布密度を増していく。また、根痕が多く認められる層準では、5～10㎜程度のシルト質砂～細粒砂の微細な偽礫が多く存在している。これらの偽礫は、土壌発達によって生じた粒団であると推定される。層相から、⑥層は後背湿地などの静水域で形成された堆積層であることが推定される。⑥層最上部には、塊状をなし有機物を多く含む土壌が形成されている。土壌最上部付近では、古墳時代前期の遺構が検出されている。

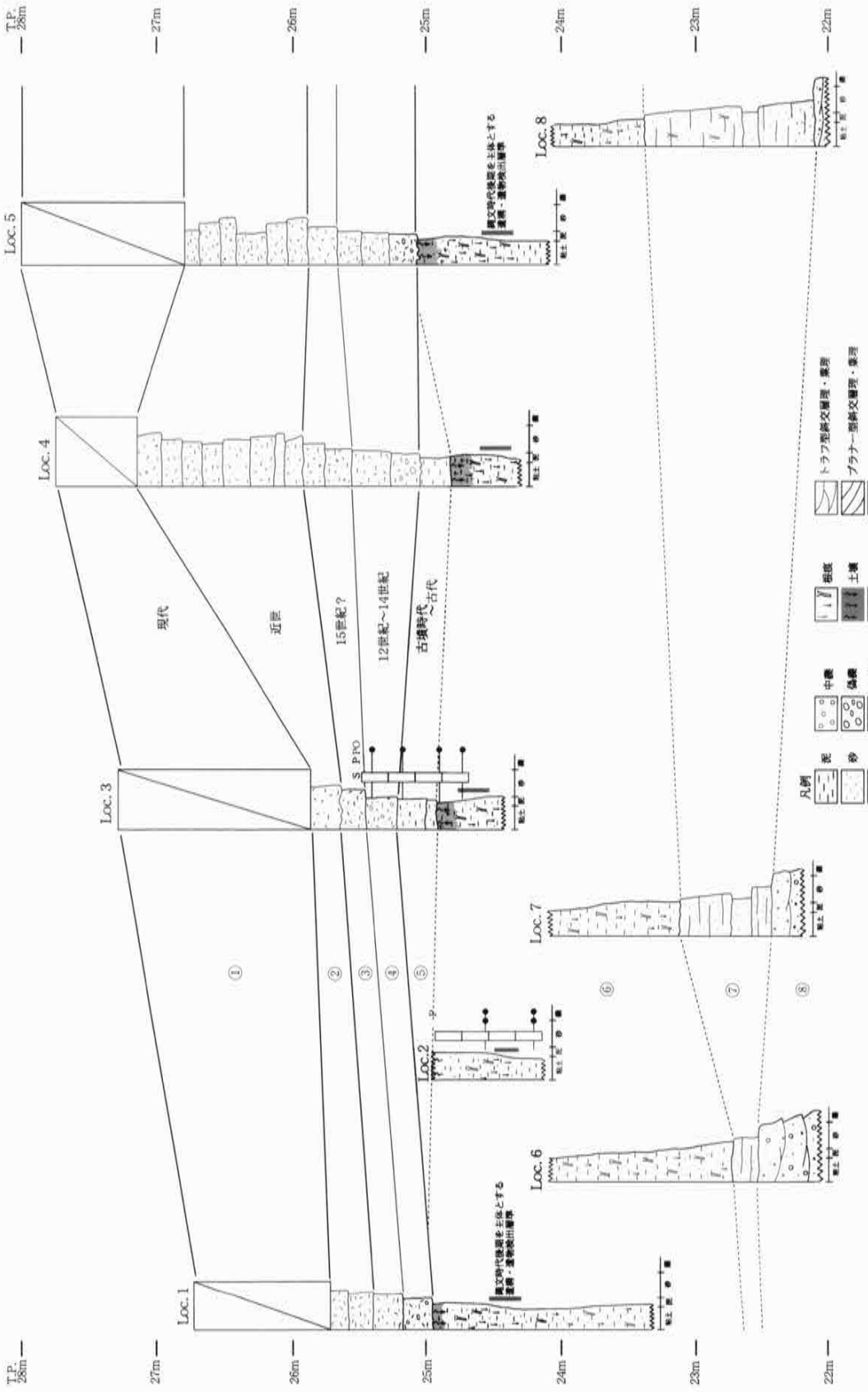
⑦層：灰黄褐色を呈し水平葉理をなす中粒砂～粗粒砂。層相から、流路縁ないし氾濫堆積物であると推定される。⑦層は、調査区の北に向かって層厚を増していく。

⑧層：灰オリーブ色を呈しトラフ型斜交層理をなす極粗粒砂～細礫。層相から、流路充填堆積物であると推定される。Loc.6で重機による深部の掘削を行った結果、掘削限界に相当するT.P.20m付近においても⑧層が連続して堆積していることが確認された。

4）試料

①微化石・軟質X線分析

試料は、2地点の試料番号3・4（以下に2－3、2－4と略す）、3地点の試料番号1～4



第111図　調査地点の層序対比および分析試料採集位置

(以下に３－１～４と略す)である。これら計６点の試料のうち、花粉分析を行うのは３地点の試料番号３・４の計２点、植物珪酸体分析を行うのは全６点、軟質Ｘ線写真撮影観察を行うのは３地点の試料番号３・４の計２点である。分析試料の詳細および採取位置については、模式柱状図とあわせて第111図に示す。

②放射性炭素年代測定・樹種同定

試料は、縄文時代のＳＸ500と土器溜まり(ＳＸ503)から出土した炭化材２点である。ＳＸ503からは２片の炭化材を抽出したため、合計点数は３点となる。このうち２点について放射性炭素年代測定(ＡＭＳ法)を、３点について樹種同定を実施する。

③Ｘ線回折分析

古墳時代前期の竪穴式住居跡内(ＳＨ01)から検出された焼土、および同時期の竪穴式住居跡内(ＳＨ173)の炉跡から検出された焼土の計２点である。

５)分析方法

①花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛：比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸９：濃硫酸１の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

②植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70Ｗ、250KHz、１分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

③軟質Ｘ線写真撮影観察

土層断面より採取した柱状ブロック試料から、幅７cm、長さ20cm、厚さ１cmの板状の試料をプラスチックケース内に分離、成形して軟質Ｘ線写真の撮影を行った。撮影はニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

④放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

⑤樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

⑥Ｘ線回折分析

105℃で４時間乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉砕し、Ｘ線回折用アルミニウムホルダーに充填し、Ｘ線回折分析試料(無定方位試料)を作成する。作成したＸ線回折分析試料(無定方位試料)について以下の条件でＸ線回折分析を行う(足立、1980：日本粘土学会、1987)。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐、未公表)により検索する。

装　置：島津製作所製ＸＤ－３Ａ	Time Constant：1.0sec
Target ：Ｃｕ(Ｋα)	Scanning Speed：２°/min
Filter ：Ｎｉ	Chart Speed：２cm/min
Voltage：30KVP	Divergency：１°
Current：30mA	Recieving Slit：0.3mm
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：３～45°

６)結果

検出された微化石および軟質Ｘ線写真の観察を合わせた分析結果の解釈については、次章で述べている。そのため本章では、分析結果の詳細は図表類に示し、文章中では簡潔に示すのみとしている。

①花粉分析

結果を付表２に示す。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、３地点試料番号３で１個体、試料番号４で２個体の木本花粉が検出されるのみであった。シダ類胞子についても、産出個体数は少ない。プレパラート内の状況写真を図版第93・94に示す。

②植物珪酸体分析

結果を付表３、第112図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態も概して良好である。

③軟質Ｘ線写真撮影観察

堆積物柱状試料１～４の軟質Ｘ線写真を図版第95～98に示す。

④放射性炭素年代測定

結果を付表４に示す。ＳＸ500出土炭化材は約3510年前前後、落ち込み状遺構出土炭化材は約3690年前前後の測定値を示す。なお、表中の同位体比は標準値からのずれを千分偏差(‰；パーミル)で表した年代である。δ13Ｃの値は、試料炭素の13Ｃ／12Ｃ原子比を加速器で測定し、標

付表2　花粉分析結果

種　類	3地点	
試料番号	3	4
木本花粉		
ツガ属	1	-
クマシデ属－アサダ属	-	1
ツタ属	-	1
シダ類胞子		
イノモトソウ属	2	2
他のシダ類胞子	13	9
合　計		
木本花粉	1	2
草本花粉	0	0
シダ類胞子	15	11
総計（不明を除く）	16	13

準にＰＤＢ(白亜紀のベレムナイト類の化石)を用いて算出した値である。今回の試料の測定年代は、この値に基づいて補正した年代である。

⑤樹種同定

いずれも広葉樹のムクノキに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ムクノキ(Aphananthe aspera(Thunb.) Planchon)ニレ科ムクノキ属

試料はいずれも年輪界が観察できなかった。散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が複合して散在し、年輪界方向に径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～５細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

⑥Ｘ線回折分析

Ｘ線回折結果を第113図に示す。ＳＨ01・173の焼土では、回折パターンに若干の違いが見られるが、石英(quartz)、斜長石(plagioclase)、カリ長石(K-feldspars)、角閃石(hornblende)の他、粘土であるスメクタイト(smectite)、カオリン鉱物(kaolin minerals)、雲母鉱物(mica minerals)が検出されるなど、構成鉱物に

付表3　植物珪酸体分析結果

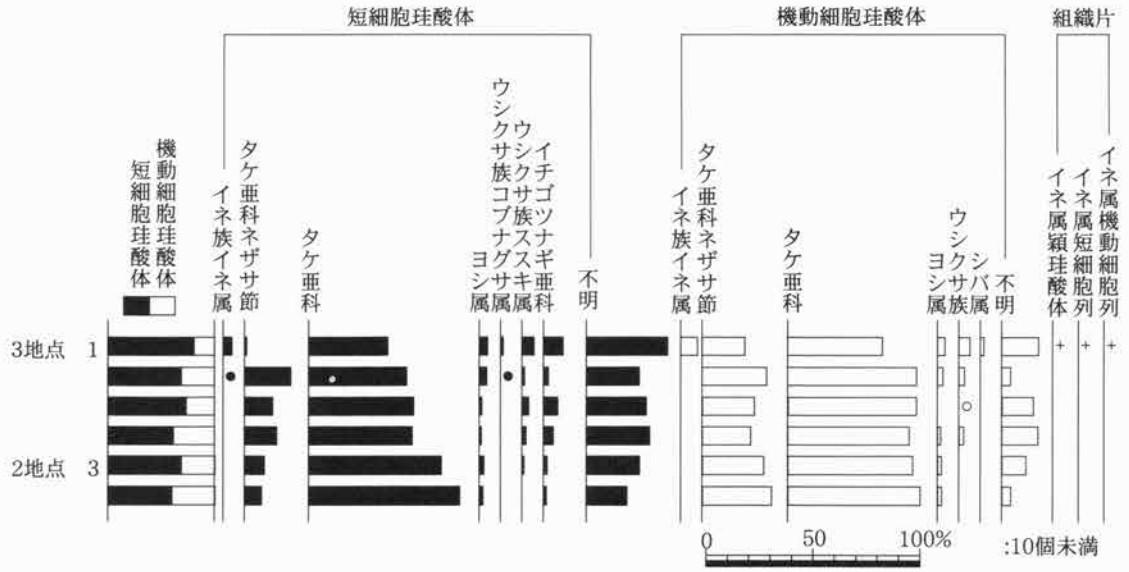
種　類	2地点		3地点			
試料番号	3	4	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	-	-	20	1	-	-
タケ亜科ネザサ節	23	19	5	56	40	33
タケ亜科	156	173	180	119	152	107
ヨシ属	5	4	19	9	3	2
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	6	1	-	-
ウシクサ族ススキ属	2	-	27	3	9	4
イチゴツナギ亜科	4	3	44	6	20	10
不明キビ型	10	8	116	20	46	27
不明ヒゲシバ型	39	23	48	32	25	25
不明ダンチク型	13	15	20	12	15	13
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	-	-	9	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	33	54	23	35	28	32
タケ亜科	67	103	51	70	69	80
ヨシ属	2	3	4	3	-	2
ウシクサ族	-	-	6	3	1	3
シバ属	-	-	2	-	-	-
不明	13	7	20	5	17	24
合　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	252	245	485	259	310	221
イネ科葉身機動細胞珪酸体	115	167	115	116	115	141
総　計	367	412	600	375	425	362
組　織　片						
イネ属穎珪酸体	-	-	1	-	-	-
イネ属短細胞列	-	-	2	-	-	-
イネ属機動細胞列	-	-	3	-	-	-

付表4　放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構名	試料の質	樹種	測定年代 BP	δ13C (‰)	補正年代 BP	Code.No.
SX500	炭化材	ムクノキ	3530±30	-28.09±1.21	3150±30	IAAA-10614
落ち込み状遺構	炭化材	ムクノキ	3710±30	-27.36±1.15	3690±30	IAAA-10615

(1)測定年代および補正年代は、1950年を基点に何年前であるかを示した値。

(2)誤差は、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代。



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+の記号で示す。

第112図　植物珪酸体群集と組織片の産状

差は認められていない。

７）考察

①縄文時代の遺構から検出された炭化材の年代測定について

縄文時代の炉跡ＳＸ500、およびＳＸ503より出土した炭化材の年代は、約3500～3700年前の年代値を示す。これらの年代は、縄文時代後期中葉頃に位置付けられる（谷口、2001）。分析試料は、すべてムクノキに同定された。ムクノキは、適潤地を好んで生育する落葉高木であり、通常高さが約20m、直径１m程度である。

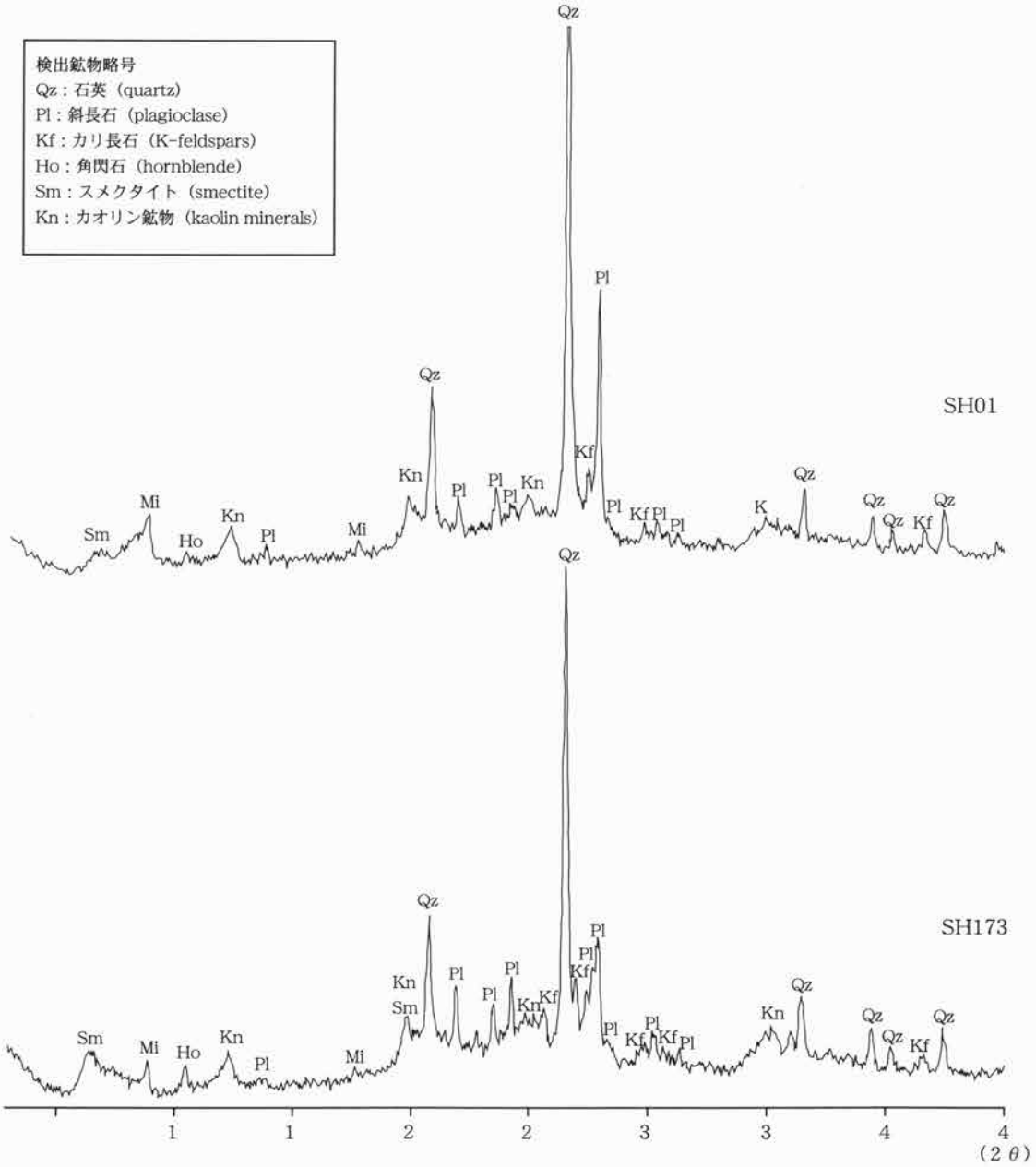
②軟質Ｘ線による遺跡堆積層の観察

図版第95～98で示している軟質Ｘ線写真は、ポジ写真の色調を反転しており、堆積物の密度が大きい部分がより白く、小さい部分がより黒く表現されている。軟質Ｘ線写真の観察により確認された堆積物柱状試料内の層界については、上位から順々に１層ごとに層名を記している。

軟質Ｘ線写真の観察にあっては、土壌の基本的構造であるペッド（粒団）や主に植物の根によって形成されたと推定される孔隙（写真で黒く表現されている部分）の形状に着目して記載を行った。記載にあっては、『土壌薄片記載ハンドブック』（久馬・八木訳監修、1989）を参考とした。

堆積物柱状試料の最上位に存在する１層は、下位の２層に比べ泥質な堆積物で構成されており、ペッドおよび孔隙の発達が悪い特徴が観察される。２層内では、幅１㎜程度の直線状をなす孔隙が顕著に観察される（図版第95拡大図Ａ）。２層の上位から中位にかけては、球状をなす径３㎜程度のやや不明瞭なペッドの発達が認められる。これらのペッドは、下位に向かうにつれ、その発達度が弱くなっている。

３層内では、幅0.5㎜程度のランダムな配向性を示す孔隙が密集している（図版第95拡大図Ｂ）。



第113図　炉跡焼土のＸ線回折図

３層最上部では、塊状をなし径４㎜程度のペッドの発達が認められる（図版第95拡大図Ｂ）。これらのペッドは、二次ペットとしての形成が顕著であり、径0.2～0.5㎜程度の微細なペッドが集合して構成されている。３層中部から下部では、ペッドの発達が認められない（図版第95拡大図Ｃ）。この部分では、径５～10㎜程度の泥質な偽礫が多く含まれている（図版第96拡大図Ｄ）。これらの偽礫は、上位に向かって粒径を減じていく傾向にある。

５層内では、径５㎜程度の粗大な孔隙が多く観察される。５層最上部から中部には、幅0.5㎜程度のランダムな配向性を示す孔隙が密集して存在している。この部分では、球状をなす径５㎜程度のペッドが顕著に発達しており、ペッドを囲むようにして存在する孔隙もよく観察される（図版第96拡大図Ｅ）。５層下部では、ペッドが発達しておらず、上位の層準で観察されたような

孔隙の分布も希薄となる(図版第96拡大図Ｆ)。

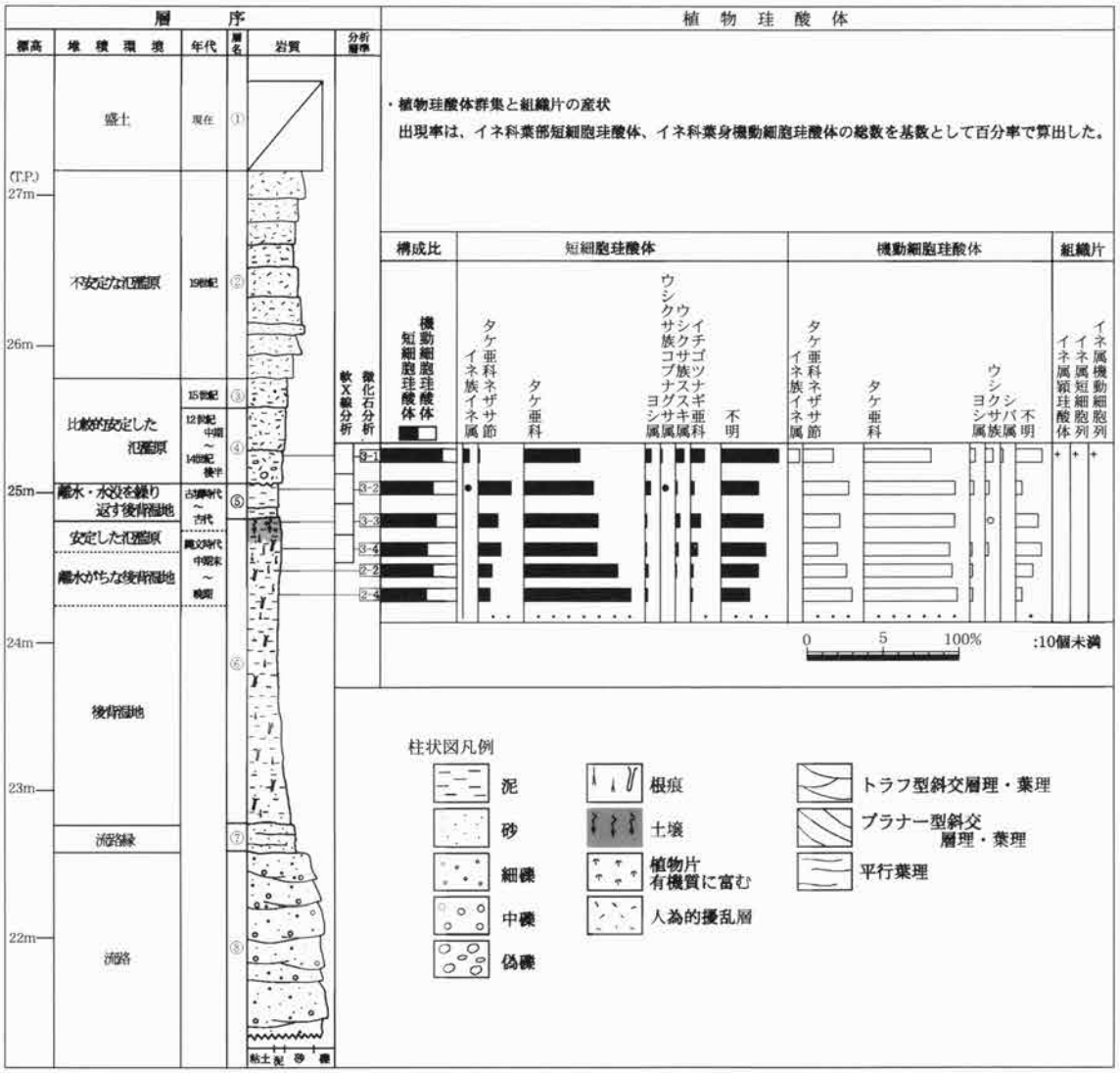
６層では、ペッドの発達があまり認められない(図版第97拡大図Ｇ)。７層は、有機質に富み黒褐色を呈する堆積物で構成されている。６層下部から７層中上部にかけては、幅１㎜程度の直線状をなす孔隙が顕著に観察される(図版第97拡大図Ｈ)。また、これらの孔隙と直交する幅0.5㎜程度の孔隙も多く存在している。この部分では、球状をなす径３㎜程度のペッドの発達が顕著に認められる(図版第97拡大図Ｉ)。これらのペッドは、５層最上部に存在するペッドと同様に、二次ペットとしての形成されている。７層下部では、直線状をなす孔隙の分布がほとんど認められなくなる。この部分では、ペッドの発達が弱い(図版第98拡大図Ｊ)。８層では、幅１㎜程度の直線ないしジクザク状の孔隙分布が認められる。本層内では、球状ないし塊状をなす径２㎜程度のペッドの発達が認められる(図版第98拡大図Ｋ・Ｌ)。

以上のような軟質Ｘ線写真によるペッドおよび孔隙の観察から、２層最上部、３層最上部、５層最上部、７層上部、８層最上部において、土壌発達が行われたことが推定される。これらの層準において発達するペッドと孔隙は、それぞれに異なった構造を示す部分が存在している。これらの差異は、各層準における土壌発達の違いを示しているものと解釈される。これについては、堆積層の層序および微化石分析の結果をふまえ後述する。

③調査区における遺跡形成過程

遺跡堆積層下部を構成する⑧～⑥層にかけては、砂礫層から泥層への上方細粒化が認められる。上方細粒化が認められる⑧～⑥層では、層相観察により流路から後背湿地へと堆積環境が変化したことが推定される。後背湿地の堆積環境下で形成されたことが推定される泥層をなす⑥層は、最下部から中部にかけて上方細粒化した後、最上部に向かって上方粗粒化していく。⑥層上部では、縄文時代中後期～晩期の遺構・遺物が検出されている。本層準は、上方粗粒化が開始する部分に相当している。上方粗粒化が認められる層準では、根痕および粒団が顕著に観察される。⑥層最上部には、有機質に富む土壌が形成されており、ある時期、後背湿地が完全に離水して、土壌発達が行われるような安定した堆積環境へと変化したことが想定される。離水時期については、土壌に相当する層準から考古遺物が検出されておらず不明である。⑥層最上部では、古墳時代前期の竪穴式住居跡および区画溝を有する平安時代末期および中世前半の掘立柱建物跡が検出されている。遺跡堆積層の層相および遺構・遺物の検出状況から、⑥層最上部付近層準では、上位の耕作地造成による削平を考慮しても、古墳時代～中世前半頃までの堆積速度が小さかったことが判断される。このことから、本調査区では、この時期に比較的安定した堆積環境下にあったことが推定される。

⑥層内で確認された縄文時代後期を主体とする遺構・遺物検出層準下部付近から採取された２－４の植物珪酸体では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、この他ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出されている。多産したタケ亜科(その中でも特にササ類)は、陸上の開けた空間に先駆的に進入してくる場合が多い。また、ウシクサ族もススキに代表されるように、開けた草地に群落を作る種類が多い。本層準の堆積環境を考



第114図　椋ノ木遺跡調査成果のまとめ図

慮すれば、高率に検出されたタケ亜科およびススキ属を含むウシクサ族の植物珪酸体は、本地点に生育していたとは考えにくく、後背湿地周辺に分布していたものに由来することが推定される。

縄文時代後期を主体とする遺構・遺物検出層準に相当する２－３からその上部の層準である３－３・４の植物珪酸体では、タケ亜科が減少し、タケ亜科ネザサ節、ススキ属、イチゴツナギ亜科の短細胞珪酸体が増加ないし微増する傾向が認められる。増加の傾向にある植物珪酸体は、比較的乾燥した場所に生育する種類で構成されている。

３－３・４で実施された花粉分析では、いずれの試料からもほとんど花粉化石が検出されず、保存状態が悪かった。そのため、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という２つの可能性があげられる。植物珪酸体の産状や、堆積環境などを考慮すれば、取り込まれる花粉量が少なかったとは考えにくい。一般的に花粉・シダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村、1967；徳永・山内、1971)。遺跡堆積層の層相観察から、３－３・

４の試料が採取された⑥層上部～最上部では、後背湿地が離水傾向にあり、土壌発達が行われるような堆積環境であったことが推定される。これらのことから、３－３・４の層準では、花粉化石が分解・消失し易い堆積環境が形成されていたことが窺える。

以上のような微化石の産状および層相から、⑥層では、下部から中部にかけて後背湿地などの静水域が形成された後、上部～最上部にかけて後背湿地が陸化し、土壌化が進行していくような堆積環境が形成されたことが推定される。⑥層において人間活動が認められるようになるのは、上部～最上部の層準である。層相から推定される本層準の堆積環境は、植物珪酸体や花粉化石および遺構・遺物の検出状況と調和的な傾向となっている。

⑤層は、古墳時代前期～古代までに静水域下で形成されたことが推定される泥層である。⑤層は、調査区内において相対的に低所に位置する北西部付近を中心にして分布している。軟質Ｘ線写真の観察では、⑤層内において、土壌発達が認められる層準が３か所確認された。静水域で形成されたと推定される泥質堆積物は、土壌をなす層準に挟在して存在しており、それぞれの土壌化層準はこれらの泥質堆積物を母材としている。５層最上部の土壌化層準では、ペッドおよび孔隙の発達が顕著であり、土壌発達が比較的長期間にわたって行われたことが想定される。

⑤層内から採取された植物珪酸体の分析サンプルである３－２では、下位の⑥層上部～最上部のサンプルである２－４～３－３と同様に、短細胞珪酸体においてタケ亜科の減少およびネザサ節の増加が認められる。下位のサンプルと異なる傾向は、比較的乾燥した場所に生育するススキ属、イチゴツナギ亜科の減少と湿潤な場所に生育するヨシ属の増加している点である。また、イネ属やコブナグサ属の植物珪酸体もわずかに検出されている。以上のような微化石の産状および層相、軟質Ｘ線写真の観察から、⑤層は、離水し土壌発達が行われるような時期を挟在するような後背湿地の堆積環境下において形成されたことが推定される。

④層は、12～14世紀代にかけて形成された砂質泥層からなる耕作土層である。④層の上位に位置する③層は、15世紀頃に形成されたと推定される砂質泥層からなる耕作土層である。層相および包含される考古遺物の相対年代から、③・④層は、氾濫堆積物が時折流入するような比較的安定した堆積環境下で形成された堆積層であることが想定される。

軟質Ｘ線写真の観察では、④層内において３つの層準が確認された。④層最下部には、泥質堆積物からなる偽礫を多く含む層準が存在している。④層中部は、下位の層準に比べ均質な層相をなす堆積物で構成されている。本層準で認められる植物に起因すると想定される直線状の孔隙形状は、イネ科植物などに観察される根系に類似したものとなっている。④層中部の層準では、植物珪酸体分析も実施されている。分析サンプルである３－１では、下位の分析サンプルと大きく異なった傾向を示しており、それまで増加傾向にあったネザサ節のイネ属の植物珪酸体が急減すると共に、栽培植物であるイネ属が比較的顕著に検出されるようになる。以上のような微化石の産状および層相、軟質Ｘ線写真の観察から、④層中部の層準は、水田の堆積環境下で形成されたことが推定される。④層最下部の層準は、中部に比較して偽礫質でしまりが悪く孔隙が多いことが軟質Ｘ線写真の観察から窺える。これらの特徴から、④層最下部は、耕作土基盤層を形成する

整地土として形成されたことが想定される。本層準の最上部では、ペッドの発達が顕著に認められ、土壌形成が行われたことが推定される。このことからは、④層最下部の形成後から水田である④層中部の層準が造成されるまでの間に放置期間が存在していたことが示唆される。

近世以降の層準である②層では、顕著な堆積層の累重が認められる。これらは、主に木津川から供給された氾濫堆積物によって構成されている。本時期には、これらの氾濫堆積物を母材として耕作土が連綿と形成されていく。これらの耕作土は、中世に形成されたものに比べ非常に砂質である。耕作土には、粒団の発達が認められるが、しまりがわるく孔隙が多い特徴が観察される。この様な特徴から、本層準に形成されている耕作土は、畑地耕作土であることが判断される(松田、1996)。以上のことから、本調査区では、近世以降に氾濫堆積物が顕著に累重するような堆積環境下で畑地耕作を中心とした人間活動が行われていたことが推定される。

④古墳時代前期の竪穴式住居跡から検出された焼土について

粘土を加熱していくと、種々の鉱物が生成し、あるいは逆に変態して消失する。X線回折分析は、粘土が持つこの性質を利用し、試料中にどの種の鉱物が存在するかを検出することによって被熱程度(焼成温度)を推定する手法である。たとえば、イライトは950℃までしか存在しないのでイライトの回折スペクトルが検出されなかったならば950℃以上の被熱であり、さらに斜長石は1100℃までしか存在しないので斜長石の回折スペクトルが検出されたならば1100℃以下の被熱温度であると推定される。ただし、試料中の粘土は産地によって組成のバラツキが大きく複雑であり、温度による物理的化学的変化も至って複雑なものであるため、実際には対照試料を用いた焼成実験を行う必要がある。

今回、ＳＨ01・173から採取された焼土の分析結果をみると、両試料ともに粘土鉱物の回折線が明瞭に認められる。特に550℃以上の熱を受けて変質するカオリン鉱物(kaolin minerals)の存在が明瞭であることから、鉱物組成に変化をもたらす程の熱を受けた可能性は考えにくい。したがって、今回、各種鉱物の変化から焼成の有無、しいては焼成温度を推定することは難しいと考える。

8)まとめと課題

今回観察を行った調査区では、古代末期～中世後半と近世以降で堆積環境が大きく異なることが明らかとなった。今後、発掘調査や文献・絵図史料などから推定される土地利用や耕作地の維持・管理の歴史的変遷と堆積環境変遷との対比について検討を行っていくことが課題である。また、縄文時代の遺構・遺物検出層準と中世における耕作地跡については、土壌薄片などの記載・観察による土壌微細形態学的手法や耕作土の洗い出しによる大型植物化石の抽出・同定、空間的な微化石分析などを実施し、さらに詳細な遺構・遺物の形成および埋没過程についての検討を行っていくことも必要であろう。

(パリノ・サーヴェイ株式会社、辻本裕也・辻　康男・斉藤崇人)

3．ま と め

当遺跡の発掘調査では、縄文時代後期前葉～中世にわたる断続的な人間居住を確認し、あわせ

て近世にまでいたる環境変化と耕地開発の実態を、考古学・自然科学ならびに歴史地理学の成果も併せて明らかにすることができた。以下に、その要点考察を加えてまとめたい。

(1)相楽郡条里の復原

当遺跡が位置する相楽郡に施工された条里については、足利建亮氏をはじめ多くの研究の蓄積がある。というのも、精華町域は条里関連地名の遺存が良好で、坪付けの命名の進行原理をかなりの程度復原することができるからである。たとえば、当遺跡の西南方には「十曽(十三)」、「十ノ坪」、「五反田」「二ノ坪」などの数詞を冠した小字名があり、その復原案をまとめると次のようになる。

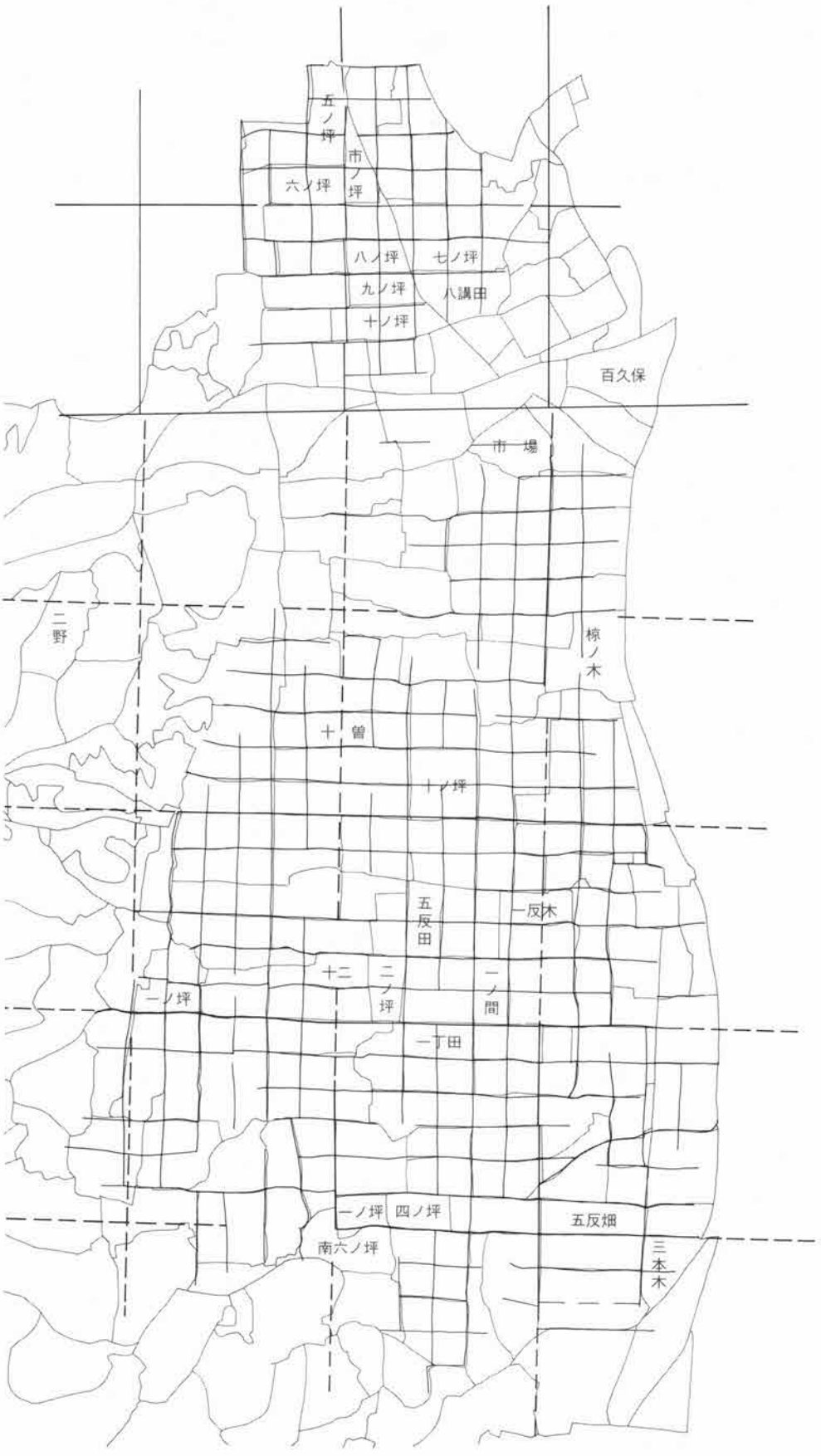
相楽郡条里は当遺跡の北を東流する煤谷川を北限として綴喜郡条里に接し、南方は平城山丘陵で、東方は甘奈備丘陵により区画されている。坪付けは南西隅を１坪として千鳥式に進行し、北西隅が三十六坪で終わる。当調査区は相楽郡五条に該当し、里名は固有名詞が遺存していないため不明であるが、仮に数詞によって名づければ当調査区で検出した坪境溝の北側が三十五坪、南側が二十六坪に該当する。この溝中から出土した大和型瓦器椀の型式から、暦年代で12世紀中葉～後半には施工されていたことが分かる。

さて、当地に施工された条里が上のようなものであったとすれば、それ以外の荘園内諸施設の配置はいかなるものであったか。ここで、昭和59年に木津川河川敷で発見された百久保地先遺跡に注目したい。この遺跡からは、五輪塔(組合式・一石)154基、尖頭状五輪板碑３基、宝篋院塔２基、石仏94基141点、さらには奉賽銭と見られる北宋銭なども出土した。中世後期の墓地と見なすことができる。この遺跡は、相楽郡と綴喜郡の郡界と見なされる煤谷川河口に位置している。椋ノ木遺跡と盛行時期が一部重複し、中世後期には当地域の惣墓と見なすことも可能だろう。さて、現在、この小字百久保地区の南西には「市場」と呼ぶ小字がある。また、これらの周辺は字名が「舟」と呼ばれており、江戸時代には北接する精華町菱田と山城町綺田との間には郡山街道と大和街道とを結ぶ「藪の渡し」があったという。さらには、近世の村絵図である『森島國男家文書』の菱田村村絵図によると菱田村を北西から南東に貫く「淀道」が、かの「市場」をとおり、小字「椋ノ木」東端部分を通って南下して祝園村領内に入る。その後、『福井幸生家文書』の祝園村村絵図によると、祝園神社を直角に折れた後、郡山街道として南下していく。椋ノ木遺跡の位置する地区は、遅くとも近世には港と道路との結節点であり、それは中世以来の交通ルートを踏まえていた可能性が高い。このように見ると、椋ノ木遺跡が機能していた当時、椋ノ木から舟地区にかけては、14世紀に史料に登場する東大寺領「下狛荘」の中でも、港湾に付随した施設や公的な空間として設定された「津」であった可能性を考えざるを得ない。

(2)中世耕地開発の工学的対応

それでは、椋ノ木の「津」の生産基盤たる中世前期の耕地開発はいかなるものだったのか。考古学的に確認される12世紀中葉の条里制の再整備は、決して平坦な荒地を開墾したものではなかったであろう。それを、航空写真と水田地割から復原してみよう。

昭和23年に米軍によって撮影された空中写真には、現在では失われてしまった条里地割が明瞭



第115図　精華町内の字切図と相楽郡・綴喜郡条里の復原

に観察できる。その内、当地域を撮影した一枚(番号7381)には微細地形を反映したソイルマークとおぼしき地色の変化に注目される。図版第69は、これをコントラストを強めて画像処理したものである。この写真の下部はハレーションで乱されているが、概ね西側(左側)が白く、東側(右側)が黒い傾向を看取することができる。当地域の微地形は、甘南備丘陵から押し出された扇状地性堆積物が木津川河谷を埋めて形成されたものであるから、水回りはゆるやかに西から東へ傾斜することが予測される。さらに、木津川沿いの黒色を呈する部分に注目すると、煤谷川河口付近から僧坊集落付近にかけて黒色の帯状部分が延び、それは谷をせき止めて造られた池へと続いているように見える。さらに注目すべきは、煤谷河谷の南部に舌状にのびる下狛集落が乗っている丘陵突端部分から舟集落方向にかけて白い帯が観察できる。このような観察結果から推測すると、白い部分は埋没した低位段丘面で、黒い部分は伏流水のある旧河道もしくは地下水位の高い部分であると想定することが可能なのではなかろうか。

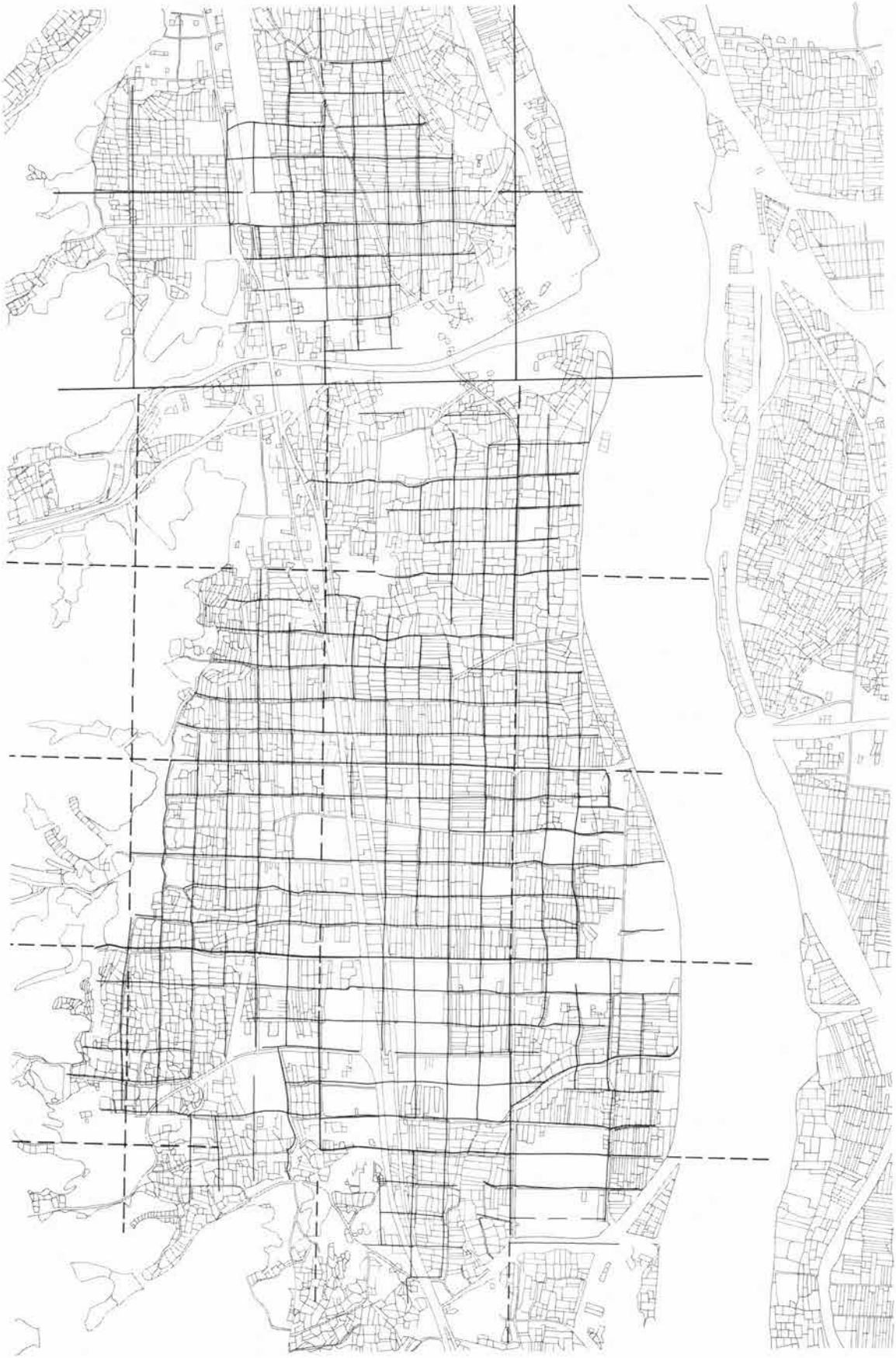
さらに分析するために、水田一筆の地割形態を抽出して条里と重ねたものが、第116図である。相楽郡条里では半折型と長地型の両者が認められるが、写真と対応させてみると、黒い部分には南北方向の長地型、白い部分には半折型あるいは東西方向の地割が多い傾向を看取することができる。当地区の水流の方向は、東から西への傾斜を基調とするから、長地型で東西方向に一筆を切ると水田の水が抜けてしまう危険がある。しかし白い部分にあえて東西方向の地割を切っている要因は、甘南備丘陵を構成する低位段丘部が埋没しているために、水回りの傾斜を調整するために小区画水田を連続せざるをえなかったのではなかろうか。

中世前期に条里制の方形区画を施工する場合、微細地形を人工的に平坦化した事例は各所で報告されている。たとえば、讃岐国善通寺領の荘園に当たる国道11号線高松東バイパス関係遺跡では、旧河道・低地および微高地を貫通して条里が施工されている。また、古代末～中世後半にかけて当地区は乾陸化が進行しつつあった。このような微地形条件の克服と扇状地傾斜の人口平坦化によって、12世紀中葉に条里地割を達成することができたのであろう。この生産基盤は、自然科学的な分析から明らかになったように、一定の休耕期間を措きつつ、生産活動が実施されていることが分かった。

(3)環境変化と人間社会の対応

椋ノ木遺跡の人間の居住前は、砂礫層の互層が２ｍあまり堆積し、流路が次第にこの地から遠ざかっていった状況を看取することができる。特に、標高22.7m付近では流路縁に位置し、次第に後背湿地的な環境へと移行したのだろう。

縄文時代後期前半以来、人間居住が確認されている。当時はヨシやアシが群生する湿地性環境であり、親水性の広葉樹であるムクノキが繁茂していたらしい。これとほぼ同時期の埋没林が、城陽市第３浄水場で発掘されている。これは、上下２層に渡って検出され、上層はコナラ主体でＢ.Ｐ.4000、下層はムクロジ・カシ・ムクノキで構成されＢ.Ｐ.3500を示す。また、宇治市寺海道遺跡で検出された縄文時代晩期の貯蔵穴は常緑広葉樹のカシ・シイが主体であり、落葉広葉樹のクリ・クルミ・トチが補完する。これをふまえると、Ｂ.Ｐ.3000を境として温暖湿潤気候へと



第116図　精華町内の耕地割りと相楽郡・綴喜郡条里の復原

転じ、照葉樹林の拡大に呼応して、縄文時代人は低地部の開発が進行した。椋ノ木遺跡の縄文時代遺構もこのような水辺環境の利用と連動するものであり、炉跡が検出された羽曳野市尺土遺跡もその一例と見なすことができよう。ただ、翡翠製大珠が検出されていることは、単なる季節的な居住ではなく、恒常的な物資交換を伴う半定住集落が営まれた可能性もあるが、それを裏付ける考古学的な証拠は乏しい。

弥生時代の居住については、今次の調査では明確にはしがたい。ただし、報告した流紋岩製外湾刃石庖丁や第１・２次調査のＳＤ9501で検出された石庖丁などが居住をうかがわせる。

弥生～古墳時代にかけて当地域の地形条件は安定し、古墳時代前期後半には竪穴式住居跡が継続的に営造され始める。特に第４次調査のＳＨ01や今次のＳＢ175などが中心的建物の１画を占めると考えられるが、中期前半の韓式系軟質平底鉢の存在は渡来系の土器様式が一部波及したことを示していよう。また、滑石製臼玉を使用した屋内儀礼も竈神の祭祀の思想のもとに彼地から導入されたものかもしれない。

古代については、布目瓦や第３トレンチＳＸ512から複弁蓮華文軒丸瓦などが検出されているから、周辺に居住があった可能性があるが、遺構は確認されていない。堆積環境をうかがうと離水と水没を繰り返す後背湿地的な環境であったと推定されるから、大規模な古代の集落は展開しなかったと見なせよう。

中世には比較的安定した氾濫原が現出し、条里が再整備されて「津」に付随した荘園中枢施設および生産基盤が展開する。詳細は、前節で言及したとおりである。

15世紀以降、当地は不安定な氾濫原へと変化し、遺跡全体が冠水して機能を失うようになる。この洪水は、堆積物から見る限り、突発的な洪水ではなかったようだ。近世になると、花崗岩のバイラン砂が厚く堆積するようになる。この中には、３回の洪水によって生成された砂層を観察することができる。精華町域において、江戸時代を通じて繰り返された木津川の洪水の中で、最も被害の甚大であったものは、正徳２(1712)年、享和２(1802)年、文化12(1815)年であったという。近世に堆積した砂層では共伴遺物が少なく、洪水砂の年代を当てることはできないが、先述のように第２回目の洪水が調査地全域を覆っている。享和２年の洪水については、『森島國男家文書』に残された「江戸状」によると、木津川水位が一丈五、六尺にまで上昇し、祝園村では60軒ほどが流されたという。この被害があまりに大きかったために、年貢収納を容赦してほしいと訴えるほどであった。このような大洪水の被害を受ける中で、椋ノ木の中世農村は完全に木津川自然堤防の下へ埋没し、記憶から失われてしまったのである。

今次の調査では、先行調査を補足する中世前期の成果と伴に、縄文・古墳時代の生活遺構の確認、さらには河川による地形環境の変遷と人間社会の対応による長期的な遺跡形成過程を、自然科学・歴史地理学の成果を援用することで明らかにすることができた。

（河野一隆）

注１　既往の調査は、伊賀高弘・森島康雄「椋ノ木遺跡平成７・８年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査

概報』第81冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998、森島康雄「椋ノ木遺跡平成９年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998、藤井整・松尾史子「椋ノ木遺第４次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2001を参照されたい。

注２　南山城の中世土器の編年については、当遺跡の出土資料を基礎に森島によって提示されている。森島康雄「南山城の中世土器」(『京都府埋蔵文化財論集　第４集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2001

注３　なお、第５次調査は調査の終了した第４次調査区を拡張する形で進めた。

注４　調査補助員ならびに整理員については、以下の通りである。

調査補助員　秋山美佳・杉江高弘・中瀬古雄紀・朴貴広・穂積優子・舟築紀子・酒井由美・植田亮・牧篤志・千葉太朗・寺口千里・土屋宗亮・山岡正人・細川慶子・河田隆彦・土谷真代・柴山浩之・花房優太・中尾聡・岸田裕作　**整理員**　鶴原知子・平井玲子・寺尾貴美子・荻野冨紗子・内藤チエ・長谷川マチ子・荒川仁佳子・穂積優子・高田良太・稲垣あや子・鈴木浩子・村上奈弥・川村真由美

注５　今回調査の遺構名称については、第４次調査の拡張という位置づけから連番とし、遺構の性格に応じて「ＳＤ」、「ＳＫ」の記号を付与した。ただし、第４次調査ＳＨ23については、新規に検出した経緯も含めて、ＳＨ174と名付けることにした。

注６　以下の遺構の所属時期については、原則的に注２文献に準拠している。ただし、今回調査の出土資料は、大半が第３期および第４期に該当し、詳細な時期差が反映できない可能性がある。したがって、別表の対応表を作成した上で、出土土器・陶磁器の全点を破片計測し、時期や遺構の性格を検討した。本概報では、その一部を提示している。

参考文献

足立吟也(1980)「粉末Ｘ線回折法」(『機器分析のてびき３』化学同人)、p.64－76

池田碩・植村善博(1990)「南山城、木津川流域の段丘地形」『奈良大学紀要９』、p.75－85.

市原実編(1993)『大阪層群』創元社、p340

近藤錬三・佐瀬隆(1986)「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究25』、p.31－64.

久馬一剛・八木久義(1989)『土壌薄片記載ハンドブック』博友社、p.176

松田順一郎(1996)「北島遺跡の耕作地と古環境」(『寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会)、p.157

松田順一郎(1999)「瓜生堂第40次調査地における河川堆積作用の変化」(『瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書－電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告－』(財)東大阪市文化財協会)、p.93－105

松田順一郎(2000)「八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達」(『小阪合遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター)、p.259－276

Miall,A.D.(1992)　Alluvil Deposits,in Walker,R.G. and James,N.P.(ed) Facies Models.Geological Assosiation of Canada,p.119-142.

中村純(1967)『花粉分析』古今書院、p232

谷口康浩(2000)「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学77』、p.17－21.

東村武信(1990)『改訂考古学と物理化学』学生社、212p

徳永重元・山内輝子(1971)「花粉・胞子」(『化石の研究法』共立出版株式会社)、p.50－73

付表５　中世土器観察表

番号	出土遺構	層位	器種	器形	口径または底径	器高または残存高	調整（内面/外面）	色調（内面/外面）	残存率（%）（口縁/全体）	備考
1	SX472	底面	瓦器	椀	14.9	4.8	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色～灰色	45/30	
2	SX472	底面	瓦器	椀	15.8	5.4	暗文/ナデ+ミガキ	濃灰色	30/40	
3	SX472	底面	瓦器	椀	14.6	5.1	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	19/30	
4	SX472	底面	瓦器	椀	15.2	4.7	暗文/ナデ+ミガキ	黒灰色～淡灰色/淡灰色～黒灰色	50	
5	SX472	底面	瓦器	椀	14.6	4.3	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	35	
6	SX472	底面	瓦器	椀	15.1	5.75	ナデ+ミガキ/暗文	淡黒灰色	35/30	
7	SX472	底面	瓦器	皿	9.5	2.3	暗文/ナデ	黒灰色	50/70	
8	SX472	底面精査	瓦器	皿	10.5	1.95	暗文/ナデ	濃黒灰色	30	
9	SX472	底面	瓦器	皿	9.5	1.65	暗文/ナデ	濃黒灰色	40	
10	SX472	底面	土師器	皿	14.1	2.3	ナデ/ナデ	淡黄褐色	70/60	
11	SX472	底面	土師器	皿	9.65	2.1	ナデ/ナデ	淡橙色/橙色	100	
12	SX472	底面	土師器	皿	10.2	2.1	ナデ/ナデ	淡橙色/淡黄色	100	
13	SX472	底面	土師器	皿	10	1.9	ナデ/ナデ	淡橙色/明橙色	100	
14	SX472	底面	土師器	皿	10.3	1.9	ナデ/ナデ	淡橙白色/淡橙色	100	
15	SX472	底面	土師器	皿	10	1.9	ナデ/ナデ	淡橙色/淡黄色	75/80	
16	SX472	底面	土師器	皿	10	1.95	ナデ/ナデ	淡橙色/橙色	60/60	
17	SX472	底面	土師器	皿	9.3	1.6	ナデ/ナデ	淡橙色/橙色	70/80	
18	SX472	底面	土師器	皿	9.5	1.7	ナデ/ナデ	淡橙色	25	
19	SX472	底面	土師器	皿	9	1.5	ナデ/ナデ	淡橙色/淡橙褐色	55/60	
20	SX472	底面	土師器	皿	9.1	1.6	ナデ/ナデ	淡灰色～淡黄色/淡黄灰色	50	
21	SX472	底面	土師器	皿	8.6	1.7	ナデ/ナデ	淡橙灰色	80/95	
22	SX472	底面	土師器	皿	9.2	1.4	ナデ/ナデ	淡灰白色/灰白色	100	
23	SX472	底面	土師器	羽釜	22.6	8.5	板ナデ/ナデ+指頭圧痕	茶褐色/淡茶褐色～黒褐色	17	
24	SX472	底面	白磁	椀	15.9	4.7	施釉	灰白釉色	30	
25	SE230	検出中	瓦器	椀	13.4	4.25	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	25/30	
26	SE230	検出中	瓦器	皿	9.7	1.9	ナデ+暗文/ナデ+指頭圧痕	淡灰色	35/30	
27	SE230	検出中	瓦器	皿	10	2.95	暗文/ナデ	濃黒灰色	80/90	
28	SE230	検出中	瓦器	皿	9.9	1.8	ナデ+暗文/ナデ+指頭圧痕	濃黒灰色	25	
29	SE230	検出中	瓦器	皿	8.8	1.75	暗文/ナデ	濃黒灰色	95/90	
30	SE230	上面	瓦器	皿	9.7	1.85	ナデ+暗文/ヨコナデ	黒灰色	20	

31	SE230	上面	土師器	皿	8.5	1.25	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	85/90	
32	SE230	検出中	土師器	皿	9.2	1.8	ナデ+指頭圧痕	淡茶褐色	60/60	
33	SE230	上面	土師器	皿	10	2.15	ナデ/ナデ	淡黄褐色	100	
34	SE230	上面	土師器	皿	11.2	2.7	ナデ/ナデ	淡黄色/淡黄灰色	18	
35	SE230	上面	土師器	皿	12.7	3.6	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	30/30	
36	SE230	上面	土師器	皿	13.6	2.5	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	25/30	
37	SD255	検出中	瓦器	椀	13.7	4.8	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	30/40	
38	SD255	検出中	瓦器	椀	14.6	4.8	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	30/30	
39	SD255	検出中	瓦器	椀	14.9	4.6	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	25/35	
40	SD255	底面	瓦器	椀	13.7	4.8	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	30/30	
41	SD255	底面	瓦器	皿	9.7	1.45	ナデ+暗文/ナデ+指頭圧痕	淡黒灰色+淡灰褐色/淡灰褐色	25/25	
42	SD255	底面	瓦器	皿	8.9	1.9	ナデ+指頭圧痕	淡茶褐色+赤斑	100	
43	SD255	検出中	白磁	椀	-	-	櫛目+両面施釉	淡白黄色	-	非常に細かい貫入
44	SD255	底面	土師器	皿	14.2	2.4	ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	25/30	
45	SD255	溝埋土	褐釉	四耳壺	12.1	7.45	褐釉	淡灰色	30	
46	SD222	底面	瓦器	椀	14.4	5.15	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	90	
47	SD222	底面	瓦器	椀	14.6	4.5	暗文+ナデ/ミガキ+ナデ	黒灰色	25	
48	SD222	底面	瓦器	椀	5	2	暗文/ナデ	黒灰色	60	
49	SD222	溝埋土	瓦器	椀	15.2	4.5	暗文/ナデ+ミガキ	黒灰色	16/60	
50	SD222	底面	瓦器	椀	4.7	1.6	暗文/ナデ	灰色～黒灰色	-	
51	SD222	底面	瓦器	椀	13.4	5.1	暗文/ナデ+ミガキ	黒灰色	10/30	
52	SD222	底面	瓦器	椀	14	5.2	暗文/指頭圧痕	淡灰褐色～黒灰色	8/100	
53	SD222	底面	瓦器	椀	14	4.3	暗文/ナデ+ミガキ	黒灰色	20/25	
54	SD222	底面	瓦器	椀	14.2	4.7	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	12/15	
55	SD222	底面	瓦器	椀	4.9	1.7	暗文/ナデ	黒灰色	50	
56	SD222	底面	瓦器	皿	9.7	1.45	ナデ+暗文/ナデ+指頭圧痕	淡黒灰色	30/35	
57	SD222	溝埋土	瓦器	皿	9.9	1.6	暗文/ナデ	淡黒灰色	2/30	
58	SD222	底面	瓦器	皿	9.7	1.9	暗文/ナデ	淡黒灰色	45/50	
59	SD222	底面	瓦器	皿	10.7	1.9	ナデ+暗文/ナデ+指頭圧痕	濃黒灰色	12/12	
60	SD222	底面	瓦器	皿	9	1.3	暗文/ナデ	淡灰色～黒灰色	25	
61	SD222	底面	須恵器	鉢	10.4	2.4	ロクロナデ	淡灰色	75	底部糸切り

62	SD222	溝埋土	土師器	Ⅲ	9.1	1.85	ナデ/ナデ	淡褐色	27/30	
63	SD222	溝埋土	土師器	Ⅲ	8.7	1.65	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	25/30	
64	SD222	溝埋土	土師器	Ⅲ	11.8	1.9	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡橙褐色	13/13	
65	SD222	底面	土師器	Ⅲ	13.6	2.7	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	30/25	
66	SD222	溝埋土	白磁	椀	16	19	両面施釉	淡灰色	10	
67	SD222	溝埋土	白磁	椀	15.6	3.3	外面一部施釉	灰釉色	12	
68	SD222	底面	白磁	椀	16	4.2	両面施釉	灰釉色	20	
69	SD222	底面	瓦質	鍋	27	11	板ナデ/ナデ：下部にスス	淡茶灰色/黒灰色	20/20	
70	SD222	底面	土師器	羽釜	22	6.7	ナデ+指頭圧痕/ナデ	暗褐色+橙茶褐色/茶褐色	7	
71	SD222	底面	土師器	羽釜	25	6.6	板ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡橙茶褐色/淡茶褐色+スス	17	
72	SD222	底面	土師器	羽釜	27.2	4.6	板ナデ/ナデ	淡茶褐色/橙茶褐色	7	
73	SD222	底面	土師器	羽釜	26.3	15	板ナデ/ナデ	淡茶褐色	100	
74	SD82	底面	瓦器	椀	15.6	5.5	暗文/ミガキ	濃黒灰色	18/25	
75	SD82	底面	土師器	Ⅲ	8.9	1.55	ナデ/ナデ	淡黄褐色	70/70	
76	SD82	底面	土師器	Ⅲ	9.41	1.9	ナデ	淡黄褐色	70/70	
77	SD82	溝埋土	土師器	Ⅲ	8.8	9.4	ナデ	淡黄褐色/淡灰色～黄褐色	100	
78	SD82	底面	土師器	Ⅲ	9.6	2.05	ナデ	淡橙褐色	100	
79	SD82	底面	土師器	台付Ⅲ	9.6	3.5	ナデ	淡茶褐色	15	
80	SK162	埋土	瓦器	椀	15.1	4.5	ナデ+ミガキ/暗文	淡黒灰色	80/13	
81	SK126	底面	瓦器	椀	15.3	4.8	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	25/25	
82	SK126	底面	瓦器	椀	14.6	5.6	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	10/35	
83	SK126	底面	瓦器	Ⅲ	9.4	1.3	ナデ/ナデ+指頭圧痕	濃黒灰色	45/45	
84	SK126	底面	土師器	Ⅲ	9.4	1.5	ナデ	明橙色～淡橙色	50	
85	SK126	底面	土師器	Ⅲ	9.6	2	ナデ	淡橙褐色/淡灰色～橙灰色	100	
86	SK126	底面	土師器	Ⅲ	15.4	3.5	ナデ	橙褐色～橙灰色	30	
87	SD134	溝埋土	瓦器	椀	14.6	5.6	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	18/30	
88	SD134	溝埋土	瓦器	椀	10.6	3.25	暗文/ナデ	淡黒灰色	50/70	
89	SK90	底面	瓦質	鍋	25.2	10.8	板ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡茶灰色/黒色	28/20	
90	SK90	埋土	瓦器	椀	13.6	5	暗文/ナデ	淡黒灰色	25	
91	SK90	埋土	青磁	椀	13	3.2	両面施釉	暗緑色	8	雷文
92	SK90	底面	灰釉	Ⅲ	11.3	2.55	ロクロナデ/ロクロナデ+施釉	淡灰色	12.5	
93	SK90	底面	瓦器	Ⅲ	9.8	1.45	暗文/ナデ	淡黒灰色	20	
94	SK93	底面	土師器	Ⅲ	13.5	1.65	ナデ/磨滅	明褐色	40	
95	SK87	埋土	瓦器	椀	14.1	3.9	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	25/30	

96	SD310	埋土	瓦器	椀	14.7	5.3	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	70/80	
97	SK128	底面	瓦器	椀	5.8	2.1	暗文/ミガキ	黒灰色	65	
98	SD127	底面	土師器	皿	13.9	2.6	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡橙褐色	20/20	
99	SD127	埋土	瓦器	椀	13.2	5.3	暗文/ナデ+ミガキ	灰色	-	
100	SD253	埋土	瓦器	皿	9.7	2.05	暗文/ナデ	淡黒灰色	45/50	
101	SD130	埋土	灰釉	椀	7.1	1.7	ロクロナデ	淡灰褐色	3	貼付高台
102	SD310	埋土	白磁	椀	16.2	3.8	両面施釉	灰釉色	20	内面に露胎部有り
103	SK128	底面	白磁	椀	6.3	3.1	両面施釉	灰褐色	30	内面底部に灰痕
104	SD140	溝埋土	白磁	椀	15	3.4	両面施釉	灰釉色	10	
105	SD51	底面	土師器	羽釜	29	9	ナデ/ナデ+指頭圧痕	暗茶褐色/暗茶褐色～黒褐色	12	
106	SX223	埋土	白磁	椀	16	5.5	両面施釉	灰釉色	15	露胎部有り
107	SD130	埋土	瓦質	すり鉢	11.4	7	櫛目/ケズリ+ナデ+指頭圧痕	淡茶褐色	17	
108	SD131	底面	灰釉	壺	13	5.3	ロクロナデ/ロクロナデ+灰釉	淡茶褐色/緑灰褐色	-	
109	SD131	底面	瓦質	火鉢	43.6	17.5	面取り	黒色～橙灰褐色	10	印刻二つ巴
110	SD134	底面	白磁	椀	16	2.1	両面施釉	灰釉色	10	
111	SX224	底面	土師器	皿	12	2.7	ナデ	淡黄褐色/黄褐色	25	
112	SX224	埋土	青磁	皿	11.2	2.2	両面施釉+櫛目文	青白磁		失透性の青白磁
113	SK176	底面	土師器	皿	9.6	1.8	ナデ	淡黄褐色	13	底部に焼成後の打欠き孔
114	SK121	底面	瓦器	皿	9.9	2.05	暗文/ナデ	濃黒灰色	100	
115	P47	埋土	青磁	椀	14.8	5.1	両面施釉	緑釉色	13	
116	P36	埋土	瓦器	椀	14.4	4.05	ナデ+暗文/ナデ+ミガキ+指頭圧痕	淡黒灰色	30	
117	P425	埋土	瓦器	椀	11.1	3.5	磨滅のため調整不明	淡黒灰色	30	
118	P389	埋土	土師器	皿	16.4	2.3	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	30	
119	SX235	埋土	土師器	皿	15.8	3	ナデ	淡黄褐色	70	
120	SK139	埋土	土師器	皿	9.6	1.55	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	25	
121	P128	上層	土師器	皿	8	1.35	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	25	
122	P128	上層	土師器	皿	9.1	1.3	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡黄褐色	25	
123	P128	上層	土師器	皿	7.9	1.4	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡茶褐色	30	
124	P247	埋土	土師器	皿	9.3	2	ナデ	淡黄褐色	75	
125	P414	埋土	土師器	皿	13.6	2.25	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡橙褐色	25	
126	SD232	埋土	瓦器	椀	10.4	3.3	暗文/ナデ	灰色～淡灰色	60	
127	SK139	底面	瓦器	椀	13.6	4	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	100	

128	SD214	埋土	瓦器	椀	4.8	1.7	暗文	黒灰色	75	
129	P36	埋土	瓦器	椀	10.8	2.85	ナデ+暗文/ナデ+指頭圧痕	淡黒灰色	30	
130	P245	埋土	須恵器	鉢	25	10.8	ロクロナデ+ユビナデ/ロクロナデ	淡褐灰色	12	外面一部ス ス付着
131	P245	埋土	土師器	羽釜	24	6.3	ナデ+指頭圧痕/ナデ	黒褐色	8	ス ス厚く付着
132	P245	埋土	土師器	羽釜	25	5.2	板ナデ/ナデ+指頭圧痕	暗茶褐色	12	
133	SD49	底面	土師器	羽釜	28.2	5.2	ナデ+指頭圧痕/ナデ	淡茶灰褐色/黒色	28	
134	SX235	埋土	土師器	羽釜	27	5.9	ナデ	暗茶褐色/淡茶褐色	15	
135	SD49	底面	土師器	羽釜	28.2	5.2	ナデ+指頭圧痕/ナデ	暗茶褐色	10	
136	北半	包含層	瓦器	椀	15.4	5.85	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	70	
137	北半	包含層	瓦器	椀	4.8	19.5	暗文/ナデ	淡灰色～乳灰色	70	
138	北半	包含層	瓦器	椀	14.7	5.7	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	5	
139	北半	包含層	瓦器	椀	15.5	5.75	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	25	
140	北端	包含層	瓦器	椀	14.4	5.15	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	90	
141	北半	包含層	瓦器	椀	14.2	5	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	30	
142	北半	包含層	瓦器	椀	14.7	4.85	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	30/40	
143	北端	包含層	瓦器	椀	14.5	5.45	暗文/ナデ+ミガキ	濃黒灰色	30/40	
144	中央	包含層	瓦器	椀	12.8	3.85	暗文/ナデ	黒灰色	22	
145	北半	包含層	瓦器	椀	12.9	3.95	暗文/ナデ+ミガキ	淡黒灰色	50/70	
146	北端	包含層	瓦質	羽釜	16	9.3	ナデ	灰色/淡茶褐色	13	
147	北半	包含層	土師器	羽釜	26	7.2	ナデ+指頭圧痕/ナデ	淡褐灰色～黒灰色	10	
148	中央	包含層	瓦器	皿	9.6	2	暗文/ナデ	淡黒灰色	100	
149	北半	包含層	瓦器	皿	8.8	1.6	暗文+ナデ/ナデ	淡灰色/灰色	100	
150	北半	包含層	瓦器	皿	9.3	1.85	暗文+ナデ/ナデ	灰色	100	
151	北半	包含層	瓦器	皿	9.1	2.05	暗文/ナデ	淡黒灰色	30	
152	北端	包含層	瓦器	皿	9	1.75	暗文/ナデ	淡黒灰色	100	
153	北半	包含層	瓦器	皿	9.5	1.8	暗文/ナデ	淡黒灰色	100	
154	北端	包含層	瓦器	皿	9.15	1.9	暗文+ナデ/ナデ	淡灰色/灰色	100	
155	北端	包含層	瓦器	皿	8.3	1.55	暗文/ナデ	淡黒灰色	40/60	
156	北半	包含層	瓦器	皿	9.4	1.7	暗文/指頭圧痕	淡灰褐色～淡橙褐色	90	
157	北半	包含層	土師器	皿	8.7	1.4	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	35/45	
158	北半	包含層	土師器	皿	10	2.25	ナデ	淡黄褐色	65/75	

159	北半	包含層	土師器	Ⅲ	10.5	2.2	ナデ	淡黄褐色	100	
160	中央	包含層	土師器	Ⅲ	10.2	2.9	ナデ+指頭圧痕	淡橙灰色	100	
161	北半	包含層	土師器	Ⅲ	12.5	2.3	ナデ	淡黄褐色	23/23	
162	北端	包含層	瓦器	Ⅲ	7.9	1.2	ナデ	淡黒灰色	45/60	
163	北端	包含層	土師器	Ⅲ	8.9	1.5	ナデ	淡黄褐色	100	
164	中央	包含層	土師器	Ⅲ	8.7	1.65	ナデ	淡黄褐色	100	
165	北半	包含層	土師器	Ⅲ	9.8	1.6	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	70/80	
166	北半	包含層	土師器	Ⅲ	8.7	1.4	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	35/45	
167	北半	包含層	土師器	Ⅲ	13.6	3.15	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡橙褐色	25/30	
168	北半	包含層	土師器	Ⅲ	12.5	2.3	ナデ	淡黄褐色	23/23	
169	P389	埋土	土師器	Ⅲ	16.4	2.3	ナデ/ナデ+指頭圧痕	淡褐色	26/30	
170	北半	包含層	白磁	椀	16	3.9	両面施釉	灰釉色	12.5	
171	北半	包含層	白磁	椀	16	3.5	両面施釉	灰釉色	12	
172-1	北端	包含層	白磁	椀	16	3.7	両面施釉	灰釉色～灰白色	10	
172-2	北半	包含層	白磁	椀	6.2	2.4	施釉	灰釉色～灰白色	40	底部露胎
173	北半	包含層	白磁	椀	14.7	2	両面施釉	灰釉色	9	
174	北端	包含層	白磁	椀	16.4	1.5	両面施釉	灰釉色	12	
175	中央	包含層	白磁	椀	16	3.2	両面施釉	灰白色	14	
176	北半	包含層	白磁	椀	16	2.2	両面施釉	灰釉色	7	沈線有り
177	中央	包含層	白磁	椀	13.4	4.8	両面施釉	灰釉色	12	
178	北半	包含層	白磁	椀	10	3.3	両面施釉	青灰釉色	12	
179	北端	包含層	白磁	椀	15	1.7	両面施釉	灰色	6	
180	北端	包含層	白磁	椀	16	2.9	両面施釉	灰色	5	
181	北端	包含層	青磁	椀	14.4	2.2	両面施釉	暗緑褐色	5	
182	北端	包含層	青磁	椀	15	2.3	両面施釉	暗灰色	-	
183	北半	包含層	青磁	椀/鉢	16.6	6.2	両面施釉	淡緑褐色	-	片切掘り
184	北半	包含層	青磁	椀	12.9	2.7	両面施釉	淡緑灰色	8	雷文
185	中央	包含層	青磁	椀	-	-	両面施釉	緑釉色	-	片切掘り/大きな貫入/龍泉窯
186	北半	包含層	青磁	椀	-	-	両面施釉	緑灰色	-	櫛目+ヘラ描き/同安窯
187	北端	包含層	青磁	椀	5.3	2.3	施釉/回転ケズリ	淡緑灰色～灰白色	100	
188	北半	包含層	青磁	椀	-	-	両面施釉	灰釉色+灰緑色斑	-	櫛目文/同安窯
189	北端	包含層	青白磁	合子蓋	-	-	両面施釉	青白色	25	型造り/細かい貫入
190	中央	包含層	青磁	合子?	2	1.8	青色施釉	青釉色	100	
191	北半	包含層	須恵器	鉢	9.1	2.1	ロクロナデ+糸切り	濃灰色	30	

192	北半	包含層	灰釉陶器	甕	3.6	3.1	両面施釉	灰釉色	45	
193	北半	包含層	須恵器	鉢	28	8.8	回転ナデ/糸切り	黒灰色	8/10	
194	北半	包含層	滑石	石鍋	25.25	5.8	ケズリ+研磨	淡赤褐色	-	

付表６　古墳時代土器観察表

番号	出土遺構	層位	器種	器形	口径または底径	器高または残存高	調整（内面/外面）	色調（内面/外面）
220	ＳＨ505	土5	土師器	甕	12.2	11.8	ケズリ/ミガキ+ナデ	
221	ＳＨ487	1区5区	土師器	小型丸底甕	-	6.2	指オサエ/ハケ	明淡褐色+淡茶褐色/乳褐色+淡茶褐色
222	ＳＨ262	南土坑	土師器	小型丸底甕	-	7.4	指オサエ/ハケ	淡橙褐色
223	ＳＨ173	土4	土師器	壺	11.5	8.6	ケズリ+ナデ	淡黒褐色/淡灰褐色+淡黒褐色
224	ＳＨ262	5区	土師器	高坏	17.8	4.9	不明	橙褐色
225	ＳＨ268	5区	土師器	高坏	17.35	5	ナデ	淡褐色+暗淡褐色/明淡褐色
226	ＳＨ174	土3南西隅土坑	土師器	高坏	14.6	12.8（復原）	杯ナデ/脚内ケズリ外ハケ	明乳褐色/淡褐色
227	ＳＨ262	土A	土師器	高坏	17.2	5.8	ハケ/ナデ	乳褐色+淡茶褐色/淡褐色
228	ＳＨ174	土3南東土坑	土師器	甕	13.8	4.65	ケズリ+ナデ/ハケ+ナデ	明淡褐色+明淡黄褐色の斑状
229		土4	土師器	甕	13.2	6.7	ケズリ+ナデ/ハケ+ナデ	淡褐色+淡茶褐色
230		土3	土師器	甕	14.4	9.4	ケズリ/ハケ	明淡褐色/淡褐色
231	ＳＨ174	土1	土師器	壺	23.6	18.8	ケズリ+ナデ/ケズリ+ハケ	暗淡褐色/暗淡褐色+暗灰褐色

付表７　縄文土器観察表

番号	出土遺構	層位	器種	器形	器高または残存高	調整（内面/外面）	色調（内面/外面）	備考
256	北端C1	包含層	縄文土器	深鉢	4	ナデ/縄文	褐色/褐色	
257	ＳＨ174		縄文土器	深鉢	6.7	ナデ/ナデ+押し引き沈線+擦り消し縄文	褐色、黒色/褐色	
258	ＳＰ513		縄文土器	浅鉢？	0.7	ナデ/ナデ	褐色/褐色	
259	ＳＸ501	下層1	縄文土器	深鉢	3	ナデ/ナデ	茶褐色/赤茶褐色	
260	縄文面		縄文土器	深鉢	2.1	ナデ/ナデ+沈線+縄文	淡茶褐色/褐色	
261	縄文面		縄文土器	深鉢	2.5	ナデ/ナデ+沈線（3本）	淡褐色/褐色	
262	縄文遺構面		縄文土器	深鉢	2.4	ナデ/ナデ+沈線+縄文	淡褐色/淡褐色	
263	ＳＸ503（22）		縄文土器	深鉢	2.1	ナデ/ナデ+沈線	淡褐色/灰褐色	
264	ＳＸ503（26）		縄文土器	深鉢	2.5	ナデ/ナデ+沈線（3本）	淡褐色/灰白色+淡褐色	

265	ＳＸ503（44）		縄文土器	深鉢	4	ナデ/ナデ+沈線+擦り消し縄文		
266	ＳＸ509（Ｄ）		縄文土器	深鉢	2.4	ナデ/ナデ+沈線（2本）+縄文	褐色/淡茶褐色	
267	ＳＸ509（Ｐ）		縄文土器	深鉢	2.2	ナデ/ナデ+沈線+縄文		
268	掘り残し		縄文土器	深鉢	2.5	縄文（口縁にもある）	褐色/淡褐色	
269	ＳＨ262	下層	縄文土器	深鉢	3.5	ナデ	茶褐色	
270	縄文遺構面		縄文土器	深鉢	2	ナデ/ナデ	淡暗褐色/褐色	
271	ＳＸ503（70）（29）		縄文土器	深鉢	1.9	ナデ/ナデ	暗灰白色/黒色	
272	ＳＤ225		縄文土器	深鉢	4.3	ナデ/ケズリ？	茶褐色/茶褐色	
273	ＳＸ501	下層1	縄文土器	深鉢	3.5	ナデ/ナデ（板？）	淡暗褐色/淡暗褐色	
274	ＳＤ225		縄文土器	深鉢	5.5	ナデ/ケズリ	茶褐色/褐色	
275	ＳＸ252		縄文土器	深鉢	3.5	ナデ/ケズリ	淡褐色/黒色	
276	ＳＸ252		縄文土器	深鉢	2.6	ナデ/ケズリ	灰褐色/褐色	
277	縄文面		縄文土器	深鉢	3.6	ナデ/巻貝条痕？	淡暗褐色/淡暗褐色.	
278	ＳＤ225		縄文土器	深鉢	3.5	ナデ/ケズリ	淡褐色/褐色+暗褐色,	
279	縄文面		縄文土器	浅鉢	1.8	ナデ/ナデ+爪形文	黒色/茶褐色	
280	Ｃライン東側サブトレ	最下層黄灰色上面	縄文土器	深鉢	8.2	ナデ+巻貝条痕/ナデ	褐色/暗褐色	
281	ＳＸ501	下層3	縄文土器	深鉢	3.8		淡暗褐色/淡暗褐色	復原口径32.0cm
282	ＳＸ502	下層1/2	縄文土器	深鉢	18.7	ナデ？/巻貝条痕	茶褐色/褐色+黒色	復原口径29.6cm
283	ＳＸ503（54）		縄文土器	深鉢	2	ナデ/ナデ+突帯	淡褐色/淡褐色	
284	ＳＫ403		縄文土器	深鉢	1.3	不明	茶褐色/茶褐色	
285	重機掘削		縄文土器	深鉢	1.1	ナデ/ナデ/（座）網代痕	淡茶褐色/淡茶褐色	
286	縄文遺構面		縄文土器	深鉢	5.2	ナデ/ナデ？	淡褐色/淡黄褐色+淡茶褐色	
287	Ｃ3付近	上層青灰色土	縄文土器	浅鉢	7.8	ミガキ/ミガキ	黒色/淡褐色+黒色	
288	重機掘削中		縄文土器	深鉢	6.8	不明/突帯	淡褐色/淡褐色	復原胴部径（小）23.9cm
289	重機掘削中		縄文土器	深鉢	6.3	不明/不明	淡褐色/淡褐色	復原胴部径（大）29.8cm

7．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 平成13年度発掘調査概要

はじめに

木津地区所在遺跡の調査は、「関西文化学術研究都市」の整備事業に伴い、都市基盤整備公団(旧住宅・都市整備公団)の依頼を受けて昭和59年度から継続して実施している。平成13年度は、木津城山遺跡と赤ヶ平遺跡の２遺跡について調査を実施した。

木津城山遺跡は、京都府相楽郡木津町大字木津小字片山に所在する。木津城山遺跡の調査は、平成９年度から継続して実施しており、これまでの調査の結果、弥生時代後期の高地性集落や終末期古墳(片山古墳群)などが確認されている[注1]。今回の調査は第５次調査に当たる。調査期間は、平成13年６月１日から９月25日までである。調査面積は、約1,000㎡である。なお、木津城山遺跡については、今回の調査をもって中断することから、これまでの調査成果をまとめた報告書を刊行する予定であり、現在、整理作業中である。このため今回の調査成果については、概略を記すに留めておきたい。

赤ヶ平遺跡は、同町大字木津小字赤ヶ平に所在する。昭和59年度に試掘調査(第１次調査)を実施し、顕著な遺構は検出されなかったが、弥生時代中期の土器や石器が出土した[注2]。今回の調査は第２次調査に当たる。調査は、当初、第１次調査地周辺の北半部のみであったが、遺跡の東辺および南辺についても遺跡の概要を把握したいという都市基盤整備公団の要請があったため、当初の調査計画を変更し、追加の試掘調査を実施した。調査期間は、平成13年10月15日から平成14年２月27日までである。調査面積は、約1,300㎡である。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課調査第２係長伊野近富、同第２係調査員筒井崇史が担当した。本概要報告は、筒井のほか、同第１係調査員藤井整、奈良大学大学院生山内基樹が執筆した。また、本概要報告に掲載した写真のうち、遺構は筒井が、遺物は調査第１課資料係主任調査員田中彰が撮影した。

調査に当たっては、京都府教育委員会・木津町教育委員会・京都府立山城郷土資料館・木津の緑と文化財を守る会などの関係諸機関のほか、京都国立博物館久保智康氏からご教示・ご協力いただいた。また、現地調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた[注3]。

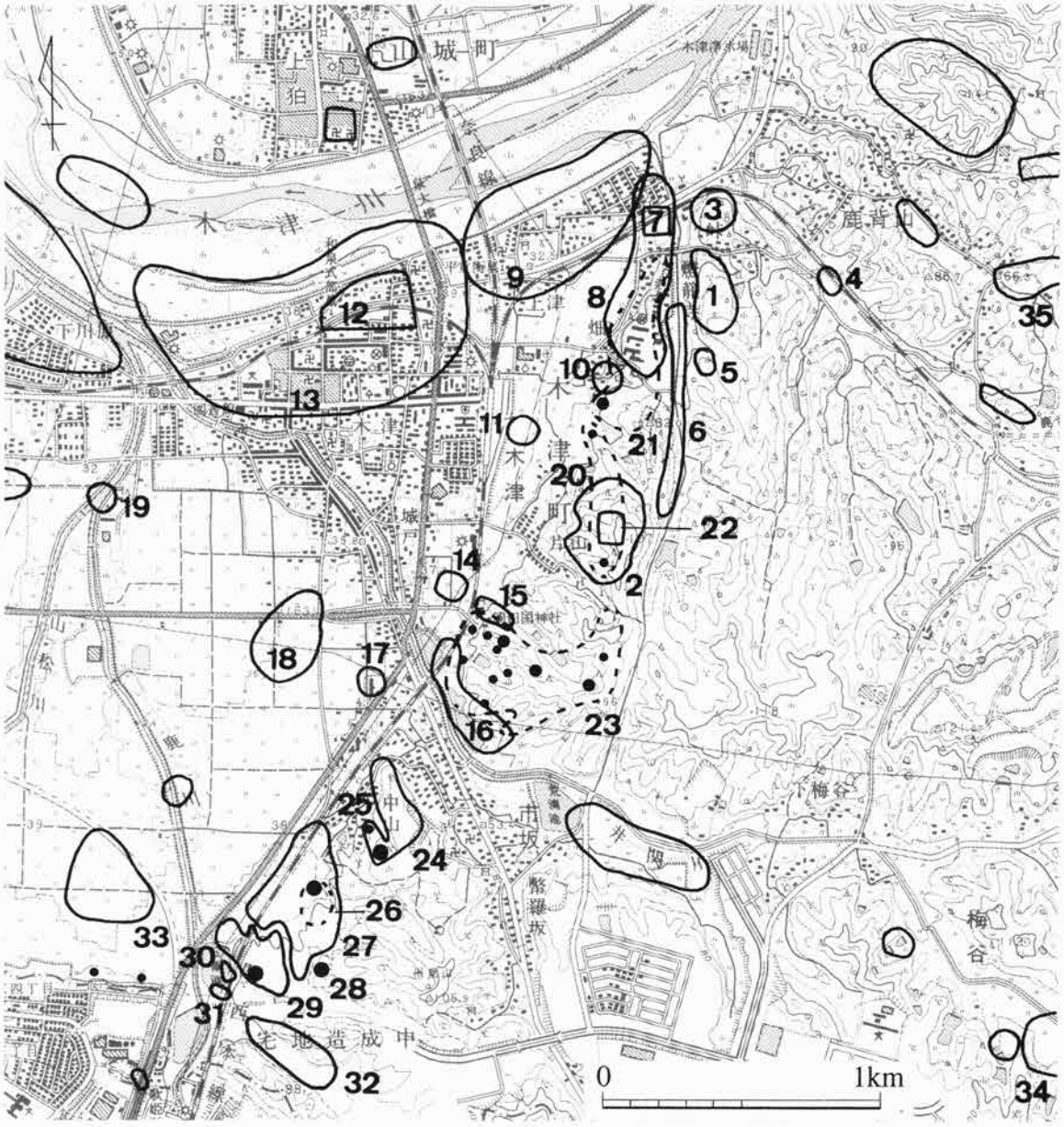
なお、調査に係る経費は都市基盤整備公団が負担した。

(筒井崇史)

(1)木津城山(きづしろやま)遺跡(第5次)

1．調査の概要

調査地は、標高90～100mを測り、やや急峻な丘陵斜面に立地する。ここに、平成12年度(第4次)調査のA～C地区に引き続き、D・E・Fの3つの調査区を設定した。以下、調査区ごとに、



第117図　調査地周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,500奈良)

1．赤ヶ平遺跡	2．木津城山遺跡	3．白口遺跡	4．鹿背山瓦窯跡	5．菰池遺跡	6．釜ヶ谷遺跡
7．燈籠寺廃寺跡	8．燈籠寺遺跡	9．上津遺跡	10．内田山遺跡	11．片山遺跡	12．木津平城跡
13．木津遺跡	14．岡田国遺跡	15．大谷窯跡	16．文廻池遺跡	17．奈良道遺跡	
18．八後遺跡	19．田中遺跡	20．片山古墳	21．内田山古墳	22．木津城跡	23．天神山古墳群
24．西山遺跡	25．西山古墳	26．瓦谷古墳群		27．瓦谷遺跡	28．幣羅坂古墳
29．上人ヶ平遺跡	30．市坂瓦窯跡	31．五領池東瓦窯跡		32．瀬後谷遺跡	
33．弓田遺跡	34．梅谷瓦窯跡	35．巾ヶ谷遺跡			

その概要を報告する。

D地区　もっとも調査面積が広かったが、顕著な遺構は検出されず、急峻な丘陵斜面と、溝状遺構ＳＸ262を検出した。この遺構は、第４次調査で検出した平坦面と同じ標高(約94m)であることから、集落を区画する遺構の可能性があるが、出土遺物がなく詳細は不明である。遺物は、調査区の中央付近で多数の弥生土器が出土した。これらは、いずれも上方から転落したような状況を呈していた。

E地区　平成11年度(第３次)調査で検出されたものも含めて、４基の段状遺構[注4](ＳＸ251～253・256)を検出した。ＳＸ252・253では、雨落ち溝と考えられる溝が検出された。これらから出土した遺物はいずれも弥生土器で、特にＳＸ253から多く出土した。

F地区　平成10年度(第２次)調査地に隣接することから、竪穴式住居跡などの遺構の存在が予想されたが、顕著な遺構は検出されなかった。東側に位置する谷状地形から、多数の弥生土器が出土した。これらの弥生土器は、上方に位置する竪穴式住居跡から廃棄されたり、転落したものと考えられる。

２．ま と め

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で約21箱ある。いずれも弥生時代後期前半に位置づけられる弥生土器であり、これまでの調査成果と大きく異なる点はない。

木津城山遺跡については、先にも述べたように正報告書の刊行を予定しているので、詳細はそれに譲ることとしたい。なお、今年度も含めてこれまでの木津城山遺跡の調査成果については、その一部をすでに報告しているので、参照されたい[注5]。

(筒井崇史)

(2)赤ヶ平(あかがひら)遺跡(第２次)

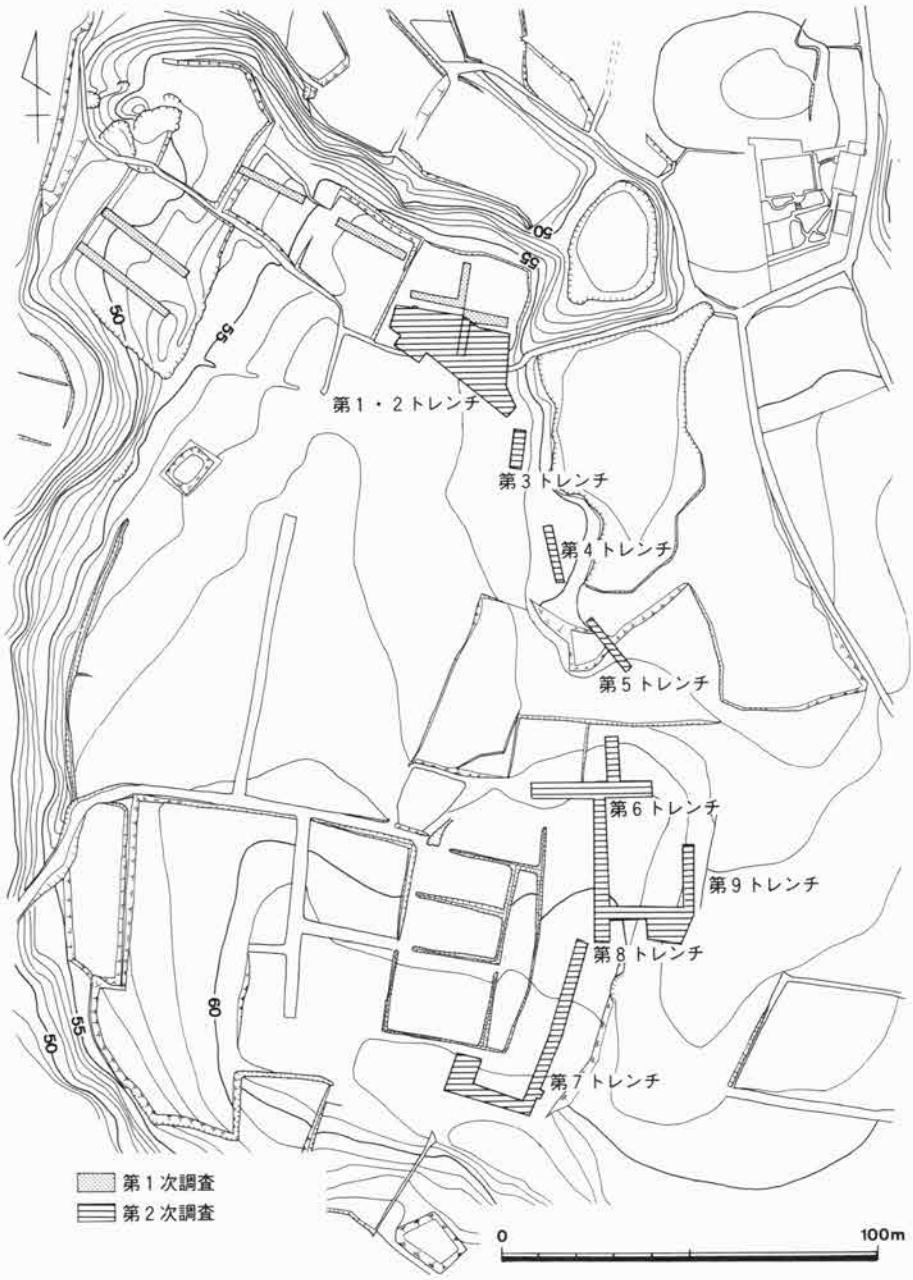
１．調 査 の 概 要

今回の調査区は、第１次調査の結果を受けて、やや面的に調査を実施した部分(第１・２トレンチ)と、調査対象地内に細長い試掘トレンチを設けて調査を実施した部分(第３～９トレンチ)とに分けられる。以下、トレンチごとに概要を述べる。

①第１・２トレンチ

昭和59年度調査区を挟んでトレンチを設定したが、遺構が昭和59年度調査区に及んでいることがわかったため、両調査区をつないで１つの調査区とした。ここでは、竪穴式住居跡２基、剥片石器廃棄土坑１基、鏡埋納坑１基などを検出した。

竪穴式住居跡ＳＢ02　調査区の西寄りで検出した。形状はやや楕円形で、長軸長6.2m以上、短軸長5.1m以上、最大の深さ15cmを測る。主柱穴は３基確認し(Ｐ－１～３)、住居の中央には

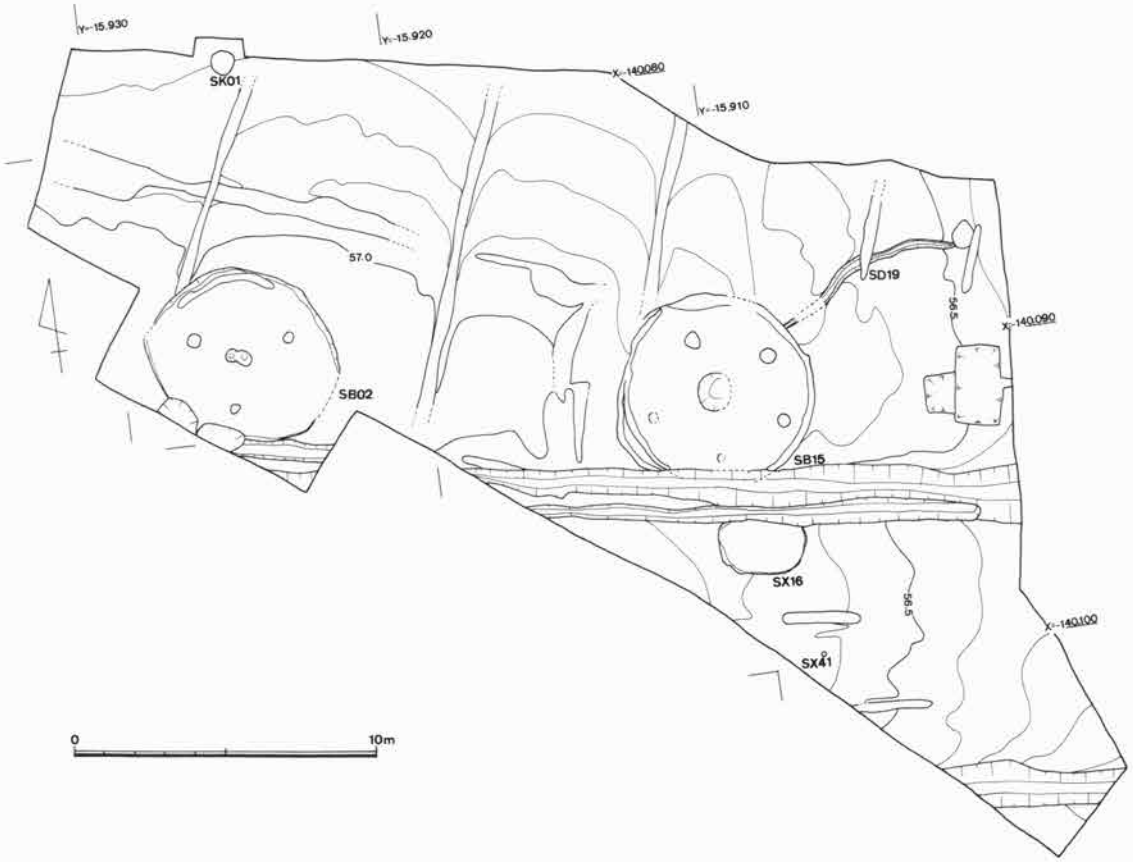


第118図　調査トレンチ配置図

小規模な中央ピットが見られる。また、周壁溝は部分的に確認できた。

出土遺物としては、住居の埋土から弥生土器片や砥石（第127図39）、石鏃（第126図28・29）などがある。また、埋土を洗浄したところ、ガラス製勾玉の破片（第128図40）が出土した。住居跡の時期は遺構に明確に伴う遺物がないが、形状がほぼ円形であることから弥生時代と考えられる。

竪穴式住居跡ＳＢ15　調査区のほぼ中央で検出した。南端を現代の地境溝によって削平されているが、直径約6.2m、最大の深さ10cmを測るほぼ円形の住居跡である。ＳＢ15は、調査当初に重機によって土層確認用の断ち割りを行った結果、その存在を確認したものである。そのため、住居のほぼ中央を縦断して断ち割りを行う結果となってしまった。なお、住居跡の西半部は、第１次調査試掘トレンチに及ぶ。主柱穴は５基確認した（Ｐ－１～５）が、これらによって描かれる円周は、住居跡の平面形に一致せず、若干のずれがある。つまり、ＳＢ15の周壁からみた中心に対して、主柱穴の中心は南南東へ約30cmずれた位置にある。住居の中央には中央ピットを有する。周壁溝はほぼ全周する。床面には貼り床が認められたが、東側が厚く、西側は薄い。また、住居の南西部で、南北3.2m、東西2.4mの範囲から石器製作の際に生じた剥片が多数出土した。これらは、層位的には十分に確認できなかったが、必ずしも床面に密着していないことか



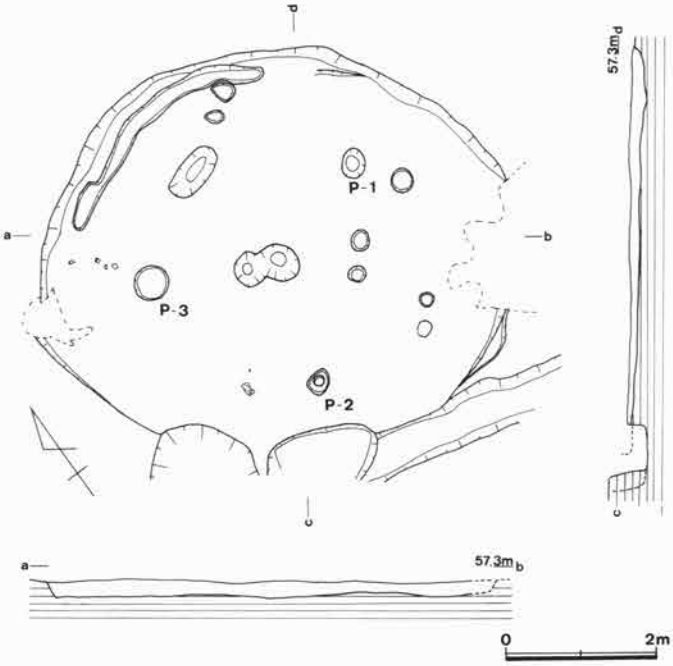
第119図　第１・２トレンチ遺構配置図

ら、住居跡廃絶後にその窪地を利用して廃棄されたものと判断した。

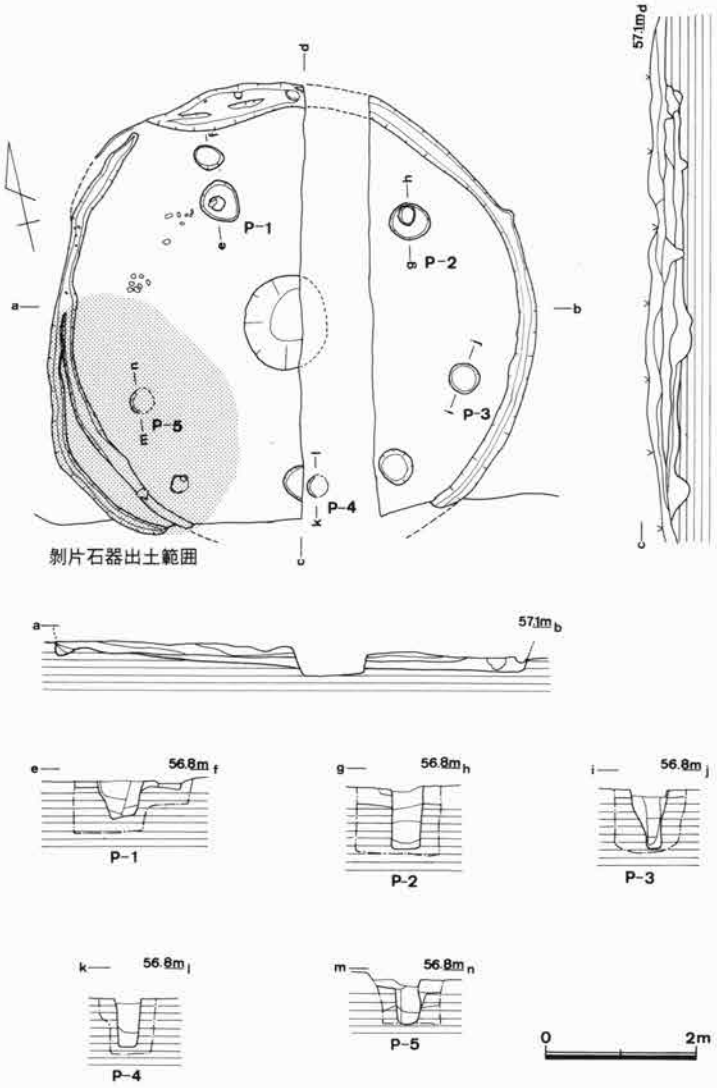
遺物としては、これらの剥片のほか、石鏃(第126図21・25・27)や弥生土器(第125図10～14)などがある。住居廃絶後と考えられる石器群とともに出土した弥生土器から、住居跡の時期は弥生時代中期と思われる。また、住居跡埋土の上層からは布留式の甕(第125図18)が出土した。

剥片石器廃棄土坑ＳＸ16

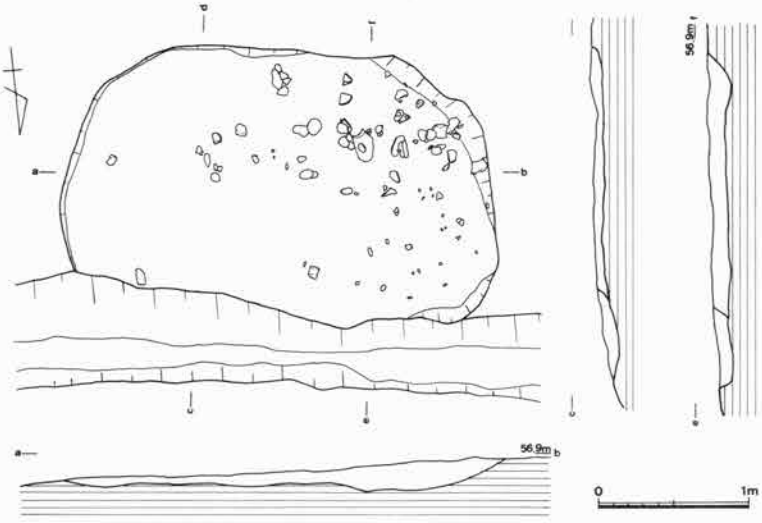
竪穴式住居跡ＳＢ15の南で検出した隅丸長方形の土坑で、長さ2.95m、幅1.7m以上、最大の深さ18cmを測る。ここからは弥生土器(第125図１～９)とともに多数の剥片が出土した。こ



第120図　竪穴式住居跡ＳＢ02実測図



第121図　竪穴式住居跡ＳＢ15実測図



第122図　剥片石器廃棄土坑ＳＸ16実測図

れらの大半は石器製作の際に生じた剥片で、そのほかに石鏃、同未製品、石錘未製品、くさび形石器などが出土した(22・23・30～37)。これらの遺物の取り上げに当たっては、遺構を６区に分けて埋土をすべて取り上げ、洗浄によって回収した。ＳＸ16は、遺物の出土状況から、石器製作に伴う剥片を廃棄した土坑と判断した。土坑の時期は、出土した弥生土器から弥生時代前期に位置づけられる。

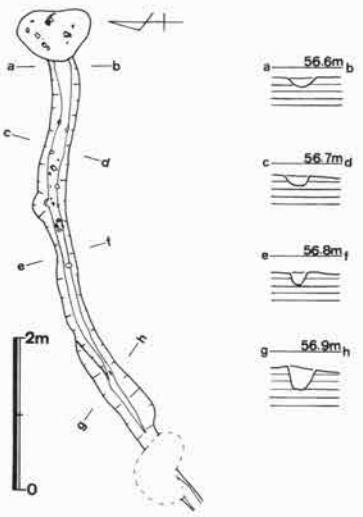
溝ＳＤ19　竪穴式住居跡ＳＢ15の北東で検出した。全長6.2m、幅0.3～0.4m、深さ20～30cmを測る。出土遺物として弥生土器の高杯(第125図17)などがある。当初は竪穴式住居跡ＳＢ15に伴う排水溝の可能性を考えたが、住居内で明瞭に確認できなかったことや、出土した遺物が住居跡の時期よりも新しいことなどから、単独の溝と判断した。

鏡埋納坑ＳＸ41　剥片石器廃棄土坑ＳＸ16の南で検出した円形の柱穴状を呈する小土坑である。直径25cm、深さ10cmを測る。土坑底にほぼ接して菊花文鏡(第128図41)が鏡面を上にして出土した。菊花文鏡の横には鉄刀が立てられていたが、鉄刀の先は、土

坑底からさらに10cmほど地中に突き刺さっていた。ただし、周辺に同時期の遺構を確認することはできず、調査区の北西隅で、瓦器椀の小片を含む厚さ5cm程度の薄い包含層を確認したにとどまる。

②第3～6トレンチ

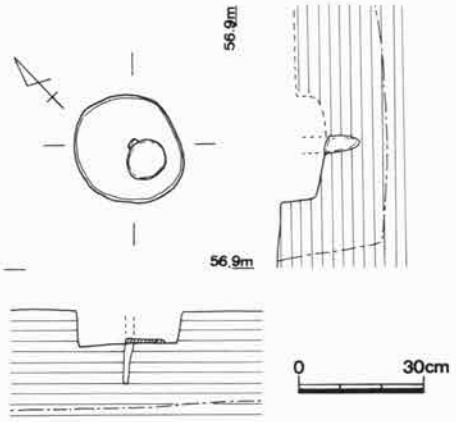
これらの調査区は、1・2トレンチから南にかけて順次設定した試掘トレンチであるが、調査の結果、竪穴式住居跡などの顕著な遺構は検出されず、近年の耕作に伴う溝や地境溝などを確認した。出土遺物の大半は近世以降のものであるが、第4トレンチでサヌカイト製の剥片1点が出土したほか、第6トレンチでも須恵器の破片が出土した。



第123図　溝ＳＤ19実測図

③第7トレンチ

調査地の南端に設定した逆「L」字形の調査区である。第7トレンチの大半も第3～6トレンチと同様に、近年の耕作に伴う溝が検出されたに過ぎないが、南端付近で遺物を伴う土坑を2基確認した(ＳＸ101・102)。ＳＸ101は長軸長80cm、短軸長60cm、深さ20cmを測り、土師器の小片が出土したが、詳しい時期などは不明である。ＳＸ102は長軸長98cm、短軸長80cm、深さ17cmを測り、布留式の甕1点(第125図19)が出土した。



第124図　鏡埋納坑ＳＸ41

④第8トレンチ

第6トレンチから東へ延びる調査区で、試掘後に南側を若干拡張した。調査の結果、近世、またはそれ以降の柱穴または土坑を検出した。ここでは、土層が水平に堆積している状況を確認することができ、近世以降に整地を繰り返して土地を利用していたと考えられる。

⑤第9トレンチ

第8トレンチ東端から北へ延びる調査区である。調査の結果、近世、またはそれ以降の溝などを検出した。土層の堆積状況も第8トレンチと同様で、近世以降に整地を繰り返して土地を利用していたと考えられる。また、調査中に石鏃1点(第126図24)が出土しており、平坦地に弥生時代の遺構があった可能性が考えられる。

2．出土遺物

今回の調査では、剥片石器廃棄土坑ＳＸ16・竪穴式住居跡ＳＢ15をはじめ、調査地各所から、整理箱にして10箱の遺物が出土した。ただし、石器については埋土ごと取り上げたものの、未洗浄のままのものがあり、最終的な量としてはもう少し増えると思われる。主なものとしては前・中期弥生土器、古式土師器などの土器類、石器・剥片、鏡などがある。以下、主要な遺物につい

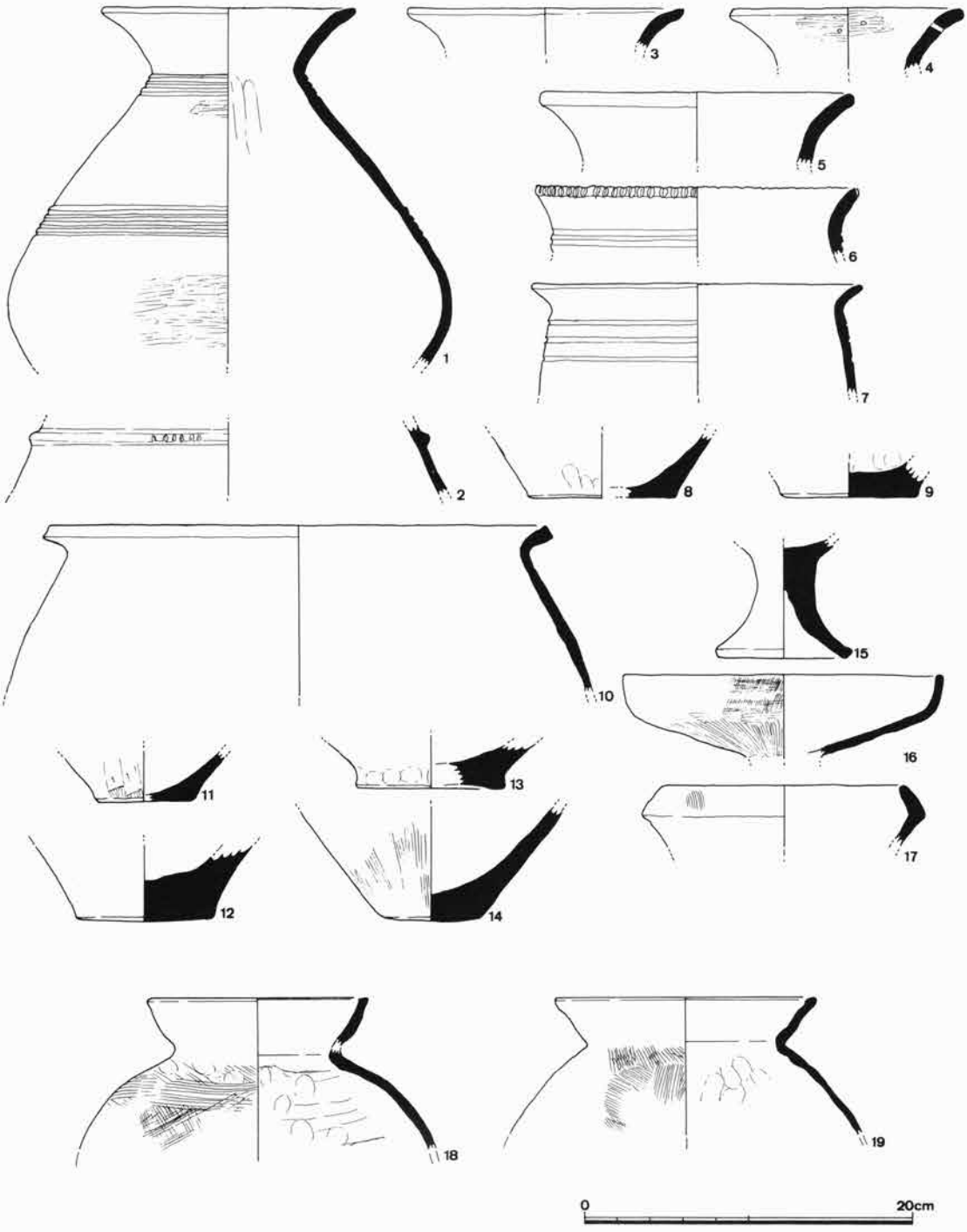
て述べる。

（筒井崇史）

①弥生土器

今年度の調査では、弥生時代前期・中期中葉・中期後葉の遺物が出土した。

１～９はＳＸ16出土遺物で、壺（１～５・８・９）と甕（６・７）がある。壺は口縁を短く外反させ、端部を丸くおさめるものである。１は頸部と胴部に５条の沈線を施し、ともに最上段の１条を上端をハケで削り落としている。頸胴間と胴部はヨコミガキである。胴部に突帯をめぐらせる



第125図　出土遺物実測図（1）

付表８　土器観察表

番号	遺構	器形	口底径	残存高	胎土	鉱物	焼成	色調	残存度
1	SX16	広口壺	14.4	21.6	やや粗	石・長・赤斑・チャ・透石	やや軟	淡赤褐色	1/3
2	SX16	壺	-	4.3	やや粗	長・石・チャ・赤斑	やや軟	明赤褐色	1/10
3	SX16	広口壺	16.7	2.4	やや粗	石・チャ・透石・頁岩	やや軟	明黄褐色	1/11
4	SX16	広口壺	14.0	3.8	やや粗	長・石・チャ・雲	やや軟	淡黄褐色	1/12
5	SX16	広口壺	18.6	4.3	やや粗	長・石・赤斑	やや軟	淡黄褐色	2/5
6	SX16	甕	19.6	4.0	やや粗	長・石	並	濃赤褐色	1/8
7	SX16	甕	19.6	4.0	やや粗	長・石	並	濃赤褐色	1/8
8	SX16	壺底部	(9.4)	3.9	やや粗	石・長・雲・赤斑	やや軟	淡黄褐色	2/5
9	SX16	壺底部	(8.4)	2.3	やや粗	石・長・雲	やや軟	淡赤褐色	1/3
10	SB15	甕	30.2	10.2	やや粗	長・石・赤斑・雲	並	淡黄褐色	1/5
11	SB15	壺底部	(6.2)	3.2	やや粗	石・チャ・長・雲・透石	並	明黄褐色	1/6
12	SB15	壺底部	(8.2)	4.8	やや密	石・チャ・長・透石	やや軟	濃黄褐色	4/5
13	SB15	壺底部	(9.1)	3.2	やや粗	石・チャ・長・雲・透石	並	明黄褐色	1/6
14	SB15	壺底部	(6.6)	7.0	並	長・石・赤斑・透石	やや軟	淡黄灰色	4/5
15	SP51	台付鉢	(7.2)	6.9	並	長・石・雲・赤斑・透石	やや軟	淡赤褐色	11/12
16	SD19	高杯	18.6	4.9	やや粗	長・角閃石・石	並	暗褐色	2/5
17	１次調査	壺	14.4	3.7	やや粗	石・透石・長・赤斑・雲	やや軟	黄褐色	1/6

壺２も出土しているが、幅広でシャープさを欠く。口縁部に紐孔をもつ４は、口縁内外面をヨコミガキで調整した後に内面から外面に向かって穿孔が行われている。甕はゆるやかに外反する６と、如意状口縁の７があるが、どちらも沈線は少条で、ヘラ原体も太いものが用いられている。突帯が出現しているが、前期中段階の範疇で理解できる資料である。

10～14はＳＢ15出土遺物である。大型の甕15は、全面磨滅しており調整は不明であるが、口縁端部の跳ね上げが顕著でない点や、底部外面にケズリを施したものがない点などから、中期中葉に属する資料と考えられる。

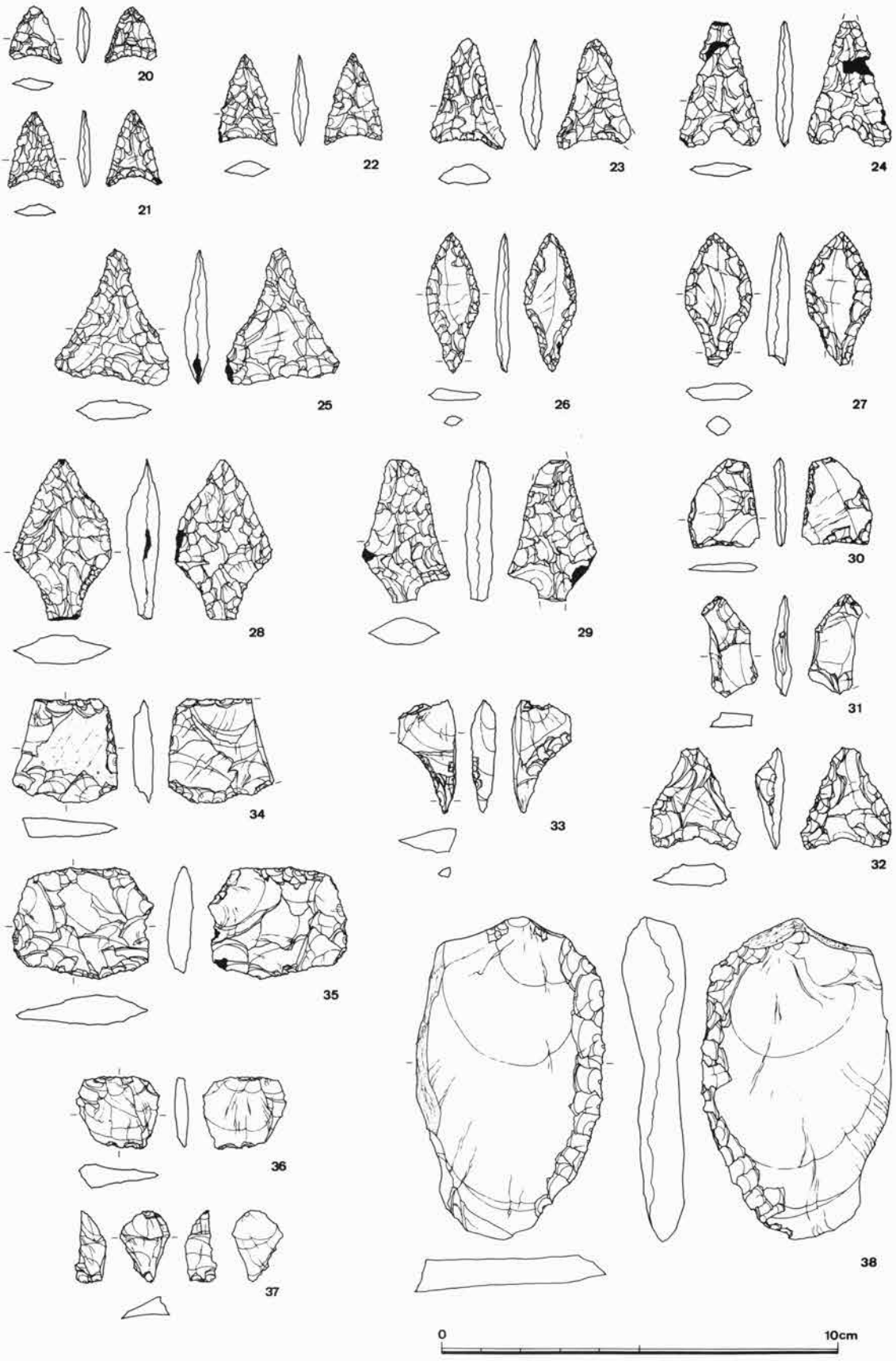
15はＳＰ51出土の台付鉢である。内外面ともに磨滅しているが、外面は不整なタテミガキ、内面はナデ調整が行われており、ケズリの痕跡は認められない。16はＳＤ19出土の杯部が強く屈曲する高杯である。杯部外面はタテミガキの後にヨコミガキで調整し、櫛描列点紋を２帯施す。胎土に角閃石を含むいわゆる生駒西麓産の土器である。15・16は別々の遺構の資料であるが、その形態からともに中期でも新しい段階に属する資料と考えられる。

17は第１次調査で出土した壺である。今回改めて観察すると、新たな知見があったので再実測のうえ掲載した。口縁部は「く」の字状に屈曲する袋状口縁で、口縁外面には磨滅してはいるが、扇形紋が施されている。口縁部へのヨコナデが強くないことから、中期の中でもＳＢ15に近い時期の資料と考えられる。

（藤井　整）

②古式土師器

18はＳＢ15上層、19はＳＸ102から出土したもので、ともに口縁端部内面が肥厚する布留式の甕である。どちらも、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にハケ、頸部内面にユビオサエ、体部



第126図　出土遺物実測図(2)

内面にやや浅いヘラケズリを施す。胎土・焼成はともに良好である。色調は18が淡橙褐色、19が淡橙灰色である。18は口径13.0cm、残存高9.4cm、19は口径15.7cm、残存高8.5cmを測る。

（筒井崇史）

③石器

今回の調査では、竪穴式住居跡ＳＢ15、剥片石器廃棄土坑ＳＸ16を中心に多量の石器が出土した。ここでは、出土石器のうち定形的なものを中心に報告し、あわせてＳＸ16出土石器について若干の検討を加える。なお、石器出土量が最も多い遺構はＳＢ15であるが、前述のように出土状況については検討の余地があることと、詳細な検討を行うための十分な時間が確保できなかったことなどから、今後、機会を改めて報告・検討を行いたい。

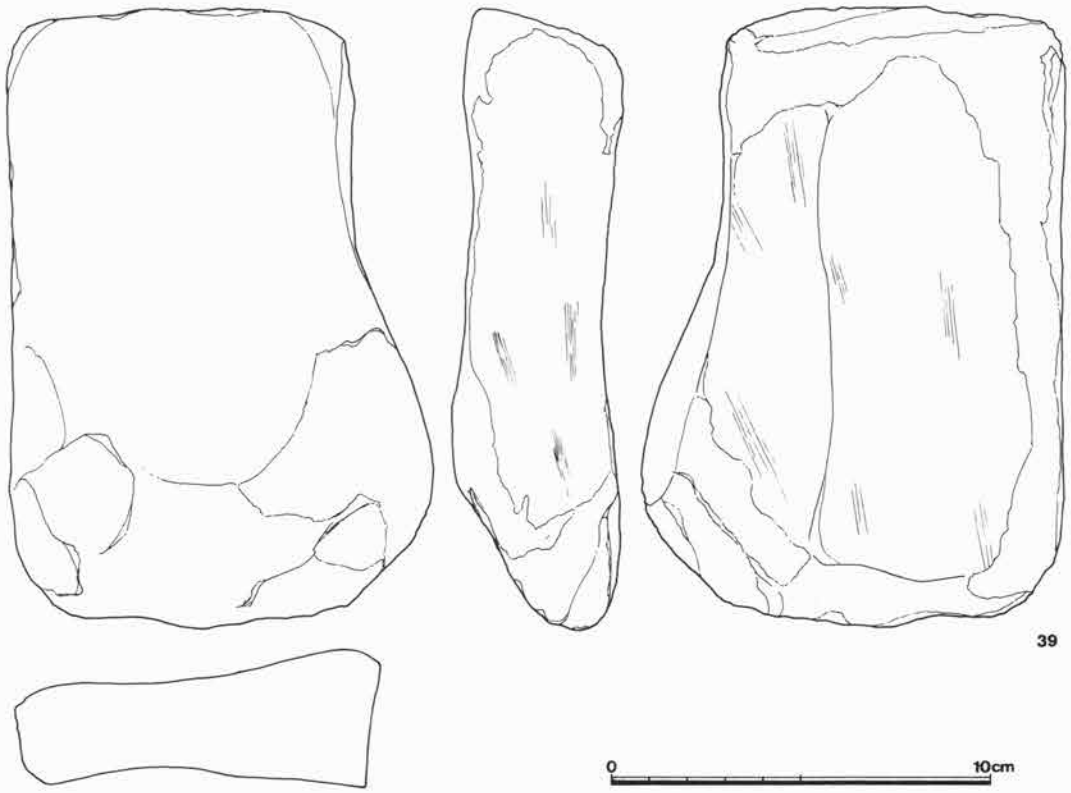
出土石器の概要

出土した石器の中で、いわゆる定形石器は、石鏃・削器のみであり、他に楔形石器・砥石・未製品・二次加工のある剥片と剥片・チップといった単純な石器組成をなす。なかでも剥片・チップが出土石器の大半を占める。以下、出土石器について概要を述べる。なお、法量等については付表８を参照されたい。また、特に記載のない限り石材はサヌカイトである。

第120図の20～29は石鏃である。20～24は凹基鏃である。20は出土石鏃中最小である。やや不揃いな剥離が目立つ。片脚先端を折損する。21はまとまった剥離単位で調整加工を施す。右面中央に素材面を残す。22は不揃いな剥離単位ながらも器面に入念な調整加工を施す。20～22は共通した器形を持つ。すなわち、先端部から脚部へやや内湾し、脚部先端を尖らせ、基部はゆるやかなラインで凹基に仕上げる石鏃である。23は不揃いな剥離単位で先端部も鋭利に仕上げていない。片脚先端を折損する。側縁はやや外反して脚部に至り、脚部先端は寸詰まりの面を取る。24は比較的大きい剥離単位ながらも入念な調整を施す。側縁は先端部から直線に脚部へ至り、脚部先端を円く仕上げる。基部の抉りは深く、この器形の石鏃は当資料のみである。

25は平基鏃で、不揃いな剥離単位ながらも入念に調整を施す。側縁は先端部から内湾して脚部に至るが左右の側縁で一定しない。基部は器軸に対してやや斜めの平基に仕上げる。右面に素材面が残存する。

26～29は中茎をもつ凸基鏃であるが、側縁の張り出し部、つまり最大幅となる部位にそれぞれで差異が見られる。26・27は中央付近で最大幅となるが、26は比較的ゆるやかに内湾して張り出し、27は内湾の角度がつく。28は最大幅がやや下半であり、角をもった張り出しである。29は最大幅が下半であり、明瞭な角をもった張り出しである。26は素材に対して器面中央まで剥離が延びない急斜度の調整を施す。両面に素材面を大きく残しており、同一方向の連続した打撃によって剥離された剥片を素材としていることがわかる。27は26と同様に、素材に対して器面中央まで剥離が延びない急斜度の調整を施す。両面に素材面を大きく残しており、同一方向の連続した打撃によって剥離された剥片を素材としていることがわかる。中茎先端を折損する。28は入念に調整を加えて器形を整えているが、左面中央は調整が及ばず島状に残存する。菱形の器形をなし、中茎に至る基部はやや内湾させる。中茎先端を折損する。29は一部に斜行状の剥離を連続して施



第127図　出土遺物実測図(3)

す。先端部からやや内湾して基部に至る。先端部と中茎先端を折損する。

30～32は石鏃未製品である。30は一側縁の一部と基部に若干の調整痕を留める。調整段階ながらも、基部の形状が看取されることから未製品とした。右面左側縁(左面右側縁)には階段状の剥離がみられ、素材剥出の際の痕跡を留めているとも考えられる。31は先端部に若干の調整痕を留める。両側縁に折損面を有する。右面左側縁(左面右側縁)は折損後も調整を施す。一方の側縁に折損が生じたので作業を終えたものか。32は30・31と比して調整が進行しているものの器形は整っていない。また、右面左側縁(左面右側縁)には素材の厚さを減じようとする痕跡が看取できる。しかし急斜度の剥離となり、厚さを取り除くことができずに作業を終えたことがわかる。

33は石錐未製品である。錐部に調整痕を留める。両面で部分的に調整痕を留めるのみで、明瞭な錐部を作出していると言い切れないため未製品とした。両面に素材面を残す。ツブレ痕をともなう線状打点を呈し、打点からファシット状の剥離が生じたものを素材としていると看取できる。これらの特徴から、この素材は両極打撃によって剥離されたものと思われる。

34・35は楔形石器である。34は上下縁に階段状剥離を有する。側縁にファシット状の剥離が生じて作業を終える。右面左下にポジティブな素材面を残し、左面中央に自然面を残すことから、自然面を背面に取り込む剥片を素材にすると思われる。35は上下縁に階段状剥離を有する。

36・37は両極打撃によって剥離されたと思われる剥片である。36は打瘤が発達せず平坦な主剥離面を呈し、側縁にファシット状の剥離がみられ、左面上縁は階段状剥離を有する。打点の対辺に微細なツブレ痕がみられる。37は打瘤が発達せず平坦な主剥離面を呈し、側縁に打点と剥離の

付表9　石器実測図

番号	器種	トレンチ名	遺構・層位	法量（mm・g）				石材	備考(石器の数字は取り上げ番号)
				最大長	最大幅	最大厚	重量		
20	石鏃	1・2tr.	SB15	14.3	13.4	3.0	0.6	Sa	凹基　石器137
21	石鏃	2tr.	SB15床面直上	19.0	14.0	3.0	0.5	Sa	素材面残　凹基
22	石鏃	2tr.	SX16 3区	23.0	14.4	4.5	0.9	Sa	凹基　石器344
23	石鏃	2tr.	SX16 3区	28.0	18.8	5.0	2.0	Sa	片脚端部欠　凹基
24	石鏃	9tr.	茶褐色土	32.0	20.8	3.7	1.9	Sa	凹基
25	石鏃	2tr.	SB15貼床	34.1	28.4	5.4	3.8	Sa	素材面残　ゆるい凹基
26	石鏃	1・2tr.	SB15上面	35.0	13.4	3.5	1.4	Sa	素材面両面残　凸基
27	石鏃	2tr.	SB15周壁溝埋土	33.7	17.0	4.5	2.7	Sa	凸基　中茎折
28	石鏃	1tr.拡張	SB02	40.0	25.0	7.0	5.5	Sa	中茎欠　凸基
29	石鏃	1tr.拡張	SB02	35.6	22.2	6.8	4.5	Sa	肩部欠　先端部折　中茎折　凸基
30	石鏃未製品	2tr.	SX16 1-4セクション	22.0	18.0	2.4	1.2	Sa	石器345
31	石鏃未製品	2tr.	SX16 2区	25.0	14.0	4.4	1.4	Sa	石器94
32	石鏃未製品	2tr.	SX16 3区	25.5	22.8	7.0	2.6	Sa	石器307
33	石錐未製品	2tr.	SX16 3区	28.2	14.8	6.1	1.8	Sa	石器239
34	楔形石器	2tr.	SX16 5区	26.0	26.5	6.0	-	Sa	石器317
35	楔形石器	2tr.	SX16 5区	28.0	35.2	7.6	-	Sa	石器328
36	剥片	2tr.	SX16 3区	18.5	20.9	5.7	-	Sa	両極の可能性大　石器234
37	剥片	2tr.	SX16 5区	18.5	12.6	7.6	-	Sa	両極の可能性大　石器45
38	削器	1tr.	重機掘削中	80.0	48.0	15.3	47.9	Sa	刃部両面調整 素材に刃部調整のみ
39	砥石	1tr.	SB02	163.0	112.5	36.4	-	凝灰岩	石1

末端からファシット状の剥離が生じる。末端に微細なツブレ痕がみられる。

38は削器である。同一方向の連続した打撃によって剥離された大型の剥片を素材とし、両面調整によって刃部を作出する。調整痕は刃部にのみみられる。

第127図39は砥石である。3面の砥面で構成する。砥面は上下にゆるやかに湾曲し、平滑である。擦痕は不明瞭である。きめ細かな凝灰岩を使用しており、仕上げ砥石と思われる。

赤ヶ平遺跡におけるＳＸ16の位置付けについて

ＳＸ16出土石器については、調査当初から、肉眼で確認できた石器についてはその出土位置の記録を行うとともに、1～6区のグリッドを組んでＳＸ16の埋土をすべて採取の上、水洗しており、遺構内の石器出土状況の把握がある程度可能である。また、一連の作業によって出土した石器の総重量はおよそ920ｇである[注6]。ここでは出土位置を記録できた石器を中心に、ＳＸ16における石器の位置付けを行う[注7]。

石器組成について

石器の認定基準や出土数のカウント等、石器組成についての問題点は多い。認定基準については研究者間での認識の相違も大きな要因である[注8]。一方、出土数のカウントに関しては、調査段階

からサンプリングの方法や調査担当者の問題意識まで認識が必要とされており、その結果によってデータに大きく差が生じてくる[注9]。ＳＸ16においても、水洗篩別で検出された石器によって遺構内の石器組成が明らかになった。ちなみに、ＳＸ16の石器組成は、石鏃（４点、位置を記録できたものの点数、以下同じ）、石鏃未製品（２点）、石錐未製品（１点）、楔形石器（９点）、剥片・チップ(300点以上)である。また、水洗篩別の結果を加えても石器組成の変化は見られなかったが、５㎜以下の調整剥片を含むチップが大量に検出できたことの意義は大きい。

遺構の機能について

ＳＸ16出土の石器は、22・23・30～37である。個々の詳細については事実報告で述べた。さて、ＳＸ16出土石器において特徴的なことは、石器組成の単純さとともに、いわゆる製品石器に対して微細剥片・チップ類が大量に検出されたことである。また、石核が一切出土しないことも特徴として挙げられる。

調整剥片と思われるものも含めて、微細剥片・チップ類の出土は赤ヶ平遺跡において石器製作が行われていることを示すものと思われる[注10]。剥片石器の製作にはいくつかの工程が想定でき、大きく「石核素材生産」段階、「目的剥片生産」段階、「二次加工」段階に分けられる[注11]。剥片や砕片はこれらのどの段階においても生じるものであるが、ＳＸ16の場合、大型の剥片は存在せず、ほとんどの剥片が２cm以下に分布すること、調整剥片と思われる微細剥片が確認されることなどから、主に「二次加工」段階に生じた石器が出土していると考えられる。

さらに、分布状況からは製作に関する有意な情報は得られないことから、ＳＸ16は主に剥片石器の二次加工の際に生じた調整剥片が一括して廃棄された場であると考えられる。

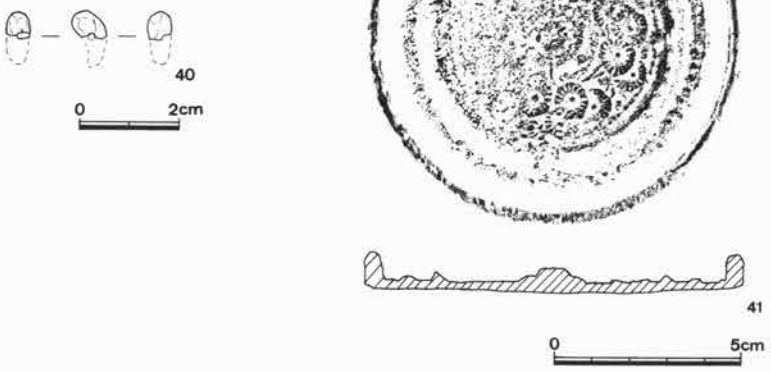
剥片石器生産について

剥片剥離について、出土した未製品の観察から検討を加える。ＳＸ16から出土した未製品は、石鏃未製品３点、石錐未製品１点である。11・12は表裏に素材面を大きく残す。調整痕は若干みられるのみで、素材剥片の特徴を推定することが可能である。すなわち、扁平小型の剥片であり、調整の際にそれほど大きさを減じない程度のものと考えられる。また、11・14には素材の打点もしくは打点付近には階段状の剥離痕がみられ、素材面はバルブが発達せず、表裏に関わらずフラットである。これらの特徴から、両極打撃によって剥離された剥片を素材にしている可能性が指摘できる。14は表裏の素材面からある程度厚みがあり、一側縁にファシット状の剥離が素材の段階で存在することから、両極打撃の際に生じたスポール状のものを転用したとも考えられる。ＳＸ16からは、一定量の楔形石器と両極打撃によって剥離されたと思われる剥片が出土しており、それらが剥片石器の素材となる可能性を示している。13は厚みのある素材を用いていることが看取できる。ある程度調整が進行しているため、素材の打点等は不明である。しかしＳＸ16出土の剥片には直接打撃によって剥離されたと思われる剥片も多くあることもあり、剥片石器の素材が直接打撃によって剥離されたことも十分考えられる。これらのことから、剥片石器の素材を剥離する際には直接打撃と両極打撃を用いていたことが考えられる[注12]。

（山内基樹）

③その他の遺物（第128図）

ガラス製勾玉(40)は、竪穴式住居跡ＳＢ02の埋土を洗浄したところ、出土したものである。尾の部分を欠損しており、残存長0.53cm、厚さ0.45cmを測る。色調は、いわゆるスカイブルーを呈する。



第128図　出土遺物実測図(4)

菊花文鏡(41)は、鏡埋納坑ＳＸ41出土の青銅製の鏡である。直径9.9cm、高さ0.9cmを測る。鏡面および鏡背ともに錆が著しいが、紐座は亀形紐で、菊花文様が右下から左上方へ反時計回りにめぐる。太い圏線が２本みられ、中世後期に盛行した擬漢式鏡と考えられる。内側の圏線は六花形、外側の圏線は連珠文帯である。菊花文の左側は錆が著しいが、鳥が２羽描かれていた可能性が高く、一般に「菊花双鳥鏡」と呼ばれる鏡式であったと考えられる。なお、類似した鏡の鋳型の出土例や製作技法から室町時代前半頃のものと考えられる(注13)。

３．ま と め

今回の調査成果についてまとめると以下のようになる。

①弥生時代の遺構・遺物を多数検出した。特に北端部では竪穴式住居跡を検出し、赤ヶ平遺跡が弥生時代の集落であったことを確認した。削平の著しかった第３トレンチ以南の地域でも石鏃や剥片が出土するなど、弥生時代の集落域であったと考えられる。また、赤ヶ平遺跡周辺では、現京都府立木津高等学校内に所在する燈籠寺遺跡をはじめ、木津城山遺跡、白口遺跡など、弥生時代の集落や墓域が検出されており、この地域に弥生時代の遺跡が広がっていたと考えられる。特に、今回の調査で検出された弥生時代前期の遺構は、この周辺ではもっとも古い弥生時代の遺構であり、注目される。

②布留式土器(甕)が、ごくわずかではあるが、出土しており、古墳時代の遺跡が広がっていた可能性がある。また、遺構の埋土からガラス製勾玉が出土したことは、近くに、勾玉を副葬した墓もしくは勾玉を製作していた工房跡が存在する可能性を示唆している。

③小土坑から中世の鏡が出土したことは、遺跡の周辺に同時期の遺構が存在する可能性が高い。また、なぜ鏡と鉄刀がこのような小土坑に収められていたのか、今後検討しなければならない課題である。

（筒井崇史）

注１　木津城山遺跡の調査については以下の報告がある。
伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成９年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第85冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998
伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第90冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999
戸原和人・筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第95冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000
戸原和人・伊賀高弘・筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第101冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

注２　赤ヶ平遺跡の調査については以下の報告がある。
黒坪一樹「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要　(1)赤ヶ平遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第17冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985

注３　調査参加者は以下の通りである。
井上達平・上野剛明・岡野奈知子・奥出裕也・金子眞理子・黄瀬桂子・小牧健太郎・下間寿浦・滝下勝久・筒井由香・中村美紀・仲山宜孝・松浦弘太郎・宮崎敦・山田三喜子・吉永清美・陸田初代・森川敦子・安田裕貴子・古賀友佳子・山岡匠平

注４　丘陵の斜面を等高線に沿って掘削して平坦な空間を作った遺構をさし、比較的長いものが多い。丘陵斜面に作られるため、幅はあまりない。段状遺構については、以下の文献を参照されたい。
森岡秀人「高地性集落の分類と構成要素」（『弥生文化の研究』７　雄山閣）　1986

注５　筒井崇史「木津城山遺跡の発掘調査とその成果」（『京都府埋蔵文化財情報』第82号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

注６　出土した微細な剥片類は、検出中や水洗篩別中の破損が多いことから、個体数を提示する必要性はないと考える。

注７　本来ならば水洗篩別によって検出された石器も含めて総体的に行うべきであるが、整理期間の都合上、できなかった。しかし水洗篩別を行ったことによって、石器組成比など問題の指摘がなされている点においては十分対処が可能な資料である。

注８　石器の器種認定については、いわゆる一般的定義の他に個々の遺跡内において総体的に認定されるべき定義が存在すると考える。多くの不定形石器についてこのことが考えられよう。

注９　資料のサンプリング方法による石器組成差についてはさまざまな指摘がある。
中川和哉「考察　石器」（『雲宮遺跡　京都府遺跡調査報告書』第22冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1997

注10　調整剥片に関しては、以下の基準で認定した。すなわち、基本的に複数の剥離面で構成される剥離面打面を有し、剥離角は150°前後のもの。いわゆる剥片石器の二次加工に際して剥離されたと思われるものとした。ＳＸ16においても確認しているが、水洗篩別資料を対象外にしているため、その実数は膨大な数と考えられる。

注11　中川和哉「乙訓地域における弥生時代集落と石器生産」（『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡京都府遺跡調査報告書』第28冊）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

注12　石核が一切出土しないため、石核の状況に対して剥片剥離技術の選択がどのようになされたのかは言及できない。

注13　菊花文鏡については、京都国立博物館久保智康氏よりご教示を得た。

図　　版

図版第１　名勝龍安寺庭園

⑴調査前近景（南西から）

⑵第１トレンチ作業風景（南東から）

図版第２　名勝龍安寺庭園

⑴第１トレンチ検出遺構（北から）

⑵第２トレンチ検出遺構（東から）

図版第３　名勝龍安寺庭園

⑴溝２遺物出土状況（東から）

⑵溝２全景（北から）

図版第 4　名勝龍安寺庭園

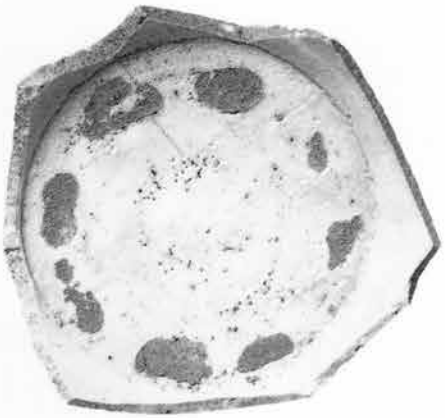
2

19

10

20

12



22

13

17

28

31

出土遺物

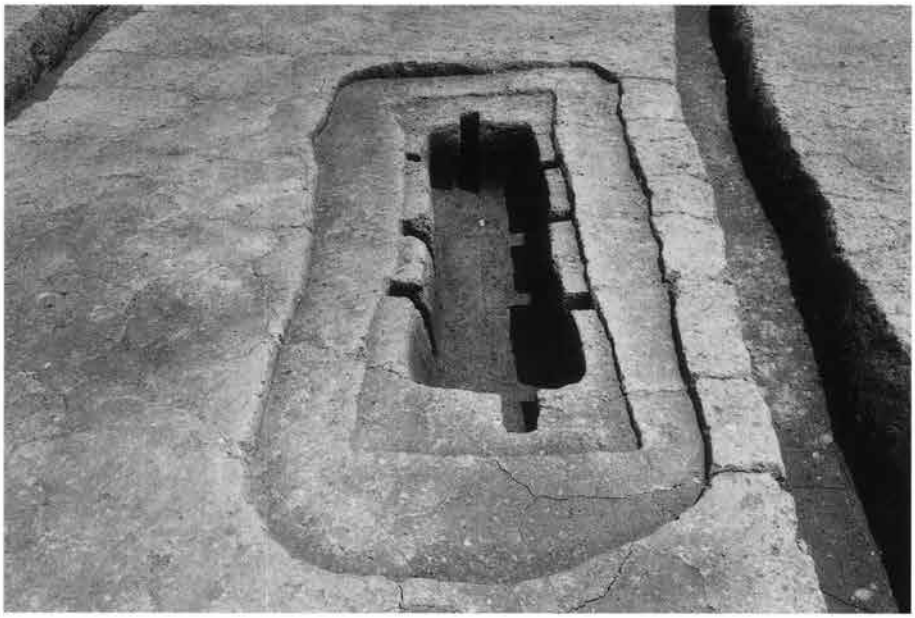
図版第５　下植野南遺跡（門田（ＩＫ－31次調査）地点・土辺（ＳＴＢ－１～５）地点）

⑴Ｊトレンチ南拡張区完掘状況（東から）

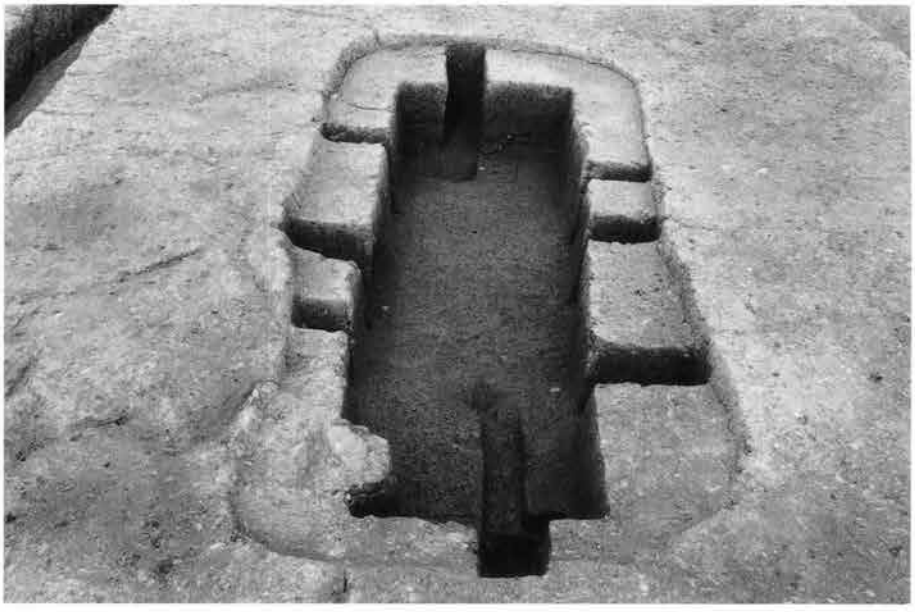
⑵土辺地点ＳＴＢ３－１トレンチ（上が南東）

図版第６　下植野南遺跡（門田（ＩＫ－31次調査）地点）

⑴ＪトレンチＳＴＪ199・200
（南東から）



⑵ＳＴＪ199北側主体部（東から）



⑶ＳＴＪ199南側主体部（東から）

図版第７　下植野南遺跡（門田（ＩＫ－31次調査）地点）

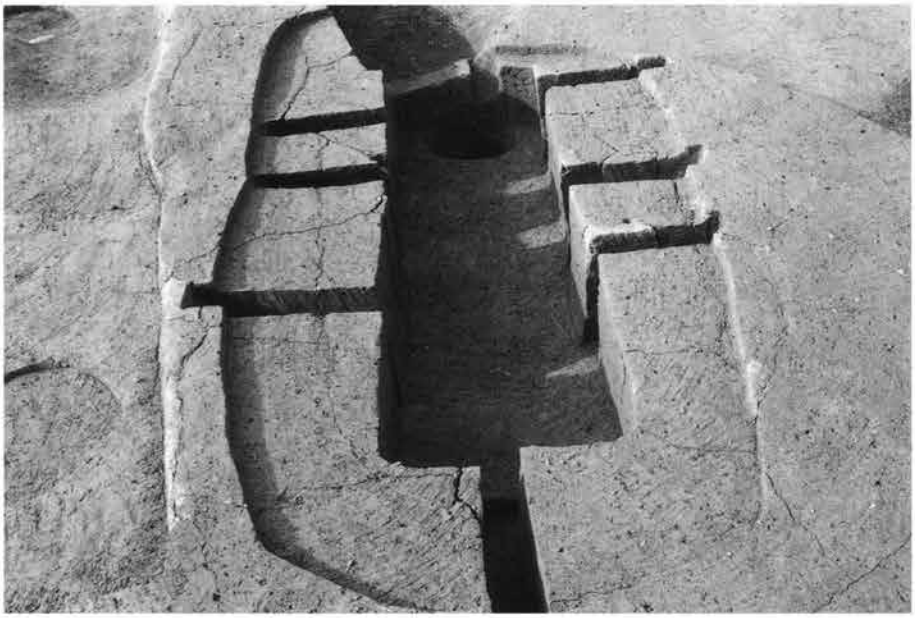
⑴Ｉ－１トレンチＳＴＩ48
（南西から）

⑵全景（南から）

⑶全景（東から）

図版第８　下植野南遺跡（門田（ＩＫ－31次調査）地点）

(1)Ｉ－２トレンチＳＴＩ123
（東から）



(2)ＳＴＩ123主体部（南から）

(3)ＳＴＩ123遺物出土状況
（南から）

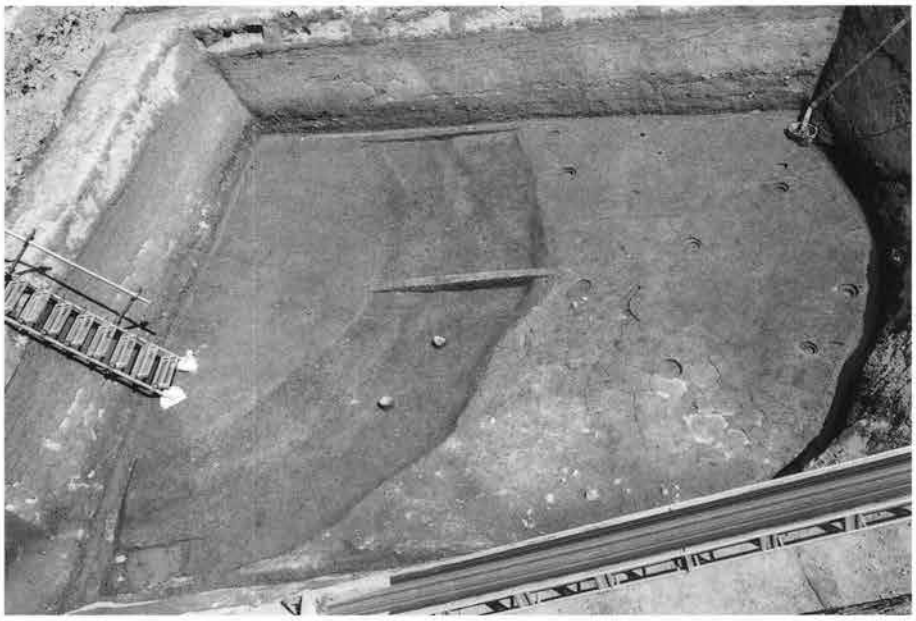
図版第９　下植野南遺跡（門田（ＩＫ－31次調査）地点）

⑴Ｉ－２トレンチＳＢＩ140
（北西から）

⑵全景（南から）

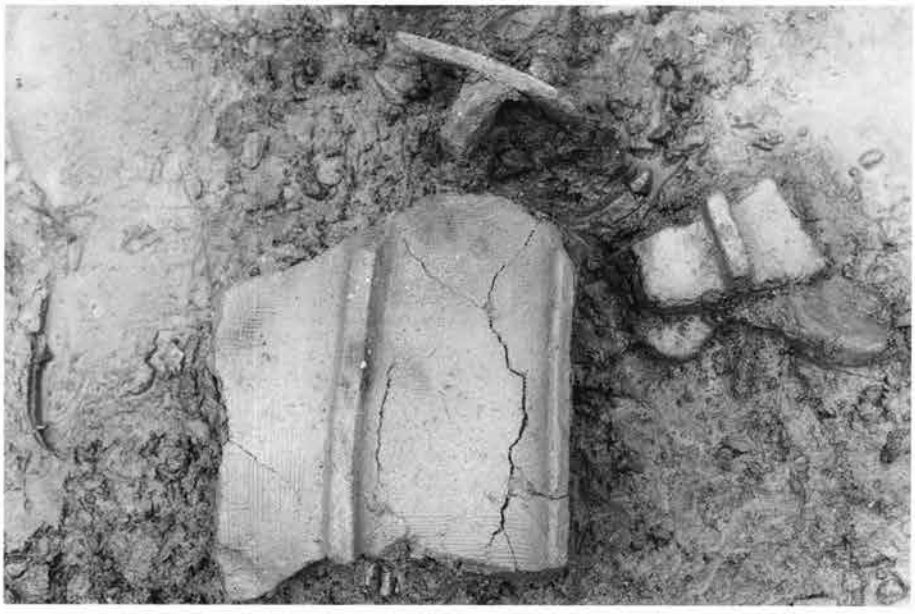
⑶Ｉ－２トレンチ久我畷最上層
路面跡（北東から）

図版第10　下植野南遺跡（土辺（ＳＴＢ－１～５）地点）



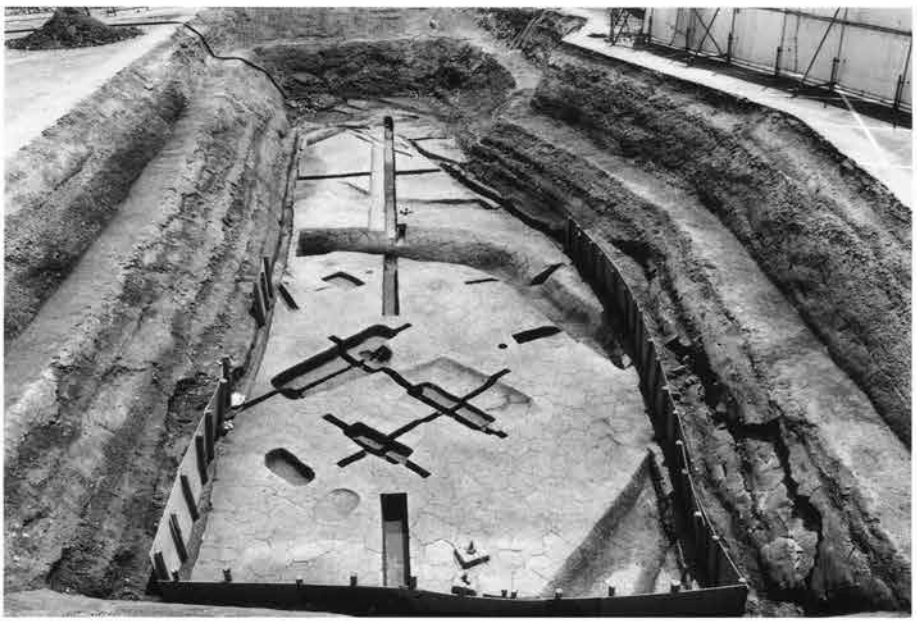
⑴土辺２トレンチ全景（西から）

⑵土辺４トレンチ全景（西から）

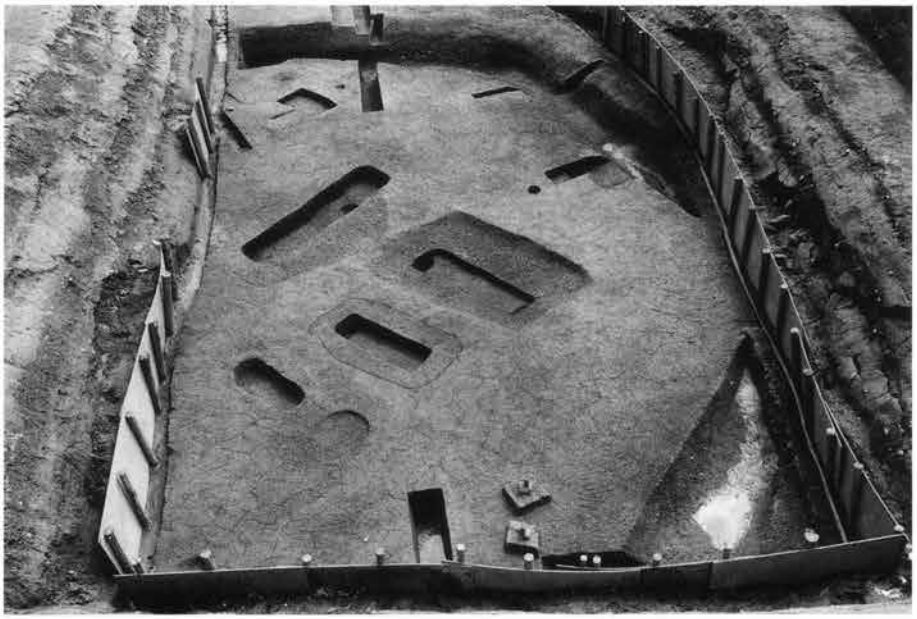


⑶土辺４トレンチＳＤ01埴輪出土状況（北から）

図版第11　下植野南遺跡（土辺（ＳＴＢ－１～５）地点）



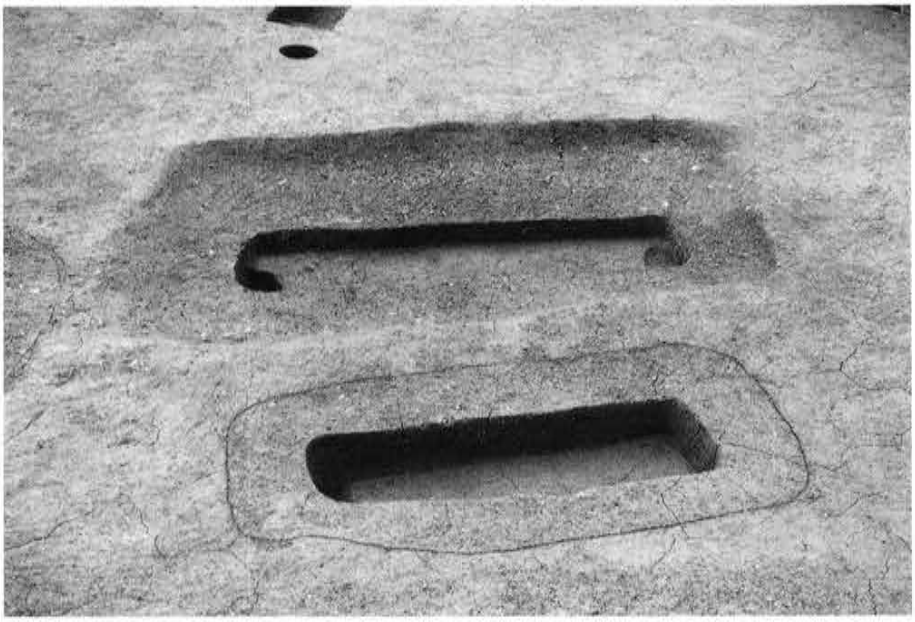
⑴ＳＴＢ３－１トレンチ全景
（北東から）



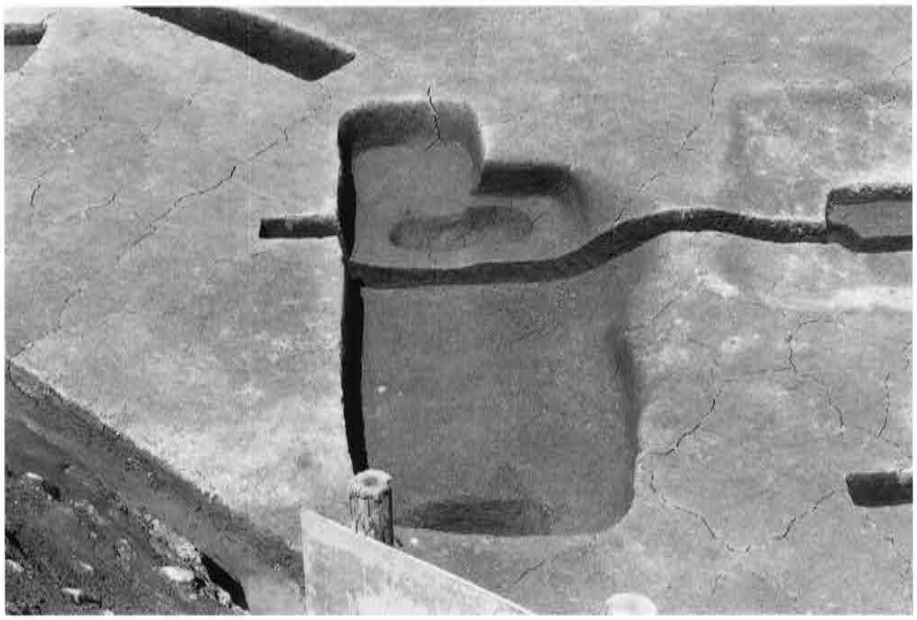
⑵ＳＴ07全景（北東から）

⑶ＳＴ07溝内土器出土状況
（東から）

図版第12　下植野南遺跡（土辺（ＳＴＢ－１～５）地点）



(1)ＳＴ07第１・３主体部完掘状況
（東から）



(2)ＳＴ07第４主体部完掘状況
（東から）

(3)土坑ＳＫ06土器出土状況
（西から）

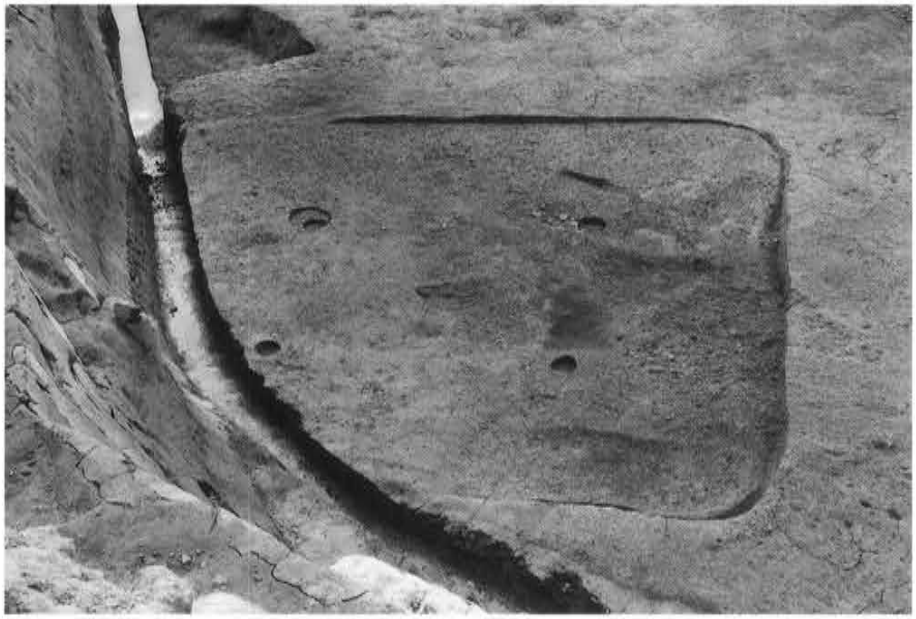
図版第13　下植野南遺跡（五条本地点）

⑴全景（東から）

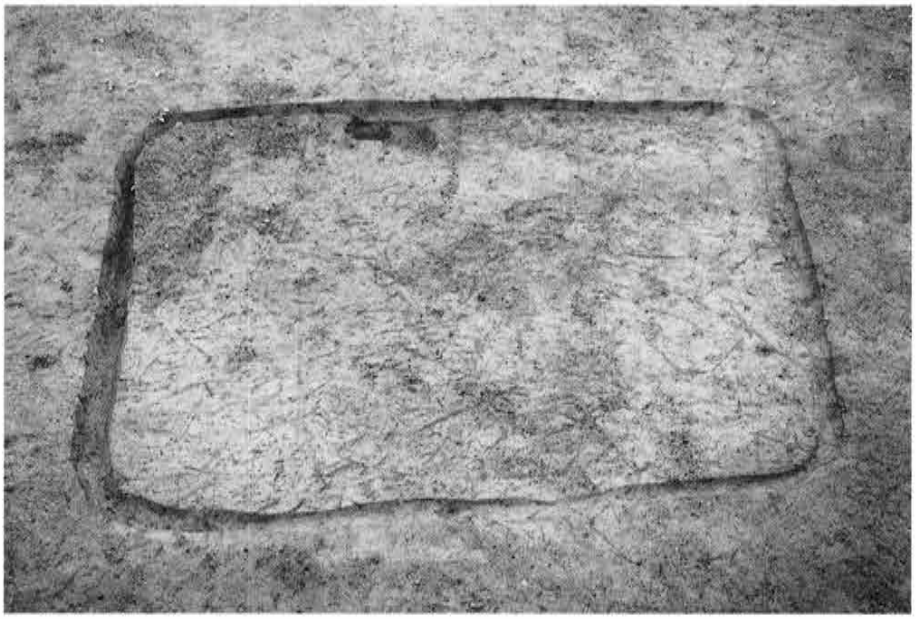
⑵全景（南から）

⑶上層遺構全景（南から）

図版第14　下植野南遺跡（五条本地点）



(1)竪穴式住居跡ＳＨ05検出状況（北から）

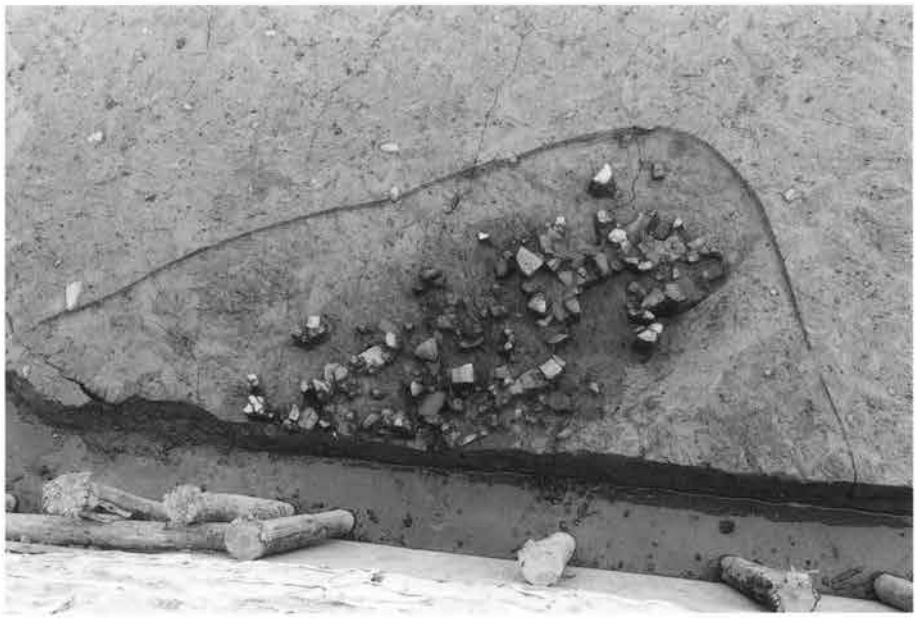


(2)竪穴式住居跡ＳＨ06検出状況（西から）

(3)竪穴式住居跡ＳＨ06土器出土状況（西から）

図版第15　下植野南遺跡（五条本地点）

(1)竪穴式住居跡ＳＨ09検出状況
（南西から）



(2)竪穴式住居跡ＳＨ10検出状況
（南から）

(3)井戸跡ＳＥ11断面（部分）
（北から）

図版第16　下植野南遺跡

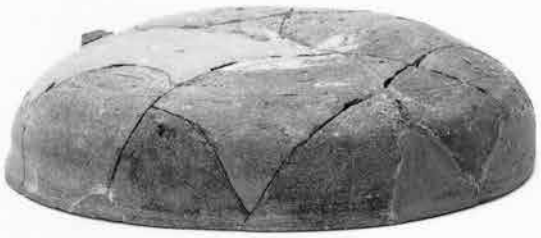
1

10

4

6

7



8

9

出土遺物

図版第17　市田斉当坊遺跡

⑴調査区空中撮影（弥生時代遺構掘削状況）

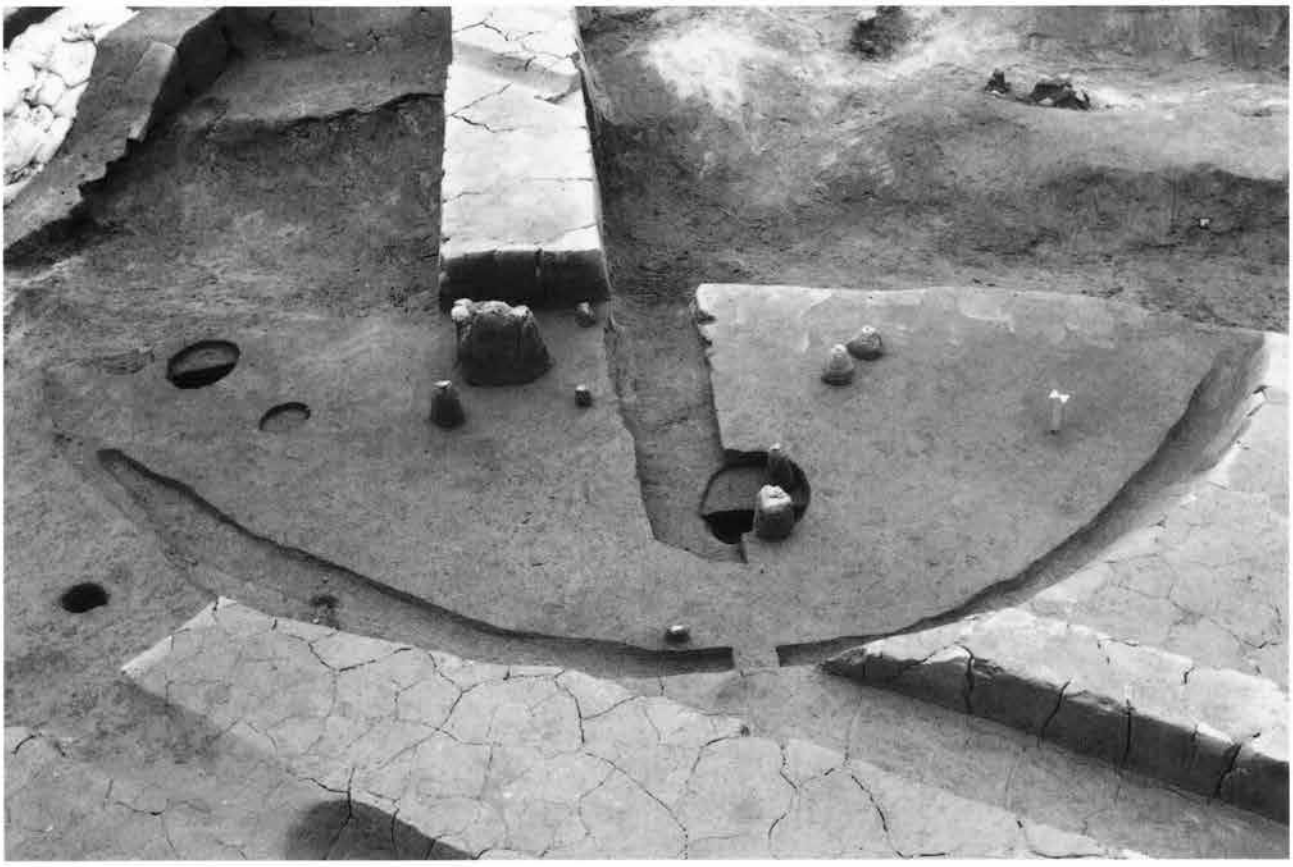
⑵調査風景（北西から）

⑴弥生時代竪穴式住居跡ＳＨ74（南東から）

⑵竪穴式住居跡ＳＨ74炭化木出土状況（南東から）

図版第19　市田斉当坊遺跡

⑴竪穴式住居跡ＳＨ74床面検出状況（北東から）

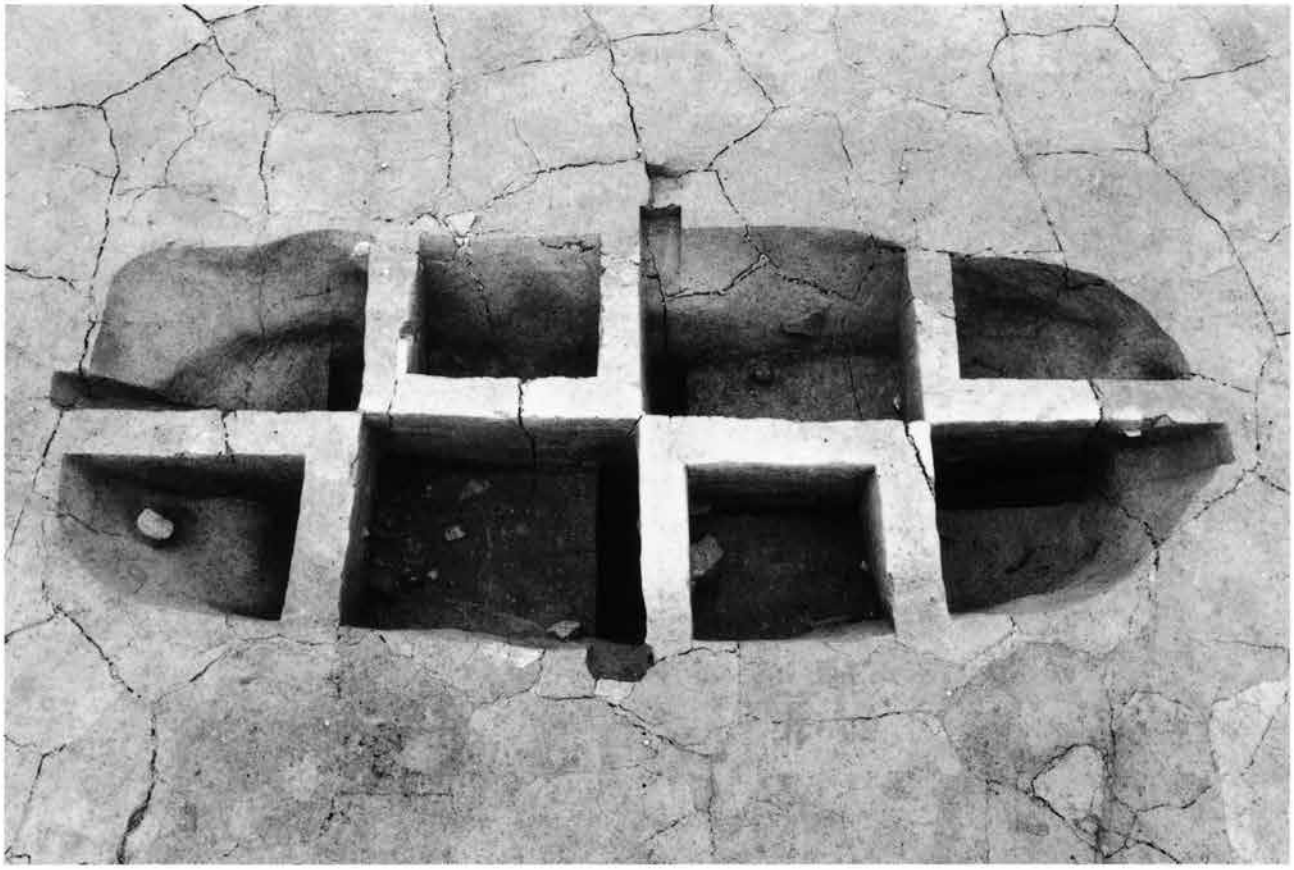


⑵竪穴式住居跡ＳＨ98掘削状況（北から）

⑴土坑ＳＫ50掘削状況（北東から）

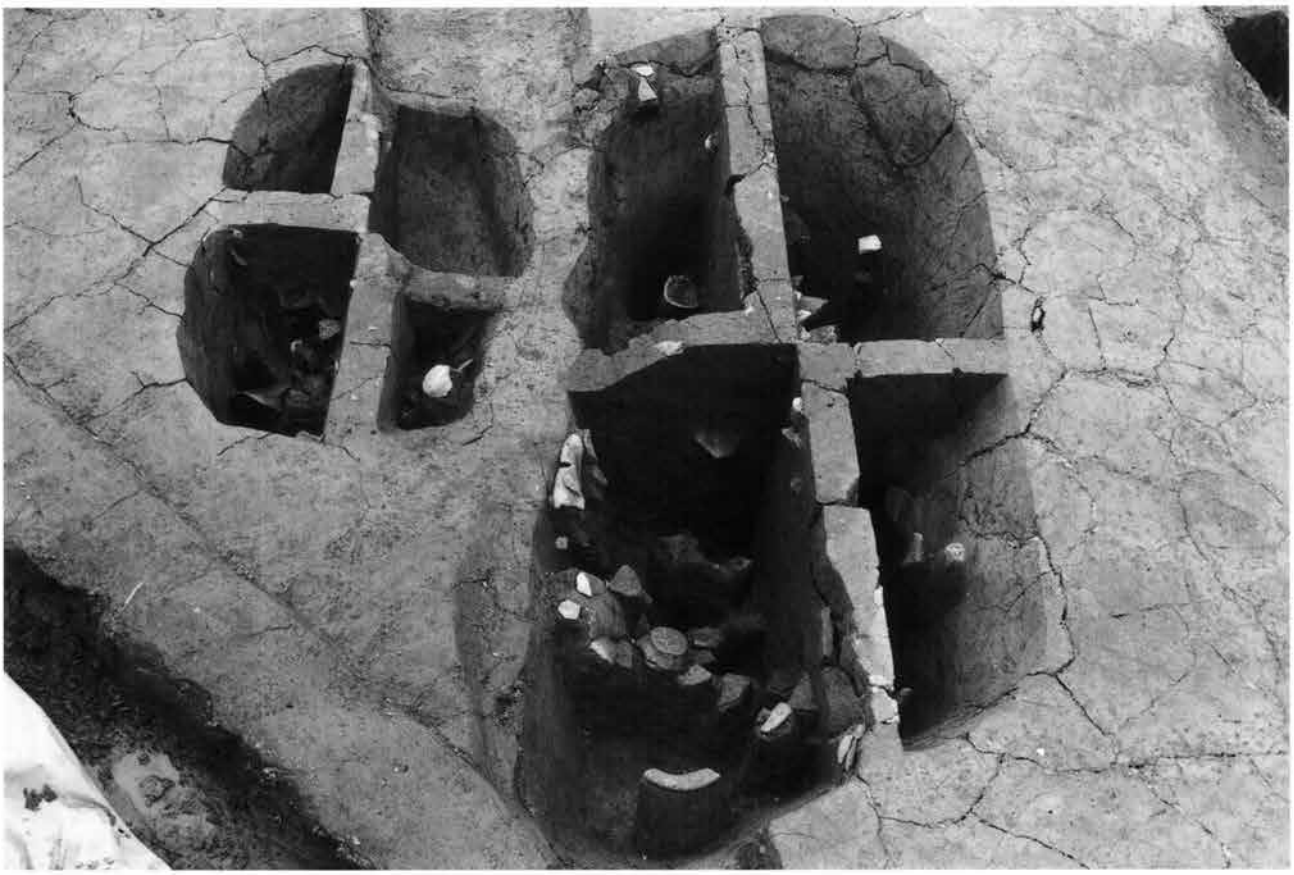
⑵土坑ＳＫ69土器出土状況（北から）

図版第21　市田斉当坊遺跡

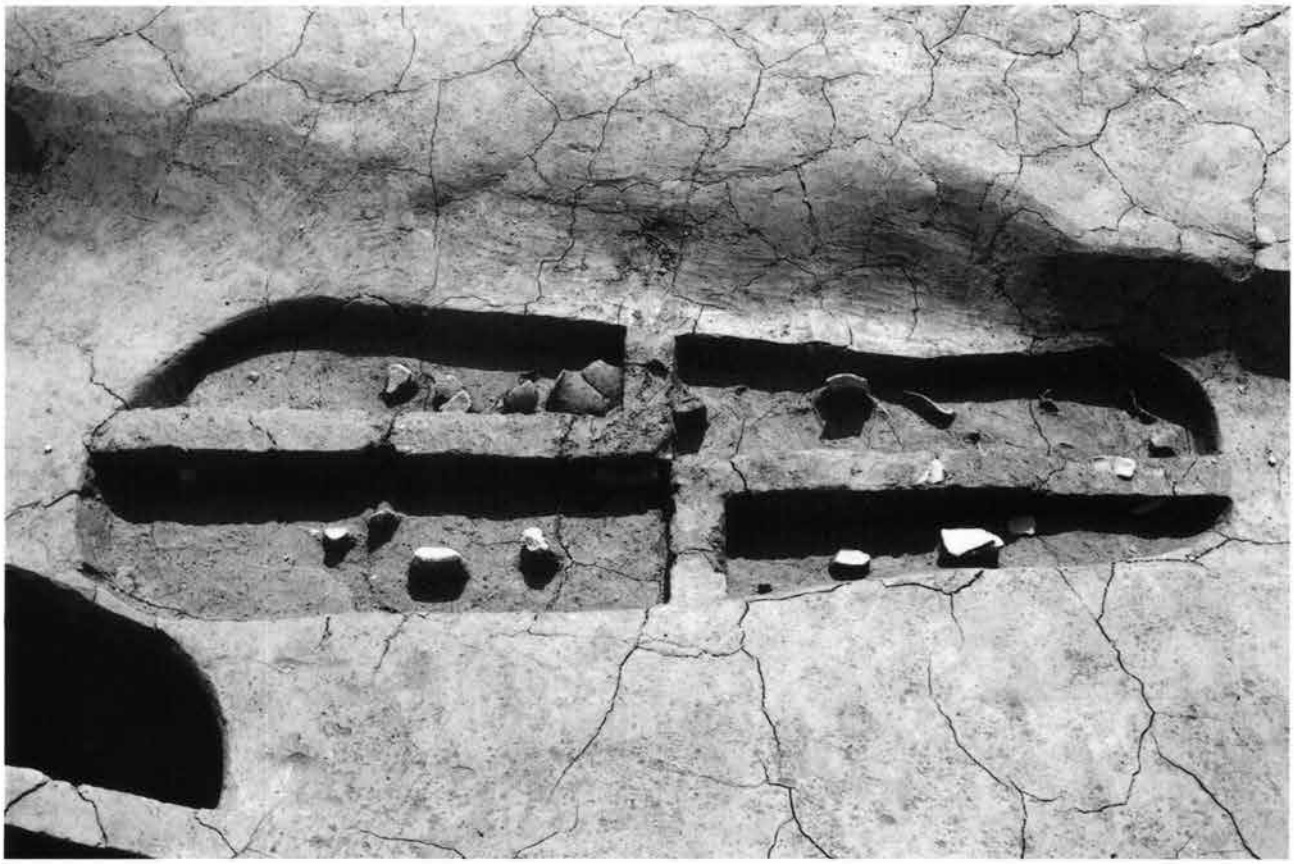


(1)舟底状土坑ＳＫ75掘削状況（西から）

(2)舟底状土坑ＳＫ75完掘状況（南西から）



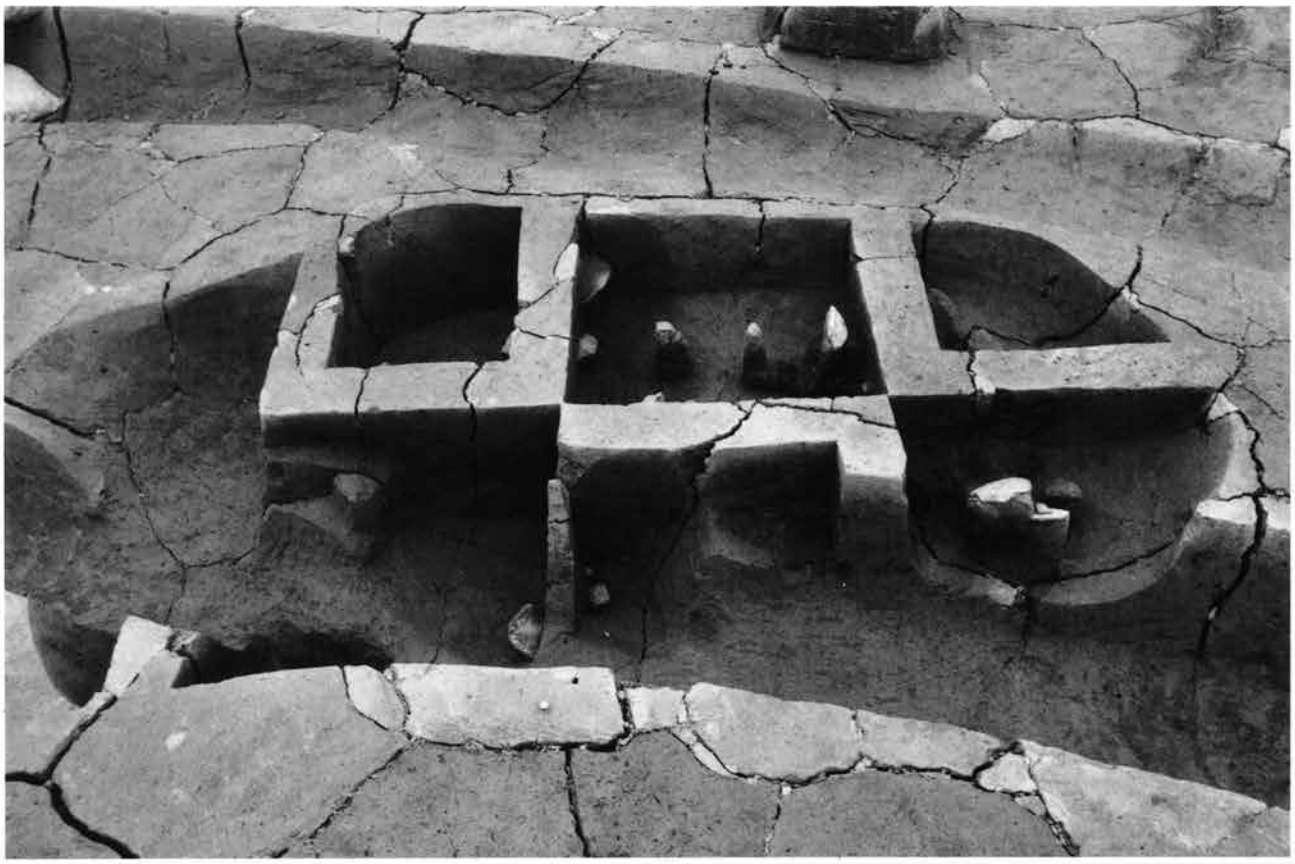
⑴土坑ＳＫ77・78掘削状況（南から）



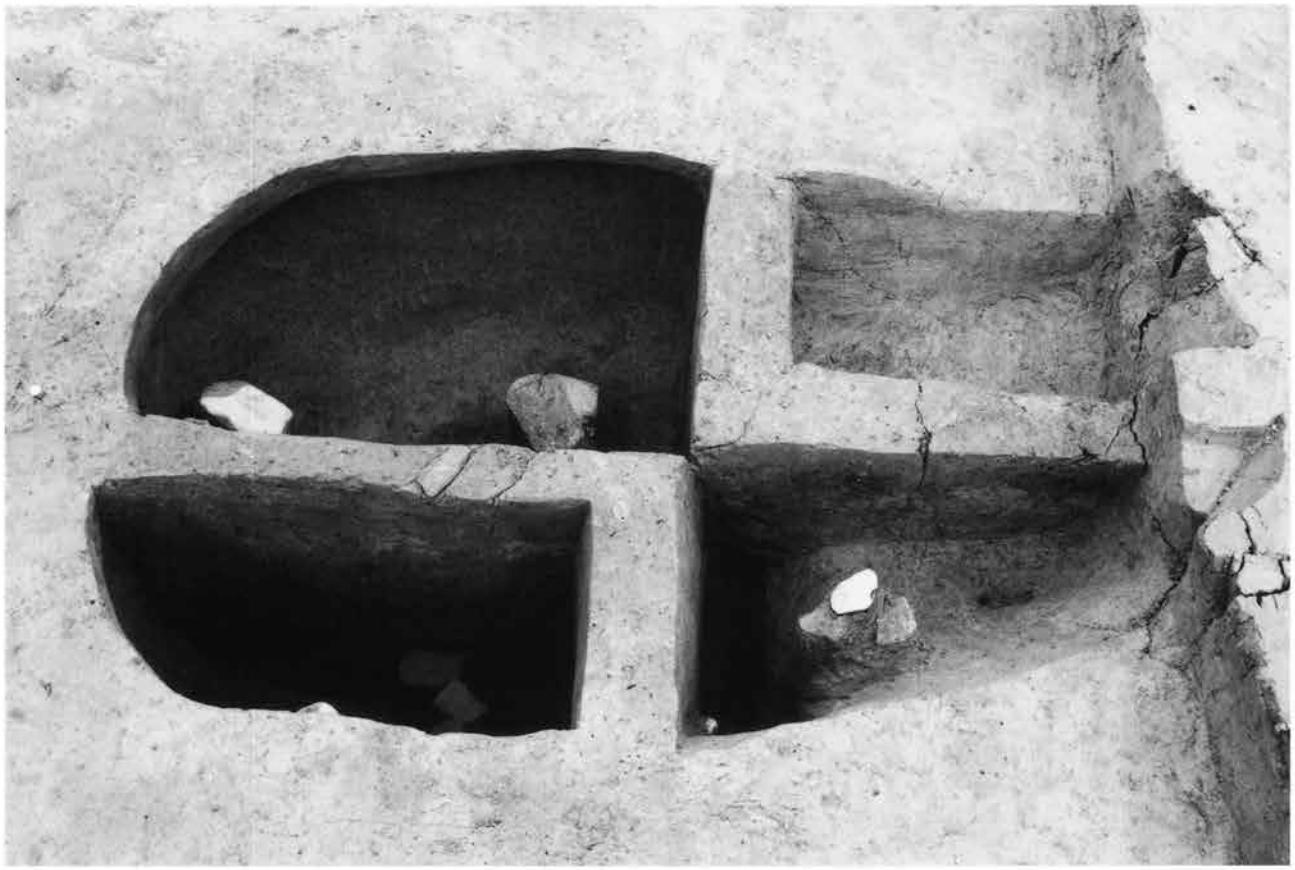
⑵土坑ＳＫ79土器出土状況（東から）

図版第23　市田斉当坊遺跡

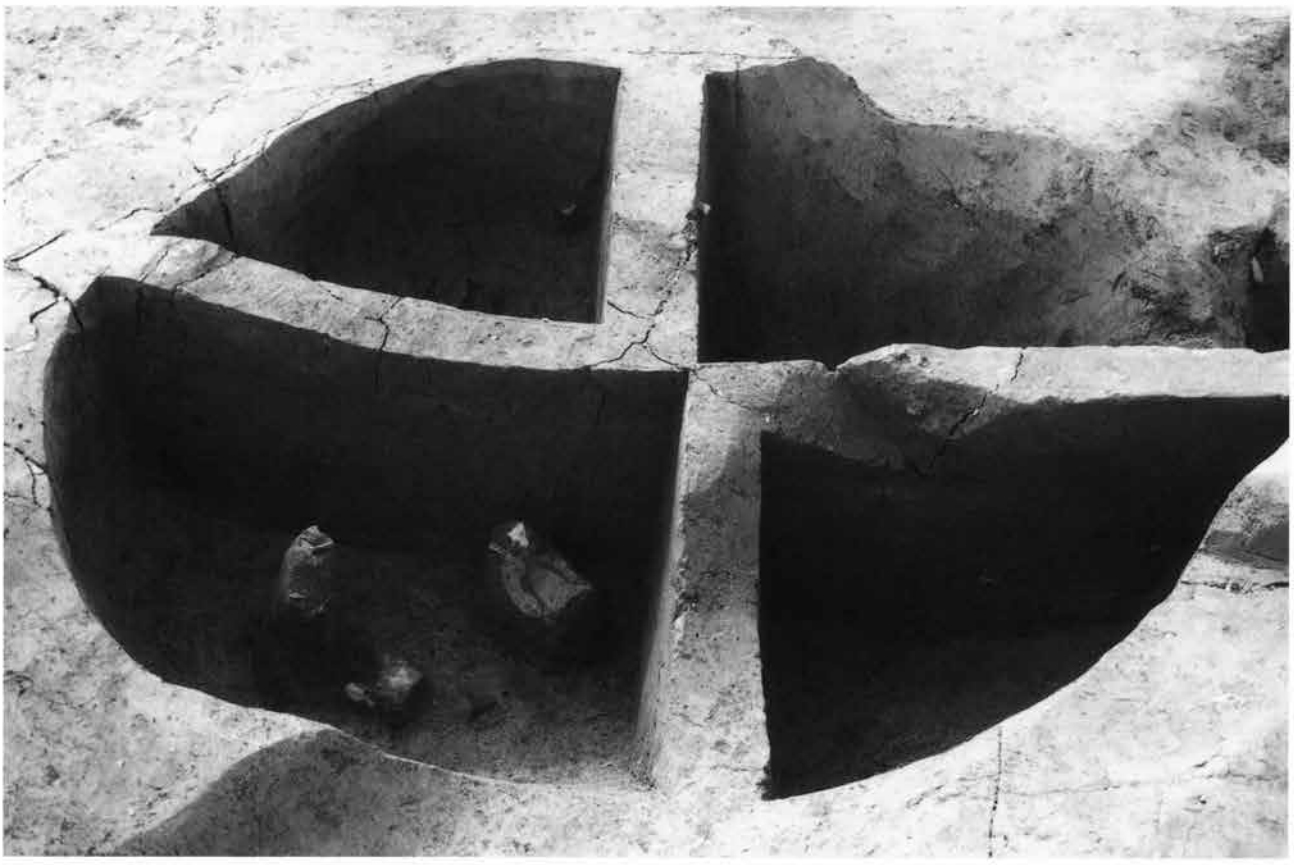
⑴土坑ＳＫ105・106掘削状況（東から）



⑵土坑ＳＫ106土器出土状況（南から）



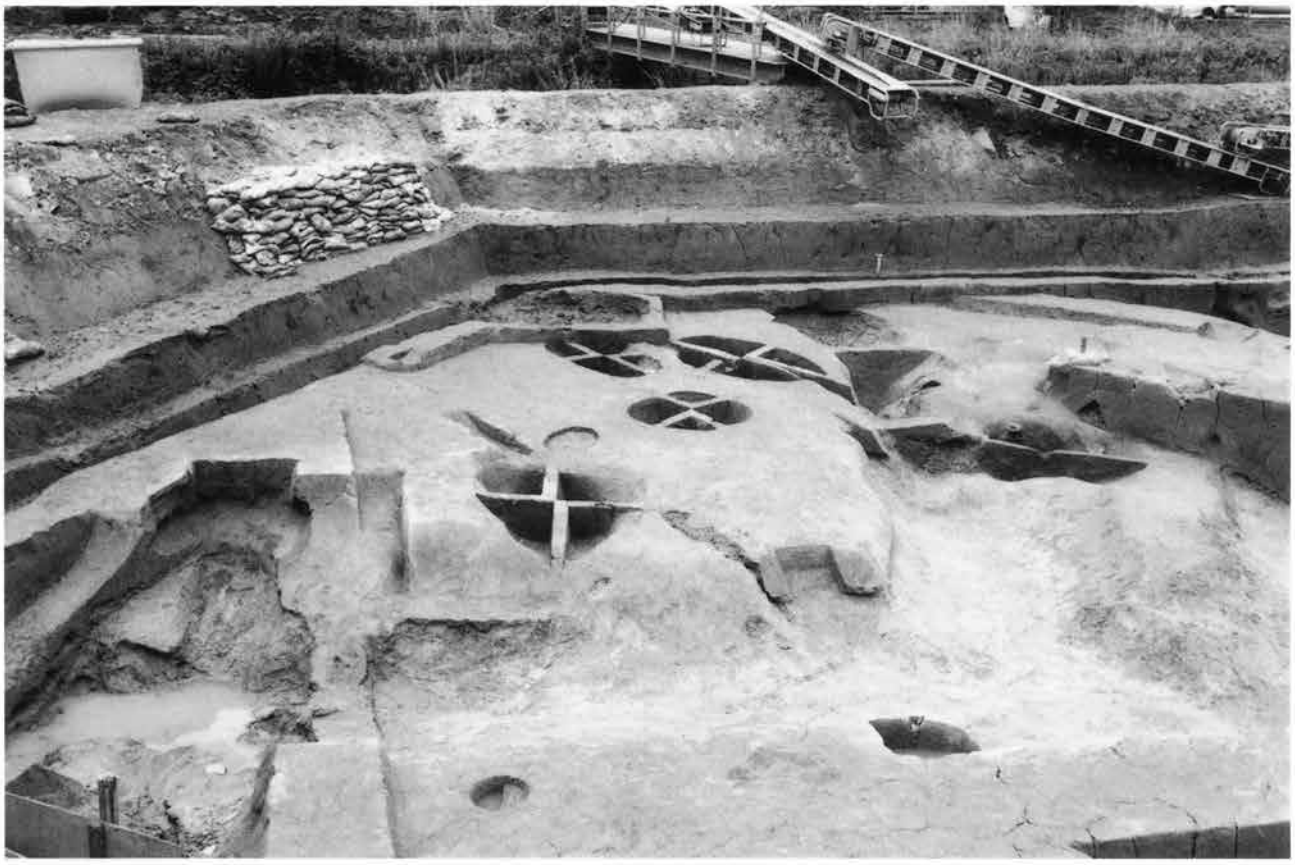
⑴土坑ＳＫ113掘削状況（西から）



⑵土坑ＳＫ114掘削状況（南から）

図版第25　市田斉当坊遺跡

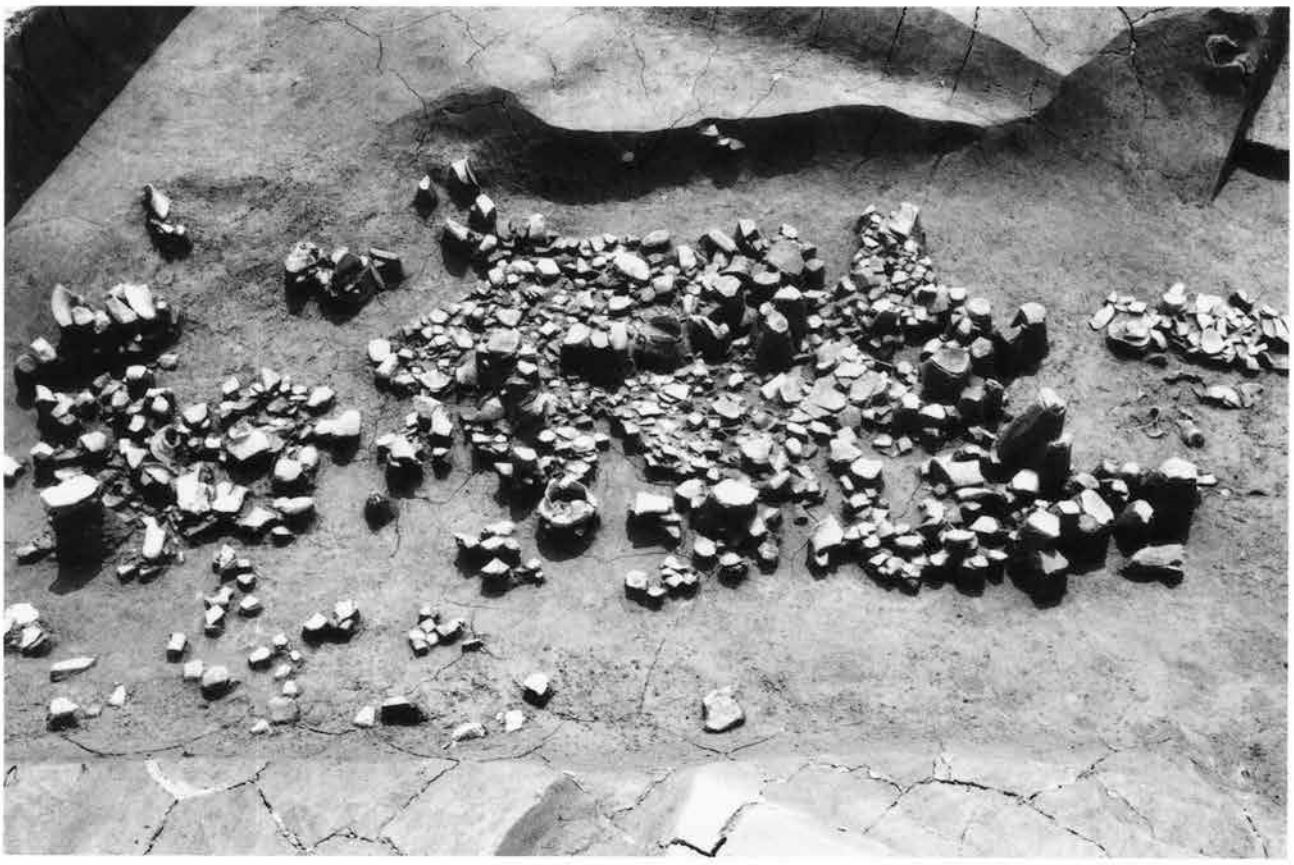
⑴土坑ＳＫ117土器出土状況（南から）



⑵方形周溝墓ＳＴ49、土坑ＳＫ60・100～102（北東から）

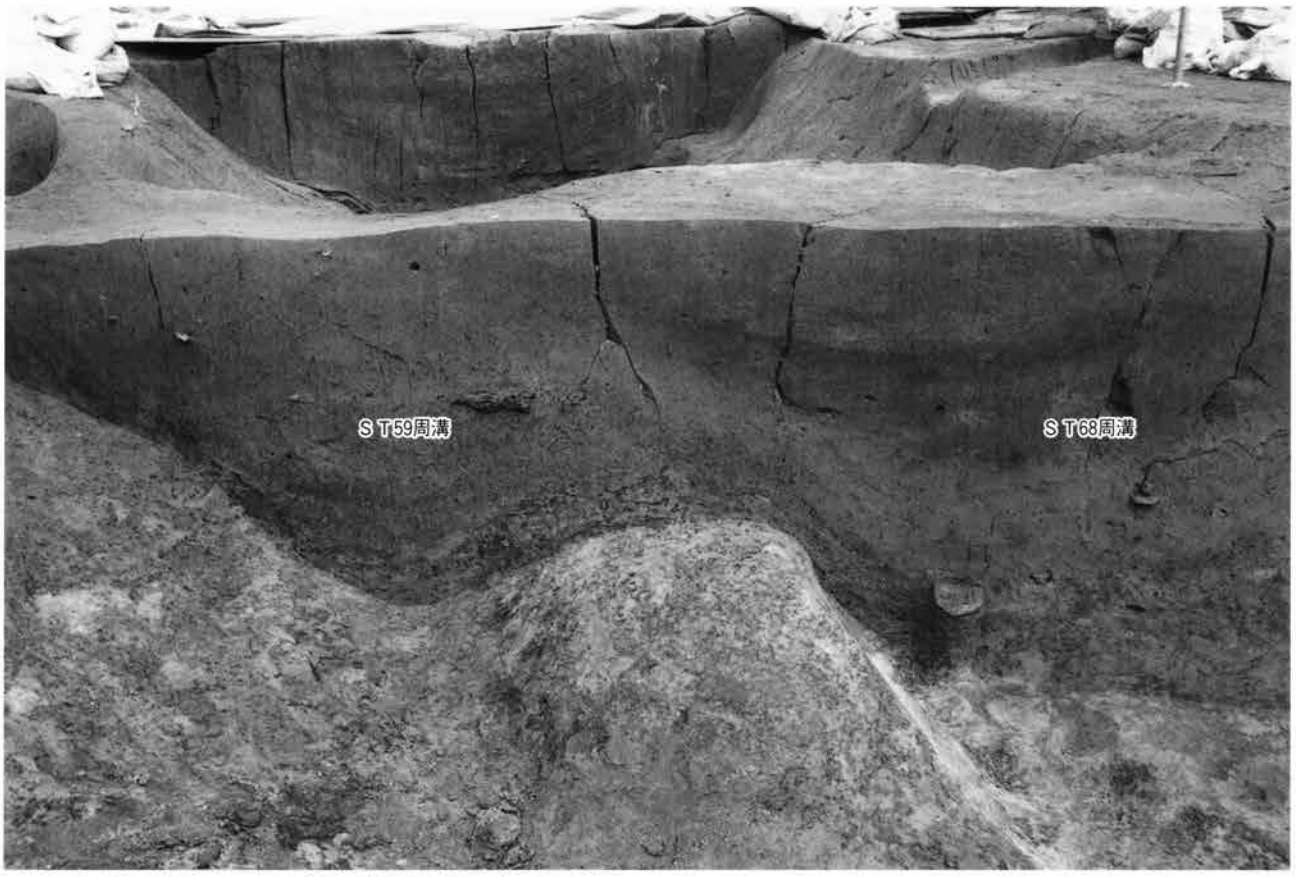
図版第26　市田斉当坊遺跡

⑴方形周溝墓ＳＴ68掘削状況（北東から）

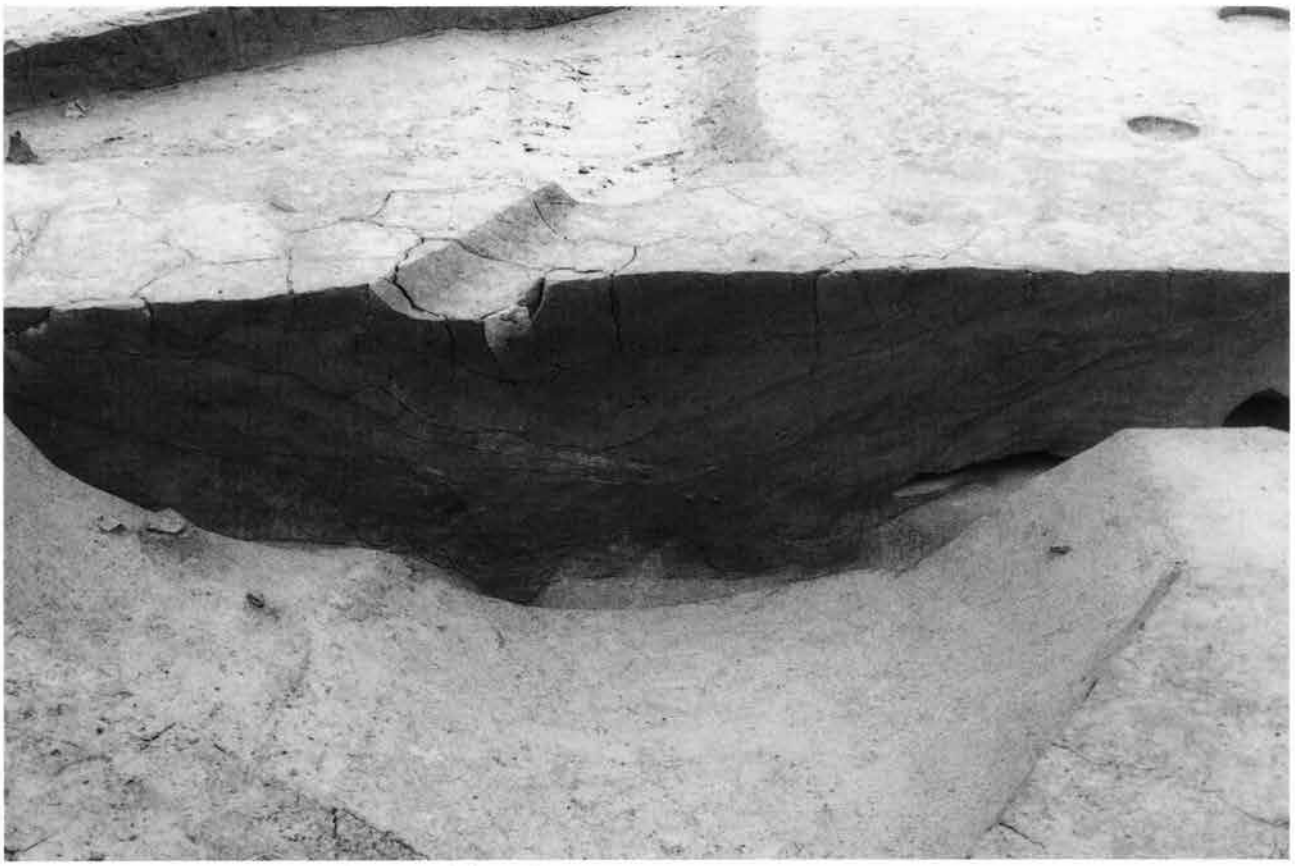


⑵方形周溝墓ＳＴ68南西側周溝遺物出土状況（北東から）

図版第27　市田斉当坊遺跡



⑴方形周溝墓ＳＴ68北東側周溝断面（北西から）



⑵方形周溝墓ＳＴ58西側周溝断面（南東から）

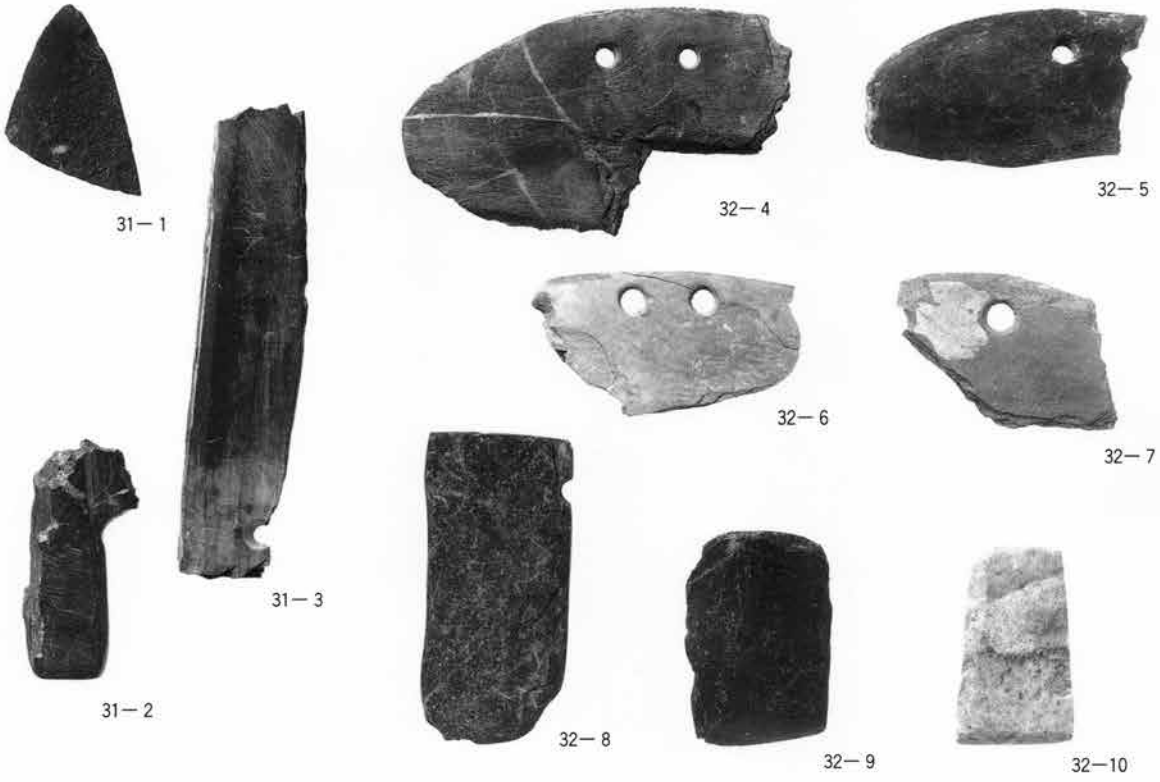
図版第28　市田斉当坊遺跡

⑴方形周溝墓ＳＴ73掘削状況（北西から）

⑵方形周溝墓ＳＴ97掘削状況（南西から）

図版第29　市田斉当坊遺跡

(1)現地説明会風景（南西から）



(2)出土石器 1

図版第30　市田斉当坊遺跡

32－1

32－2

32－3

33－1

33－2

33－3

(1)出土石器 2

4

2

6

1

7

5

3

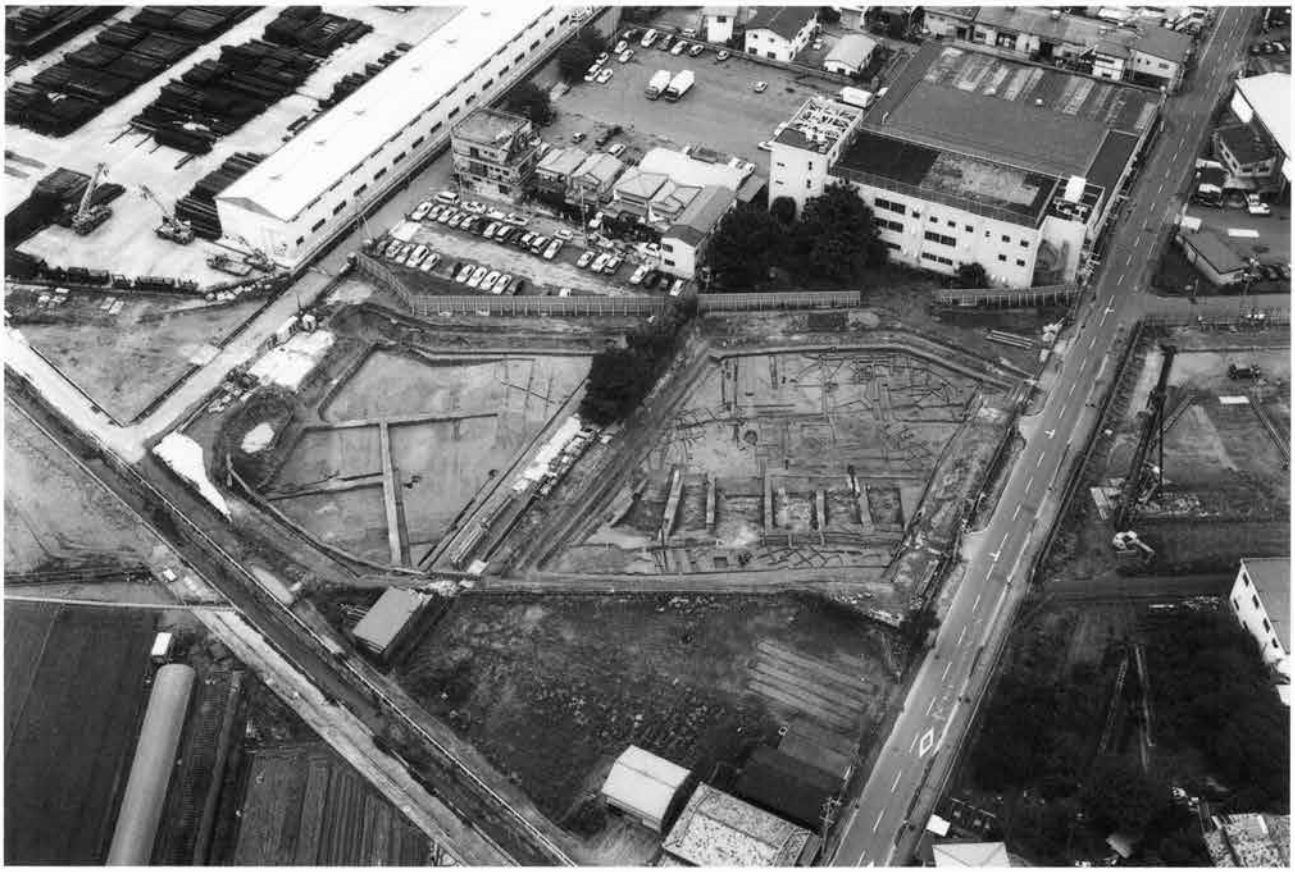
8

9

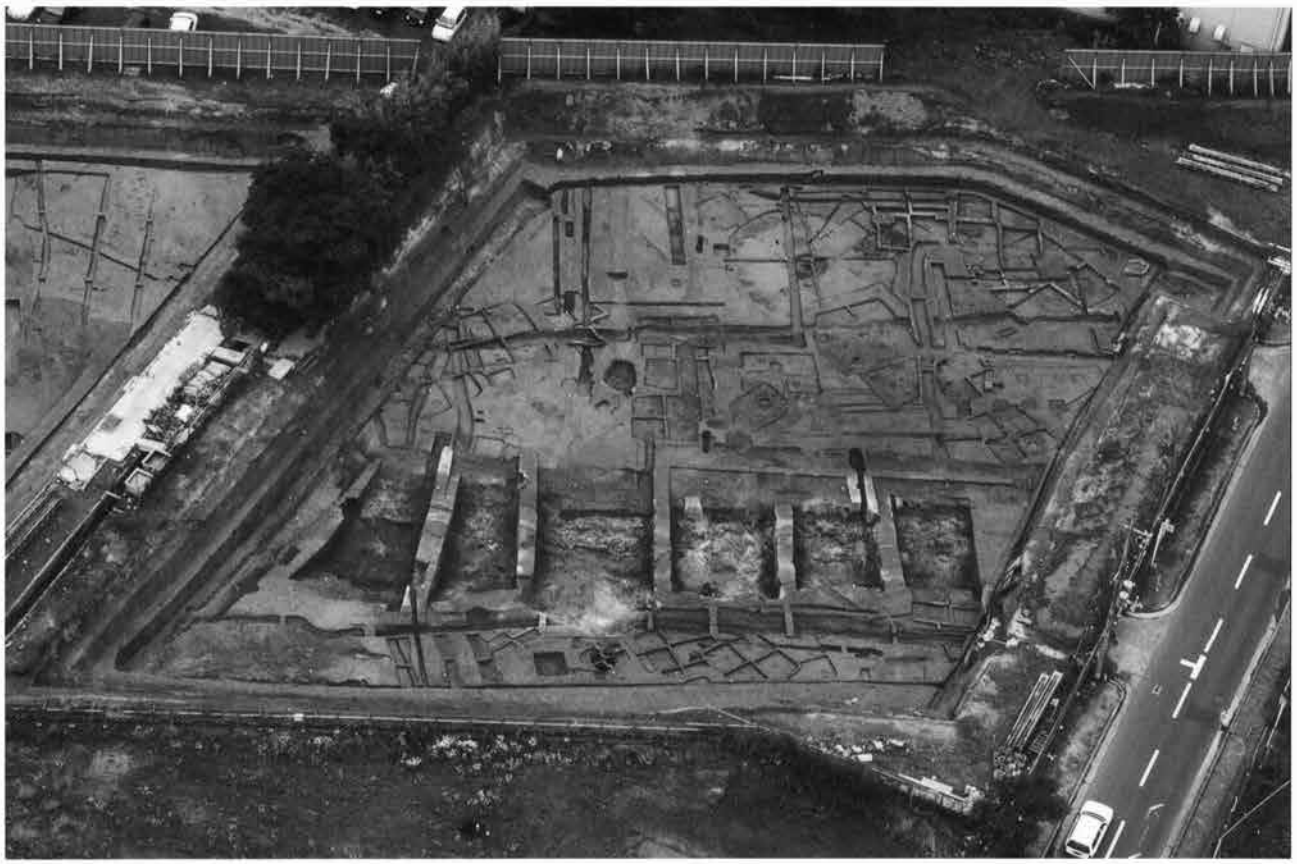
10

(2)玉関連遺物（第34図）

図版第31　佐山遺跡



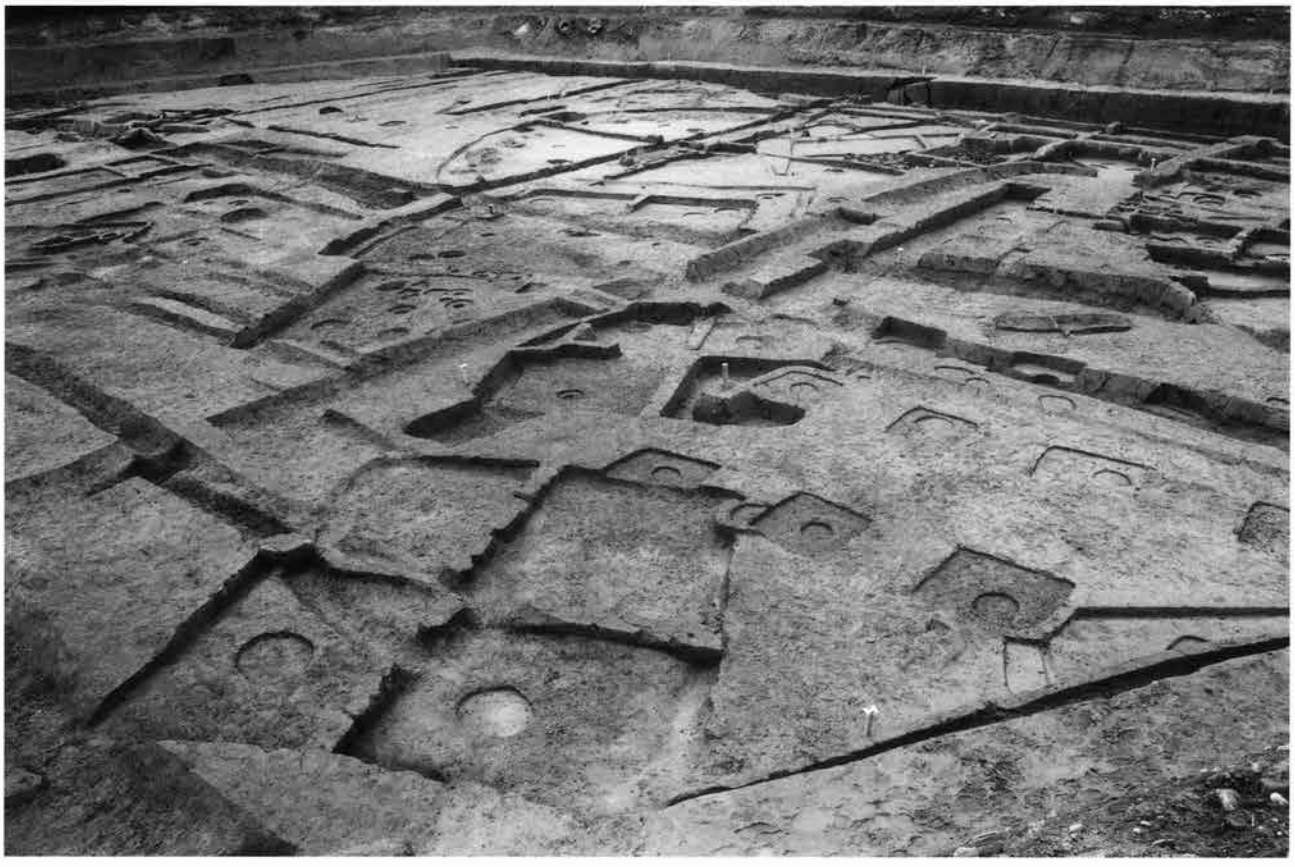
(1)調査地遠景（東から）



(2)Ｂ－１地区全景〈弥生・古墳時代遺構面〉(上が東)

図版第32　佐山遺跡

⑴Ｂ－１地区南部遺構検出状況（南西から）

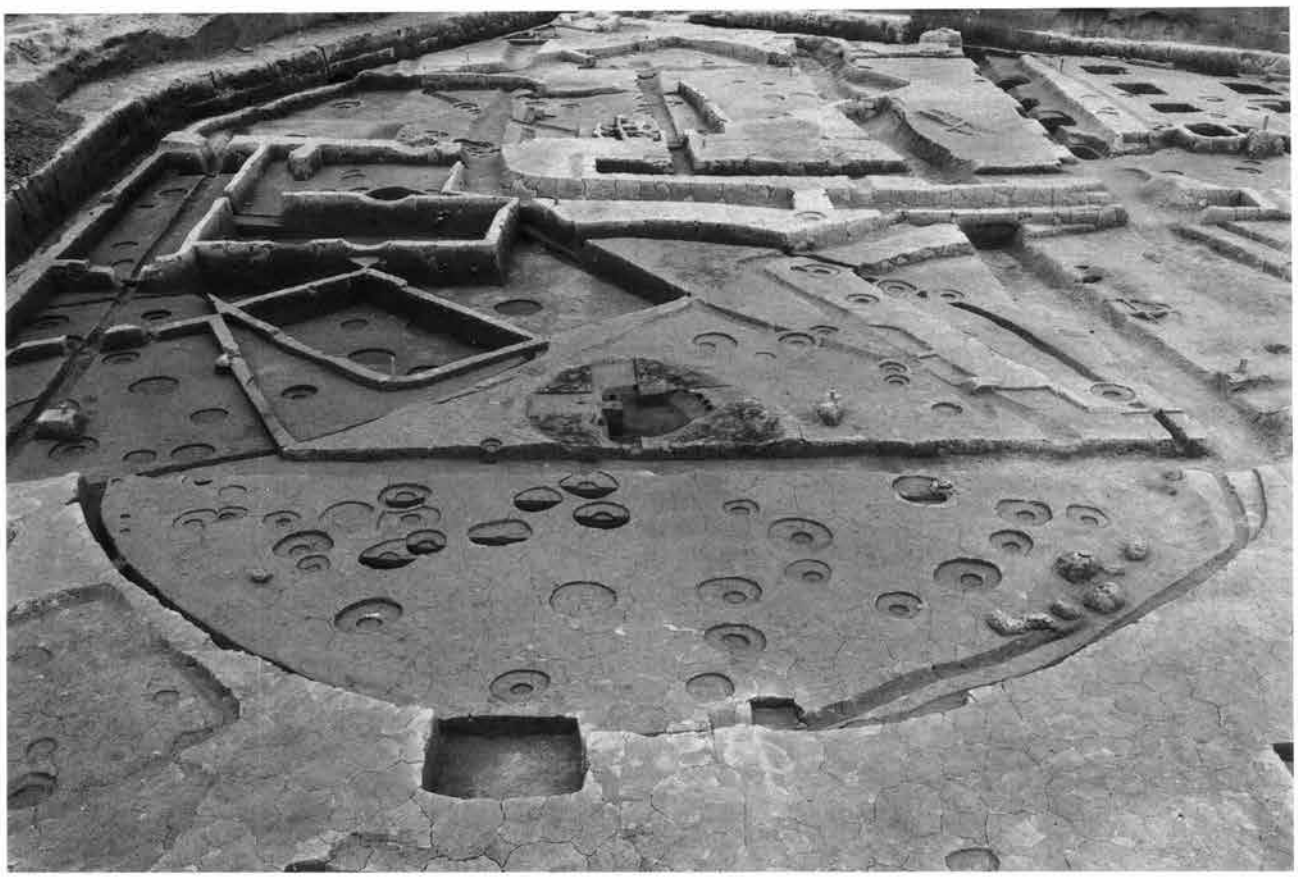


⑵Ｂ－１地区北部遺構検出状況（北東から）

図版第33　佐山遺跡

(1)B－1地区東部遺構検出状況（南東から）

(2)B－1地区北西部遺構検出状況（南西から）

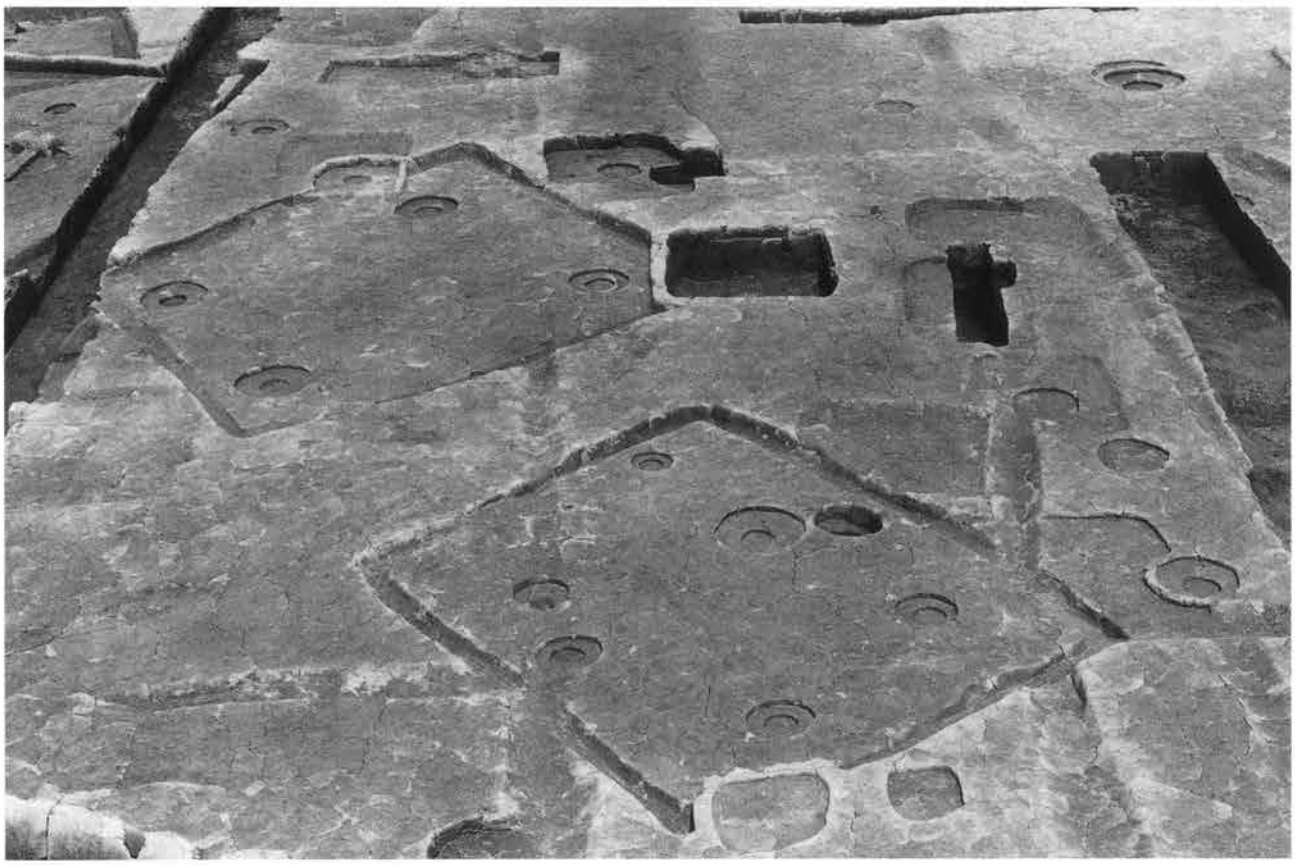


(1)B－1地区竪穴式住居跡SH251全景（南から）

(2)B－1地区竪穴式住居跡SH251中央土坑（北から）

図版第35　佐山遺跡

⑴Ｂ－１地区竪穴式住居跡ＳＨ227検出状況（南から）



⑵Ｂ－１地区竪穴式住居跡ＳＨ227・273全景（西から）

図版第36　佐山遺跡

(1)B－1地区竪穴式住居跡SH415・270・273検出状況（西から）

(2)B－1地区井戸SE361完掘状況（南東から）

図版第37　佐山遺跡

(1)B－1地区掘立柱建物跡SB356全景（北から）

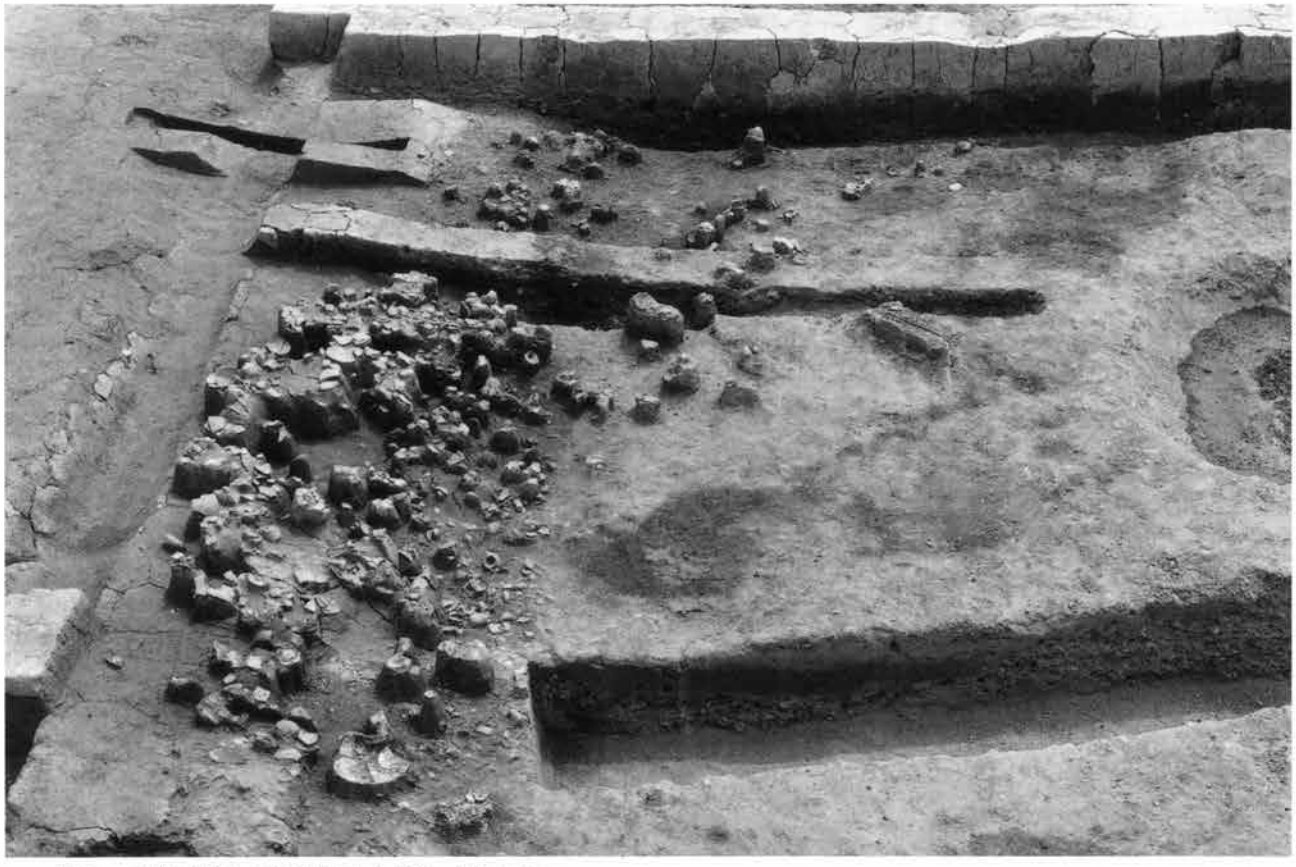
(2)B－1地区土坑SK228検出状況（西から）

図版第38　佐山遺跡

⑴Ｂ－２地区全景〈弥生・古墳時代遺構面〉（東から）

⑵Ｂ－２地区溝ＳＤ27検出状況（西から）

(1)B－2地区溝SD27土器出土状況（南東から）



(2)B－2地区溝SD27土器出土状況（西から）

図版第40　佐山遺跡

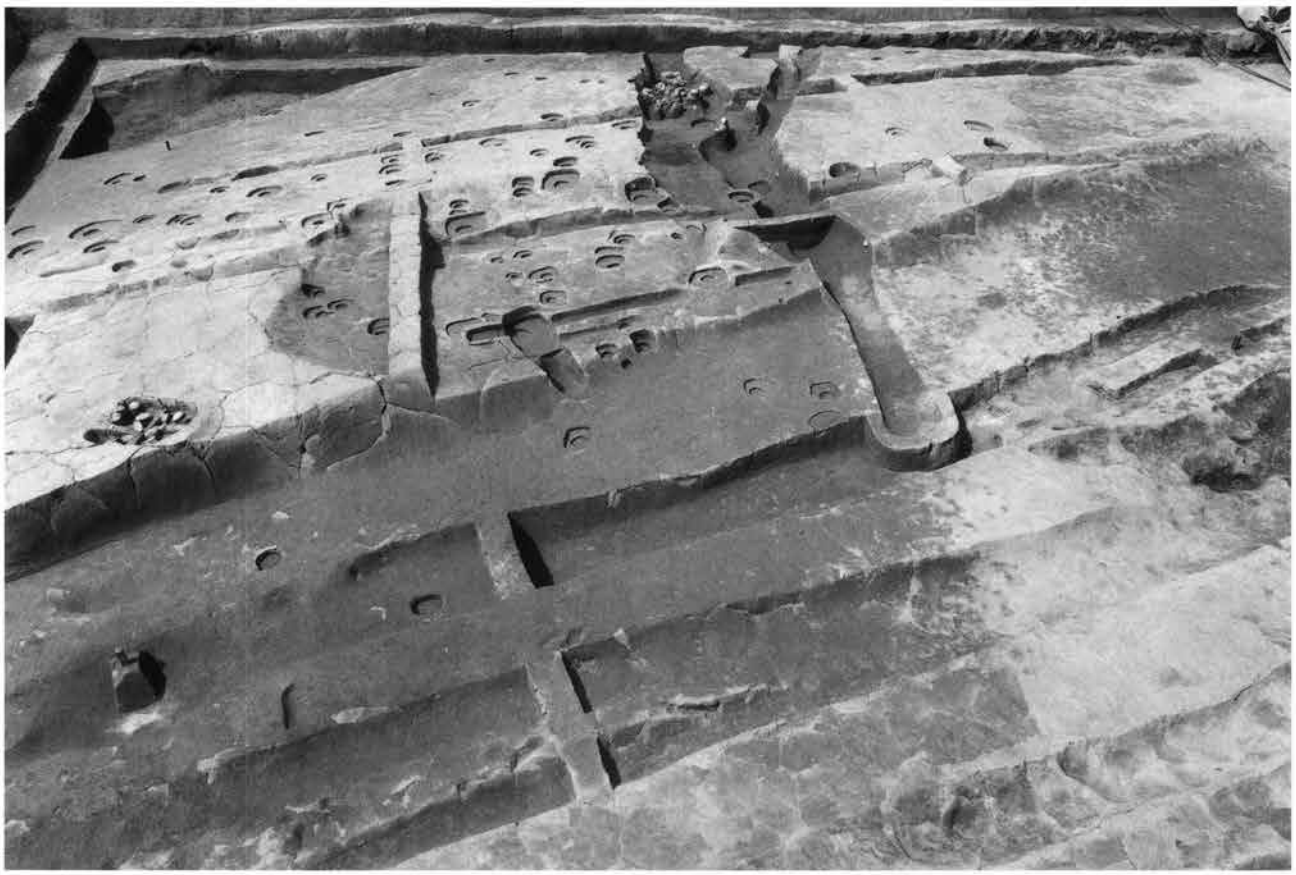
⑴Ｂ－２地区竪穴式住居跡ＳＨ1167検出状況（北西から）

⑵Ｂ－２地区井戸ＳＥ1166検出状況（東から）

図版第41　佐山遺跡

(1)B－2地区土壙SK1179検出状況（南から）

(2)B－2地区土壙SK1190検出状況（南から）



(1)Ｂ－２地区北西部遺構検出状況（南から）

(2)Ｂ－２地区溝ＳＤ1053検出状況（北から）

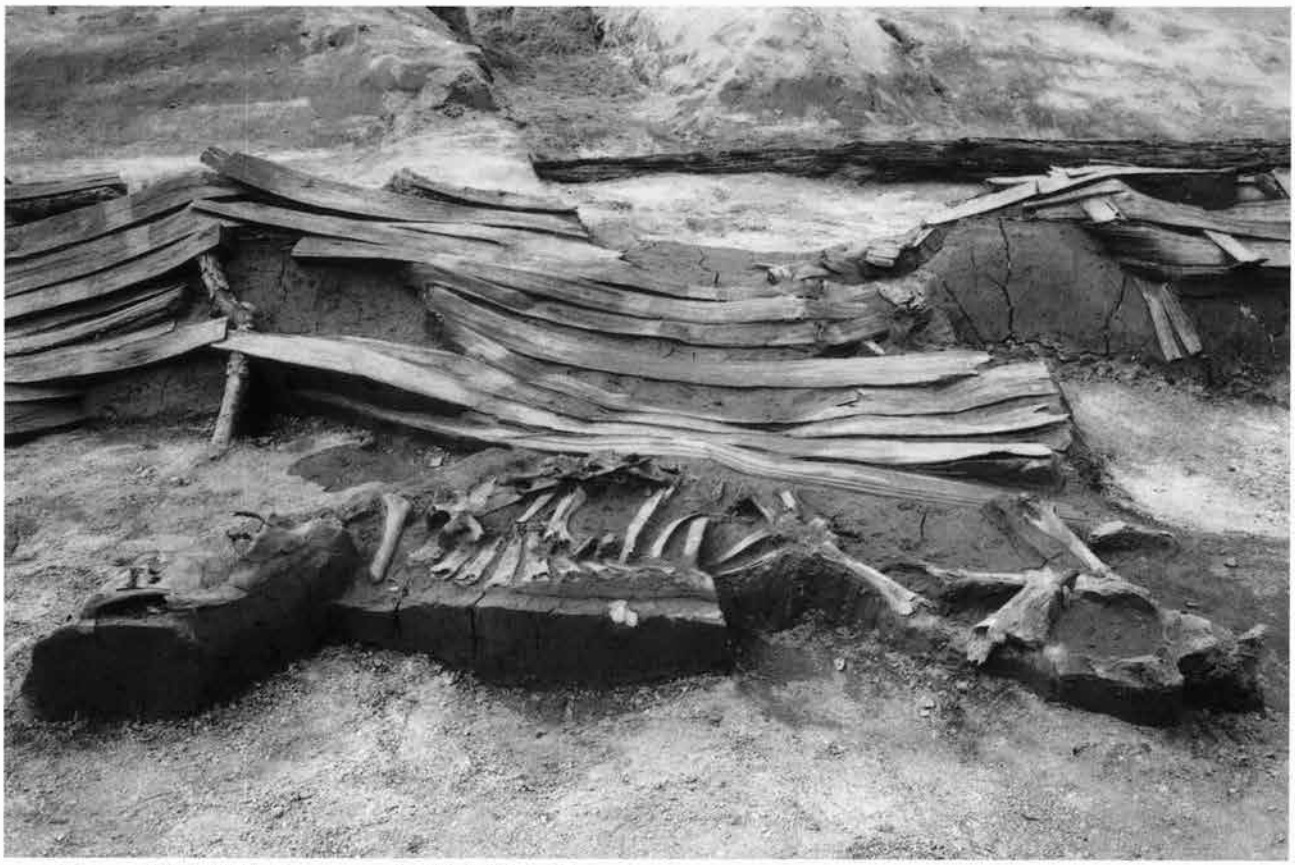
図版第43　佐山遺跡

⑴Ｂ－２地区濠ＳＤ５（ＳＸ1100周辺）検出状況（西から）

⑵Ｂ－２地区濠ＳＤ５土層断面（東から）

図版第44　佐山遺跡

⑴Ｂ－２地区護岸施設ＳＸ1100検出状況（南から）



⑵Ｂ－２地区護岸施設ＳＸ1100牛骨検出状況（南から）

図版第45　佐山遺跡

42－3

42－8

42－7

42－4

42－10

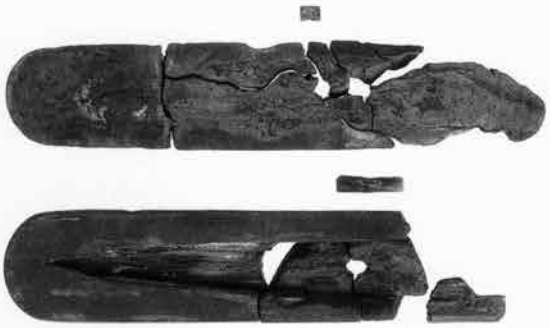
43－15

出土遺物(1)

図版第46　佐山遺跡

45－1

45－1



45－1

46－1

46－1

46－2

46－6

46－5

46－4

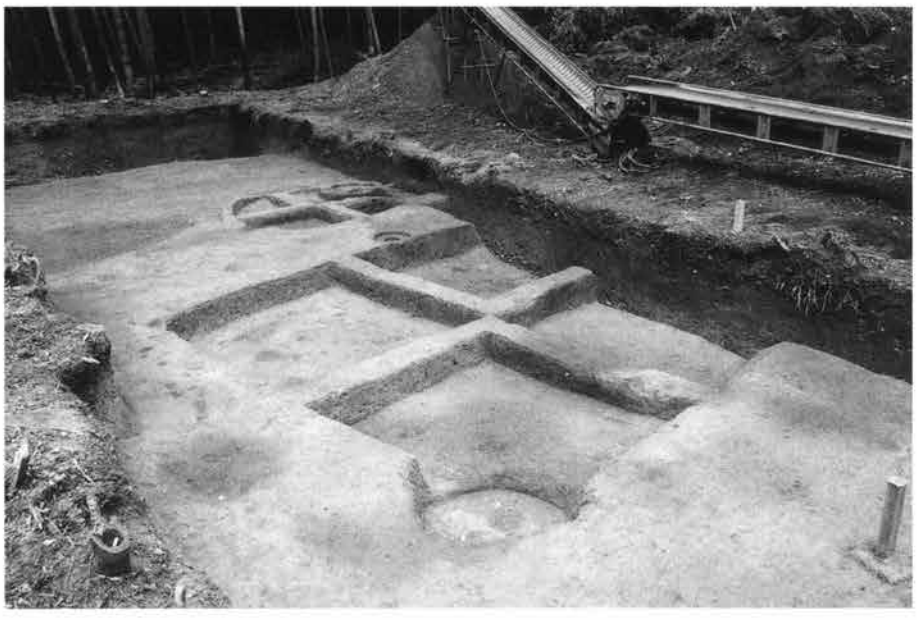
46－3

出土遺物(2)

図版第47　芝山遺跡

⑴ 1トレンチ調査前の状況
（西から）

⑵ 7トレンチ調査前の状況
（東から）

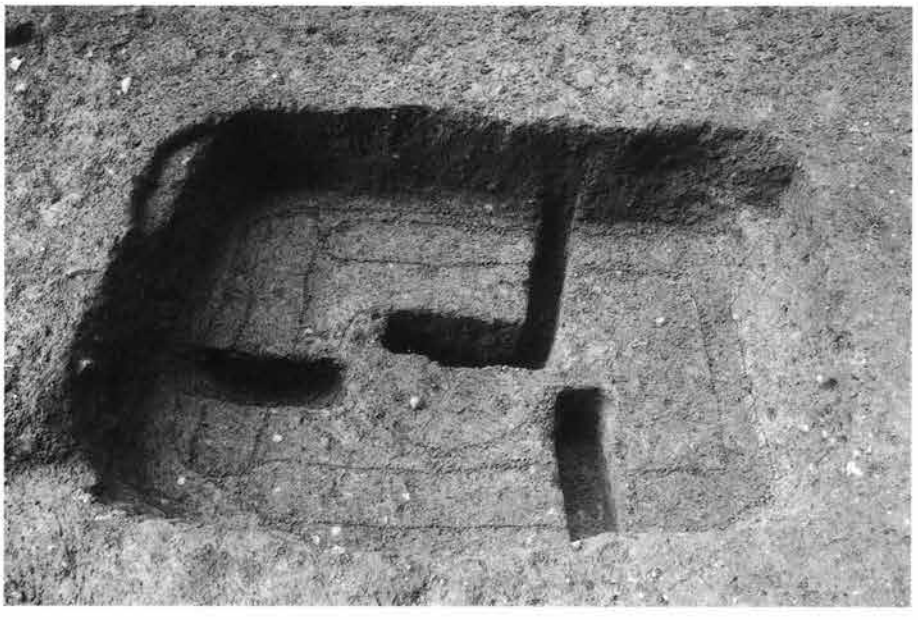


⑶ 1トレンチ竪穴式住居跡ＳＨ36
（西から）

図版第48　芝山遺跡

⑴１トレンチ竪穴式住居跡ＳＨ73
検出状況（北東から）

⑵１トレンチ土坑ＳＫ22遺物出土
状況（南から）



⑶２トレンチ木棺墓ＳＸ23検出
状況（西から）

図版第49　芝山遺跡

⑴２トレンチ木棺墓ＳＸ23完掘状況（南から）

⑵３トレンチ南半遺構検出状況（北西から）

⑶５トレンチ遺構検出状況（南東から）

⑴ 1トレンチ遺構検出状況（西から）

⑵ 4トレンチ遺構検出状況（北西から）

⑶ 8・9トレンチ試掘状況（西から）

図版第51　芝山遺跡

⑴５トレンチ布掘建物跡ＳＢ01検出状況（北から）

⑵５トレンチ竪穴式住居跡ＳＨ40検出状況（北から）

図版第52　芝山遺跡

(1) 6 トレンチ遺構検出状況
（東から）

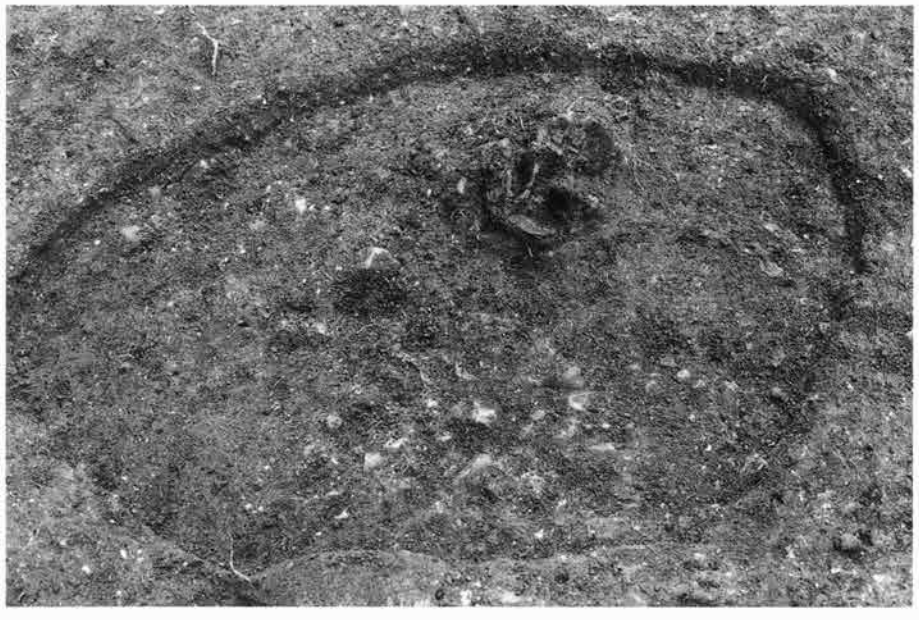
(2) 7 トレンチ遺構検出状況
（東から）

(3) 7 トレンチ周溝ＳＤ01土層断面
（南東から）

図版第53　芝山遺跡

(1) 7トレンチ周濠ＳＤ01遺物出土状況（北から）

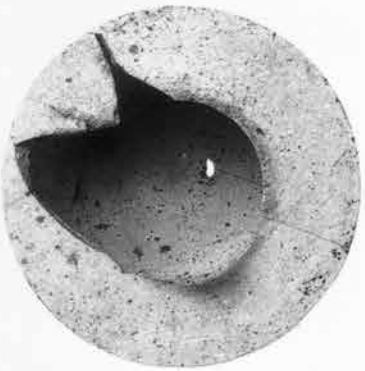
(2)10トレンチ遺構検出状況（東から）



(3)10トレンチ土坑ＳＫ01遺物出土状況（西から）

図版第54　芝山遺跡

2



12

3

25

26

27

28

34

36

35

41

38

39

出土遺物（番号は遺物実測図に対応する。）

図版第55　女谷・荒坂横穴群

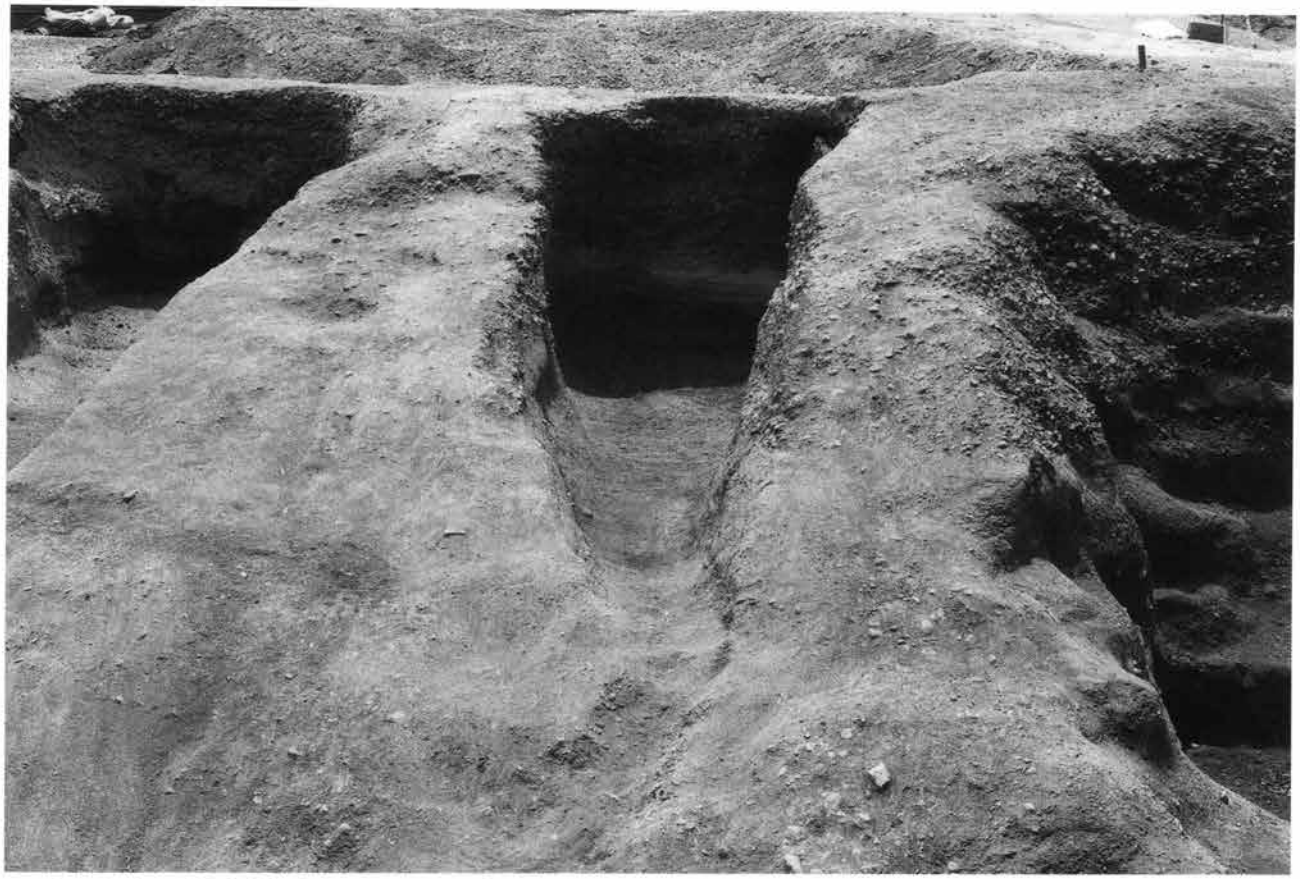
女谷・荒坂横穴群全景（上が北北東）

図版第56　女谷横穴群

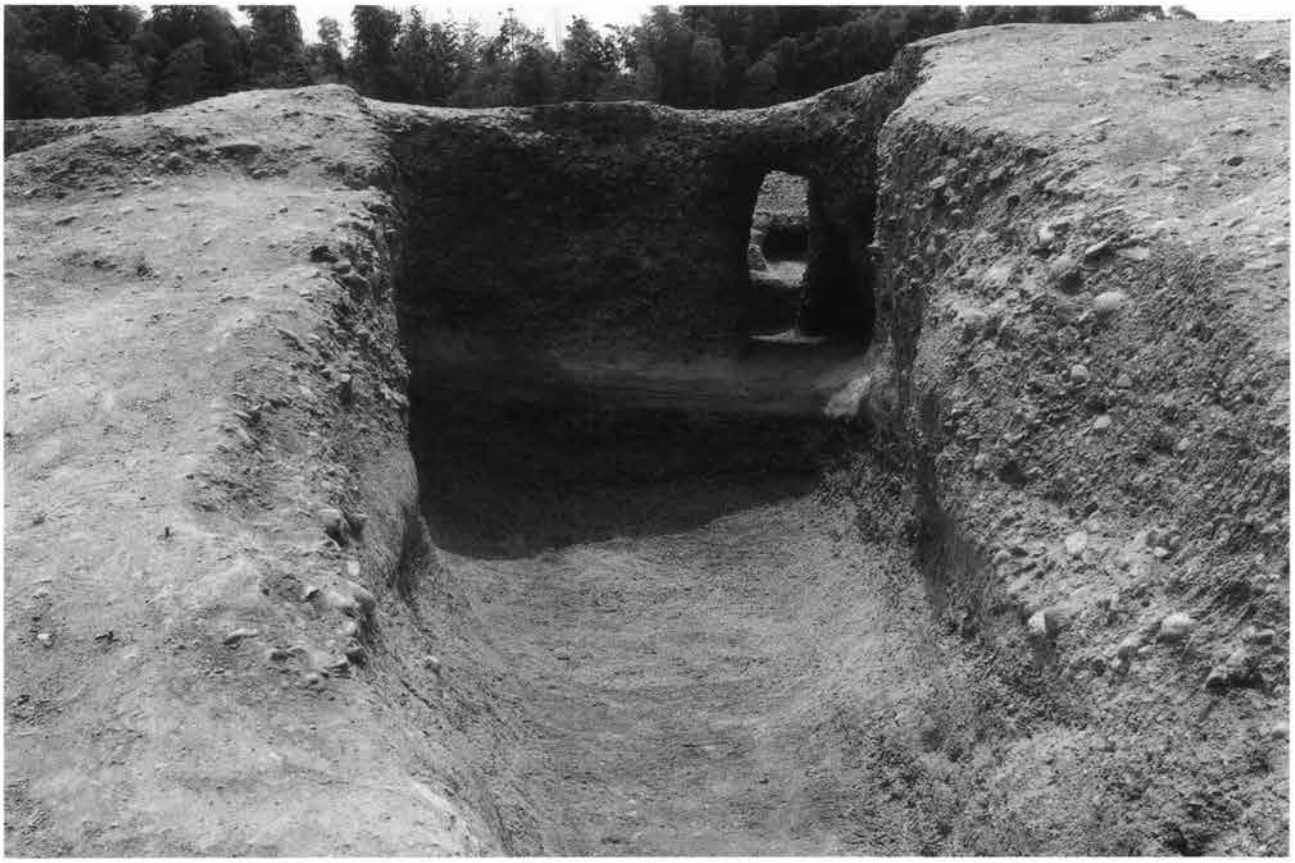
⑴C支群５～８号横穴（北北西から）

⑵C支群１～４号横穴（北東から）

図版第57　女谷横穴群



⑴C支群5号横穴完掘状況（北北西から）



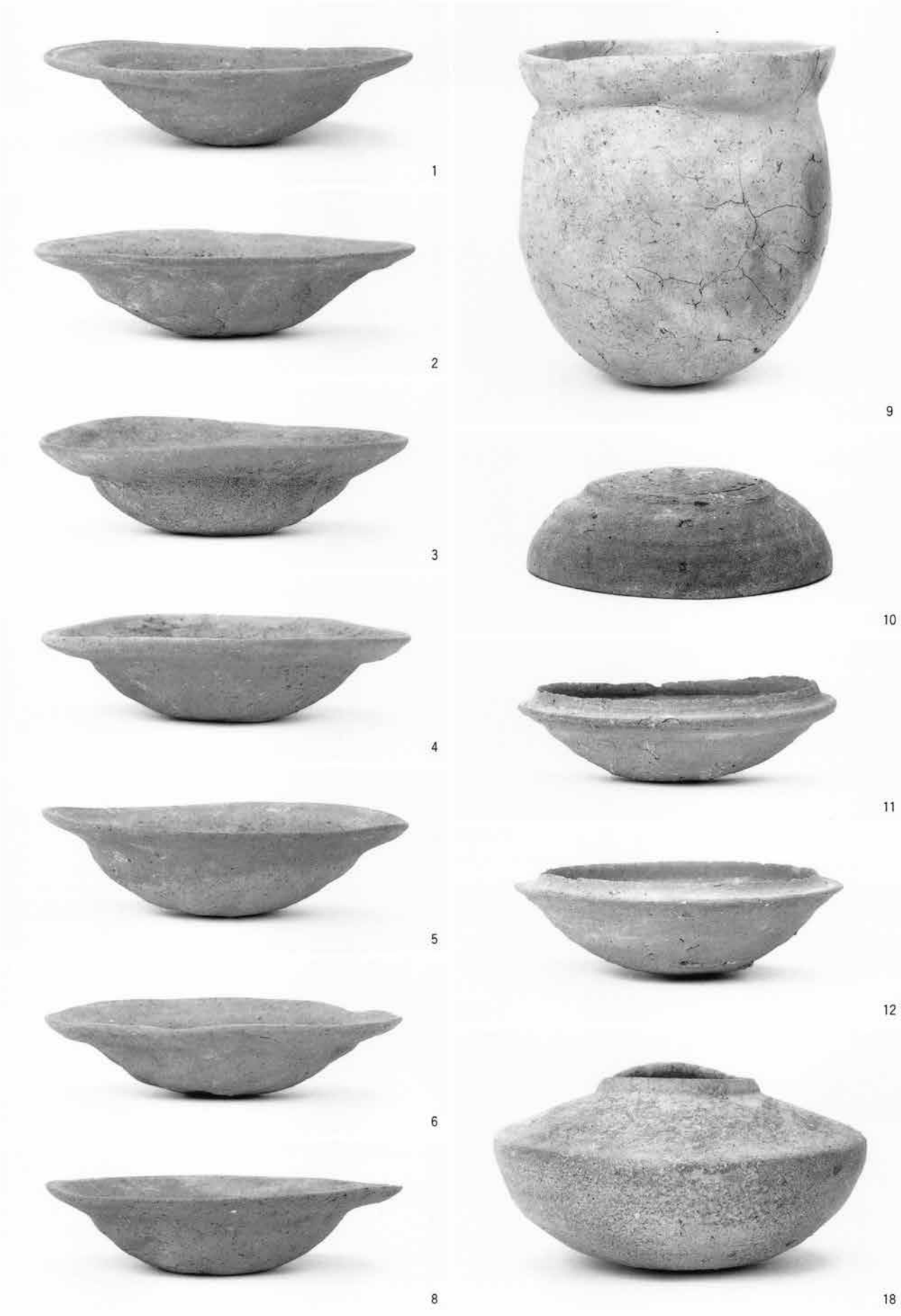
⑵C支群5号横穴玄室完掘状況（北北西から）

図版第58　女谷横穴群

⑴C支群５号横穴玄室内遺物出土状況（北北西から）

⑵C支群５号横穴玄室内人骨検出状況（北北西から）

図版第59　女谷横穴群



C支群出土遺物

図版第60　女谷横穴群

⑴試掘１トレンチ全景
（南東から）

⑵試掘２トレンチ全景
（北北東から）

⑶試掘３トレンチ全景
（東南東から）

図版第61　女谷横穴群

⑴試掘４トレンチ全景
（東南東から）

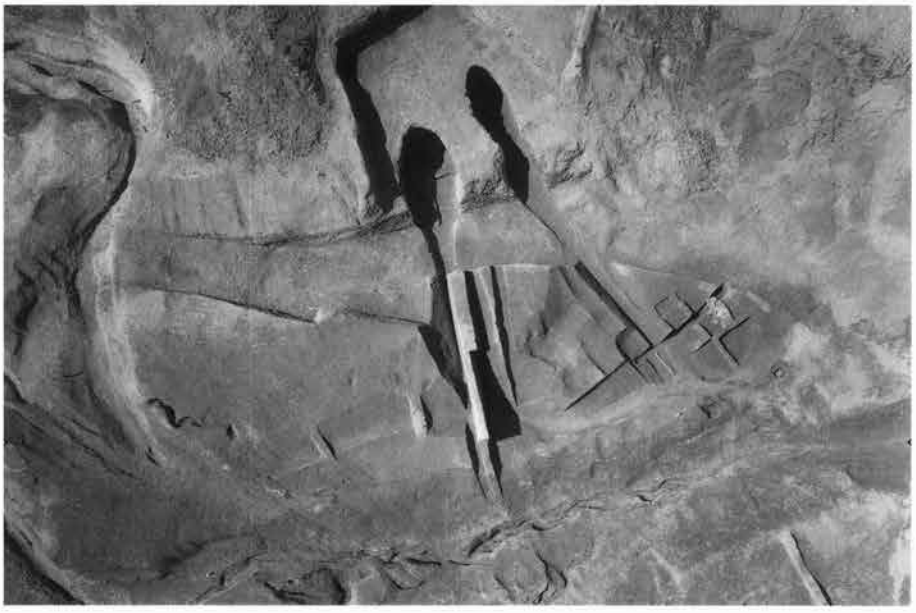
⑵試掘５トレンチ全景
（東北東から）

⑶試掘６トレンチ全景
（北から）

図版第62　荒坂横穴群

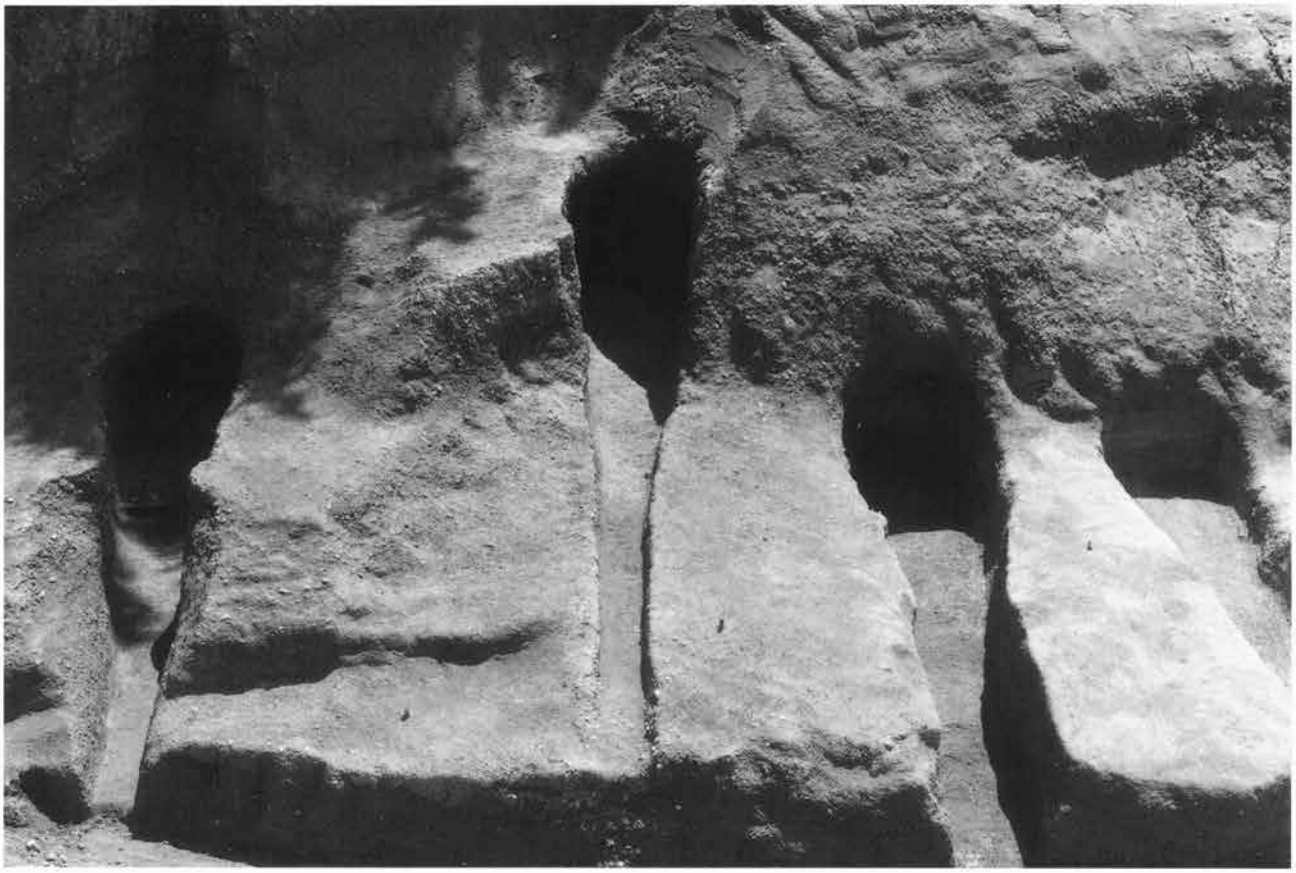
⑴B支群１～９号横穴（北西から）

⑵B支群８～20号横穴（北西から）



⑶C支群１・２号横穴（東から）

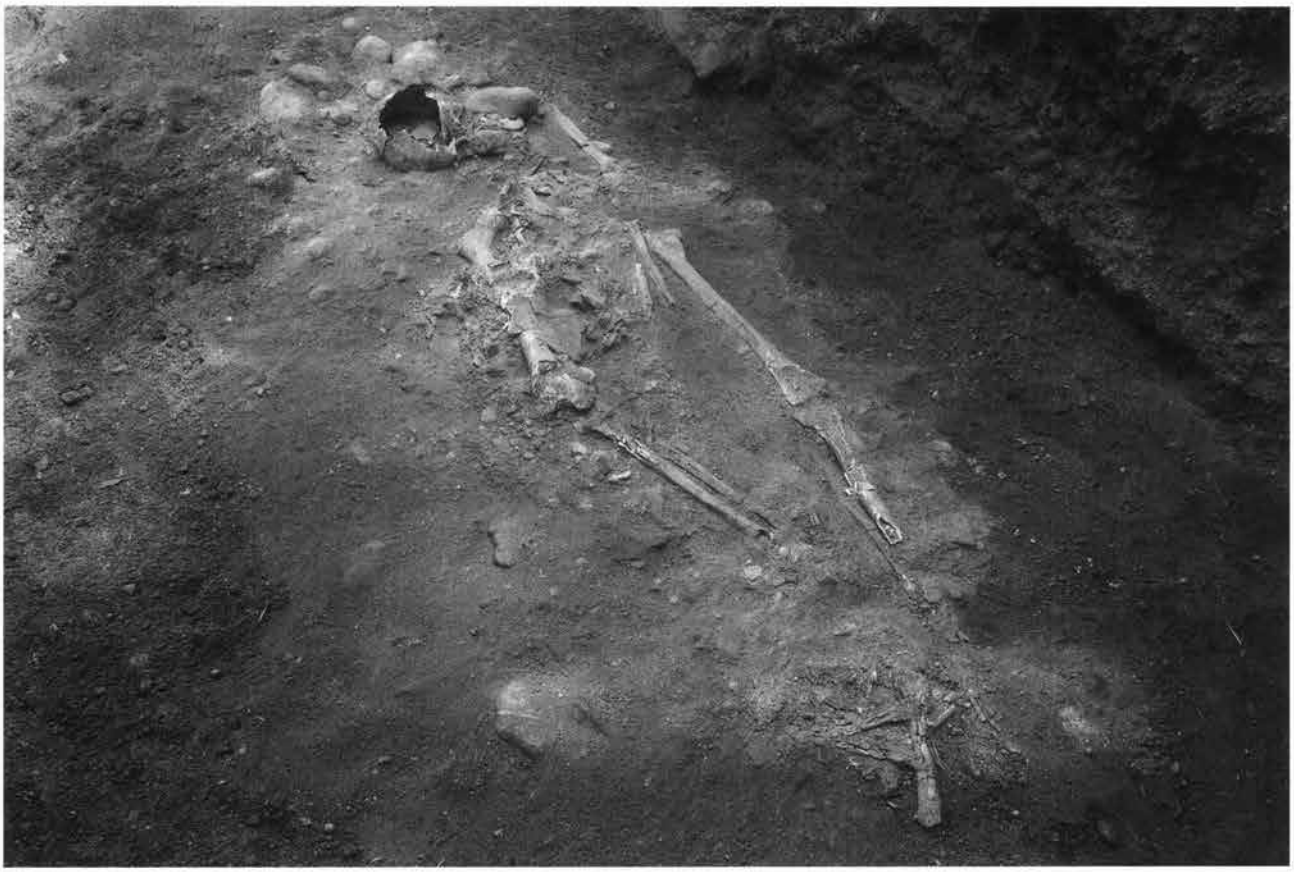
図版第63　荒坂横穴群



(1)B支群18号横穴完掘状況（北から）

(2)B支群18号横穴完掘状況（北から）

図版第64　荒坂横穴群



⑴B支群18号横穴玄室内人骨検出状況（南西から）

⑵B支群18号横穴玄室内人骨検出状況（西から）

図版第65　荒坂横穴群

5

3

6

12

7

13

8

9

15

10

図版第66　荒坂遺跡

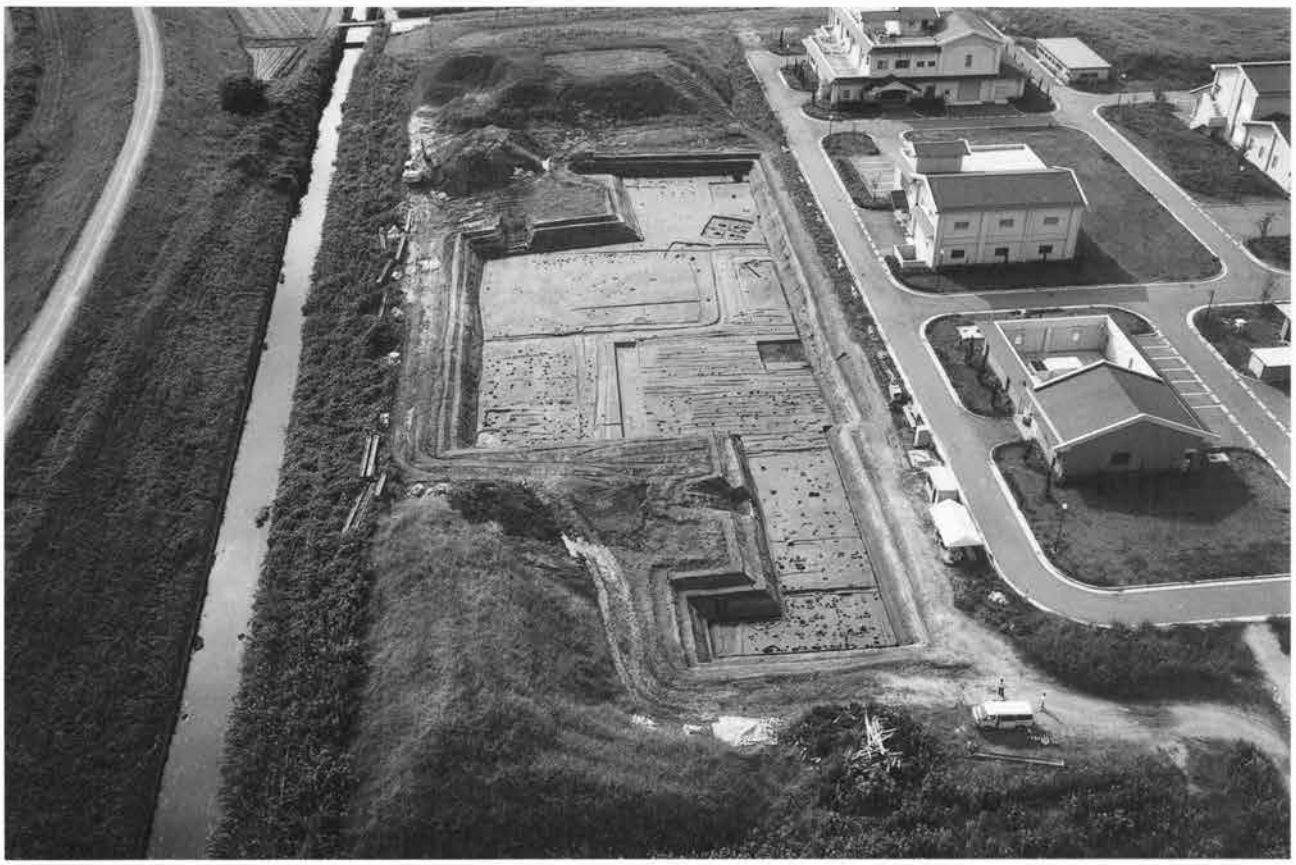
⑴試掘７トレンチ全景
（西から）

⑵試掘８トレンチ掘削前状況
（北北東から）

⑶試掘８トレンチ全景
（南から）

図版第67　椋ノ木遺跡第５次

⑴第５トレンチ（中世・古墳時代遺構面）全景（上が東）



⑵第５トレンチ（中世・古墳時代遺構面）全景（北から）

図版第68　椋ノ木遺跡第５次

⑴第５トレンチ（中世・古墳時代遺構面）全景（西から）

⑵第５トレンチ東部建物跡集中区俯瞰（上が西）

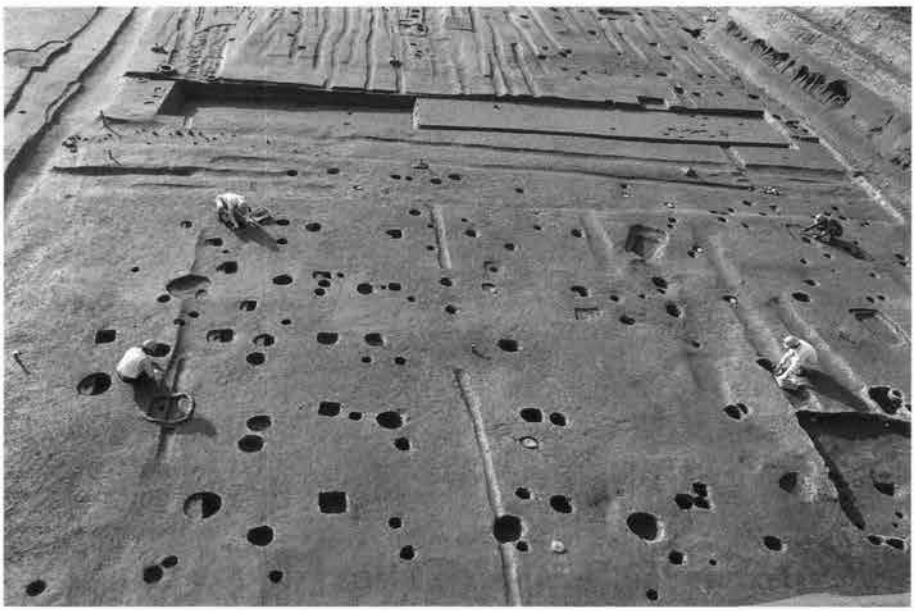
図版第69　椋ノ木遺跡第５次

昭和23年撮影空中写真（国土地理院）

図版第70　椋ノ木遺跡第５次

(1)トレンチ北端部ピット群
（北から）

(2)トレンチ中央部素掘り溝全景
（西から）



(3)トレンチ東部建物跡集中区全景
（東から）

図版第71　椋ノ木遺跡第５次

(1)トレンチ北端部俯瞰写真
（上が南）

(2)ＳＢ267全景（北から）

(3)トレンチ中央・南部俯瞰写真
（上が南）

図版第72　椋ノ木遺跡第５次

(1)トレンチ北東端部遺構配置状況（北から）

(2)ＳＫ90・93検出状況（西から）

(3)ＳＫ90・93完掘状況（西から）

図版第73　椋ノ木遺跡第５次

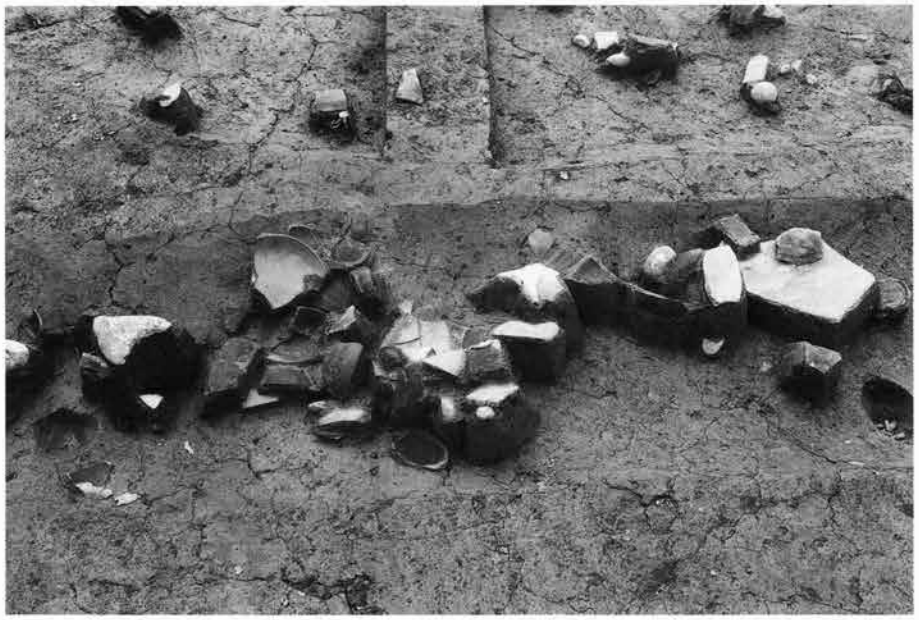
(1) Ｐ227遺物出土状況（南から）

(2) Ｐ391礎板石材検出状況
（西から）

(3) ＳＫ126土器出土状況（西から）

図版第74　椋ノ木遺跡第５次

(1) ＳＤ222検出時土器出土状況
（東から）



(2) ＳＤ222内土器出土状況
（北から）

(3) ＳＤ222東端部土器出土状況
（北から）

図版第75　椋ノ木遺跡第５次

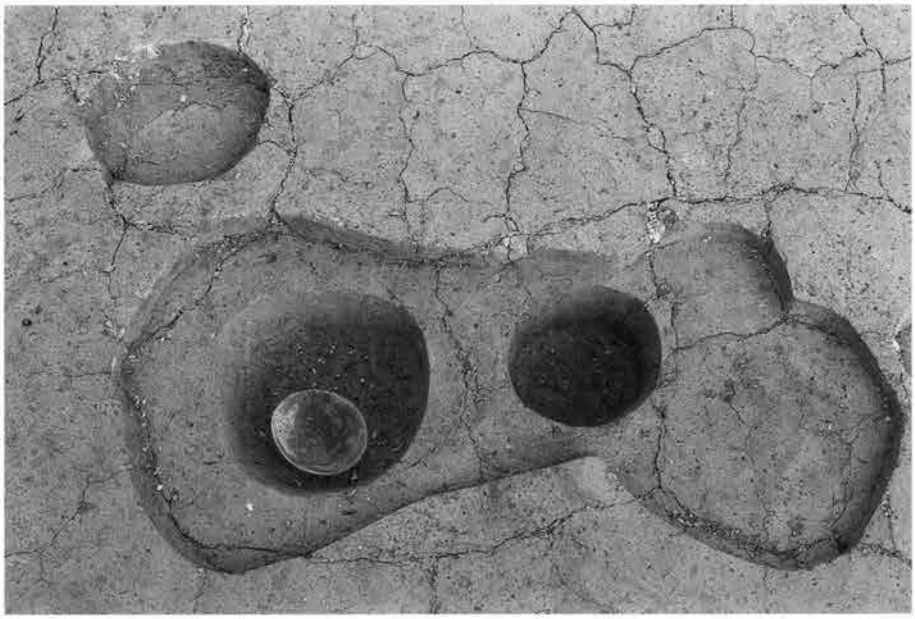
(1) ＳＸ472検出状況（北から）

(2) ＳＸ472土器出土状況（北から）

(3) ＳＸ472土器出土状況
（畦除去後）（北から）

図版第76　椋ノ木遺跡第５次

(1)Ｐ389内杭検出状況（北から）

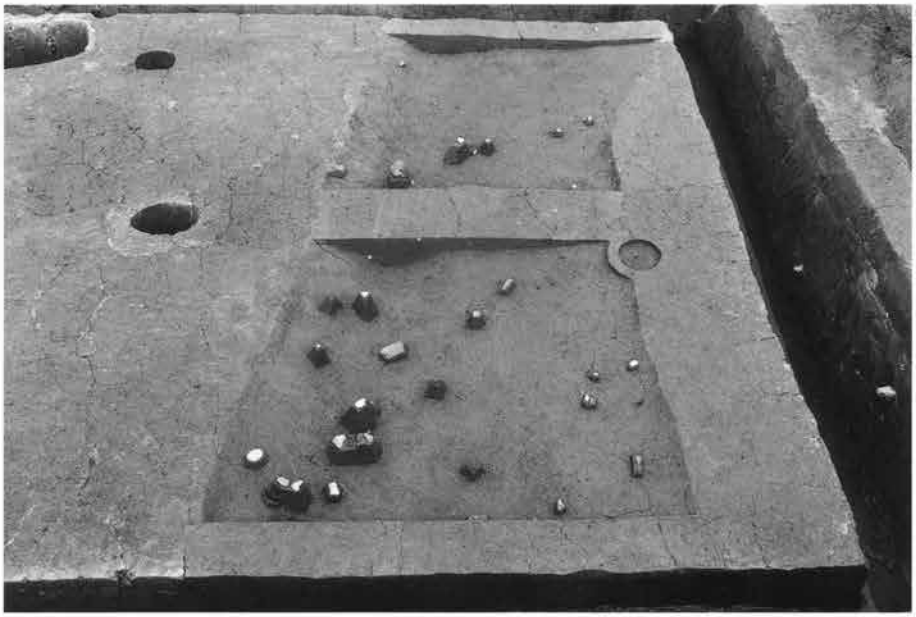


(2)Ｐ425内瓦器椀検出状況
（西から）

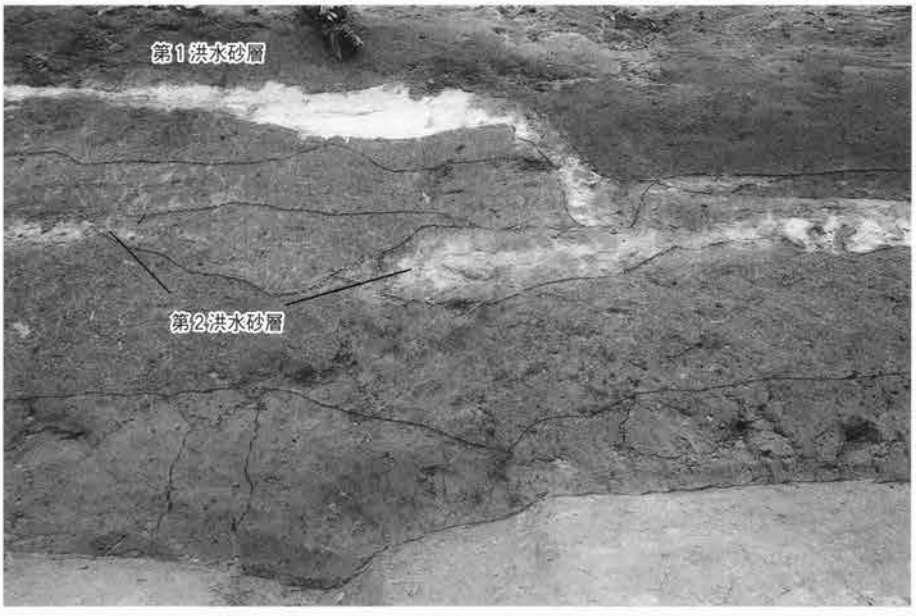
(3)奈良火鉢（左）・銭貨（右）
検出状況

図版第77　椋ノ木遺跡第５次

(1)鉄滓出土状況（北から）

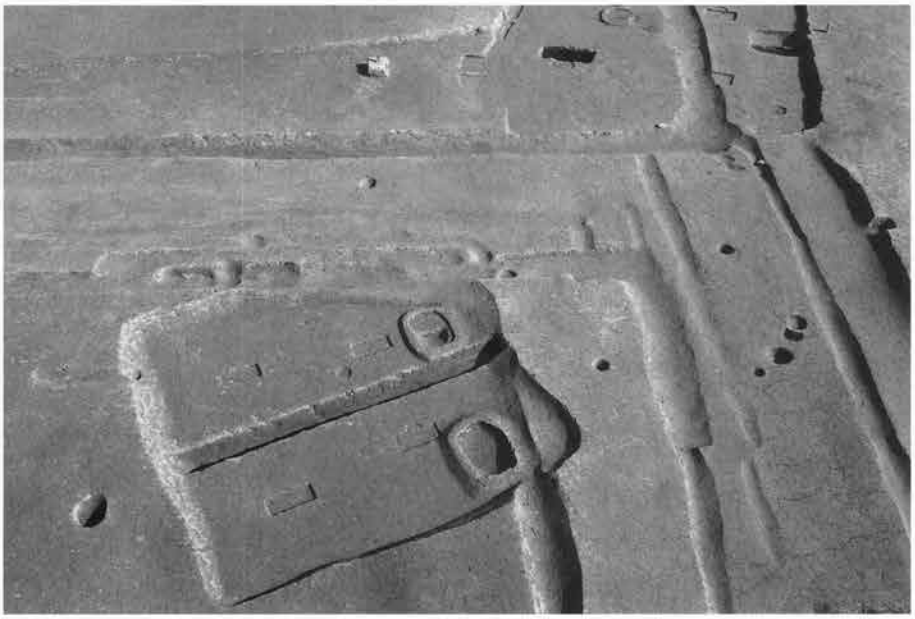


(2)ＳＤ226遺物検出状況（南から）

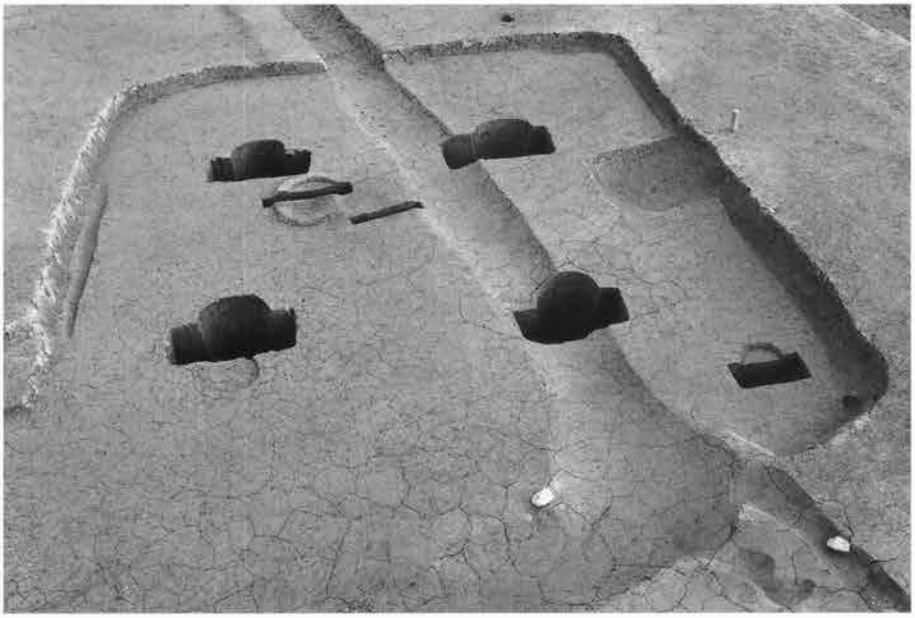


(3)トレンチ西壁洪水砂層検出状況

図版第78　椋ノ木遺跡第５次



⑴古墳時代遺構集中区（西から）



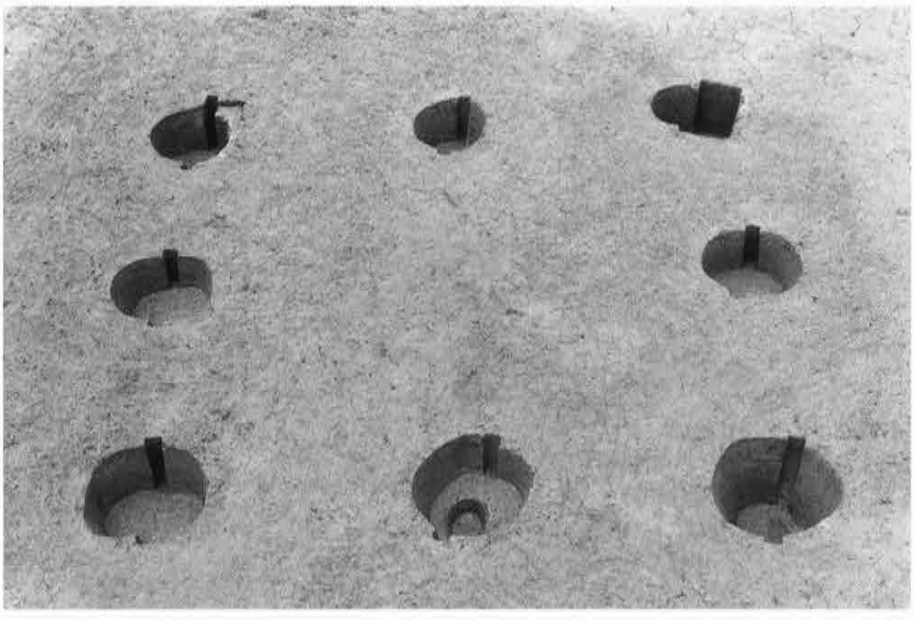
⑵ＳＨ173全景（北西から）

⑶ＳＨ173内土器出土状況
（南東から）

図版第79　椋ノ木遺跡第５次

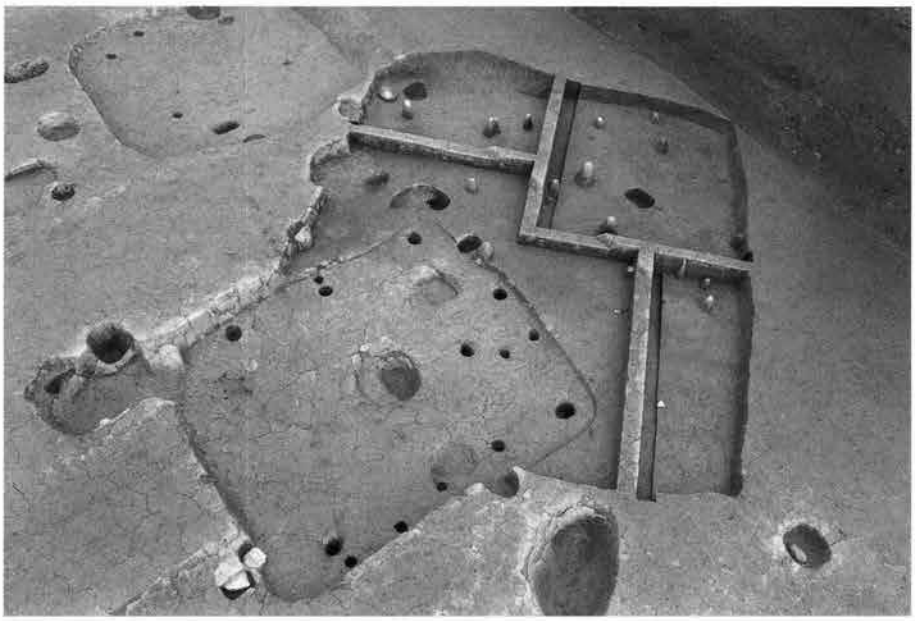
(1) ＳＨ174完掘状況（北東から）

(2) ＳＨ174内土坑検出状況
（南西から）



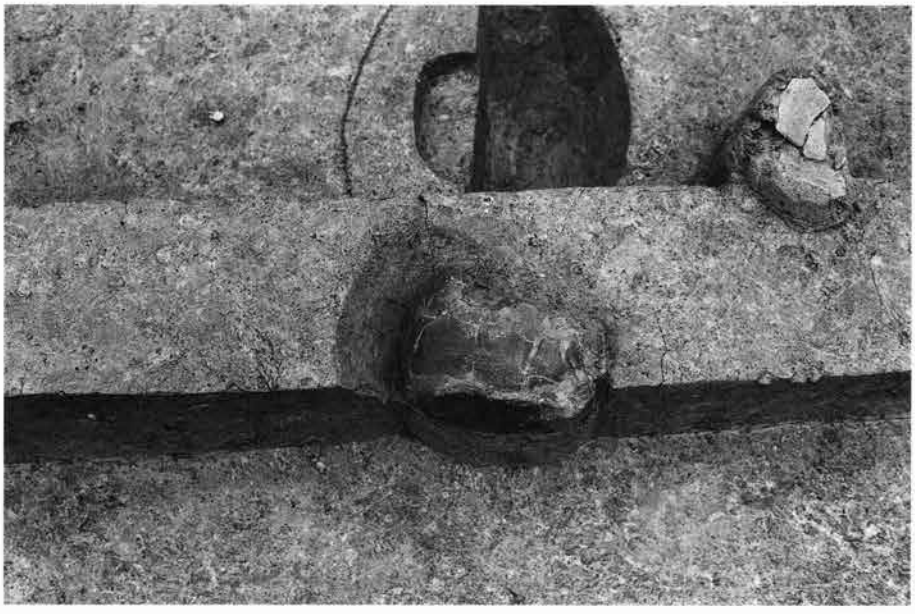
(3) ＳＢ175完掘状況（北東から）

図版第80　椋ノ木遺跡第５次



⑴ＳＨ262検出状況（南西から）

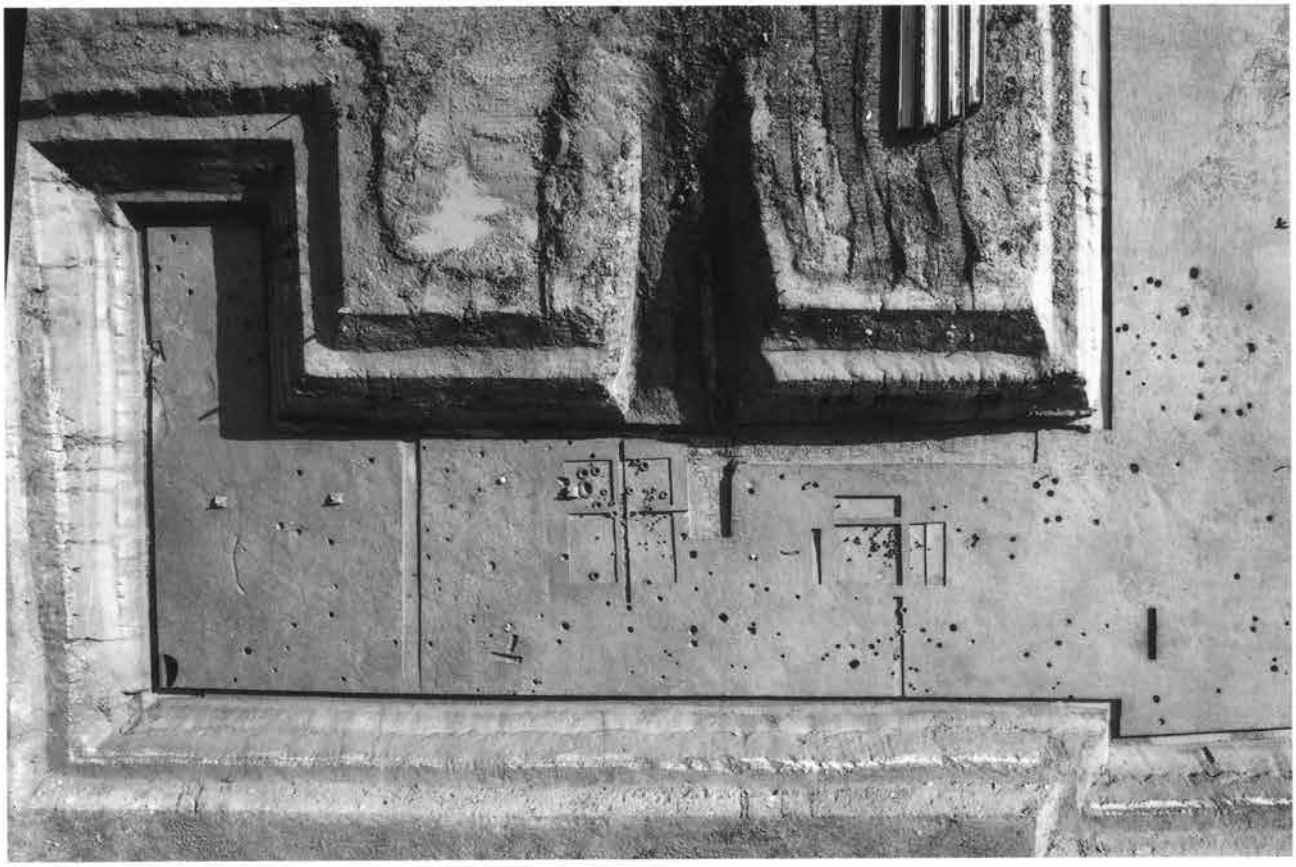
⑵ＳＨ262内高杯出土状況
（北西から）



⑶韓式系軟質平底鉢出土状況
（西から）

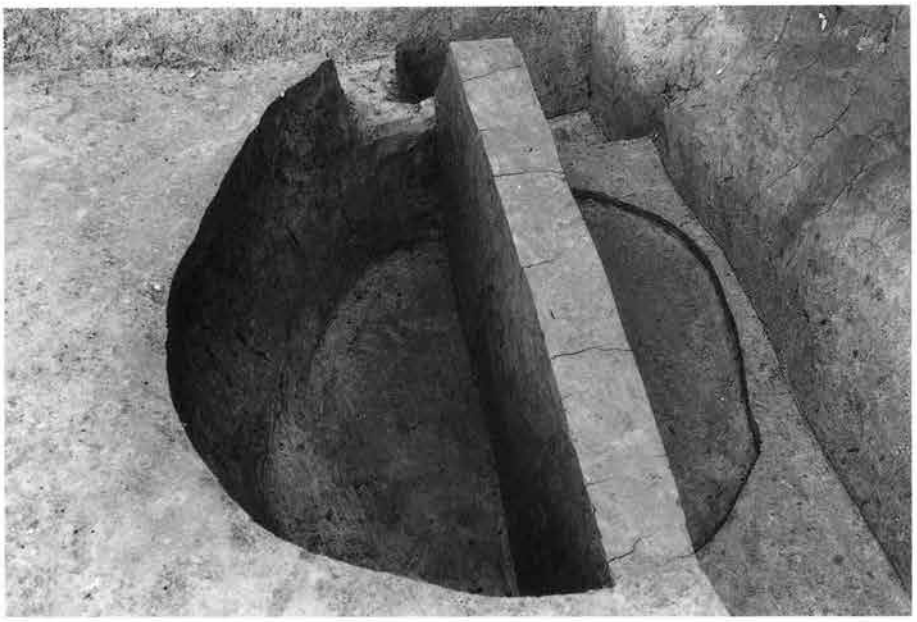
図版第81　椋ノ木遺跡第５次

⑴第５トレンチ（縄文時代遺構面）全景（上が東）



⑵トレンチ北端部縄文時代遺構集中区（上が東）

図版第82　椋ノ木遺跡第５次

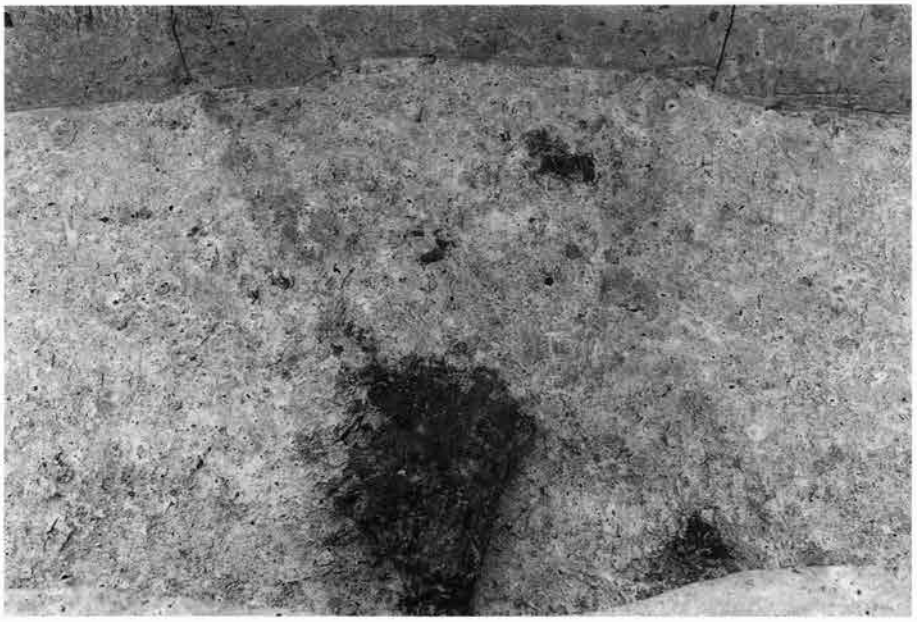


⑴貯蔵穴ＳＫ504全景（南東から）

⑵貯蔵穴ＳＫ504全景（南から）

⑶貯蔵穴ＳＫ504埋土堆積状況
（南から）

図版第83　椋ノ木遺跡第５次

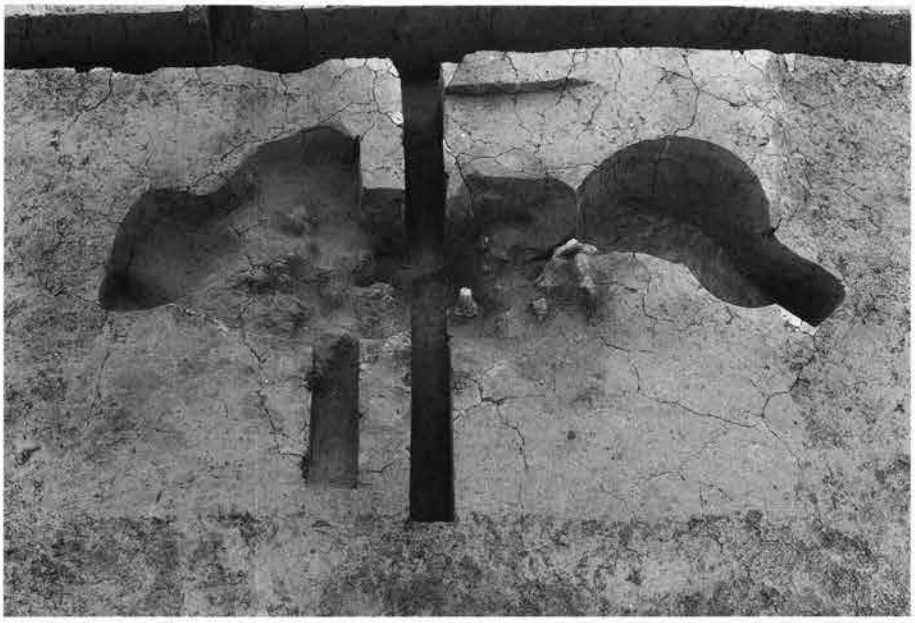


(1)炉跡ＳＸ500検出炭化材
（東から）

(2)炉跡ＳＸ500検出骨片（上が西）

(3)炉跡ＳＸ500埋土堆積状況
（東から）

図版第84　椋ノ木遺跡第５次

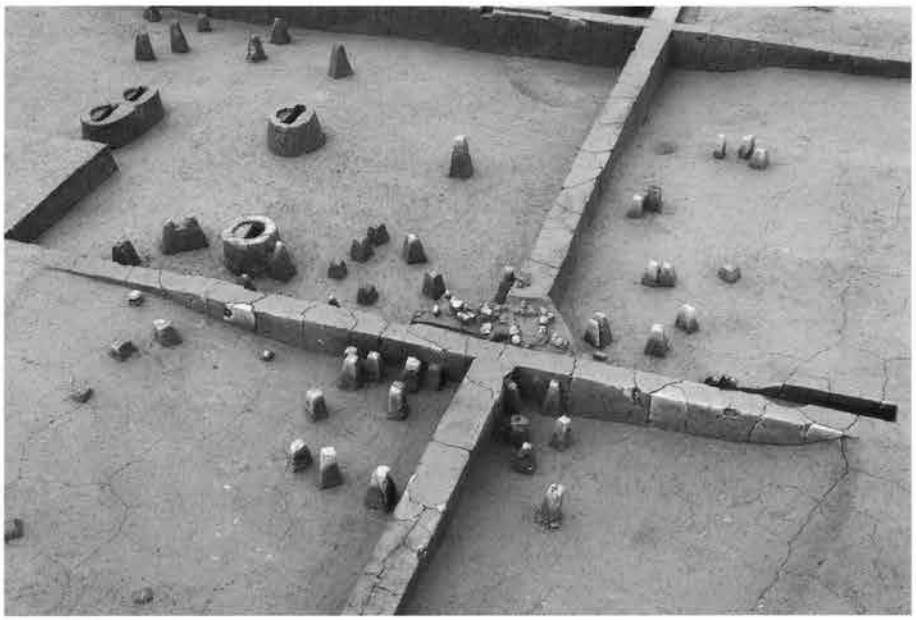


(1)炉跡ＳＸ494完掘全景（北から）

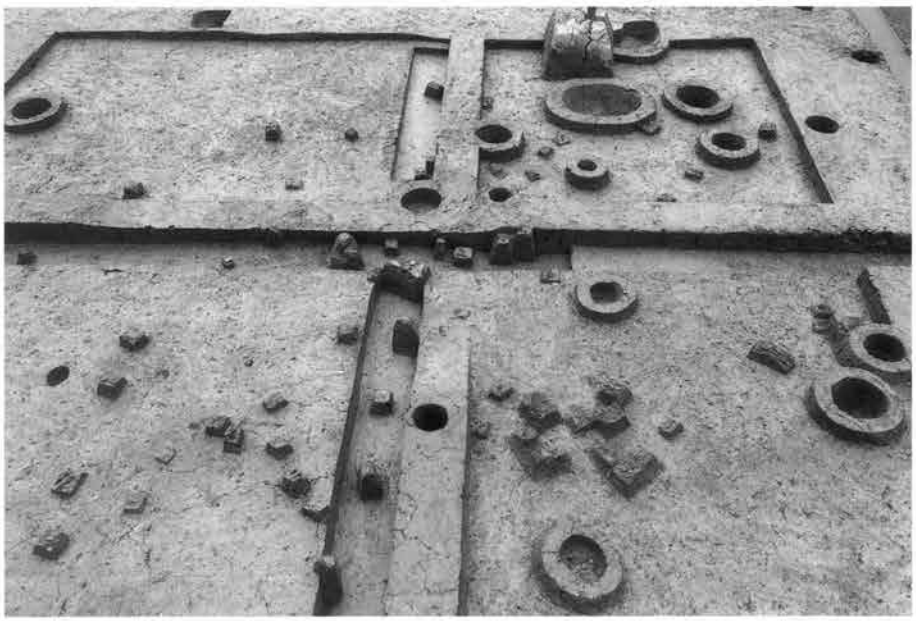
(2)炉跡ＳＸ494内埋土堆積状況
（西から）

(3)炉跡ＳＸ494付属土坑埋土
（南東から）

図版第85　椋ノ木遺跡第５次

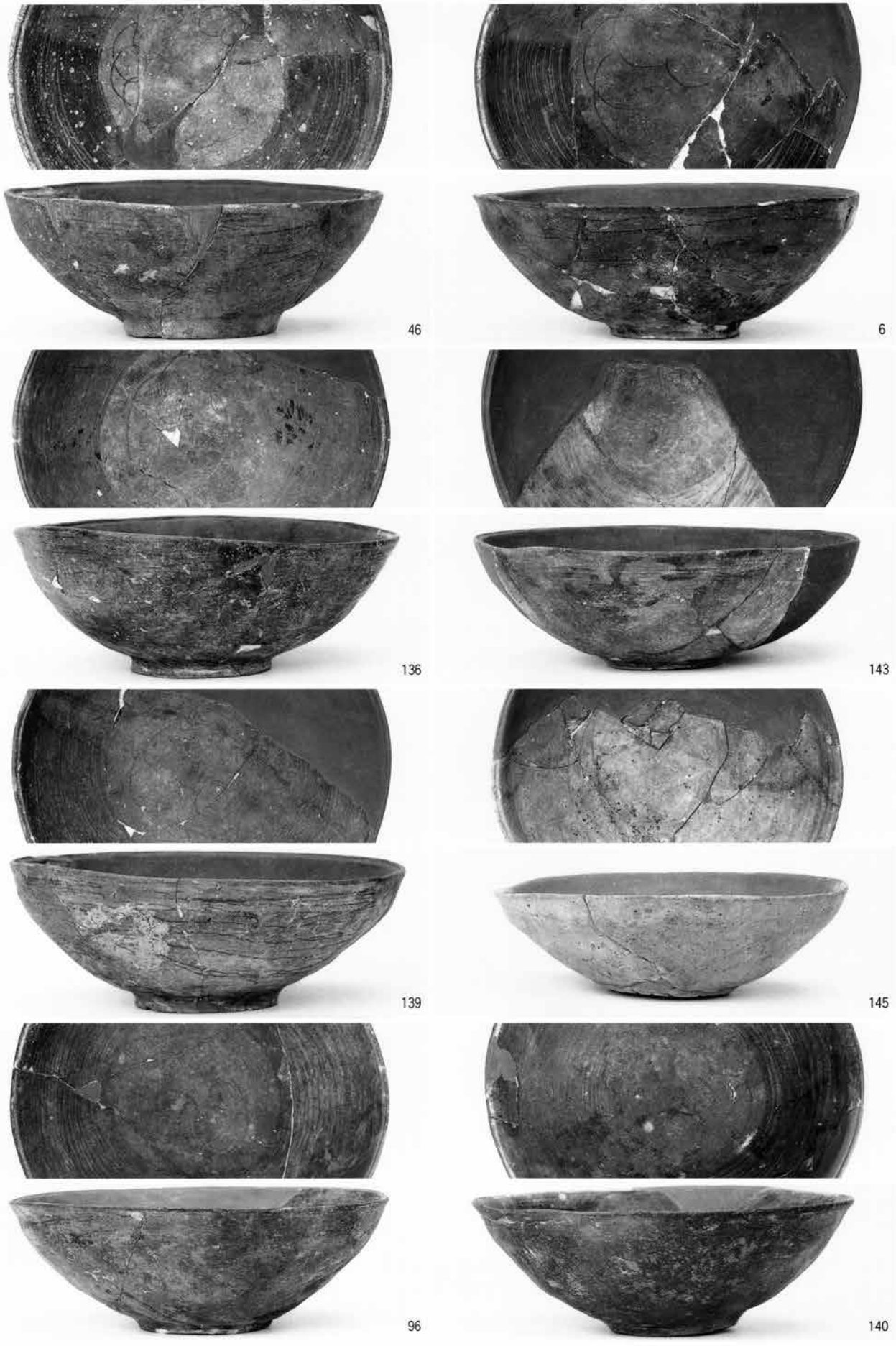


(1) S X503縄文土器溜まり
（南から）



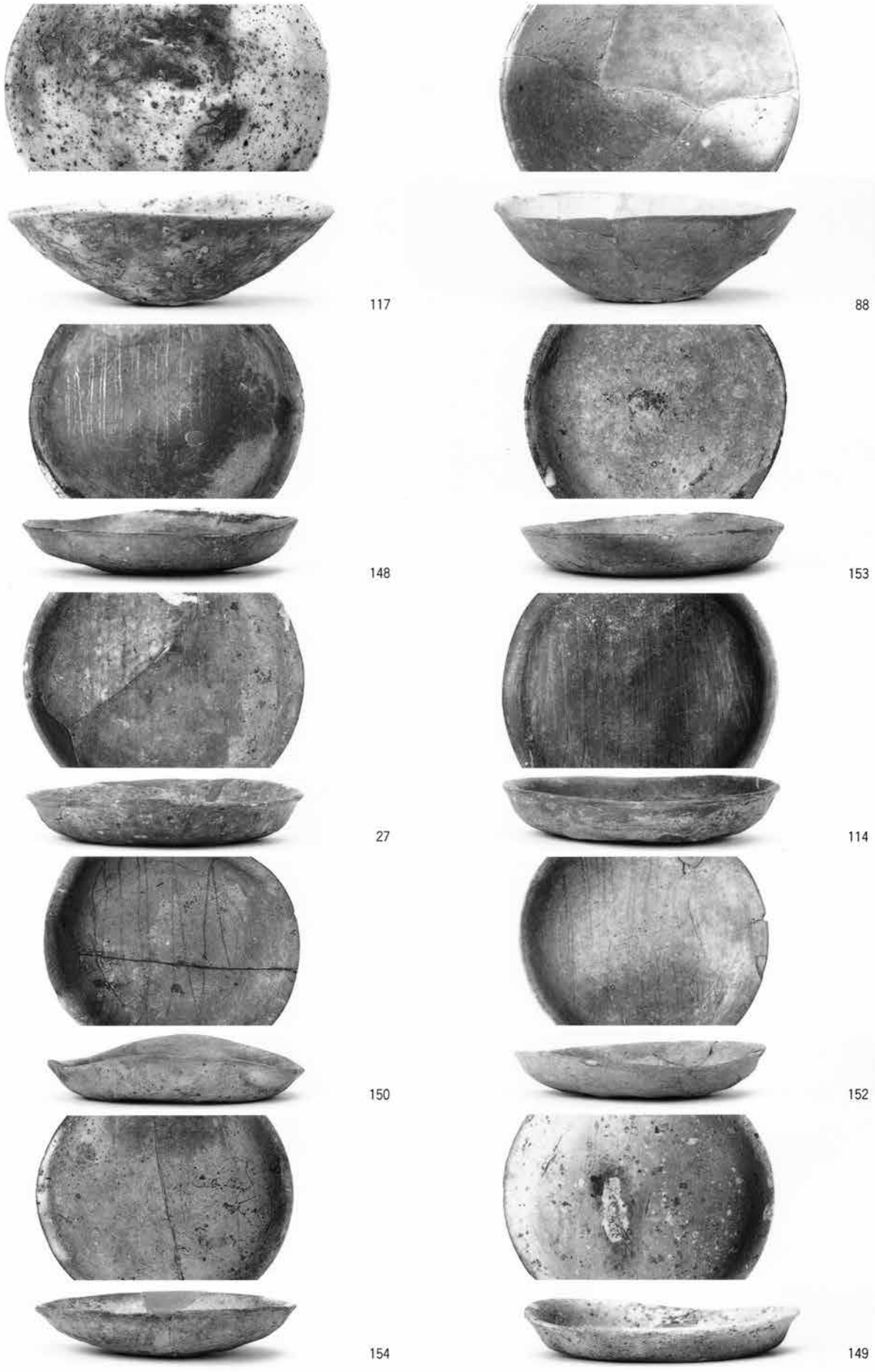
(2) S X501縄文土器溜まり
（北から）

(3) S X503縄文土器集中区
（南から）



中世土器(1)（瓦器椀）

図版第87　椋ノ木遺跡第５次



中世土器(2)（瓦器椀・瓦器皿）

図版第88　椋ノ木遺跡第５次

159

21

11

14

13

21

22

164

163

33

78

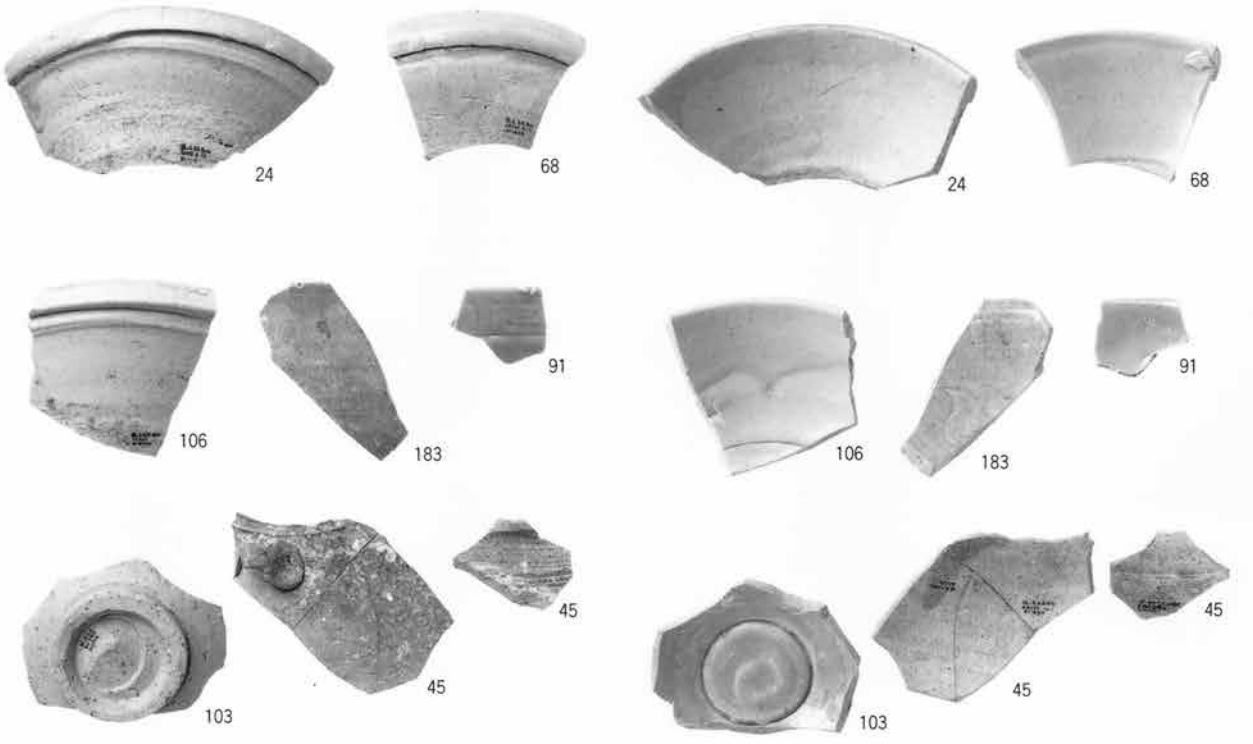
12

89

中世土器(3)（土師皿・鍋）

図版第89　椋ノ木遺跡第５次

(1)中世土器(4)（羽釜・鍋）



(2)中世陶磁器（白磁椀・青磁椀・褐釉四耳壺）

231

227

221

220

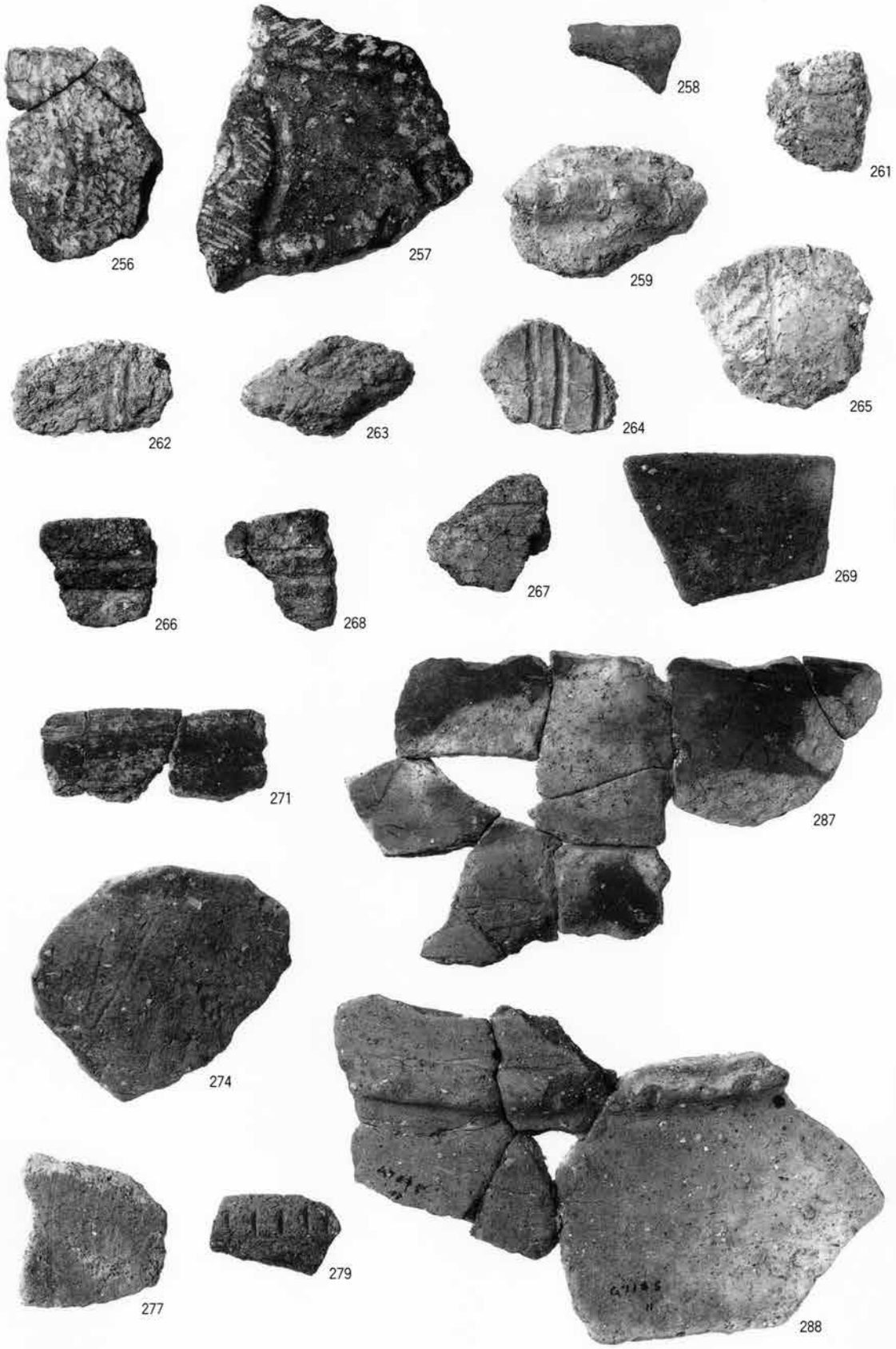
226

223

第98図

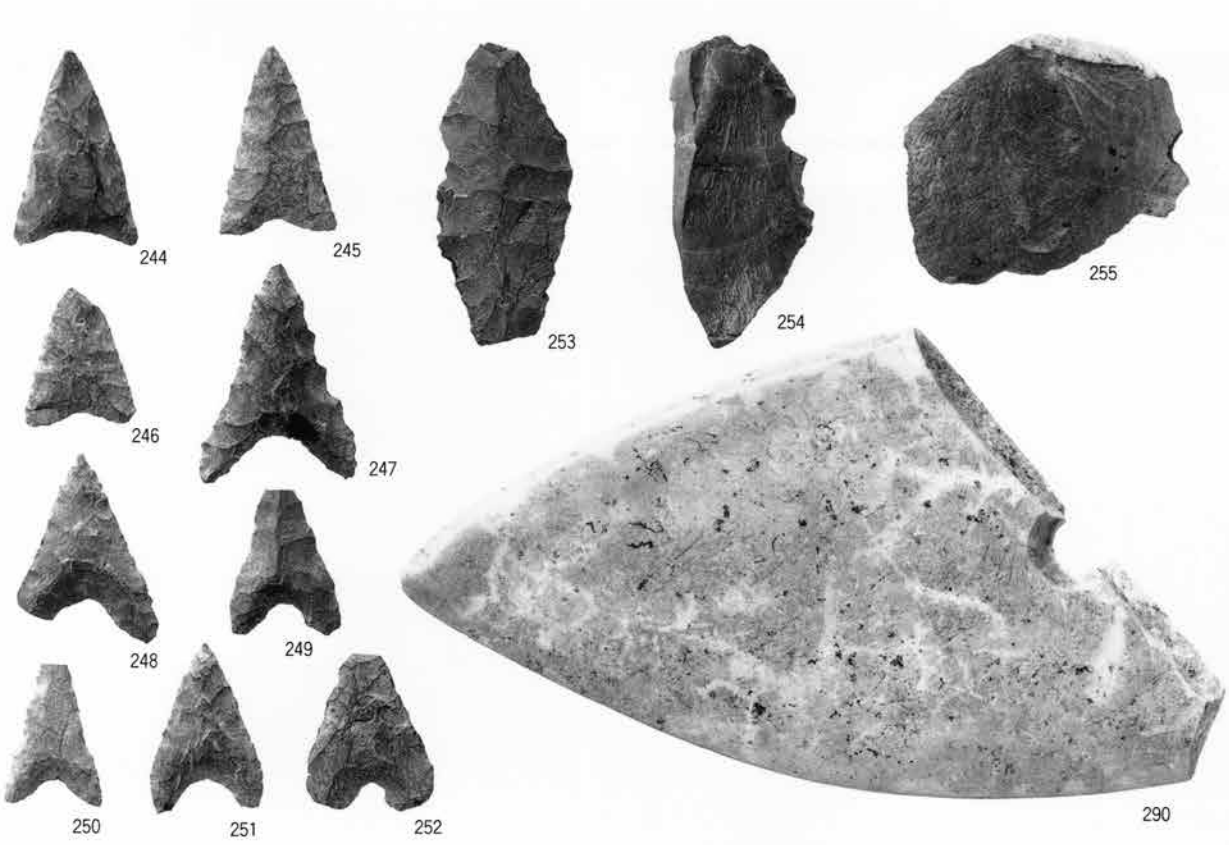
古墳時代土器および石製品

図版第91　椋ノ木遺跡第５次

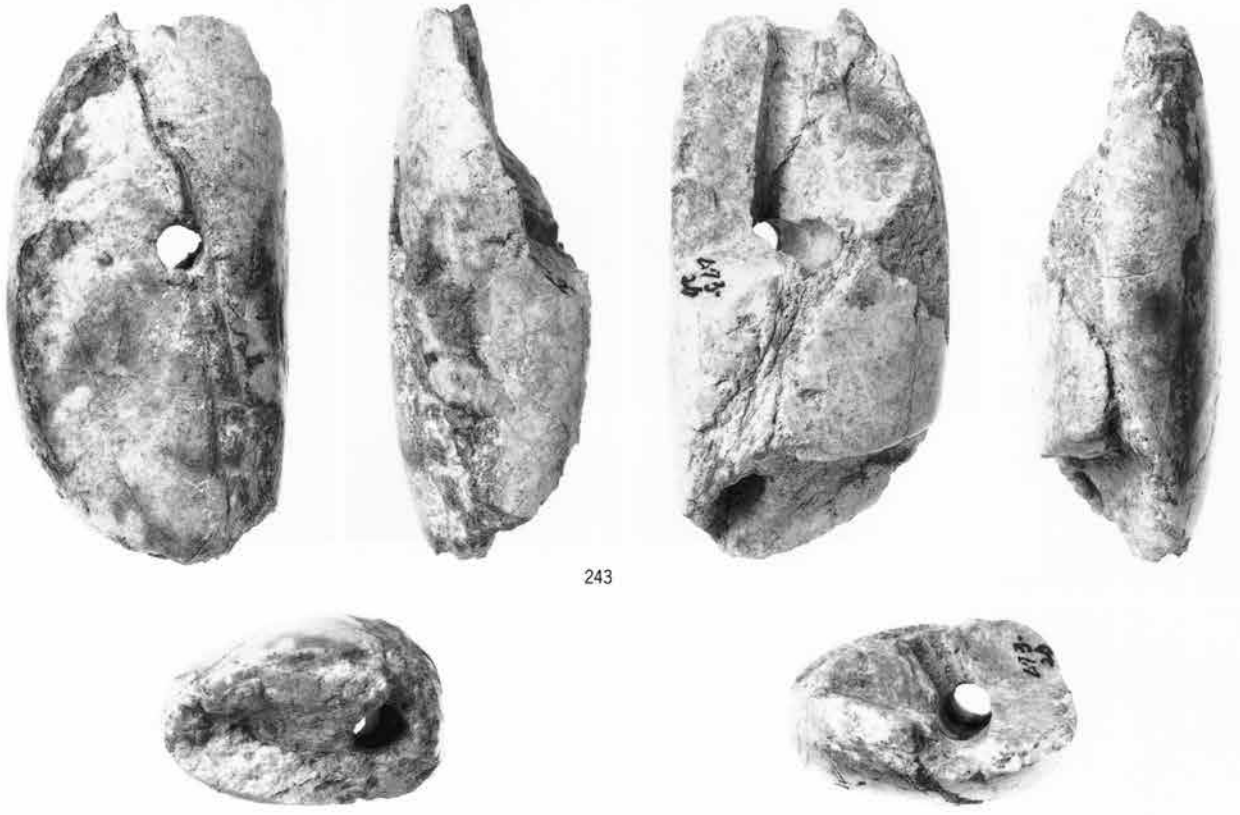


縄文土器

図版第92　椋ノ木遺跡第５次

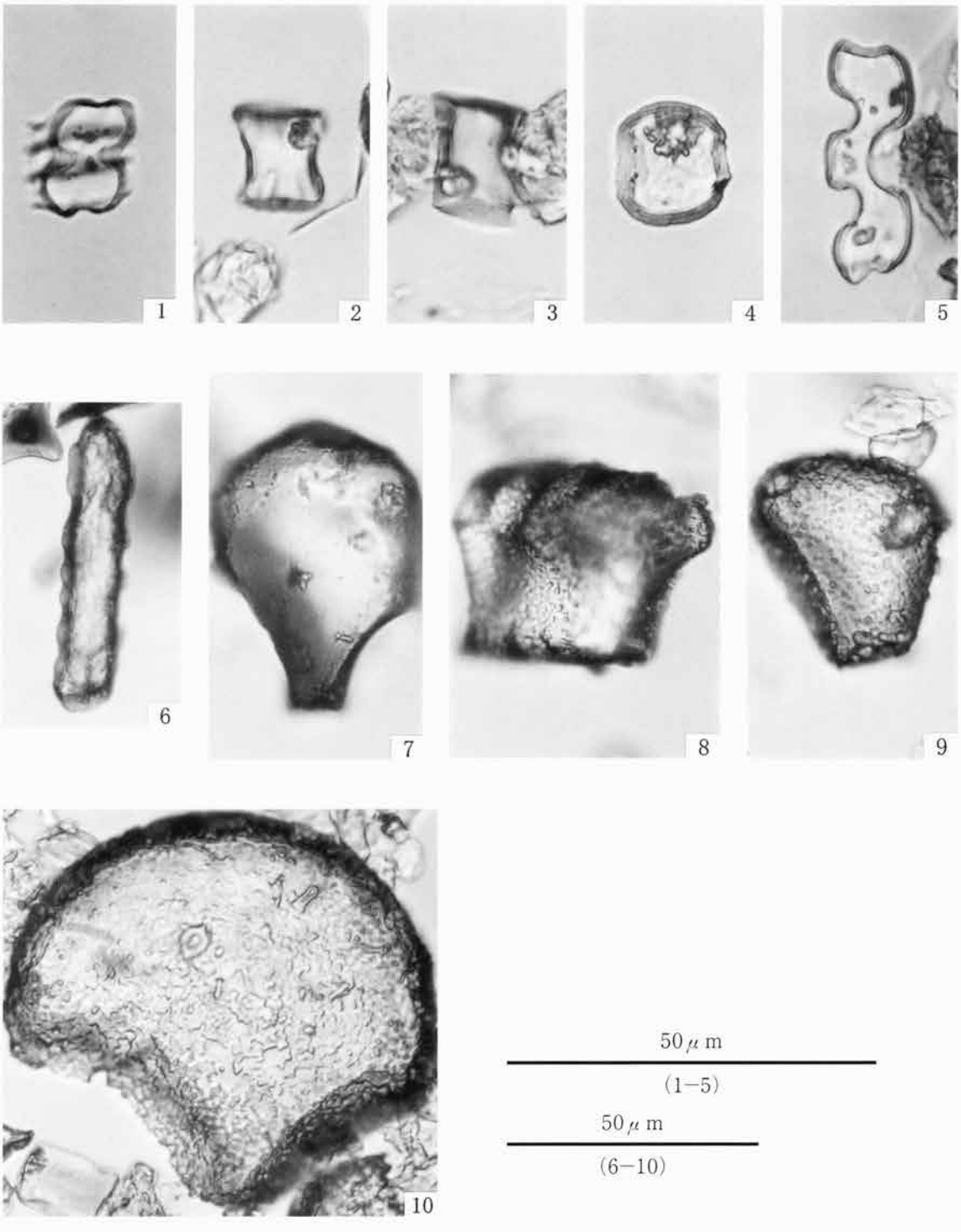


(1)石鏃・剝片・石庖丁



(2)翡翠製大珠

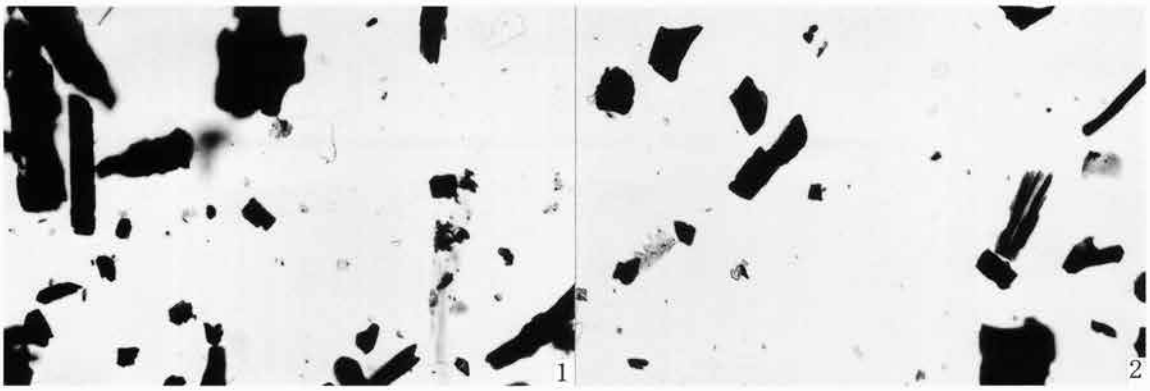
図版第93　椋ノ木遺跡第５次



1．イネ属短細胞珪酸体（３地点；１）
2．ネザサ節短細胞珪酸体（３地点；２）
3．タケ亜科短細胞珪酸体（３地点；３）
4．ヨシ属短細胞珪酸体（３地点；１）
5．ススキ属短細胞珪酸体（３地点；３）
6．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（３地点；１）
7．イネ属機動細胞珪酸体（３地点；１）
8．ネザサ節機動細胞珪酸体（３地点；２）
9．タケ亜科機動細胞珪酸体（３地点；２）
10．ヨシ属機動細胞珪酸体（３地点；４）

植物珪酸体分析写真

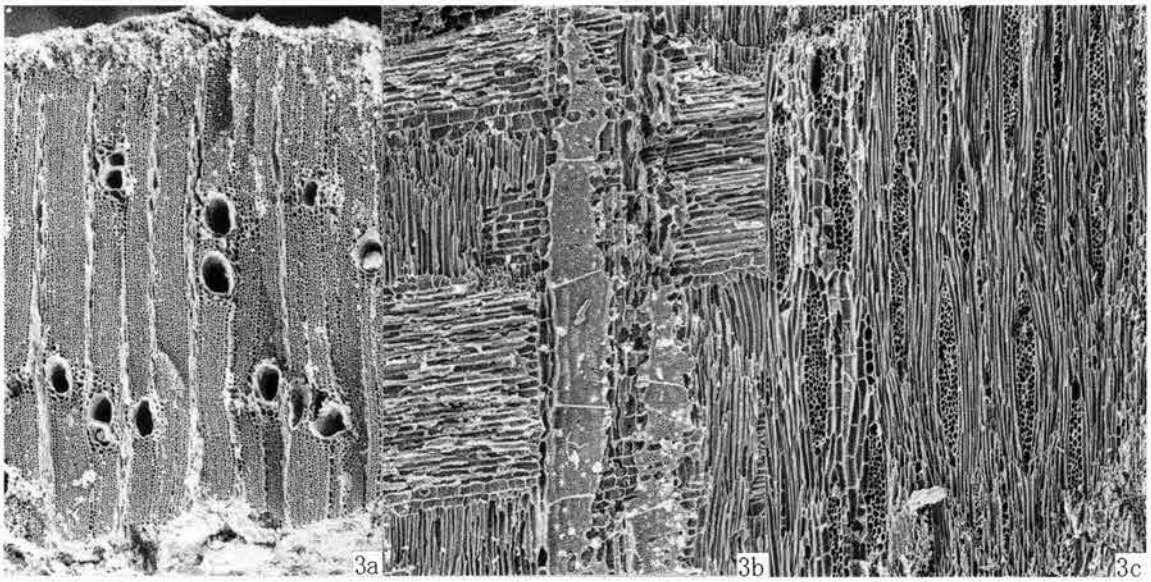
図版第94　椋ノ木遺跡第５次



１．花粉分析プレパラート内の状況写真（３地点；３）
２．花粉分析プレパラート内の状況写真（３地点；４）

50μm

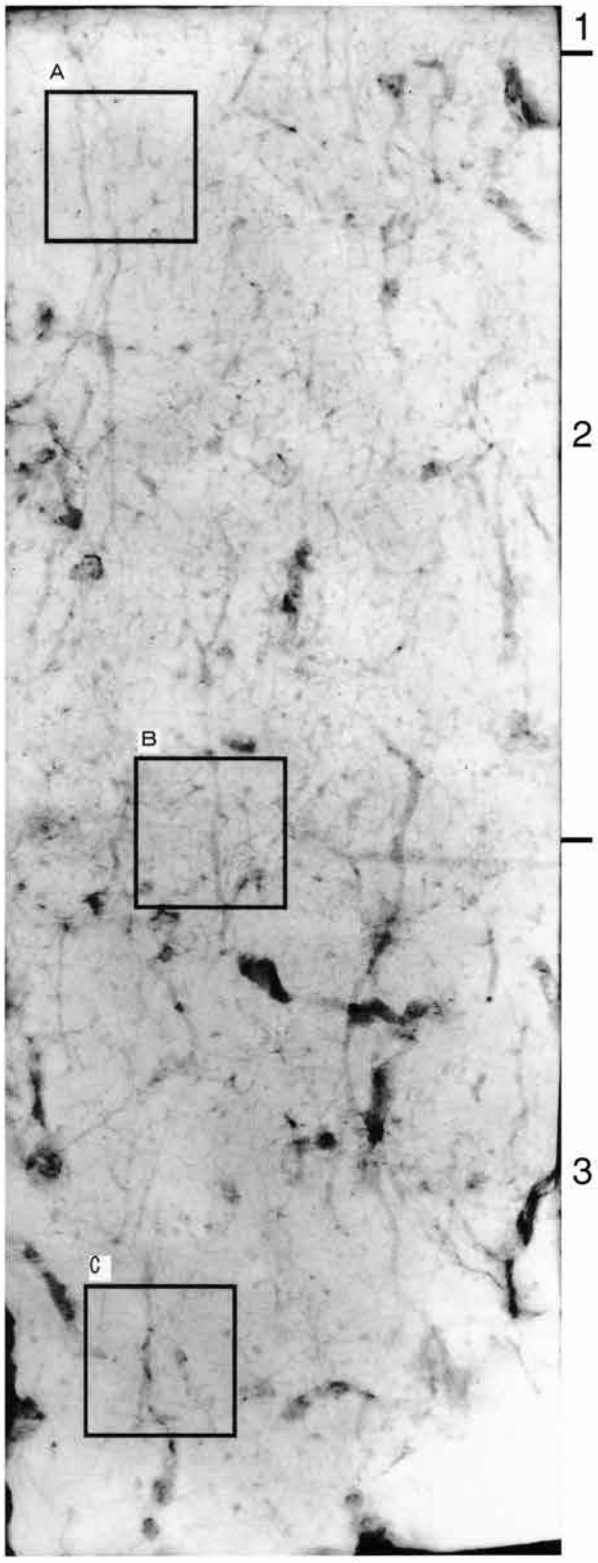
炭化材



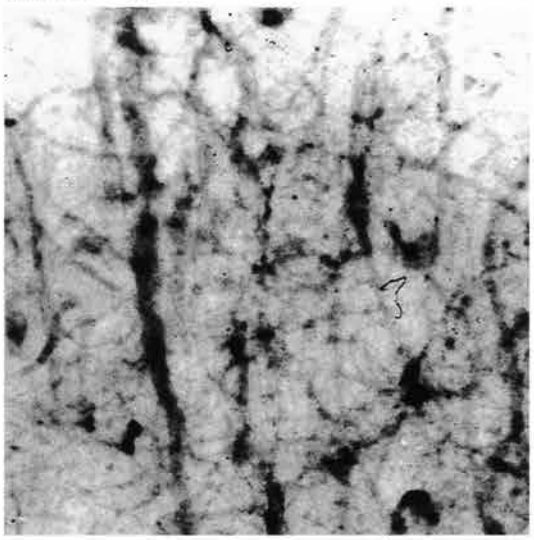
ムクノキ（ＳＸ500）
ａ：木口，ｂ：柾目，ｃ：板目

200μm：３ａ
200μm：３ｂ・３ｃ

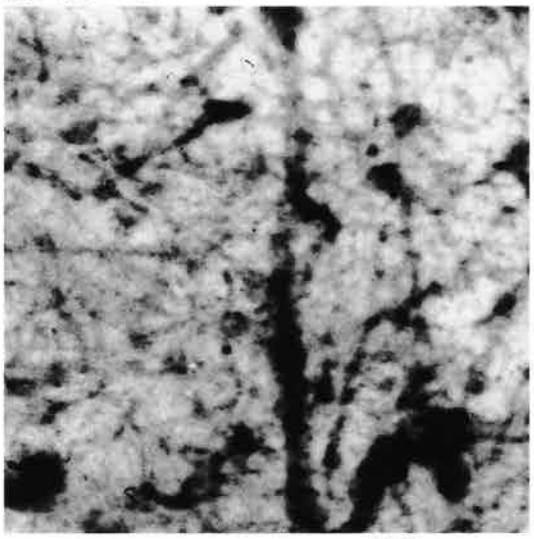
花粉分析プレパラート内の状況・炭化材



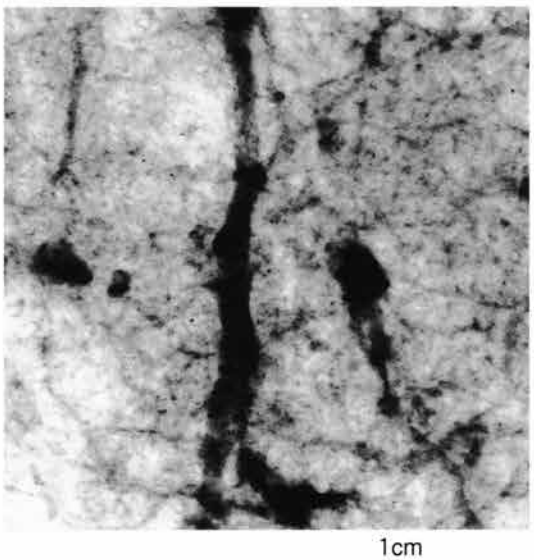
拡大図－A



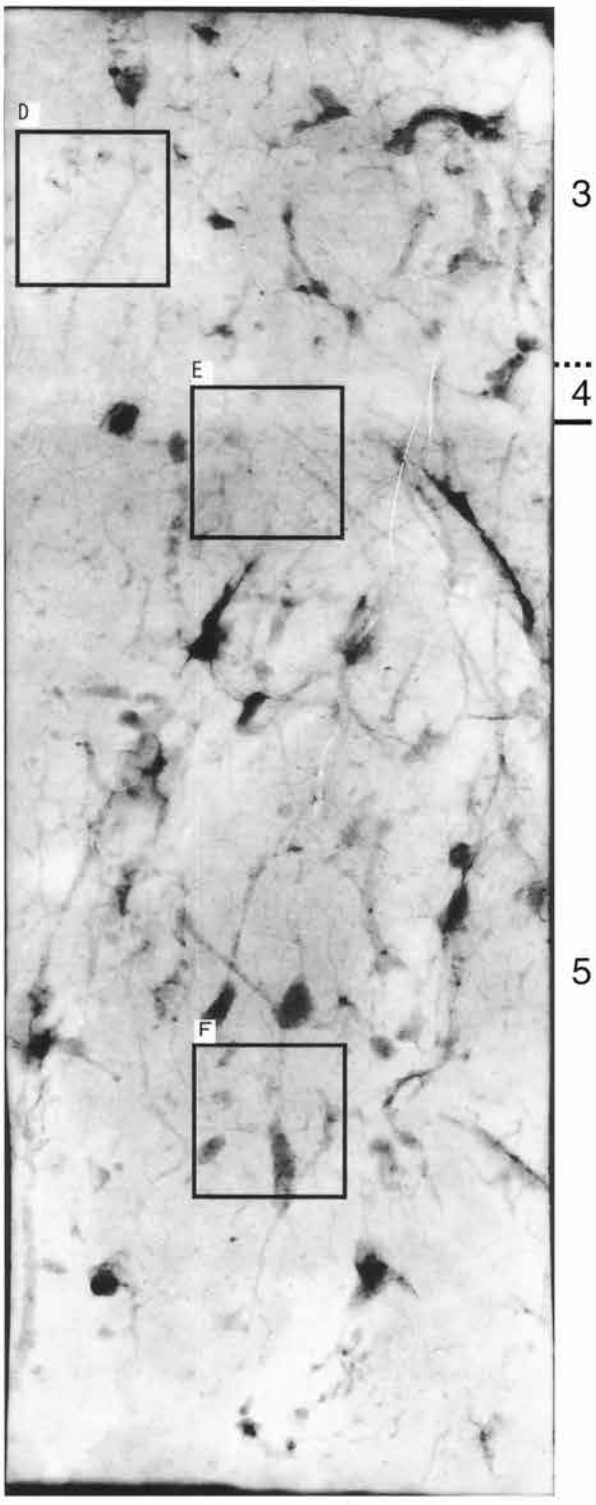
拡大図－B



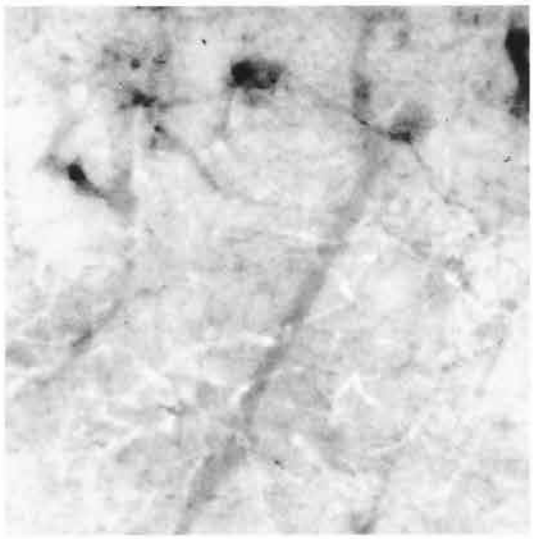
拡大図－C



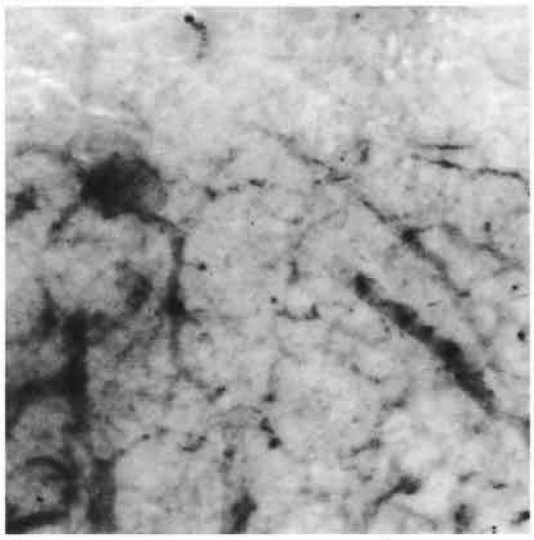
第３地点　試料番号１



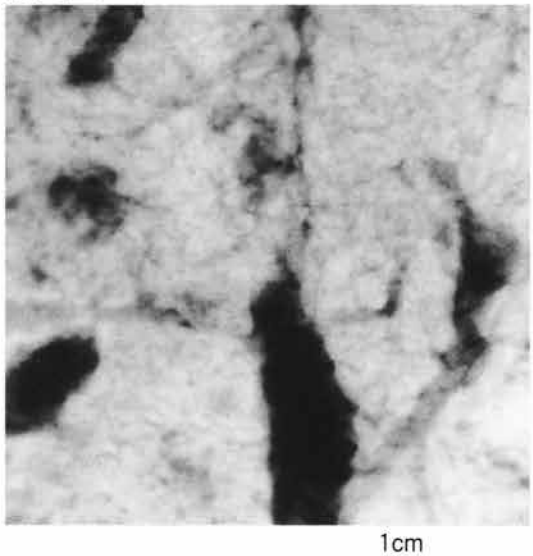
拡大図－D



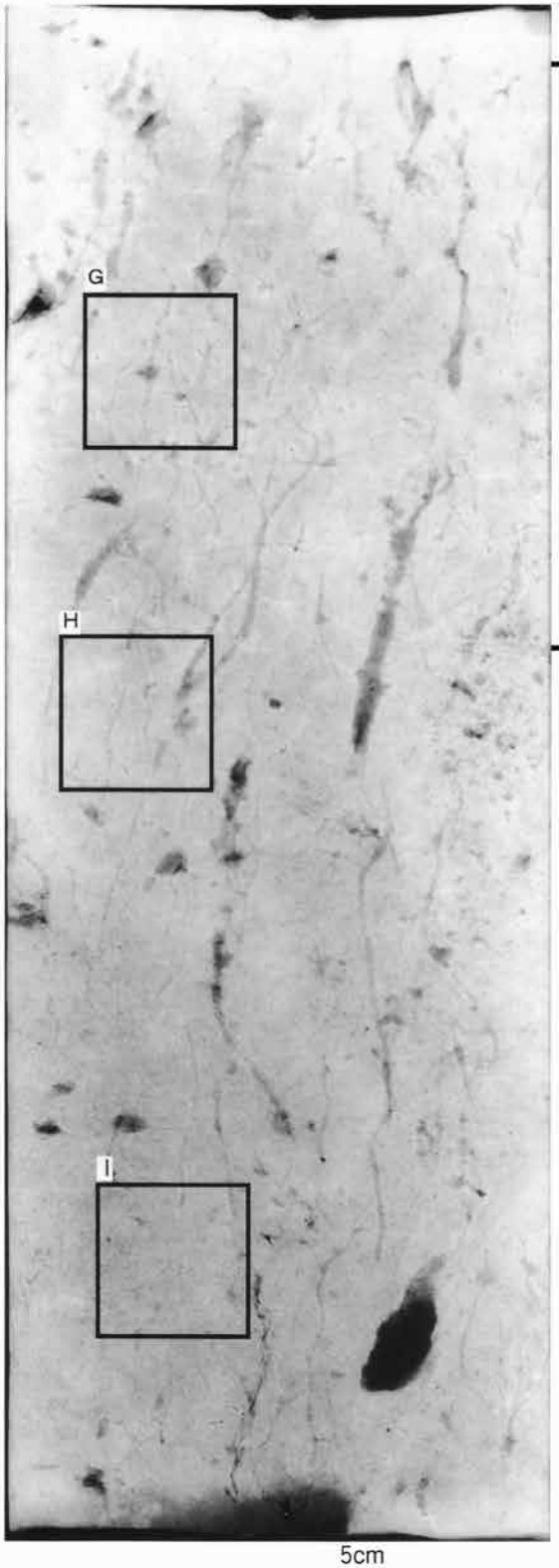
拡大図－E



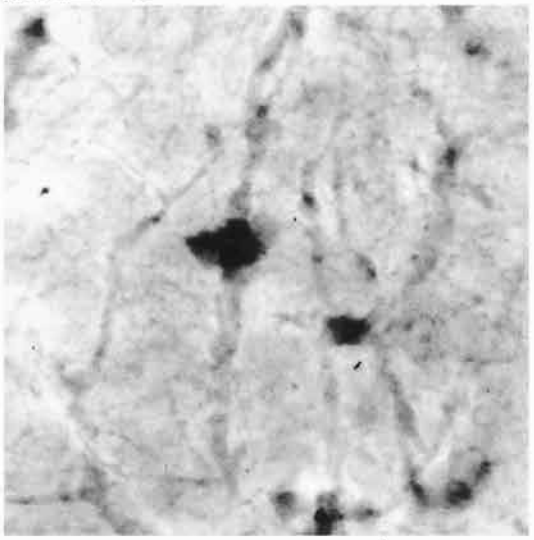
拡大図－F



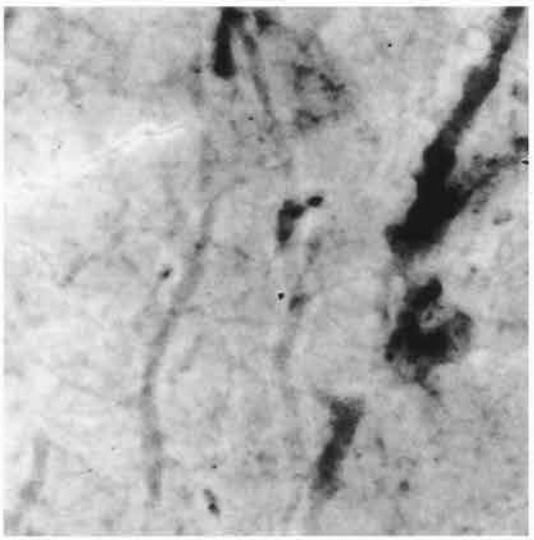
第３地点　試料番号２



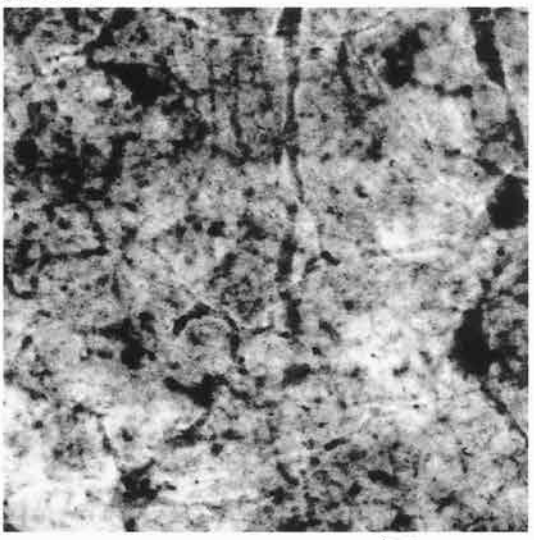
拡大図－G



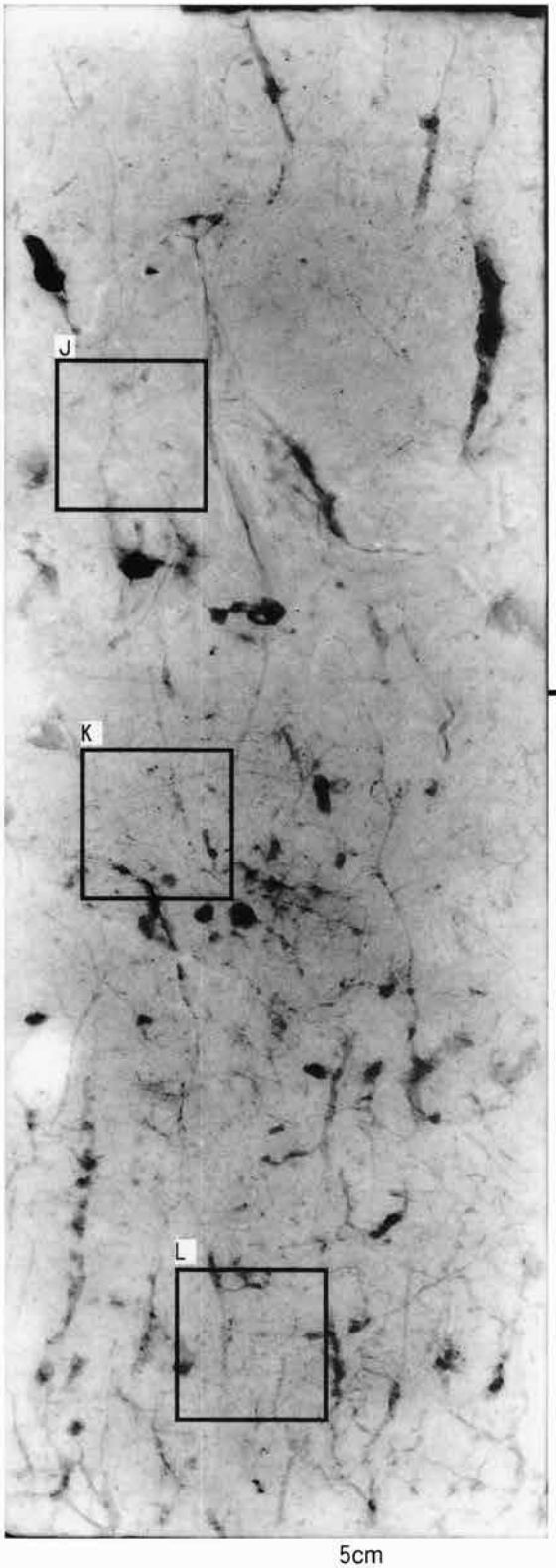
拡大図－H



拡大図－I



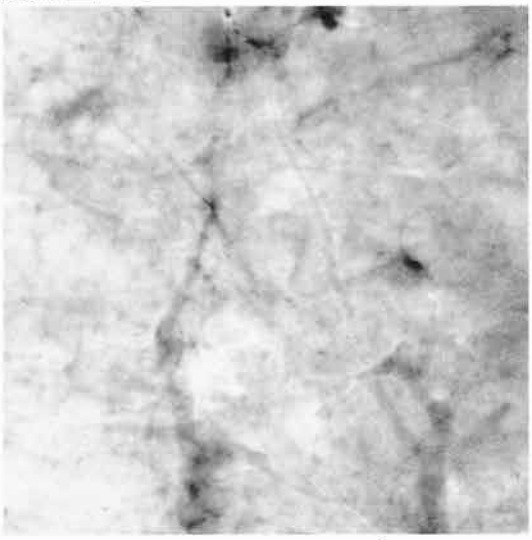
第３地点　試料番号３



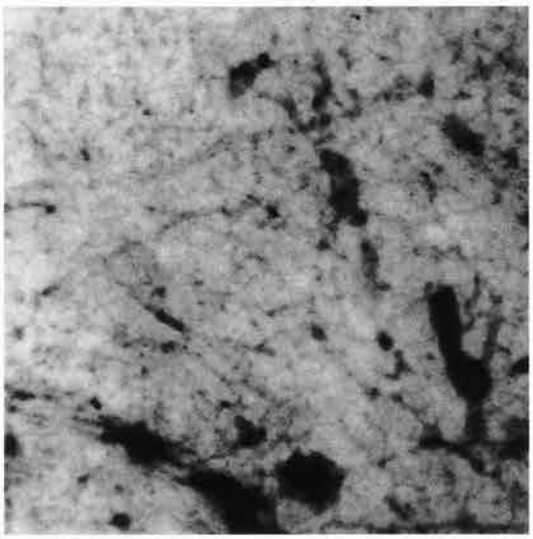
7

8

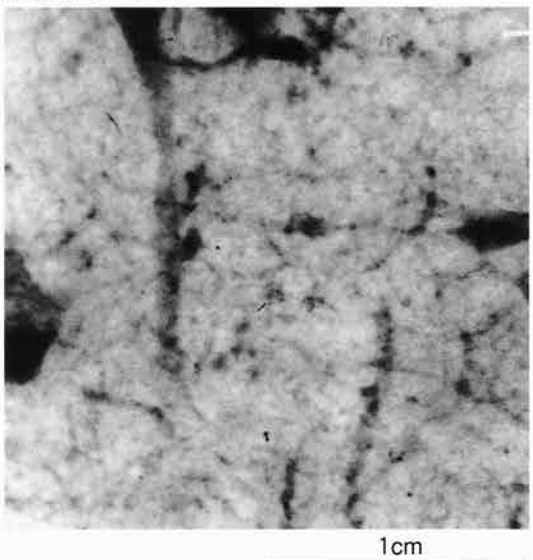
拡大図－J



拡大図－K



拡大図－L



第３地点　試料番号４

軟質Ｘ線写真(4)

図版第99　赤ケ平遺跡（第２次）

⑴調査地全景（東から）

⑵１・２トレンチ全景（上が南西）

図版100　赤ケ平遺跡（第２次）

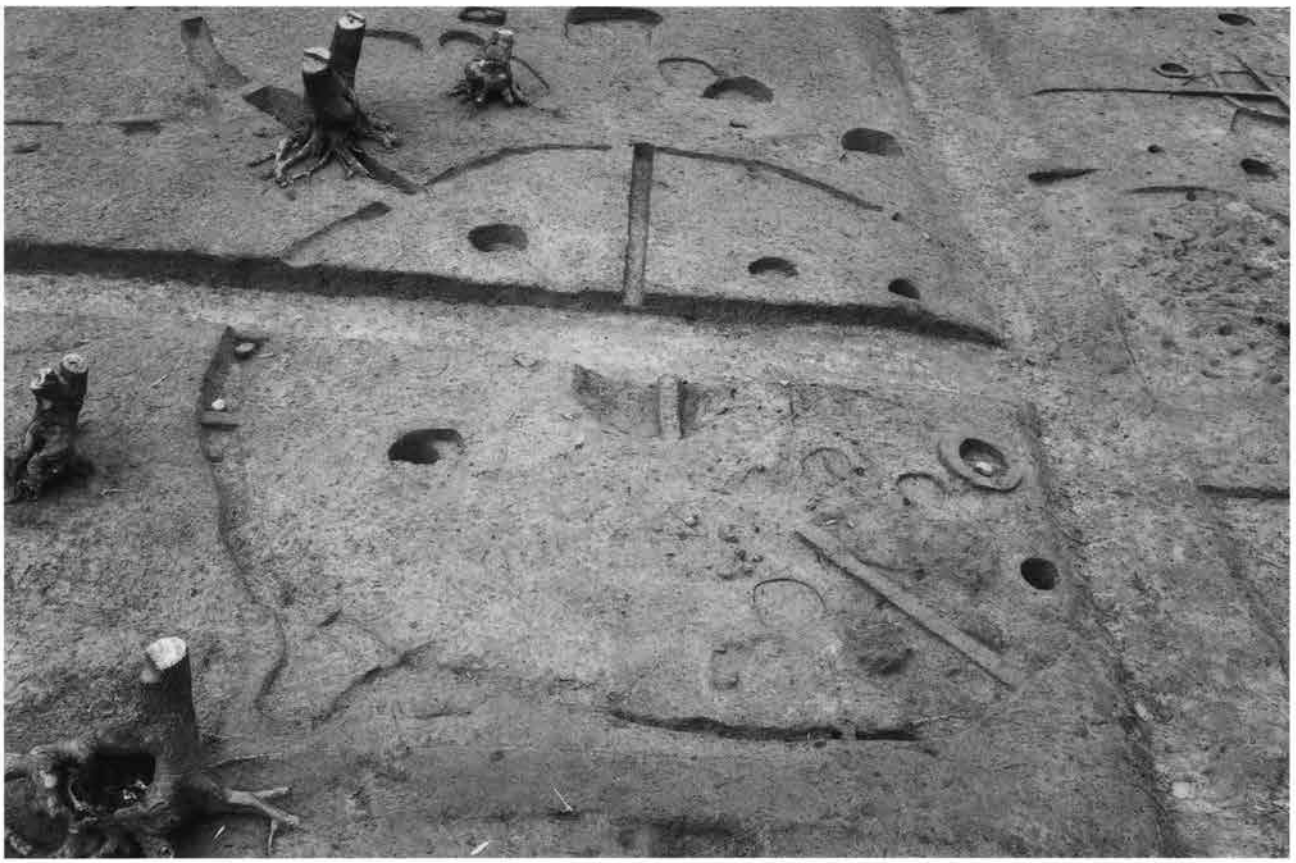
⑴１・２トレンチ調査前全景
（北西から）

⑵１・２トレンチ重機掘削作業
風景（南から）

⑶６・７トレンチ調査前全景
（北東から）

図版第101　赤ケ平遺跡（第２次）

⑴竪穴式住居跡ＳＢ02全景（北東から）



⑵竪穴式住居跡ＳＢ15全景（西から）

図版第102　赤ケ平遺跡（第２次）

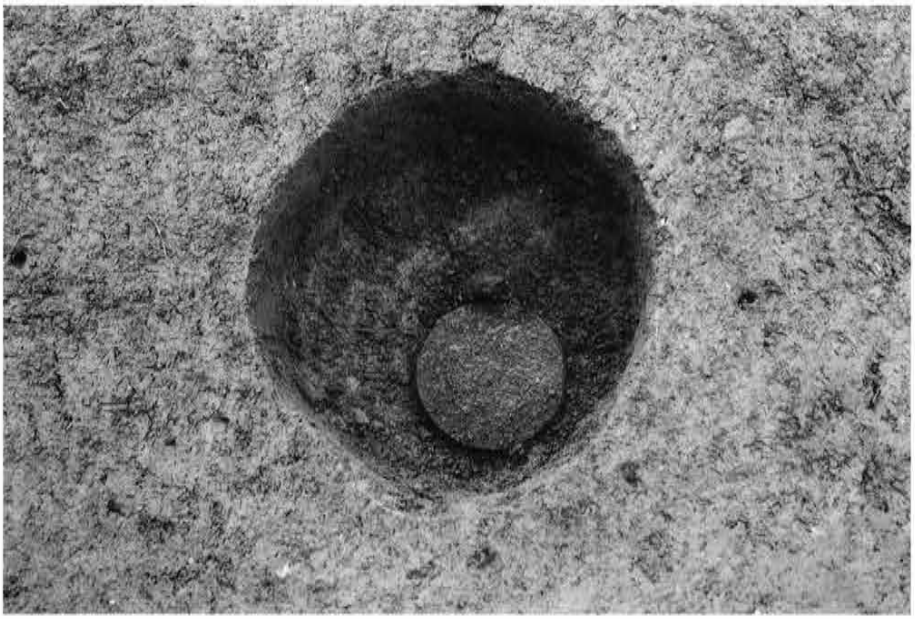
⑴竪穴式住居跡ＳＢ15剝片石器検出作業（東から）

⑵剝片石器廃棄土坑ＳＸ16遺物出土状況（東から）

⑶剝片石器廃棄土坑ＳＸ16完掘状況（東から）

図版第103　赤ケ平遺跡（第２次）

(1)溝ＳＤ19全景（北東から）



(2)鏡埋納坑ＳＸ41菊花文鏡出土状況（南西から）

(3)鏡埋納坑ＳＸ41鉄刀出土状況（北西から）

図版第104　赤ケ平遺跡（第２次）

⑴第３トレンチ全景（北から）

⑵第４トレンチ全景（北から）

⑶第５トレンチ全景（北東から）

⑷第６トレンチ全景（北から）

⑸第７トレンチ全景（南から）

⑹第８トレンチ全景（北西から）

⑺第８トレンチ拡張区全景（東から）

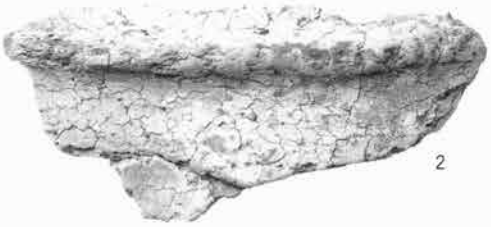
⑻第９トレンチ全景（北東から）

図版第105　赤ケ平遺跡（第２次）

1

39

41

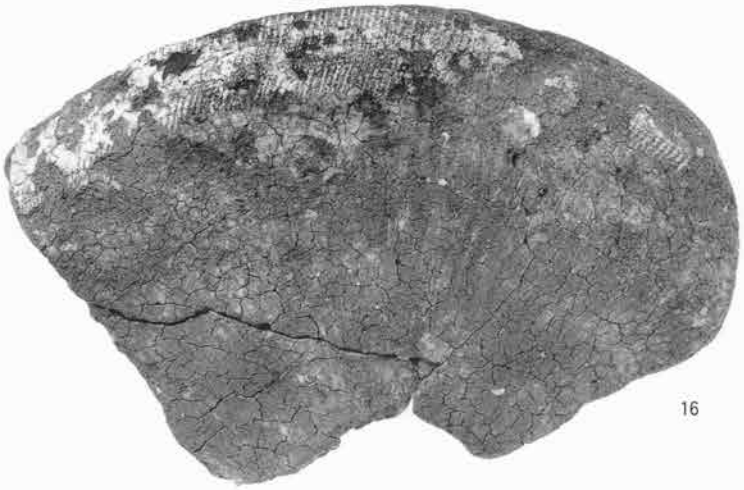


2

4

6

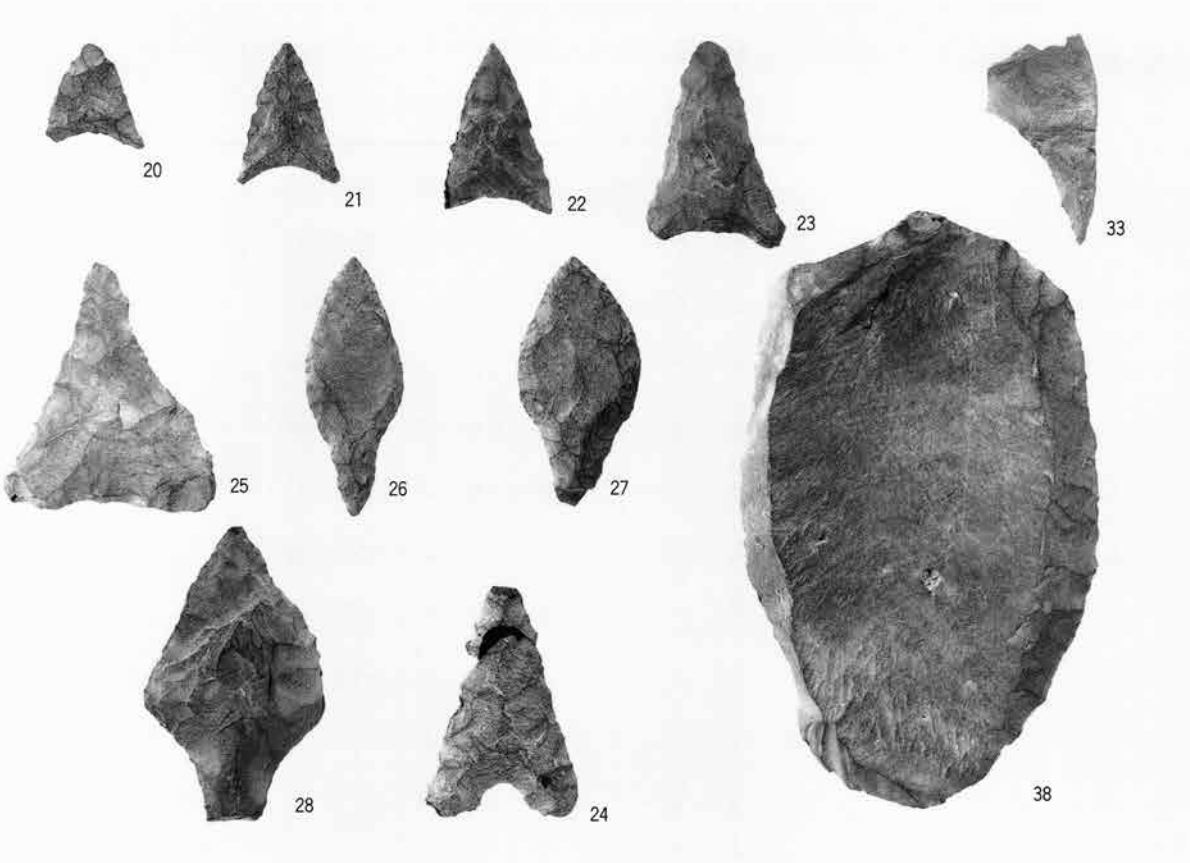
7



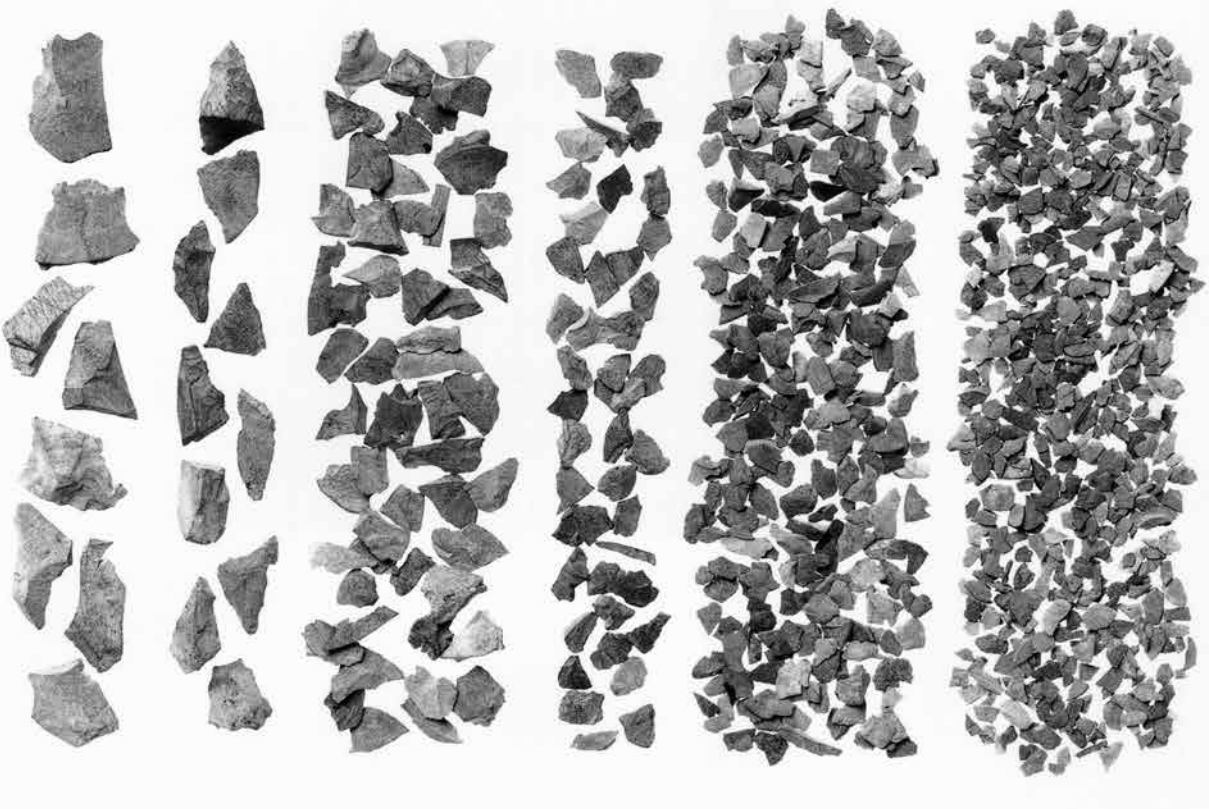
16

出土遺物(1)

図版第106　赤ケ平遺跡（第２次）



(1)出土石器（縮尺1/1）



(2)ＳＸ16出土剥片類（縮尺2/3）

報告書抄録

ふりがな	
書　名	
副書名	
巻　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第105冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　2002　年　12　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
めいしょうりょうあんじていえん 名勝龍安寺庭園	きょうとふきょうとしうきょうくごりょうしたまち 京都府京都市右京区龍安寺御陵下町	26108		35° 1' 53"	135° 43' 18"	20020204 ～ 20020226	120	建物建設
しもうえのみなみいせき 下植野南遺跡	きょうとふおとくにぐんおおやまざきちょうおおあざしもうえのこあざつつべ・ごじょうもと・おおあざえんみょうじこあざかどた 京都府乙訓郡大山崎町大字下植野小字土辺・五条本、大字円明寺小字門田	26303	029	34° 54' 3"	135° 45' 8"	20010409 ～ 20011220	4,340	道路建設
いちださいとうほういせき 市田斉当坊遺跡	きょうとふくせぐんくみやまちょうおおあざいちだこあざしんたまき 京都府久世郡久御山町大字市田小字新珠城	26322		34° 53' 6"	135° 45' 7"	20010417 ～ 20010629	1,100	道路建設
さやまいせき 佐山遺跡	きょうとふくせぐんくみやまちょうさこあざそとやしき・さやまこあざしんかいち 京都府久世郡久御山町佐古小字外屋敷・佐山小字新開地	26322	001	34° 52' 35"	135° 45' 7"	20010417 ～ 20010830	4,600	道路建設
しばやまいせき 芝山遺跡	きょうとふじょうようしとの 京都府城陽市富野	26207	56	34° 50' 37"	135° 47' 41"	20011217 ～ 20020227	1,600	道路建設
おんなだにおうけつぐん 女谷横穴群	きょうとふやわたしみのやまこあざあらさか・ごけどおり 京都府八幡市美濃山小字荒坂・御毛通	26210	042	34° 50' 35"	135° 43' 44"	20010411 ～ 20010628 20011105 ～ 20011115	1,070	道路建設

あらさかおうけつぐん 荒坂横穴群	きょうとふやわたしみのやまこあざあらさか・ごけどおり 京都府八幡市美濃山小字荒坂・御毛通	26210	031	34° 50' 34"	135° 43' 46"	20010411 ～ 20011003	3,900	道路建設
あらさかいせき 荒坂遺跡	きょうとふやわたしみのやまこあざあらさか 京都府八幡市美濃山小字荒坂	26210		34° 50' 29"	135° 43' 36"	20011105 ～ 20011115	270	道路建設
むくのきいせきだい5じ 椋ノ木遺跡第5次	きょうとふそうらくぐんせいかちょうしもこまこあざむくのき 京都府相楽郡精華町下狛小字椋ノ木	26362	046	34° 46' 16"	135° 48' 6"	20010613 ～ 20020201	3,400	浄化センター建設
きづしろやまいせきだい5じ 木津城山遺跡第5次	きょうとふそうらくぐんきづちょうきづこあざかたやま 京都府相楽郡木津町木津小字片山	26362		34° 43' 41"	135° 49' 59"	20010601 ～ 20010925	1,000	宅地造成
あかがひらいせきだい2じ 赤ヶ平遺跡第2次	きょうとふそうらくぐんきづちょうきづこあざあかがひら 京都府相楽郡木津町木津小字赤ヶ平	26362	054	34° 44' 14"	135° 50' 13"	20011015 ～ 20020227	1,300	道路建設 宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名勝龍安寺庭園	寺院	江戸	溝/整地層	陶磁器/土師器/塩壺/瓦	
下植野南遺跡	墓 集落 道	弥生中期 古墳 鎌倉/室町	方形周溝墓 竪穴式住居跡/掘立柱建物跡/古墳/溝/土坑 溝	弥生土器/石剣 埴輪 土師器/須恵器 瓦器/陶磁器	
市田斉当坊遺跡	集落 墓 条里	弥生中期 鎌倉/室町	方形周溝墓/竪穴式住居跡 溝	弥生土器/玉作り関連遺物/石器 瓦器/青磁	
佐山遺跡	集落 条里 居館	弥生後期 古墳前・中期 平安/鎌倉 平安/鎌倉	竪穴式住居跡 溝 溝 濠/掘立柱建物跡	弥生土器 土師器/須恵器 鉄器 瓦器/木器	
芝山遺跡	古墳 集落	古墳 奈良/平安	古墳周濠 溝	埴輪 須恵器/土師器/灰釉陶器	
女谷横穴群	横穴	古墳後期	横穴	須恵器/土師器/鉄器/耳環	
荒坂横穴群	横穴	古墳後期	横穴/通路	須恵器/土師器/埴輪/鉄器/耳環	
荒坂遺跡	—	—	なし	なし	
椋ノ木遺跡第5次	集落	縄文後期 古墳前・中期 鎌倉/室町	炉/貯蔵穴 掘立柱建物跡/竪穴式住居跡 掘立柱建物跡/溝/ピット	縄文土器 土師器 土師器/瓦器	
木津城山遺跡第5次	集落	弥生後期	段状遺構	弥生土器	
赤ヶ平遺跡第2次	集落	弥生前・中期 古墳 中世	竪穴式住居跡/土坑 土坑	弥生土器/石器/剥片 土師器/ガラス製勾玉 菊花文鏡	

京都府遺跡調査概報 第105冊

平成14年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)